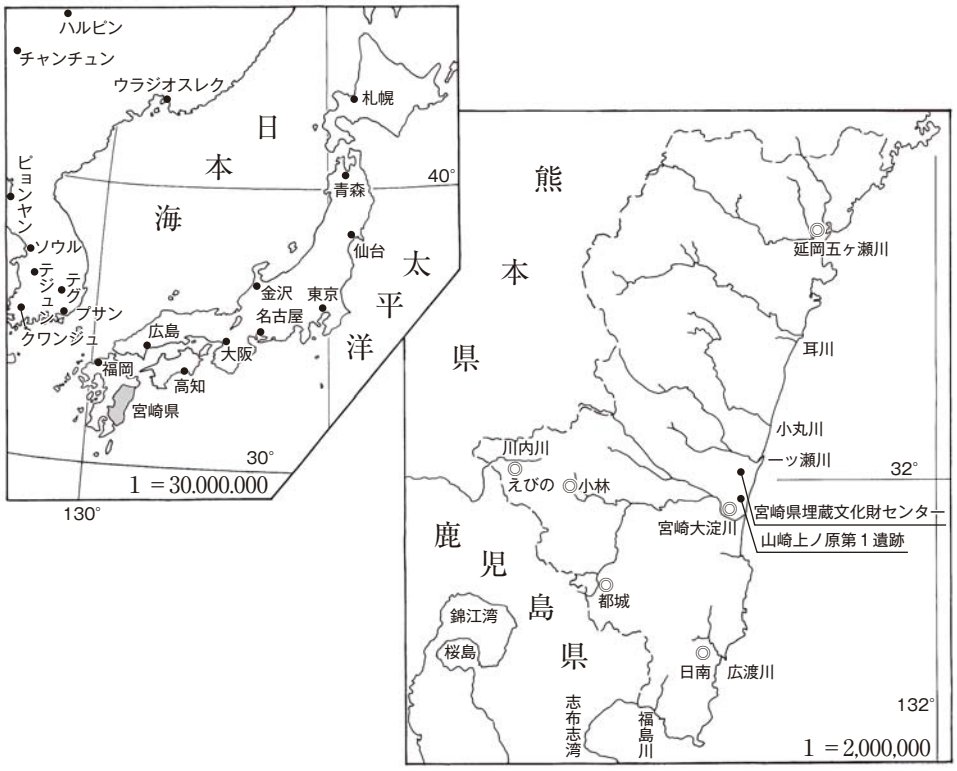
宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第224集

宮崎市所在

山崎上ノ原第１遺跡
（やまさきうえのはるだいいちいせき）

主要地方道宮崎島之内線（産母工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2013

宮崎県埋蔵文化財センター

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第224集

『山崎上ノ原第1遺跡』 正　誤　表

ページ・行数または図表番号	誤	正
P203・30行	裾部を上にして	基部を上にして
P203・35行	裾部を上にして	基部を上にして
P209・12行	質感がなど	質感など
P209・15行	緻密な背紋	緻密な施文
P222・第159図	4号土塘墓	4号土壙墓
P222・第159図	馬葬土塘	馬葬土壙
P232・第162図	昭和22年　20万分の一図	明治22年　20万分の一図

遺跡遠景（遺跡北方向より）

遺跡遠景（遺跡西方向より日向灘を望む）

13号竪穴建物出土の竈形土器（正面．699）

13号竪穴建物出土の竈形土器（背面．699）

6号竪穴建物出土の韓式系平底鉢（左．166）と3区出土の特殊扁壺（右．850）

同上・裏面

序

宮崎県教育委員会では、県道宮崎島之内線の改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しました。本書はその発掘調査報告書です。

山崎上ノ原第１遺跡周辺の阿波岐原は、伊邪那岐命が禊ぎを行ったという伝承が残り、平安時代の『続日本後記』には遺跡に隣接する江田神社のことが記されています。また、平成５年から断続的に行われた県道宮崎島之内線の改良工事に伴う発掘調査では、古墳時代の貴重な遺跡が多数発掘調査されています。

今回の調査では、古墳時代の集落跡に伴って多量に出土した遺物のなかに、韓式系土器や竈形土器などの朝鮮半島との関係を伺わせるものや特殊扁壺のような東海地方との関係を物語るものがあり、古墳時代の日向地域の交流を語るうえで非常に重要な資料を提供できました。

本書が学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成25年３月

宮崎県埋蔵文化財センター
所　長　　北　郷　泰　道

例　　言

1　本書は主要地方道宮崎島之内線（産母工区）地域活力基盤創造交付金事業に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎県宮崎市阿波岐原町産母に所在する上ノ原第１遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡名については、今回の調査範囲は山崎町内ではないが、山崎町内にまたがる「上ノ原第１遺跡」の範囲であること、過去に発行された同一砂丘上の山崎町内に存在する隣接遺跡が「山崎上ノ原第２遺跡」と称していること、近辺が「山崎地区」として認識されていることなどから宮崎市教育委員会と相談の上、名称が類似する遺跡との混乱を避ける意味もあり「山崎上ノ原第１遺跡」と呼称することとした。

3　発掘調査は宮崎土木事務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。

4　発掘調査は第１次を平成21年10月26日から平成22年３月１日まで（現地調査57日間）、２次調査を平成22年７月27日から平成22年９月９日まで（現地調査15日間）行った。

5　現地での実測等の記録は出山真次、加藤徹、川越宏之、黒木秀一、黒木俊彦、﨑田一郎、中田憲治、二宮満夫、福田泰典、若松宏一、和田理啓（以上50音順）が発掘作業員の協力を得て作成した。

6　整理作業は図面作成・遺物実測及びトレースは和田が整理作業員の協力を得て宮崎県埋蔵文化財センターで行った。

7　本書の作成に際し、以下の業務を委託している。
　空中写真撮影：有限会社スカイサーベイ
　金　属　分　析：ＪＦＥテクノリサーチ株式会社

8　本書で使用した第２図「山崎上ノ原第１遺跡と周辺の遺跡」は国土地理院平成５年12月１日発行の２万５千分の１図『宮崎北部』及び宮崎市教育委員会平成２年３月発行の『宮崎市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ』を、第４図「調査箇所と周辺地形図」は宮崎市教育委員会提供の地形図をもとに作成した。

9　本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を参考にした。

10　遺物の重量については、単位 gf、またはkgｆで小数点以下１位まで３度計測し、その平均値をとり小数点以下を四捨五入した値を記した。

11　本書で使用した方位は全て座標北で、標高は海抜絶対高である。また、本書で使用した座標は世界測地系（WGS84）九州第Ⅱ系に準拠している。

12　本書の執筆および編集は和田が行った。ただし、第Ⅴ章金属分析に関しては、ＪＦＥテクノリサーチ株式会社の報告による。

13　「註」および「引用・参考文献」については、第Ⅵ章では各節末尾に、その他の章では各章末尾に記した。

14　韓式系土器、特殊扁壺の資料調査については、神宮徴古館（伊勢神宮）、三重県埋蔵文化財センター、大阪府教育委員会文化財保護課、公益法人大阪府文化財センター、公益法人大阪文化財研究所の各機関に便宜を図っていただいた。また、資料収集の過程で富岡市教育委員会文化財保護課、掛川市教育委員会社会教育課、四日市教育委員会社会教育課、姫路市埋蔵文化財センター、財団法人滋賀県文化財保護協会には問い合わせ等で御面倒をおかけした。あわせて謝意を述べたい。

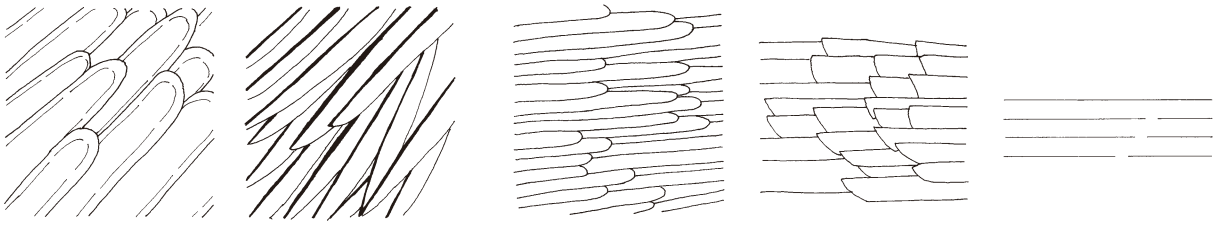
15　整理作業においては、熊本大学文学部准教授杉井健氏の調査指導を賜った。

16　出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

実測図凡例

1　土器断面は須恵器・陶磁器類はベタ表現し、土師器類は白抜きとした。石製品等の断面は20%の網掛けを行っている。

2　遺物実測図における調整等の主なものは以下のように図示した。



ユビナデ　　タタキ　　ヘラミガキ　　ヘラケズリ　　回転ヘラケズリ

主な調整の表現

本　文　目　次

第Ⅰ章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査の組織…… 2

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境…… 3
　第１節　立地と歴史的環境…… 3
　第２節　古墳時代の周辺環境…… 6

第Ⅲ章　調査の記録…… 9
　第１節　調査の経緯…… 9
　第２節　調査の概要…… 11
　第３節　基本層序…… 12
　第４節　１区の遺構と遺物…… 16
　第５節　２区の遺構と遺物…… 69
　第６節　３区の遺構と遺物…… 94
　第７節　小結…… 110

第Ⅳ章　補遺　～山崎上ノ原第２遺跡の鍛冶関連遺物～
　…… 111

第Ⅴ節　金属分析…… 178

第Ⅵ章　総括…… 203
　はじめに…… 203
　第１節　竈形土器について…… 203
　第２節　特殊扁壺について…… 207
　第３節　須恵器坏蓋口縁にみられる「刻目状圧痕」について…… 212
　第４節　凹字形鉄器について…… 215
　第５節　鍛冶関連遺物について…… 219
　第６節　古墳時代の山崎砂丘遺跡の評価
　…… 220
　第７節　いわゆる「四つ目土錘」について
　…… 225
　第８節　「阿波岐原」について…… 231
　第９節　結語…… 234

挿　図　目　次

第１図　山崎下ノ原第１遺跡出土の弥生土器 …… 3
第２図　山崎上ノ原第１遺跡と周辺の遺跡 …… 4
第３図　山崎上ノ原第２遺跡出土の須恵器 …… 6
第４図　調査箇所と周辺地形…… 10
第５図　山崎上ノ原第１遺跡　遺構分布及び調査区配置図…… 13
第６図　１区遺構分布図…… 14
第７図　１区Ａ地点の遺構分布図・遺構平面図・土層断面図…… 15
第８図　１号竪穴建物出土須恵器…… 16
第９図　１号竪穴建物出土土師器…… 17
第10図　１号竪穴出土軽石製品…… 17
第11図　２号及び３号竪穴建物出土須恵器 …… 18
第12図　２号及び３号竪穴建物出土土師器 …… 18
第13図　２号及び３号竪穴建物出土鍛冶関連遺物…… 19
第14図　４号竪穴建物出土須恵器…… 21
第15図　４号竪穴建物出土土師器①…… 22
第16図　４号竪穴建物出土土師器②…… 22
第17図　４号竪穴建物出土土師器③…… 23
第18図　４号竪穴建物出土土師器④…… 23
第19図　４号竪穴建物出土土師器⑤…… 24
第20図　４号竪穴建物出土遺物…… 24
第21図　５号竪穴建物出土遺物①…… 25
第22図　５号竪穴建物出土遺物②…… 25
第23図　５号竪穴建物出土遺物③…… 25
第24図　５号竪穴建物出土遺物④…… 26
第25図　５号竪穴建物出土遺物⑤…… 26
第26図　６号竪穴建物出土遺物①…… 27
第27図　６号竪穴建物出土遺物②…… 27
第28図　６号竪穴建物出土遺物③…… 27
第29図　６号竪穴建物出土遺物④…… 28
第30図　６号竪穴建物出土遺物⑤…… 28
第31図　６号竪穴建物出土遺物⑥…… 29
第32図　６号竪穴建物出土遺物⑦…… 29
第33図　１号溝状遺構出土遺物①…… 30
第34図　１号溝状遺構出土遺物②…… 30
第35図　１号溝状遺構出土遺物③…… 30
第36図　２号溝状遺構出土遺物①…… 30
第37図　２号溝状遺構出土遺物②…… 31
第38図　２号溝状遺構出土遺物③…… 31
第39図　２号溝状遺構出土遺物④…… 31
第40図　２号溝状遺構出土遺物⑤…… 31
第41図　１区Ｂ地点遺構分布図及び土層断面図…… 33
第42図　７号竪穴建物出土遺物①…… 34
第43図　７号竪穴建物出土遺物②…… 35
第44図　７号竪穴建物出土遺物③…… 36
第45図　８号竪穴建物出土遺物①…… 36
第46図　８号竪穴建物出土遺物②…… 37
第47図　３号溝状遺構出土遺物①…… 38
第48図　３号溝状遺構出土遺物②…… 38
第49図　３号溝状遺構出土遺物③…… 39
第50図　３号溝状遺構出土遺物④…… 40
第51図　３号溝状遺構出土遺物⑤…… 40
第52図　１区Ｃ地点遺構分布図 …… 42
第53図　１区Ｃ地点遺構平面図 …… 43
第54図　９号竪穴建物出土遺物…… 44
第55図　10号竪穴建物出土遺物①…… 44
第56図　10号竪穴建物出土遺物②…… 45
第57図　10号竪穴建物出土遺物③…… 45
第58図　４号溝状遺構出土遺物①…… 46
第59図　４号溝状遺構出土遺物②…… 46
第60図　４号溝状遺構出土遺物③…… 47
第61図　４号溝状遺構出土遺物④…… 48

第62図　４号溝状遺構出土遺物⑤…… 48
第63図　４号溝状遺構出土遺物⑥…… 48
第64図　４号溝状遺構出土遺物⑦…… 49
第65図　４号溝状遺構出土遺物⑧…… 49
第66図　１区Ｄ地点遺構分布図 …… 50
第67図　11号竪穴建物…… 51
第68図　11号竪穴建物出土遺物①…… 52
第69図　11号竪穴建物出土遺物②…… 52
第70図　11号竪穴建物出土遺物③…… 53
第71図　11号竪穴建物出土遺物④…… 53
第72図　１号土坑…… 54
第73図　１号土坑出土遺物①…… 55
第74図　１号土坑出土遺物②…… 55
第75図　１号土坑出土遺物③…… 56
第76図　１号ピット遺構平面図及び
出土遺物…… 56
第77図　１区遺構外出土遺物①…… 57
第78図　１区遺構外出土遺物②…… 58
第79図　１区遺構外出土遺物③…… 59
第80図　１区遺構外出土遺物④…… 60
第81図　１区遺構外出土遺物⑤…… 61
第82図　１区遺構外出土遺物⑥…… 62
第83図　１区遺構外出土遺物⑦…… 63
第84図　１区遺構外出土遺物⑧…… 64
第85図　１区遺構外出土遺物⑨…… 65
第86図　１区遺構外出土遺物⑩…… 66
第87図　１区遺構外出土遺物⑪…… 67
第88図　１区遺構外出土遺物⑫…… 68
第89図　２区遺構分布図…… 70
第90図　12号竪穴建物遺物出土状況及び
土層断面図…… 71
第91図　12号竪穴建物出土遺物①…… 72
第92図　12号竪穴建物出土遺物②…… 73
第93図　12号竪穴建物出土遺物③…… 74
第94図　12号竪穴建物出土遺物④…… 75
第95図　12号竪穴建物出土遺物⑤…… 76
第96図　12号竪穴建物出土遺物⑥…… 77
第97図　13号竪穴建物遺構平面図及び
土層断面図 …… 79
第98図　13号竪穴建物出土遺物① …… 80
第99図　13号竪穴建物出土遺物② …… 81
第100図　13号竪穴建物出土遺物③ …… 82
第101図　13号竪穴建物出土遺物④ …… 83
第102図　14号竪穴建物及び出土遺物 …… 83
第103図　２号土坑 …… 84
第104図　５号溝状遺構平面図及び
土層断面図 …… 85
第105図　５号溝状遺構出土遺物① …… 86
第106図　５号溝状遺構出土遺物② …… 87
第107図　２区遺構外出土遺物① …… 88
第108図　２区遺構外出土遺物② …… 89
第109図　２区遺構外出土遺物③ …… 90
第110図　２区遺構外出土遺物④ …… 91
第111図　２区遺構外出土遺物⑤ …… 92
第112図　２区遺構外出土遺物⑥ …… 93
第113図　３区トレンチ配置図 …… 95
第114図　３区土層断面図 …… 96
第115図　３区出土遺物① …… 97
第116図　３区出土遺物② …… 98
第117図　３区出土遺物③ …… 99
第118図　３区出土遺物④ …… 100
第119図　３区出土遺物⑤ …… 101
第120図　３区出土遺物⑥ …… 102
第121図　３区出土遺物⑦ …… 103
第122図　３区出土遺物⑧ …… 104
第123図　３区出土遺物⑨ …… 105
第124図　３区出土遺物⑩ …… 106
第125図　３区出土遺物⑪ …… 107
第126図　１区出土遺物（補遺①）…… 108
第127図　１区出土遺物（補遺②）…… 109
第128図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区ＳＡ１
出土鍛冶関連遺物① …… 112
第129図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区ＳＡ１
出土鍛冶関連遺物② …… 113

第130図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区SA ２
出土鍛冶関連遺物① …… 114
第131図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区SA ２
出土鍛冶関連遺物② …… 115
第132図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区SA ２
出土鍛冶関連遺物③ …… 116
第133図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区SA ３
出土鍛冶関連遺物 …… 117
第134図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄塊系遺物① …… 118
第135図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄塊系遺物② …… 119
第136図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄塊系遺物③ …… 120
第137図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄塊系遺物④ …… 121
第138図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄滓① …… 122
第139図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄滓② …… 123
第140図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄滓③ …… 124
第141図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土
鉄滓④ …… 125
第142図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物① …… 126
第143図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物② …… 127
第144図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物③ …… 128
第145図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物④ …… 129
第146図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物⑤ …… 130
第147図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物⑥ …… 131
第148図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物⑦ …… 132
第149図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物⑧ …… 133
第150図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－２区出土
鍛冶関連遺物⑨ …… 134
第151図　竈形土器の分類 …… 206
第152図　特殊扁壺の分布図及び地名表 … 208
第153図　集落遺跡出土のⅠ類特殊扁壺分布図
…… 209
第154図　凹字形鉄器の各部名称案 …… 215
第155図　凹字形鉄器出土分布図 …… 216
第156図　凹字形鉄器の分類 …… 217
第157図　鳥取市本高弓ノ木遺跡出土の鉄製
穂摘み具 …… 218
第158図　山崎砂丘遺跡周辺の地形 …… 221
第159図　山崎下ノ原第１遺跡出土遺物 … 222
第160図　四つ目土錘の分類 …… 228
第161図　四つ目土錘編年図 …… 229
第162図　地図にみる「阿波岐原」周辺地名
の変遷 …… 232

表　目　次

第１表　山崎上ノ原第１遺跡周辺遺跡一覧 …… 5
第２表　山崎上ノ原第１遺跡周辺の古墳一覧 …… 5
第３表　基本層序…… 12
第４表　山崎地区におけるこれまでの調査 …… 12
第５表　出土土器観察表…… 135
第６表　山崎上ノ原第１遺跡出土鍛冶関連遺物観察表…… 169
第７表　山崎上ノ原第２遺跡出土鍛冶関連遺物観察表…… 170
第８表　山崎上ノ原第１遺跡出土鉄製品等観察表…… 176
第９表　山崎上ノ原第１遺跡出土石製品観察表…… 177
第10表　刻目状圧痕をもつ須恵器坏蓋出土宮崎県内遺跡地名表…… 214
第11表　各地区の内容…… 222
第12表　属性③の分布…… 226
第13表　属性①②の相関関係…… 226
第14表　属性①③の相関関係…… 226
第15表　属性②③の相関関係…… 226

図　版　目　次

巻頭図版１　遺跡遠景（遺跡北方向より）
巻頭図版２　遺跡遠景（遺跡西方向より日向灘を望む）
巻頭図版３　13号竪穴建物出土の竈形土器（正面．699）・13号竪穴建物出土の竈形土器（背面．699）
巻頭図版４　６号竪穴建物出土の韓式系平底鉢（左．166）と３区出土の特殊扁壺（右．850）

図版１…… 235
遺跡遠景（南より）
遺跡遠景（北西より）

図版２…… 236
１区Ａ地点完掘状況（北から）
１区Ａ地点完掘状況（南から）
１号竪穴出土須恵器①
１号竪穴出土須恵器②
１号竪穴出土須恵器③
１号竪穴出土土師器①

図版３…… 237
１号竪穴出土土師器②
１号竪穴出土軽石製品
２・３号竪穴出土須恵器①
２・３号竪穴出土須恵器②
２・３号竪穴出土須恵器③
２・３号竪穴出土須恵器④

図版４…… 238
２・３号竪穴出土石器①
２・３号竪穴出土石器②
４号竪穴出土須恵器①
４号竪穴出土須恵器②

４号竪穴出土須恵器③
４号竪穴出土須恵器④
４号竪穴出土須恵器⑤
４号竪穴出土須恵器⑥

図版５…… 239
４号竪穴出土須恵器⑦
４号竪穴出土須恵器⑧
４号竪穴出土土師器①
４号竪穴出土土師器②
４号竪穴出土土師器③
４号竪穴出土土師器④
４号竪穴出土石器

図版６…… 240
５号竪穴出土土師器①
５号竪穴出土土師器②
５号竪穴出土土師器③
５号竪穴出土石製品
６号竪穴出土韓式系土器①
６号竪穴出土韓式系土器②

図版７…… 241
６号竪穴出土土師器①
６号竪穴出土土師器②
６号竪穴出土土師器③
６号竪穴出土石器
６号竪穴出土鉄滓
１号溝状遺構出土土師器①
１号溝状遺構出土土師器②

図版８…… 242
２号溝状遺構出土須恵器①
２号溝状遺構出土須恵器②
２号溝状遺構出土土師器①
２号溝状遺構出土土師器②
２号溝状遺構出土土師器③
２号溝状遺構出土土師器④
２号溝状遺構出土石器

図版９…… 243
１区Ｂ地点遺構検出状況
３号溝状遺構及び７号竪穴検出状況（北から）
８号竪穴遺物出土状況
３号溝状遺構遺物出土状況
７・８号竪穴及び３号溝状遺構完掘状況
７号竪穴完掘状況
８号竪穴完掘状況

図版10…… 244
７号竪穴出土須恵器
７号竪穴出土土師器①
７号竪穴出土土師器②
７号竪穴出土石器及び鉄滓
８号竪穴出土須恵器
８号竪穴出土土師器①
８号竪穴出土土師器②
８号竪穴出土石器

図版11…… 245
３号溝状遺構出土須恵器
３号溝状遺構出土土師器①
３号溝状遺構出土土師器②
３号溝状遺構出土石器
９号竪穴遺物出土状況
９号及び10号竪穴完掘状況

図版12…… 246
９号竪穴出土遺物
10号竪穴出土土師器①
10号竪穴出土土師器②
10号竪穴出土石器
４号溝状遺構検出状況
４号溝状遺物検出状況

４号溝状遺構完掘状況

図版13…… 247
４号溝状遺構出土須恵器
４号溝状遺構出土土師器①
４号溝状遺構出土土師器②
４号溝状遺構出土鉄器
４号溝状遺構出土青磁
４号溝状遺構出土陶器（混入）

図版14…… 248
11号竪穴検出状況
11号竪穴遺物出土状況
11号竪穴遺物出土状況（386・387）
11号竪穴土層断面
11号竪穴出土須恵器①
11号竪穴出土須恵器②
11号竪穴出土土師器①
11号竪穴出土土師器②

図版15…… 249
１号土坑検出状況
１号土坑遺物出土状況
１号土坑出土遺物①
１号土坑出土遺物②
１号土坑出土遺物③
１号土坑出土遺物④

図版16…… 250
１区遺構外出土須恵器①
１区遺構外出土須恵器②
１区遺構外出土須恵器③
１区遺構外出土須恵器④
１区遺構外出土土師器①
１区遺構外出土土師器②
１区遺構外出土土師器③
１区遺構外出土土師器④

図版17…… 251
12号竪穴検出状況
12号竪穴遺物出土状況
12号竪穴出土土師器①
12号竪穴出土土師器②
12号竪穴出土土師器③
12号竪穴出土土師器④
12号竪穴出土土師器⑤
12号竪穴出土土師器⑥

図版18…… 252
12号竪穴出土土師器⑦
12号竪穴出土土師器⑧
12号竪穴出土遺物
13号竪穴検出状況
13号竪穴遺物出土状況
13号竪穴甕・竈形土器出土状況
13号竪穴土層断面
13号竪穴出土須恵器

図版19…… 253
13号竪穴出土土師器①
13号竪穴出土土師器②
13号竪穴出土土師器③
13号竪穴出土土師器④
13号竪穴出土竈形土器（正面）
13号竪穴出土竈形土器（背面）
13号竪穴出土竈形土器（側面）
13号竪穴出土竈形土器（上面）

図版20…… 254
13号竪穴出土凹字形鉄器
14号竪穴遺物出土状況
14号竪穴出土遺物
５号溝状遺構出土須恵器
５号溝状遺構出土土師器①
５号溝状遺構出土土師器②

５号溝状遺構出土土師器③
５号溝状遺構出土鉄製品

図版21…… 255
３区遺物出土状況①
３区遺物出土状況②
３区遺物出土状況③
３区遺物出土状況④
３区出土特殊扁壺（外面）
３区出土特殊扁壺（内面）

図版22…… 256
３区出土須恵器①
３区出土須恵器②
３区出土須恵器③
３区出土須恵器④
３区出土須恵器⑤
３区出土須恵器⑥
３区出土須恵器⑦

図版23…… 257
３区出土土師器①
３区出土土師器②
３区出土土師器③
３区出土土師器④
３区出土土師器⑤
３区出土土師器⑥
３区出土土師器⑦

図版24…… 258
３区出土炊飯具①
３区出土炊飯具②
３区出土炊飯具③
３区出土炊飯具④
３区出土炊飯具⑤
３区出土炊飯具⑥

図版25…… 259
山崎上ノ原第２遺跡出土鍛冶関連遺物①

図版26…… 260
山崎上ノ原第２遺跡出土鍛冶関連遺物②

図版27…… 261
山崎上ノ原第２遺跡出土鍛冶関連遺物③

図版28…… 262
山崎上ノ原第２遺跡出土鍛冶関連遺物④

図版29…… 263
山崎上ノ原第２遺跡出土鍛冶関連遺物⑤

第Ⅰ章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

県道宮崎島之内線（県道11号線）は山崎街道と通称され、古くから宮崎の海岸線を南北に縦断する幹線道路として機能している。平成になり周辺に大型リゾート施設やショッピングモールなどが建設されたほか、江田神社やみそぎ池など日向神話にからめた観光地が認知されるようになり、交通量は増大の一途をたどっている。

このような状況の中で、交通の円滑化と周辺住民の安全を確保しつつ、県央地域における宮崎都市圏を中心とした活力ある地域・経済社会の形成を目指し宮崎島之内線の改良工事が計画された。宮崎島之内線の周辺は、以前から遺跡の密集地帯として知られており、工事に伴い埋蔵文化財に影響がでることが予想されたため、県文化課（現文化財課）は平成４年度に宮崎土木事務所と遺跡の取り扱いについて協議を行っている。協議の結果、用地買収に伴い、翌平成５年度に４月12日から27日、６月23日から７月15日および11月９日から26日の３次に分けて順次発掘調査が行われた。

以降、用地買収等の関係から、数年間事業の進捗がみられなかったが、平成９年度になり県文化課に遺跡の有無の照会があった。これをうけ、県文化課は平成10年２月に現地踏査、同12月に確認調査を実施した。その結果埋蔵文化財の存在を確認できたため、宮崎県埋蔵文化財センターが用地買収に伴い、平成13年度から15年度に発掘調査、14年度から17年度にかけて整理・報告書作成を行った。このとき作成された宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書の第79集と第130集には、平成５年度以降、平成15年度に至る発掘調査の成果が報告されている（南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003、柳田2006）。

現地での発掘調査の終了を受け、山崎北交差点以南についての改良工事は平成15年度までに終了し、その後、交差点の北側から市民の森南側の駐車場前に至る約545mの「産母工区」について工事が計画された。工事に先立って宮崎土木事務所は平成20年度に宮崎県文化財課に遺跡の有無についての照会を行い、県文化財課ではこれを受け平成21年５月12日に確認調査を実施した結果、埋蔵文化財への影響があると判断された。

宮崎土木事務所は、平成21年８月４日付28001－1507で宮崎県埋蔵文化財センターに発掘調査の実施依頼を行い、県埋蔵文化財センターは同年９月30日付0820－4－21により発掘調査を実施する旨回答している。調査は対象地の用地買収等の進捗に伴い、平成21年10月26日から平成22年３月１日、平成22年７月23日から９月10日までの２次にわたって行われた。

平成５年から平成22年までに行われた宮崎島之内線関連の発掘調査は以下のとおりである。

調査年度	調査機関	遺跡名	掲載報告書
1993年度	宮崎県文化課	山崎上ノ原第２遺跡	柳田2006
2001 ～ 03年度	宮崎県埋蔵文化財センター	山崎上ノ原第２遺跡	南正覚ほか2003・柳田2006
2001 ～ 02年度	宮崎県埋蔵文化財センター	山崎下ノ原第１遺跡	南正覚ほか2003
2009 ～ 10年度	宮崎県埋蔵文化財センター	山崎上ノ原第１遺跡	当報告書

第２節　調査の組織

山崎上ノ原第１遺跡の発掘調査・整理作業及び報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

平成 21 年度　発掘調査

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長		福永　展幸	副所長		長友　英詞
総務担当リーダー		髙山　正信			
総務担当	主査	古市　篤志		専門主事	青木　英子
調査第二課長		石川　悦雄			
調査第三担当リーダー		福田　泰典			
調査第三担当	主査	和田　理啓		主査	中田　憲治
	主査	若松　宏一			
調査第四担当	主査	黒木　俊彦		主査	川越　宏之
	主任主事	二宮　満夫			
調査第一担当	主査	出山　真次		主査	黒木　秀一
	主査	﨑田　一郎			

平成 22 年度　発掘調査及び整理作業

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長		森　　隆茂	副所長		北郷　泰道
総務課長		矢野　雅紀	総務担当リーダー		長友由美子
総務担当	主査	古市　篤志		専門主事	青木　英子
調査第二課長		永友　良典	調査第三担当リーダー		吉本　正典
調査第三担当	主査	和田　理啓		主事	加藤　　徹

平成 23 年度　報告書作成

宮崎県埋蔵文化財センター

所　長		森　　隆茂	副所長		北郷　泰道
総務課長		坂上　恒俊	総務担当リーダー		長友由美子
総務担当	主査	甲斐　郁士		主査	眞方　文成
調査第二課長		永友　良典	調査第三担当リーダー		吉本　正典
調査第三担当	主査	和田　理啓			

事業調整

宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財担当　主査　　東　憲章

【参考文献】

竹中克繁2008『山崎上ノ原第２遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書第69集

南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡 山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集

柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘　調査報告書第130集

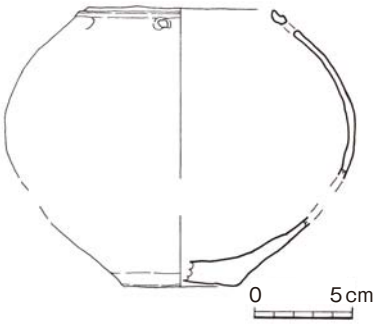
第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第１節　立地と歴史的環境

山崎上ノ原(1)第１遺跡は、大淀川の河口域に形成された、日向灘に面した標高約11m前後の砂丘上に位置する。大淀川河口域から一ツ瀬川河口域にかけて南北に形成されている砂丘列は、日向灘側から第３～第１砂丘列と呼称されており、遺跡はこのうち第２砂丘上に立地している。宮崎平野は完新世の始まりとともにおこった海進と海退の繰りかえしにより形成されたとされるが、これらの砂丘はその海退時に形成されたと考えられている。第２砂丘の形成時期は縄文時代晩期末から弥生時代早期にかけてといわれ（甲元眞之2012)、このことは、第２砂丘周辺で弥生時代以降の遺跡しか確認されていないことからも裏付けられる。

これらの砂丘上で、人間の生活痕跡が確認されるのは弥生時代に入ってからのことである。檍遺跡（第２図52）は、大淀川河口周辺の砂丘上で確認されたなかでは最も古い遺跡(2)で、板付Ⅱ式に併行する弥生土器が出土している。また、今回の調査地から約1.5km南では弥生時代中期の石神遺跡などが確認されている。宮崎島之内線の改良事業関連での調査では、山崎下ノ原第１遺跡（第２図３）で弥生時代後期の無頸壺(3)が出土している（南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003)。明確な集落遺跡は確認できていないものの、この砂丘が弥生時代の前期後半頃から人間の生活の場として機能し始めていたことが伺える。

古墳時代にはいると、早い段階から古墳が築造されている。檍１号墳（第２図ｊ）は宮崎大学の発掘調査によって木槨を埋葬施設とした前期古墳であることが確認されている（柳沢一男2006)。また、1961年には、村角町で土木作業中に小札鋲留眉庇付冑、革綴短甲片、肩甲、鉄剣、鉄鏃などが出土（石川恒太郎1961・1973）しており、中期においてもこの砂丘周辺に有力な集団がいたことが伺える。宮崎島之内線の改良工事関係では、山崎下ノ原第１遺跡（第２図３）で中期末の古墳、後期の馬葬土壙(4)、山崎上ノ原第２遺跡（第２図２）では中期から終末期にかけての集落跡などが確認されている。



第１図　山崎下ノ原第１遺跡出土の弥生土器（S=1/4）

古代から中世における同地区の状況ははっきりとしないが、『続日本後記』や『延喜式』に江田神社に関する記載がみえる。古墳時代からの継続性は不明であるが、少なくとも９世紀にはある程度の規模の集落があったことは伺える。宮崎県による2001年の調査では、10世紀前後の時期の土師器が出土しており、坏の底部に「勾」の墨書があるものが確認できている（南正覚ほか2003)。柴田博子は「勾」の字が舎人や靱負などと関連する集団の存在を示唆（柴田2005）するものとしている。近辺が古代の廣（石）田駅の比定地となっていることの間接的な裏付けとなりうるかも知れない(5)。中世においては、調査地の南約４～５kmあたりの新別府の周辺で、板碑や六地蔵幢などの石塔が散見されるほか、「城元」や「寺の下」等の地名が残っており、居館や集落の存在を想定したくなるが、文献・考古のどちらからもそれを裏付ける資料は提示できないのが現状である。

近世の遺跡周辺は延岡藩領、天領を経て幕末には飫肥藩領になっている（大賀郁夫・佐藤省吾1997)。現在の県道宮崎島之内線はこの時期の豊後街道の一部とほぼ重なる（「ふるさとの道　宮崎の街道」編

第２砂丘上の遺跡

１．山崎上ノ原第１遺跡　２．山崎上ノ原第２遺跡　３．山崎下ノ原第１遺跡　４．江良ノ上第４遺跡　５．江良ノ上第６遺跡　６．江良ノ上第５遺跡　７．産母遺跡　８．下ノ原第２遺跡　９．先切遺跡　10．石神遺跡　11．松下遺跡　12．前浜遺蹟　13．猿野遺跡　14．宮神遺跡　15．中園遺跡　16．穂小学校校庭遺跡　17．城元遺跡　18．麓第２遺跡

第２図　山崎上ノ原第１遺跡と周辺の遺跡（1：25,000）

（国土地理院 25,000 分の１図「宮崎」をもとに作成）

第１表　山崎上ノ原第１遺跡の周辺遺跡一覧

図中番号	遺跡名	時代	種別	備考
1	山崎上ノ原第１遺跡	古墳～近世	集落	第２砂丘上の遺跡
2	山崎上ノ原第２遺跡	古墳～近世	集落	
3	山崎下ノ原第１遺跡	古墳	墳墓	
4	江良ノ上第４遺跡	弥生～古墳	散布地	
5	江良ノ上第６遺跡	古墳	散布地	
6	江良ノ上第５遺跡	弥生～古墳	散布地	
7	産母遺跡	弥生～古墳	散布地	
8	山崎下ノ原第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
9	先切遺跡	弥生～古墳	散布地	
10	石神遺跡	古墳	集落	
11	松下遺跡	弥生～古墳	散布地	
12	前浜遺蹟	弥生～古墳	散布地	
13	猿野遺跡	弥生～古墳	散布地	
14	宮神遺跡	古墳	散布地	
15	中園遺跡	弥生～古墳	散布地	
16	橲北小学校校庭遺跡	古代	水田	
17	城元遺跡	古代・近世	散布地	
18	麓第2遺跡	古墳	散布地	
19	鳥居原第２遺跡	弥生～古墳	散布地	第１砂丘上の遺跡
20	大久保遺跡	弥生～古墳	散布地	
21	鳥居原第３遺跡	弥生～古墳	散布地	
22	大原第１遺跡	弥生～古墳	散布地	
23	高下遺跡	古墳	散布地	
24	中ノ原第１遺跡	弥生～古墳	散布地	
25	中ノ原第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
26	大原第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
27	籠松第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
28	下ノ原第１遺跡	縄文・古墳	散布地	
29	籠松第１遺跡	弥生～古墳	散布地	
30	大原第３遺跡	弥生～古墳	散布地	
31	下ノ原第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
32	籠松第３遺跡	弥生～古墳	散布地	
33	楸畑第１遺跡	弥生～古墳	散布地	
34	水窪第１遺跡	弥生～古墳	散布地	
35	高尊遺跡	弥生・古代	散布地	
36	楸畑第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
37	楸畑第３遺跡	弥生～古墳	散布地	
38	水窪第２遺跡	弥生・古代	散布地	
39	弥兵衛畑第１遺跡	弥生～古墳	散布地	
40	弥兵衛畑第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
41	高屋神社第10号墳[1]	古墳・古代	散布地	
42	東原遺跡	弥生・古代	散布地	
43	吉十遺跡	弥生～古墳	散布地	
44	萩崎第1遺跡	弥生～古墳	散布地	
45	長山遺跡	弥生～古墳	散布地	
46	萩崎第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
47	平原第１遺跡	弥生～古墳	散布地	
48	平原第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
49	浮城遺跡	古墳	水田	
50	江田原第１遺跡	古代	集落	
51	江田原第２遺跡	弥生～古墳	散布地	
52	橲遺跡	弥生	集落	
53	麓第２遺跡	古墳	散布地	
54	丹後城	中世	山城	
55	蓮ヶ池横穴群	古墳	横穴墓群	
56	住吉村古墳	古墳	横穴墓群	
57	住吉村古墳	古墳	横穴墓群	
58	地蔵牟田遺跡	弥生～古墳	散布地	
59	牟田中遺跡	弥生～古墳	散布地	
60	桜町遺跡	弥生・古代・近世	集落	
61	東大宮遺跡	弥生～古墳	散布地	
62	本村遺跡	弥生～古墳	散布地	

第２表　山崎上ノ原第１遺跡の周辺の古墳一覧

図中番号	古墳名	時期	種別	規模	備考
a	山崎下ノ原１号墳（消滅墳）	不明	円墳	径20m前後	「下ノ原古墳群」[2]とすべきか
b	橲第５号墳	不明	円墳	径23m	
c	橲第６号墳	不明	円墳	径20m前後	
d	山崎下ノ原２号墳（消滅墳）	TK47併行	円墳	径10m	
e	山崎下ノ原３号墳（消滅墳）	TK10併行？	円墳	径15m前後	
f	橲第４号墳	不明	円墳	不明	
g	橲第３号墳	不明	円墳	不明	「新別府古墳群」[3]とすべきか
h	橲古墳（消滅）	不明	不明	不明	
i	大島古墳（麓第２号墳）	不明	前方後円墳	墳長54m	
j	庵山古墳（橲第1号墳）	前期	前方後円墳	墳長57m	
k	－（消滅か）	不明	不明	不明	
l	－（消滅）	不明	不明	不明	
m	村角第７号・８号	不明	円墳	不明	
n	蓮ヶ池１号墳	TK43併行	前方後円墳	墳長37m	蓮ヶ池古墳群
o	蓮ヶ池２号墳	７世紀前半	円墳	径17m	
p	村角第11号墳	不明	円墳	不明	
q	大島第９号墳	不明	円墳	不明	

1）踏査したところ、古墳らしき痕跡は確認できなかったが、古墳時代や古代のものと考えられる土師器が相当数散乱していたので、散布地として一覧に挙げた。名称は宮崎市教育委員会1990に準拠したが、本来、「高屋神社遺跡」と変更すべきか。

2）「下ノ原古墳群」の名称は、柳沢1997で「下原古墳群」として提案されている。

3）従来、「橲古墳群」と呼称されていたものであるが、古墳が分布する周辺の中世期以降の一般的な呼称は、古地図などから「新別府（しんびゅう）」であり、「橲」はむしろ皇国史観を背景に近世末以降に成立した行政区域名で、旧来「橲」の名を古墳にあてていたことを承知の上で、あえて「新別府古墳群」の呼称を提案したい。

集委員会2006)。現在の県道沿いの集落の成立時期は定かではないが、近辺の墓地の無縫塔や道路脇の庚申塔などの石塔類の存在、今回の調査で表採された陶磁器類、地元住民等の話などを総合すると江戸時代の中期から後期には現在とほぼ重なる位置に集落が形成されていたと考えられる。文政年間成立した『國郡全圖』や『大日本沿海輿地全図』には「青木原」や「江田村」「山崎村」などの表記がみえ、ある程度の村落があった事を裏付けている。(ただし、現在の町名である「阿波岐原」はみられない。)

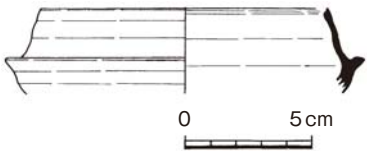
遺跡が含まれる地域は明治22年の市制町村制施行により、遺跡周辺は檍(あおき)村となる。大正13年に宮崎町、大淀町、大宮村が合併し宮崎市が誕生した後、昭和７年に宮崎市に編入され、同８年に阿波岐原(あわきがはら)町となった（野口逸三郎・柳宏吉 1986)。町名を「江田(えだ)」や「産母(やぼ)」ではなく「阿波岐原」としたことは、古事記に伊弉諾尊の禊ぎの地として「日向之橘小門之阿波岐原」（日本書紀には「日向小戸橘之檍原」）と記されていることに因む(6)のであろう。(同時期に小戸町も成立している。)

昭和６年の満州事変以後、日本全国で次第に皇国史観を背景とした軍国主義が勢いを得ていくに伴い、宮崎県でも昭和８年に「神都日向大博覧会」が催され45日間で28万人もの来場者を迎えている(7)。また、翌昭和９年に「神武天皇御東遷2600年祭」が昭和10年には陸軍特別大演習が行われ天皇が行幸している。このような情勢と記紀に記載された地名を町名に付けたことは全くの無関係ではないだろう。

現在では、江田神社周辺は、「スピリチュアルスポット」「パワースポット」(8)として知られ、多くの観光客が来訪している。

第２節　古墳時代の周辺環境

山崎上ノ原第１遺跡が立地する大淀川下流域では、古墳時代のかなり早い段階で生目古墳群に100ｍを超える前方後円墳が築かれ、古墳時代の前期を通じ首長墓の系譜が追えることがわかっている。その後、生目では系譜が途絶え、大淀川下流域の首長系譜は下北方古墳群に移る。この時期の大淀川下流域には60ｍから80ｍ規模の前方後円墳を築く有力な首長系列がいくつか出現(9)しており、大がかりな政治的再編が行われたことが示唆される。



第３図　山崎上ノ原第２遺跡出土の須恵器（S=1/3）

第２砂丘上では県道宮崎島之内線関係で平成５年から断続的に行われた調査の他に、宮崎市教育委員会が携帯電話基地局建設に伴い行った調査（竹中克繁 2008）があり、いずれの調査でも６世紀後半から７世紀を中心に展開した集落跡が確認されている。これらの発掘調査では、TK208 ～ TK23型式併行の須恵器(10)が出土しており、集落形成の開始時期を示唆している。これは、いったん途絶えた生目古墳群の首長系譜が（規模を縮小し非常に限られた期間であるが）復活した時期に重なり（竹中克繁ほか 2012）興味深い。遺跡では県内では初の出土となった竈形土器、国内ではこの近辺以外では新原・奴山44号墳出土例（池ノ上宏 2001）のみが知られる古墳時代の凹字形鉄器（村上恭通 2001）などが出土している(11)。また、集落域の南側では、５世紀末葉から古墳時代の終末期にかけての墓域が広がっており、馬葬土壙が６基検出(12)されているのに加え、竪穴建物内から馬の臼歯が出土しており、馬匹生産に関わりが深い集団であったことは疑いがないだろう。

山崎上ノ原から下ノ原にかけての集落では、日向地域としては比較的早い時期に須恵器や竈が導入されており、前述した竈形土器や凹字形鉄器などの希少な遺物の出土もみられる。また、鉄滓や砥石、竪

穴建物内からの刀子や紡錘車などの出土が比較的多くみられることや馬葬土壙の存在などからは、各種生産活動が行われていたことは想像に難くない。これらのことは、この地域一帯に先進的な職能を有する集団がいたことを強く示唆するといえ、計画的に配置された集落である可能性が非常に高い。

山崎下ノ原に分布する古墳群には前方後円墳が存在しないが、古墳時代の後半期において一定の勢力を維持していたことは、かつての調査の結果（南正覚・丹・飯田 2003）をみても明らかである。

山崎上ノ原および下ノ原遺跡の周辺には、古墳時代の後半期に馬匹生産を中心とした職能をもった集団の集落が営まれ、それを統べる首長の墓として下ノ原の古墳群が造られたと考えられ、日向の古墳時代後半期を考える上で非常に重要な位置を占める遺跡であることは間違いない。

【註】

（1）『角川日本地名大辞典』（野口ほか1986　1038項）では字名として「上ノ原（カミノハル）」とあるが、宮崎市教育委員会に問い合わせた結果、遺跡名については「ウエノハル」であるとの回答を得た。

（2）「第１浜堤状ではこれまでに市来式土器が発見されている」（甲元2009）が、宮崎市教育委員会に確認をとったところ、古い時期の表採資料で来歴ははっきりしないようである。「平原」と注記のあることから、第１砂丘上の遺跡（第２図47・48）であろうと予想されるが、これまでの調査では（発掘深度の問題もあると考えられるが）檍遺跡を遡るものは確認されていない。

（3）報告者は「土師器の無頸壺」（南正覚ほか2003 93項７行）と報告しているが、実見したところ弥生時代後期頃の遺跡で散見される口縁部付近に穿孔を有する無頸平底壺と考えられる。報告書には口縁部から体部にかけての図面のみが掲載されていたが、同一個体と考えられる底部も出土していたので、底部を実測図上で合成し第１図に掲載した。

（4）「馬埋葬土坑」や「馬の埋葬土坑」と記すのが一般的であろうが、やや冗長な感が否めないため、「馬葬土壙」と記し「バソウドコウ」と読むことを提案したい。

（5）平凡社刊の『宮崎県の地名』では、江田に駅が存在した可能性を低いとした上で、国富町の本庄、八代、旧高岡町の穆佐などに所在地を求めている（大賀郁夫・佐藤省吾1997　360頁）。

（6）日高重孝は本居宣長が『古事記伝』の中で「日向に曾て橘の小戸の地名を聞かず」としているのに対し、「伊東義祐の飫肥紀行、橘三喜の一ノ宮巡詣記、書記集解、僧雲蝶の橘檍原図、小戸神社所蔵文書」などの記録にこれらの地名が見えるとして、「博識本居翁の千慮の一失」と評している（日高1952　164項）。また、梅原猛も同様に本居の不明を糾弾している（梅原2000　106頁）。しかしながら、江戸期の古地図も含めて昭和に入るまで「阿波岐原」の地名が地図上に見られないことは、その呼称があまり一般的なものではなかった事の証左にはなるだろう。遠地に住む本居が知るすべはないほど局地的な呼称に過ぎなかったとするのが妥当と考えられる。

（7）宮崎県観光推進課2008「宮崎県観光のあゆみ」『平成20年　観光動向調査結果』による。

（8）甚だオカルト的な言葉である。神話・伝承を含めこのようなオカルト的な事象を前面に出した観光を民間だけではなく、行政体が主導とはいわないまでも確実に後押ししている（「選定宮崎観光遺産一覧」（http://www.pref.miyazaki.lg.jp/contents/org/shoko/appeal/kankoti_dukuri/isan_ichiran.html）など）ことに関しては、真摯に検討を行うべきだろう。

（9）石崎川流域の住吉１号墳や下那珂馬場古墳などはこの時期のものと考えられる。

（10）山崎上ノ原第２遺跡 SA25出土の須恵器坏（柳田2006　69項　第77図472）は実測の際の誤認があったので再実測し掲載した。

（11）凹字形鉄器については、愛媛大学の村上恭通氏から韓国での出土例がかなり増加していること、宮崎市教育委員会の西嶋剛広氏から未報告資料だが間越遺跡で出土例があることを御教示いただいた。

（12）調査の範囲を考えるとかなりの密度といえる。

【引用・参考文献】

石川恒太郎1961「宮崎市村角出土の遺物」『宮崎県文化財調査報告書』第六輯　宮崎県教育委員会

石川恒太郎1973「遺跡周辺の研究概史」『石神遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第１集

池ノ上宏2001『新原・奴山古墳群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書第17集　津屋崎町教育委員会

梅原猛2000『天皇家の”ふるさと”日向をゆく』新潮社

大賀郁夫・佐藤省吾1997「宮崎市」『宮崎県の地名』日本地名大系46　平凡社

甲斐貴充2009「宮崎県における古墳時代の馬埋葬土壙」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第５号

甲元眞之2009「浜堤の形成と考古学資料」『南の縄文・地域文化論考　新東晃一代表還暦記念論文集』上巻　南九州縄文文化研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会
甲元眞之2012「砂丘遺跡と考古学」『西海考古』第８号　西海考古同人
久住猛雄2006「橿１号墳出土土器の編年的位置と併行関係について」『南九州における出現期古墳の実証的研究』平成15～平成17年度科学技術研究費補助金（基本研究（B）(2)）研究代表者 柳澤一男
柴田博子1998「日向国出土の墨書土器」『宮崎県史』通史編　古代２
柴田博子2005「宮崎市山崎上ノ原第二遺跡「勾」墨書土器をめぐって」『宮崎県地域史研究』18
鈴木重治1973「遺跡の立地と周辺の遺跡」『石神遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第１集　宮崎市教育委員会
竹中克繁2005『桜町遺跡』宮崎市文化財調査報告書第60集
竹中克繁2008『山崎上ノ原第２遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書第69集
竹中克繁・西嶋剛広・渕内美智子2012「下北方11号墳南隣接地採集遺物の検討－編年的位置付けと首長墓系譜－」『宮崎考古』第23号　日髙正晴先生追悼記念号（上巻）
鳥枝誠・宇田川美和・河野 賢太郎2001『間越遺跡』宮崎市文化財調査報告書第48集　宮崎市教育委員会
永山修一1998「日向国の官道」『宮崎県史』通史編　古代２
野口逸三郎・柳宏吉1986『角川地名大辞典』45宮崎県
日髙重孝1952「宮崎地方史」『宮崎県大観』（上巻）宮崎県大観刊行会
藤本貴仁1998「宮崎平野部の群集墳」『宮崎考古』第16号
南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡 山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集
柳沢一男1997「宮崎市内の古墳」『宮崎県史叢書　宮崎背報後円墳集成』宮崎県
柳沢一男1998「宮崎市蓮ヶ池横穴墓群の墳丘を有する横穴墓と線刻壁画」『宮崎考古』第16号
研究代表者 柳澤一男2006『南九州における出現期古墳の実証的研究』平成15～平成17年度科学技術研究費補助金（基本研究（B）(2)）
柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第130集
村上恭通2001「朝鮮半島における凹字形鉄器－おひきがね（苧引金）との関連で－」『久保和士君追悼考古論文集』
宮崎県1989『宮崎県史』資料編　考古１
宮崎県1998『宮崎県史』通史編　古代２
「ふるさとの道　宮崎の街道」編集委員会2006『ふるさとの道　宮崎の街道』財団法人宮崎県教職員互助会
宮崎市教育委員会1990『宮崎市遺跡詳細分布調査報告書Ⅱ〔リゾート地区を中心として〕』

第Ⅲ章　調査の記録

第１節　調査の経緯

山崎上ノ原第１遺跡の現地での調査は平成21年度と22年度の２箇年度に分けて行った。平成21年度は10月26日から平成22年３月１日まで、平成22年度は７月27日から９月９日までである。平成22年度については、現地調査時に周辺住民の交通の便を鑑み掘削を行わなかった範囲について11月24日と27日に現地立会を行っている。

整理作業は、平成22年度の６月１日から開始し、平成23年度の３月に終了している。

１　平成 21 年度

調査開始に先立って、調査範囲の一部が旧地権者により掘削されており、平成21年度の調査は、この既掘削部分の状況確認から開始した。状況確認は、平成21年10月26日から29日にかけて行った。その結果、包含層は失われていたものの遺構検出が充分可能な程度は基盤層が残存していることが確認できたため、11月５日から本格的な遺構検出作業と掘削作業をすることとなった。

発掘作業の調査範囲を便宜上、北から１区と２区に分割した。調査の結果、１区からは竪穴建物跡10軒、溝状遺構３条、道状遺構１条、ピット１基が、２区からは竪穴建物跡３軒、溝状遺構１条、土坑１基が検出された。

平成22年１月からは、現道を東に迂回させ調査区を東側に拡張する予定であったが、平成22年１月26日、表土掘削中に走行中の車両が調査区内に転落する事故が発生し、通常の調査方法では作業従事者の安全を確保することが困難との判断から、作業員を雇用せず調査員のみで遺物の取り上げを中心に調査を行うこととなった。

事故発生時の状況

調査の結果、既に検出された遺構に連続するもののほか、新たに竪穴建物跡２軒と溝状遺構１条が検出された。

平成21年度の調査は拡張部分を含め３月１日に終了した。

なお、平成21年度の発掘作業に従事した発掘作業員は次のとおりである。井野サダエ、宇戸清文、宇戸ツユ子、宇戸律子、川越豊子、児玉美代子、杉田スミ子、杉田三千夫、田中タヅ子、中原文子、日野キクエ、堀井清（以上12名、五十音順）。

２　平成 22 年度

平成22年度の現地調査は、対象地内にある民家の立ち退き状況などから、７月27日から開始し９月10日に終了した。平成22年度の調査地は、前年度の調査地に引き続き３区とした。

平成21年度の調査状況から、相当数の遺構・遺物が検出されると考えられたが、表土掘削の段階ではあまり多くの遺物の出土はみられなかった。調査の結果、３区では遺構は確認されず、遺物は北側にま

第４図　調査箇所と周辺地形（1：10,000）

とまって出土したほかは、ごく少量の出土しかみられなかった。11月24日と27日に行った立会調査においても状況はほぼ同様であった。しかしながら、前年度同様に竈形土器の出土が目立ったことや、特殊扁壺が九州で初めて出土したことなど注目される成果が得られている。

整理作業については、発掘調査と併行して６月１日から遺物の洗浄と注記を行い、遺物の接合ができる状態とした。

なお、平成22年度の発掘作業および整理作業に従事した作業員は次のとおりである。

発掘作業員：宇戸清文、宇戸ツユ子、宇戸律子、川越豊子、児玉美代子、杉田三千夫、中原文子、日野キクエ、堀井清（以上９名、五十音順）。

整理作業員：有田具子、金井典子、黒木美紀、小﨑弘美、澤田媛薫、出口江美、手銭富佐江、那須明美、根井靖子、日高香屋子、福田美香、外村紀子、森愛子、村上美鶴（以上14名、五十音順）。

３　平成23年度

平成23年度は、６月１日から前年度に引き続き遺物の接合を行い、７月21日から実測作業を行った。６月16日、17日には、熊本大学より杉井健准教授にお越し頂き、竈形土器の理解を中心に本遺跡の集落の評価について御教示を頂いた。また、12月６日から12月８日にかけて特殊扁壺および韓式系土器の資料調査に伊勢神宮徴古館、三重県埋蔵文化財センター、大阪府教育委員会、大阪府文化財センター、大阪文化財研究所に伺った。１月５日からは実測図のトレース、報告書レイアウトの作成に入り、３月１日から遺物の写真撮影を行った。

なお、平成23年度の整理作業に従事した作業員は次のとおりである。有田具子、稲元光恵、猪野佐和子、栄留博美、小野川三恵子、小野貞子、唐沢絵里子、黒木鈴代、佐伯邦子、澤田媛薫、菅原尚子、清水里恵子、髙橋茂子、髙山シノブ、髙山千代美、田村広子、長田博子、永友和子、長友ふみよ、那須明美、濵砂雅子、福田理恵子、福元京子、古庄美穂、松岡れい子、松本静香、松元真澄、村上美鶴、森愛子（以上29名、五十音順）。

３　平成24年度

平成24年度につては、収蔵前整理を行っている。作業に従事した整理作業員は次のとおりである。小松陽子、唐沢惠理子、永友和子（以上３名、五十音順）。

第２節　調査の概要

山崎上ノ原第１遺跡の調査では工事範囲の関係から、南北に細長い調査区を設定することとなった。そこで、調査内容の記述を行う際、便宜上、北から１～３区と調査区内を区分した（第５図）。

調査は、まず重機によりⅡ層まで除去後、Ⅲ層を人力により除去しⅣ層で遺構を検出した。Ⅲ層からは主に古墳時代後期から古代の初め頃の遺物が出土している。

１区では、竪穴建物跡11軒、溝状遺構４条、土坑１基、ピット１基、道状遺構１条が確認された。今回の調査区では最も遺構が集中して検出されているが、前述したとおり、事故後の安全面の確保などから充分な調査が行われたとは言い難い。また、検出面のⅣ層上面まで攪乱を受けている部分が多く、調

査区の幅が狭かったことや土質も関係して遺構の検出を困難なものとした。古墳時代については中期後葉から終末期にかけての遺物・遺構が確認されている。また、韓式系土器の平底鉢の破片（第26図166）や竈形土器などの炊飯具も出土している。古代から中世の時期については、鎬蓮弁をもつ龍泉窯系の青磁碗が出土した溝が確認できたが、性格等ははっきりしない。

２区では、竪穴建物跡３軒、溝状遺構１条、土坑１基が確認された。２区も１区同様、検出面以下に達する攪乱の範囲が広く、特に北側と南側では遺物の採集はできるものの、確認できた遺構はわずかであった。しかしながら今回の調査範囲内では竈形土器や甑などの炊飯具が最も集中して出土している。

３区は、検出面に攪乱が及ぶ範囲は広くなかったものの、遺構は確認されず包含層からの遺物採集にとどまった。採集された遺物には竈形土器や甑のほか、九州では初の出土となった特殊扁壺の破片があり注目される。古代に関しては、須恵器や土師器（墨書のあるものも確認された。）などの遺物は出土しているが、遺構は確認できなかった。近世以降については、陶磁器類などの遺物は採集できるが、明確な遺構は確認できていない。

なお、前述したとおり、事故後の措置により充分な調査が行われていないため、特に１区において遺構図をはじめ各記録に不備が多い。作業従事者の生命を守るためではあったが、結果的には充分な調査を安全に行うための事前調整が不足していたとのそしりは免れえず、今後の宮崎県埋蔵文化財行政における課題を残したといえよう。

第３節　基本層序

調査地は日向灘沿いに形成された砂丘上の遺跡であり、堆積土は砂丘を形成する砂質土で色調、質ともに変化に乏しかった。また、調査範囲が南北に長いが、東西の幅については10ｍに満たない部分が多いうえ各所に近現代の攪乱が入り、そのため各地点での土層の整合性をとることが困難であった。

各地点での土層観察の結果、基本層序は第３表のようなものであると判断した。なお、既報告の層序との対応もあわせて記している。以下、基本層序についてはローマ数字で示し、その内容は第３表に準ずるものとする。

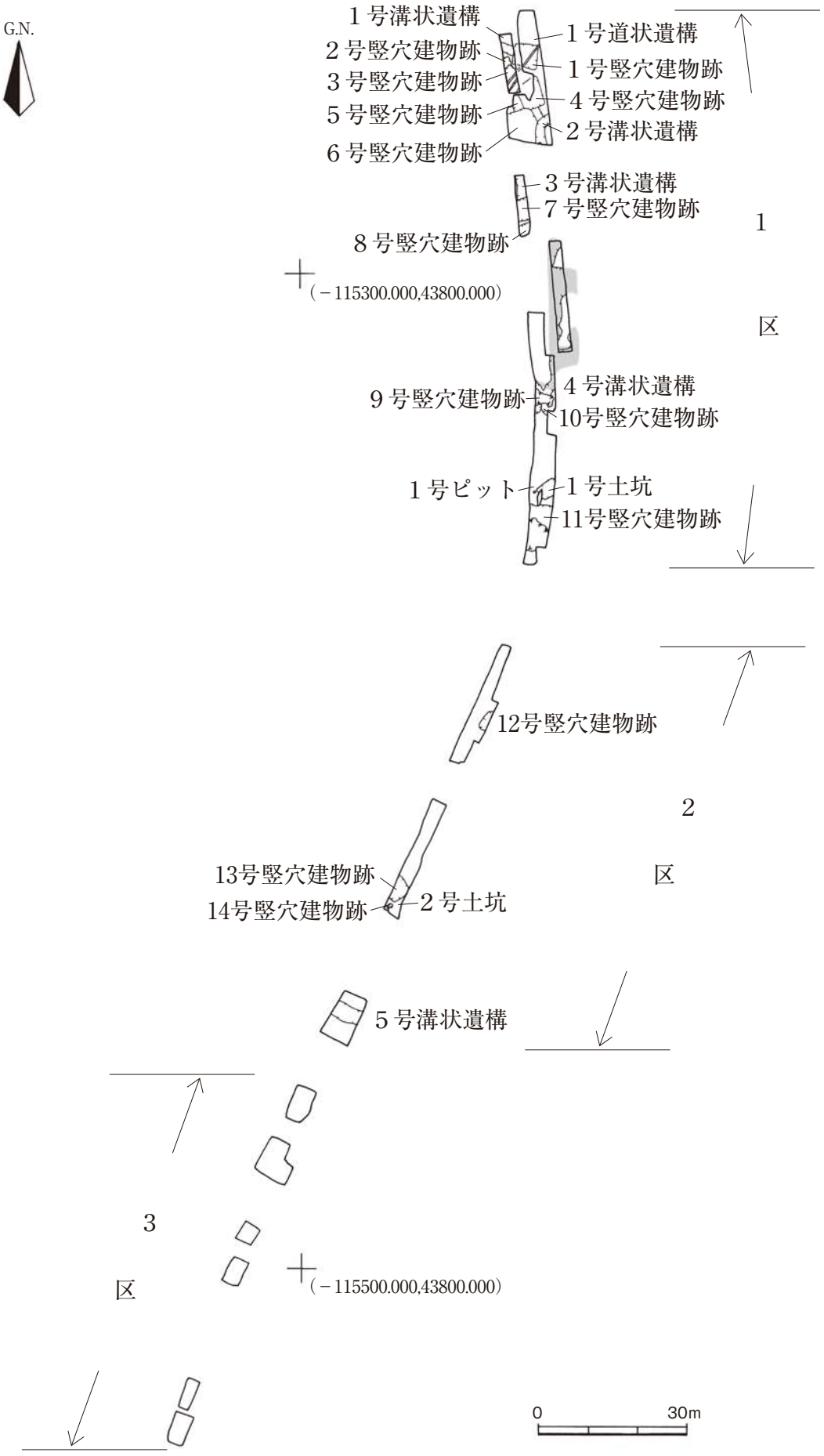
第３表　基本層序

層序	色調	質	備考	既報告との対応
Ⅰ	暗褐色	粗砂	現地表面から30㎝程度から深い部分では１ｍ以上に達する。近世以降の造成土に、植物の根が入り攪乱されている。	県79・130集「第Ⅰ層」
Ⅱ	暗褐色	粗砂	高原スコリアと考えられる褐色テフラを含む。30㎝程度の厚さで堆積しており、中世以前の遺物を含む。	県79・130集「第Ⅱ層」
Ⅲ	灰褐色	粗砂	30㎝程度の厚さで堆積しており、古墳時代以前の遺物を含む。	県79・130集「第Ⅲ層」 市69集 第４図「Ⅵ・Ⅶ層」
Ⅳ	灰褐色	粗砂	遺構検出面。遺物は含まない。	県79・130集「第Ⅳ層」

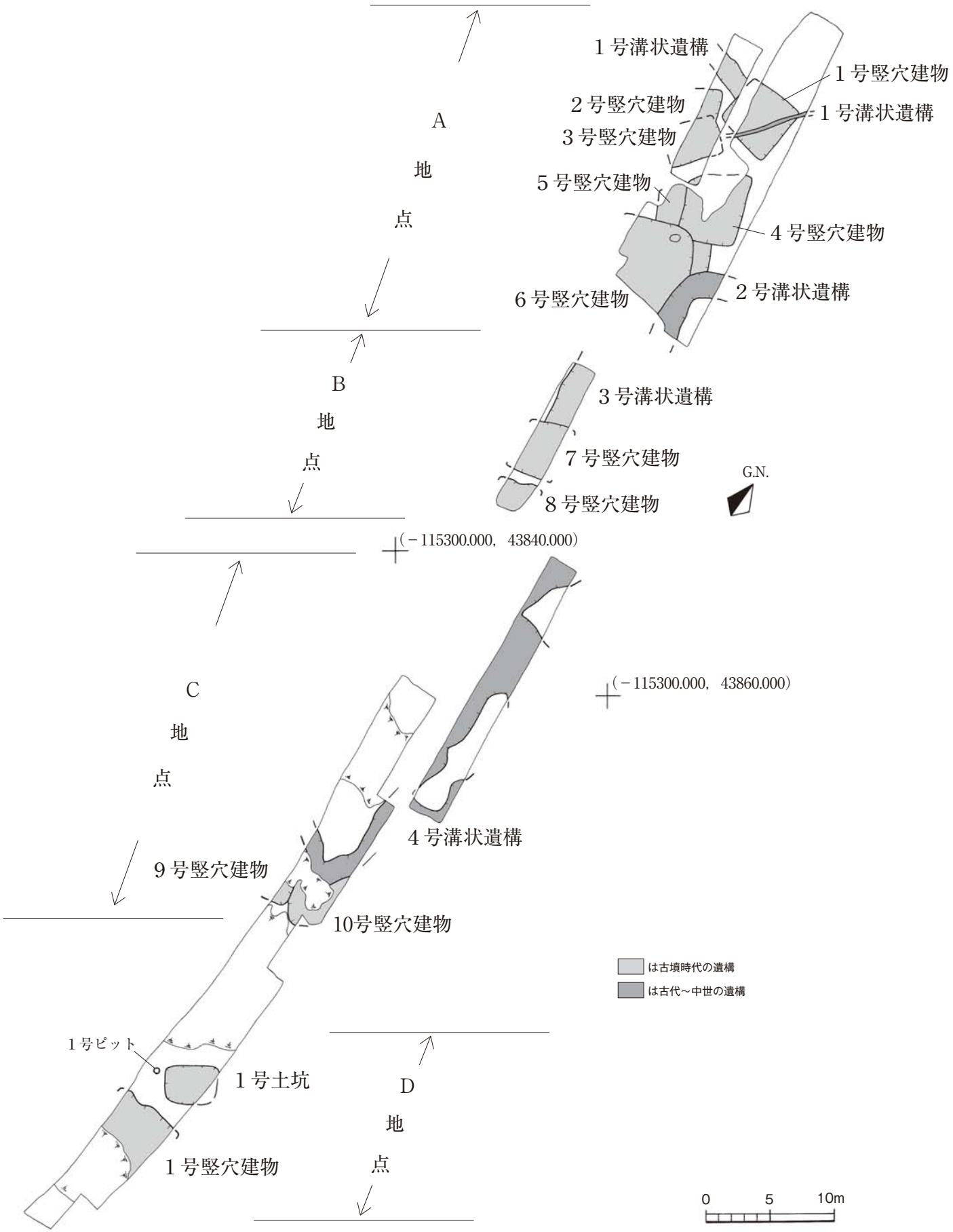
第４表　山崎地区におけるこれまでの調査

調査年度	調査機関	遺跡名	掲載報告書	報告に使用された測地系
1993年度	宮崎県文化課	山崎上ノ原第２遺跡	県30集	旧測地系（座標第Ⅱ系）
2001 ～ 03年度	宮崎県埋蔵文化財センター	山崎上ノ原第２遺跡	県79・130集	旧測地系（座標第Ⅱ系）
2001 ～ 02年度	宮崎県埋蔵文化財センター	山崎下ノ原第１遺跡	県130集	旧測地系（座標第Ⅱ系）
2006年度	宮崎市教育委員会	山崎上ノ原第２遺跡	市69集	旧測地系（座標第Ⅱ系）
2009 ～ 10年度	宮崎県埋蔵文化財センター	山崎上ノ原第１遺跡	当報告書	世界測地系（座標第Ⅱ系）

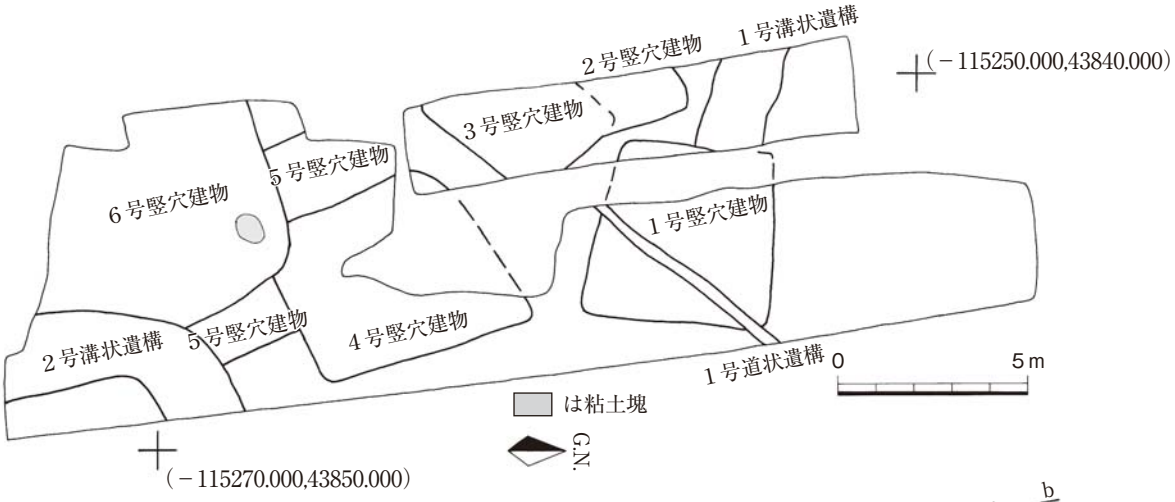
＊県79集：南正覚ほか2003，県130集：柳田2006，市69集：竹中2008

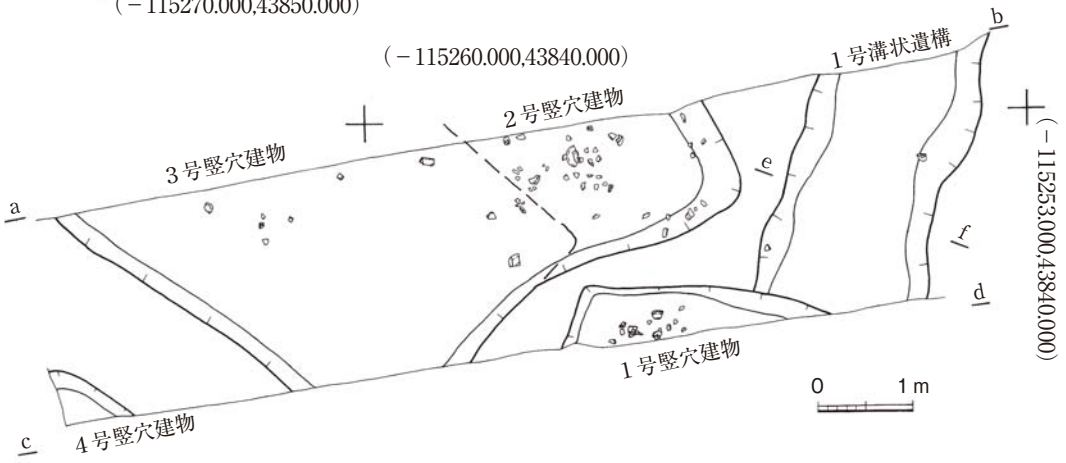


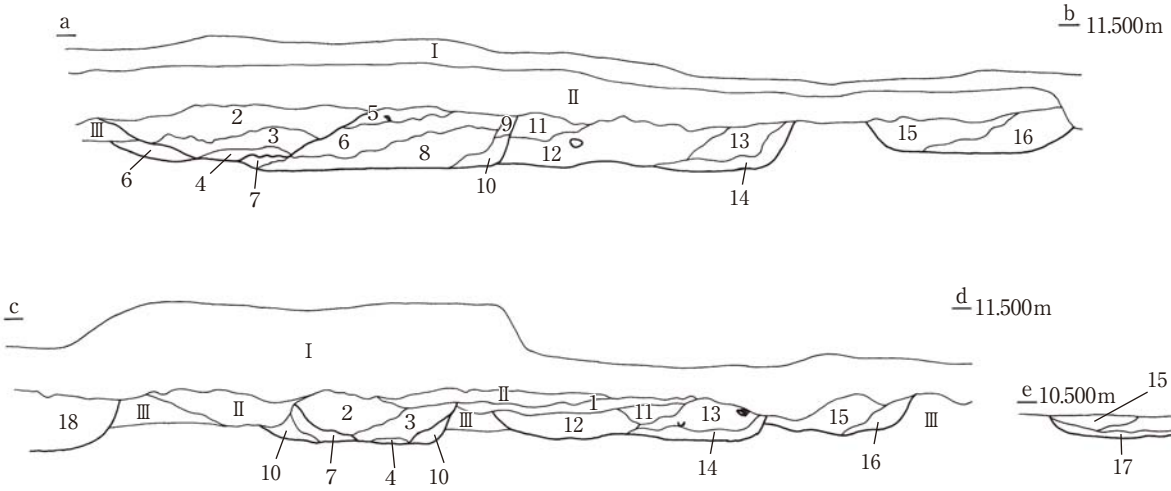
第５図　山崎上ノ原第１遺跡　遺構分布及び調査区配置図（1：1200）



第６図　１区遺構分布図（1：400）







Ⅰ～Ⅲ　基本土層Ⅰ～Ⅲに同じ
1　黒褐色粗砂　木根か
2　暗褐色粗砂　（1号道状遺構埋土）
3　灰黄褐色粗砂（1号道状遺構埋土）
4　暗褐色粗砂　（1号道状遺構の硬化面を成す）
5　暗褐色粗砂　（3号竪穴建物埋土）
6　灰黄褐色粗砂（3号竪穴建物埋土）
7　灰褐色粗砂　（3号竪穴建物埋土）
8　暗褐色粗砂　（3号竪穴建物埋土）
9　暗赤灰褐色粗砂（3号竪穴建物埋土）
10　黒褐色粗砂　（3号竪穴建物埋土）
11　暗赤褐色粗砂　（2号竪穴建物埋土）
12　黒褐色粗砂　（2号竪穴建物埋土）
13　暗赤褐色粗砂　（2号竪穴建物埋土）
14　灰褐色粗砂　（2号竪穴建物埋土）
15　黒褐色粗砂　（1号溝状遺構埋土）
16　にぶい黄褐色粗砂（1号溝状遺構埋土）
17　暗灰褐色粗砂とにぶい黄褐色粗砂がラミナ状に堆積する（1号溝状遺構埋土）
18　灰褐色粗砂（4号竪穴建物埋土）

第7図　1区A地点の遺構分布図（1：200）・遺構平面図（1：80）・土層断面図（1：80）

第４節　１区の遺構と遺物

１区では竪穴建物11軒、溝状遺構４条、土坑１基、ピット１基が検出された。便宜上、遺構の集中する部分を北からＡからＤ地点とし、各地点毎に報告を行う（第６図）。

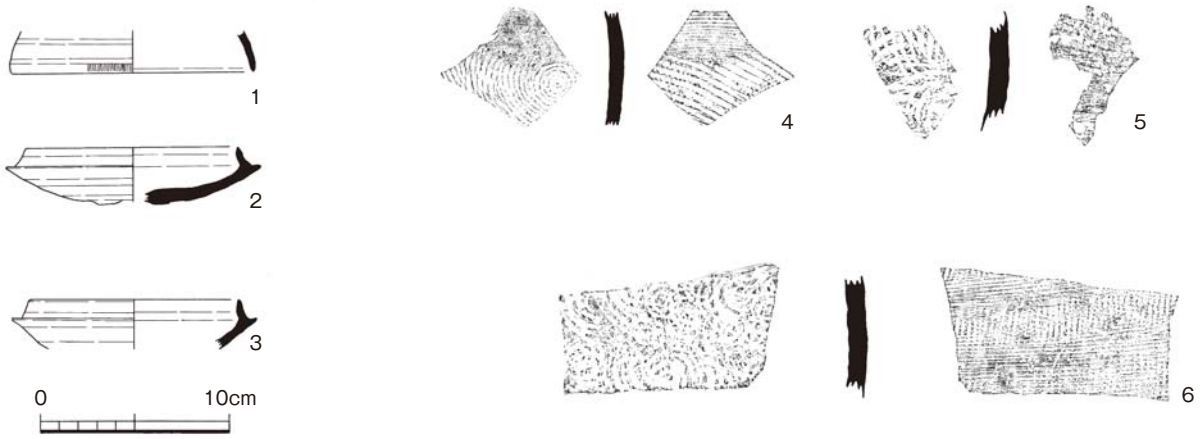
１　１区Ａ地点【第７図】

１区の北側で遺構の集中する地点である。竪穴建物６軒、溝状遺構２条、道状遺構１条が確認された部分をＡ地点とした。なお、東側および南側の拡張部分については、前述した事故の影響から遺構の検出状況の図面のみ記録し、遺物の採集を行う簡易な調査を行っている。

（１）１号竪穴建物

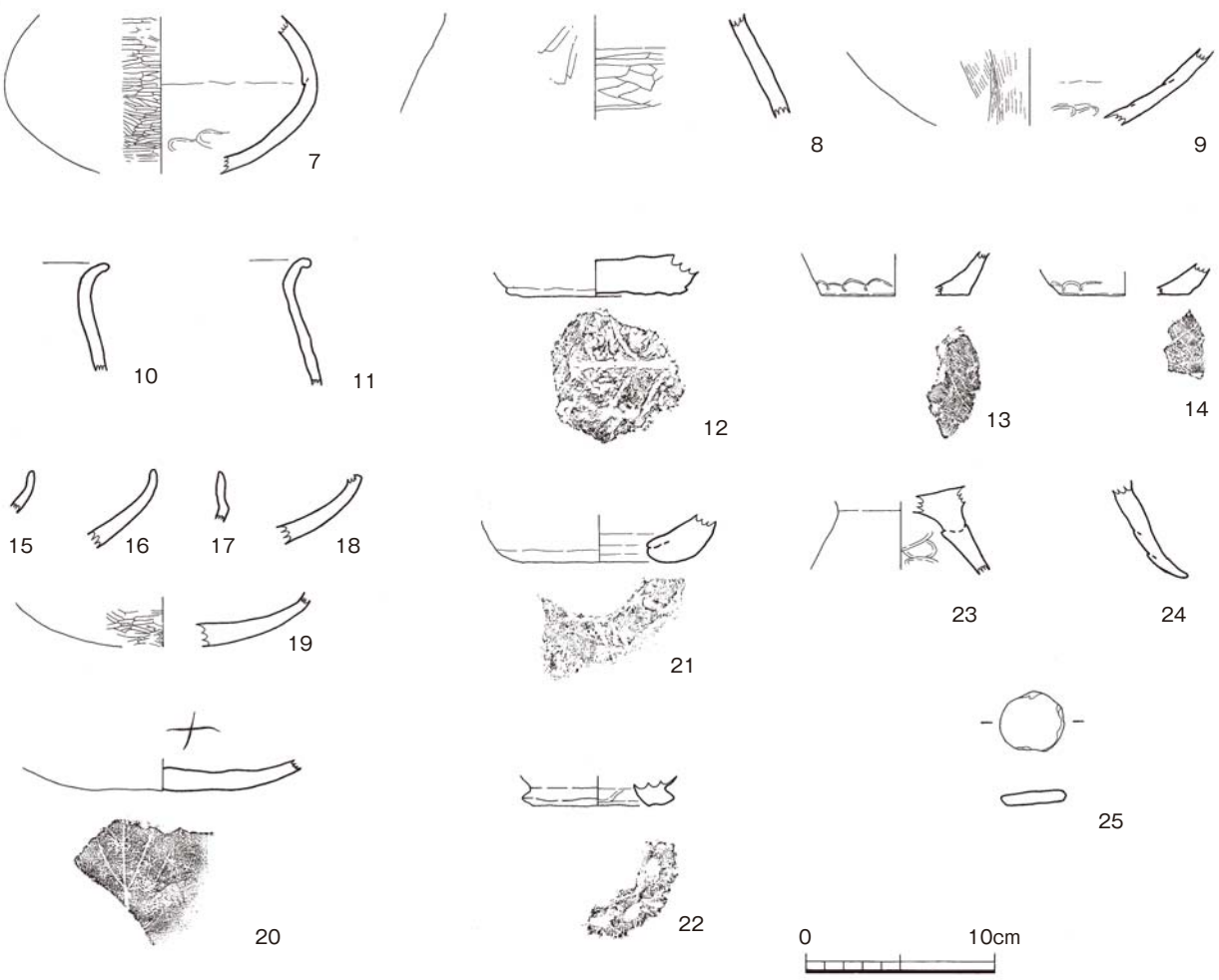
遺構【第７図】　１区Ａ地点北側で確認された古墳時代の竪穴建物である。平面方形で一辺4.0ｍから4.5ｍを測る。遺構の大部分が事故後の拡張部分にあり、詳細なデータは確認できていない。

遺物【第８図～第10図】　１から６は須恵器である。１は坏蓋片、２・３は坏身片である。１の坏蓋は復元径13㎝を測り、口縁端部には「刻目状圧痕」（小笠原啓二・山内英樹2005）が確認できる。２・３の破片は径が11㎝程度で、全体の形状も含めおおよそTK209型式の新しい段階に併行すると考えていいだろう。４から６は甕の破片である。４は破片上部にカキメ、下部に格子のタタキ跡が残り、内面には同心円のアテ具痕が確認できる。５も外面に格子のタタキ、内面に同心円のアテ具痕が確認できる。



第８図　１号竪穴建物出土須恵器（S=1：4）

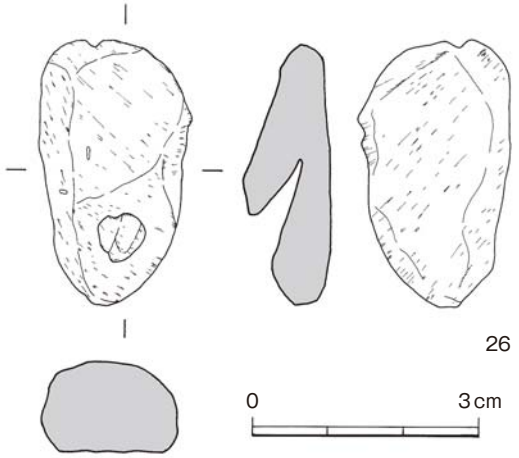
７から25は土師器である。７は壺、８から14は甕、15から20は坏、21、22は甑、23、24は高坏、25は土師器片を加工した円盤状の土製品である。７は壺の胴部で、外面はヘラミガキ、内面は全体にナデ調整されている。８は胴部下寄りに最大径がある甕の胴部で、内外面に工具によるナデが施されている。９は甕の底部付近の破片である。10と11は甕の口縁部で12から14は甕の底部と考えられる。底面には葉脈の圧痕が確認できる。15から17は坏の口縁部、18はかえり部分が欠損した模倣坏の破片である。15、16は坏の口縁部で外面には黒色処理が施されているようである。17は体部に屈曲点を持ち、内外面ともにヘラミガキが施されている。19は坏の底部で、内外面ともにヘラミガキが施されており、赤色顔料が塗布されている。21、22は筒抜けタイプの甑の底部で、底面には葉脈の圧痕が残る。23と24は高坏の脚



第９図　１号竪穴建物出土土師器（S=1：4）

柱部で、23は坏部内面にはヘラミガキが確認できるが、外面の調整は器表の風化が激しく判然としない。25は坏類もしくは壺類の破片を円形に整形した土製円盤である。内外面ともヘラミガキが施され赤色顔料が塗布されている。

26は軽石製で表面に孔が穿たれている。孔は貫通しておらず、錐状の工具で底面に対し斜めに位置を若干ずらして二度穿たれている。表面は熱によりオレンジ色に変色した部分が確認できる。使用目的等は不明である。



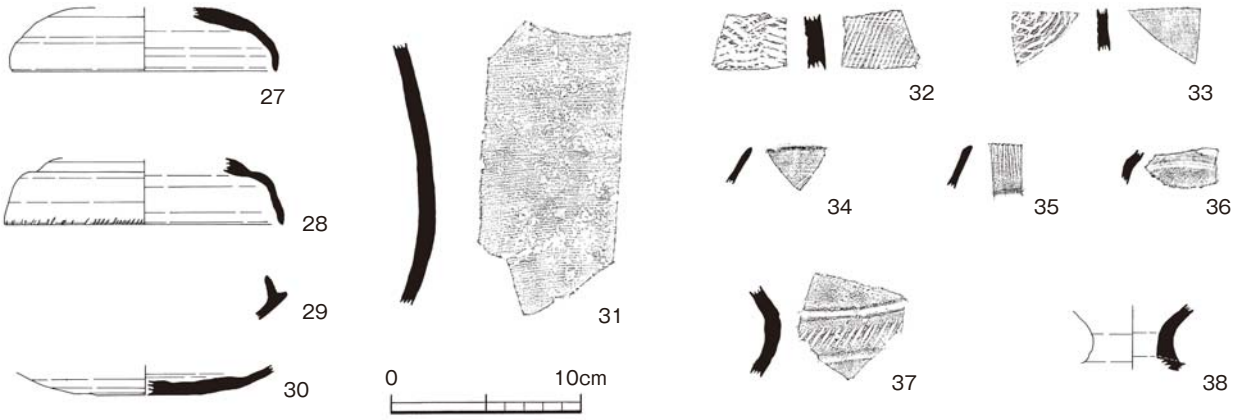
第10図　１号竪穴出土軽石製品（S=1：1）

（２）２号および３号竪穴建物

遺構【第７図】　１区Ａ地点の東壁に接して重なって確認された遺構である。２号竪穴建物は遺構の半分以上が調査区外であり、調査区内で検出された部分も３号竪穴建物により１／２ほど破壊されている。残存部から予想される形状と規模は、方形で一辺3.6から3.7m程度になると予想される。検出面からの深さは50cm程度で比較的良好な状態である。検出範囲では、壁溝、柱穴、竈などは確認できていない。また、土層断面および床面の観察から、貼床は施されていなかったと考えられる。３号竪穴建物は、全体の１／３ほどが検出されている。２号竪穴建物と同様に壁溝、柱穴、竈などの施設は確認されてい

ない。復元すると長辺約４ｍ、短辺３ｍ程度の長方形を成す。出土遺物は、２号と３号のどちらに伴うか判別が難しいが、大部分が２号竪穴寄りに出土している。TK209型式に併行する須恵器が出土しており、その前後の時期に位置づけられる遺構と考えられる。

遺物【第11図～第13図】　出土遺物は２号と３号のどちらの建物に伴うものかの判断が難しいため、どちらの建物からの出土かを確定していない。

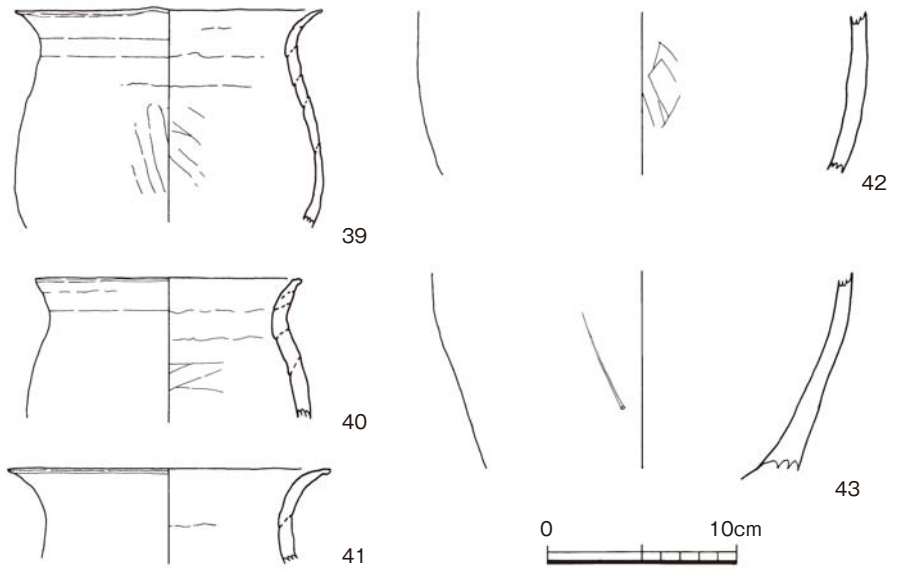


第11図　２号及び３号竪穴建物出土須恵器（S=1：4）

27から38は須恵器である。27、28は須恵器の蓋である。28には刻目状圧痕が確認できる。29、30は坏身である。29はたちあがり部から体部の一部まで残存しているが、小片であり径の復元には至らなかった。30は坏身の底部付近で一部ヘラケズリが確認できる。31から33は甕の破片である。31は甕の体部と考えられる破片で、器表の剥落が激しいが全体にカキメが施されていることが確認できる。32は甕の破片で外面に平行のタタキが交差する状態で施されている。内面は同心円のアテ具痕が残る。33は外面は格子のタタキが施された後に丁寧にナデられており、内面には同心円のアテ具痕が残っている。34から38は壺形の土器である。34、35は口縁部で、櫛描波状文が施されている。36は頸部で、丁寧な櫛描波状文が確認できる。37は体部で、最大径部を挟む二条の沈線の間にヘラ状工具による斜方向の刻目が巡る。38は頸部で、残存部下位に体部との接合箇所が確認できる。壺形土器としたもののうち、34から37は瓶、38は提瓶である可能性が高い。

39から43は土師器である。２・３号竪穴建物から出土した図化可能であった土師器は全て甕で、口径が14cmから17cm程度の小型のものと、胴部径が22cmから25cm程度の大型のものがある。

39から41は小型の甕である。39は復元口径16.3cm、厚さは５㎜前後とか

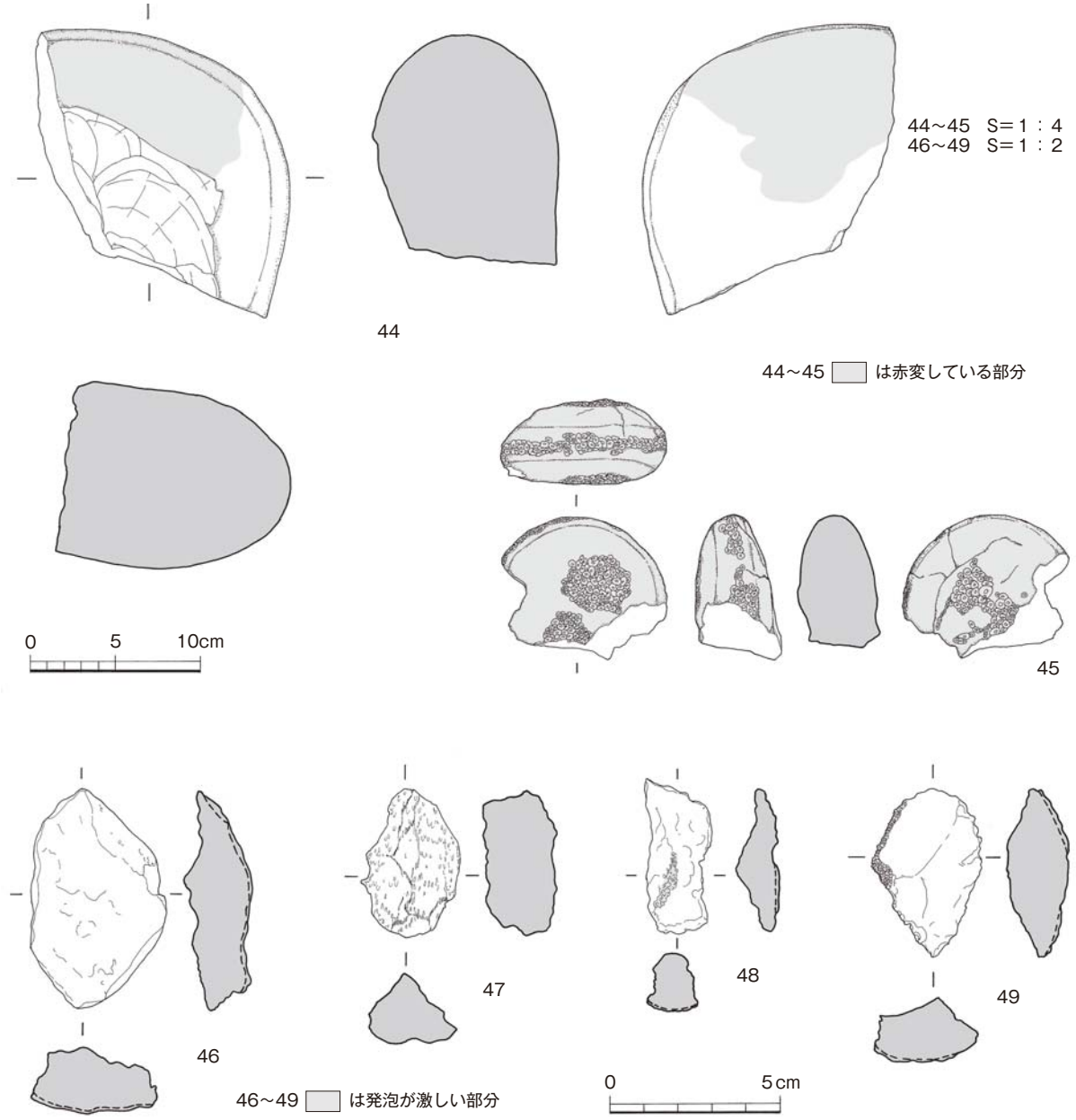


第12図　２号及び３号竪穴建物出土土師器（S=1：4）

なり薄手で、胴部は球胴である。内外面ともにヘラ状の工具でのナデ調整が行われているが、内面には粘土紐のつなぎ目が残りややつくりが粗い印象がある。40は39と同様に球胴で小型の甕であるが、厚さが１cm弱と39に比較してかなり厚手である。内外面ともにナデ調整が施され、内面には粘土紐のつなぎ目が残る。41は、口縁部がラッパ上に開き、39・40に比べやや長胴になると考えられる。

42から43は大型の甕で、42がやや球胴、43がやや長胴になると考えられる。どちらも内外面ともにナデ調整が施される。

44から49は鍛冶関連遺物である。44は欠損した尾鈴酸性岩で結合資料は出土していない。上面に敲打により剥離した面が確認でき、その周辺が熱により赤く変色している。鉄床石として使用され、破損したために廃棄されたものと考えられる。尾鈴酸性岩は大淀川流域ではあまり採取されないもであり、あるいは鉄床石として使用するために遠方より入手したものであるかもしれない。45は砂岩製で敲打痕が遺物表面の広範囲に確認でき、全体が熱で変色し劣化している。また、44に比べかなり小型であること



第13図　２号及び３号竪穴建物出土鍛冶関連遺物

から、鉄床石ではなく鎚として使用されたと考えたい。44, 45は３号竪穴建物の床面から出土している。46は鉄塊系遺物と考えられる。弱い磁性をもち、底面には砂が付着している。47は軽石の岩片だが全体に黒変しており、一部比熱により変質しているようである。鍛冶炉の一部と判断した。48と49は流動滓と判断した。48は扁平で表面の一部が発泡している。底面には砂が付着している。49は48に比べやや厚みがある。底面には砂が付着し、側面の一部が発泡している。

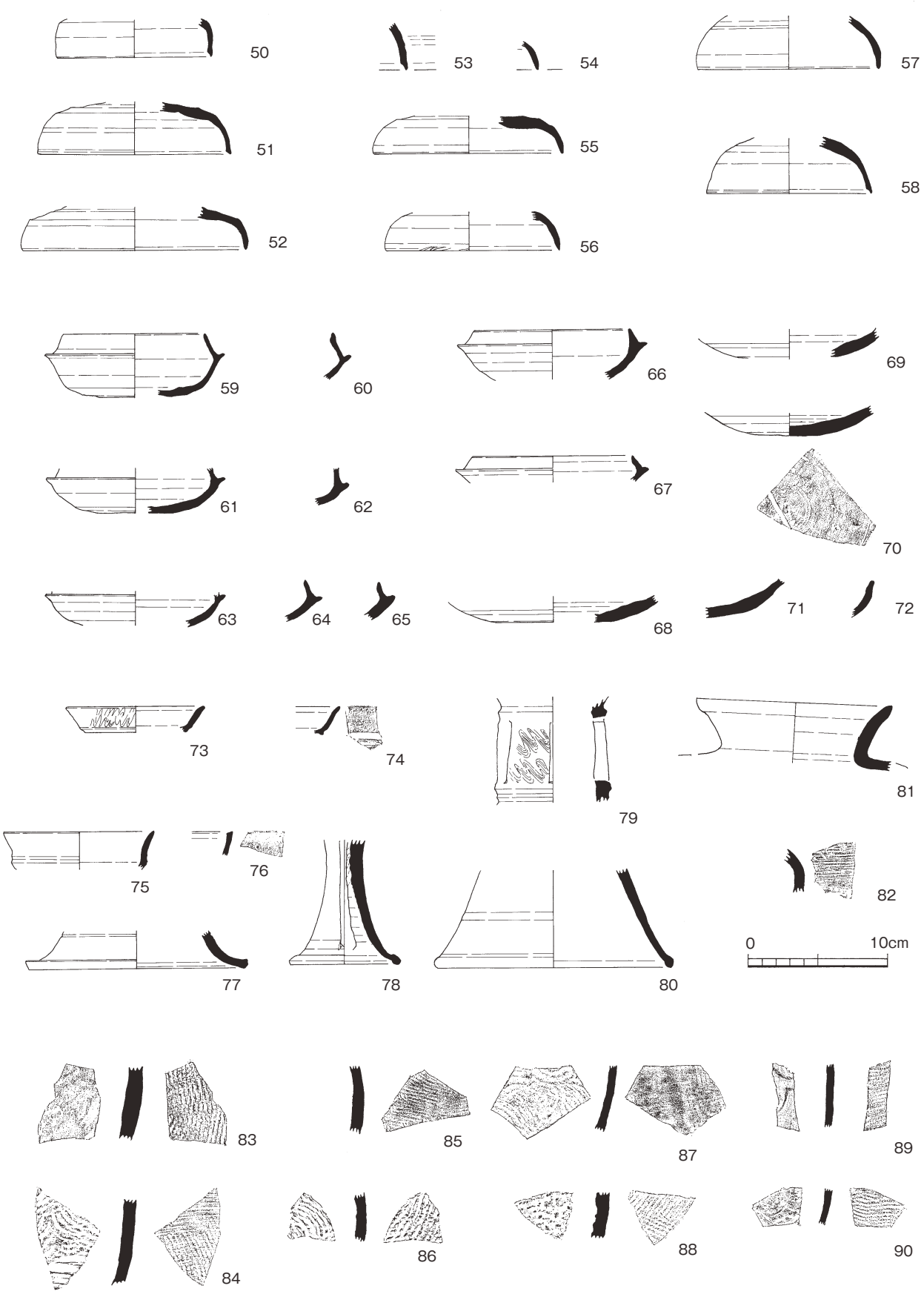
これらの出土遺物は、２号および３号竪穴建物のどちらに帰属するか明確ではないが、両建物ともにTK209型併行期前後であろうこと、少なくとも３号竪穴建物では何らかの鍛冶を行っていたであろうことがわかる。

（４）４号竪穴建物

遺構【第７図】　１区Ａ地点のほぼ中央で検出されたやや歪な方形の竪穴建物である。最長の一辺が5.7ｍほど、最短の一辺が4.1ｍほどに復元できる。遺構は６号竪穴建物に一部掘削され、５号竪穴建物の１/4ほどを破壊している。遺構北西隅以外の大部分は、前述した事故の影響から充分な調査を行えておらず、建物の内部構造は確認できていない。

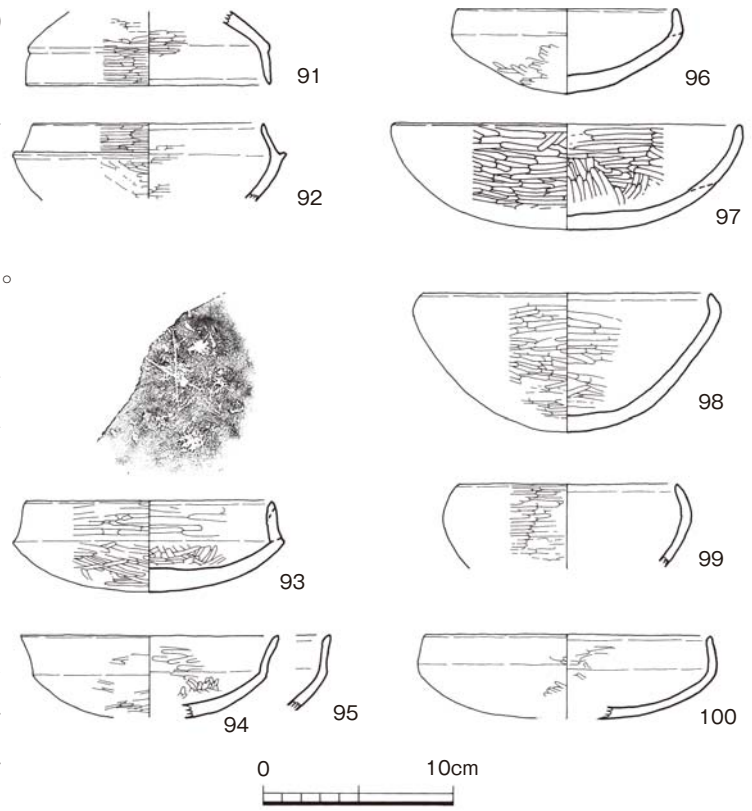
遺物【第14図～第20図】　50から90は須恵器である。50から58は坏蓋で、50は径が小さく口縁部か天井部にいたる屈曲が強いが、稜はあまり明瞭ではない。残存部が焼け歪んでいる可能性もあるが、復元径の大きさ、形状からTK47型併行とみたい。51は形状からTK10型式併行あたりか。52から56はTK43からTK209型式に併行するとみたい。56の口縁部には刻目状圧痕が確認できる。57・58はTK217型式に併行する坏蓋とみたい。59から72は坏身で、たちあがりの形状から59・60はTK47型式併行、61・62はMT85からTK10型式併行、63から66はTK43、67はTK209型式に併行すると考えられる。68から71は坏身の底部であるが、破片のため細かな形状は判断できない。焼成、胎土などから６世紀代のものと判断した。72は無蓋の坏で、形状からはTK209からTK217型式に併行すると考えられる。73と74は瑞の口縁部と考えられる破片で、口縁部下部の突出が強いことや全体の作りのシャープさからTK47型式に併行するとみたい。両資料とも口縁部に櫛描波状文が施されている。75から78は高坏の破片である。75と76は高坏坏部の破片で、形状からTK43からTK209型式に併行するものと考えられる。76には口縁直下外面に櫛描波状文が施される。77および78は高坏脚部の破片で、78は二段長脚透かしの下段の透かしが確認できる。77は高坏の脚の裾部と考えられ、大きく開くその形状からTK209型式併行と考えたい。79と80は器台の破片である。79は筒型器台で、透かしの一部と櫛描波状文が確認できる。また、器表には自然釉が厚くかかる。80は形状から器台の脚部端であると判断した。81は壺状の土器の破片であるが、頸部と体部の接続の状況から平瓶と判断した。82は壺の破片で、表面にカキメが施されている。83から90は甕の破片である。83と84は表面が格子目のタタキ、内面に同心円のアテ具痕が残る。85から90は外面に平行タタキが施され、内面は同心円のアテ具痕が残っている。甕については、全てが小片で明確な形状等の復元は難しいが、焼成、胎土の発色、タタキやアテ具痕の状態などから６世紀を遡るものはないと考えられる。

１号竪穴建物出土の須恵器は、TK47型式併行のものからTK217型式併行のものまで非常に幅広い時期のものである。遺構の大部分が不充分な調査しかされていないため、確実に遺構に伴う遺物を抽出することは難しいが、遺物量はTK209型式併行のものが多い。

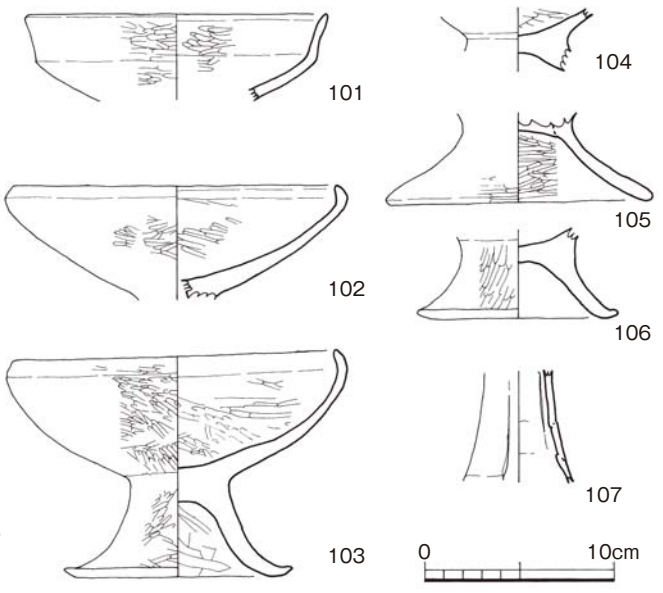


第14図　４号竪穴建物出土須恵器（S=1：4）

91から130は土師器である。91から100は坏、椀、鉢類でここでは一括して坏として扱う。91、92は須恵器模倣の土師器で、91が蓋、92が身である。どちらも内外面をヘラミガキしており、丁寧なつくりで須恵器をかなり忠実に模倣している。形状からはMT15型式からTK10型式に併行する須恵器を模していると考えられる。93から100は無蓋の坏である。93は体部が屈曲し口縁部に向かって内傾する。屈曲部は明瞭な稜を成す。内外面ともにヘラミガキし内面の見込部に「×」のヘラ記号が記されている。94、95は屈曲部から口縁に向かって外傾する坏で、調整は内外面ともにヘラミガキが施されるが器表の風化が激しく明瞭ではない。96、97は赤色顔料が塗布された坏で、96は体部から口縁に向かい内弯していく。やや小型で尖底気味の底部を成す。外面はヘラミガキが施され、内面はナデ調整であると考えられるが、器表の風化が激しくはっきりしない。97は口が大きく開いた鉢形のもので、内外面ともに丁寧なヘラミガキが施されている。98はやや深い鉢形のもので緩やかな丸底状を呈し、口縁部に向かって広がりながら、口縁直下で強く内弯する。内外面ともにヘラミガキが施されている。99、100は黒色処理が施されたもので、99は椀形で口縁部に向かい強く内弯する器形を成す。外面はヘラミガキが施され、内面はナデ調整であると考えられる。100は浅鉢形で内外面ともにヘラミガキが施されている。101から107は高坏、もしくは脚台付の鉢形の土師器で、ここでは一括して高坏として扱う。101は体部の屈曲部分に比較的明瞭な稜をもち、94や95などの坏に似る。図面では判然としないが、脚柱部との接合部近くでわずかに屈曲している箇所が確認できたため高坏と判断した。調整は内外面ともにヘラミガキを施している。102および103は、椀状の坏部をもち短い脚が付く高坏である。坏部は内外面ともにヘラミガキが施され、103の脚部は外面ヘラミガキ、内面工具によるナデ調整が施されている。104は高坏の脚部と坏部との接合部の破片で内面はヘラミガキ、外面は調整がはっきりしない。105および106は高坏の脚部で、105は内外面ともにヘラミガキを施している。106は、105より裾部の開きが小さく、外面にはヘラミガキが施される。107は高坏の脚

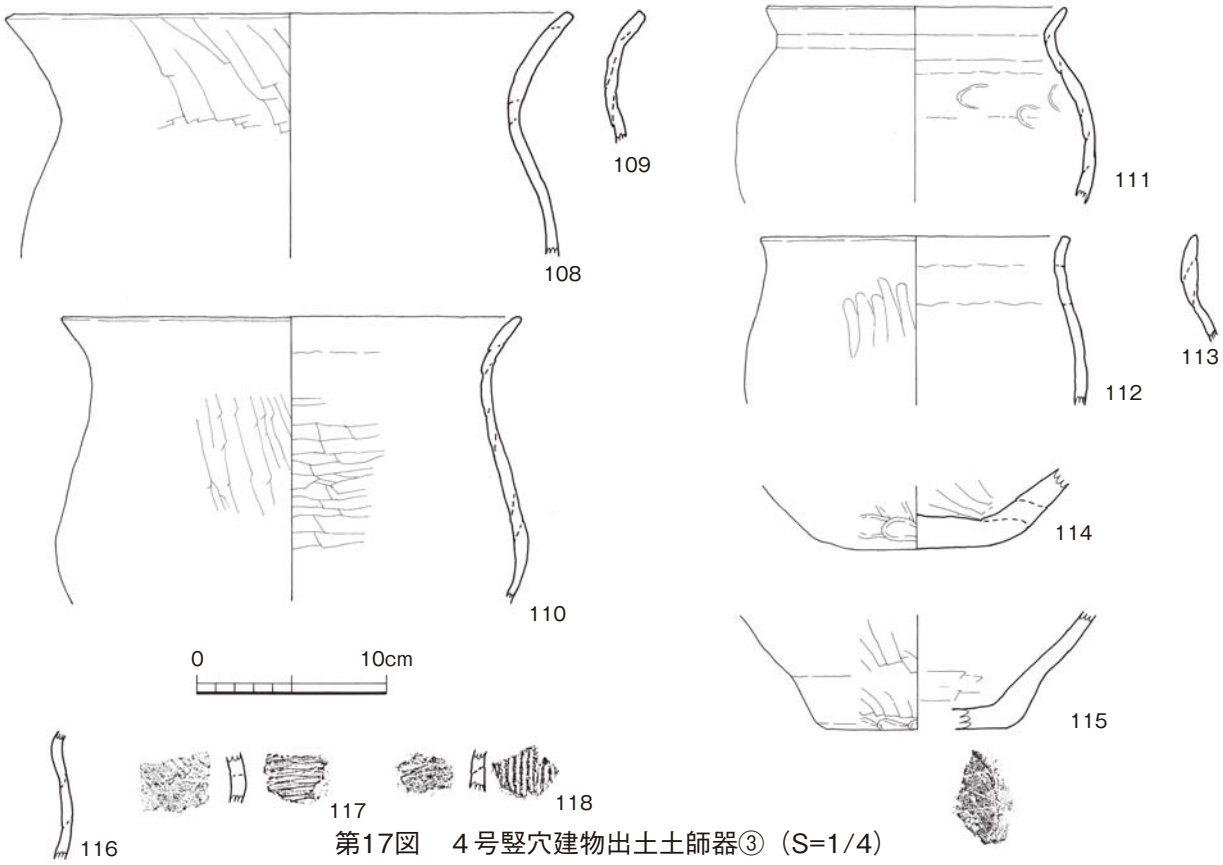


第15図　４号竪穴建物出土土師器①（S=1/4）



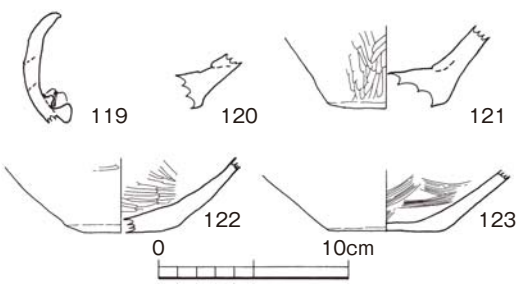
第16図　４号竪穴建物出土土師器②（S=1/4）

柱部で、二箇所に長方形の透かし孔が確認できる。須恵器を模したものかもしれない。108から118は甕で108、109、110はやや大型のもので111から113はやや小型のものである。111は球胴でやや開く口縁をもつ。 112と113は111に比べるとやや長胴になりそうで直口縁に近い形態をとる。114、115は甕の底部付近で、115は底部に葉脈痕が確認できる。116から118は体部の破片で、117、118には平行のタタキが確



第17図　４号竪穴建物出土土師器③（S=1/4）

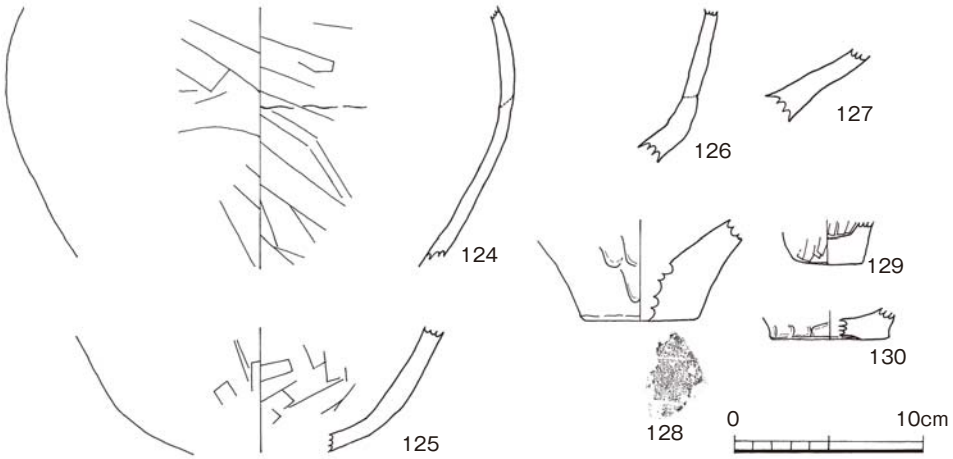
認できる。119から123は壺である。119は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、頸部には刻目突帯が巡る。120から123は壺の底部で、120と121はやや厚手の平底を呈す。120は内外面ともにナデ調整が施される。121は外面にヘラミガキが施され、120に比べやや丁寧なつくりである。122と123はやや薄手の平底で、122は内外面ともにヘラミガキ、123は外面にナデ、内面にハケメ調整がなされている。124から130は器種の識別が困難だった土師器である。124と125は甕、もしくは壺の胴部下半部で内外面とも工具によるナデが施されている。124はやや長胴で、125は球胴に近い形状を成す。126は甕または壺の底部付近の破片で、丸底状を呈するようである。内外面ともにナデを施されている。127は甕または壺の底部付近の破片で、球胴で平底気味の底部をもつようである。内外面ともにナデ調整が施される。128は甕、または壺の底部で、内外面ともにナデがほどこされている。平底で比較的丁寧なつくりである。底面には葉脈痕が確認できる。129は歪な平底の土師器で、器形は不明である。内外面ともにナデが施され、つくりはやや粗雑である。130はやや上げ底状の底部をもつ土師器で、ユビオサエによって底部をつくりだしている。内面はミガキが施されており、丁寧なつくりである。



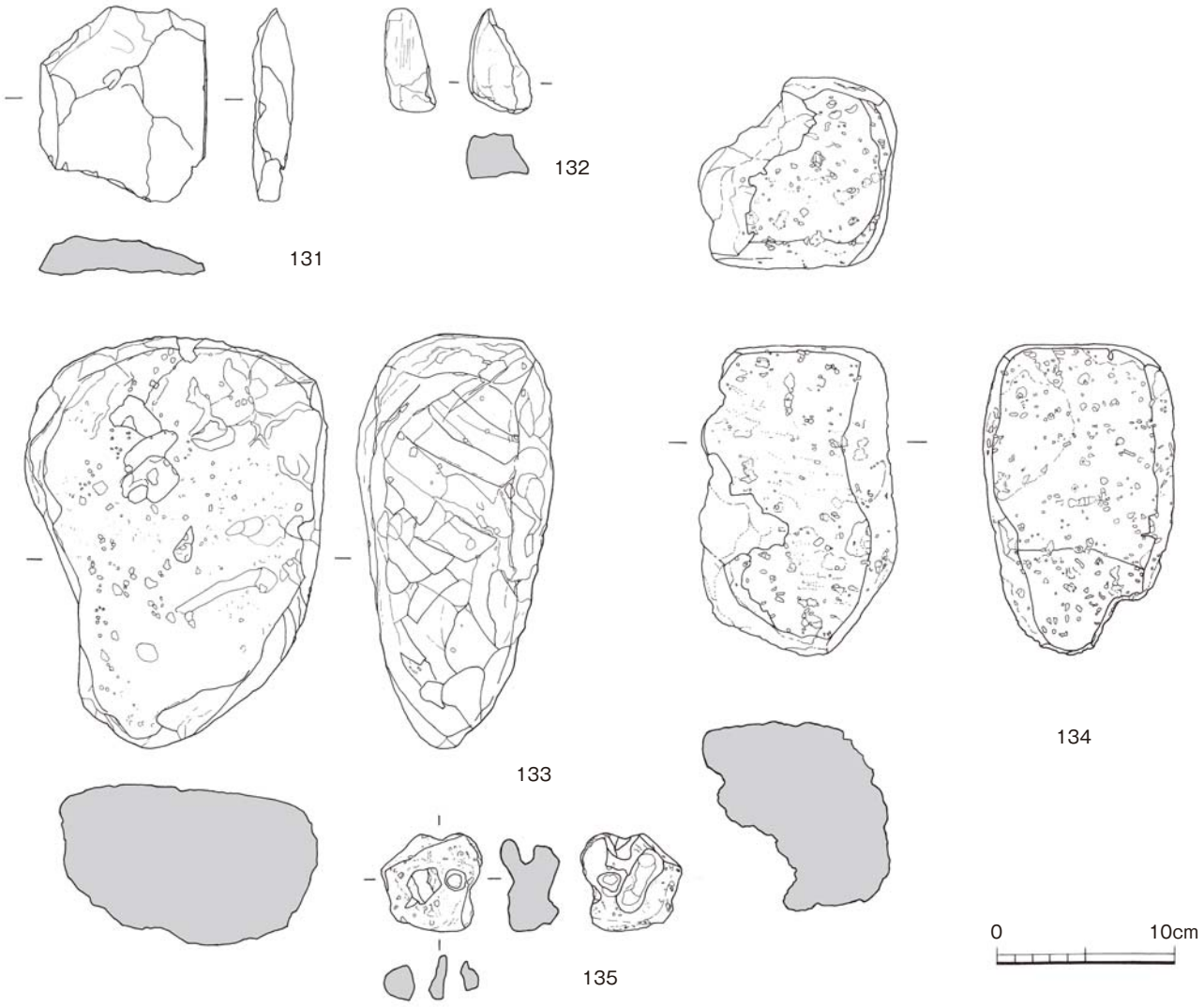
第18図　４号竪穴建物出土土師器④（S=1：4）

131から136は石製品である。131と132は砥石で、131は砂岩製で被熱して赤く変色している。大部分が欠損しており、

使用面は二面のみ確認できる。熱を受けたことで破損したのかもしれない。132はタフィサイト製のものである。破損が激しく元の形状を推定できないが、残存部は全体に丸みをおびており、限界まで使用されているようである。133から135は軽石の加工品である。133と134は面取りがしてあり直方体に近い形状に整形されていたようである。133には工具痕が確認できる面がある。133と134は、その形状からブロック状に積み上げられた何らかの構造物の一部と考えられるが、はっきりとはしない。135は軽石に穿孔されているもので、用途は不明である。



第19図　４号竪穴建物出土土師器⑤（S=1：4）

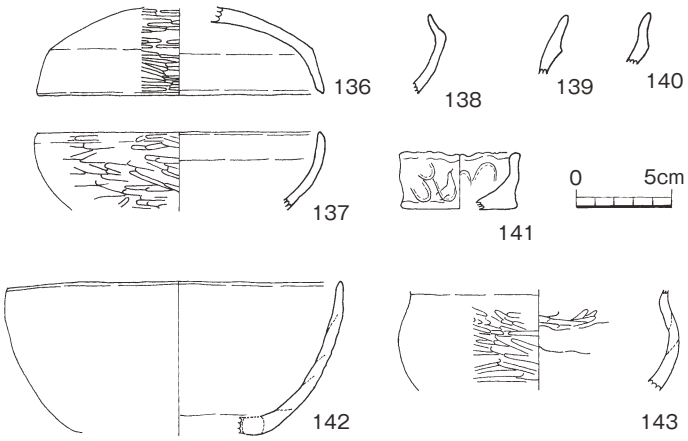


第20図　４号竪穴建物出土遺物（S=1：4）

（５）５号竪穴建物

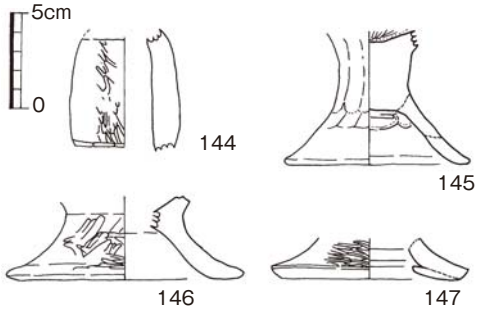
遺構【第７図】　１区Ａ地点の南寄りで確認された竪穴建物である。４号及び６号竪穴建物、加えて２号溝状遺構などに破壊されており、明確なプランは決定できないが、南北７ｍ、東西５ｍ程度の長方形プランになる可能性が高いと判断した。１号・４号と同様に事故による影響のため充分な調査が行えておらず、建物内部の施設等は不明である。

遺物【第21図～第25図・第126図】　1005から、1009は須恵器である。小片が多く確実に遺構に伴うものはない。

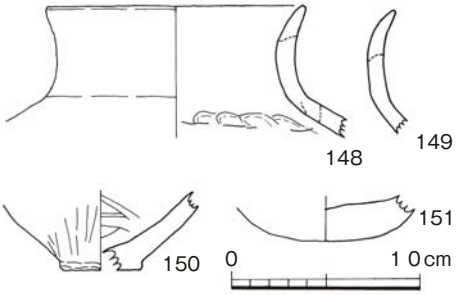


第21図　５号竪穴建物出土遺物①（S=1：4）

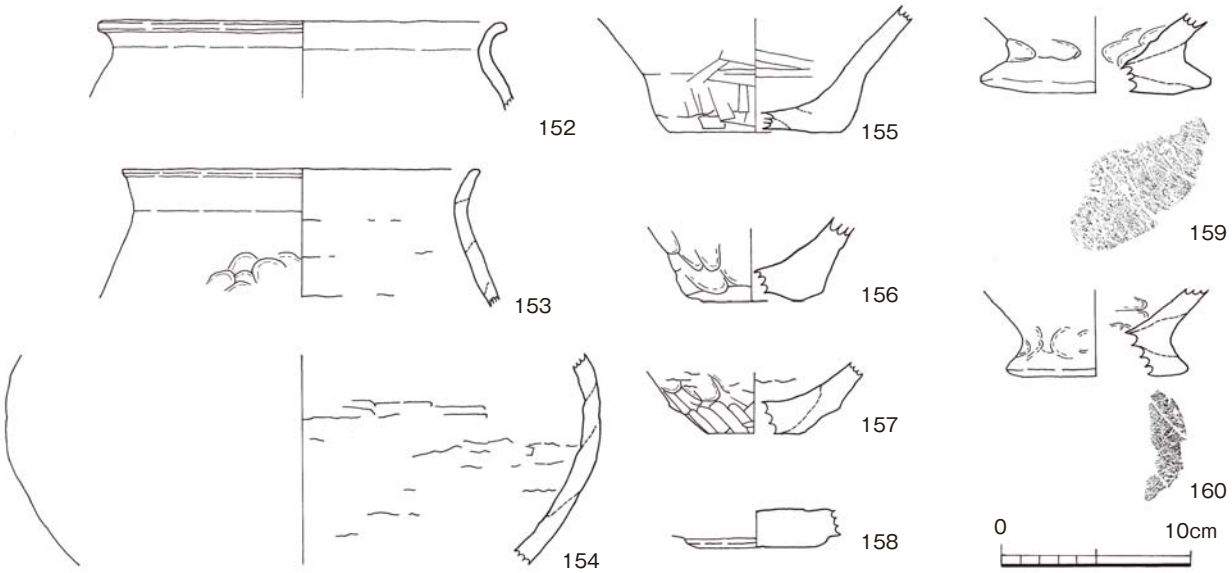
136から161は土師器である。136は坏蓋で内外面ともにヘラミガキが施されているが、内面は風化が激しく調整の単位を確定できない。137は椀形に口縁部が内弯する坏である。外面はヘラミガキが施され、内面はナデ調整されている。138から140は坏の口縁部と考えられる破片である。138は内外面ともヘラミガキが施されており、外面に黒斑が確認できる。139は外面ヘラミガキが施されているのがわかるが、内面の調整は器表が摩耗しており判然としない。外面には赤色顔料が一部残存しているのが確認できる。140は内外面ともにナデ調整が施されている。外面が黒く変色しており、あるいは黒色処理を施されていたのかもしれない。141は手捏ねで作られた小型の坏で用途ははっきりしない。142は鉢形の土器で、内外面ともにナデ調整を施しており、底部は粘土の接合部分で外れている。143は142に比較するとやや小型で内外面ともにヘラミガキされている。口縁部は欠損しており、残存最上部のやや下位に屈曲部が確認できる。144と145は高坏の脚部である。144は高坏の脚柱部でいわゆるエンタシス状にふくらむ。外面はヘラミガキが施されている。146と147は脚付鉢の脚部であろうか。146は内外面ともにナデ調整が施されている。147は外面にヘラミガキ、内面はヨコナデで調整されている。148から151は壺である。148は壺の口縁から肩部の部分で内外面ともに全体にナデ調整がされている。149は148と同様な壺の口縁部と考えられる破片である。150と151は壺の底部である。152から160は甕である。152は甕の口縁部で、内外面ともにナデ調整が施されている。153は甕の口縁部から体部の一部までの破片で152と同じく内外面ともにナデ調整が施されている。154は球胴の甕の胴部片である。155から158は甕の底部で、平底を成すものである。155は内外面ともに工具状のものでなでており、底部は若干上げ底気味になっている。156は内外面ともにナデ調整を施されており、特に外面についてはユビナデの痕跡がはっきりと確認できる。157は外面を工具状のもので内面を指でなでており外面については、工具の痕跡が強く残る粗い調整である。158は内外面ともに丁寧なナデが施され



第22図　５号竪穴建物出土遺物②（S=1：4）



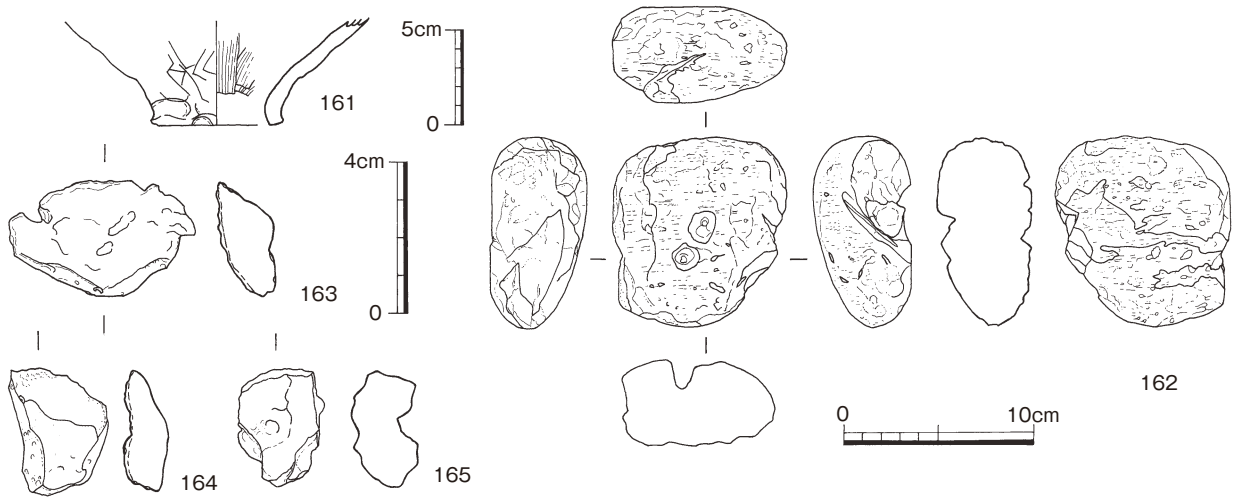
第23図　５号竪穴建物出土遺物③（S=1：4）



第24図　５号竪穴建物出土遺物④（S=1：4）

ている。159、160は円盤状を成す甕の底部である。159は調整も粗く、かなり脆弱な胎土である。底面には葉脈の痕跡が残っている。160は159に比べ丁寧なつくりで、外面の底部付近には指頭痕が確認できる。159同様、底面に葉脈痕が確認できる。161は甑の底部片である。筒抜け式の甑で、焼成はかなり良好である。外面には指頭痕が残り内面はハケメ状の調整が確認できる。

162は用途不明の軽石製品である。表面に貫通していない孔が二箇所穿たれている。163から165は鍛冶関連の遺物である。163と164は流動滓と考えられる。底面に砂粒が付着し、163は図面下部に164は図面左右及び下部に剥離した痕跡が確認できる。165は鉄塊系遺物と考えられる。磁性が強く、全体に赤錆をふいている。底面にやや発泡した部分が確認でき、鍛冶に際して生成されたことがわかる。



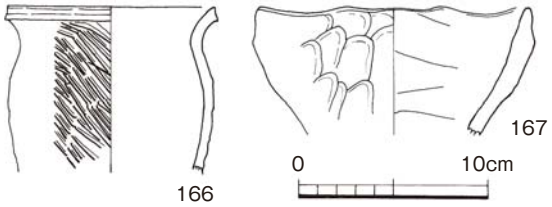
第25図　5号竪穴建物出土遺物⑤（161．162 S=1：4，163 ～ 165 S=1：2）

（６）６号竪穴建物

遺構【第７図】　１区Ａ地点南側で検出された竪穴建物である。４号・５号竪穴建物を掘削し、２号溝状遺構に一部が破壊されている。建物西側と南側は調査区から外れており形状は確定できないが一辺５ｍを超える大型の方形竪穴建物となる可能性が高い。建物内からは韓式系軟質土器（第27図166）が出土しているが、層位の確認等はできていないので、確実に供伴する遺物とは言い難い。北東角付近に焼土様の土が確認できており、竈などの火処があたった可能性がある。１号、４号、５号竪穴建物と同様

に事故の影響から充分な調査ができていないため、その他、内部施設等は不明である。

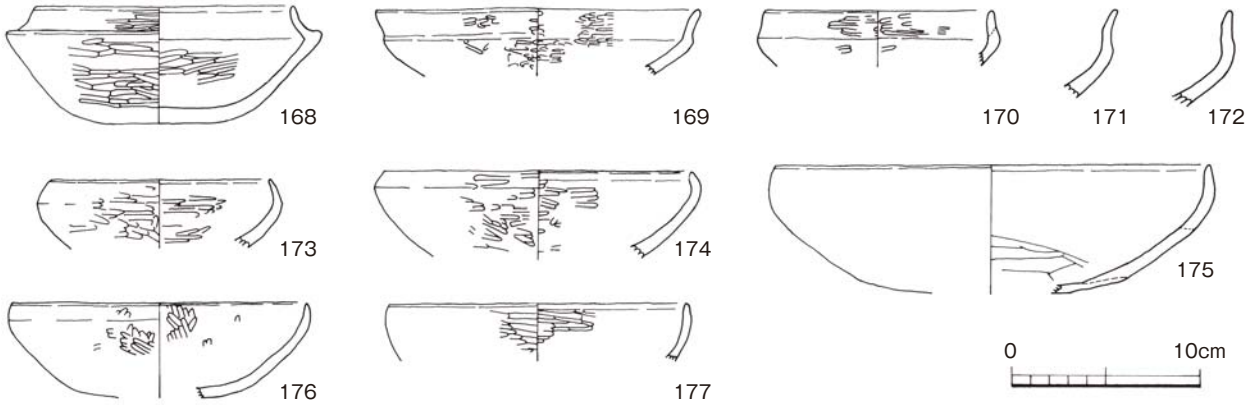
遺物【第26図～第32図・第126図】　1010から1012は須恵器である。５号竪穴同様、確実に遺構に伴う遺物と判断できない。



第26図　６号竪穴建物出土遺物①（S=1：4）

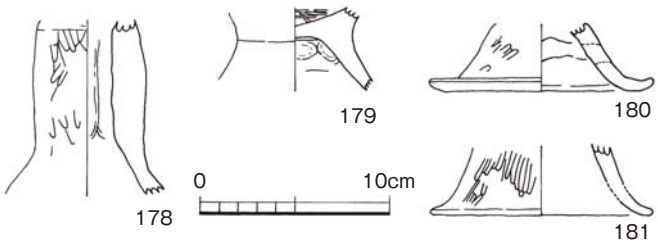
166は韓式系軟質土器の平底鉢と考えられる遺物である。外面には斜め方向の平行タタキが施され内面は丁寧になでられれている。韓国の金海礼安里古墳群第72号墳の出土遺物に大きさはやや小さいが酷似したものがある（釜山大學校博物館1985）。

167から190 は土師器である。167は土師器の鉢で、内外面ともに非常に粗いつくりをしており、特に外面はユビナデの痕跡が非常によく残る。168は須恵器模倣の坏で内外面ともにヘラミガキを施している。TK43型式あたりの坏身を模倣したものか。169から172は体部に稜を有する坏である。169は稜から口縁部に向かって外反し内外面ともにヘラミガキを施している。170から172は稜から口縁部に向かいやや内傾していくもので、いずれも内外面ともにヘラミガキが施される。173から177は体部中位から口縁部に向かい内弯する坏である。173は口径が11cm程度とやや小型のもので、175は口径が20cm強と大型のものである。その他の口径は16cm前後を測る中型のものである。中型、小型のものは内外面ともヘラミガキを施されているが、大型の175は内外面ともナデ調整を施されている。178から181は高坏である。

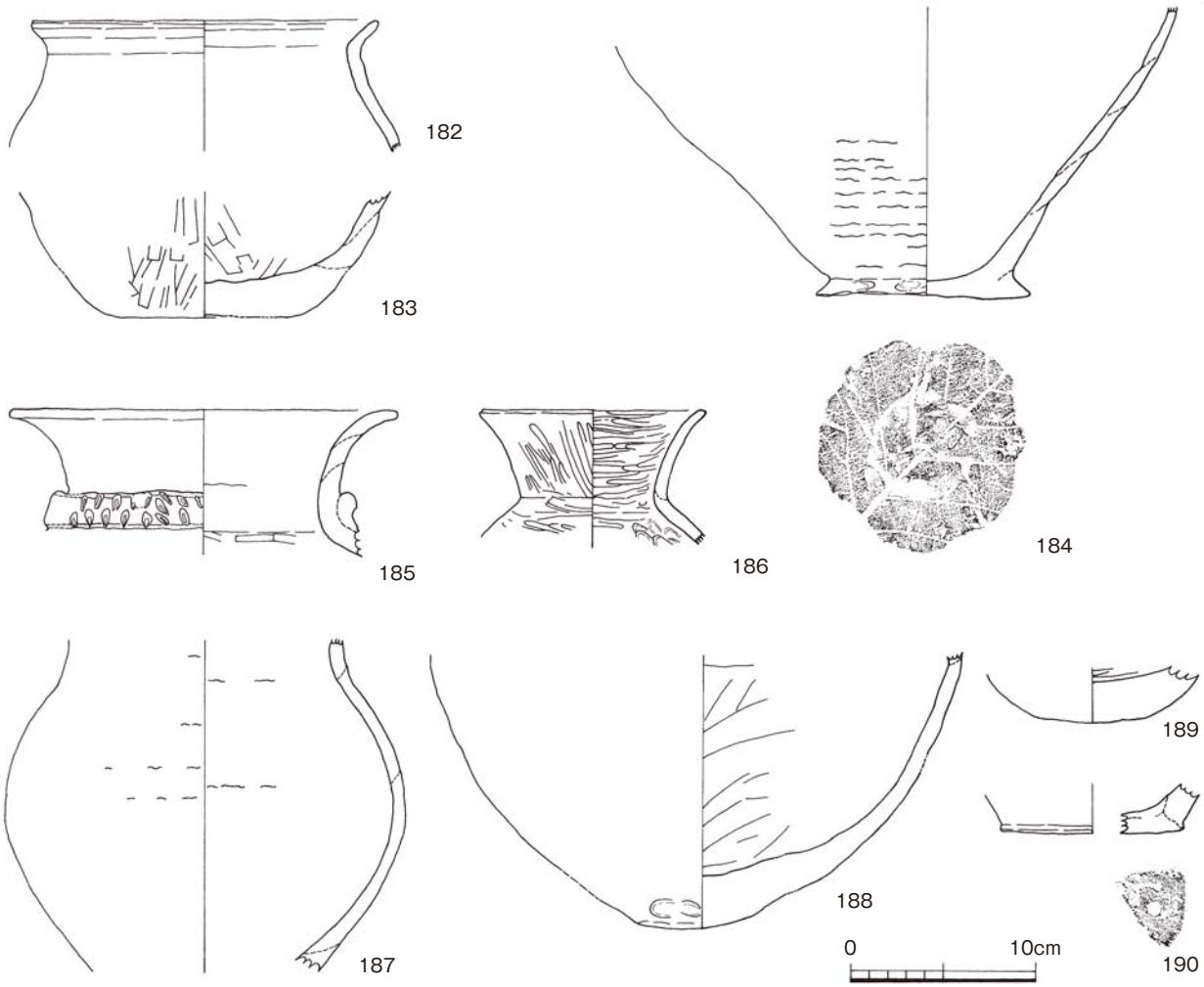


第27図　６号竪穴建物出土遺物②（S=1：4）

178は高坏の脚柱部で外面はヘラミガキ、内面はナデ調整が施される。179は高坏の坏と脚柱の接合部付近で、坏部内面にはヘラミガキ、外面はナデ調整が施される。180は高坏の脚部である。大きくラッパ状に開き外面にはヘラミガキが施される。181は高坏の脚部で180同様ラッパ状を成すが、比してやや開きが弱い。外面はヘラミガキが施されるが、内面は器表の風化が激しく調整は判然としない。 182から184は甕である。182は甕の口縁部から肩部付近までの破片で、内外面ともナデ調整で仕上げられる。球胴に近い長胴、もしくは胴部下半部に最大径がある甕になろうか。183は平底の甕の底部で内外面ともに工具によりナデ調整が施される。184は円盤状の底部をもつ甕で、粘土紐のつなぎ目を残す粗い仕上げではあるが、器壁の厚さは１cmを超える部分がほとんどないほど薄手である。円盤状の底部底面には葉脈痕が確認できる。調整は内外面ともにナデが施されている。

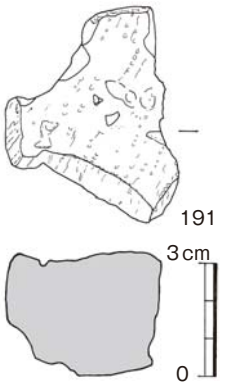


第28図　６号竪穴建物出土遺物③（S=1：4）



第29図　６号竪穴建物出土遺物④（S=1：4）

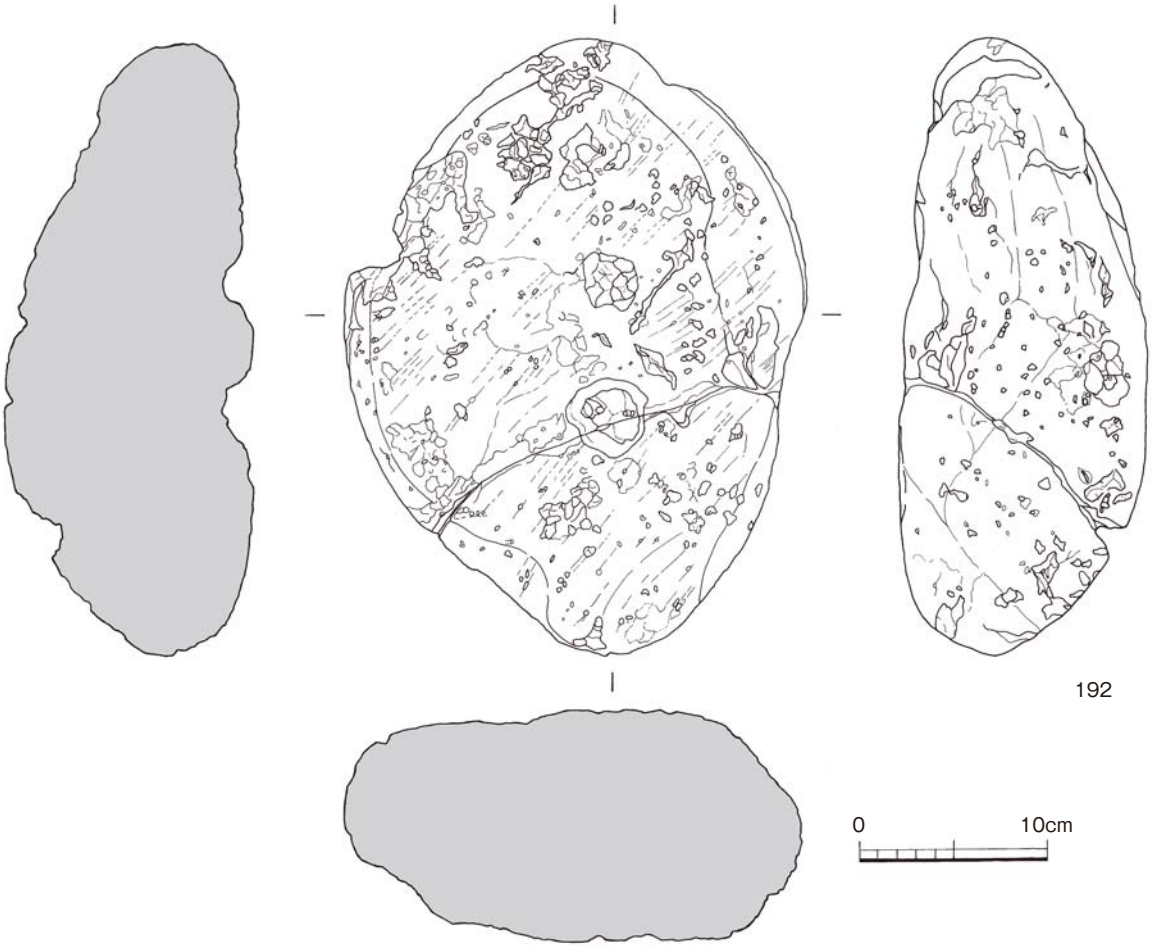
185から188は壺である。185は壺の口縁部から頸部にかけての破片で頸部には突帯が巡る。突帯はヘラ状の工具により上下２列を基本とし、互い違いに刺突されている。調整は内外面ともにナデで、一部、二次焼成を受けた痕跡が確認できる。186は壺の口縁部から肩部にかけての破片で、内外面ともにヘラミガキが施される非常に丁寧なつくりである。日常器物ではなく祭祀用のものと考えられる。187は壺の頸部から胴部で、内外面ともに丁寧なナデで仕上げられている。188は球胴の土器の底部で丸底を成す。胴部、底部の形状、内外面の調整の丁寧さから壺と判断した。調整は内外面ともにナデが施されている。189は壺、もしくは甕の底部で外面の調整は判然としないが、内面は工具を使いナデ調整を施している。190は壺、もしくは甕の底部で平底を成しており、底面には種子状の圧痕が確認できる。



第30図 6号竪穴建物出土遺物⑤ (S=1:2)

191と192は軽石製の遺物である。191は何らかの軽石製品の破片と考えられる。破壊されていない面が三箇所確認できその位置関係から製品の角に近い部分と考えられる。また、三面の内一面は赤色顔料が塗布された跡が残っている。軽石に赤色顔料が塗布されている例としては、大隅半島の地下式横穴墓内に設置された組み合わせの石棺を彷彿とさせるが、近辺で地下式横穴墓が確認できたという報告は、現状ではない。192は用途不明の軽石製品で、二箇所の窪み

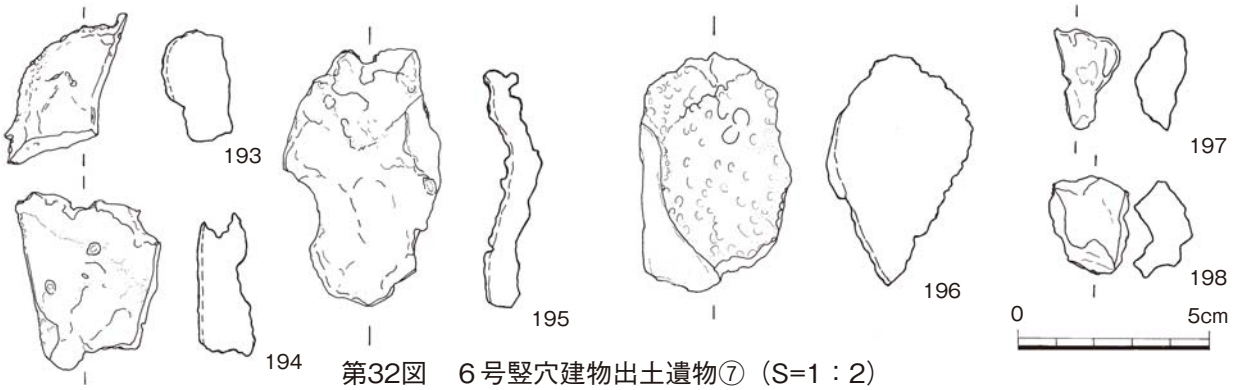
が確認できる面があり、何らかの作業台として使用された可能性が考えられる。また、面取りをしてい



第31図　６号竪穴建物出土遺物⑥（S=1：4）

る部分も確認でき、何らかの構造物の一部であったとも考えられる。

193から198は鍛冶関連の遺物である。193は椀形滓片と考えられ、図面右及び下の２面に剥離面が確認できる。194、195は流動滓で底面に砂粒が付着している。194には図面上端以外には剥離した痕跡が確認できる。196は炉壁と結合している部分が確認でき、全体に発泡し軽石状になっている。197、198は鉄塊系遺物で全体に赤錆をふいており弱い磁性をもつ。

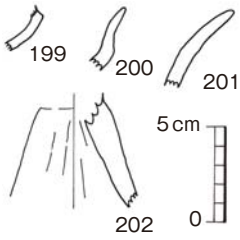


第32図　６号竪穴建物出土遺物⑦（S=1：2）

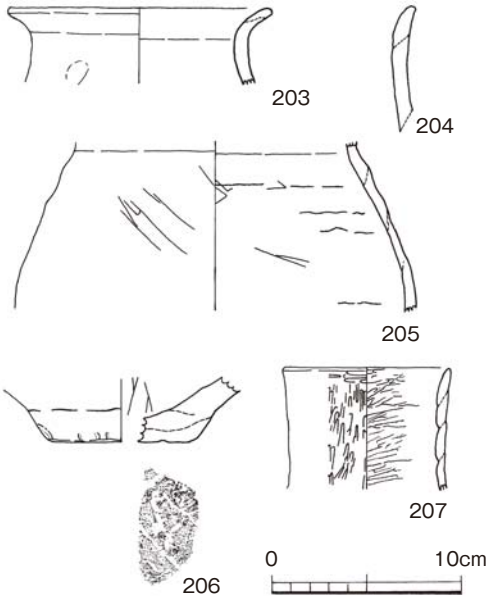
（７）１号溝状遺構

遺構【第７図】　１区Ａ地点の北側を東西に横切る幅１ｍ前後の溝状遺構である。１号竪穴建物に一部破壊され、その東側には延びていない。何らかの区画溝と考えられる。

遺物【第33図～第35図】　199から207は土師器である。199は土師器の坏で、立ちあがりの部分が欠落している。内外面ともにヘラミガキが施されている。須恵器の模倣坏と考えられる。200は体部途中で屈曲し口縁部に外反する坏である。内外面ともにヘラミガキが施されており、外面には黒色処理を施されたと考えられる痕跡が残る。201は高坏の口縁部と考えられる破片で、内外面ともにナデ調整が施されている。202は高坏の脚柱部で内外面ともにナデ調整で、坏部、及び裾部の剥離面が確認できる。203は小型の甕で内外ともにナデ調整が施されている。204は甕の口縁部付近の破片で、内外面ともにナデ調整が施されている。やや粗いつくりで、粘土紐のつなぎ目が確認できる。口縁部はあまり開かず直口縁に近い。205は甕で、頸部直下から胴部最大径部分までの破片で、内外面ともに工具を使ったナデ調整が施される。内面には粘土紐のつなぎ目が部分的に確認できる。器壁は薄く、確認できるはにでは５㎜前後である。206は甕の底部で平底をなす。底部付近には指頭痕が残り、底面には葉脈痕が確認できる。207は壺の口縁部から頸部にかけての破片で、内外面ともにヘラミガキが施される。内面には粘土紐のつなぎ目がはっきりと残り、やや粗いつくりの印象である。

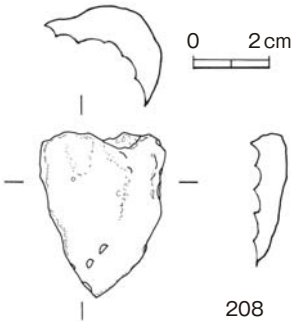


第33図 １号溝状遺構出土遺物①（S=1：4）



第34図 １号溝状遺構出土遺物②（S=1：4）

208は、外面が熱をうけ溶解しており、内面は比熱して赤変した胎土が確認できる。溶解の状況や、胎土の状況から鞴の羽口片と判断した。

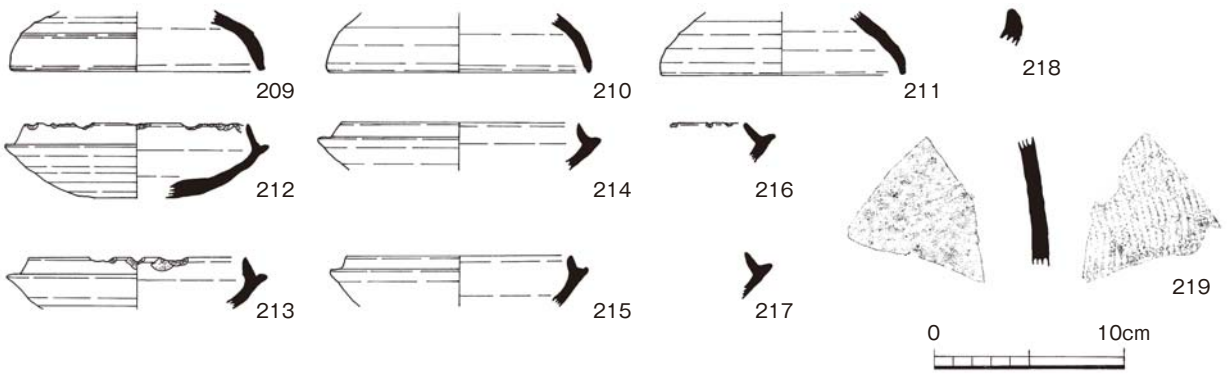


第35図 １号溝状遺構出土遺物③（S=1：2）

（８）２号溝状遺構

遺構【第７図】　１区Ａ地点の南東隅にほぼ直角に屈曲する形で検出された溝状遺構である。事故の影響で、詳細な調査は行えていない。出土遺物の大多数は古墳時代終末期前後のものであるが、中世のものと考えられる土師皿なども出土しており、遺構の時期ははっきりとしない。

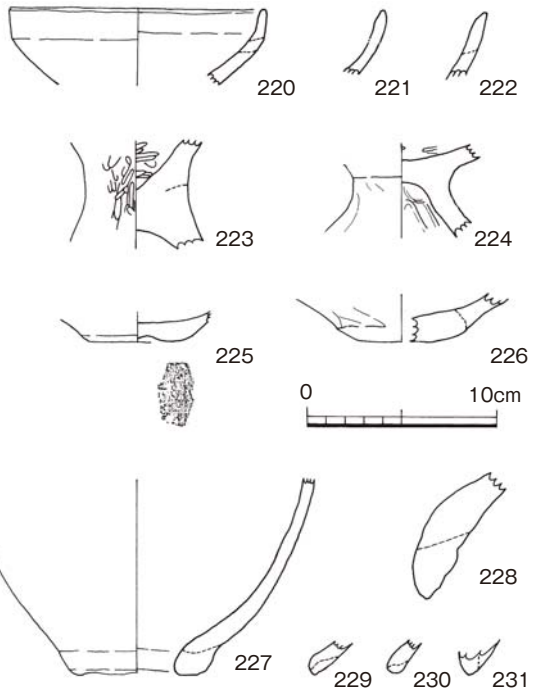
遺物【第36図～第40図】209から219は須恵器である。209から211は須恵器の蓋である。209には口縁部



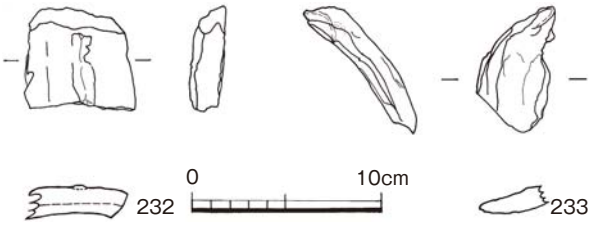
第36図　２号溝状遺構出土遺物①（S=1：4）

と天井部の境に明瞭な沈線が巡る。212から217は須恵器の坏身である。形状からはいずれも TK209型式に併行するものとみていいだろう。212、213、216については、口縁部に打ち欠いたような剥離痕が確認できる。人為的なものであるか判断しかねるが、口縁部の打ち欠きがなんらかの祭祀的行為を示しているとの指摘などもあり注意が必要であろう。218は甕の口縁部の一部で、肥厚した端部に櫛状の工具による刺突文が巡る。219は甕の体部の破片で、外面は格子のタタキが確認できる。内面にはわずかに同心円のアテ具痕が確認できるが、かなり丁寧にその痕跡をナデ消している。

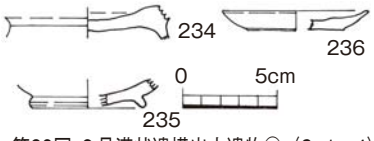
220から236は土師器である。220は坏の口縁から体部にかけての破片で、内外面とも器表の劣化が激しく調整等は不明である。221、222は坏の口縁部片で、内外面ともにヘラミガキが施されている。223、224は高坏の脚柱部で、223は内外面ともにヘラミガキの痕跡が確認でき、224は内外面ともにナデ調整が施されている。225は壺の底部で、調整は内外面ともにナデで、底面に葉脈痕が確認できる。226は壺の底部で、内外ともにナデ調整が施されている。227から231は甑で、全てが筒抜け式のものである。227は内外ともにナデ調整が施され、比較的丁寧なつくりで器壁も薄い。228は器表の劣化が激しく、調整等は判然としない。また、胎土も脆く非常に粗いつくりである。229から231は甑の蒸気孔部分の小片である。232は竈形土器の焚き口部分の破片で、庇が剥離した痕跡が確認できる。233は竈形土器の庇部分の破片で、焚き口の右側にとりつく部分である。234、235は須恵器模倣の坏で、形状から８世紀前後のものではないかと考えられる。236は土師皿で中世の遺物であると考えられる。



第37図　２号溝状遺構出土遺物②（S=1：4）



第38図　２号溝状遺構出土遺物③（S=1：4）

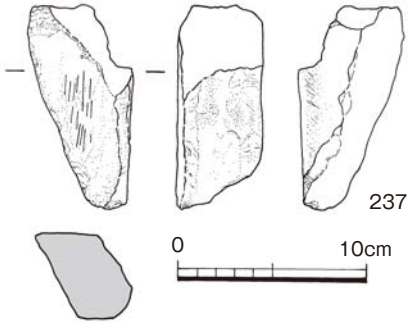


第39図 ２号溝状遺構出土遺物④（S=1：4）

237は砂岩製の砥石である。３面に擦り面が確認できその他の面は欠損している。

（９）１号道状遺構

遺構【第７図】　１区Ａ地点で、１号竪穴建物と３号竪穴建物を北東側から南西に向かい横切る遺構である。平面上では硬化面が確認されており、土層断面では掘方が確認できた。高原スコリアを含む中世の包含層に被覆されており、スコリア降下時には埋没して機能していなかった可能性が高い。道幅も狭く、周辺住民の生活道路程度の機能を果たしたに過ぎないと考えられる。



第40図　２号溝状遺構出土遺物⑤（S=1：4）

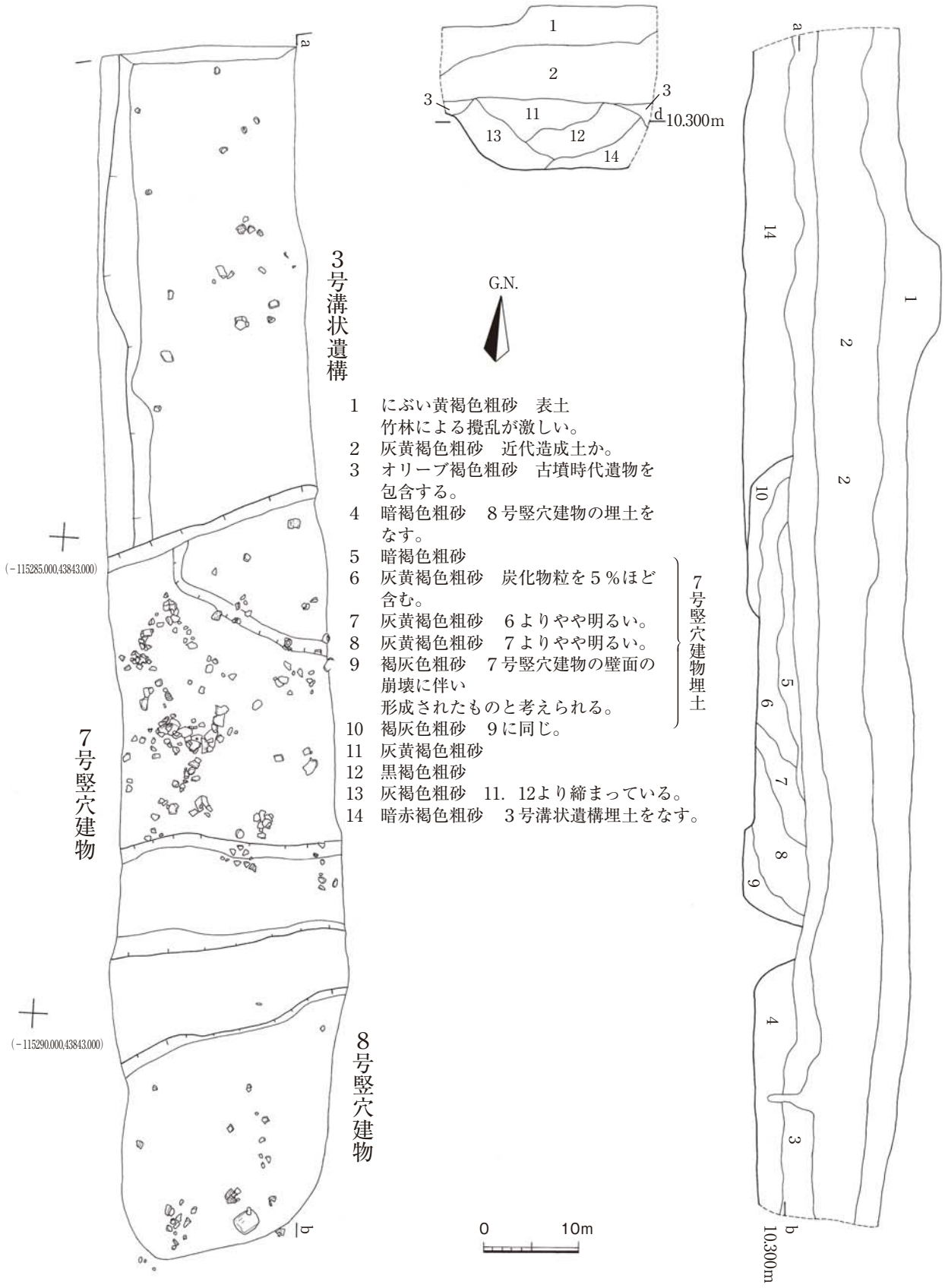
2　１区Ｂ地点【第41図】

１区のＡ地点とＣ地点の間で遺構の集中する地点である。竪穴建物２軒、溝状遺構１条が確認された。遺構検出は、現地表面から約130cmから150cmほど下位で行った。Ｂ地点は調査対象範囲が非常に限られており、幅は２ｍ前後、総延長12.5m程度のトレンチ状の調査区である。従って、検出された遺構で全容が判明しているものはない。

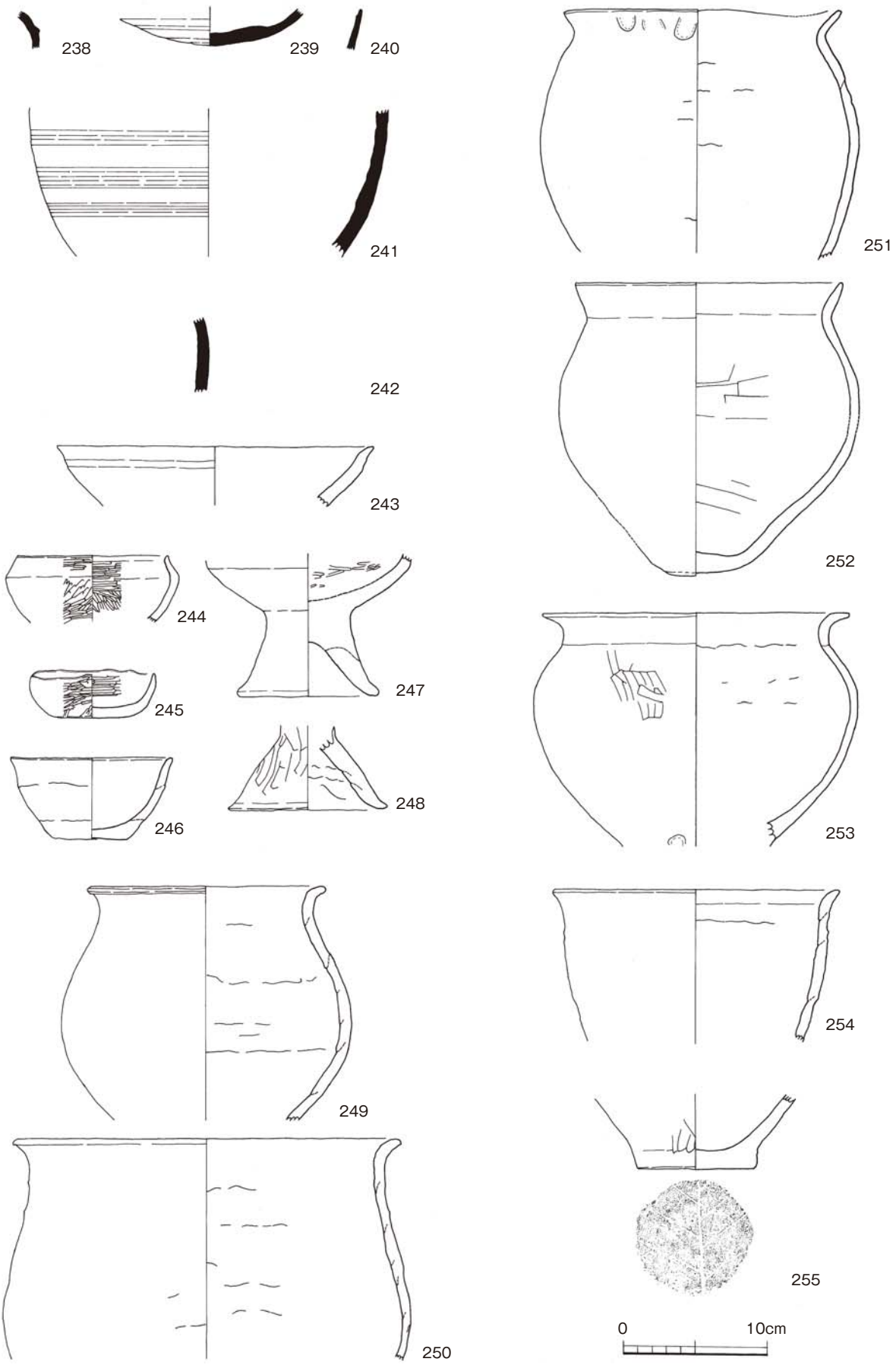
（１）７号竪穴建物

遺構【第41図】　１区Ｂ地点のほぼ中央部分で確認された竪穴建物である。建物の全域は確認されていないが、検出状況から一辺４ｍ前後の方形の建物になると想定した。床面は南壁際と北東隅が一段低くなっている。中央床面に張り付くように遺物が集中し、柱穴、壁溝、貼床、竈などの内部施設は確認できていない。

遺物【第42図～第43図】　238から242は須恵器である。238は坏蓋で突出部が強い。239は坏の底部付近で外面は回転ナデおよび回転ヘラケズリ、内面は回転ナデ調整が施される。240は高坏の口縁部と考えられる破片である。櫛描波状文などの施文は施されていない。241は甕の胴部の破片で外面は平行タタキを施した後、カキメ、内面は同心円のアテ具痕が残る。242は甕の体部の破片で、外面に格子タタキが施され、内面には同心円のアテ具痕が残っている。



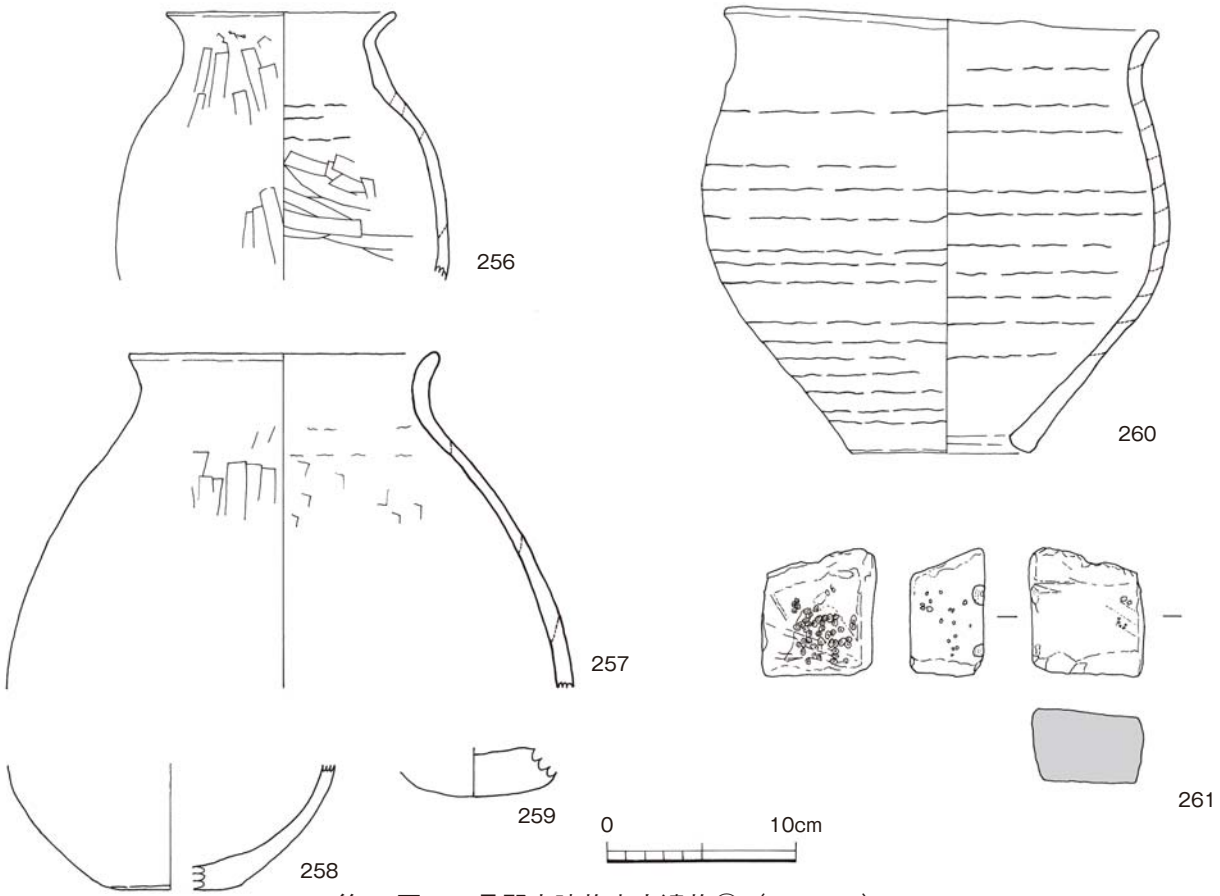
第41図　1区B地点遺構分布図及び土層断面図（S=1：60）



第42図　７号竪穴建物出土遺物①（S=1：4）

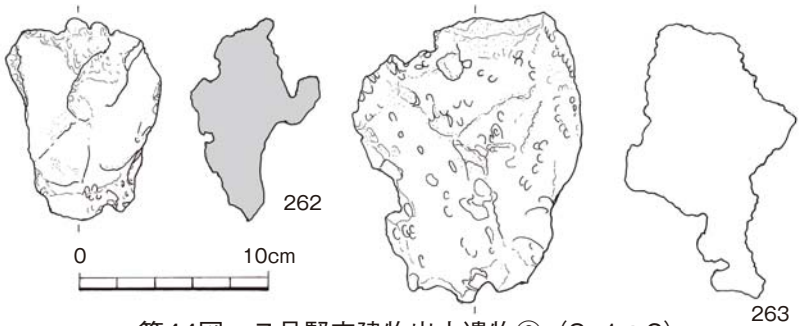
243から260は土師器である。243は坏で口縁部が大きく開く。内外面ともにナデ調整が施される。244は坏で、胴部でくの字に屈曲し口縁部にいたる。内外面ともにヘラミガキが施される丁寧なつくりである。245は小型の坏で、内外面ともにヘラミガキが施されているが、口縁部が歪んでおり一見して粗いつくりにみえる。口縁部は部分的に欠けており、あるいは人為的な打ち欠きかもしれない。246はやや深めの小型の坏で、内外面ともにナデが施され、口縁部はやや外反する。247は高坏で、口縁部を欠いている。調整はナデを基本とし、坏部内面にはヘラミガキが施される。248は高坏の脚部で内外面ともにナデ調整が施されている。249は甕である。胴部途中に最大径がある球胴を成し、調整は内外ともにナデが施される。250は甕で、最大径が胴部のやや下方にあり口径とほぼ同じとなる。調整は、内外面ともにナデを施す。251は胴部中位に最大径がある甕で、内外面ともにナデが施されている。粘土紐のつなぎ目が確認でき口縁部も歪むなどつくりはかなり粗い。252は胴部中位よりやや上方に最大径のある甕で、内外面ともにナデ調整が施される。底部はやや丸底ぎみの平底をなす。253は甕で、胴部の上方に最大径があり、底部に向かい急激に収束する。内外面ともナデが施される。254は広口の甕で、内外面ともにナデが施されるが粘土紐のつなぎ目が残る粗いつくりである。255は、甕の底部で、内外面ともにナデが施され、底面には葉脈痕が残る。256は壺で、内外面ともにナデ調整が施される。257は壺で内外面ともにナデ調整が施される。258は甕の底部で平底を成し、内外面ともにナデ調整を施されている。259は甕、もしくは壺の底部で丸底を成す。260は甑で、内外面ともにナデ調整が施されている。粘土紐のつなぎ目が明確に確認できる非常に粗いつくりである。

261は材質は砂岩製製の砥石である。３面に使用痕が確認でき、残りの３面については欠損している。使用痕が確認できる面には赤錆が付着しており、鋭利な深い傷が一部に確認できることから、鉄製の利



第43図　７号竪穴建物出土遺物②（S=1：4）

器を研磨したものと考えられる。また、敲打したような痕跡も確認でき、表面は被熱して赤変しているなど鍛冶関連に使用された可能性も考えられる。



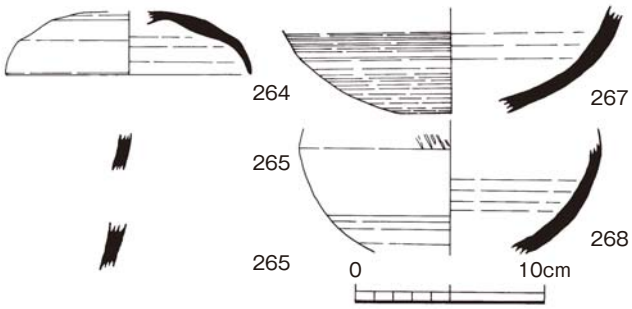
第44図　７号竪穴建物出土遺物③（S=1：2）

262と263は鉄滓である。262は椀型滓と考えられる破片で、上面はアメ状になっており、底面は発泡している。263は全体に発泡している鉱滓で、発泡の状態は非常に激しい。

（２）８号竪穴建物跡

遺構【第40図】　１区Ｂ地点の南端で確認された竪穴建物である。建物のごく一部しか検出されておらず全容は詳らかにできない。建物の中央付近と考えられる部分に遺物が比較的集中しており、用途不明の軽石加工製品なども出土している。柱穴、壁溝、貼床、竈などの内部施設は確認できていない。

遺物【第43図～第46図】　264から268は須恵器である。264は坏蓋の破片で、口径や形状からTK10型式に併行するものと考えられる。265と266は甕の体部片で、外面は格子のタタキ、内面は同心円のアテ具痕が残る。267は壺の底部付近と考えられる破片で、外面にカキメが施されている。268は壺の体部と考えられる破片で、屈曲部に刻目が巡る。形状と施文から脚付の長頸壺と考えられる。



第45図　８号竪穴建物出土遺物①（S=1：4）

269から280は土師器である。269は須恵器を模倣した坏で内外面ともにヘラミガキが施されている。270は坏で調整は内外面ともにヘラミガキである。271は高坏の坏部から脚部にかけての破片で、坏部内面はヘラミガキが施されている。272、273は甕形土器の口縁から胴部、274は底部と考えられる。272は口縁部に最大径があり、内外面ともに板状の工具でナデ調整が施されている。273は胴部に最大径があるもので、同様に内外面ともにナデ調整が施されている。274は底面には葉脈痕が確認できる。275は壺形土器の底部で葉脈痕が確認できる。276から278は甑の底部片で、すべて蒸気孔に向かって窄まっていく形状のものである。小片であり径の復元等は困難であり、桟の有無などは不明である。279、280は竈形土器である。279は掛口部分の破片で、一見、甕形土器のようであるが、調整や形状、粘土の接合状況から竈形土器と判断した。280は焚口の一部の破片である。

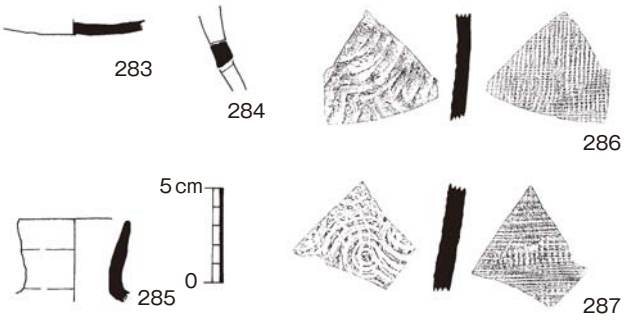
281は砂岩の岩片で、全体に赤変しており一面には敲打された痕跡が密に残る。鉄床石や槌として鍛冶関連の作業に使用されたものと考えられる。282は軽石を加工したもので、用途は不明である。面取りがされており、やや歪であるが箱形に加工されている。なんらかの屋内施設を構成するブロック状の素材であったとも考えられる。

第46図　８号竪穴建物出土遺物②（S=1：4）

（３）３号溝状遺構

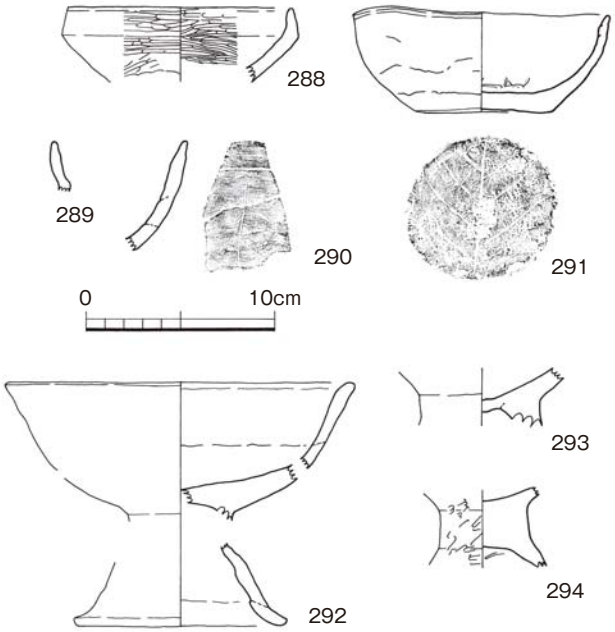
遺構【第40図】　１区Ｂ地点を南北に縦断する溝状遺構で、南側は７号及び８号竪穴建物に破壊されている。北側については、２号溝状遺構に接続する可能性もあるが、やや西にぶれており別遺構と判断した。検出面での幅は２ｍ弱となりそうであるが、調査区が狭くはっきりしない。深さは検出面から70㎝程度で、土層断面の観察からは古墳時代の包含層直下から掘削されていることが確認できる。また、７号、８号竪穴建物より先行することは土層断面からも確認できたが、出土遺物からは大きな時期差は確認できない。

遺物【第47図～52図】　283から285は須恵器である。283は坏の底部で、底面にヘラ記号が確認できる。284は高坏、もしくは器台の脚柱部で透かし部分が確認できる。285は壺形土器の口縁部か頸部にかけての破片である。形状からは提瓶などの口縁であった可能性も考えられる。286と287はともに甕の体部の破片で、外面に格子目タタキ、内面に同心円の当て具痕跡が残る。



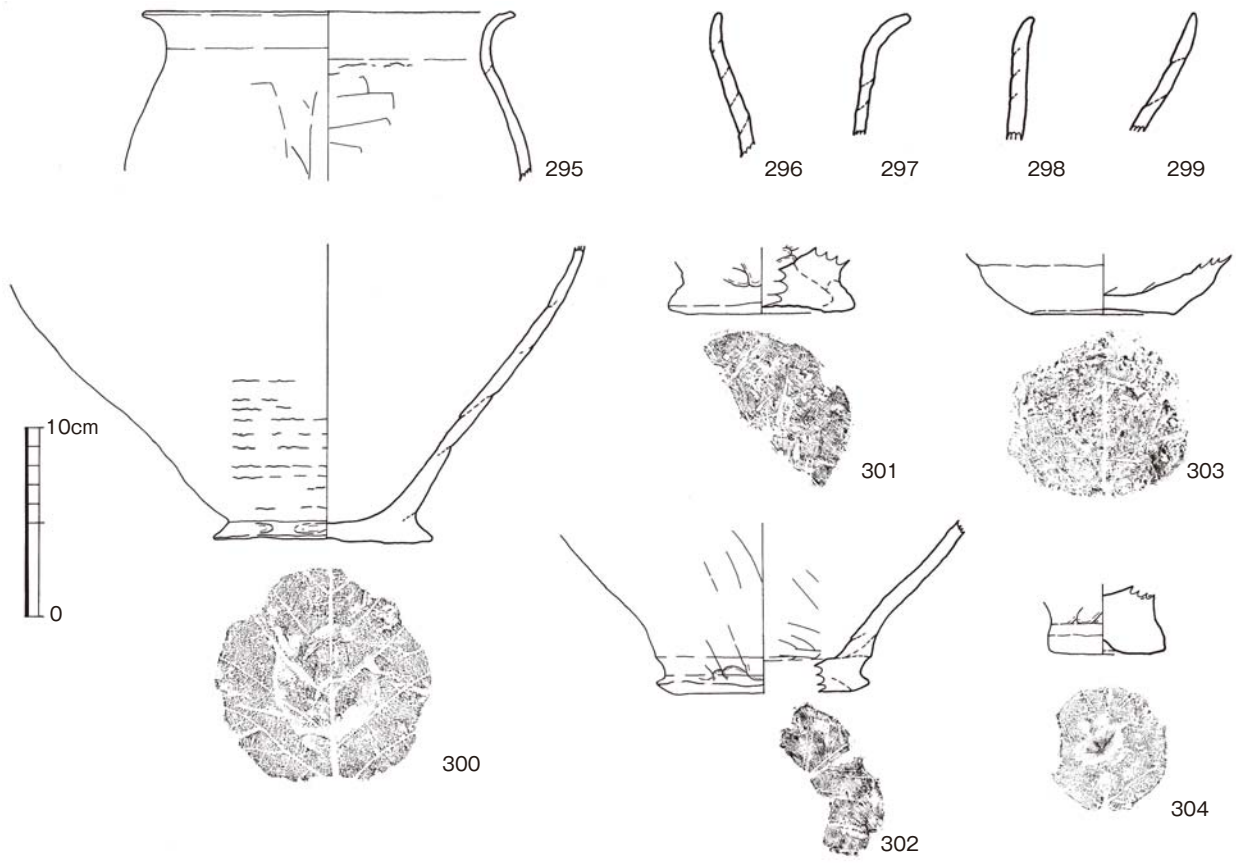
第47図　３号溝状遺構出土遺物①（S=1：4）

288から308は土師器である。288から291は坏で、288、289は体部に屈曲部があるタイプのもので、内外面ともにヘラミガキが施され、丁寧な作りである。288は表面に赤色顔料が塗布してある。胎土は砂礫の混入が少ない精良なものである。289に関しては、口縁部屈曲部の形状から須恵器の模倣である可能性がある。胎土は288同様、比較的精良である。290、291はやや内湾気味に口縁部に達するもので粘土紐のつなぎ目が確認できるなど、比較的雑な作りである。290は外面にヘラ記号が残る。胎土については砂礫の混和が少なく精良である。291は胎土が非常に粗く、砂礫が相当量混和されている。また、底部に枝葉痕が確認できる。292から294は高坏である。292は口縁部、坏部底、脚部に分離しており接点は確認できていないが、胎土、形状などから同一個体と判断した。調整は内外面ともに風化の度合いが激しくはっきりしないが、少なくとも内面にはヘラミガキが施されていたようである。粘土紐のつなぎ目が確認できるなど、作りはやや雑な印象がある。胎土は砂礫の混入がほとんどみられず、精良である。293及び294は坏部から脚柱部にかけての破片である。293は内外面ともに、ナデにより調整されている。胎土は比較的精良である。294は坏部内面については摩耗が激しくはっきりしないが、内外面ともにヘラミガキが施されていることがわかる。胎土は混入する砂礫が比較的多くやや粗い。295から304は甕である。295は球胴で口縁部が開くもので、内外面ともに工具を使ったナデ調整が行われている。一部粘土紐のつなぎ目が確認できる。胎土は比較的混和剤が少なく精良な印象を受ける。296は、



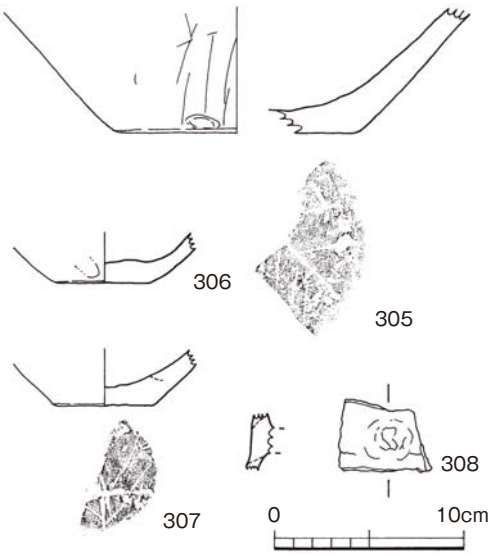
第48図　３号溝状遺構出土遺物②（S=1：4）

口縁部が窄まっていくもので、内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は礫の混和が多く粗い。297は直線的な胴部から、口縁端部に向かい急に開くもので、内外面ともにナデ調整が行われている。礫などの混和剤がほとんどられれず精良な胎土である。298は胴部から直線的に口縁部まで達するもので、粘土紐のつなぎ目が残る雑な作りの土器である。胎土は礫が大量に混和されており、非常に粗い。299は胴部からやや内湾しながら口縁部に向かって広がっていくもので、298と同様にかなり雑な作りをしている。胎土については混和剤があまりみられず、精良な印象を受ける。なお、296から299はいずれも破片の残存が少なく、径の復元などはできなかった。300は胴部から底部にかけての部分で、薄手であるが、粘土紐のつなぎ目が目立つ荒い作りである。底部は円盤状の平底がつくり出されており、底面には枝葉痕が確認できる。296から300の甕は、いずれも薄手であるが、表面の調整などは一様に雑である。301は底部で、底面に枝葉痕が残る。胎土は砂礫が多く混和されておりかなり粗い。302は体部から底部の破片で、底面には枝葉痕が確認できる。301同様、混和される砂礫が多く胎土は粗い。303は底部付近の破片である。やや上げ底気味の平底で、底面には枝葉痕が確認できる。胎土は礫を多く含む粗いものである。304は脚柱状の甕の底部と考えられる破片で、中央に指で押さえたような凹みがある。底面には枝葉痕が確認できる。胎土に含まれる砂礫は多くなく、比較的精良な印象を受ける。甕の底部はいずれも平底で、全てに枝葉痕が確認できるのが特徴的である。調整の粗さに反し、器壁がかなり薄手であることも印象的である。305から307は壺である。305は平底の壺で、外面は工具を使用したナデ調整が施されている。



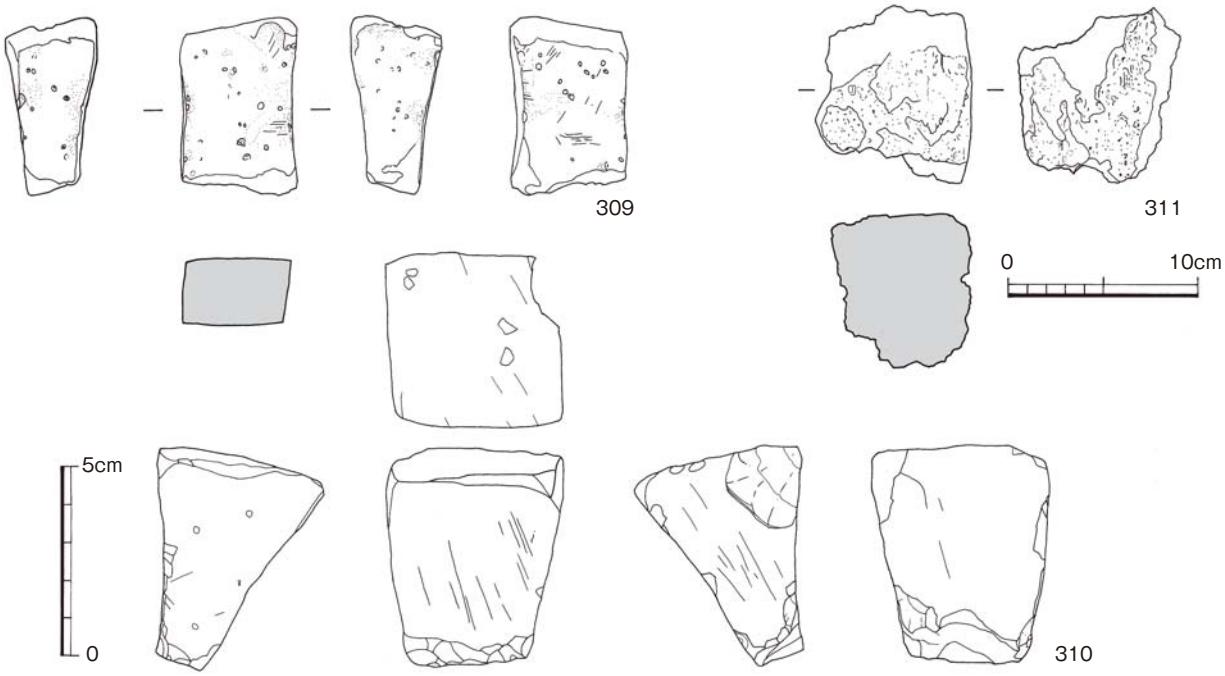
第49図　３号溝状遺構出土遺物③（S=1：4）

胎土は、礫の混和がやや目立つ。底面には枝葉痕が確認できる。306は平底の壺で、305に比較して小型のものである。胎土は混和剤があまり観察できず、比較的精良である。内外面ともにナデ調整が施されている。306は305と同様の小型、平底の壺である。内外面ともにナデ調整が施され、底部裏面には枝葉痕が確認できる。胎土には砂礫がある程度混ざる。307は土師器の小片で、なんらかの突起物が器表から脱落している状態が観察できる。器壁の厚さ、大きさ、形状などから牛角状の把手が付いた鉢であると判断した。内外面ともに丁寧にナデ調整され、胎土には混和剤をほとんど含まない。牛角状の突起をもった鉢については、少なくとも日向では定着した土器型式とは言いがたいので、外来系の土器である可能性も考える必要があろう。



第50図　３号溝状遺構出土遺物④（S=1：4）

309から311は石製品である。309はいわゆる天草砥石と考えられるもので表面に擦痕が残る。部分的に酸化鉄様の赤変した箇所があり、金属を研磨したことがわかる。残存の形状から、半分ほど欠損していることが推定される。310は309よりもやや大型の砥石で、石材は309と同様天草砥石ではないかと考えられる。表面には擦痕が残り、半分ほどを欠損している。311は軽石の用途不明品である。残存部分に表面を加工し面取りをした形跡がうかがわれ、なんらかの施設を組んだブロック状の材であった可能性も考えられる。



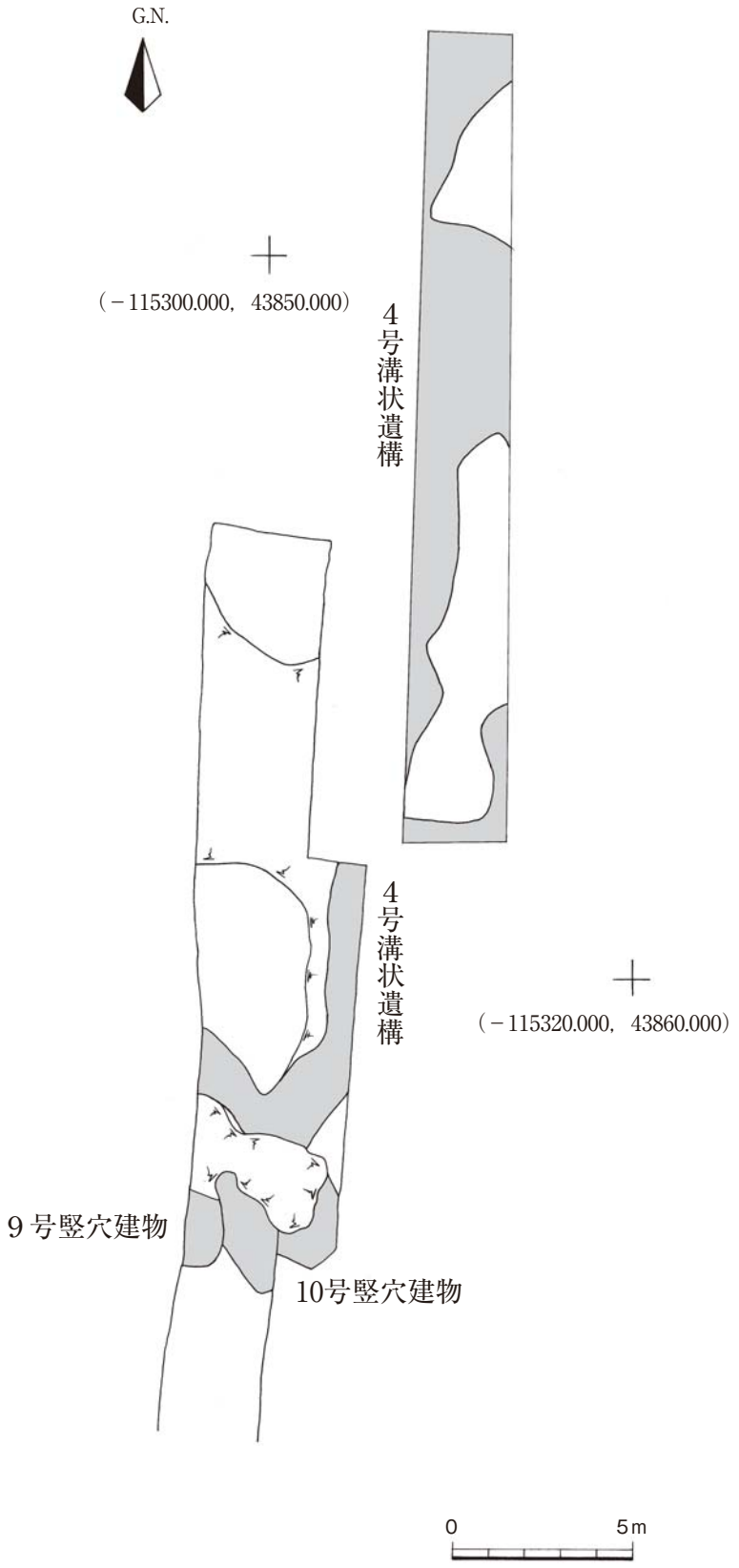
第51図　３号溝状遺構出土遺物⑤（298・299 S=1：2，300 S=1：4）

3　１区Ｃ地点【第52図】

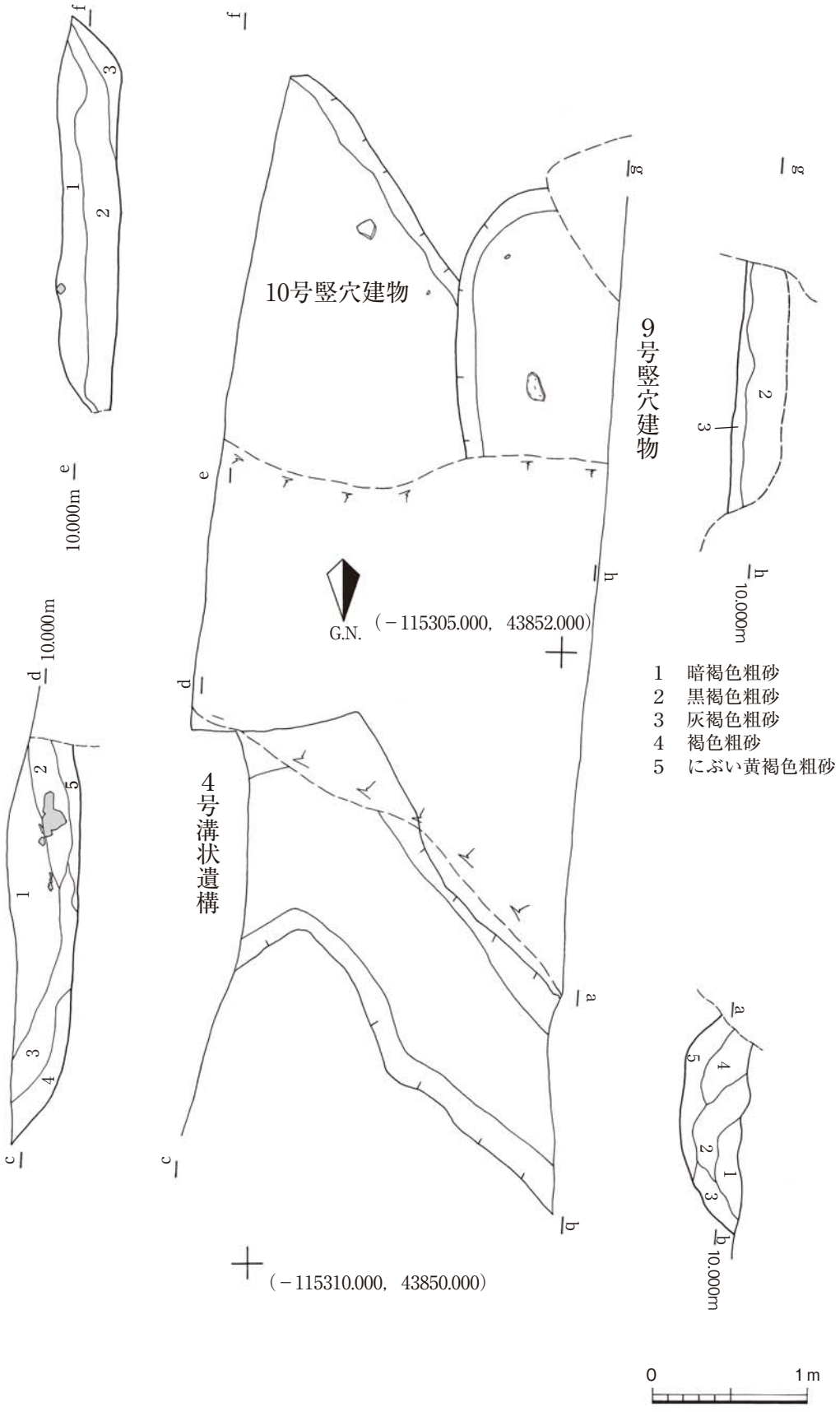
１区Ｃ地点では、竪穴建物跡２軒、溝状遺構１条が確認されている。Ｃ地点のほぼ中央部分は、後世の攪乱を受けており、全ての遺構が一部破壊されている。竪穴建物２軒は重複しており、北側については攪乱により破壊されている。溝状遺構は、拡張部分にものびており、いくつかに枝分かれし、格子状になるようにみえる。何らかの区画をなすと思われるが、拡張部分については、先述した事故の影響により遺構の範囲確認と遺物の採集に止まっており遺構の詳細は明らかでない。なお、採集された遺物には龍泉窯系の青磁碗片がある。

（１）９号竪穴建物

遺構【第53図】　９号竪穴建物は、調査区の西壁に接して南東側の角が検出されている。10号竪穴建物と重複しており、10号竪穴建物の一部を破壊している。検出の状態から、主軸がほぼ南北に平行する方形の竪穴建物と考えられるが、検出部分がごく一部であり規模、形状などは判断しかねる。また、前述したとおり近現代の攪乱により、遺構のかなりの部分が破壊されている。以上のように、調査で得られる情報は非常に限られている。



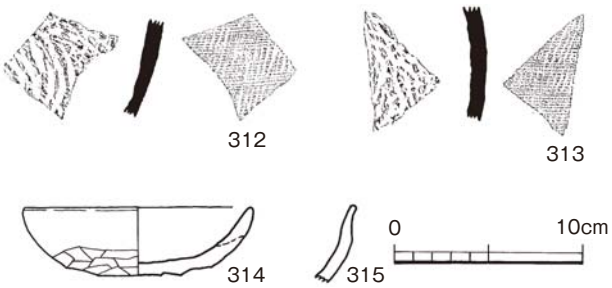
第52図　1区C地点遺構分布図（S=1：200）



第53図　1区C地点遺構平面図（S=1：40）

遺物【第54図】　312から313は須恵器である。２点ともに甕の胴部片で、外面に平行タタキ、内面に同心円のあて具痕が確認できる。

314から323は土師器である。314と315は坏である。314は底部付近に静止ヘラケズリが施されている。胎土は礫の混入がやや目立つ。315は坏の口縁部から大部にかけての破片で、残存部が少なく、口縁径などの復元が行えなかった。



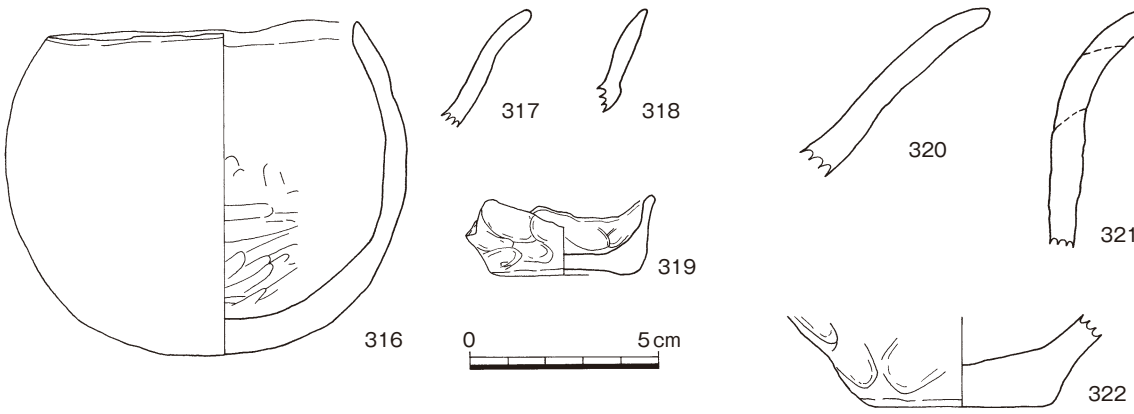
第54図　９号竪穴建物出土遺物（S=1：4）

９号竪穴建物は、出土遺物数も少なく年代を決定する決め手に欠ける。

（２）10号竪穴建物

遺構【第53図】　10号竪穴建物は、調査区の東壁に接して建物の南西側約2/3程度が検出されている。検出部分北側の一部を９号竪穴に破壊され、また南側の一部を近現代の攪乱に破壊されている。また、東側については、前述した事故の影響から建物範囲の確認に止められている。実掘された部分は、建物の1/4程度である。検出された範囲から、一辺3.5mから4.0mで方形の竪穴建物と推定される。実掘範囲からは、柱穴、壁溝、竈などの屋内施設は確認できなかった。攪乱などの要因で、実掘範囲が限られており、９号竪穴建物同様、得られる情報は非常に少ない。

遺物【第55図～57図】　316から323は土師器である。316は無頸の坩で、丸底をなし内面はヘラミガキが施されている。外面については器表の剥落が激しく判然としないが、かなり丁寧な整形がなされているようである。胎土は砂礫の混入がやや多い。317と318は坏である。どちらも小片であり径を復元するに至っていない。317は体部は湾曲し、やや端反り気味に口縁部が開く。318は内外面ともにミガキが施されており、表面には赤色顔料の塗布が認められる。319は手捏ねで作られた、坏状の土器である。形状、大きさなどから、実用とは考えにくい。320は高坏の坏部と考えられる破片で、内外面ともにヘラミガキが施されている。胎土は砂粒の混入が少なく精良である。321と322は甕で、321は口縁部か体部の状藩部にかけての破片である。口縁部がやや端反り気味に外反する。322は甕の底部で、平底をなし底部やや上位にはユビナデの跡が残る。胎土は礫の混入がやや多く、粗い印象を与える。323は整形の



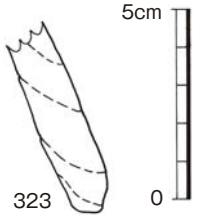
第55図　10号竪穴建物出土遺物①（S=1：2）

状態や、胎土から竈形土器の基部の破片と判断した。砂礫の混入の状態からやや、粗い印象を受ける。

324は砥石である。砂岩製のものと考えられ全面に擦痕が確認できる。一部を欠損するが、形状からは大部分が残存していると考えられる。

325は鉄滓である。小型の滓で、小鍛冶の際に形成された流動滓と考えられる。

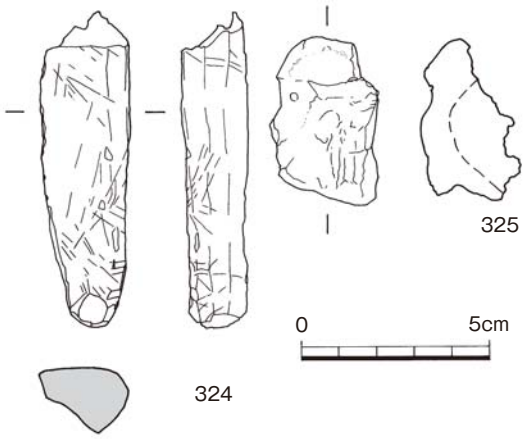
10号竪穴建物も９号竪穴建物同様、出土遺物数も少なく年代を決定する決め手に欠ける。



第56図　10号竪穴建物出土遺物②（S=1：2）

（３）４溝状遺構

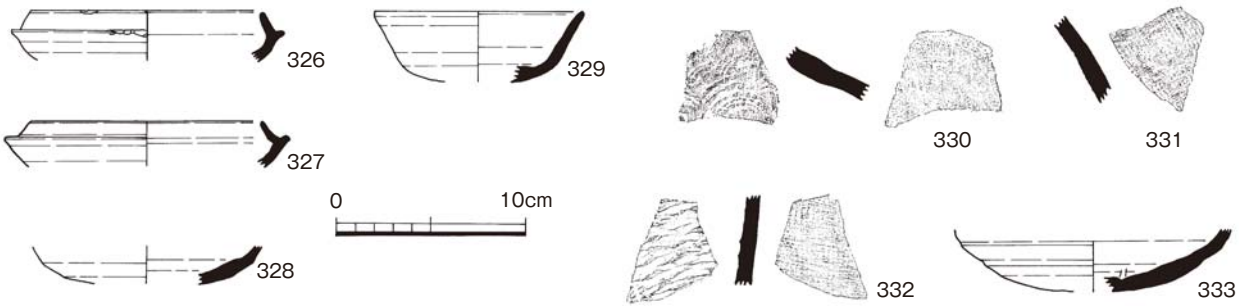
遺構【第54図】　４号溝状遺構は、やや複雑な形状をしており、調査区を北東方向から南西に向かい横切り、途中、北東側へ急激に折れる。また、北東側ではいくつかに分岐している。なお、遺構の東側部分は事故の影響から範囲の確認に止められており、実掘した範囲は西側の一部分である。溝幅は、検出面で５ｍ前後で検出面からの深さは約25㎝を測る。出土遺物の大半はTK209型式併行期のものであるが、西側の未掘部分、埋土最上部からは龍泉窯系の青磁片が出土しており遺構の時期判断については慎重にならざるを得ない。なんらかの区画溝と考えられるが、判断材料には乏しい。



第57図　10号竪穴建物出土遺物③（S=1：2）

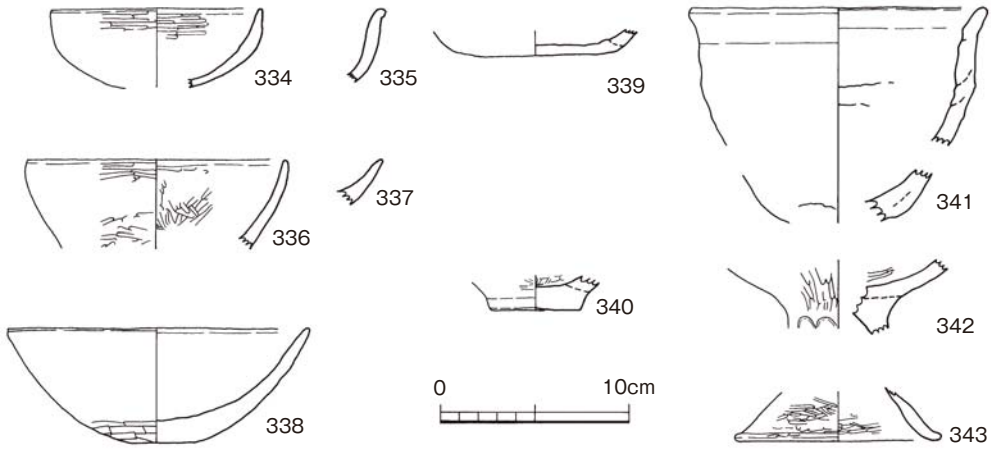
遺物【第58図～ 65図】　326から333は須恵器である。326から327は有蓋の坏身である。326は受け部の端部が欠けている。肉眼観察からは人為的に打ち欠かれたものであるかの判断は難しいが、図面上には欠損の状況を図示している。外面は回転横ナデ、回転ヘラケズリにより整形され、内面は回転横ナデが施される。復縁された径は12.5㎝を測る。形状からは、TK43型式に併行すると考えられる。327は326に比して、やや立ち上がりが低く、TK209型式に併行する時期のものであると考えられる。復元径は12.3㎝を測り、内外面とも回転横ナデで整形されている。328は坏の底部付近で、内外面ともに回転横ナデが確認できる329は無蓋の坏で、内外面ともに回転横ナデが施されている。330から332は甕の破片である。330は甕の肩部の破片で、外面には格子のタタキ、内面には同心円の当て具痕が確認できる。331は胴部上位の破片で、330同様に外面に格子のタタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。332は胴部下位の破片で外面は格子のタタキ、内面には当て具の痕が残る。333は壺の底部付近の破片で外面に回転横ナデ、回転ヘラケズリ、内面には回転横ナデが施されている。

334から370は土師器である。334から340は坏である。334は坏の口縁から底部付近で、内外面ともにヘラミガキが施されている。335は坏の口縁部で内外面ともにヘラミガキが施されている。336は坏の口縁から大部にかけての破片で、内外面ともにヘラミガキが施されている。337は坏の口縁部の破片で、調整は小片のためはっきりとしないが、外面には一部ヘラミガキが確認できる。338は坏の口縁～底部までの破片で、口縁部について一部を欠く。内外面ともナデ調整されているが、外面底部付近は静止ヘラケズリで調整されている。胎土には砂礫の混入が認められ、やや粗い印象を受ける。339は坏の底

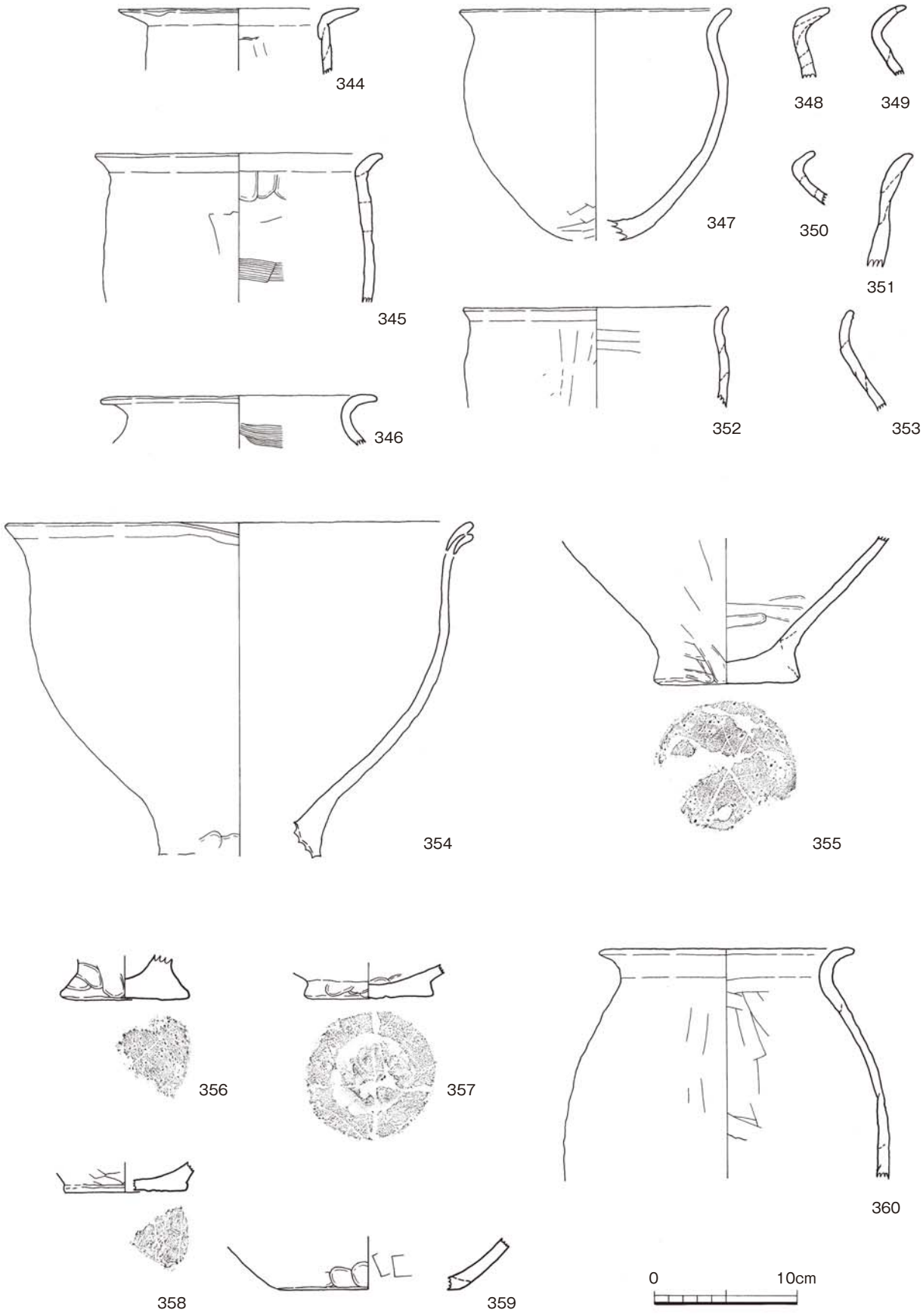


第58図　４号溝状遺構出土遺物①（S=1：4）

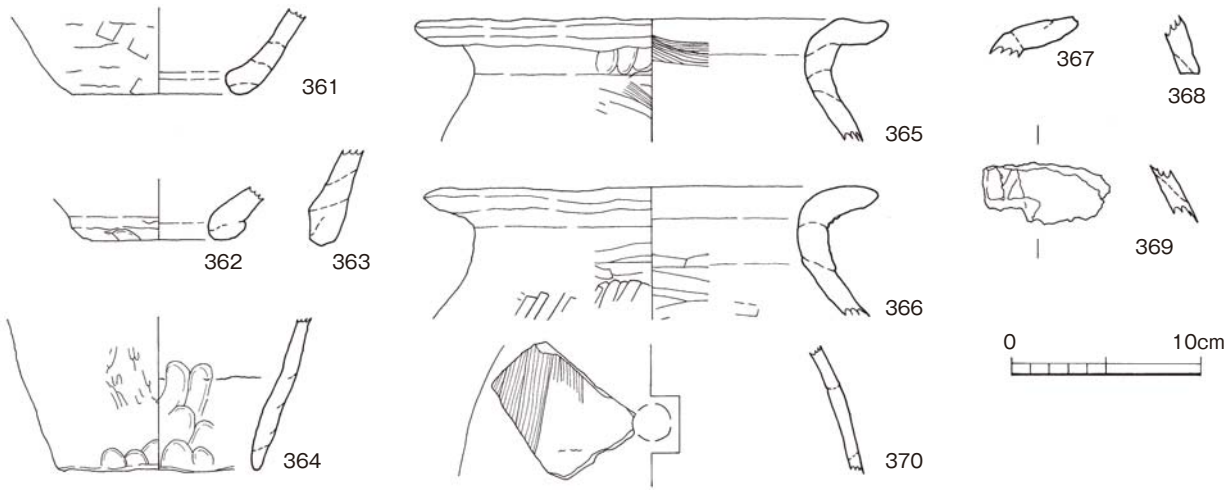
部で、底面には風化しているが枝葉痕が確認できる。胎土に含まれる砂礫はわずかで、精緻な印象がある。340は坏の底部と考えられる破片で、脚台上の平底をなしている。内外面ともに工具によるナデ調整が施されている。341は鉢形の土器で、内外面ともにナデ調整が施され、粘土紐のつなぎ目が残るなどやや粗い作りである。胎土は礫の混入がやや目立つ。342と343は高坏である。342は高坏の坏部から脚部への接続部分である。坏部は内外面ともにヘラミガキが施され、脚柱部の一部にユビナデが施されている。胎土には細かな混和剤が若干確認できるが、きめが細かい印象が強い。全体に丁寧な作りをしている。343は高坏の裾部で、内外面ともヘラミガキが確認できている。胎土にはほとんど砂粒を確認できない。344から359は甕である。344は小型の甕で、口縁部が大きく屈曲する。内外面ともにナデ調整が施されており、器壁は薄手である。345は口縁部が外側に小さく屈曲する甕で、内外面ともに工具によるナデ調整が施される。粘土紐のつなぎ目が一部のこるが、胎土に混入する砂礫はそれほど目立たない。346は、口縁部が大きく外反する甕で、内外面ともにナデ調整が施されている。345同様、混和剤はそれほど目立たない。347は口縁部が小さく外反する甕で底部は丸底をなす。内外面ともに表面の風化が激しく調整ははっきりしないが、外面の底部付近に工具ナデの痕跡が一部確認できる。胎土に混和剤はほとんど確認できない。348、349、350は強く屈曲する口縁部をもつ甕の破片で、小片のため径の復元などはできていない。３点ともに内外面ナデ調子が施されており、色調、胎土ともに似通っている。351は口縁部がほとんど屈曲せず直線的に外傾して口縁部に達する甕である。内外面ともにナデ調整がされており、胎土には砂礫の混入がやや目立つ。粘土紐のつなぎ目なども比較的目立ち、全体に粗い作りである。352は口縁端部が弱く外反する甕で、内外面ともに工具によるナデ調整が施されている。器壁は比較的薄手で、胎土には砂粒の混入が比較的少ない。全体に丁寧な作りをしている。353は口縁部がやや窄まり、直口縁をなす甕である。小片のため径の復元などは行えなかった。内外面ともにナデ調整が施されており、胎土の砂粒の混入は目立たない。354はやや大型の甕で、半球形の胴部で外反する口縁部をもつ。底部は脚台上をなすようであり、口縁部の一部が片口の



第59図　４号溝状遺構出土遺物②（S=1：4）

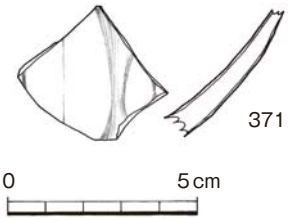


第60図　４号溝状遺構出土遺物③（S=1：4）

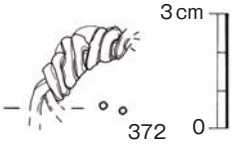


第61図　４号溝状遺構出土遺物④（S=1：4）

ように垂れ下がっている。調整は内外面ともにナデ調整が施されており、胎土には砂粒の混入はそれほど目立たない。355から359は甕の底部である。355は胴部の下半部から底部にかけての破片で脚台上の平底をなす。内外面ともに工具によるナデ調整が施され、底面には枝葉痕が残る。胎土には礫が多く混入しかなり粗い。356は平底の底部で、外面はユビナデ、内面はナデ調整が施されている。底面には葉脈痕が確認できる。357は円盤状の平底で、内外面ともにユビナデが施されている。底面には葉脈痕が残る。358は平底の底部で、内外面ともにナデ調整が施され、底部に枝葉痕が残る。356から358の胎土については、いずれも若干の砂粒の混入がみられるが、総じて緻密な印象を受ける。359は平底の底部で、内面に工具によるナデ調整、外面はナデ調整が施されている。外面の底部付近には指頭痕が確認できる。胎土に含まれる砂粒はあまり目立たない。360は壺の口縁部から胴部中位にかけての破片で、内外面ともに工具によるナデ調整が施されている。胴部はやや長胴で、口縁部径が胴部の最大径よりやや小さい。胎土については、混和剤が若干確認できるが、全体に緻密な印象を受ける。361から369は炊飯具である。361から364はいずれも筒抜け式の甑の蒸気孔付近の破片である。361は蒸気孔端部がやや内側に肥厚している。外面は工具ナデ、内面はナデが施され、外面には粘土紐のつなぎ目が明確に残る。胎土には砂粒はあまり含まれておらず、比較的緻密である。362は蒸気孔の端部が外面に肥厚している。内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は361同様にあまり砂粒の混入は目立たない。363は直線的に蒸気孔まで達し、端部がやや肥厚するもので、内外面ともにナデ調整が施される。364は直線的に蒸気孔まで達し、端部については肥厚しない。外面はヘラミガキが一部確認でき、蒸気孔の端部は指頭痕が残る。365から369は竈形土器である。365と366は形状と胎土の状態、及び粘土紐の接合状況から竈形土器の掛口から体部の破片と判断した。365は内外面ともにハケメ調整がされており、366は内外面ともに工具によるナデ調整が施される。367は365、366と同様な形状をなす竈形土器のる掛口の破片と判断した。368は、竈形土器の基部の破片で外面はナデ、内面は工具によるナデが施されている。369は焚口の一部と考えられる破片で、内外面ともにナデ調整が施されている。また、外面については焚口縁に粘土が剥離した痕跡が確認でき、庇状の構造があったことがうかがえる。370は注口状の孔が体部に穿たれた土器で、瓶状のものになる可能性がある。調整は外面がハ



第62図　４号溝状遺構出土遺物⑤（S=1：4）



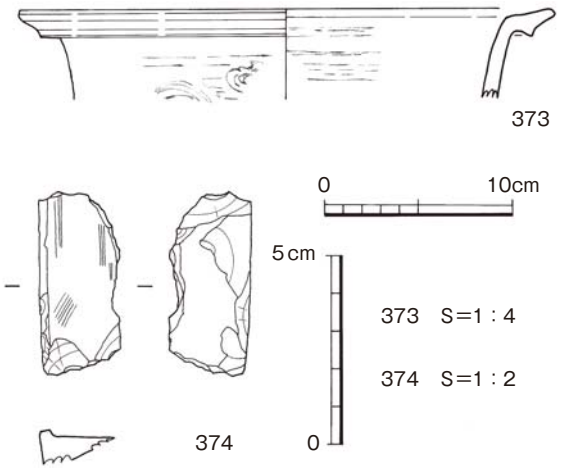
第63図　４号溝状遺構出土遺物⑥（S=1：2）

ケメ、内面がナデ調整を施されている。

371は鎬連弁をもつ龍泉窯系の青磁碗片である。

372は鉄器で、針金様の細い鉄片が二重らせん状に絡まっている。

373は唐津の鉢、374は赤間硯と考えられる硯の破片である。373と374は近世以降の混入であると考えられる。375は鉄塊系遺物である。この他に鍛冶関連の遺物として、スサを含んだ粘土塊（第65図図版）が出土している。スサ入りの粘土塊は、鍛冶炉の炉壁などに使用されたものと判断した。



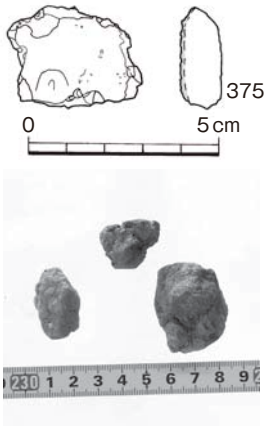
第64図　４号溝状遺構出土遺物⑦

４　１区Ｄ地点【第66図】

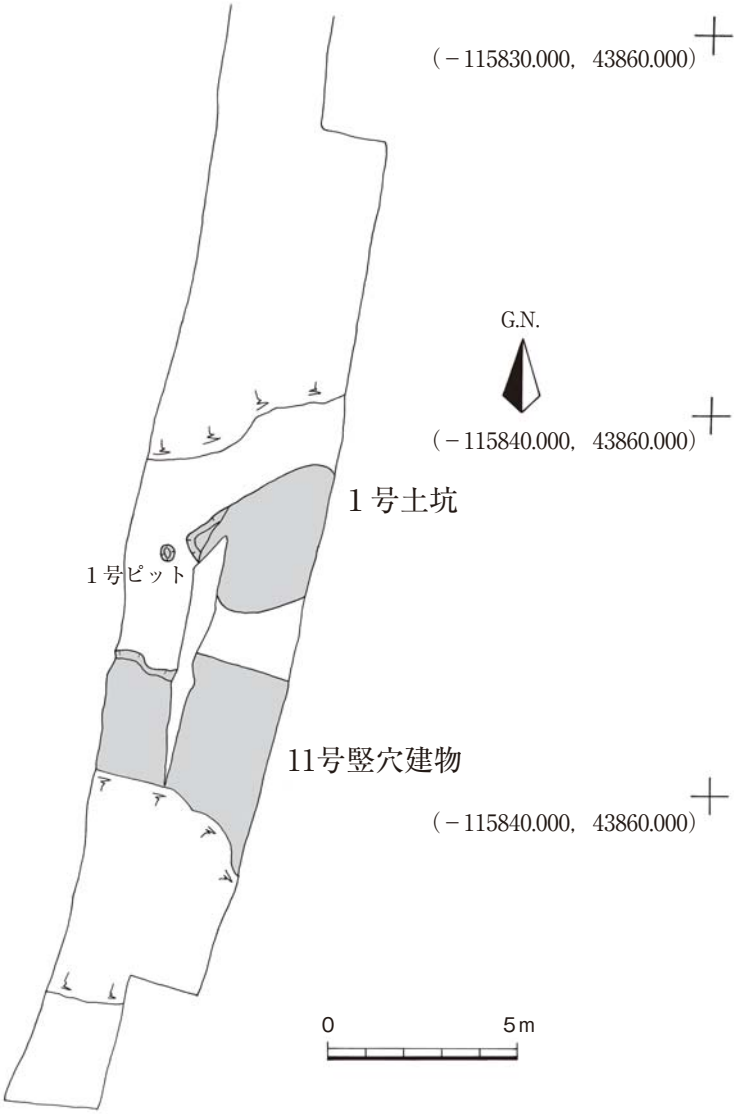
１区Ｄ地点は広範囲に近現代の攪乱が及んでいた。検出された遺構は、竪穴建物１軒、土坑１基、ピット１基である。東側に拡張した部分については、事故の影響から遺構の範囲確認のみで終了している。竪穴建物については南側の大部分が破壊されており、土坑については、東側の大部分が未掘部分となっている。

（１）11号竪穴建物

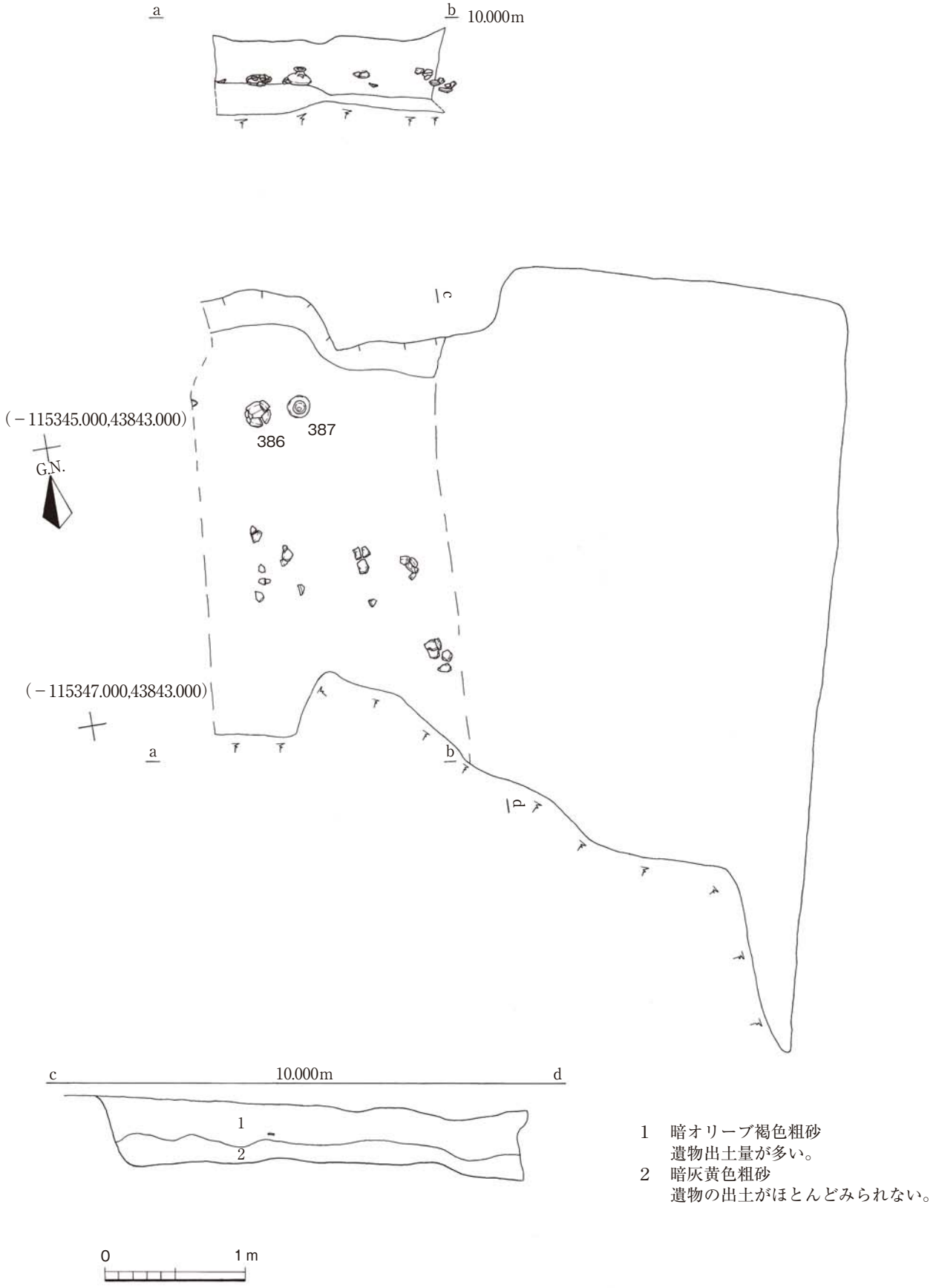
遺構【第67図】　調査区の南側で検出された竪穴建物で全体の2/3程度を検出した。南側については、近現代の攪乱で破壊されており、東側については、事故の影響から検出に止めている。実掘範囲は検出された遺構の西側のみで、全体の1/3程度である。検出された範囲から、一辺６ｍ程度の方形竪穴建物であったと推定される。調査範囲内では柱穴、竈、壁溝などの屋内施設は確認されていない。



第65図　４号溝状遺構出土遺物⑧



第66図　1区D地点遺構分布図（S=1：200）

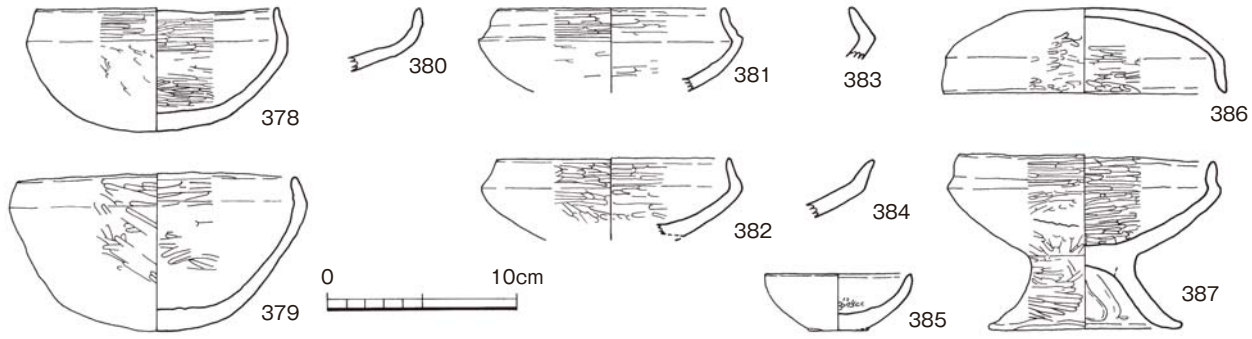


第67図　11号竪穴建物（S=1：40）

遺物【第68図～ 72図・第127図】　376と377は須恵器である。376は須恵器の坏蓋である。稜の部分がかなり明瞭で、やや古手の須恵器である可能性があるが、小片のためはっきりしない。内外面ともに回転横ナデで調整されていることがわかる。377は壺の底部付近で、内外面ともに回転横ナデが確認できる。底部内面には指頭痕が確認できる。外面の底部付近にはヘラ記号が施されているのが確認できる。

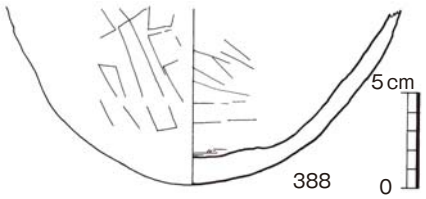
第68図　11号竪穴建物出土遺物①（S=1：2）

378から388、1018から1022は土師器である。378から385、1018は坏である。378は坏で体部から口縁部に向けて内湾し、内外面ともにヘラミガキが施されている。379は378と同様に内湾する坏で、378よりやや大きい。内外面ともにヘラミガキが施され、胎土には砂粒をほとんど含まない。380は378、379に比して内湾しながらも口縁部が大きく広がる坏で、外面は風化し調整が判然としないが、内面はヘラミガキが施されているのがわかる。381から383は口縁部と体部の変換に明瞭な稜をもつ坏である。381は内外面ともにヘラミガキが施されており、胎土には砂粒がほとんど含まれない。382も381とほぼ同様の土師器で、内外面ともにヘラミガキ、胎土には砂粒がほとんど含まれない。383は内外面ともにヘラミガキが施され、胎土にはやや砂粒が目立つ。器表面には赤色顔料が塗布されている。384は屈曲部から外傾して口縁部が広がる坏で、内外面ともにヘラミガキが施されている。385は小型で平底の坏で、外面はナデ、内面はヘラミガキが施されている。1018は平底で口縁端部が外反する坏で、内外面ともにナデ調整が施されている。386および387は、11号竪穴建物の北壁近くで伏せた状態で並んで出土した坏蓋と高坏である。出土状態から同一セットであると判断した。386は、内外面ともにヘラミガキが施され、胎土には混和剤として細かな砂粒が若干含まれる。赤色顔料の塗布や黒色処理などの表面処理は確認できない。387は受け部、立ち上がり部をもつ高坏で坏部については内外面ともヘラミガキが施されている。脚部については外面はヘラミガキ、内面はユビナデで調整されている。胎土については386、387ともに若干の砂粒を混和剤として含む程度で、きめの細かいものである。386と387については、出土状況から考えて、竪穴建物廃棄時の祭祀に伴うものと考えられる。



第69図　11号竪穴建物出土遺物②（S=1：4）

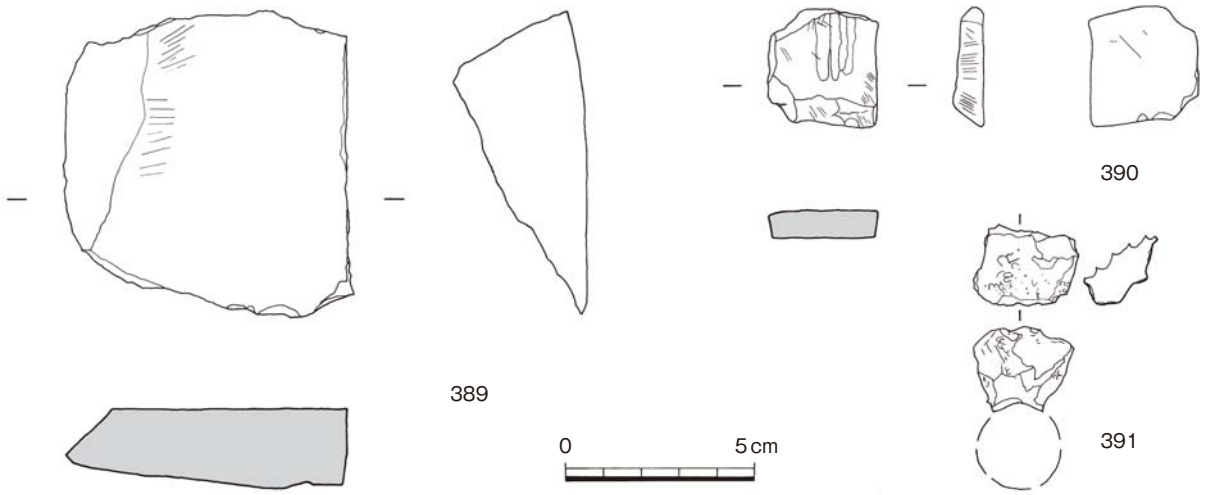
388は甕の底部である。丸底で内外面ともに工具によるナデ調整が施されている。胎土には混和剤が含まれるがおおむね緻密である。1019は口縁部が屈曲し外反する半球状の胴部をもつ甕である。内外面ともにナデ調整が施され、胎土には若干混和剤が含まれる。1020は甕の胴部で、外面はタタキが施された後ナデ調整されている。内面はナデ調整である。胎土には若干砂礫が含まれる。粘土紐のつなぎ目が確認できるなどやや粗い作りである。1021と1022は甑である。1021は蒸気孔の破片で、器壁に内外面から穿孔されたあとが残っている。桟渡し用の孔が穿たれたものと考えられる。胎土はやや砂礫が目立つが、残存部分の表面調整などは比較的丁寧である。1022は蒸気孔の小片で、1021とは違い筒抜け式のもののようである。口縁部分は肥厚して、やや無骨な印象がある。胎土はあまり礫を含まないが、表面の調整などは比較的粗い印象がある。



第70図　11号竪穴建物出土遺物③（S=1：4）

389と390は砥石である。389は残存部分で233gf の重量がある。使用面が一面だけ残っており、全体に被熱して赤変している。390は砥石の小片で、使用面が２面残っており、全体に擦痕が確認できる。一面にはややにぶいが太い３条の凹みがある。利器以外のなんらかの器物を研いだ痕跡かもしれない。

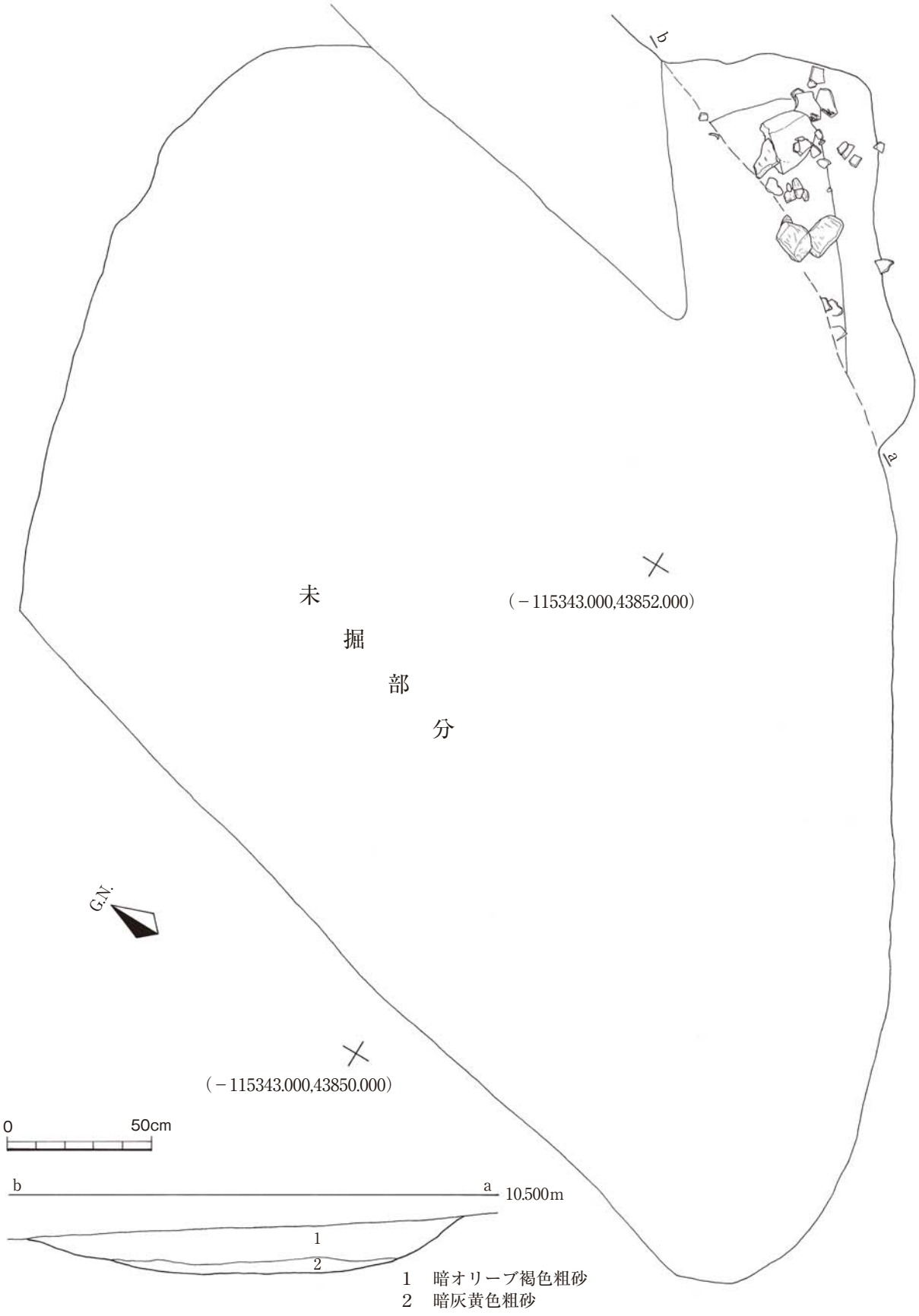
391は鞴の羽口片である。全体に溶融し一部発泡している。かなり小型の羽口であり、精練などの作業を行ったものではなく小鍛治作業に用いたものと考えられる。



第71図　11号竪穴建物出土遺物④（S=1：2）

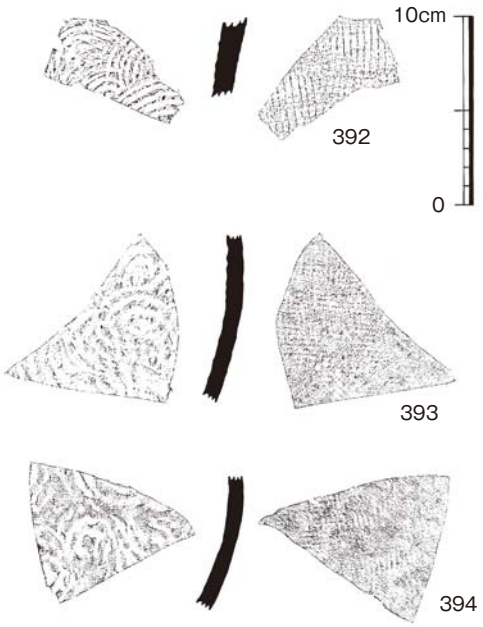
（2）１号土坑

遺構【第72図】　調査区のほぼ中央で検出された土坑である。遺構全体の７割から８割程度検出できたが、大部分が拡張部分で、検出のみにとどまっている。実掘した範囲は西側角のごく一部である。規模は、長軸約4.4m、短軸約３m程度のやや歪な長方形に復元できる。実掘した箇所からは、被熱して赤変した軽石がまとまって出土しており、炉のような屋内施設があった可能性がある。実掘できた範囲が非常にわずかであり判断材料に乏しいため、遺構の性格を類推することは難しいが、なんらかの作業工房であった可能性も考慮すべきかもしれない。



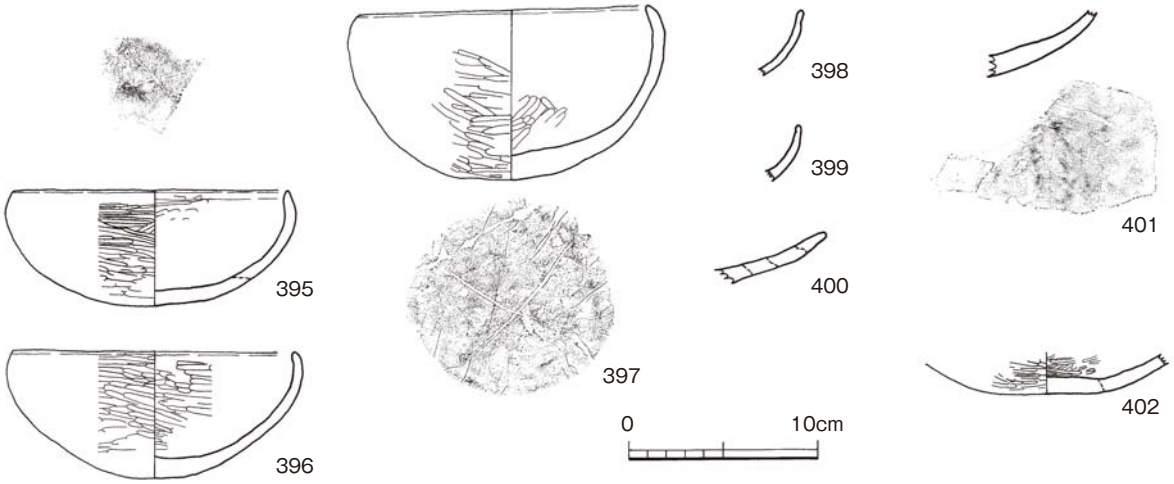
第72図　１号土坑（S=1：20）

遺物【第73図～75図】　392から394は須恵器の甕である。いずれも胴部小片である。392は外面を格子目のタタキが施され、内面には同心円当て具痕が残る。393は外面に格子目タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。格子目は392に比してやや緻密である。394は外面に格子目のタタキを施した後、一部ナデを施している。内面については、他の２点同様同心円の当て具痕が残る。



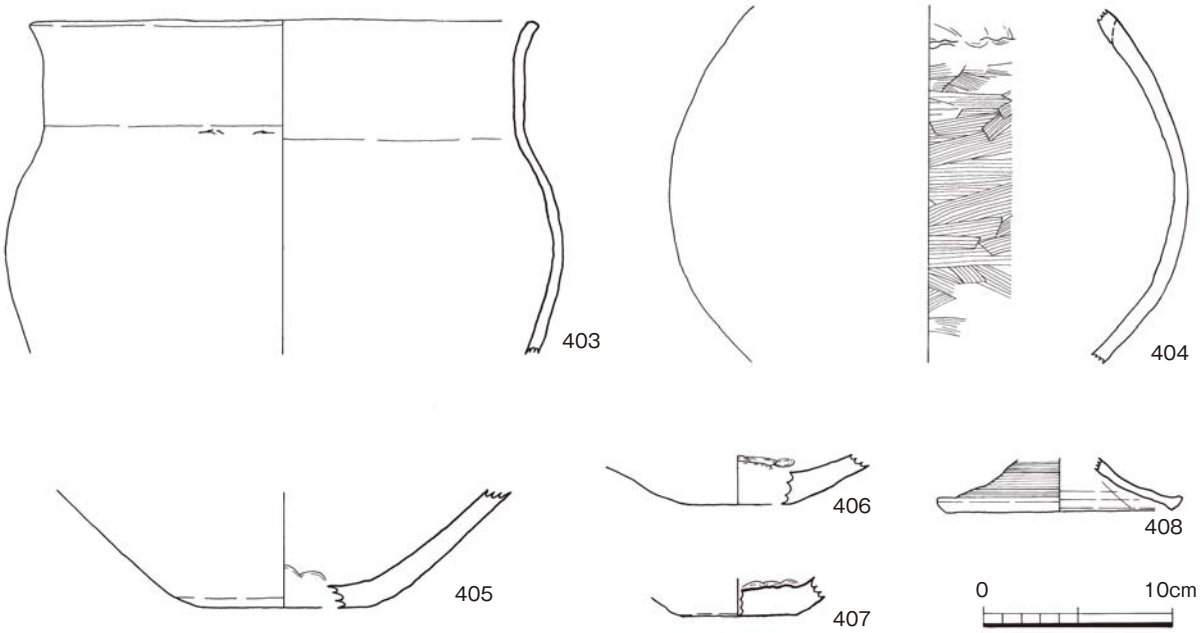
第73図　１号土坑出土遺物①（S=1：4）

395から407は土師器である。395から402は坏である。395は口縁端部が内湾し、椀状を呈す。内外面ともにヘラミガキが施され、見込部分にヘラ記号が確認できる。胎土には砂粒がほとんど含まれない。396は395と同様に口縁端部が内湾するが、395に比較するとやや深く尖底気味である。内外面ともにヘラミガキが施され、胎土には砂粒はほとんど含まれない。397も口縁端部が内湾するもので、前者２点に比べ、やや大型である。内外面ともにヘラミガキが施され、底面にはヘラ記号が確認できる。胎土には砂粒が若干含まれるが、全体に緻密である。398は口縁部の破片で、外面はナデ調整が施される。内面については、器表の劣化のため判然としない。胎土に含まれる礫が比較的目立ち、やや粗い印象を受ける。399は坏の口縁部片で、内外面ともにヘラミガキが施され、胎土には砂粒がほとんど含まれない。400は口縁部が大きく開く皿状の坏で、焼成がやや甘いのか表面の風化が激しいため調整は内外面とも判断できない。胎土には砂粒はほとんど含まれず、非常に精良である。粘土紐のつなぎ目などが確認でき、全体の作りとしては、やや粗雑である。401は坏の体部片で、内外面ともにヘラミガキが施されている。表面には赤色顔料が塗布され、外面にヘラ記号が確認できる。胎土は砂粒が若干確認できるが、全体に緻密である。402は坏の底部で、平底をなす。内外面ともにヘラミガキで調整されていると考えられるが、外面については不鮮明な部分が多い。胎土は、砂粒が若干目立つが全体としては緻密な印象を受ける。403は甕である。口縁部から体部にかけての破片で、屈曲部からほぼ垂直に立ち上がり口縁部に達する。内外面ともにナデ調整が施され、胎土内に含まれる砂粒は目立たない。404から



第74図　１号土坑出土遺物②（S=1：4）

407は壺である。404は胴部の破片で、球胴をなしている。頸部との接合部分が剥離している。外面はナデ調整、内面はハケメ調整がされており、頸部との接合部分には指頭痕が確認できる。胎土は、若干の砂礫を含むが概ね緻密である。405は壺の底部で平底をなす。内外面ともにナデ調整を施しており、内面の底部付近には指頭痕が確認できる。胎土には砂粒の混入が若干認められるが、概ね緻密である。406は底部で平底をなすと考えられる。外面はナデ、内面についてはユビナデの痕跡が確認できる。胎土は405と同様、若干の砂粒が混入するが、概ね緻密である。407は底部で平底をなす。外面はナデ調整、内面は指頭痕が確認できる。胎土は砂礫の混入がやや目立つ。408は、高坏もしくは器台の裾部と考えられる破片である。端部が上方に反っており、裾部外面全体にカキメ状の横位の条線が施されている。内面は回転横ナデで調整されている。胎土は砂礫の混入がやや目立ち、特に緻密ではないが、日向ではあまり見かけない形状であり、外来系の土器である可能性も考えられる。

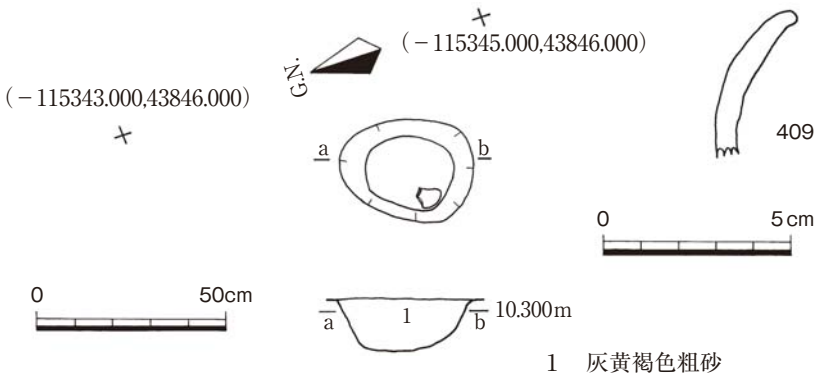


第75図　１号土坑出土遺物③（S=1：4）

（３）１号ピット

遺構【第76図】　１号ピットは、１号土坑の西側で検出された長軸35m強、短軸30cm弱の遺構である。単独で検出されており、単一の遺構か掘建柱建物のような、なんらかの遺構の一部をなすかはっきりしない。

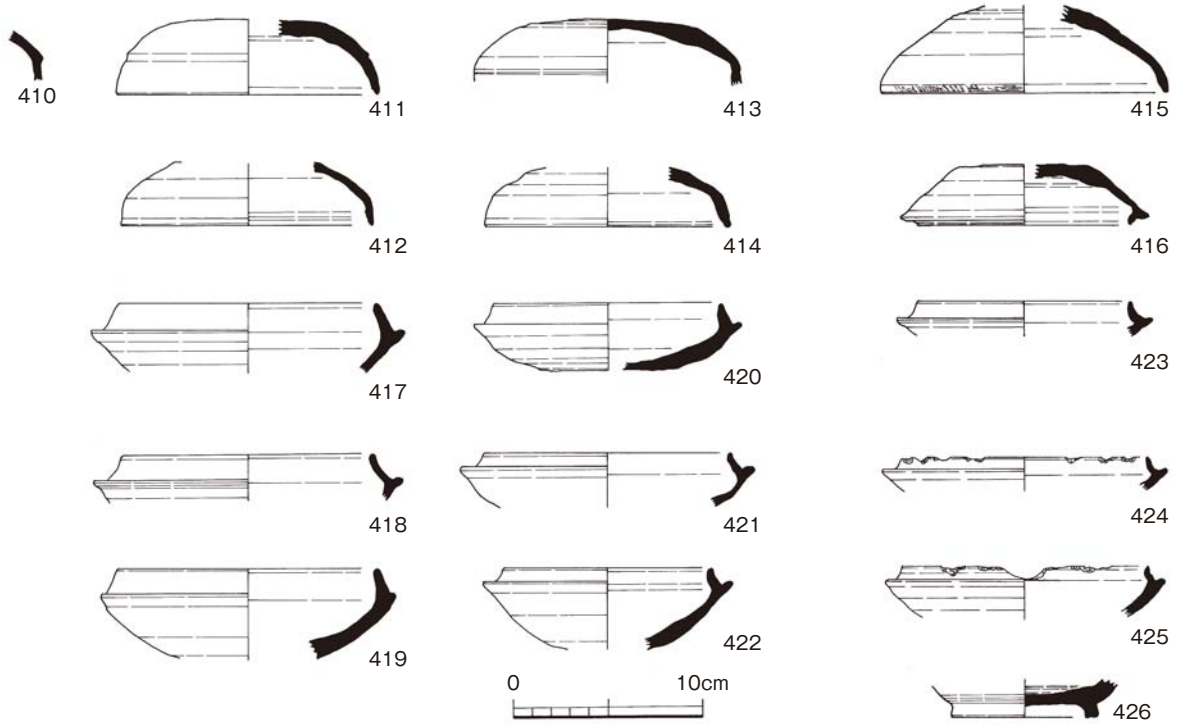
遺物【第76図】　土師器の甕の口縁部の破片である。径は復元できないが、中型甕であろうか。



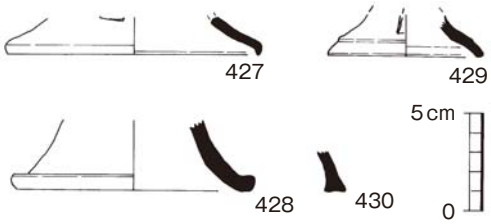
第76図　１号ピット遺構平面図（S=1：20）及び出土遺物（S=1：2）

（４）１区遺構外出土遺物【第78図～ 96図・第126図・第127図】

410から466および1013から1017は１区の遺構外から出土した須恵器である。410から426、1013は坏類である。410は須恵器の坏蓋で外面は回転横ナデ回転ヘラケズリ、内面は回転横ナデが施されており、外面には一部自然釉が確認できる。口縁部、天井部を欠いている小片であるが、稜がかなり発達しており、やや古手である可能性もある。411は坏蓋で体部に稜が比較的明瞭に残る。外面は回転ヘラケズリ、回転横ナデが施され、内面は回転横ナデで調整される。復元径は13.8㎝である。形状から TK10型式から MT85型式に併行する時期のものと考えられる。412は坏蓋で、411とは違い体部の稜は確認できない。外面は回転ヘラケズリ、回転横ナデで調整されており、復元径は13.4㎝を測る。413は口縁部を欠いている坏蓋の破片である。外面は回転ヘラケズリ、回転横ナデで調整され、内面は回転横ナデが施される。形状から、MT85型式に併行する時期のものと考えられる。414は天井部を欠く坏蓋の破片で、外面を回転横ナデ、回転ヘラケズリ、内面を回転横ナデで調整されている。形状からは TK43型式に併行するものか。415は坏蓋の破片で、外面は回転横ナデ、回転ヘラケズリ、内面を回転横ナデで調整されている。口縁端部には刻目状圧痕が確認できる。復元径は15.0とかなり大型のものであるが、焼き歪んでいる可能性もあり、注意が必要である。416はかえりをもつ坏蓋で、TK217型式に併行する時期のものであろうか。417から425は坏身である。417は外面を回転ヘラケズリ、回転横ナデで調整され、内面は回転横ナデが施されている。全体に器壁が厚く、端部の処理もやや甘い。復元径は13.6㎝を測る。形状からは MT85型式に併行する時期と考えたい。418は坏身の口縁部から体部で417に比較すると、全体に薄手で端部もシャープである。復元径は13.2㎝を測り、立ち上がりの形状なども含めて MT85型式に併行する時期のものと考えたい。419は坏身の口縁部から底部付近にかけての破片で、全体に厚手で端部の処理も非常に甘い。特に受け部については突出がかなり弱く特徴的である。復元径は13.6㎝を測る。立ち上がりの形状などから MT85型式に併行する時期のものと考えたい。420は坏身の口縁から底部付近に破片で、外面は回転横ナデ、回転ヘラケズリが施され、内面は回転横ナデで調整されている。

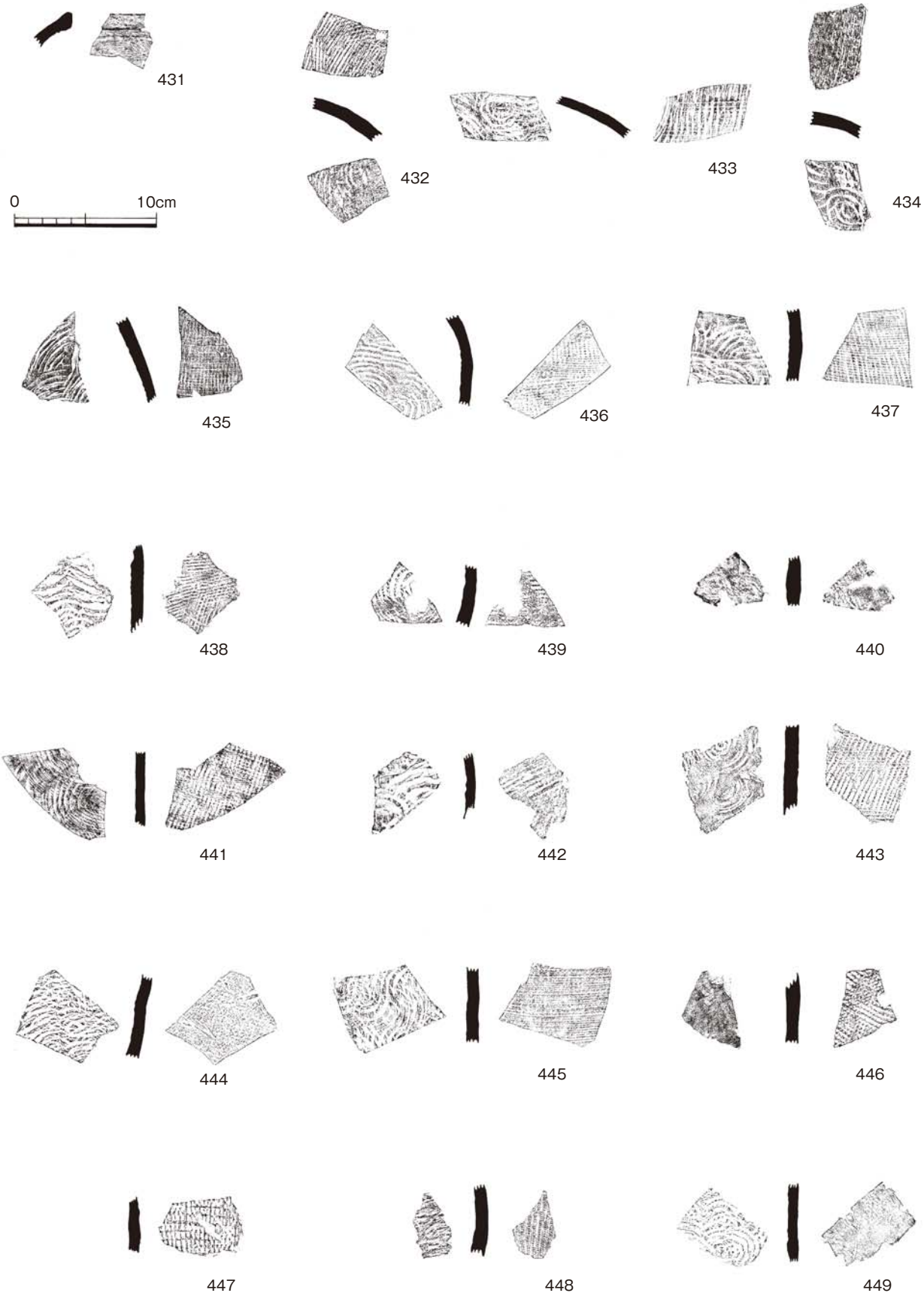


第77図　１区遺構外出土遺物①（S=1：4）

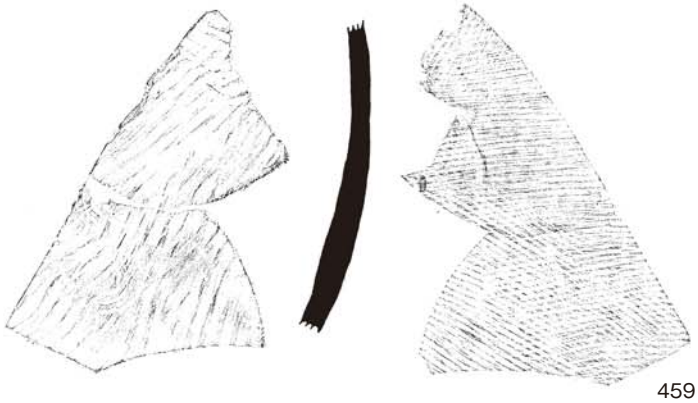


第78図　1区遺構外出土遺物②（S=1：4）

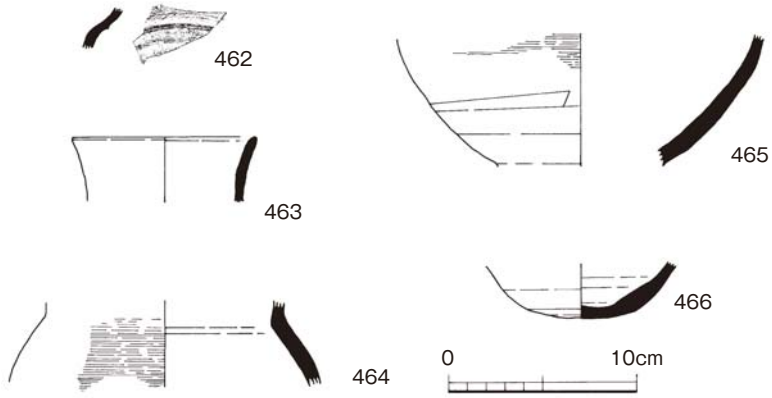
復元径は12.0cmで、MT85からTK43型式に併行する時期のものと考えられる。421は復元径13.0cmを測り、内外面ともに回転横ナデで調整されていることが観察できる。形状からMT85からTK43型式に併行する時期のものと考えられる。422は坏身で復元径は11.0cmで径に比してやや深い形状をなしている。外面は回転ヘラケズリと回転横ナデ、内面は回転横ナデで調整されている。TK209型式に併行する時期のものか。423は坏身の口縁部から受け部にかけての破片で、復元径は11.0cmを測る。形状からTK209型式に併行するものと考えられる。424、425、1013は坏身で、口縁部に打ち欠いたような痕跡が認められるものである。人為的なものであるかは検討が必要であろうが、図面上に図示している。いずれも復元径は13.0cmで、立ち上がりの形状などからはTK209型式に併行するものと考えられる。調整は内外面ともに回転横ナデが施され、1013に関しては底部付近に回転ヘラケズリが確認できる。427と428は形状から高坏と判断した。427は高坏の裾部で、透かし孔の一部が確認できる。428は端部がやや上方に反る。429と430はその形状から、器台と判断した。429は裾部に稜をもち、透かし孔が確認できる。431から461および1014から1017は甕の破片である。431は甕の口縁部の破片で、頸部に櫛描波状文が巡っている。432から434、は甕の肩部の破片で、432、433は外面に平行タタキ、434は外面に格子目タタキののちカキ目を施す。内面についてはいずれも同心円の当て具痕が残る。435から461、1014から1017は甕の胴部の破片である。435から458、1014から1017は胴部上位から中位にかけての破片と考えられるもので、表面調整では、格子目（435，439～442，444，451，453～455，458，1014，1017）、擬格子目（436，450）、平行（432，433，438，443，445～448，452，456，457，1015，1016）タタキなどが施され、内面には同心円の当て具痕が残っている。なお、436，439，443，445，448，450，453，456から458，1015，1016にはタタキの後、カキ目施されているのが確認できる。また、452は発泡し焼け歪んでいる。459から461は胴部中位か下位にかけての破片で、459、461は平行タタキ、460は格子目タタキが施されている。内面については、459、460は当て具痕が確認できるが、461は内面をナデ調整し当て具の痕跡を消している。



第79図　1区遺構外出土遺物③（S=1：4）



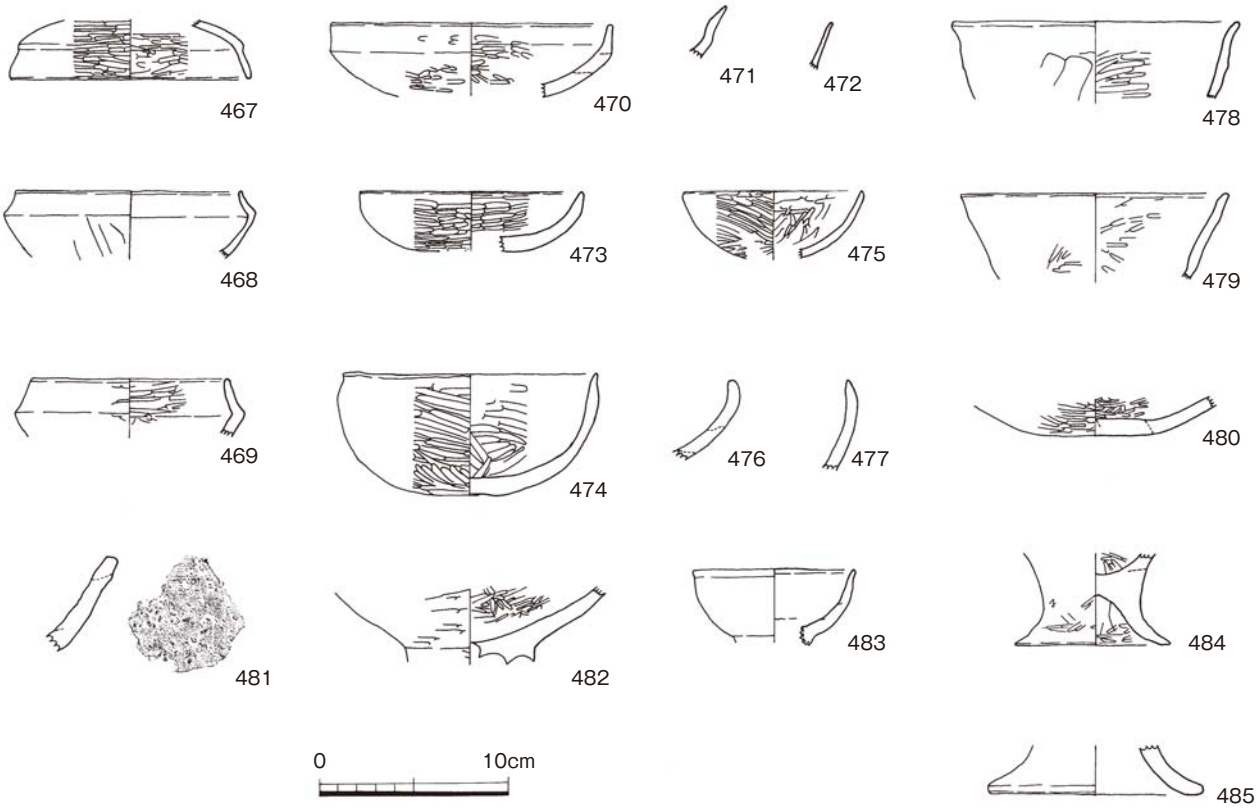
第80図　１区遺構外出土遺物④（S=1：4）



第81図　１区遺構外出土遺物⑤（S=1：4）

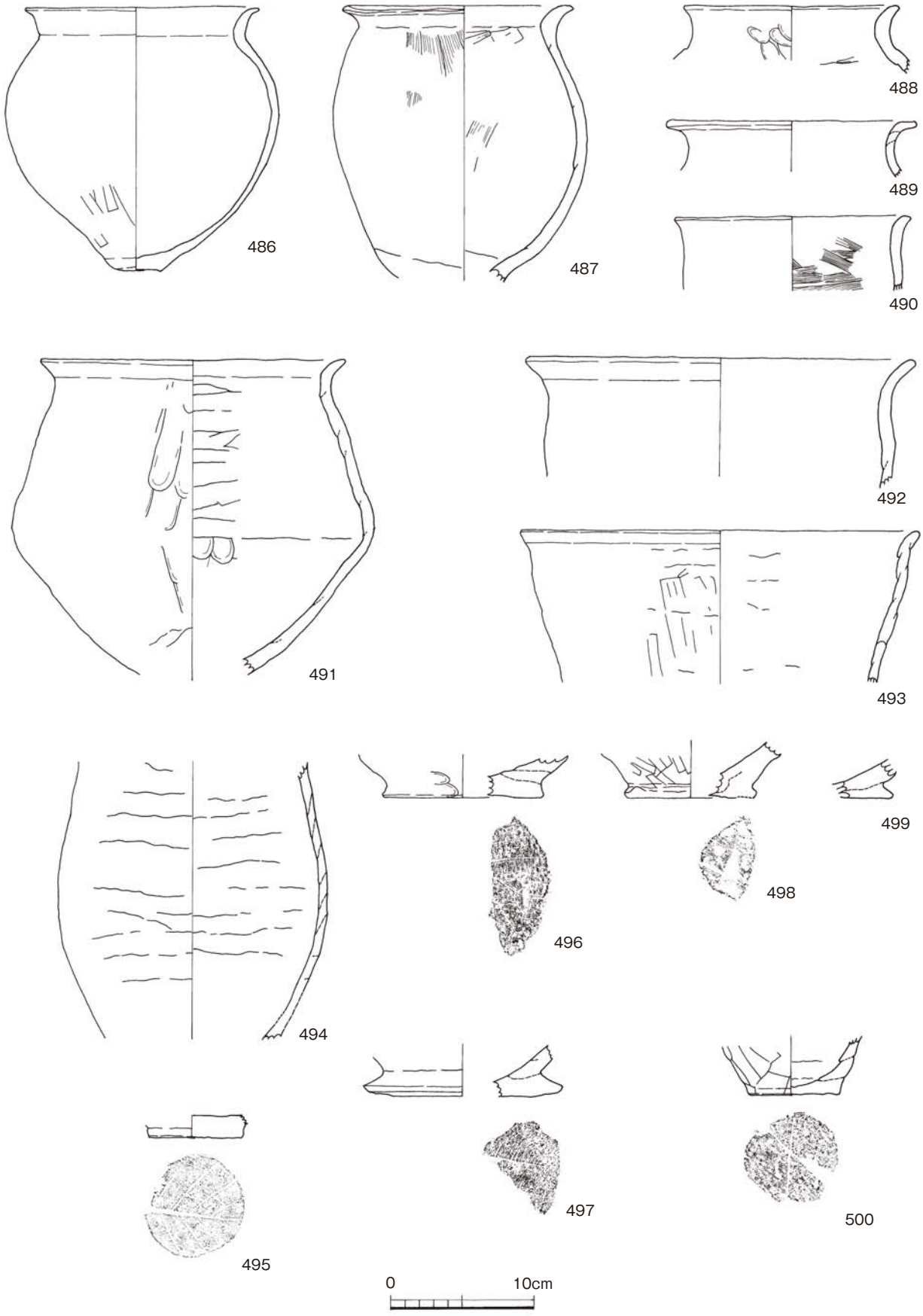
462から464は壺形の須恵器である。462は口縁部直下から頸部にかけての破片で、屈曲部の上位に櫛描波状文が施される。形状などから判断すると、瓶である可能性もある。463は口縁部の破片で、文様などは施されていない。464は壺の頸部から肩部にかけての破片で、外面にはカキ目が確認でき、内面についてはナデが施される。465は胴部下位の破片で、外面はカキ目、底部付近に回転ヘラケズリが施される。内面については回転横ナデが施されている。466は壺の底部で、外面は回転ヘラケズリと回転横ナデ、内面は回転横ナデが確認できる。

467から545、1023から1026は土師器である。467は須恵器の坏蓋を模倣したもので内外面ともにヘラミガキが施されている。1023と1024も467と同様に須恵器の坏蓋を模したものと考えられる。1023はやや端部の処理が甘く、また、歪みも大きい。内外面ともにヘラミガキが施され、胎土に砂粒を若干含むが緻密である。1024は1023に比して、全体に繊細な作りをしており、屈曲部の稜などは明瞭である。内外面ともにヘラミガキが施され、胎土に含まれる砂粒はわずかで緻密である。1025は須恵器の坏身をもしたと考えられるもので、内外面ともにヘラミガキが施される。胎土にはわずかな砂粒しか含まれず緻密である。形状からはTK43型式から209型式に併行するものを模したと考えられる。468は体部で内傾して口縁部にいたる坏で、内外面ともにナデ調整がされる。胎土には、礫をやや多く含む。469も468と同様に体部で内傾し口縁部にいたる坏で、内外面ともにヘラミガキが施されている。胎土にはわずかに混和剤を含むが、概して緻密である。470は体部で屈曲し直角に立ち上がる口縁を持つもので、内外面ともにヘラミガキが施され、胎土には砂粒がわずかに含まれるが概して緻密である。表面には薄い煤状のものが付着しており、黒色処理を施されている可能性がある。471、472は坏の口縁部の破片で、小片のため径などの復元はできていない。471は屈曲部から外傾し口縁部にいたる形態で、472は直線的に外傾する。473から477は体部が内湾して口縁部にいたるものである。いずれも内外面ともにヘラミガキが施されている。胎土は概して、砂粒の混入が少なく精良である。478は口縁端部が外反し、体部が椀状になるもので、外面には工具を使用したナデが確認できる。内面はヘラミガキが施されており、胎土については砂粒の混入が若干認められるが、概ね精良である。479はやや深めの坏で、直線上に外傾して口縁部にいたるものである。内外面ともにヘラミガキが施されている。480は坏の底部で、平底状をなす。調整は内外面ともにヘラミガキが施されている。482から485は高坏である。482は高坏の坏部底面で内外面ともにヘラミガキが施されている。483は高坏の坏部である。やや小型で椀状の坏部で内外面ともにナデ調整が施されている。484、485は高坏の脚部である。484は内外面ともにヘラミガキが施される。485は内外面ともにナデ調整が施されている。486から500は甕型の土器である。486、487は口縁部が外反し、最大径が口縁部にあるもので、486は内外面ともにナデ調整を主体にしている。487はハケメが確認できる。488から489は、口縁部が屈曲し最大径が胴部にあるものである。内外面ともにナデ調整が施される。490は口縁部があまり外反せず、直線上に胴部にいたるもので、外面の調整ははっきり

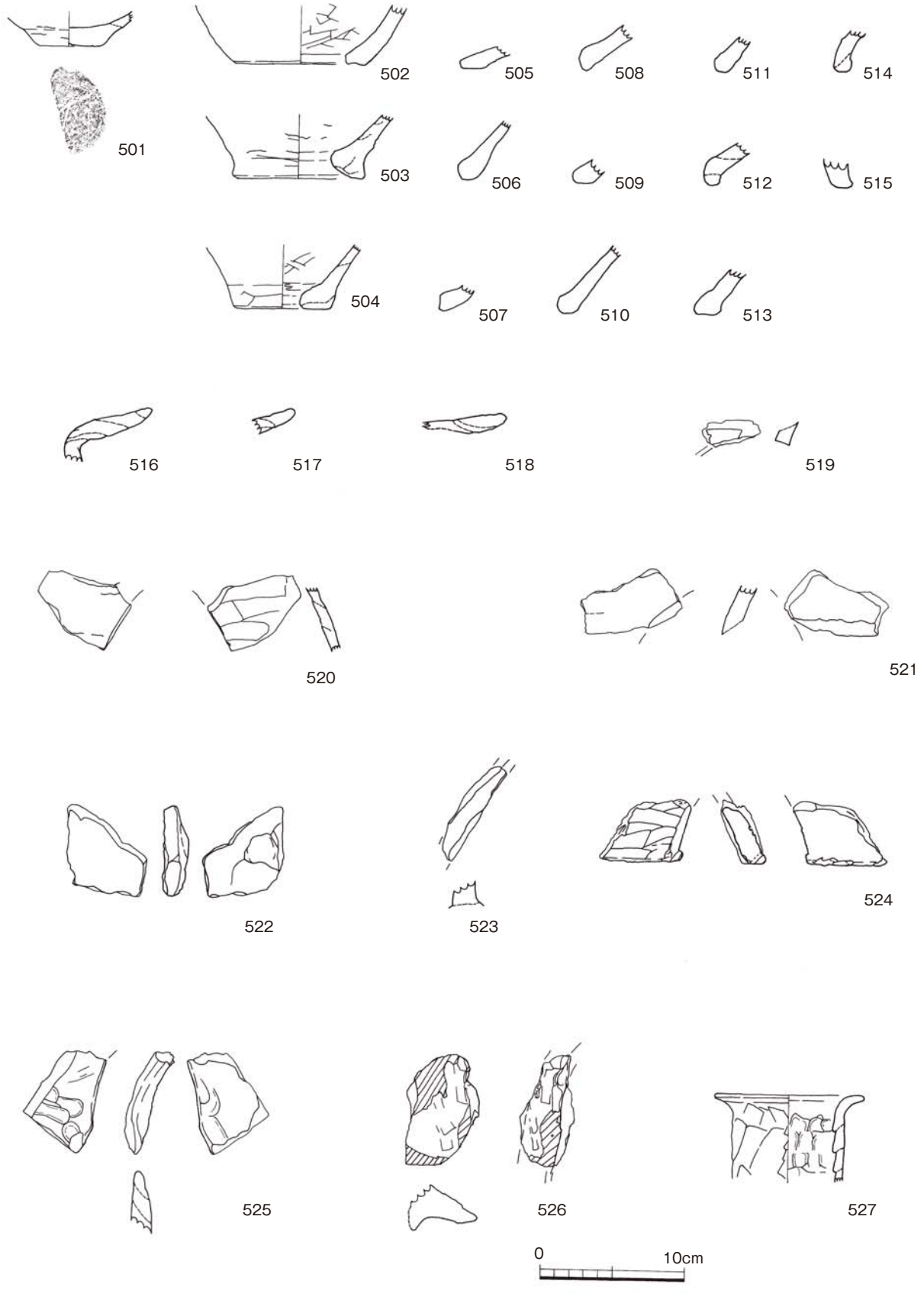


第82図　１区遺構外出土遺物⑥（S=1：4）

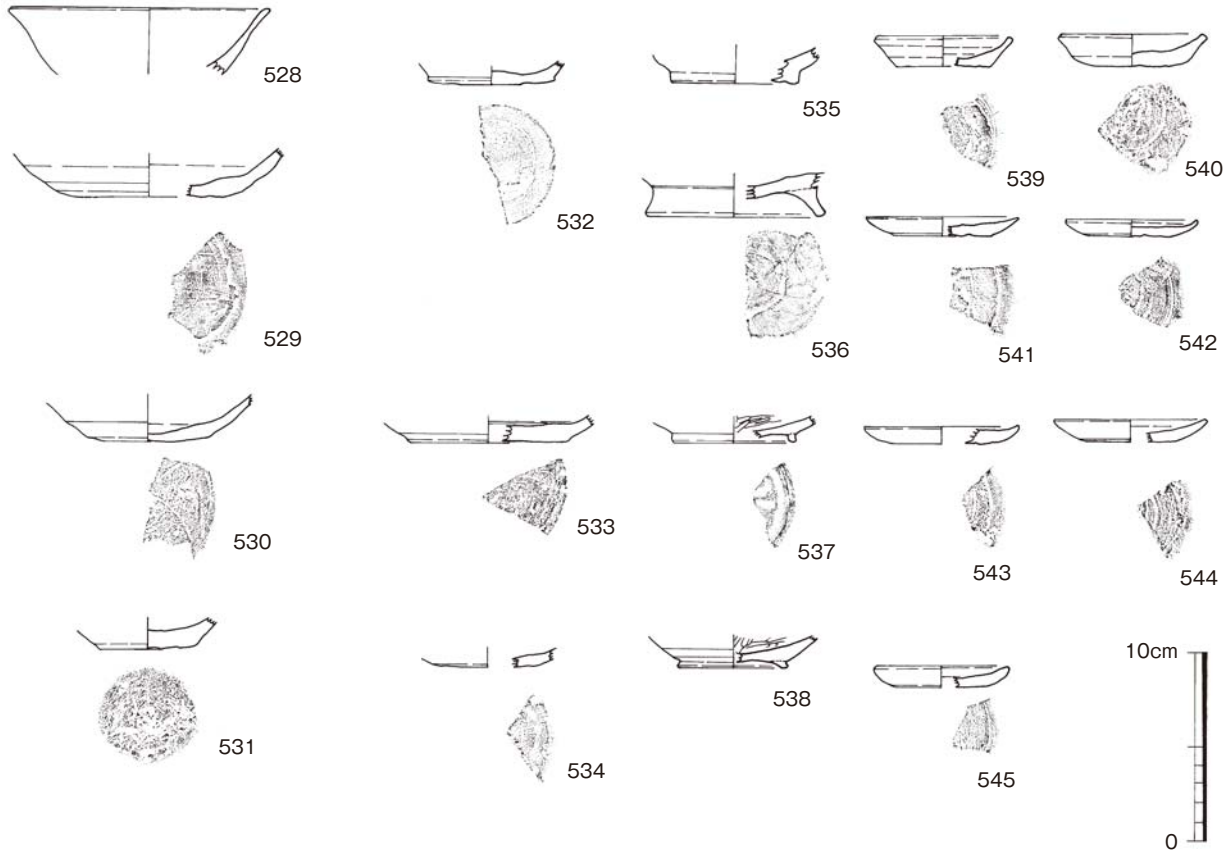
としないが、内面にはハケメ調整が残る。491は口縁部が外反し、胴部に屈曲部がある甕である。内外面ともにナデを主体に調整が施されている。492と493は口縁部の外反が弱く、直線的に胴部にいたるものである。内外面ともにナデ調整が主体であるが。493は粘土紐のつなぎ目が明瞭に観察できるなど、やや粗いつくりである。494は長胴の甕で、内外面ともに粘土紐のつなぎ目が確認できる粗いつくりである。形状などをみると、土器埋設炉などに使用されていたものかもしれない。496から500は甕の底部である。495は高台状の底部が作られており、底面に枝葉痕が残る。496から499は円盤状の底部が作り出されており、496から498には枝葉痕が確認できる。500は平底の甕の底部で、底面に枝葉痕が残る。501は平底の壺の底部で、底面に枝葉痕が確認できる。502から526は炊飯具の破片である。502から515は甑の破片で、いずれも筒抜け式のものである。502から513はやや内傾気味の蒸気口縁をもつもので、514、515は外反気味の蒸気口縁をもつものである。516から526は竈形土器の破片である。516から518は形状、胎土などから竈形の掛口部分と判断した破片である。519から524は焚口部分の破片で、519から521が焚口上部、522から524は焚口の下位部分周辺の破片であると考えられる。525、526は焚口側縁に付属する庇の破片と考えられる。527は、大きく口縁部が開く小型の甕型の土器であるが、用途等は不明である。胴部以下を欠損しており、全体の形状もはっきりしない。内面には粘土紐のつなぎ目が明瞭に残り粗雑な印象を受けるが、焼成自体は非常に良好である。外面は工具によるナデ、内面はユビナデが施されている。類例を見つけることのできない土器であり、日向、あるいは列島外からの搬入も視野に入れて、今後検討すべきかもしれない。



第83図　1区遺構外出土遺物⑦（S=1：4）



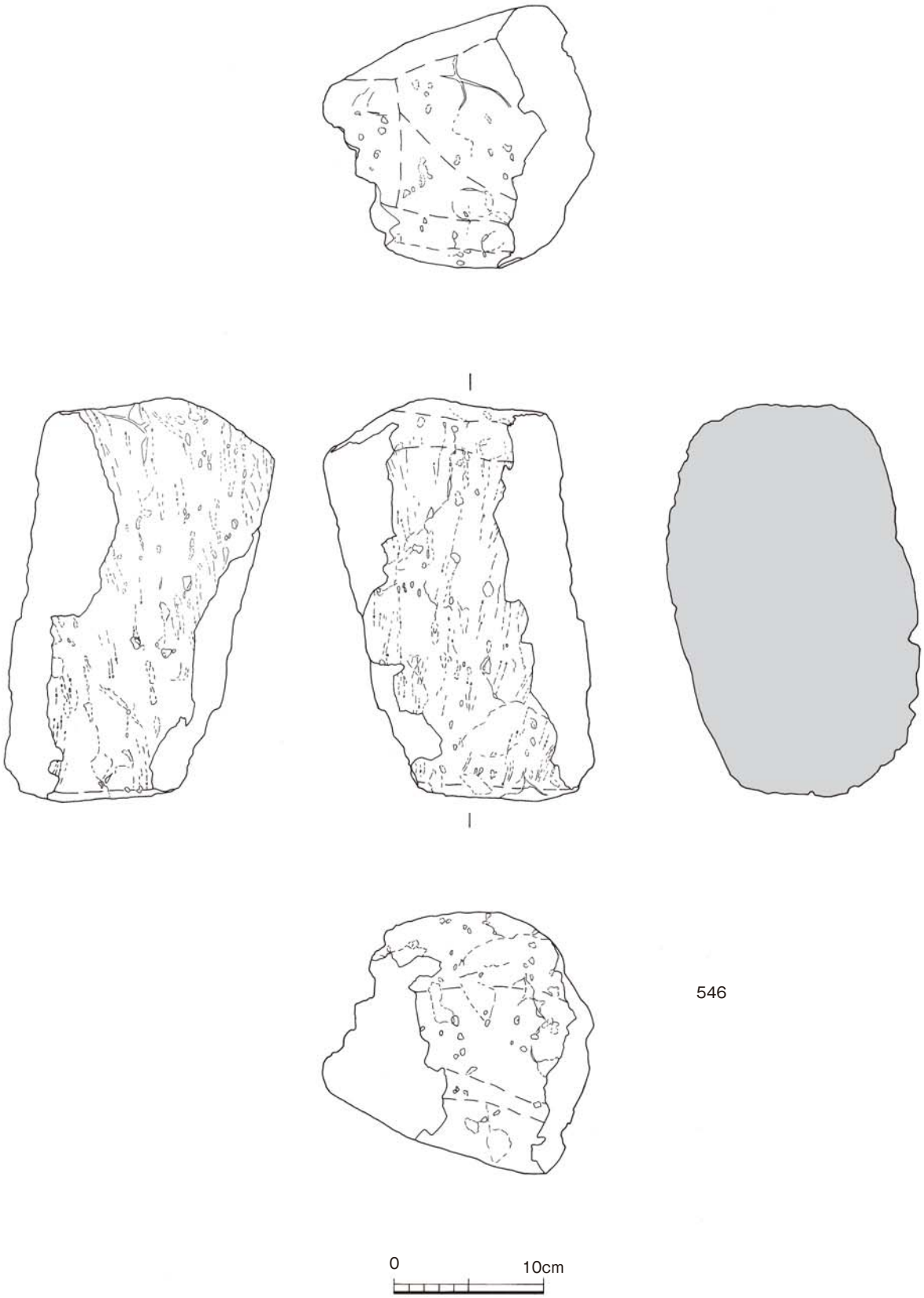
第84図　１区遺構外出土遺物⑧（S=1：4）



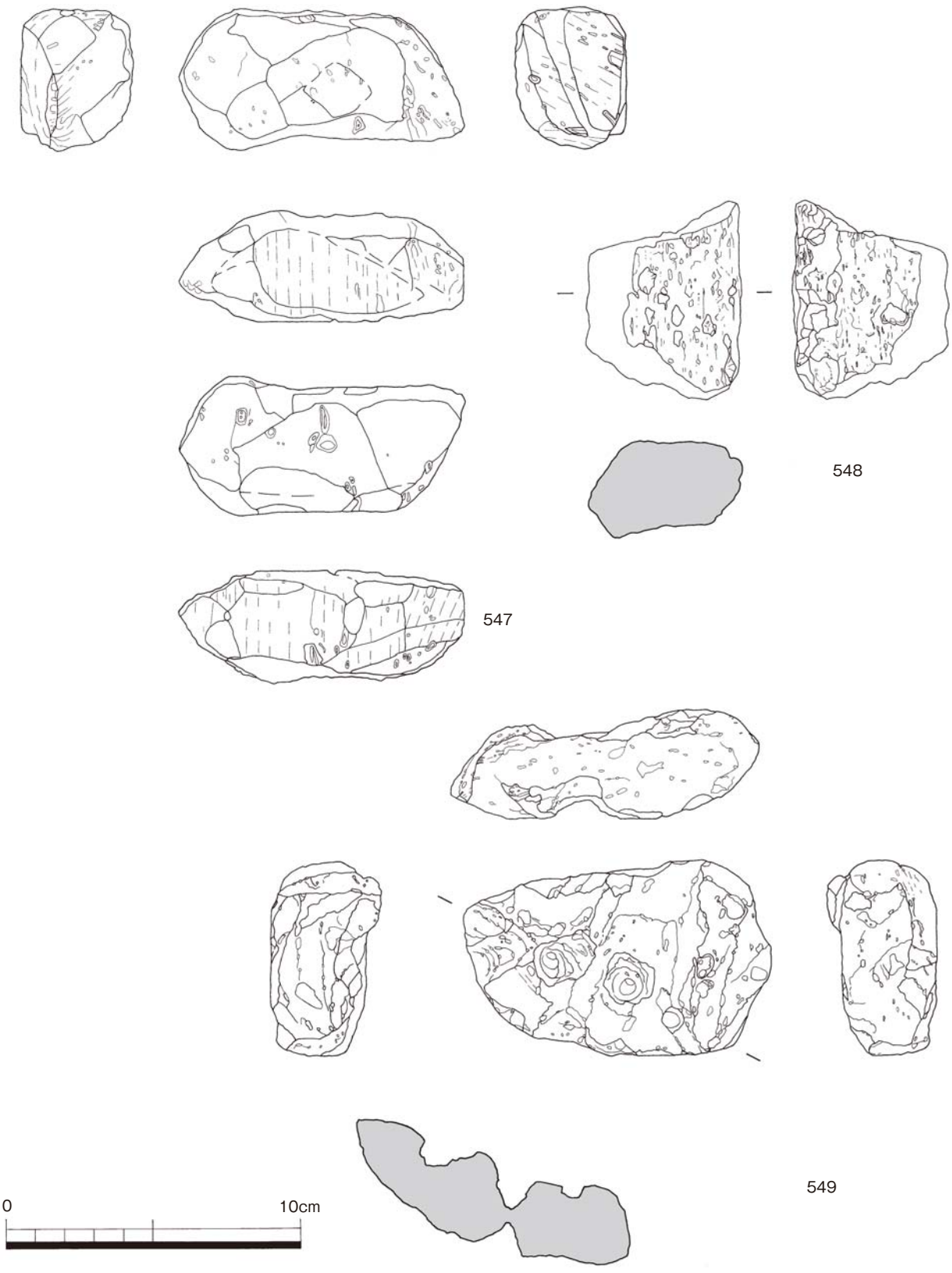
第85図　１区遺構外出土遺物⑨（S=1：4）

528から545は古代以降の土師器である。528から534は無高台の坏、535から538は高台付きの坏である。539から545は土師皿である。

546から555は石製品である。546から549は軽石製品で、残存部分で４面が面取りされていることがわかる。形状からは、なんらかの構造物の一部であると考えられる。547は各面が面取りされている軽石製品であるが用途などは不明である。548、549についてもなんらかの石製品であると思われるが、用途ははっきりしない。550から555は砥石である。550、551は天草砥石製と考えられる。552から555は砂岩製で、554については残存部に敲打痕が残り、槌として使用された可能性も考えられる。



第86図　1区遺構外出土遺物⑩（S=1：4）



第87図　１区遺構外出土遺物⑪（S=1：2）

第88図　１区遺構外出土遺物⑫（S=1：2）

第５節　２区の遺構と遺物

２区では竪穴建物３軒、溝状遺構１条、土坑１基が検出された（第89図）。遺構の全貌が明らかとなったものは少ないが、13号竪穴建物では竈形土器が完形に近い状態で出土するなど、大きな成果が上がっている。また、12号竪穴では二次焼成を受けた土器に混じり、被熱し赤く変色した軽石も同時に出土している。５号溝状遺構からは、甑、竈形土器片などが出土している。

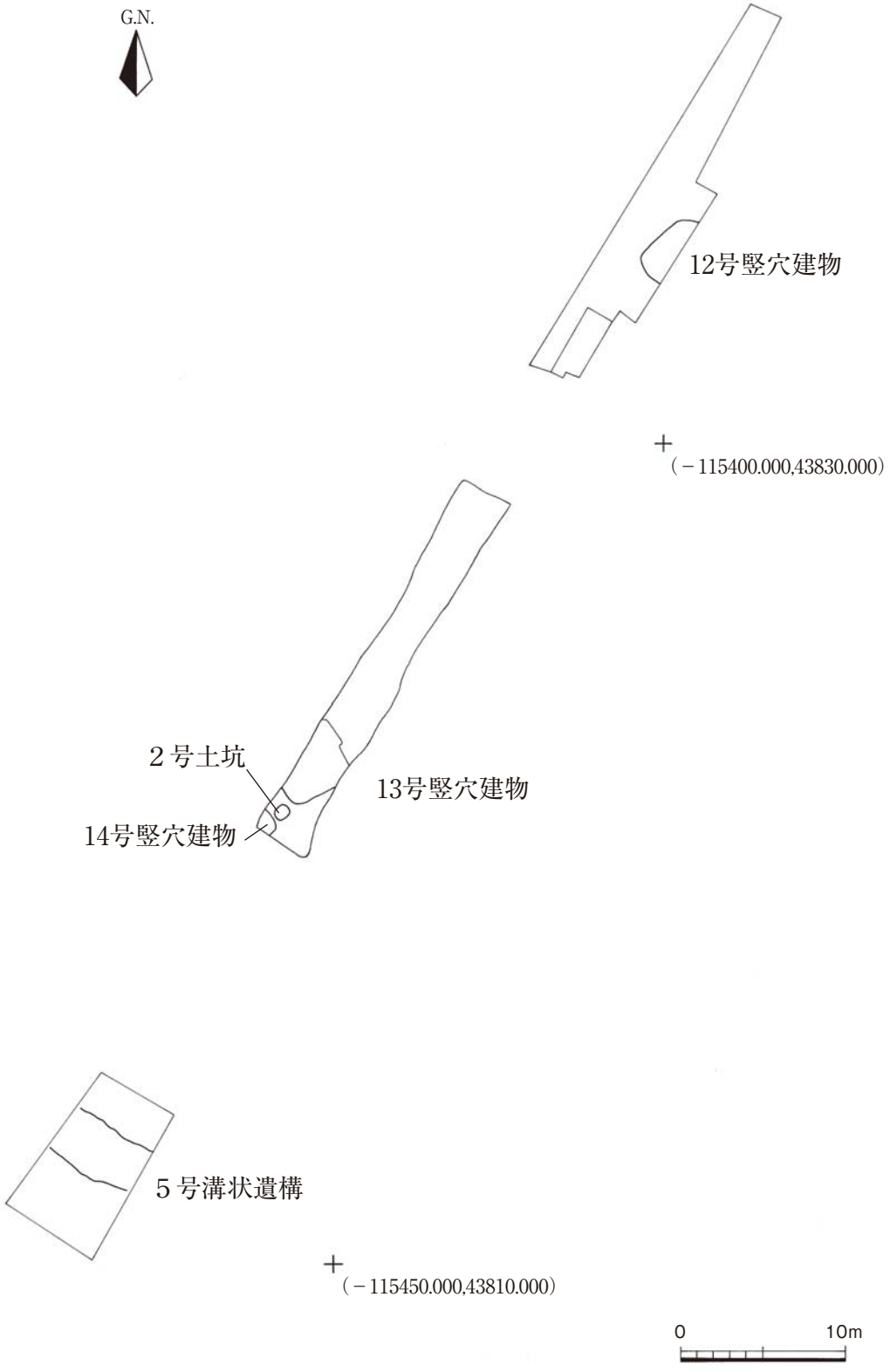
（１）12号竪穴建物

遺構【第90図】　２区の北側、東壁に接して検出された竪穴建物である。遺構西側の一部が検出されており、一辺4.5m前後の方形竪穴建物が復元できる。遺構は床面部分がかろうじて残存しており、検出範囲の狭さもあり、得られた情報は決して多くない。出土遺物の多くは、二次焼成を受けており、被熱して赤変した軽石も多く出土している。竈、炉などの屋内施設があった可能性がある。

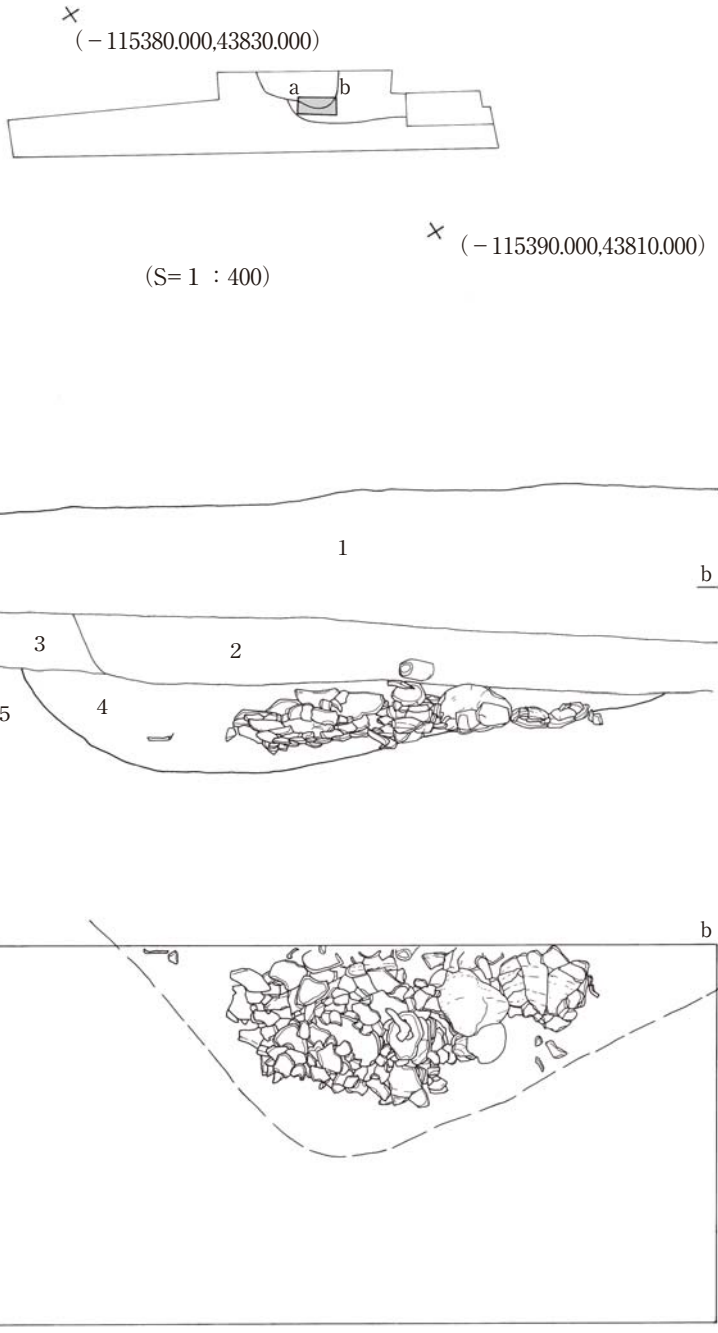
遺物【第91図～第96図】　556、557は須恵器である。556は坏蓋、557は壺の頸部から肩部分である。557は、頸部にカキメが巡り、外面が格子タタキ、内面に同心円の当て具痕が残る。

558から577は土師器の坏類で、558から560は胴部に屈曲をもつものである。561から563はやや湾曲しながら口縁部に達するもので、564から567は口縁端部が外反するものである。568から570は直線的に口縁部まで達するもので、571は小型で深い形状、572は浅く大きく皿状に開く。なお、560、561、564、568、575、576、574、577の底部には枝葉痕が確認できる。578から581は高坏で、578は坏部中位に屈曲部をもつもの、579は端反りで湾曲する。580、581は脚柱部である。582から619は甕である。582から584は小型の甕、585から588は中型で口縁に向かって直線的に開くもので、総じて作りが荒く、粘土紐のつなぎ目が目立つものが多い。589から599は球胴のものである。600から603は長胴で口縁部が外側に屈曲して開くものである。604は半球状の胴部で口縁部に向かい大きく湾曲しながら開いている。605は口縁部が窄まっていく甕である。606から614は頸部が屈曲するタイプの甕の破片で、615は甕の胴部片である。616は平底で口縁部まで直線的に立ち上がる甕で、底部には枝葉痕が確認できる。617から619は甕の底部片で617、618には枝葉痕が残る。620から632は壺である。620は肩部に線刻がある。なんらかの文様、もしくは絵画になるようだが、詳細は不明である。他の遺物からは６世紀後半代に収まる時期であるかと考えられるが、この時期の土師器になんらかの図柄が確認できるのは異例であろう。624から627についは底部に枝葉痕が確認できる。630、631は口縁部が窄まり胴部が張る小型のもので、非常に丁寧なつくりである。632は小型の球胴の壺で、口縁部を欠損している。底部付近はヘラケズリで調整されており、比較的丁寧な作りである。633から643は甑である。いずれも筒抜け式のものである。644から646は形状、胎土等から竈形土器の一部と判断した。644は焚口縁に付属する庇が剥落したもので、645、646は竈形土器の基部であろう。647は器種不明の土師器片である。648は土製の小玉、649は鉄滓である。

650は軽石を平たく加工したもので、用途は不明であるが、被熱して一部赤変している。

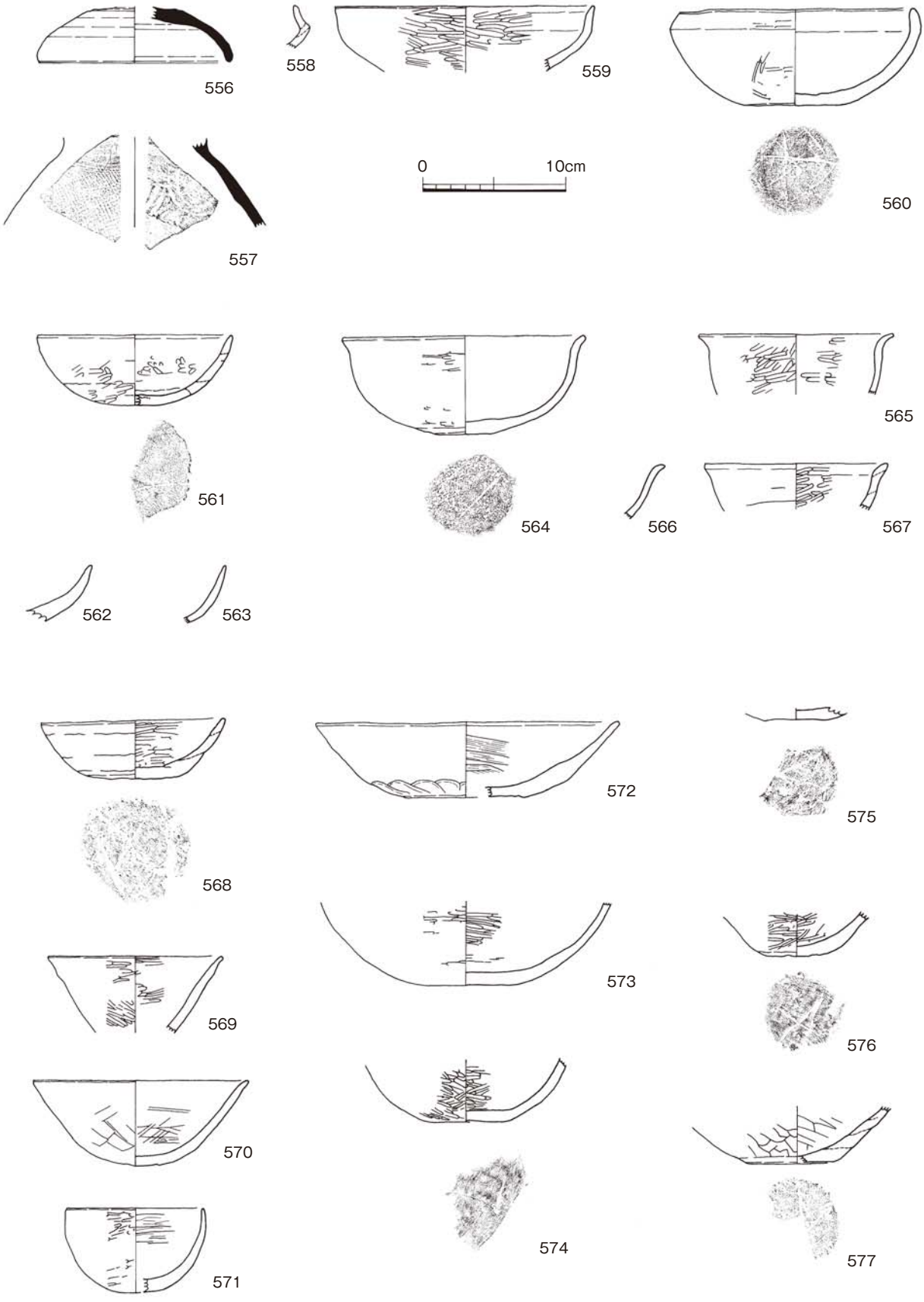


第89図　２区遺構分布図（S=1：400）

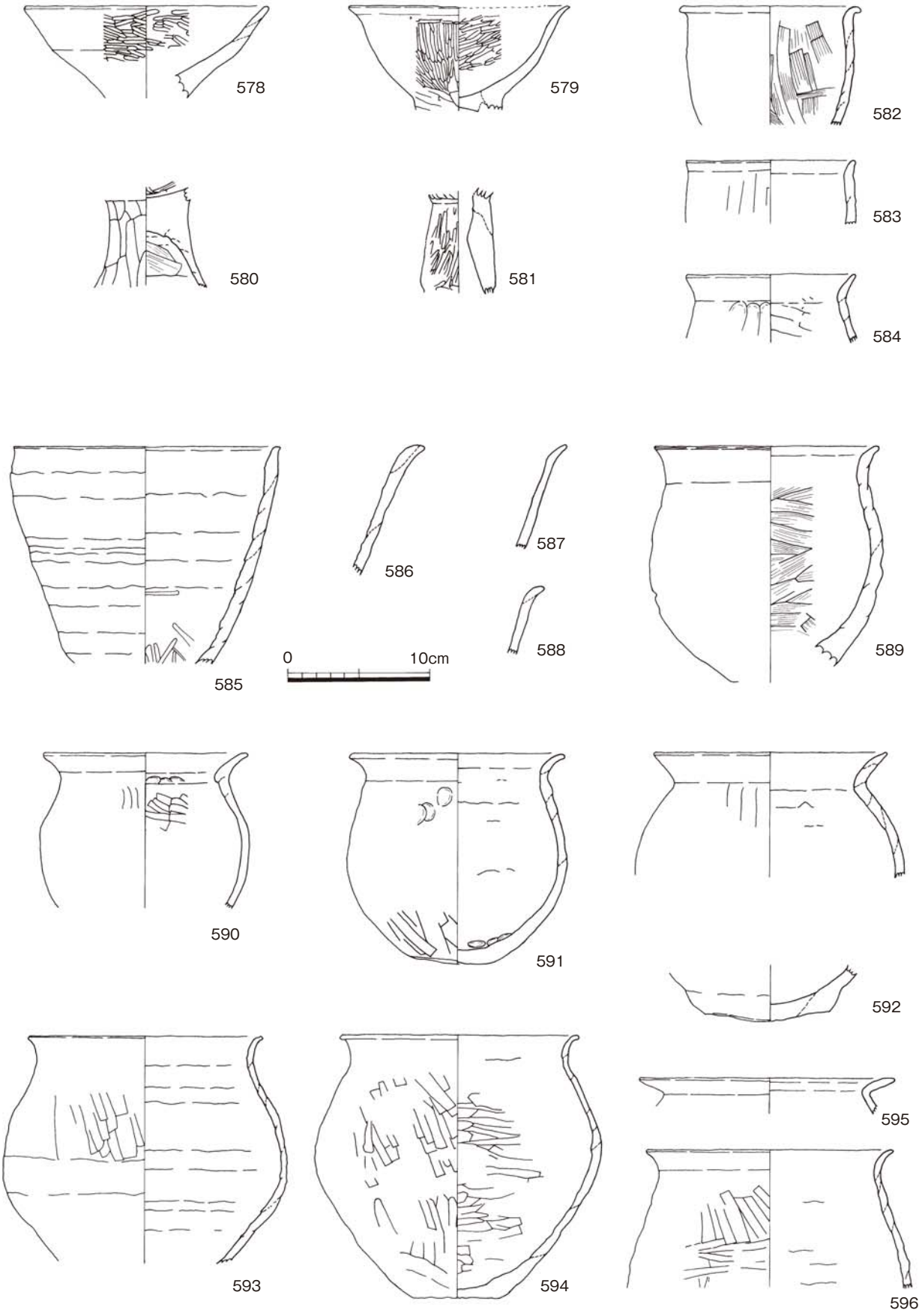


1　黒褐色粗砂（現代造成土）
2　灰黄褐色粗砂　非常に硬くしまっている。
3　暗褐色粗砂　古墳時代遺物を多く包含する。
4　極暗褐色粗砂　12号竪穴建物埋土。
5　灰オリーブ色粗砂　砂丘基盤層

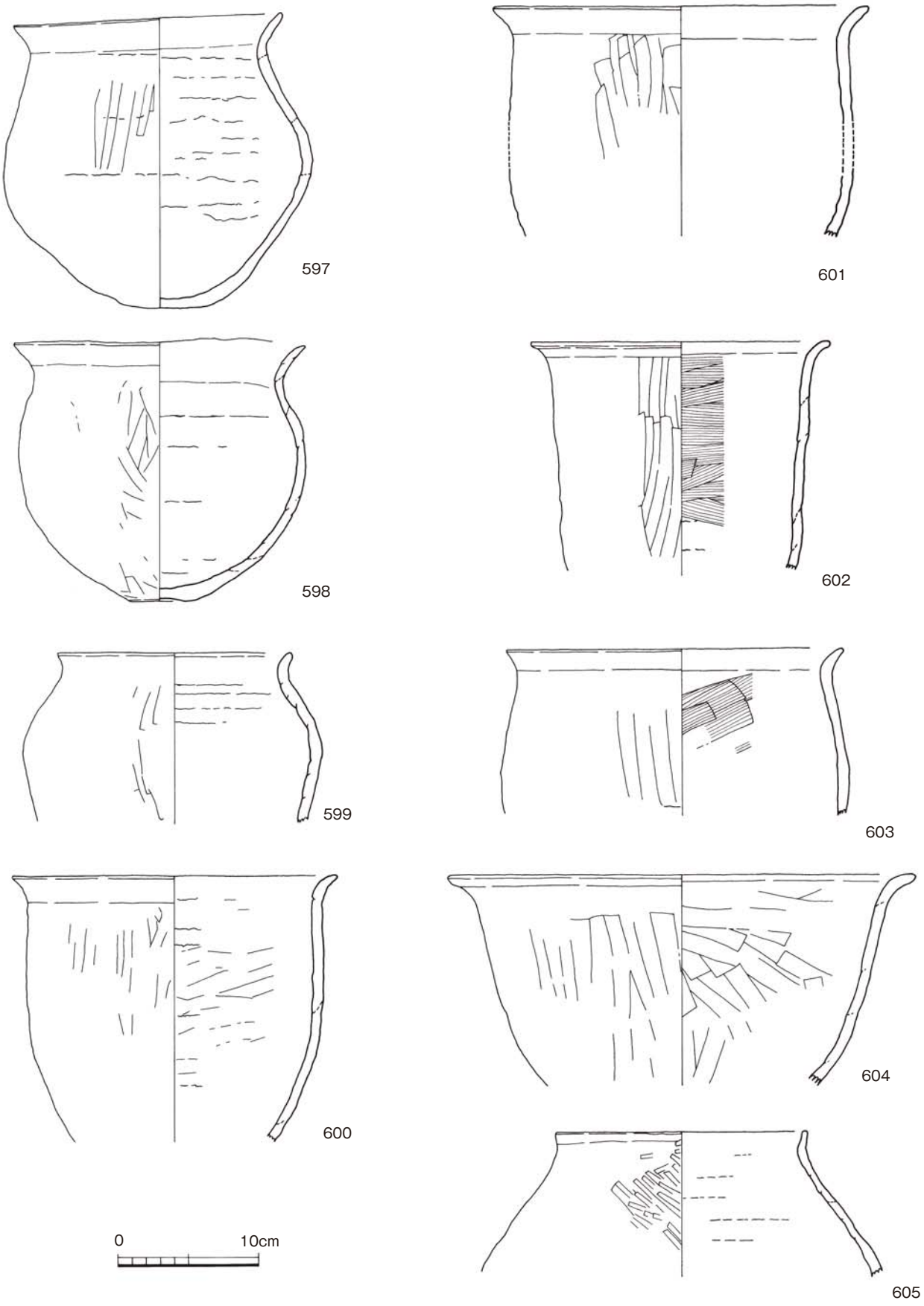
第90図　12号竪穴建物遺物出土状況及び土層断面図（S=1：20）



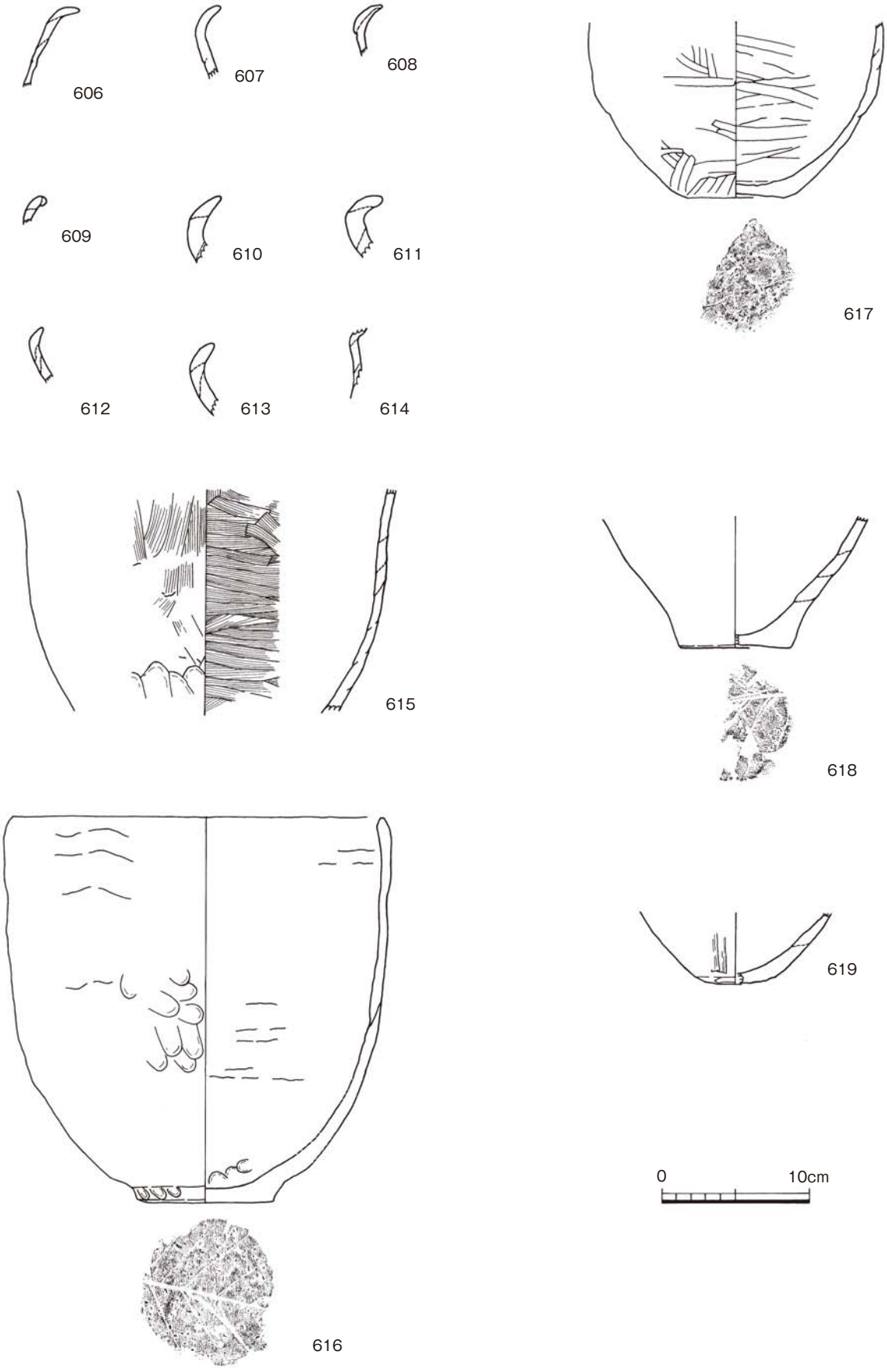
第91図　12号竪穴建物出土遺物①（S=1：4）



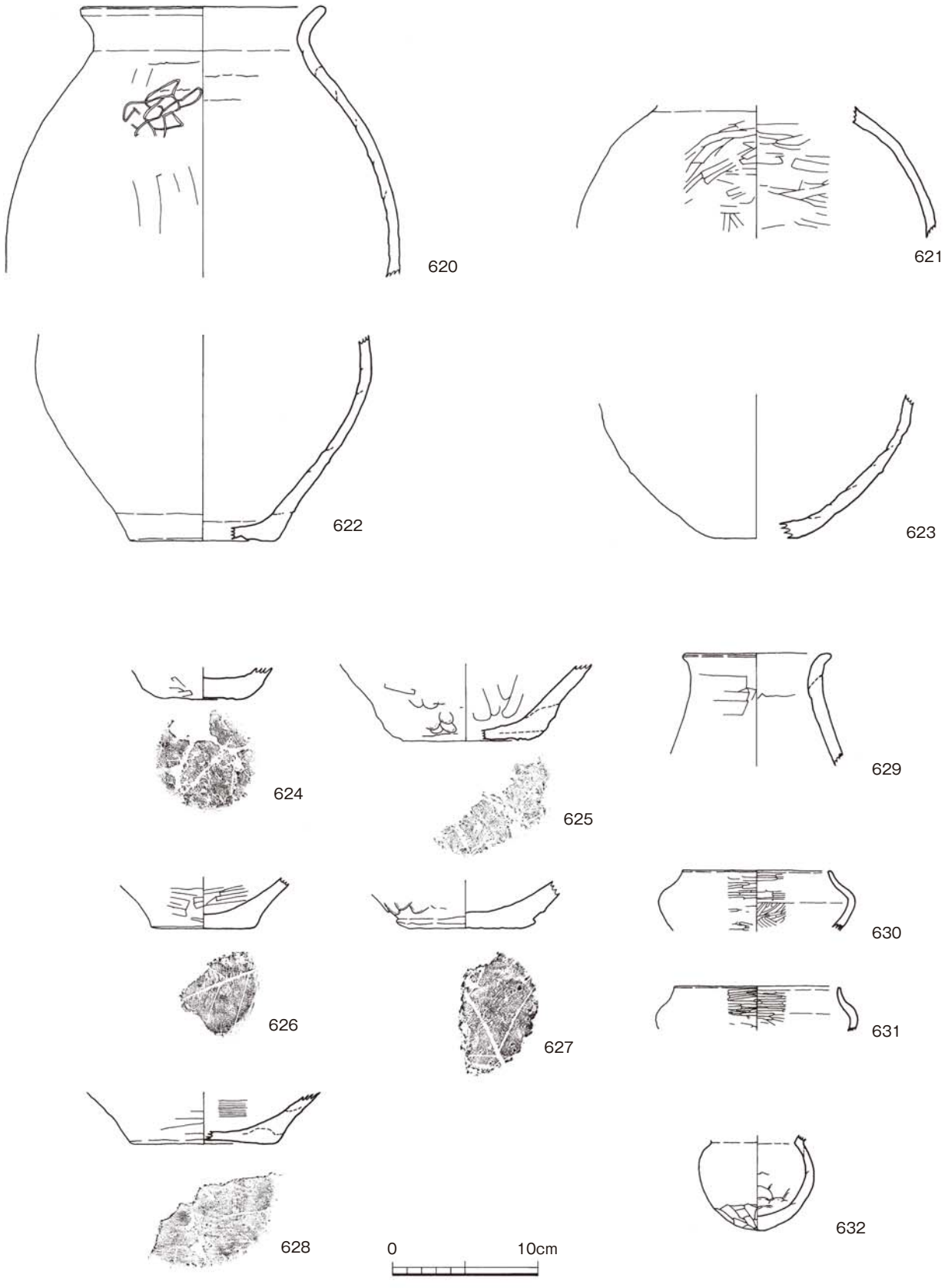
第92図　12号竪穴建物出土遺物②（S=1：4）



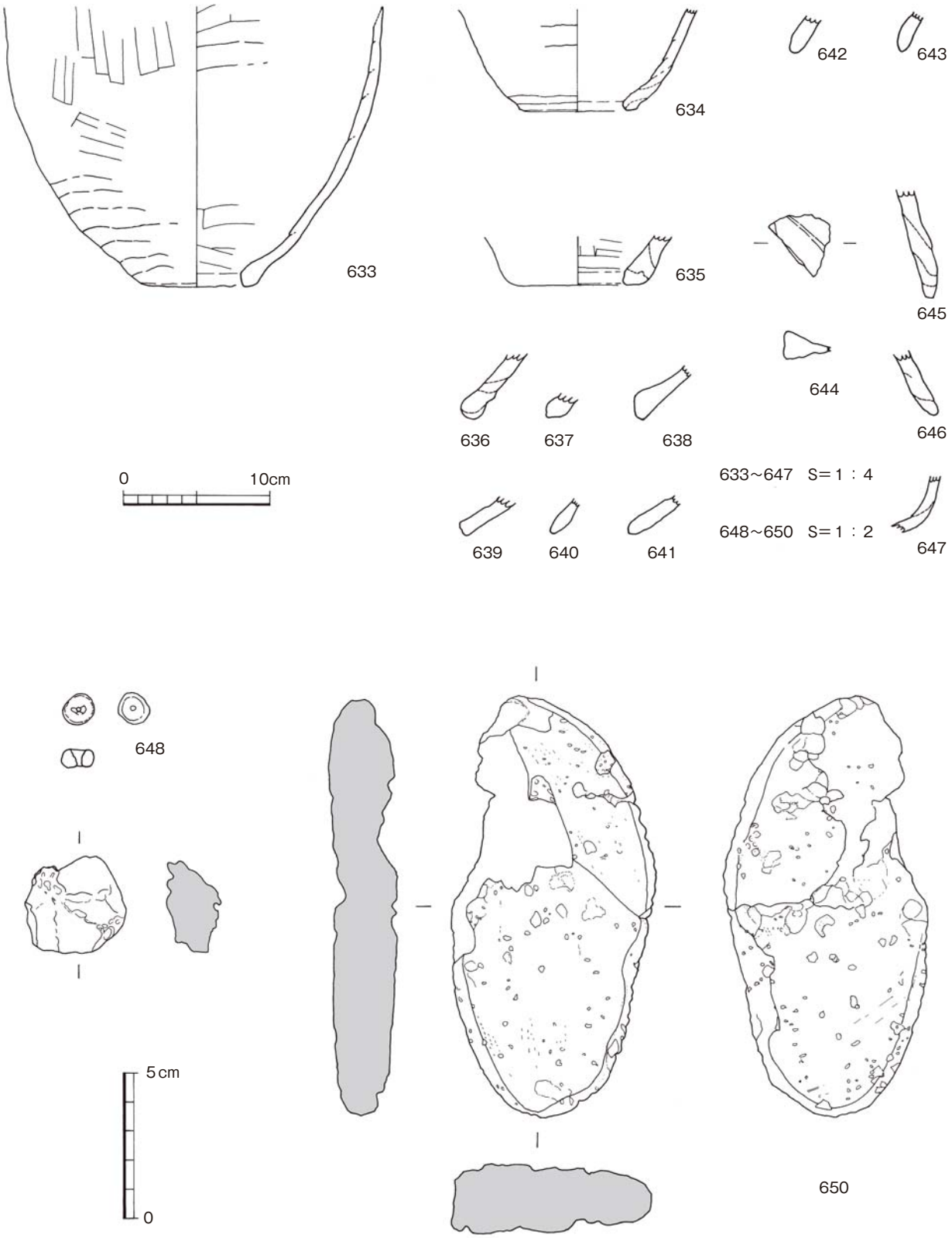
第93図　12号竪穴建物出土遺物③（S=1：4）



第94図　12号竪穴建物出土遺物④（S=1：4）



第95図　12号竪穴建物出土遺物⑤（S=1：4）



第96図　12号竪穴建物出土遺物⑥

（２）13号竪穴建物

遺構【第97図】　２区の中央部分で確認された方形の竪穴建物である。遺構の南東角と北側が調査区外となっており、全体の2/3ほどが調査された。一辺4.3m程度に復元でき、柱穴、壁溝、竈などの屋内施設は確認できなかったが、南側壁面に接するあたりで、竈形土器（第100図669）が出土している。また、床面近くから馬歯（第101図672)、凹字形鉄器（第101図670）が出土している。

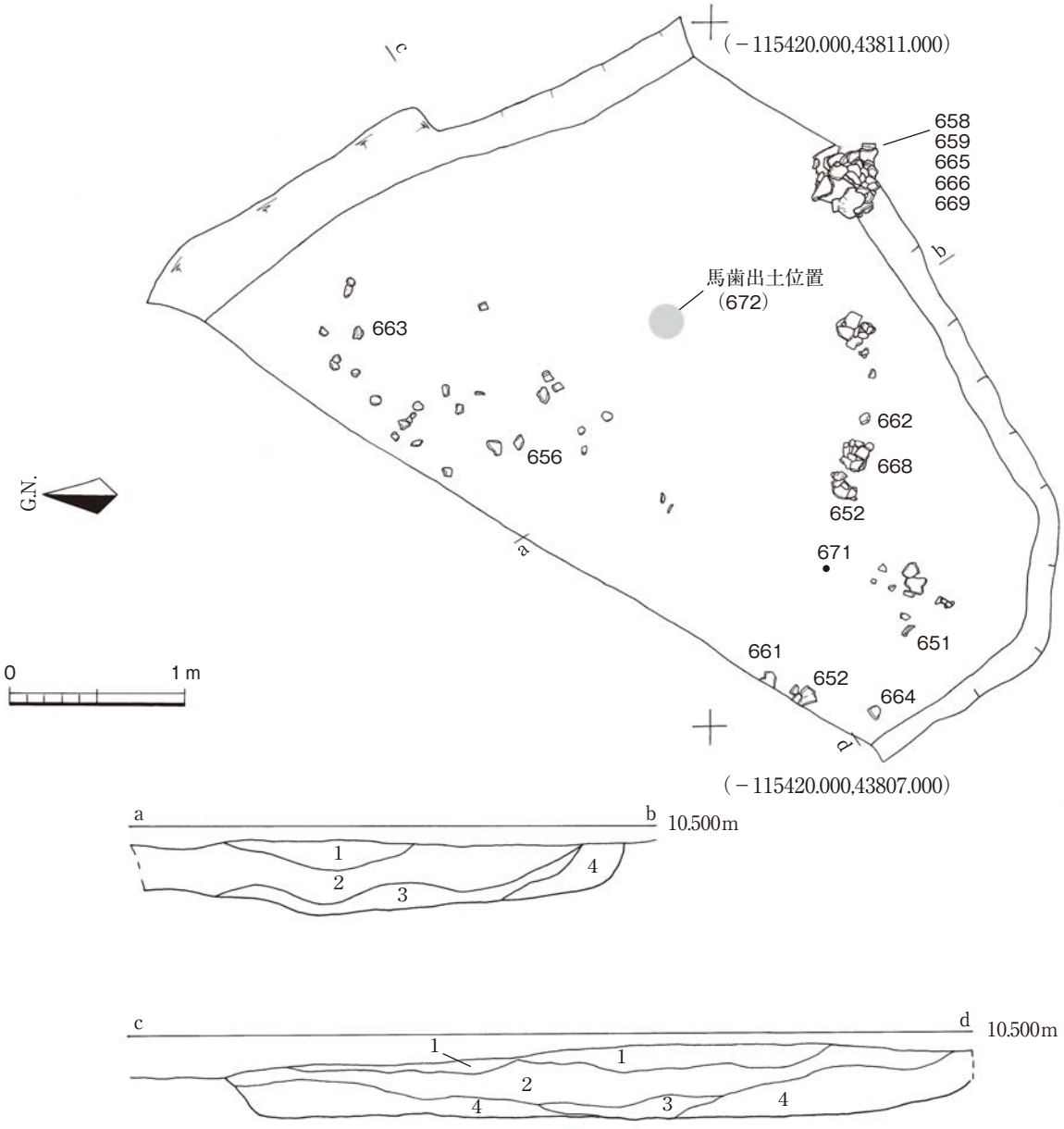
埋土は土質、色調ともに非常に似通っており、分層は困難であったが、粒子の大きさやしまり具合を頼りに行った。

遺物【第98図～ 101図】　651と652は須恵器である。651は須恵器の坏身で、たちあがりの形状からTK10型式に併行するものと考えられる。652は坏身の底部で、ヘラ記号が確認できる。

653から669は土師器である。653、654は坏である。653は比較的雑な作りで、器表に粘土紐のつなぎ目が確認できる。654は、内外面ともに丁寧にミガキが施してあり、内面の見込み部分に放射状の線刻が施してある。655は手捏ねの小型の土器で、用途等は不明である。656は高坏の坏部で、内外面ともにヘラミガキで丁寧に調整される。657は高坏の脚柱部で裾部は接合面で剥落したようである。658から667は甕である。658と659は口縁部が大きく開き平底長胴の甕である。いずれも669と同じ場所から重なって出土しており、形状、大きさなどから竈形土器とセットになる羽釜様の用途であったと判断したい。660はやや球胴に近いが、形状、胎土などから、658、659と同様な甕であったと判断した。661から664は甕の一部と判断した破片である。665､666は球胴の甕で､658､659及び669と重なって出土している。667はやや長胴で胴部が歪んだ甕である。668は把手付鉢で把手部分が欠損している。底部は枝葉痕が確認できる。669は竈形土器で、ほぼ完全な形が復元できた。掛口の周囲にドーナツ状の庇が取り付けられ、背面に径2.5㎝程度の煙孔が穿たれている。基部は先細りで貧弱である。内外面ともに工具によるナデ調整が施され、丁寧に仕上げられている。

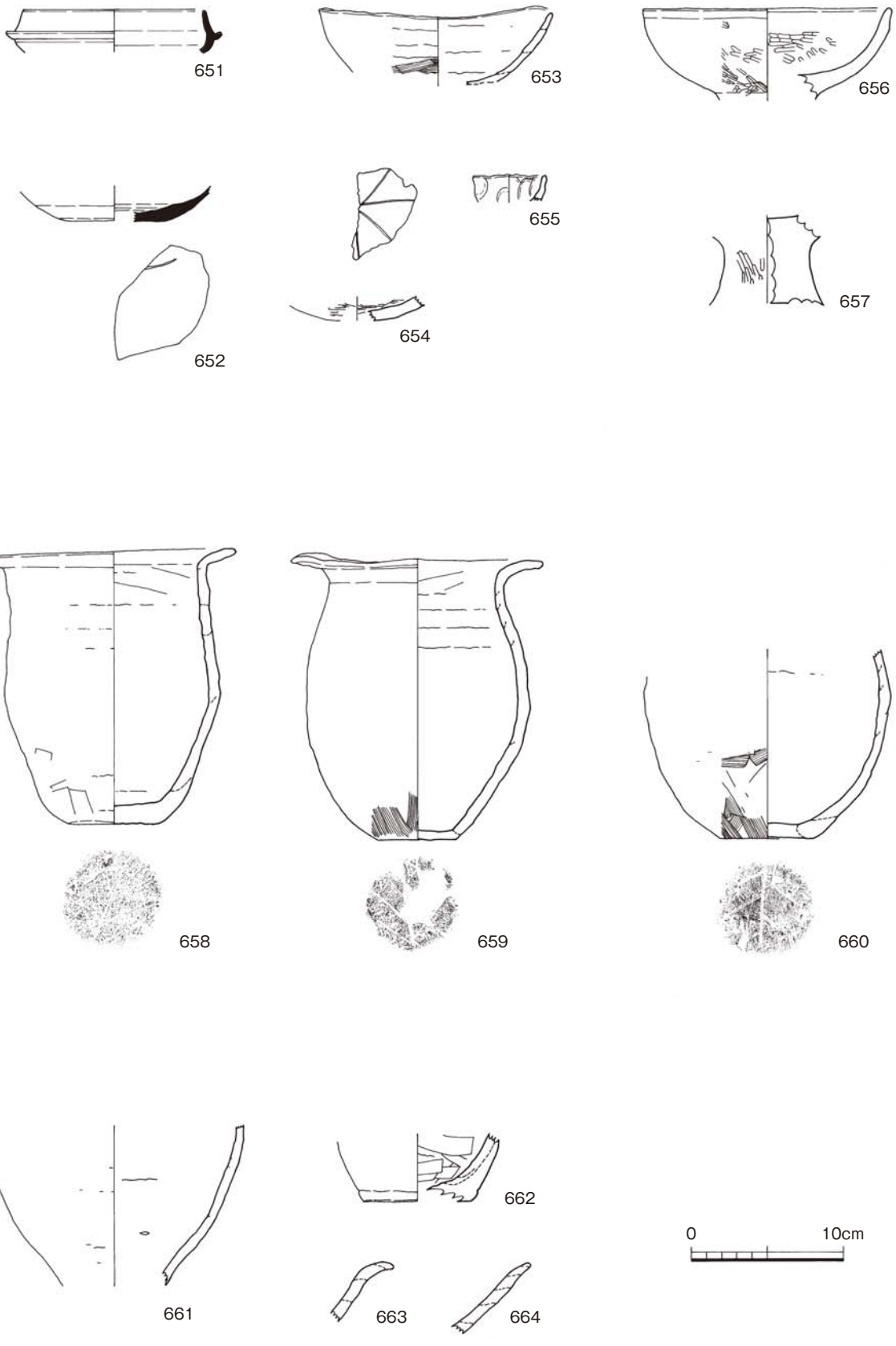
670は凹字形鉄器である。木製の台に取り付けられ使用されたと考えられ、苧引き金や穂摘み具としての使用法が想定できそうである（後述)。671は鉄滓、672は馬歯である。672は床面近くに出土しており、馬の屠殺を伴うなんらかの行為が行われていたことを示していると考えられる。

竈形土器、把手付鉢、凹字形鉄器、馬歯の出土などは韓半島からの渡来的要素と考えられるが、竈形土器の形状は他地域に類例を見いだせず、胎土、製作方法ともに地元のものと考えられる。これは、把手付鉢も同様であり、生活様式自体は渡来色が強いが集落の構成員自体が渡来人であった可能性は低いと考えられる。

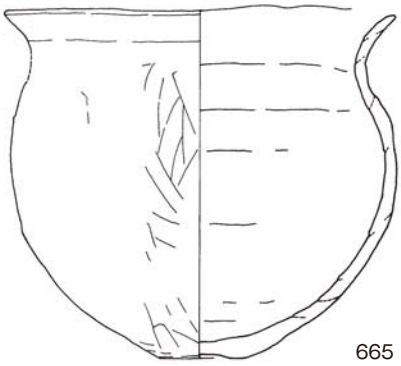


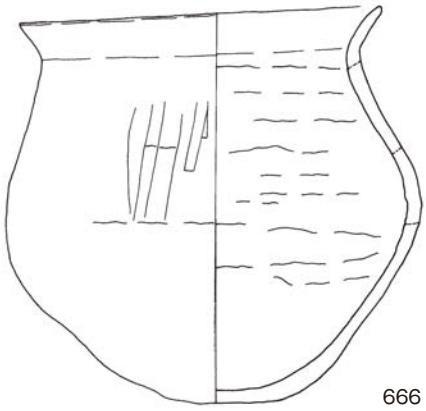
1　灰黄褐色粗砂
2　灰黄褐色粗砂　１に比べやや粒子が大きいか。
3　灰黄褐色粗砂　２よりもやや粒子が大く明るい。
4　灰黄褐色粗砂　ややしまりが強い。

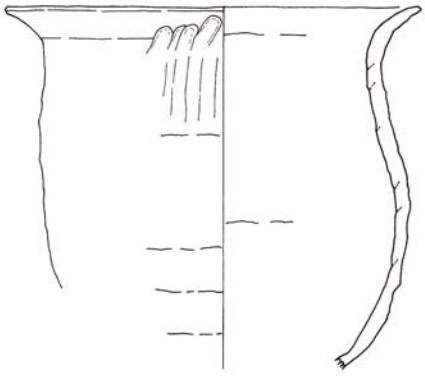
第97図　13号竪穴建物遺構平面図及び土層断面図（S=1：40）

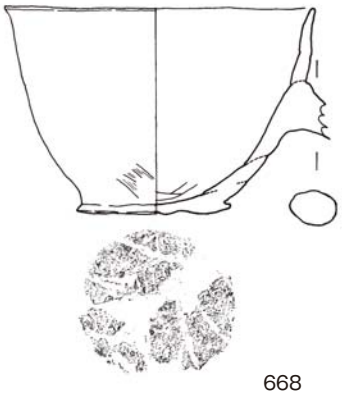


第98図　13号竪穴建物出土遺物①（S=1：40）

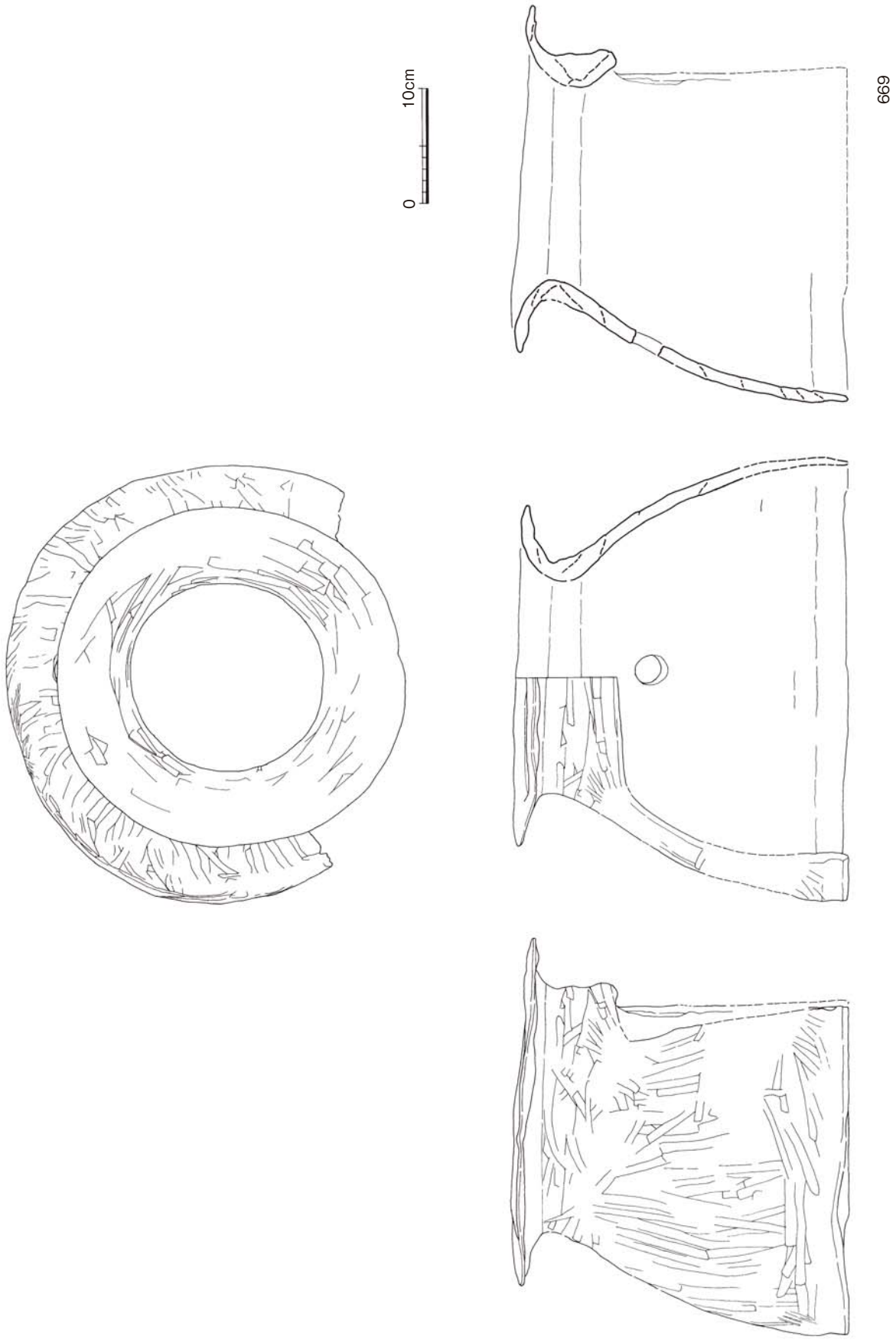




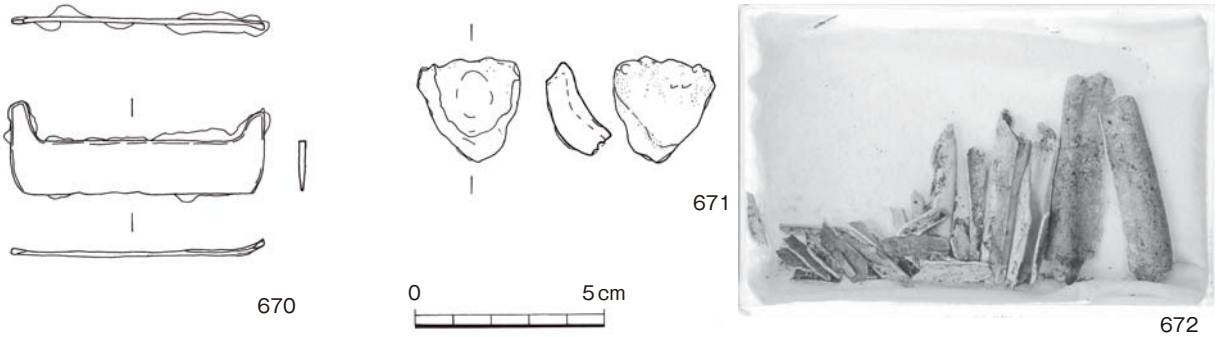




第99図　13号竪穴建物出土遺物②（S=1：4）



第100図　13号竪穴建物出土遺物③（S=1：5）



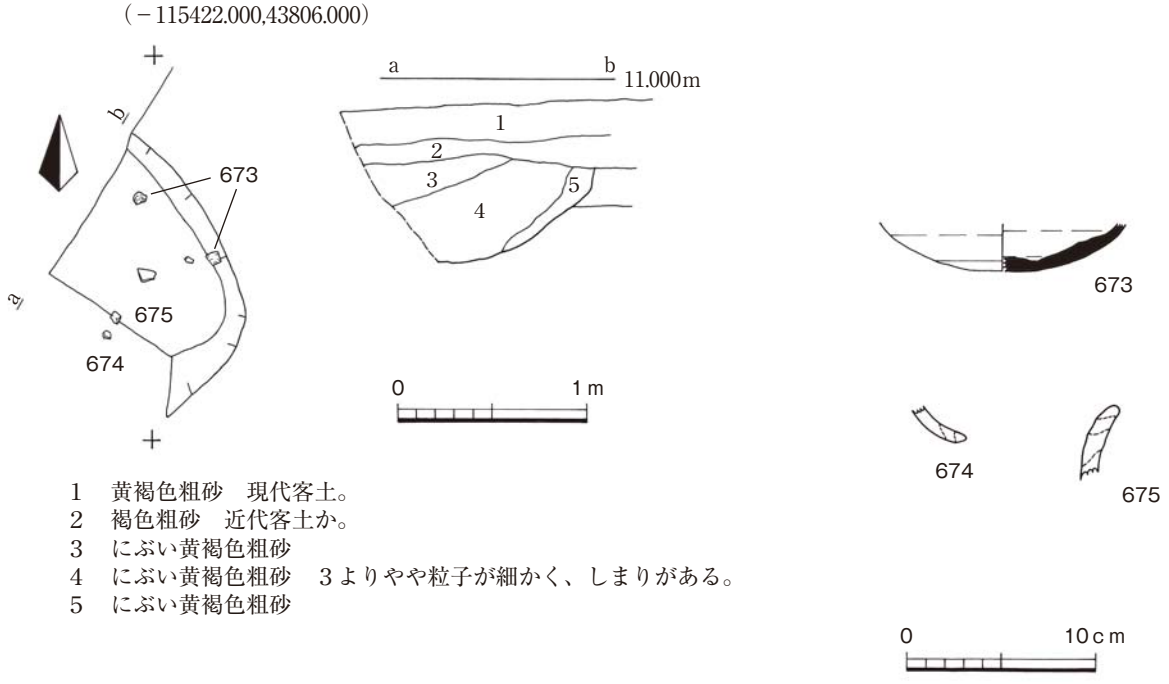
第101図　13号竪穴建物出土遺物④（S=1：2）

（３）14号竪穴建物

遺構【第102図】　２区の中央、西壁に接して検出された遺構である。遺構の大部分が調査区外であり、詳細が明らかでないが、埋土の状況等から竪穴建物と判断した。調査された範囲では、壁溝、柱穴、竈などの屋内施設は確認されていない。検出された範囲がわずかのため、遺構の規模、形状などは不明である。

遺物【第102図】　14号竪穴建物は、調査された範囲が非常に狭いため、出土遺物もわずかであった。ここでは、出土遺物で図化可能だったものを示す。

673は須恵器坏身の底部で674は土師器の脚部である。675は甕の口縁部である。小片が多く、出土状況も良好なものはないため、遺構の時期を決定づけることはできなかった。



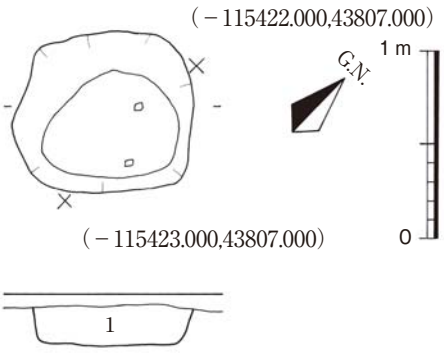
1　黄褐色粗砂　現代客土。
2　褐色粗砂　近代客土か。
3　にぶい黄褐色粗砂
4　にぶい黄褐色粗砂　３よりやや粒子が細かく、しまりがある。
5　にぶい黄褐色粗砂

第102図　14号竪穴建物（S=1：40）及び出土遺物（S=1：4）

（４）２号土坑

遺構【第103図】　13号竪穴建物と14号竪穴建物の間で検出された土坑である。規模は長軸で１ｍ弱、短軸では80㎝強を測り、平面形は歪な楕円形をなす。土層は分層が困難であった。性格、時期等の判断材料には乏しいが、竪穴建物のごく近辺で確認できていることから、貯蔵穴などの可能性も考慮すべきかもしれない。

遺物　土坑内からは、土師器片が２点出土しているが、いずれも小片であり、器種、時期などの判断は困難であった。また、図化に関しても行っていない。



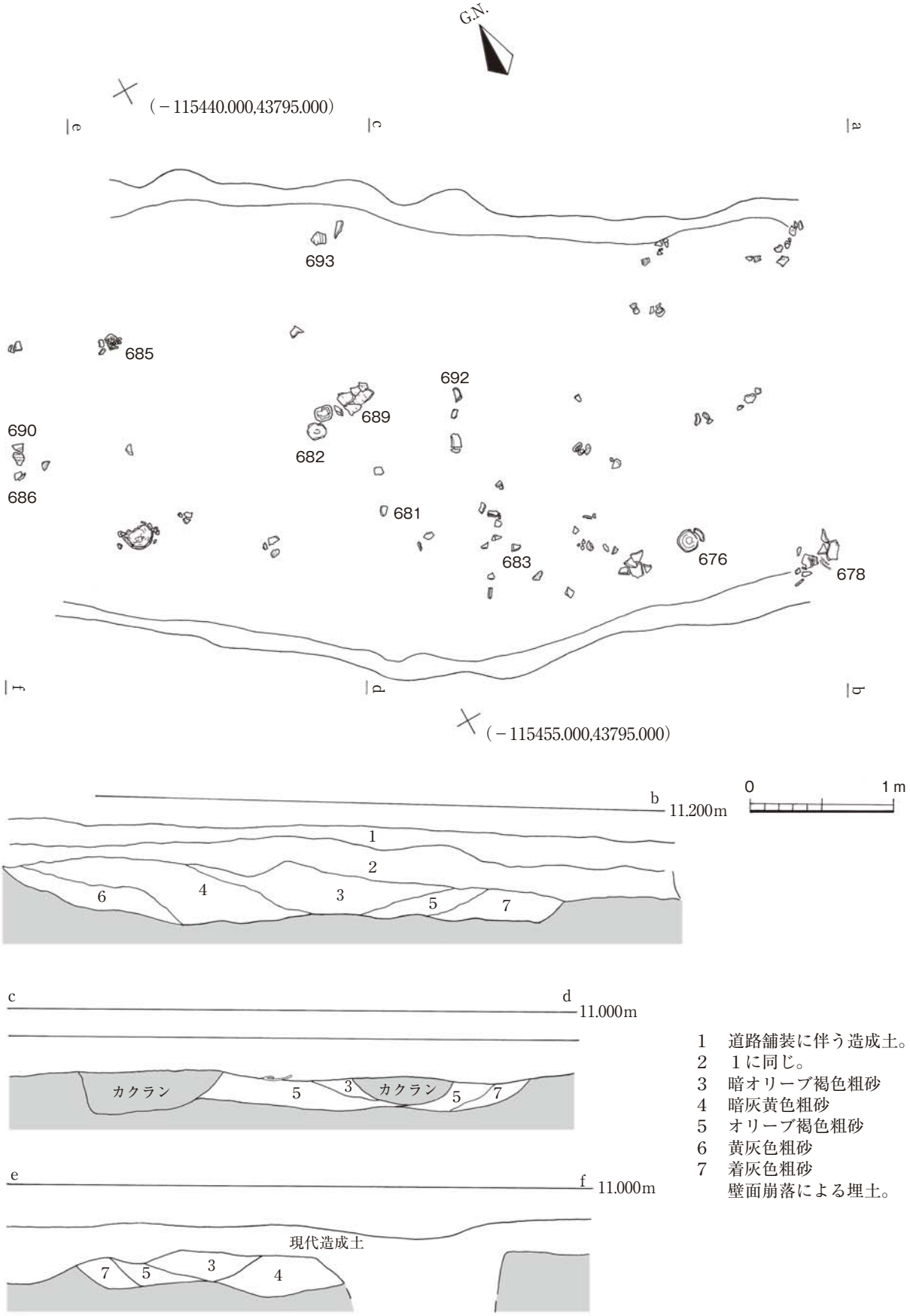
第103図　２号土坑（S=1：40）

（５）５号溝状遺構

遺構【第104図】　２区の南側を東西に非常に緩やかな弧を描いて横切る溝状遺構である。溝幅は検出面で３ｍ前後を測り、深さは検出面から20から40㎝程度である。遺構の性格付けをする根拠に乏しいが、この溝より南側の調査範囲で竪穴建物などの遺構を確認できなかったことから、集落を区画する溝ととらえることも可能かもしれない。また、溝内から竈形土器（第106図690）が出土していることも注意すべきだろう。

遺物【第105図】　676から679は須恵器である。676は須恵器の坏蓋で外面に自然釉がかかる部分とかからない部分があり、焼成時に部分的に重ねていたことがわかる。678と679は無蓋の坏身である。680から693は土師器である。680から683は坏で、680は体部に屈曲部があり内面にヘラ記号が確認できる。681から683は湾曲して口縁に達する坏である。682は平底をなし、683の口縁は大きく外反する。684、685は甕の口縁から体部にかけての破片で、686は球胴で小型の甕と考えられるものである。687は頸部に幅広の刻目突帯を巡らす、いわゆる成川式の壺である。688は壺の破片で、687と同様のものと考えられる。689は甑で、筒抜け式のものである。把手等は付属せず、粘土紐のつなぎ目などが目立つ荒い作りである。690から693は竈形土器である。690は掛口にドーナツ状の庇が付くタイプで、焚口から基部の近くまでが残存しているが、基部は剥落して残っていない。焚口縁には粘土が剥落した痕跡が確認でき、庇が付属していたことがわかる。粘土紐の接合痕が目立つ荒い作りである。691は焚口の一部で、外面には粘土が剥離した痕跡があり690同様、庇が付属していたことがわかる。692は形状と粘土紐の積み上げ状況から、竈形土器の掛口の破片と判断した。693は体部と焚口の一部で、粘土の接合状況や胎土は690に酷似するが、接点が確認できなかった。690と同様、焚口縁に粘土が剥離した痕跡が確認できる。また、外面の一部にハケメ調整が確認できる。

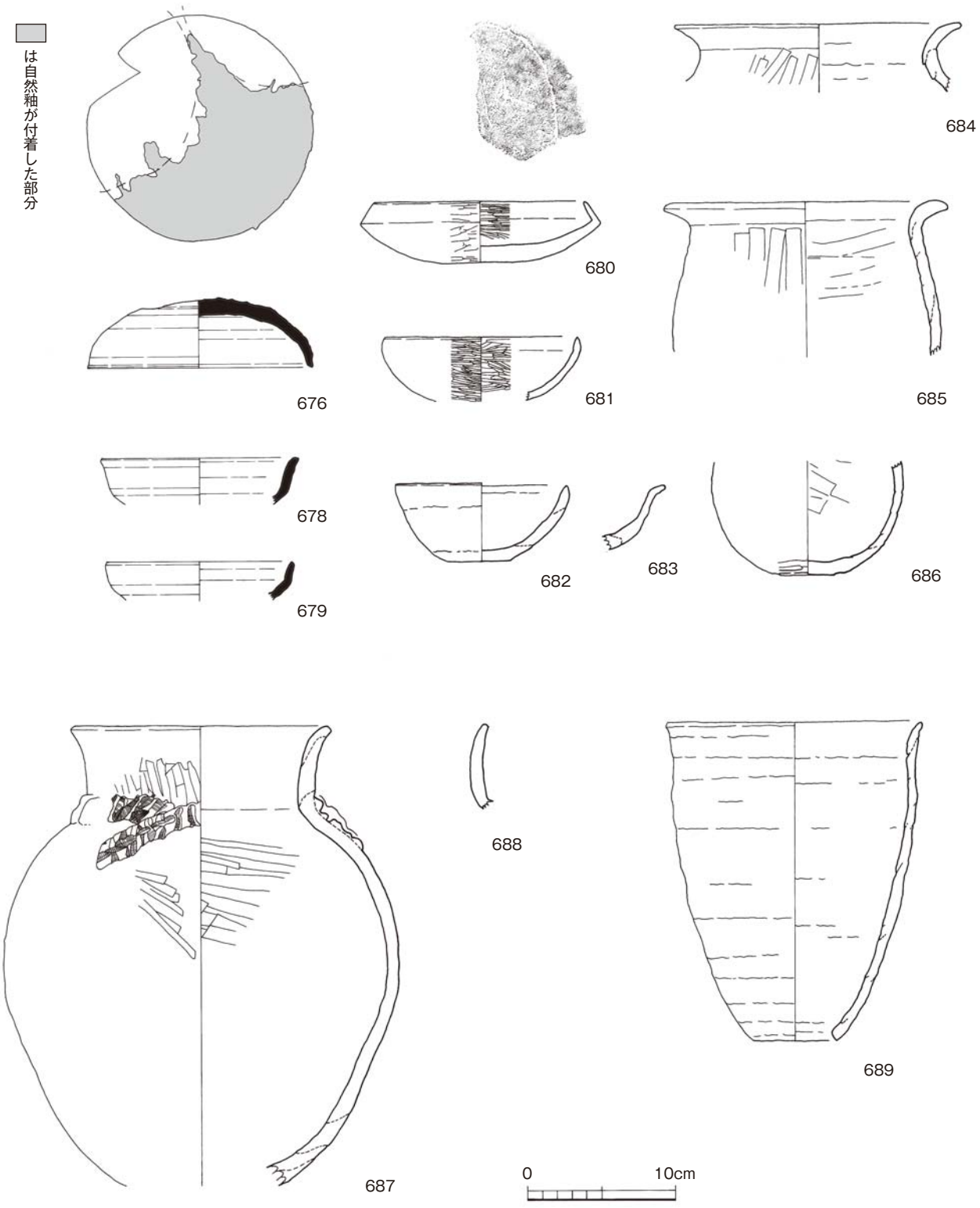
694は、端部の一部が折り曲げられた鉄片である。刃部などは確認できず、用途を判断するのは困難である。



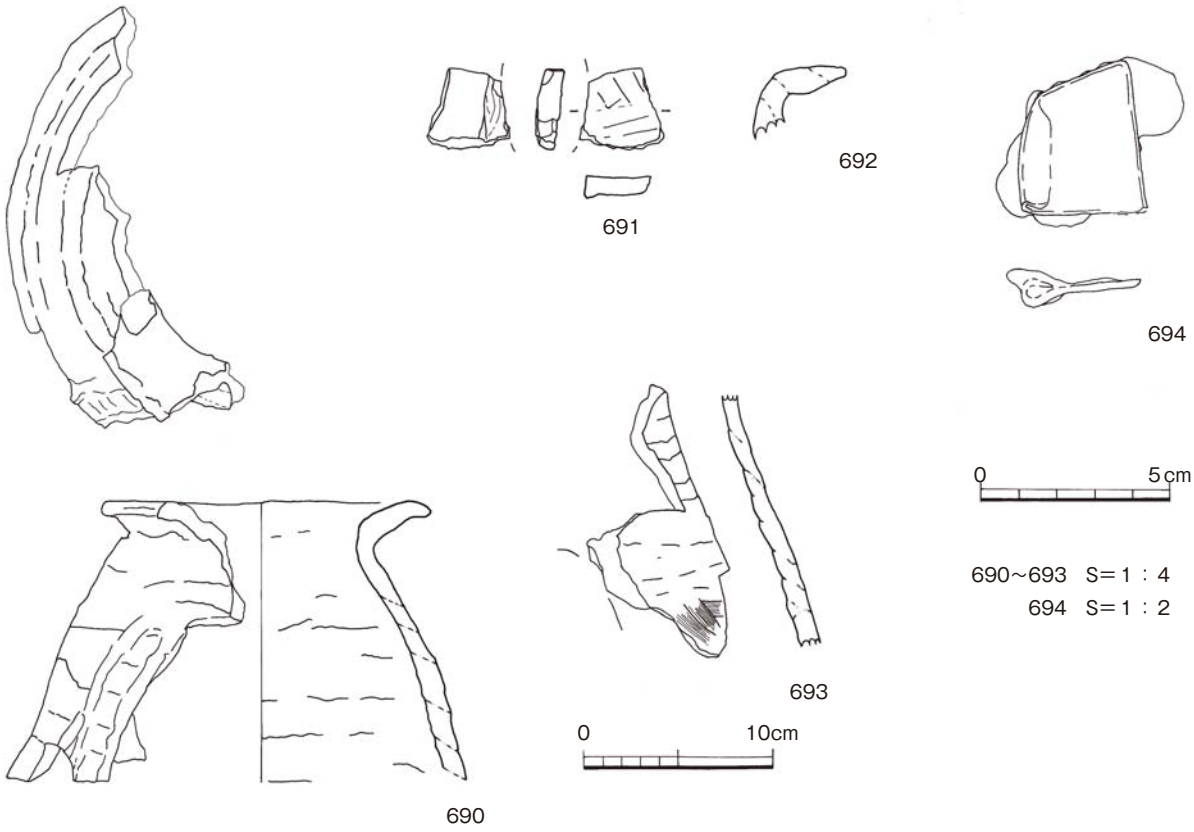
1　道路舗装に伴う造成土。
2　１に同じ。
3　暗オリーブ褐色粗砂
4　暗灰黄色粗砂
5　オリーブ褐色粗砂
6　黄灰色粗砂
7　着灰色粗砂
　壁面崩落による埋土。

5号溝状遺構埋土

第104図　５号溝状遺構平面図及び土層断面図（S=1：40）



第105図　５号溝状遺構出土遺物①（S=1：4）

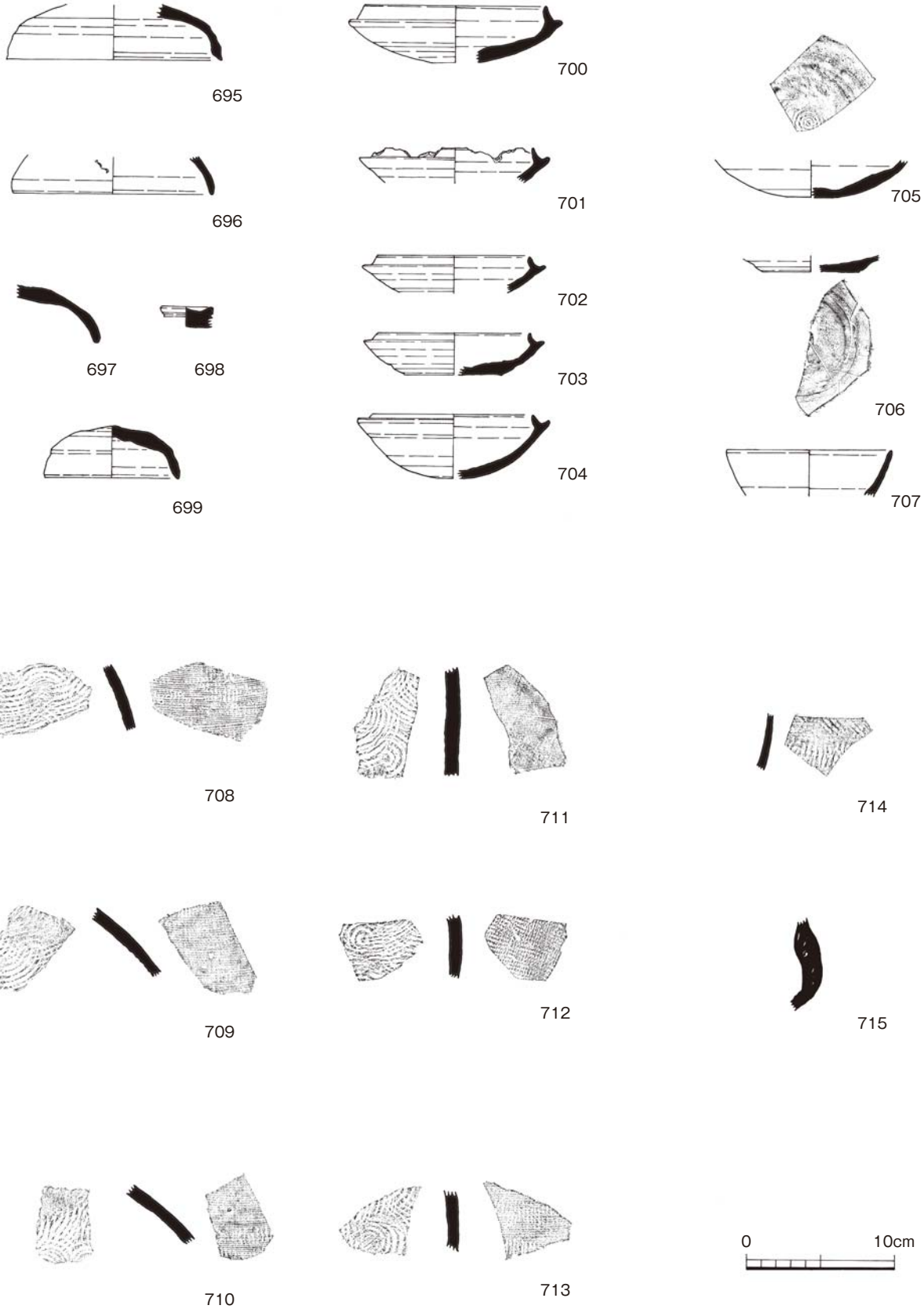


第106図　５号溝状遺構出土遺物②

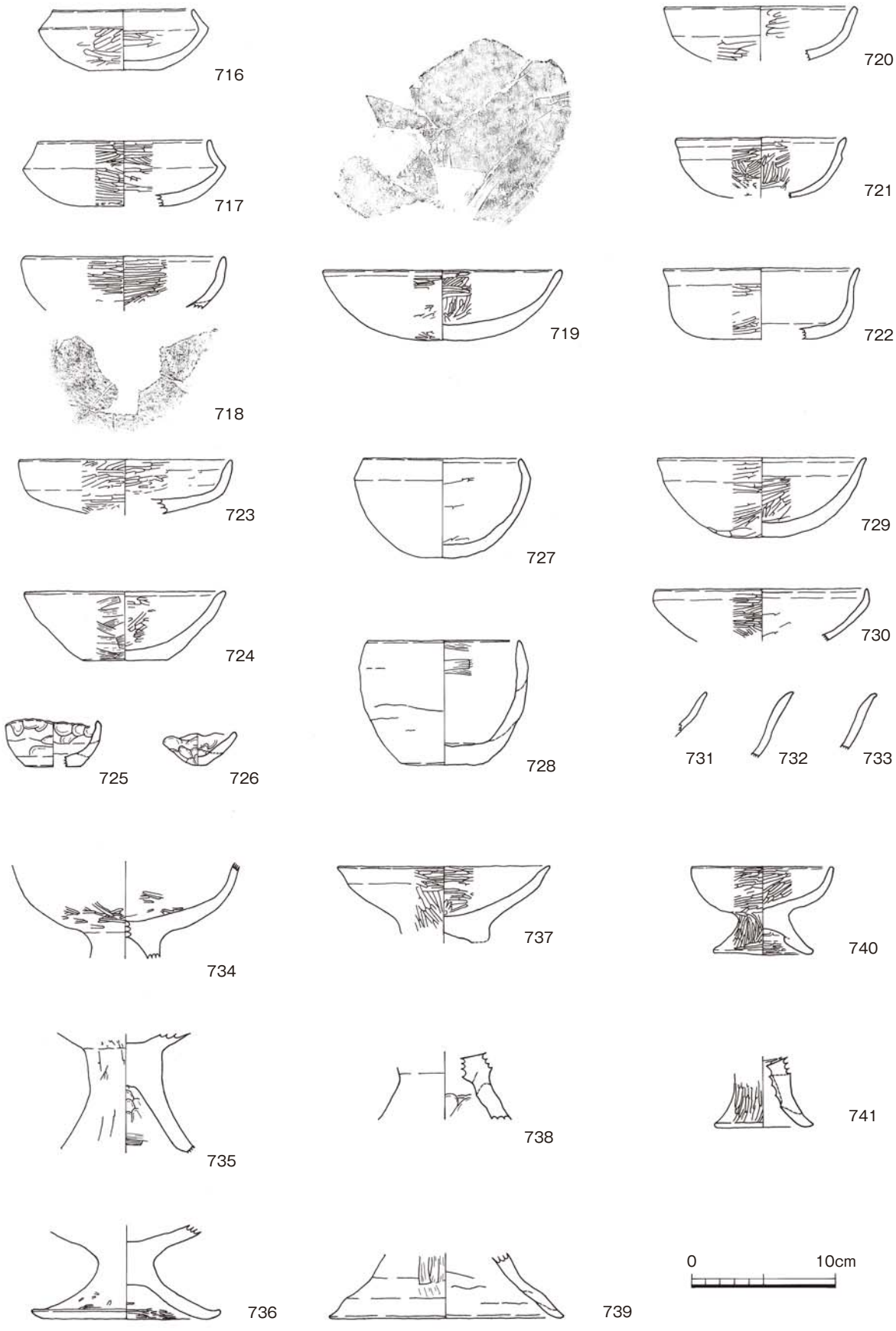
（６）遺構外出土遺物【第107図～ 117図】

695から715は須恵器である。695から699は須恵器の蓋で、698はつまみ部分、699は径が小さく、壺などの蓋であるかもしれない。700から701は須恵器の坏身で、701の口縁部は打ち欠いたように欠損しているが人為的なものかは確証を得ていない。705は坏の底部付近で、内面に同心円の当て具痕が残っている。706は坏身の底部で、平底状をなしており底面にはヘラ記号が確認できる。707は坏の口縁部である。708から715は甕の破片で、715は発泡して焼け歪んでいる。

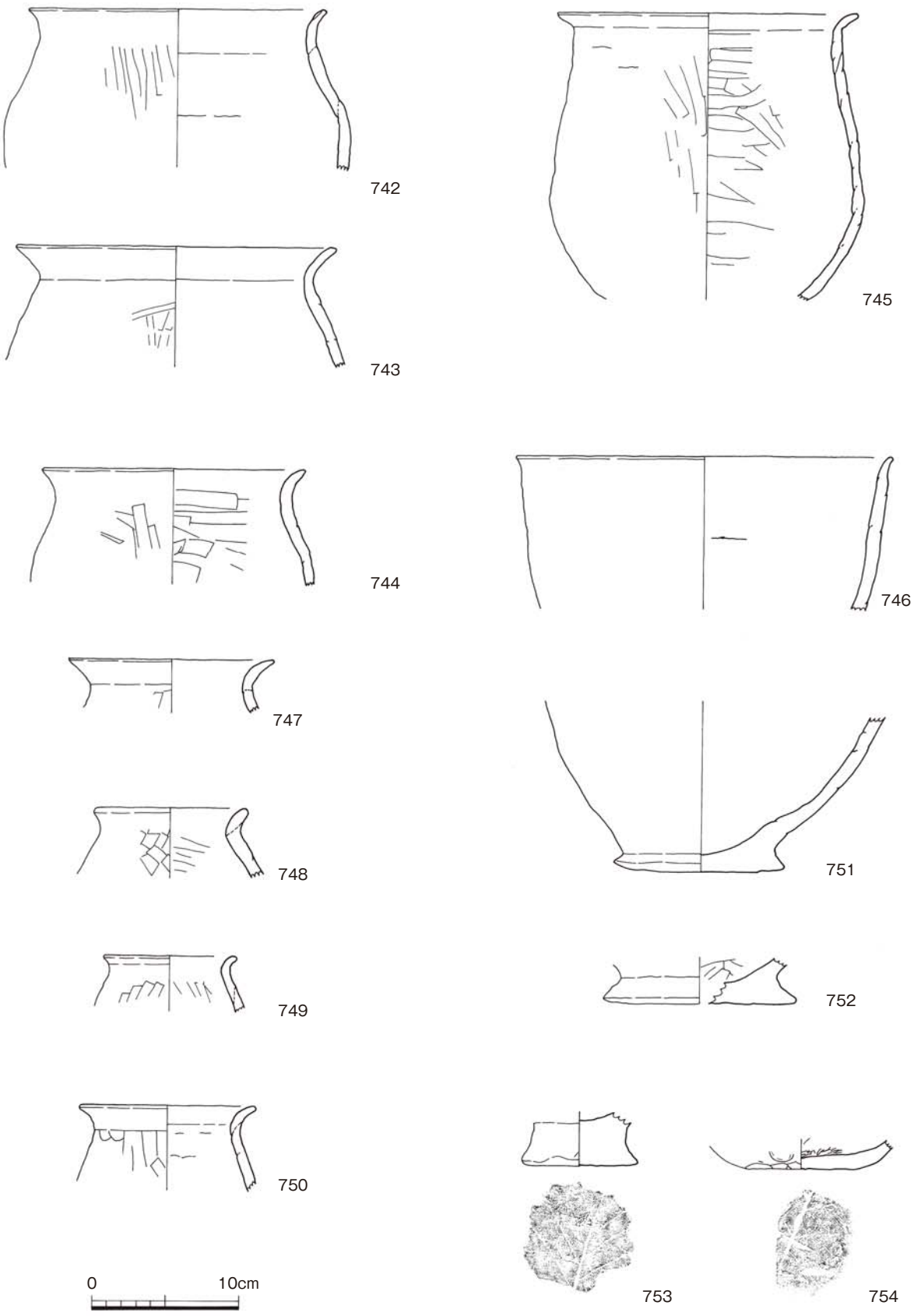
716から810は土師器である。716から733は土師器の坏で729から732については黒色処理が施してある。734から741は高坏、742から754は甕である。756から759は壺、760から806は炊飯具である。760は甑の把手と考えられる破片で、761から783は筒抜け式の甑の蒸気口縁である。784から806は竈形土器の破片で、784、785は掛口、786から799までは焚口の周辺、800から803までは基部の破片、804から806は庇の一部である。807は土師器の破片を円盤状に加工したもので、用途は不明である。808から810は古代の土師器片で、須恵器を模倣したものである。808は坏蓋、809、810は坏身の一部である。811は古代の白磁、812は土師器の坏である。813は肥前の染付碗で、814、815はいわゆる四つ目土錘で、近世のものであろう。



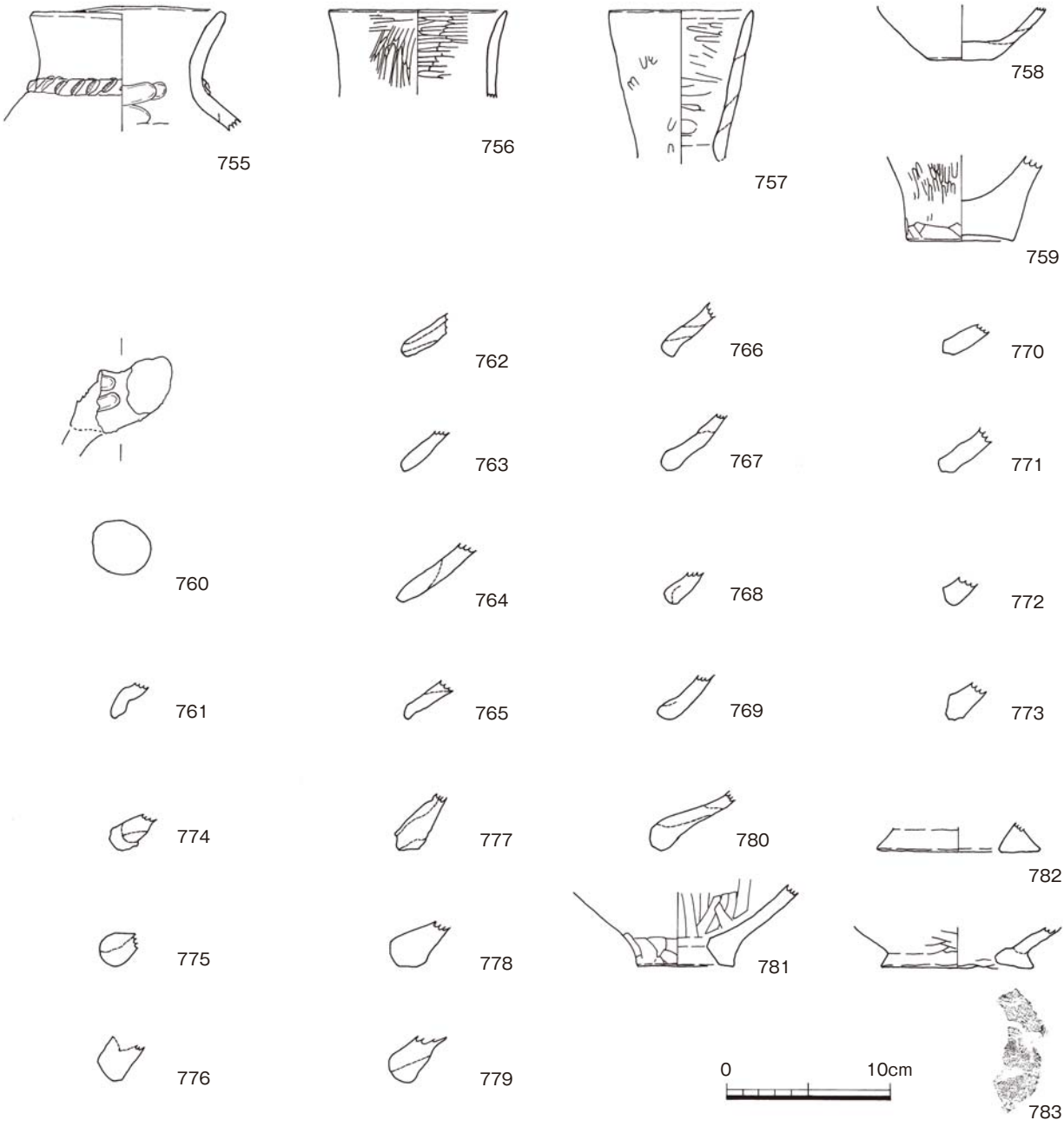
第107図　２区遺構外出土遺物①（S=1：4）



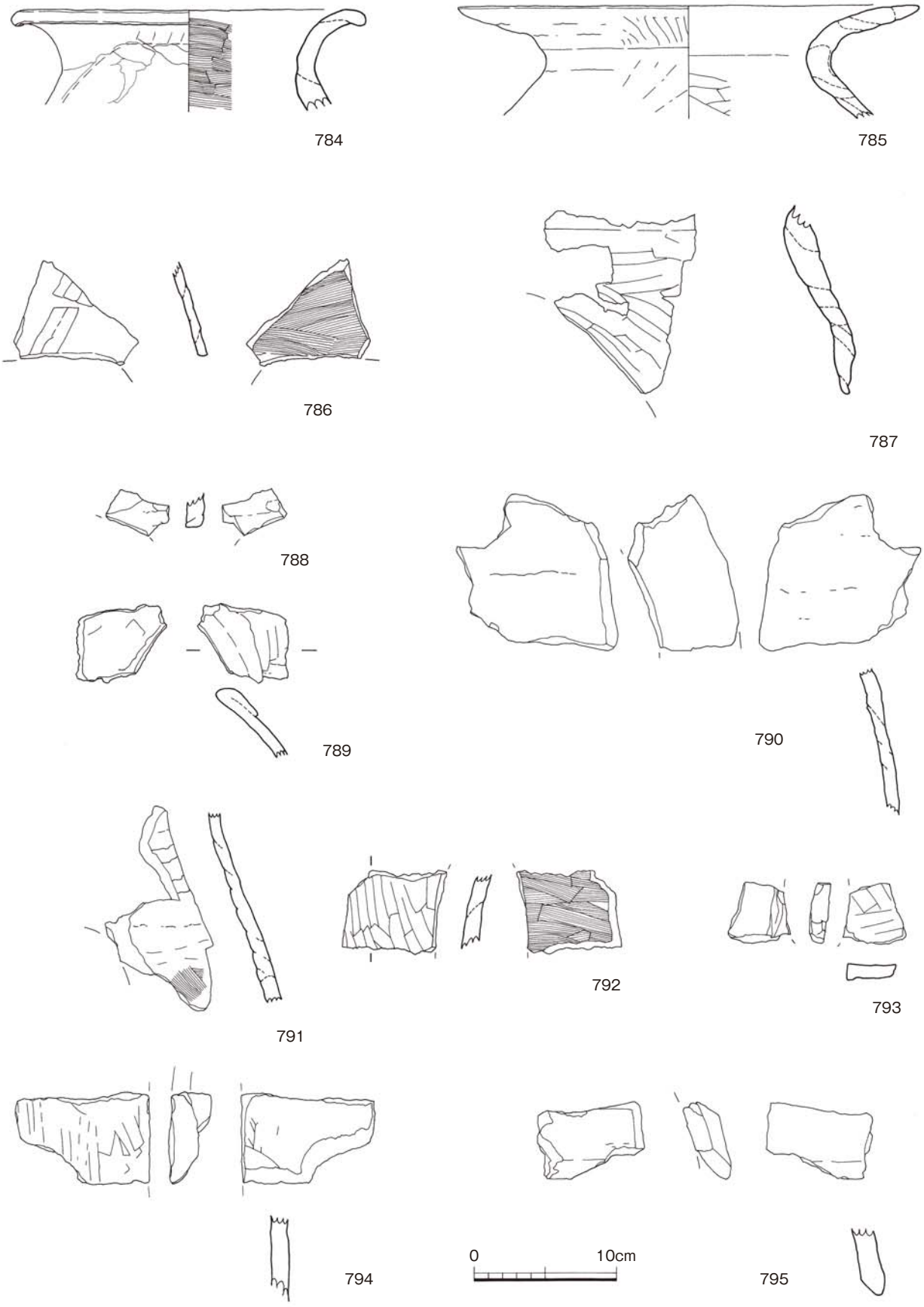
第108図　２区遺構外出土遺物②（S=1：4）



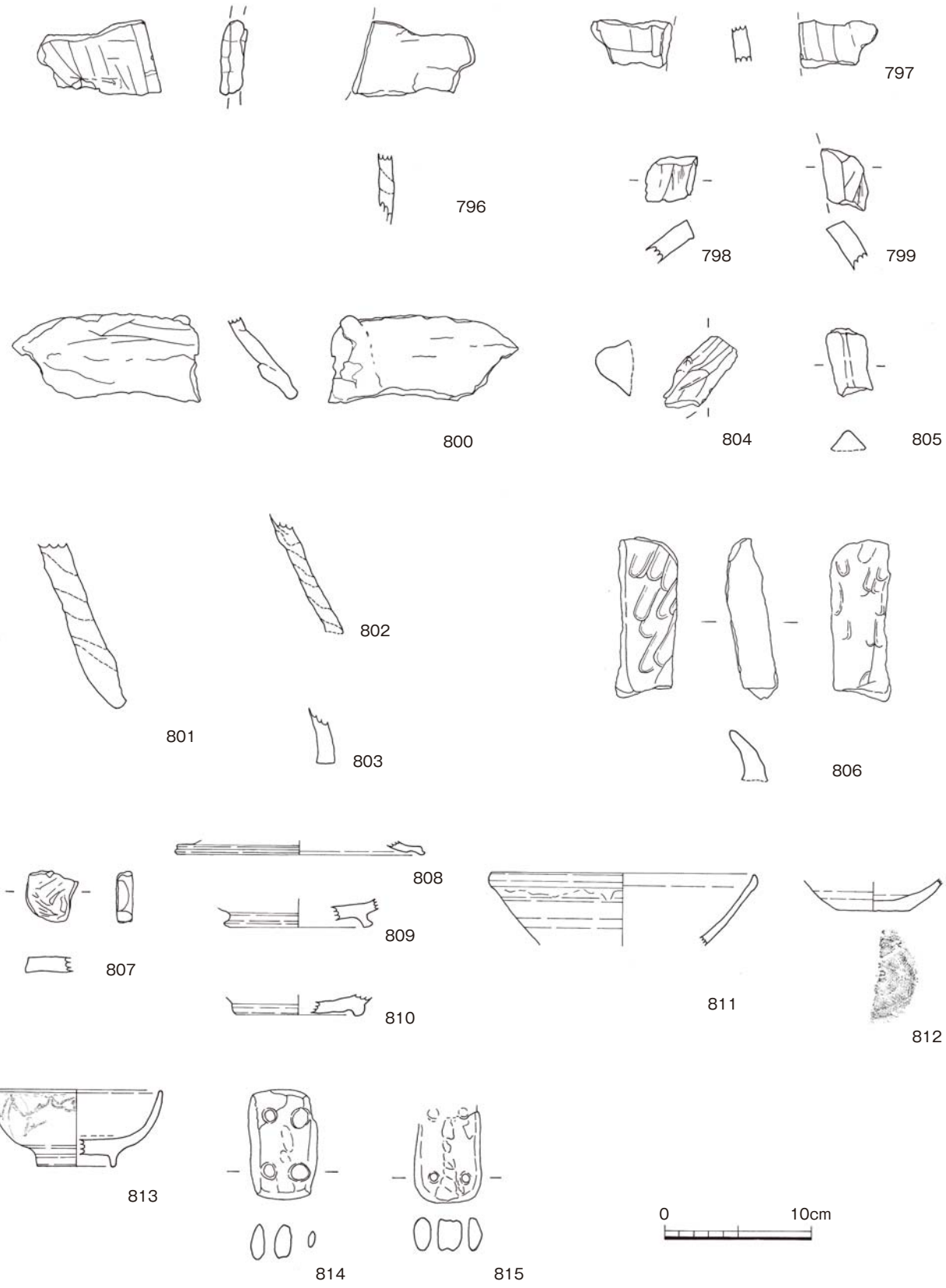
第109図　２区遺構外出土遺物③（S=1：4）



第110図　２区遺構外出土遺物④（S=1：4）



第111図　２区遺構外出土遺物⑤（S=1：4）



第112図　２区遺構外出土遺物⑥（S=1：4）

第６節　３区の遺構と遺物

３区では、遺構は確認されなかったが遺物が集中して確認できる範囲が存在した（第113図）。この遺物集中区の北側は撹乱により遺物包含層が消滅していた。また東側は県道下に向かって標高が高くなっており、県道下では包含層が消滅していると予想された。

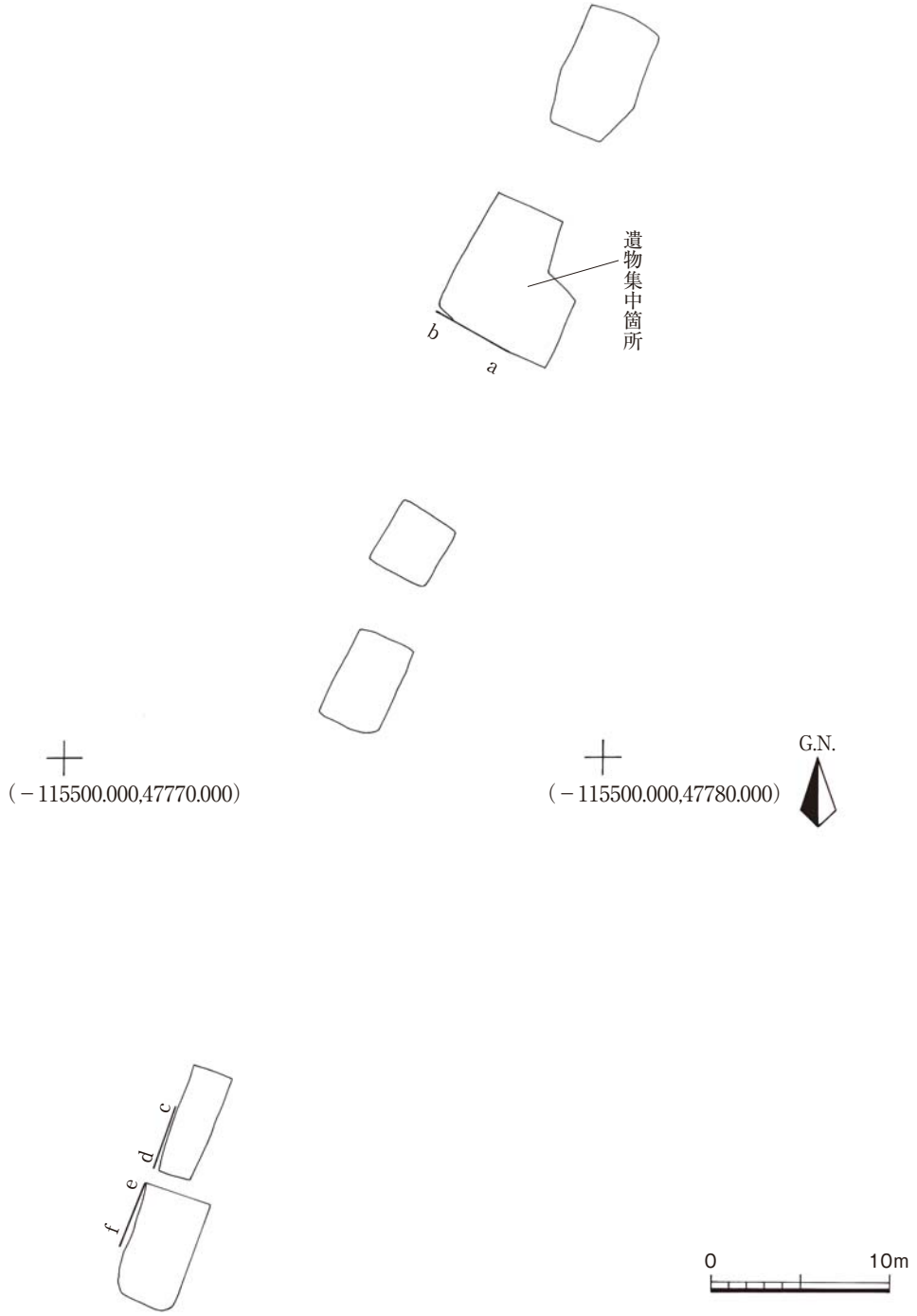
分布状況から、遺跡が立地する砂丘の頂点である現県道下に何らかの遺構が存在し、そこから砂丘後背部に廃棄もしくは遺構の崩壊に伴い流入した遺物であると判断した。遺物の大部分は古墳時代に属するものであったが、一部古代のものが混入していた。また遺物包含層の上部には高原スコリアと考えられるテフラが混入していた。

これらの遺物包含層の上部には、現代の造成が施されており、その中には近世以降の遺物が相当数混入していた。

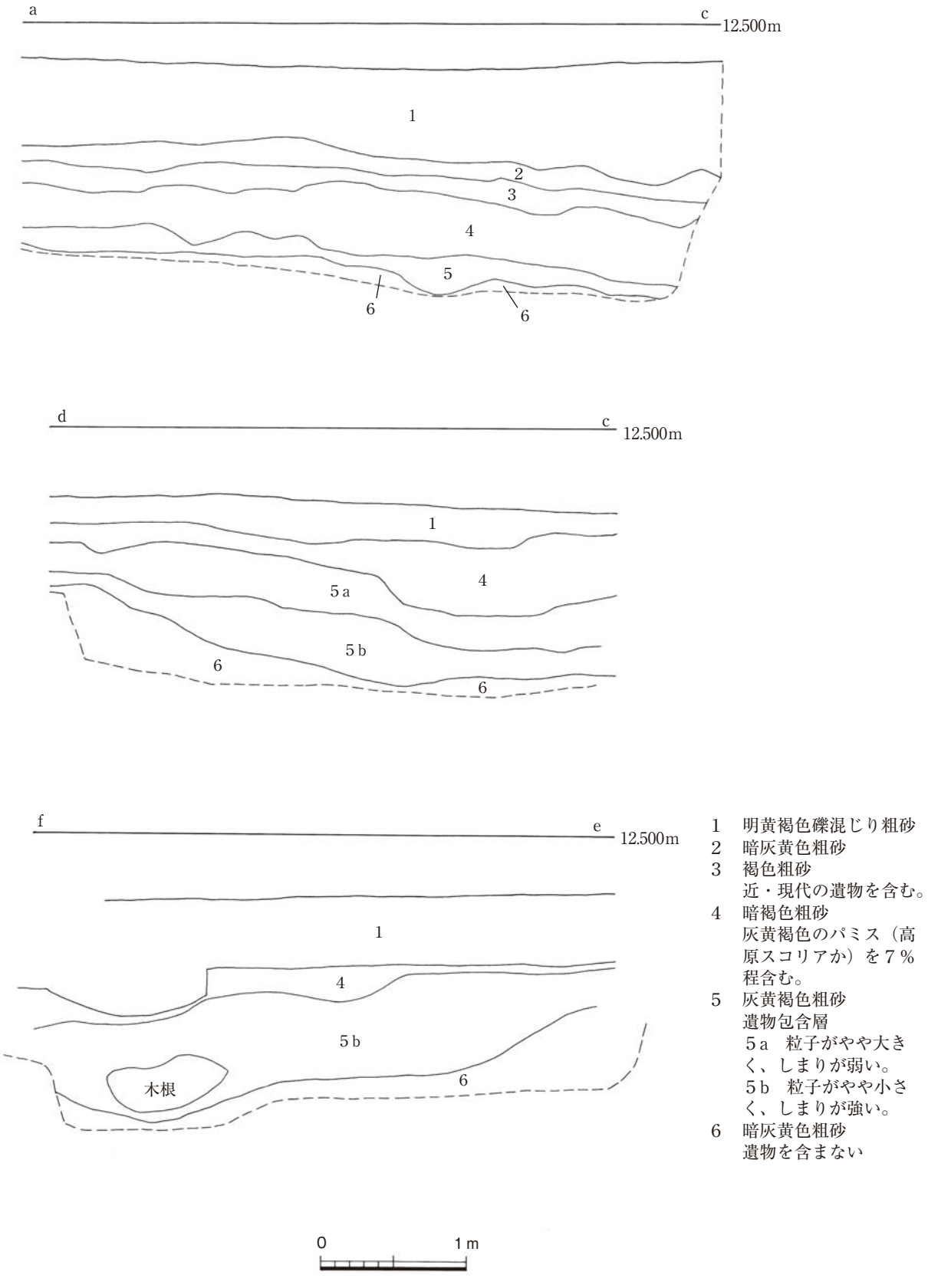
１　３区の出土遺物【第118図～ 132図】

816から853は須恵器である。816から831は須恵器の坏蓋および、坏身である。816から819は TK43から TK209型式に併行する時期のものと考えられ、820から831は古代に属するものと考えられる。825は底部にヘラ記号が確認でき、830、831は発泡している。832から842は甕で842は非常に著しい発泡が確認できる。843から850は壺形土器の破片で、846から848は脚付き壺、849は鼈、850は特殊扁壺である。後述するが、特殊扁壺は近畿から東海地方に分布の中心があり、九州島内ではこれまで出土例がない。851と852は器台の破片と考えられる。853は中世の東播系須恵器の捏鉢片である。854から1003は土師器である。854から896は坏類で、869、871にはヘラ記号が確認できる。877から881は須恵器を模倣したもので、８世紀段階のものと考えられる。882から897については、10世紀から中世にかけての坏、土師皿類で882には一部墨書が確認できる。898から909は高坏、910から941は甕類、942から947は壺類である。948、949は甑の牛角状突起と考えられる。950から953は蒸気孔の縁に桟を渡すための小孔を穿った甑で、954から965は筒抜け式の甑である。966から995は竈形土器で、966から972については掛口から焚口の一部が残るものである。970は非常に特徴的な形状をしており、前面に大きく張り出す庇が掛口に取り付けられている。側面は持ち手穴が穿たれていたようで、その一部が確認できる。971は本遺跡出土の竈形土器の中では掛口に庇を持たない少数のタイプである。焚口の縁が一部残存しており、その周囲に剥離した痕跡があることから、庇状のものが付属していたと考えられる。973から975は焚口の一部、976から991にかけては、焚口、基部など竈形土器片と考えられるものである。976は、基部と焚口の一部が残っており、焚口の縁に粘土を貼り付けて補強していることがわかる。987から991に関しては、明確に竈形土器であることを示す部位ではないが、調整、焼成、胎土などから竈形土器と判断した。992から995については焚口周囲に付属する庇と考えられる。996から1003はいわゆる布痕土器の一部である。996から999は口縁部、1000から1003については、口縁部直下の破片と考えられる。1004は鞴の羽口片で、表面は被熱して溶融しており、土器内部は熱により発泡している。

３区からの出土遺物は、遺構に絡んだものはなく、時期の中心は古墳時代の終末期にあたるが、、時古墳時代から中世までの遺物がほぼ同一の包含層から出土している。竈形土器の出土が顕著にみられ注目されるが、時期の決め手に欠ける状態である。

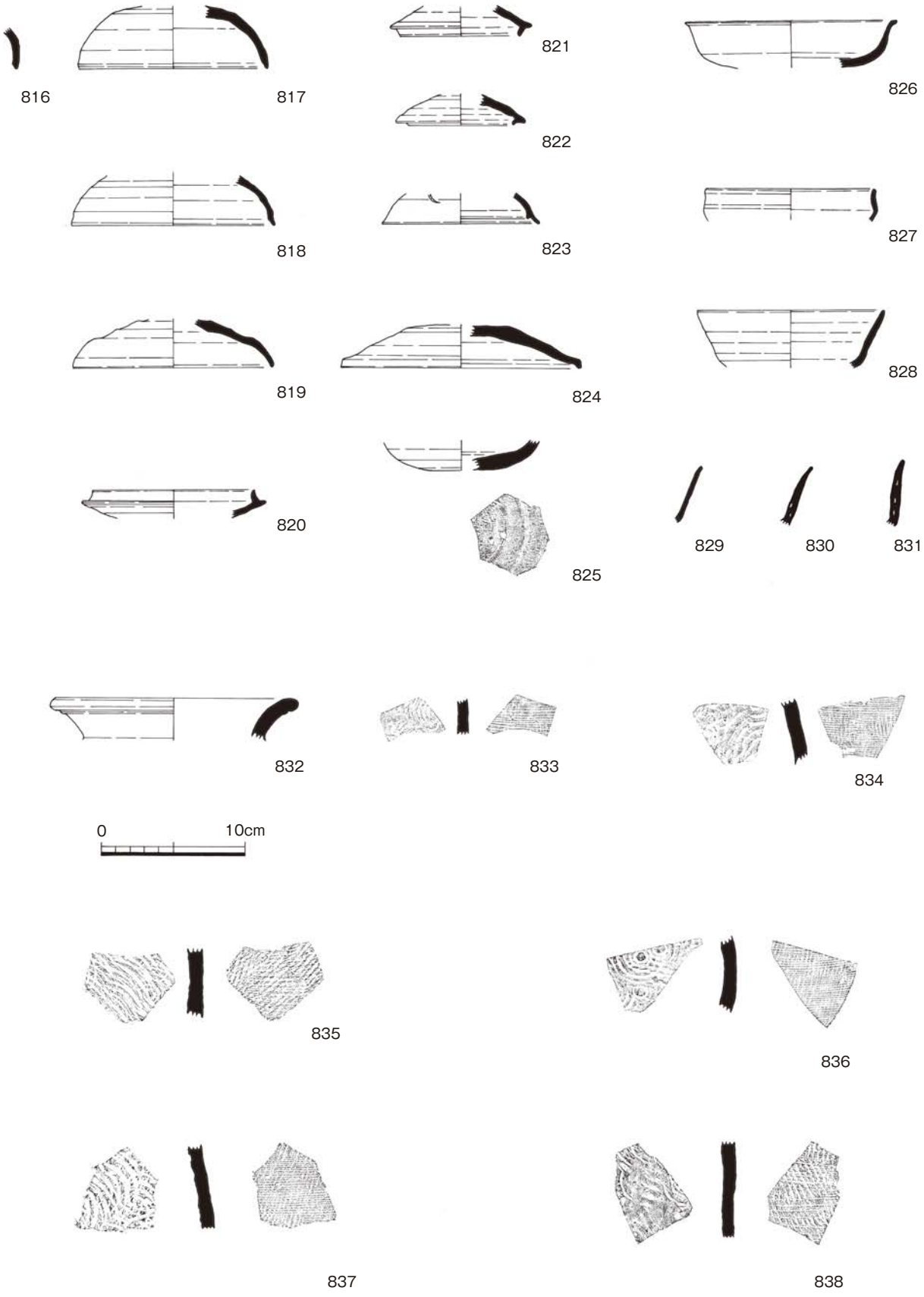


第113図　３区トレンチ配置図（S=1：400）

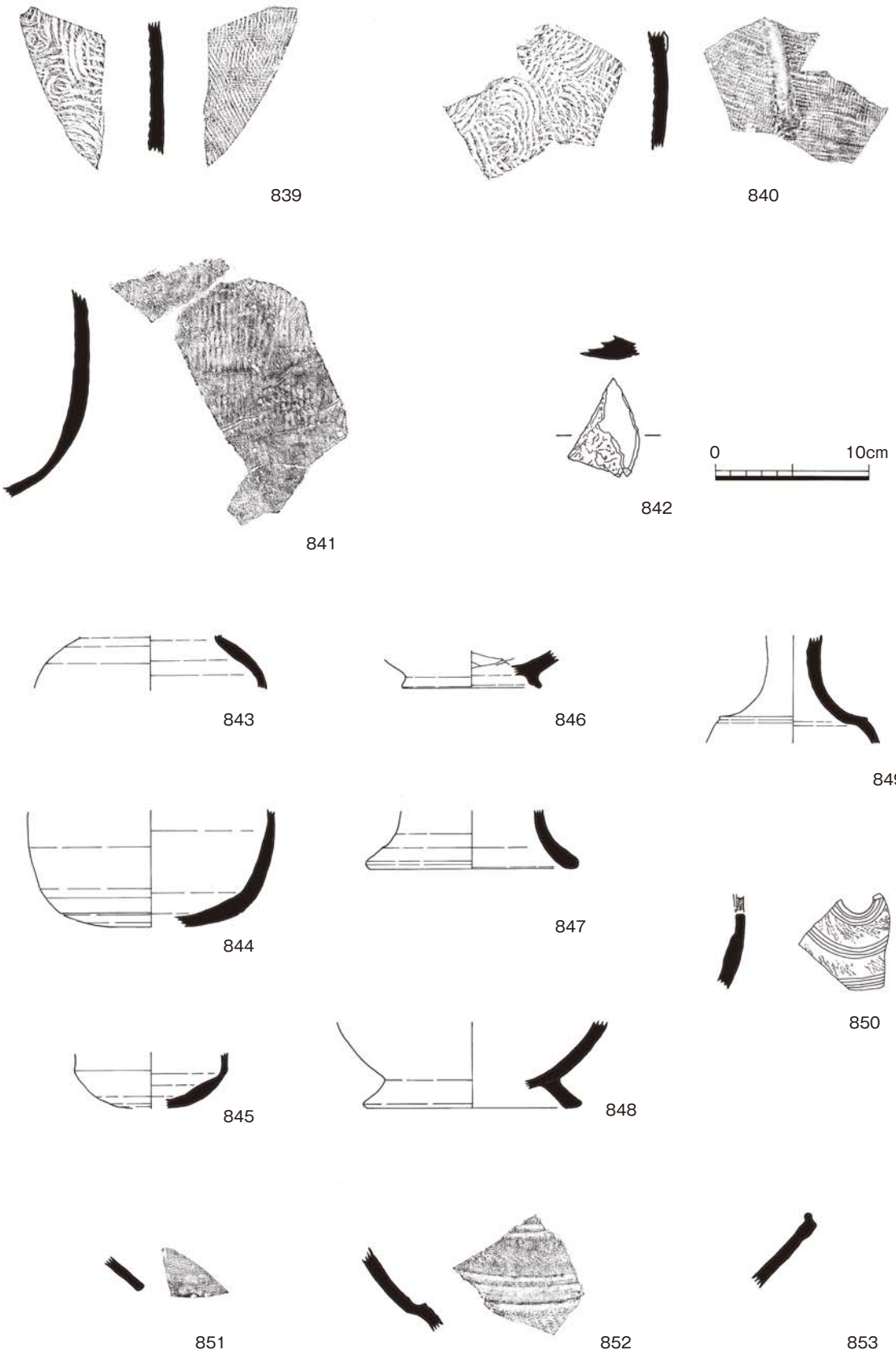


1　明黄褐色礫混じり粗砂
2　暗灰黄色粗砂
3　褐色粗砂
　近・現代の遺物を含む。
4　暗褐色粗砂
　灰黄褐色のパミス（高原スコリアか）を７％程含む。
5　灰黄褐色粗砂
　遺物包含層
　５a　粒子がやや大きく、しまりが弱い。
　５b　粒子がやや小さく、しまりが強い。
6　暗灰黄色粗砂
　遺物を含まない

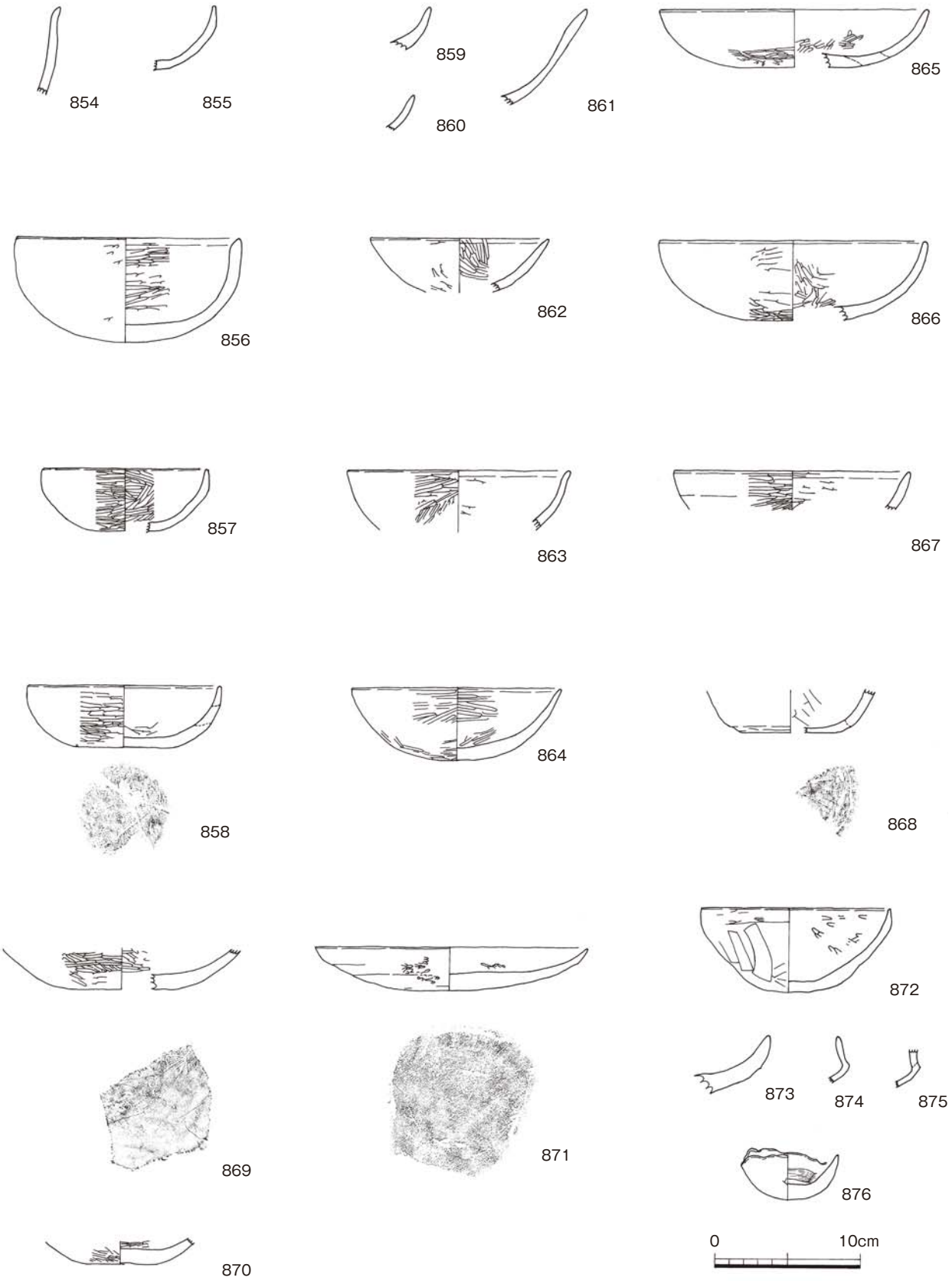
第114図　３区土層断面図（S=1：40）



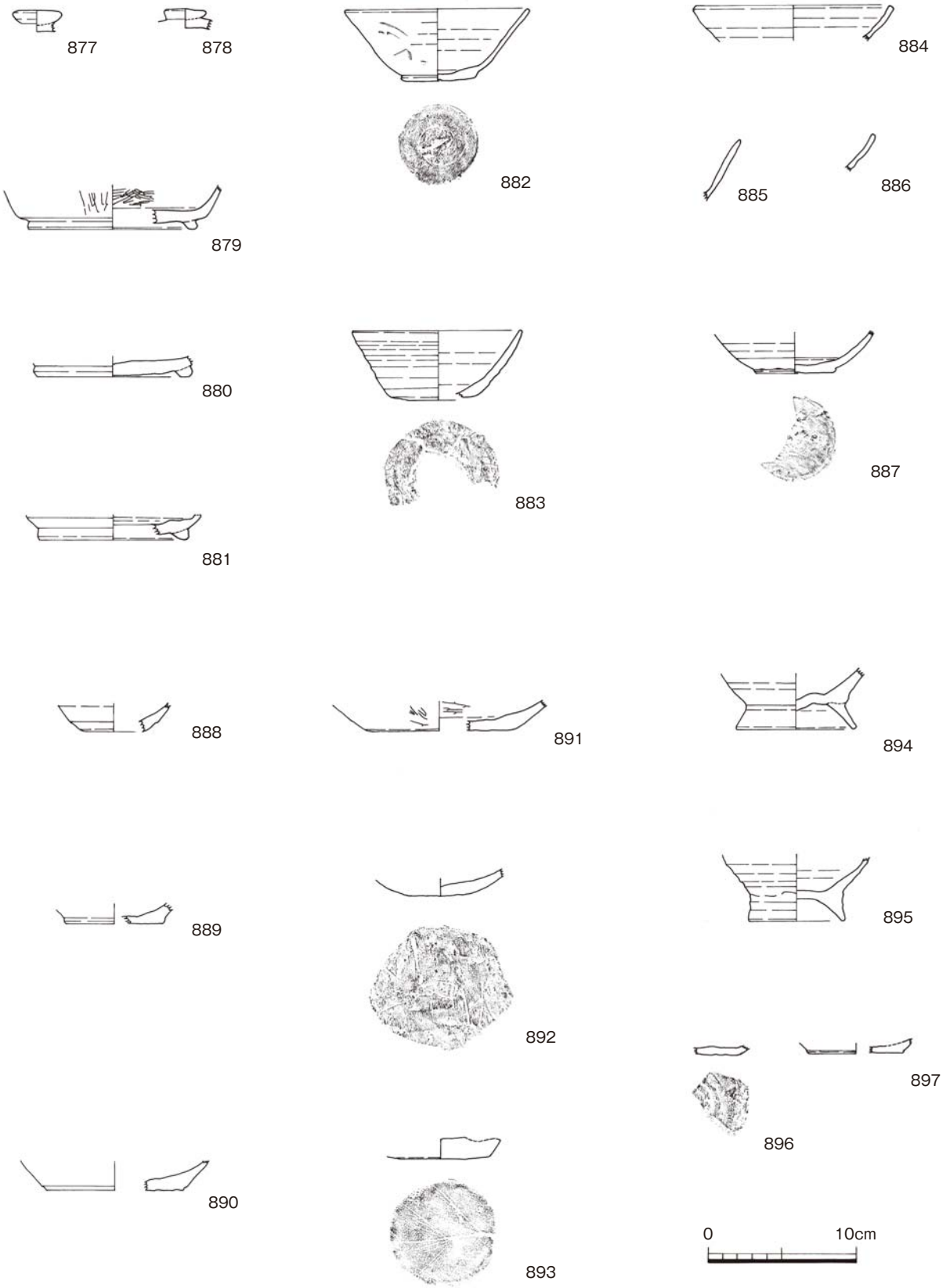
第115図　３区出土遺物①（S=1：4）



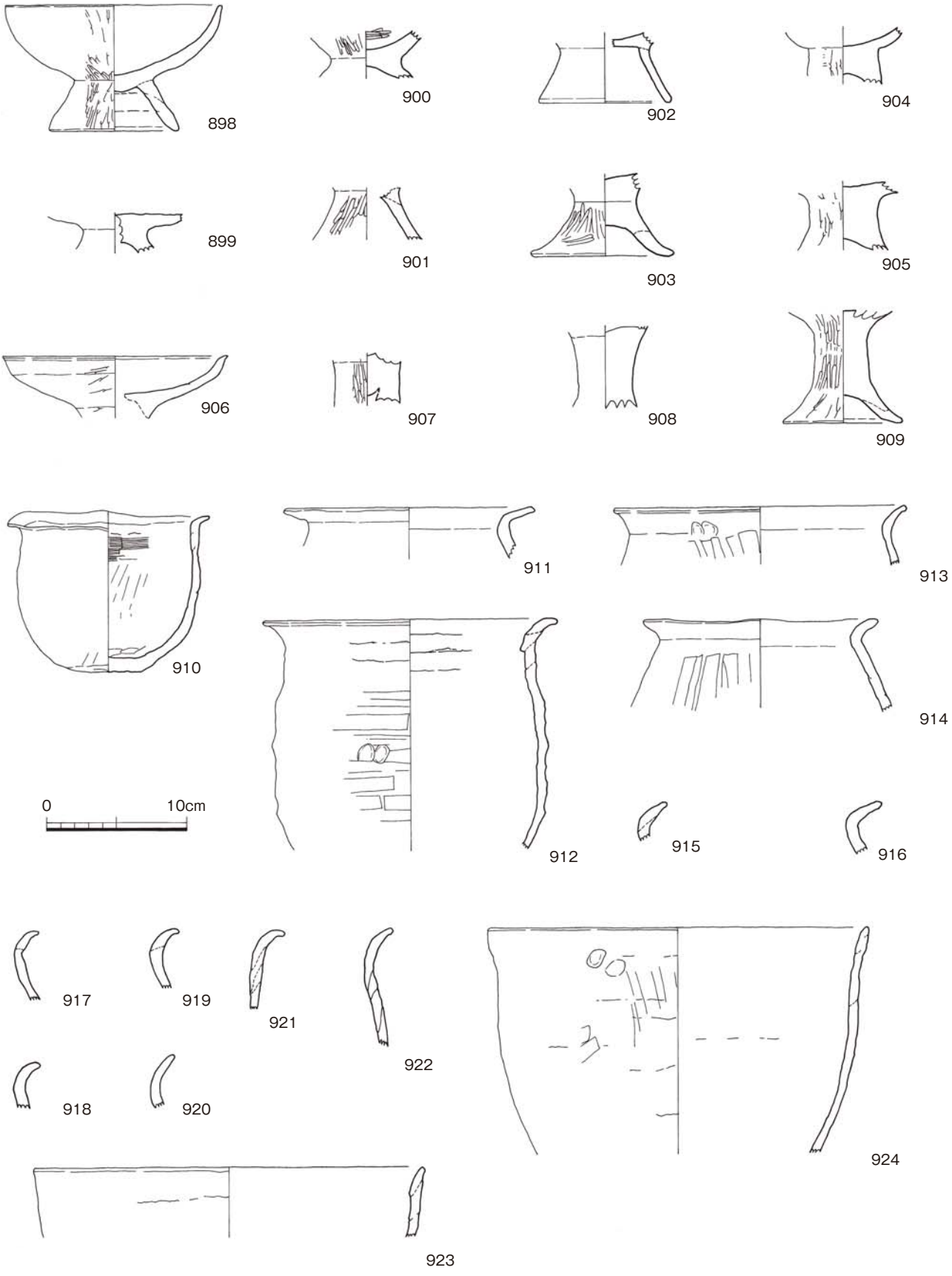
第116図　３区出土遺物②（S=1：4）



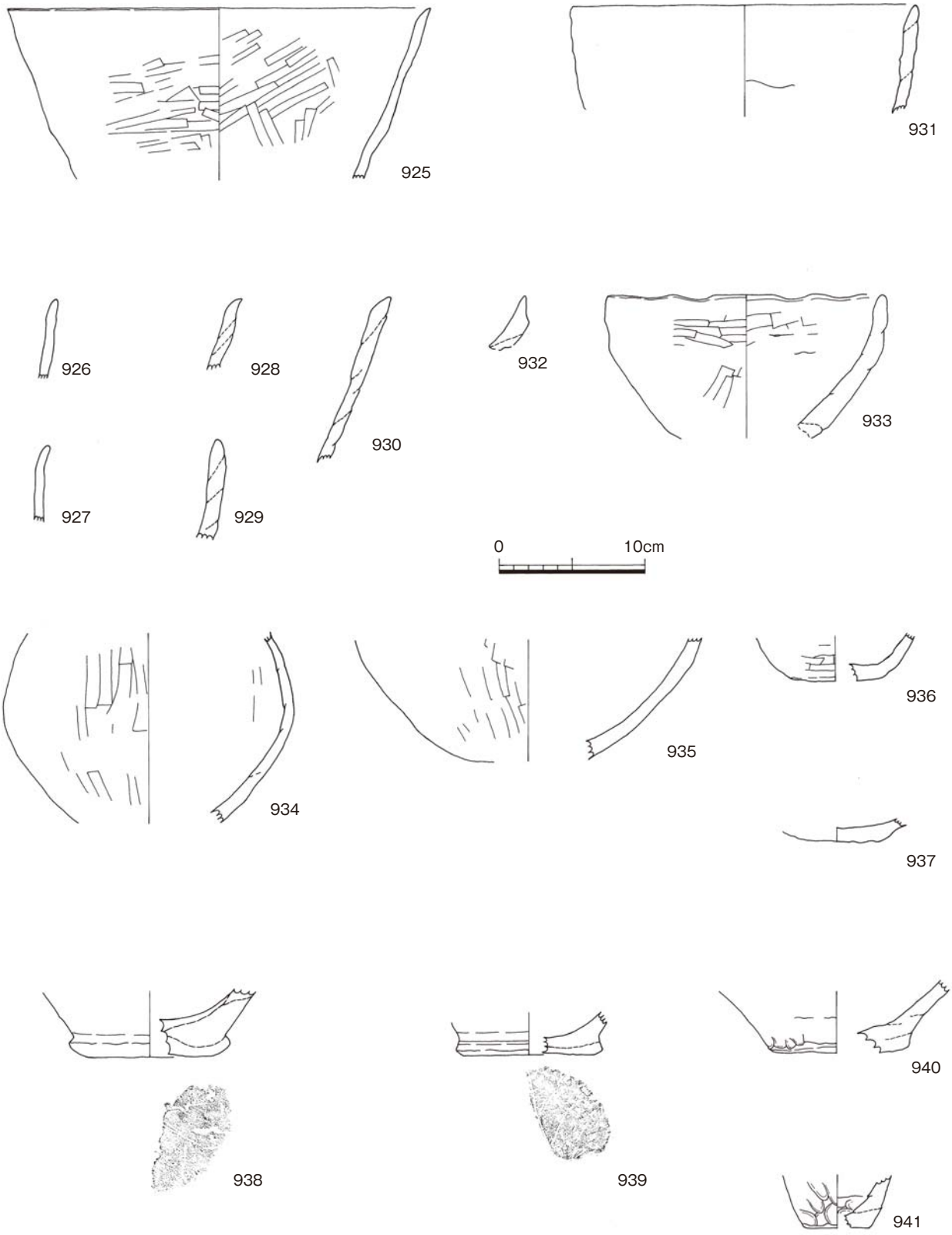
第117図　３区出土遺物③（S=1：4）



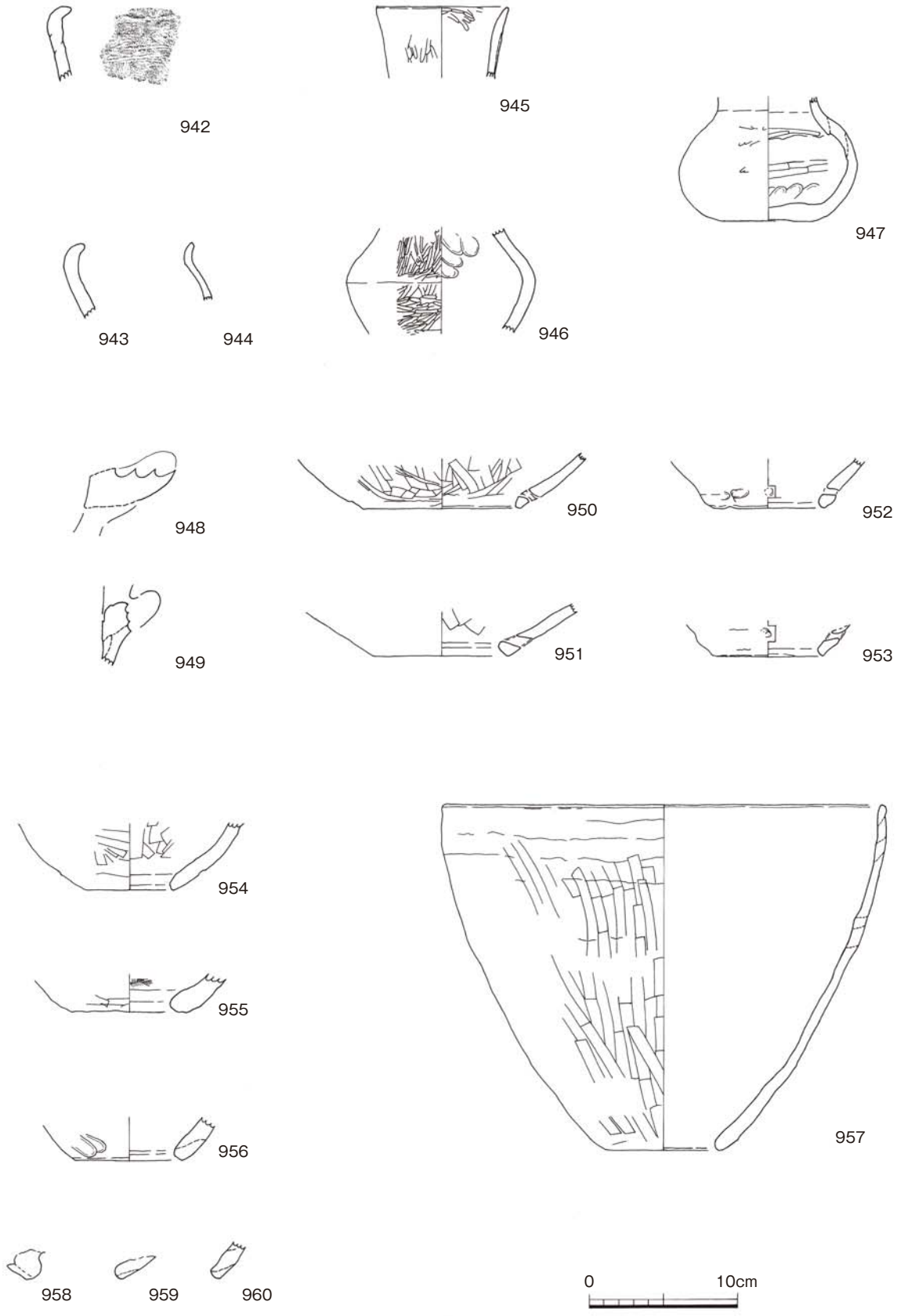
第118図　３区出土遺物④（S=1：4）



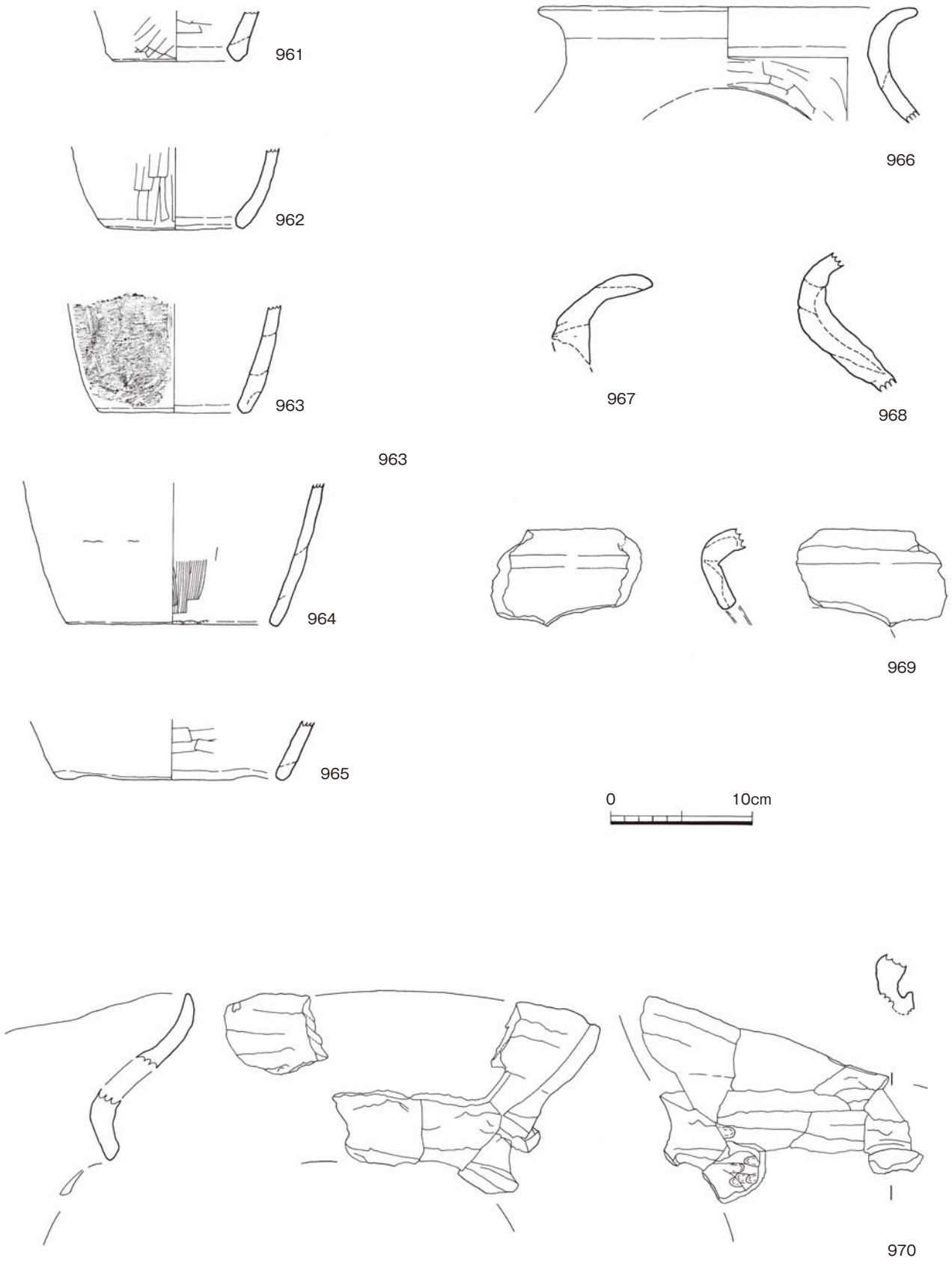
第119図　３区出土遺物⑤（S=1：4）



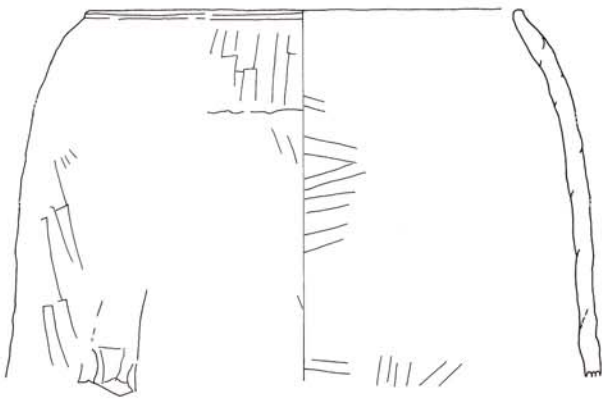
第120図　３区出土遺物⑥（S=1：4）



第121図　３区出土遺物⑦（S=1：4）



第122図　３区出土遺物⑧（S=1：4）



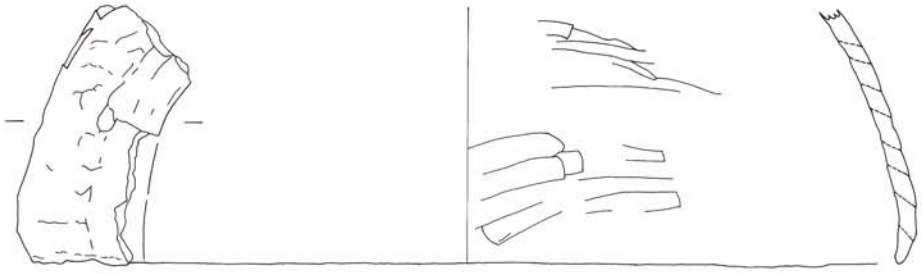
971

972

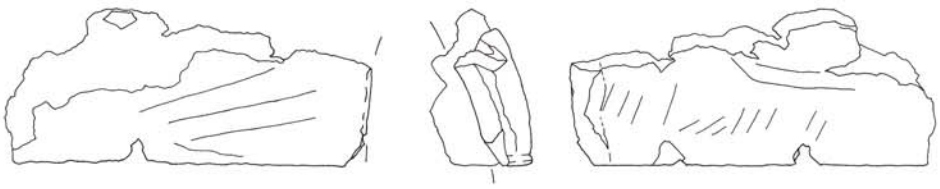
973

974

975

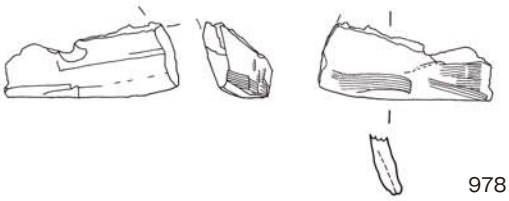


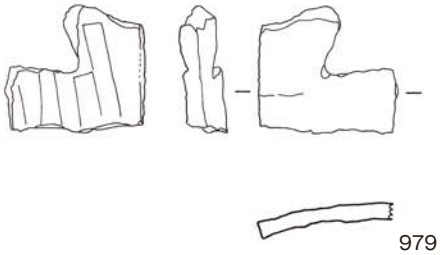
976

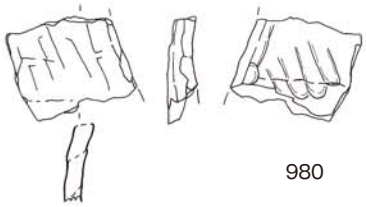


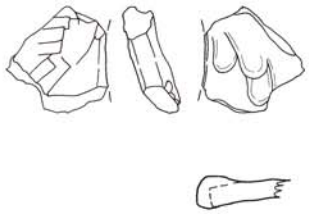
977

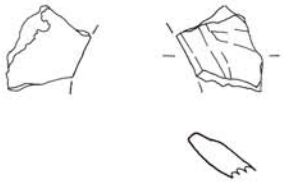
第123図　３区出土遺物⑨（S=1：4）

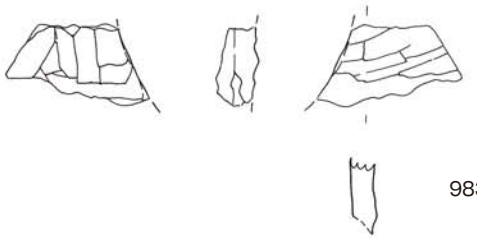

978

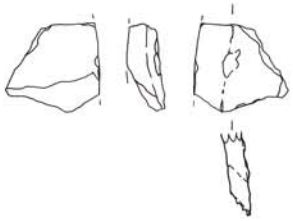

979


980


981


982

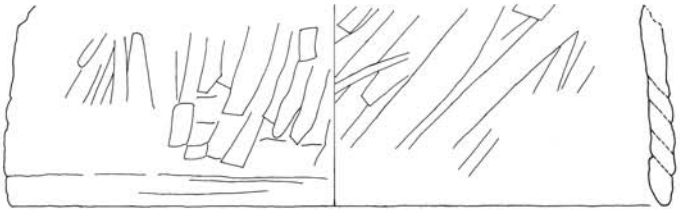

983


984

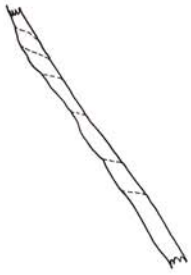
985

986

第124図　３区出土遺物⑩（S=1：4）



987

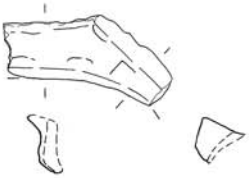


991

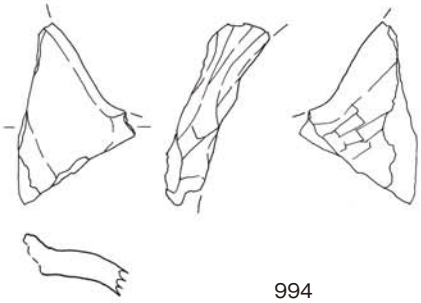
988

989

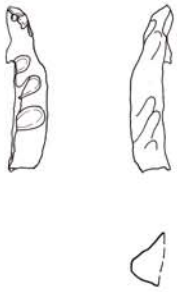
990



992



994



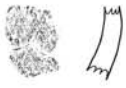
995

993

996

997

998



999

1000

1001

1002

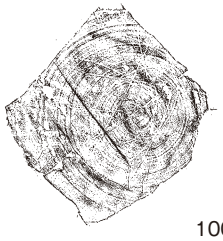
1003

1004

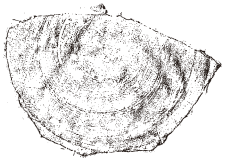
第125図　３区出土遺物⑪（S=1：4）

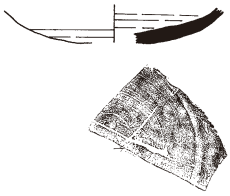
1005

1007

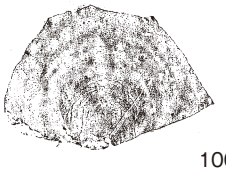


1009





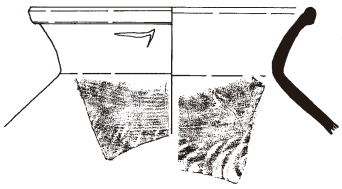
1008



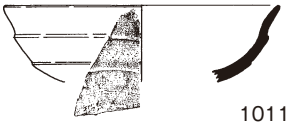
1006

1005～1009　５号竪穴建物出土
1010～1012　６号竪穴建物出土
1013～1017　１区出土

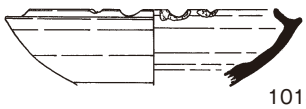
1010



1012



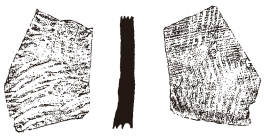
1011



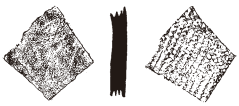
1013

1014

1015

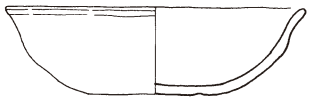


1016

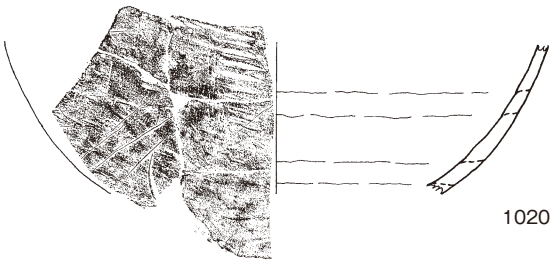


1017

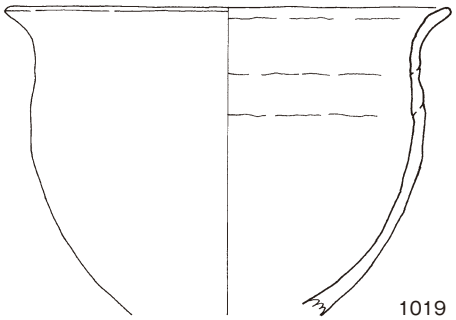
第126図　１区出土遺物（補遺①）（S=1：4）



1018



1020



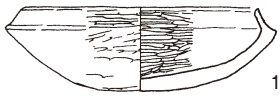
1019

1021

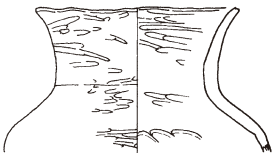
1022

0 10cm

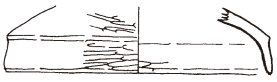
1023



1025



1026



1024

1019～1022　11号竪穴建物出土
1023～1026　１区出土

第127図　１区出土遺物（補遺②）（S= 1：4）

第７節　小結

今回の調査では韓式系土器や竈形土器など韓半島との関わりを考えさせる遺物の出土が顕著であったが、一方で、竈形土器の形状や、大多数の遺物には地元色が色濃く感ぜられる。

調査で得たイメージとしては、集落の構成員の大多数は地元民であった可能性が高いと考えられる。

また、以前の調査でも出土しているが、今回の調査でも竪穴建物内から馬歯が出土しており、山崎下ノ原第１遺跡での馬葬土壙の検出も含め、馬匹生産を強く印象づける。

今回の調査だけでなく、以前の調査成果も含めると、山崎上ノ原第１遺跡、第２遺跡、下ノ原第１遺跡の三遺跡が同一砂丘上で隣接して同一時期に展開していたことがわかり、後述するが、これらの遺跡を総合的に検討する必要があろう。

本報告による検討でだけではなく、日向の古墳時代像をより鮮明に描き出すために、今後の活発な議論を期待したい。

【参考文献】

小笠原啓二・山内英機2005「須恵器に残る痕跡について－坏蓋口縁の「刻目状圧痕」の観察」『紀要愛媛』第５号

竹中克繁2008『山崎上ノ原第２遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書第69集

南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡 山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集

柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第130集

釜山大學校博物館1985『金海禮安里古墳群Ⅰ』釜山大學校博物館遺蹟調査報告第８輯

第Ⅳ章　補遺

～山崎上ノ原第２遺跡の鍛冶関連遺物～

山崎上ノ原第２遺跡では、鉄滓などの鍛冶関連遺物が相当数出土していたが、以前の報告では諸々の事情から、これらの遺物に関して実測図などの記載がされなかった。

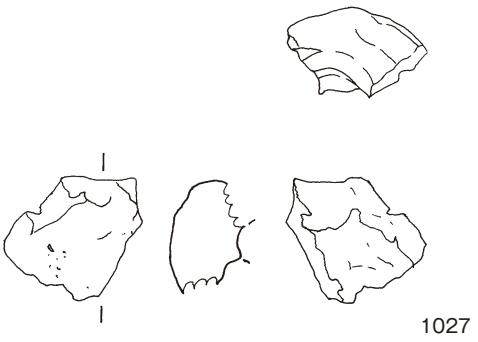
今回、宮崎島之内線の関連事業が完了を迎えるに当たり、これらの遺物の一部について、実測図および関連データの提示を行いたい。

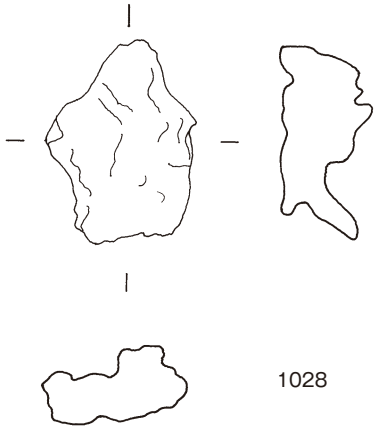
これらの遺物に関して、本来ならば細かな分析やその検討を行わなければならないが、今回は、実測図と各データの提示に止めてある。鉄滓、鉄塊系遺物など遺物の種類については、一覧表を参照されたい。

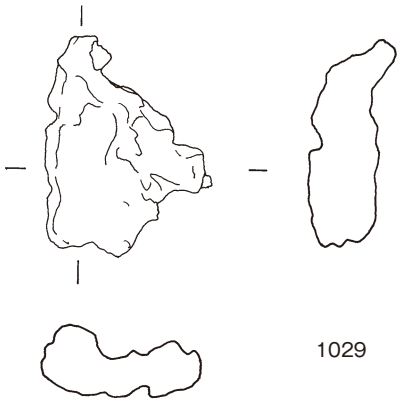
出土遺物の多くは、帰属がはっきりしないもので、廃土や包含層から出土したものであるが、一部については竪穴建物内から出土している。出土遺構については、各図のキャプション、一覧表と当センターの報告書（宮崎県埋蔵文化財センター 2006）を参照されたい。

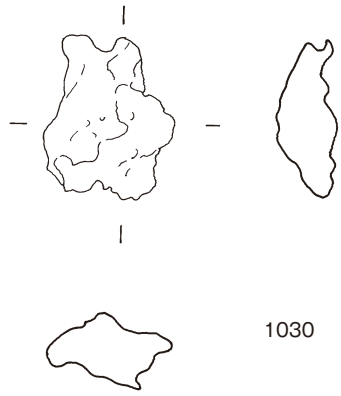
【参考文献】

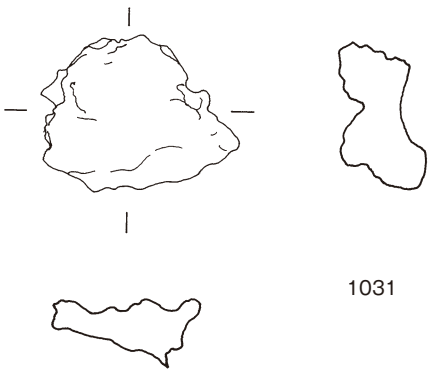
宮崎県埋蔵文化財センター 2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 130 集

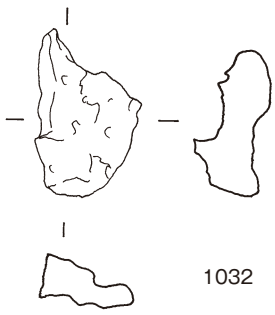




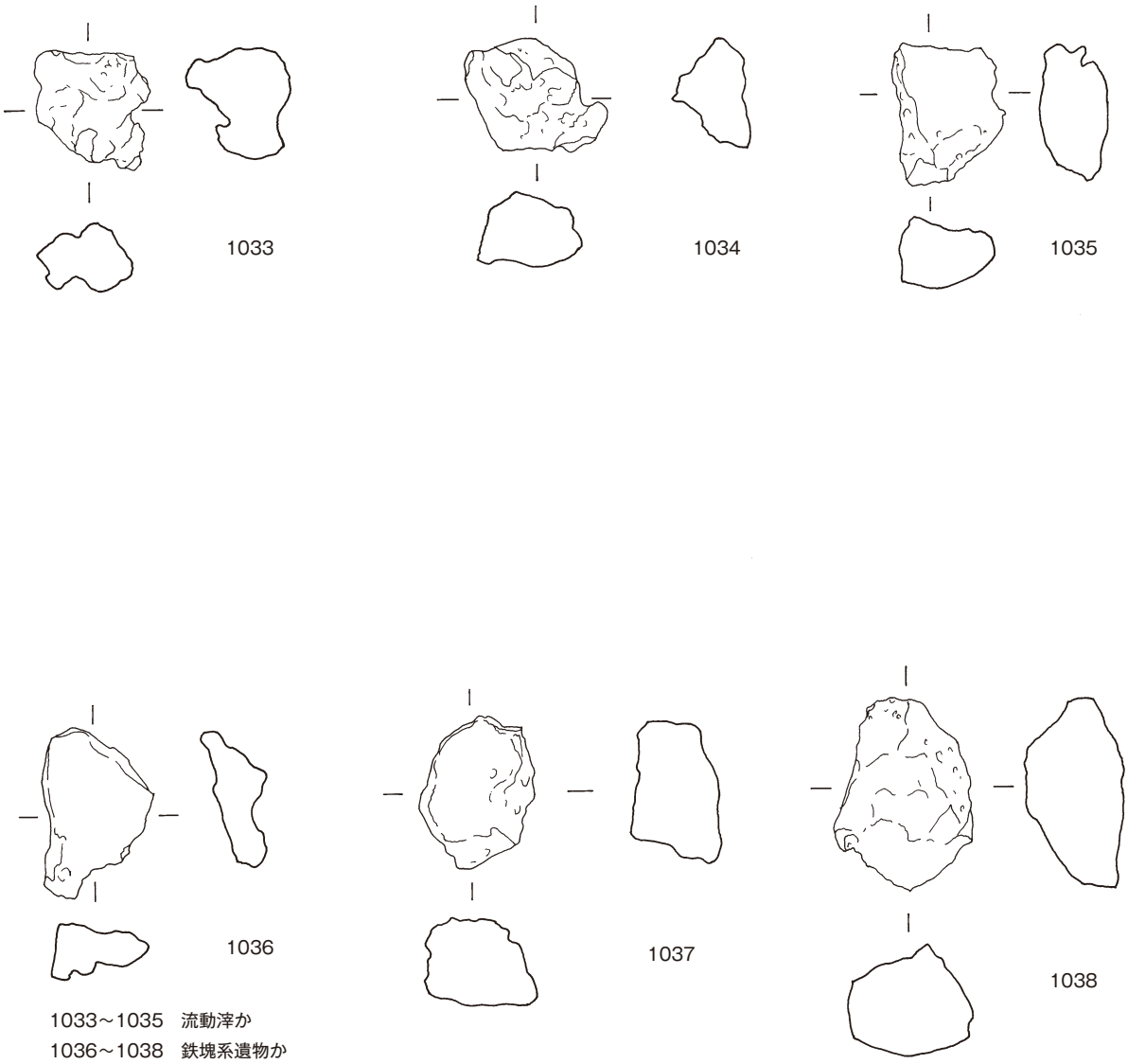




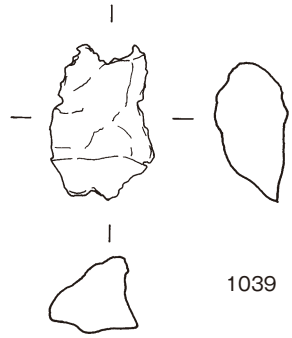


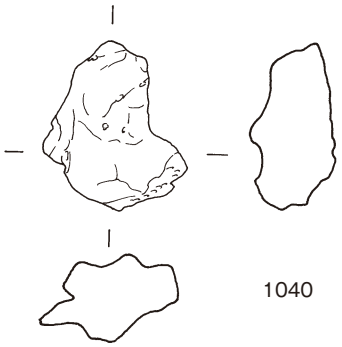


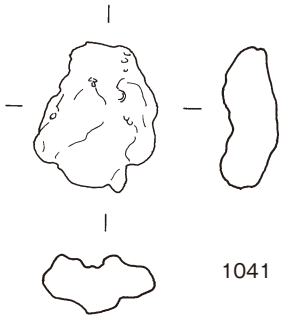
第128図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA1出土鍛冶関連遺物①（S= 1：2）

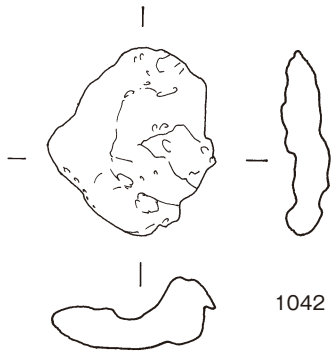


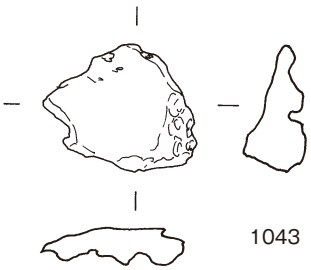
第129図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA1出土鍛冶関連遺物②（S= 1：2）

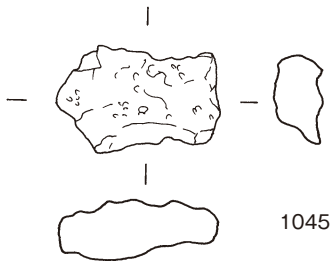


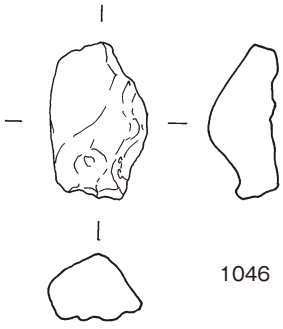


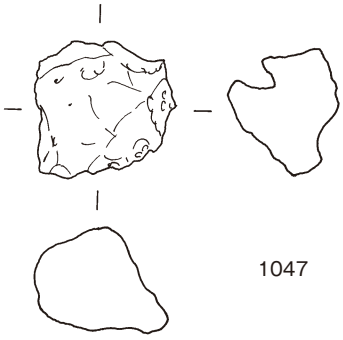




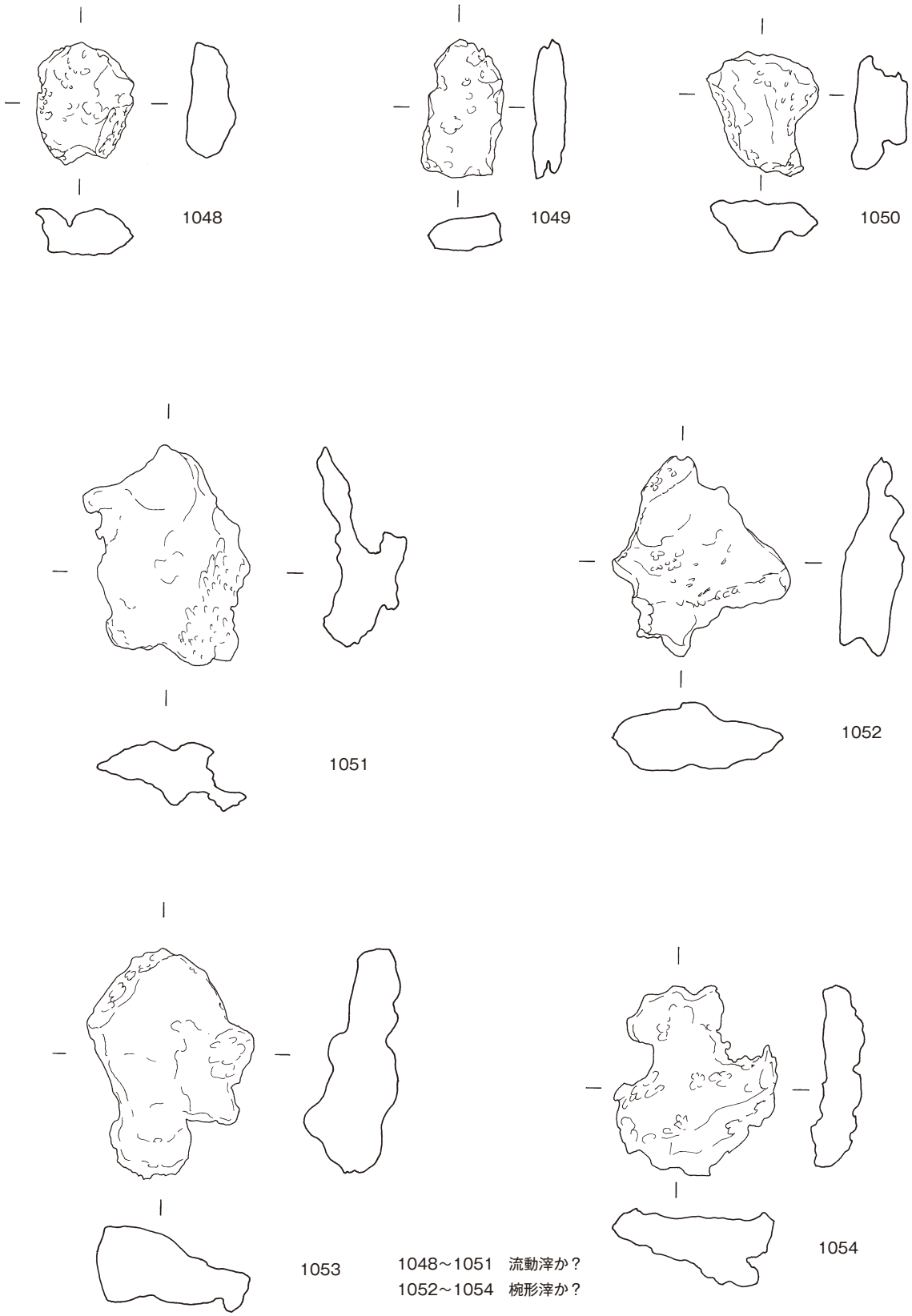




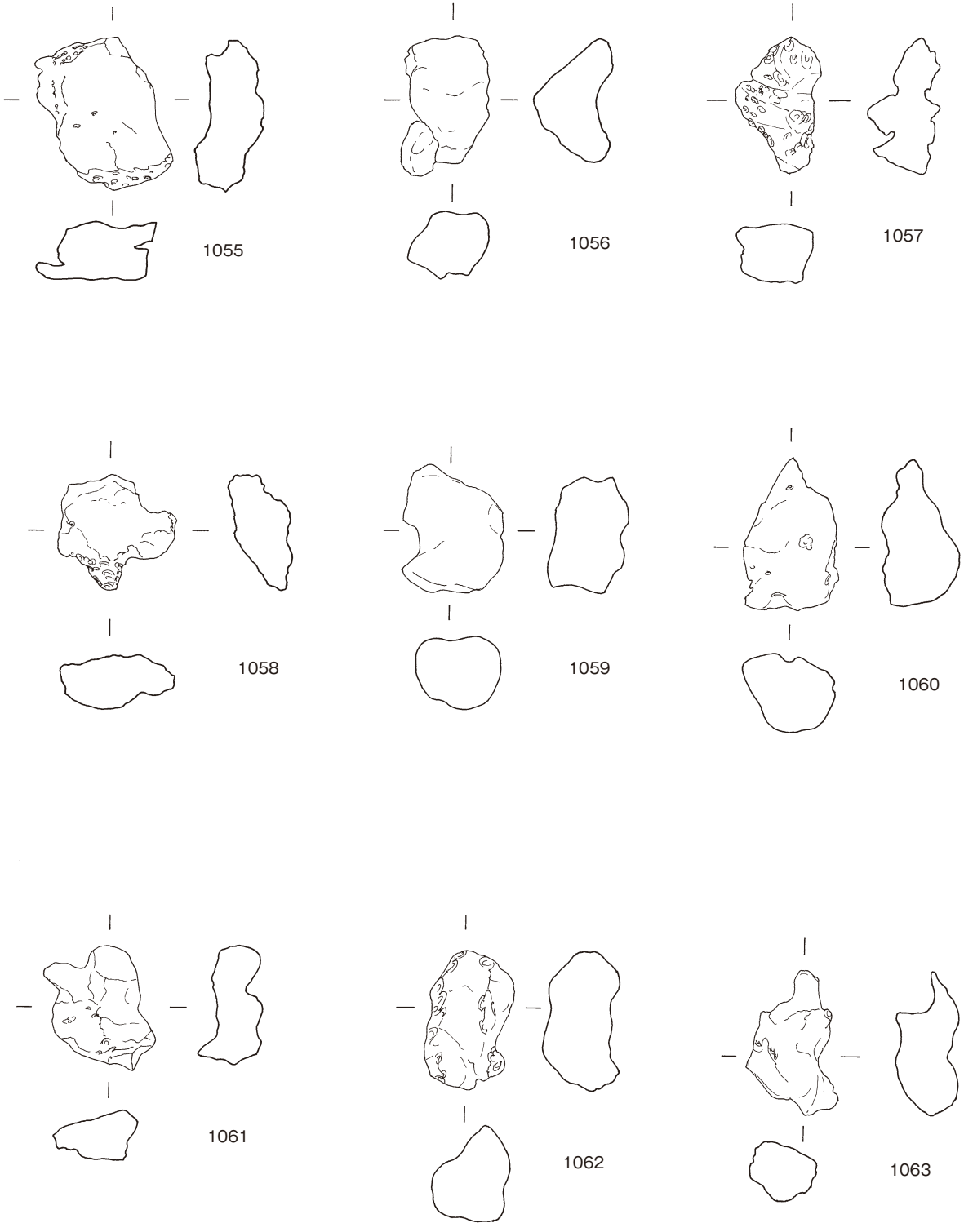




第130図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2出土鍛冶関連遺物①（S= 1：2）



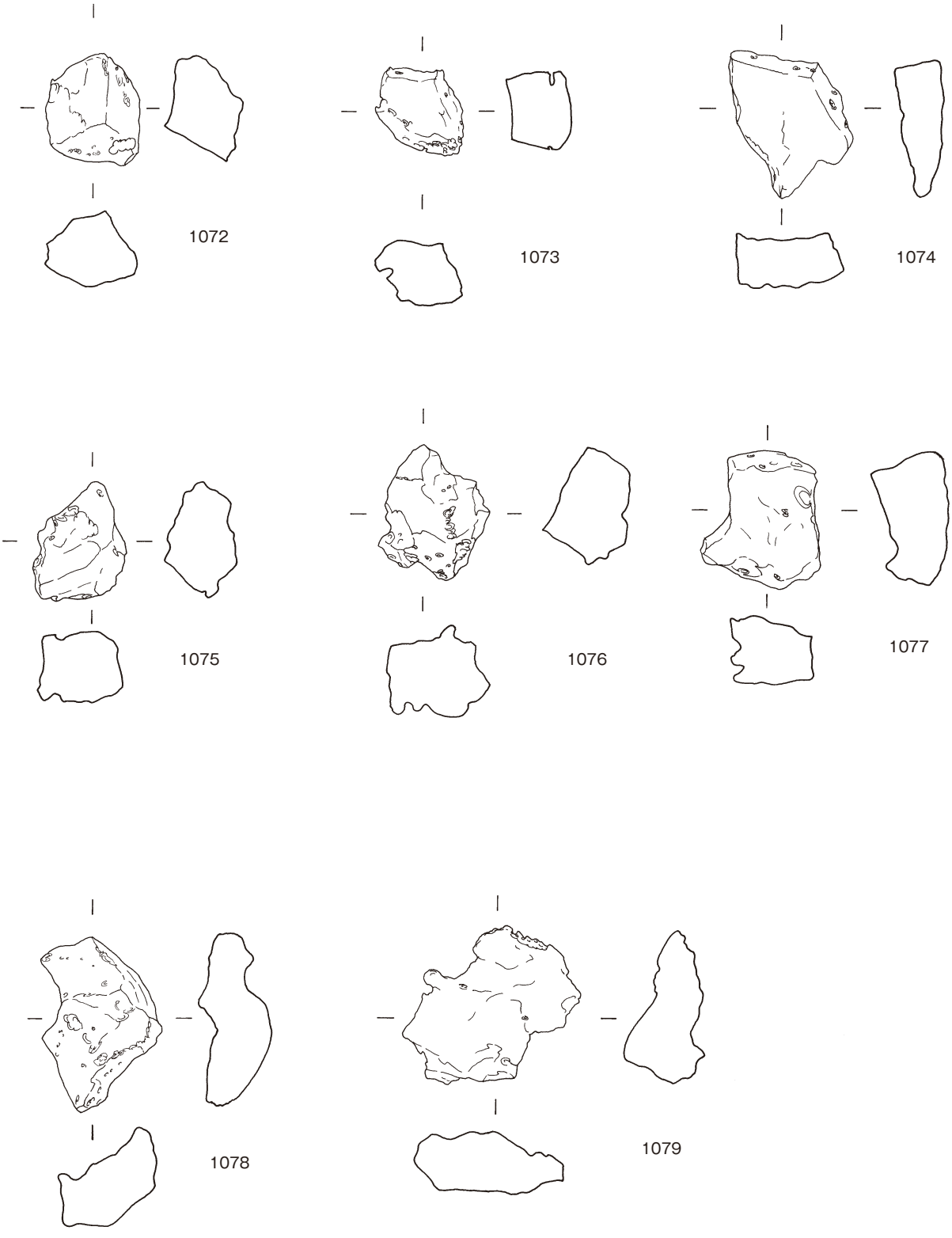
第131図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2出土鍛冶関連遺物②（S= 1：2）



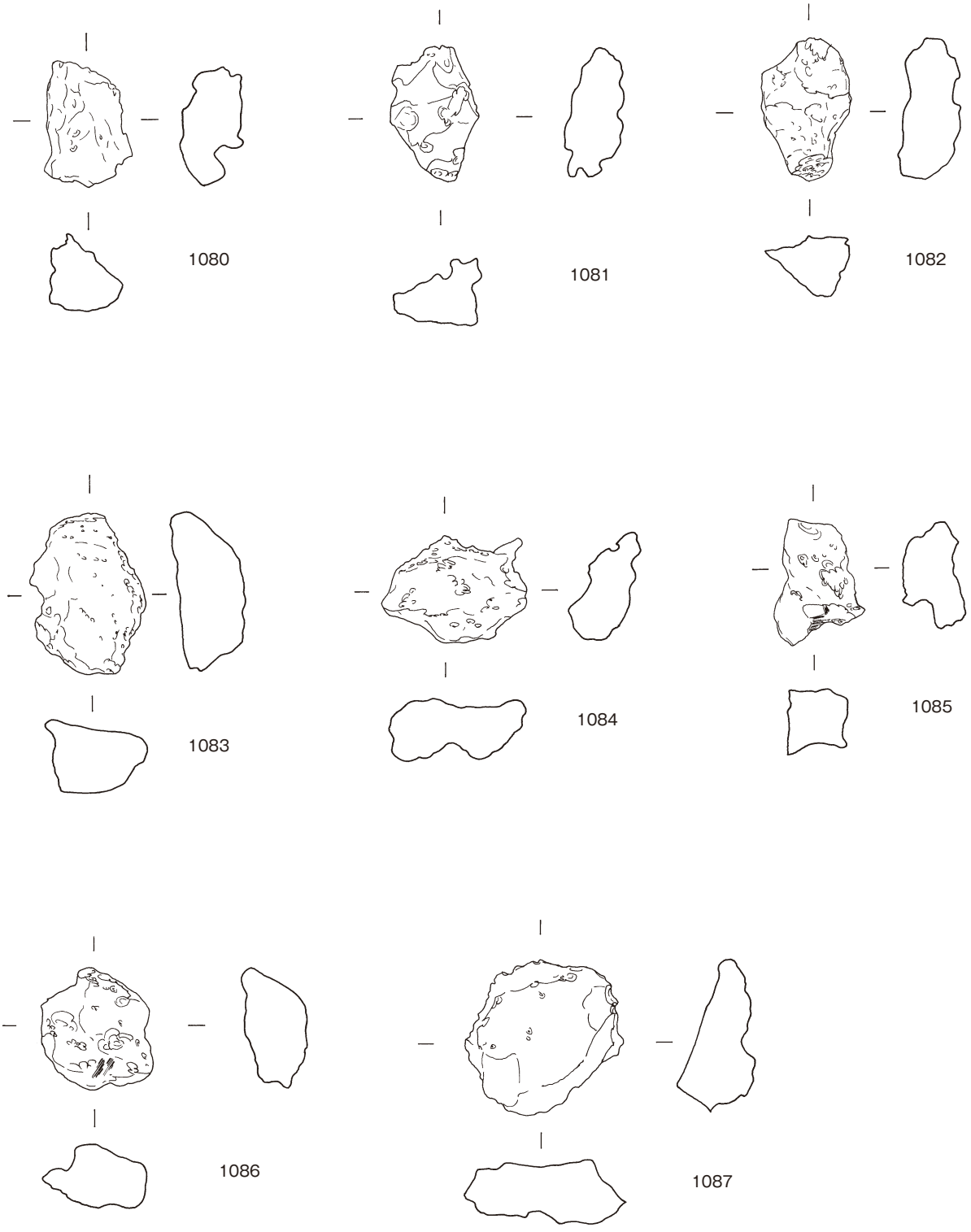
1055～1063　は鉄塊系遺物

第132図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2出土鍛冶関連遺物③（S= 1：2）

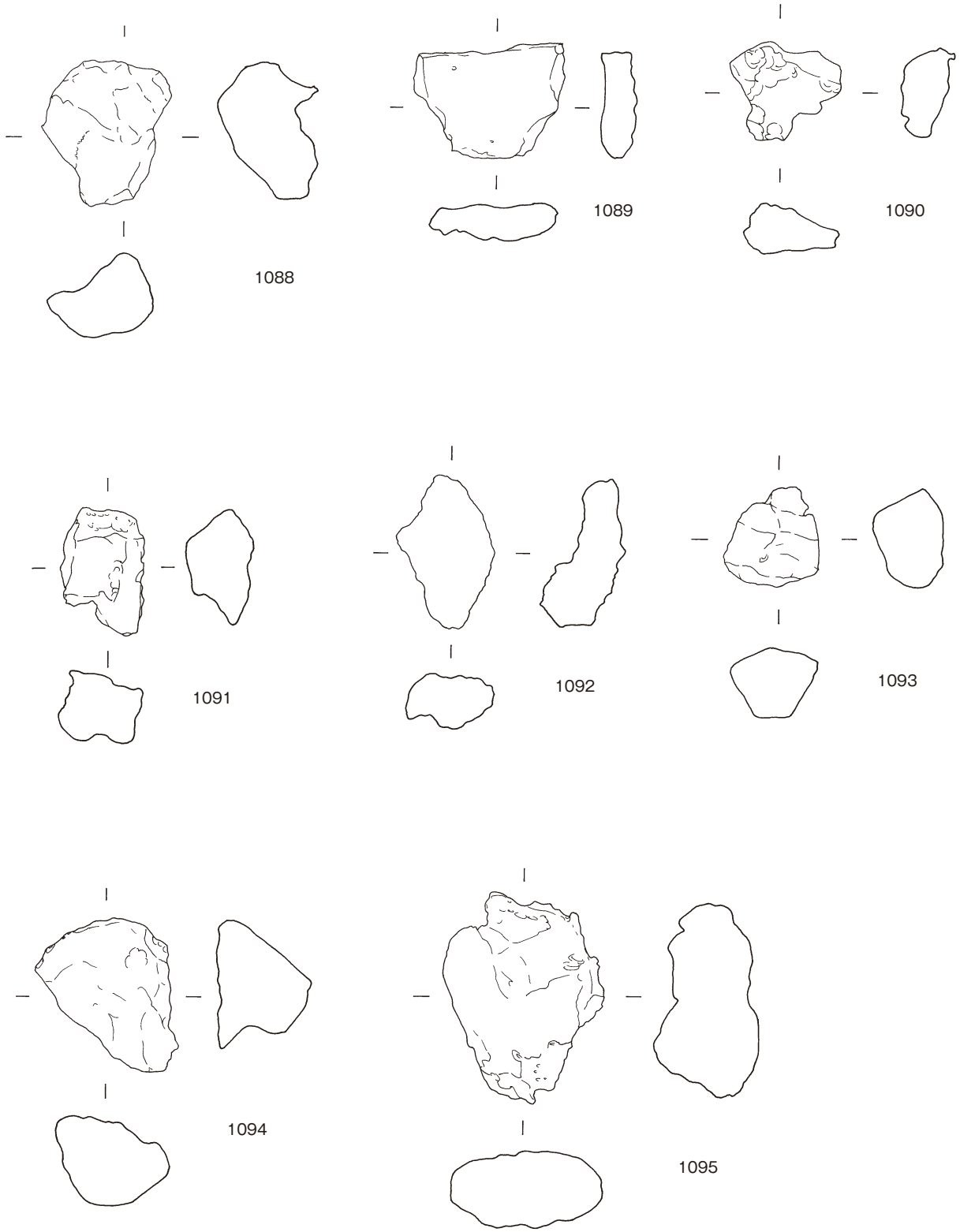
第133図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3出土鍛冶関連遺物（S= 1：2）



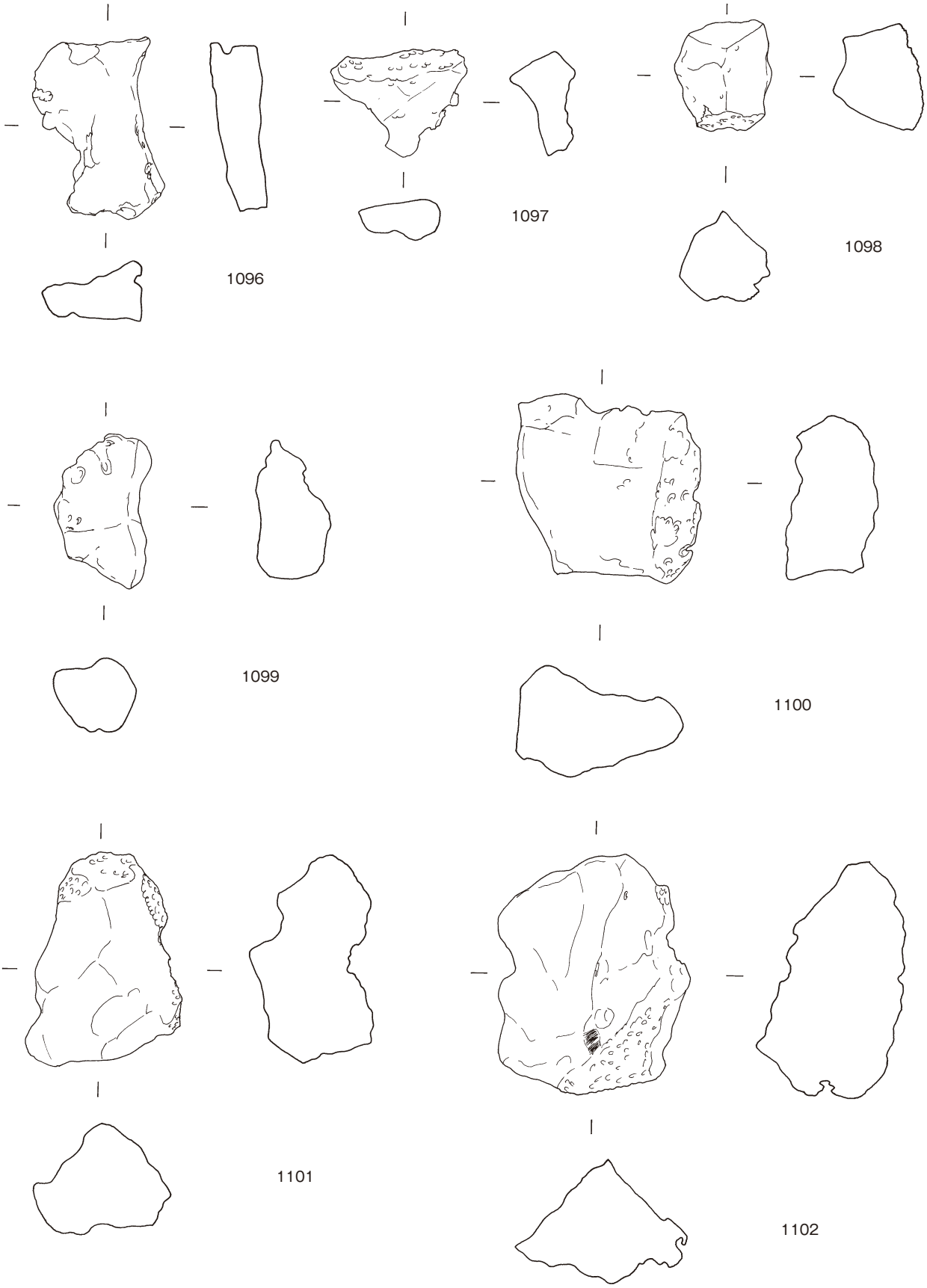
第134図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄塊系遺物①（S= 1：2）



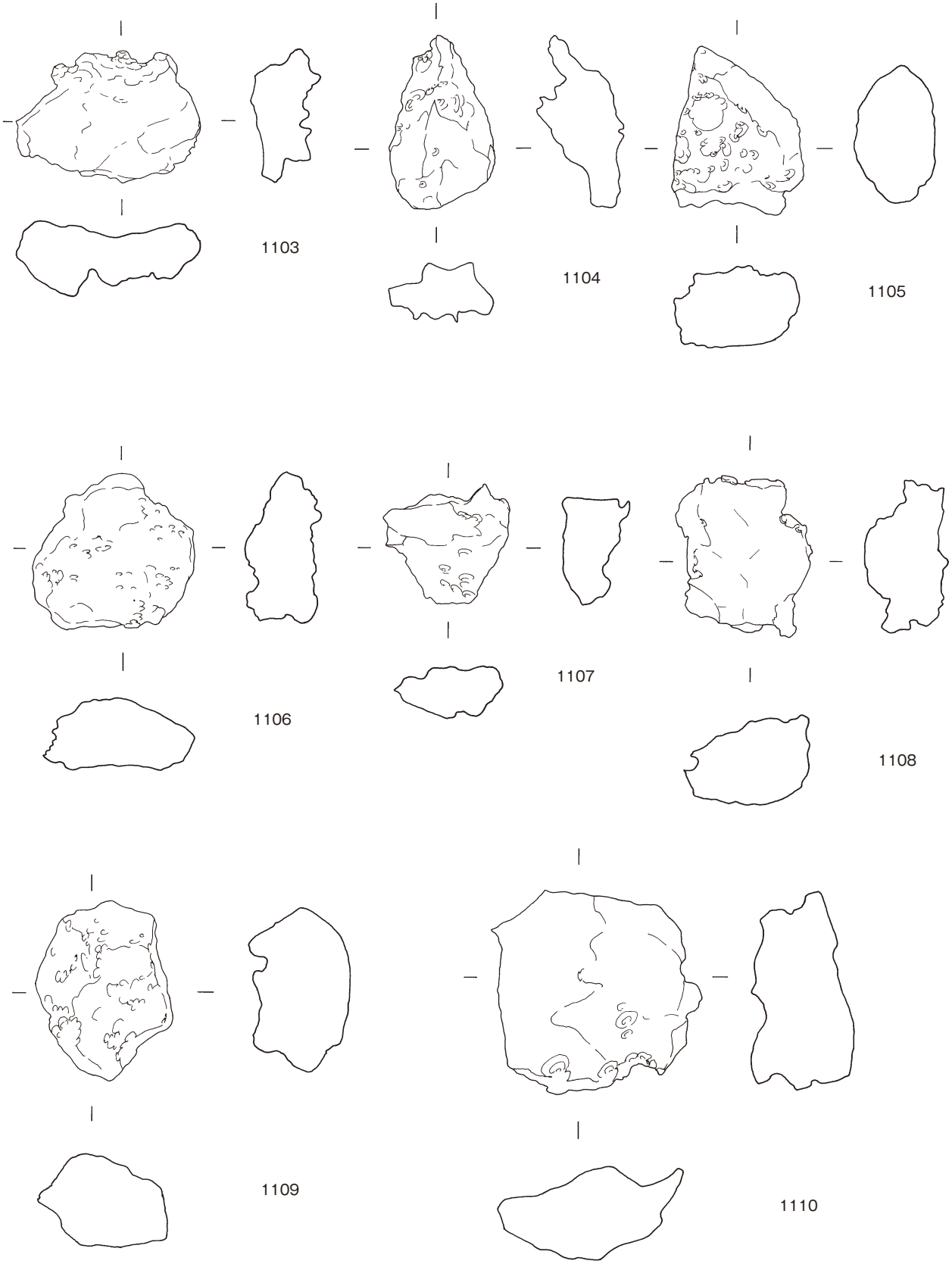
第135図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄塊系遺物②（S= 1：2）



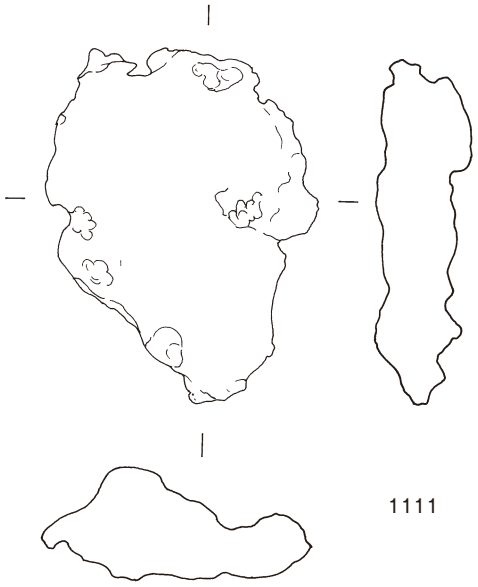
第136図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄塊系遺物③（S= 1：2）

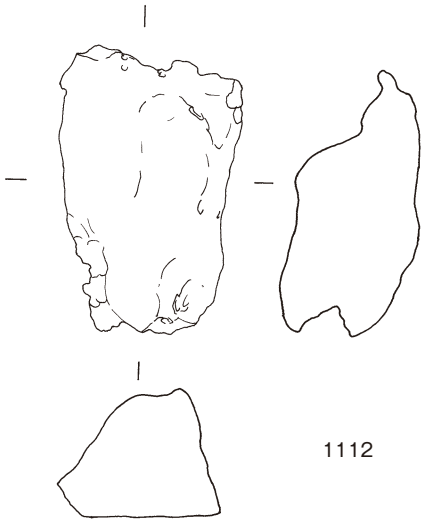


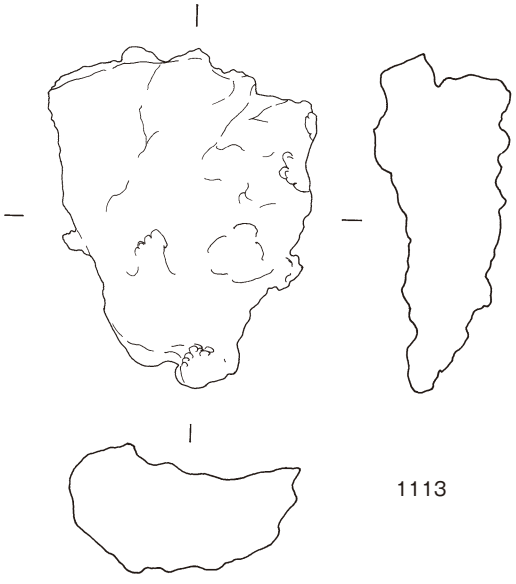
第137図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄塊系遺物④（S= 1：2）

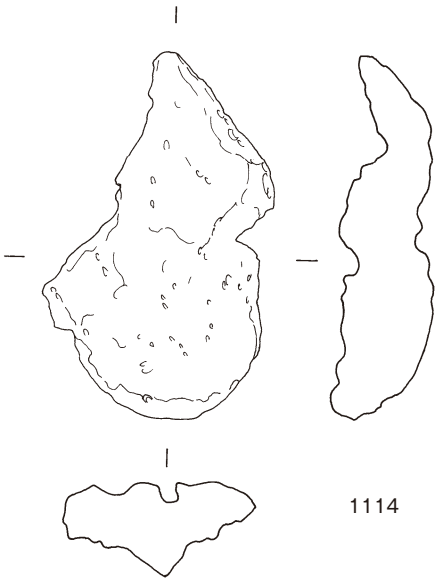


第138図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄滓①（S= 1：2）

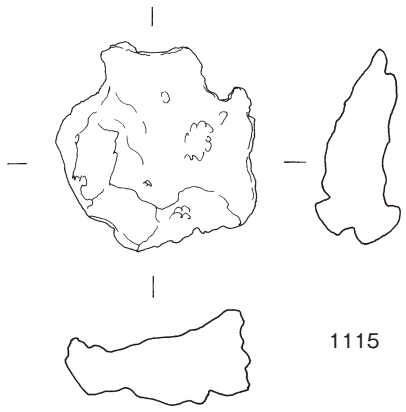


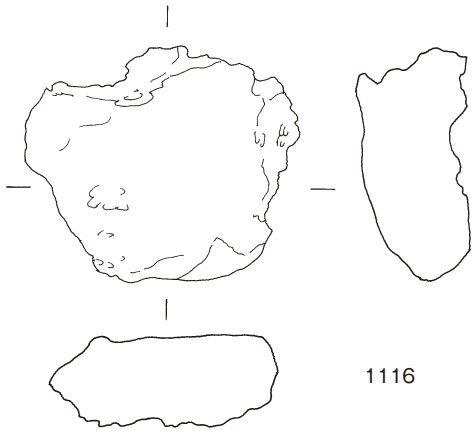


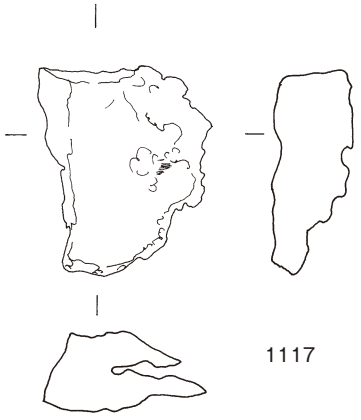


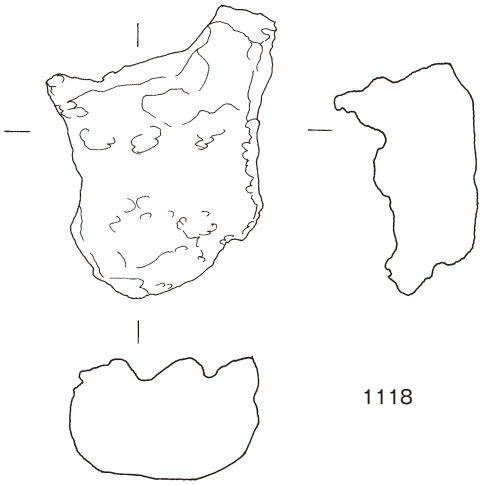


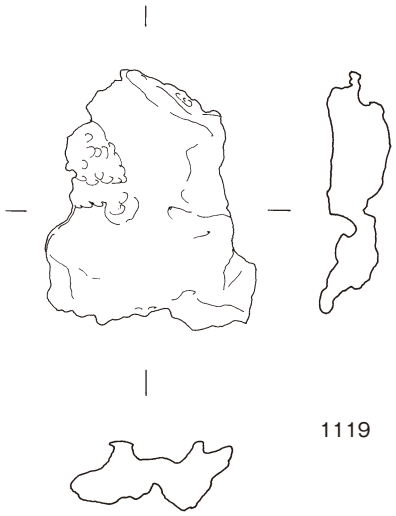
第139図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄滓②（S= 1：2）



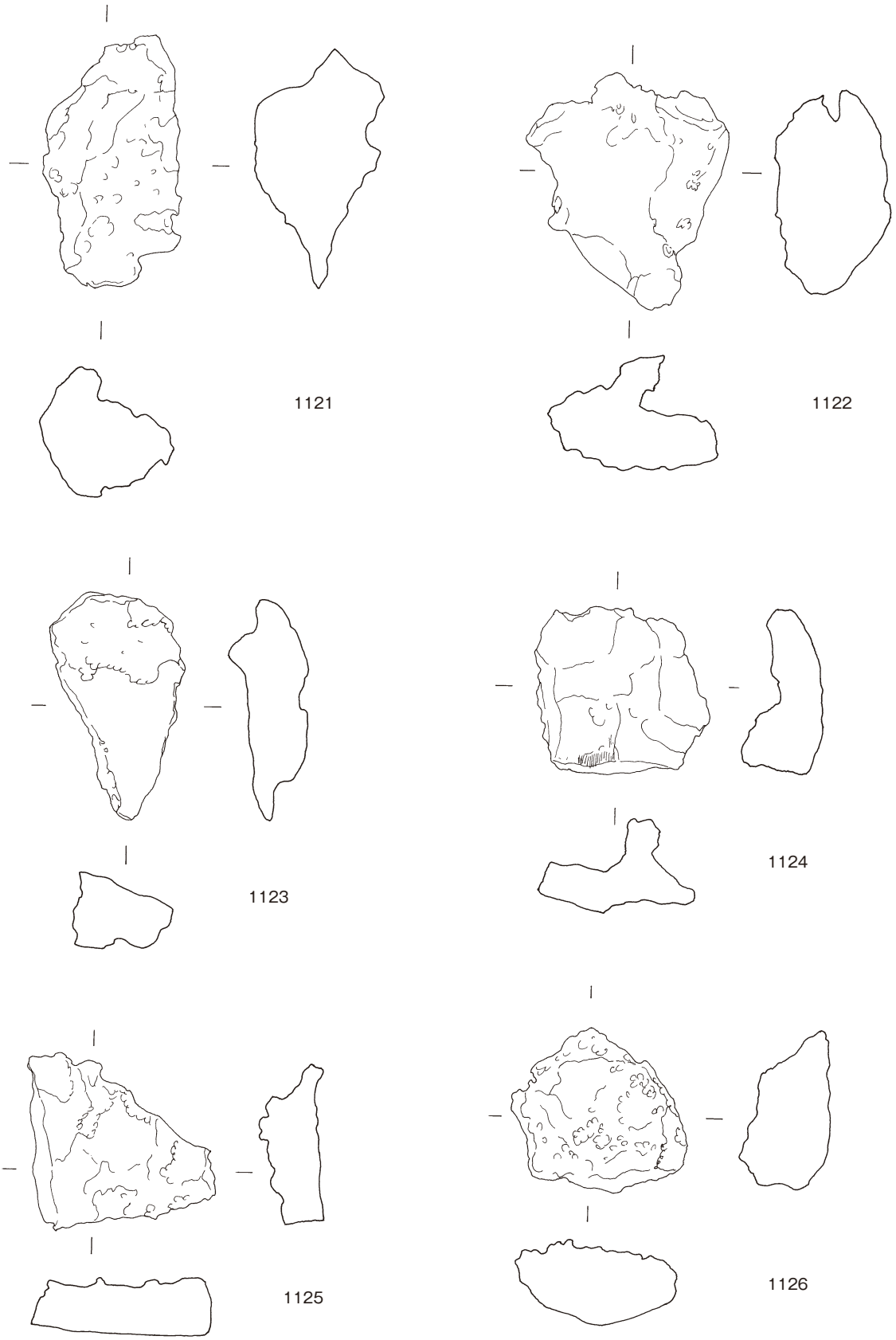




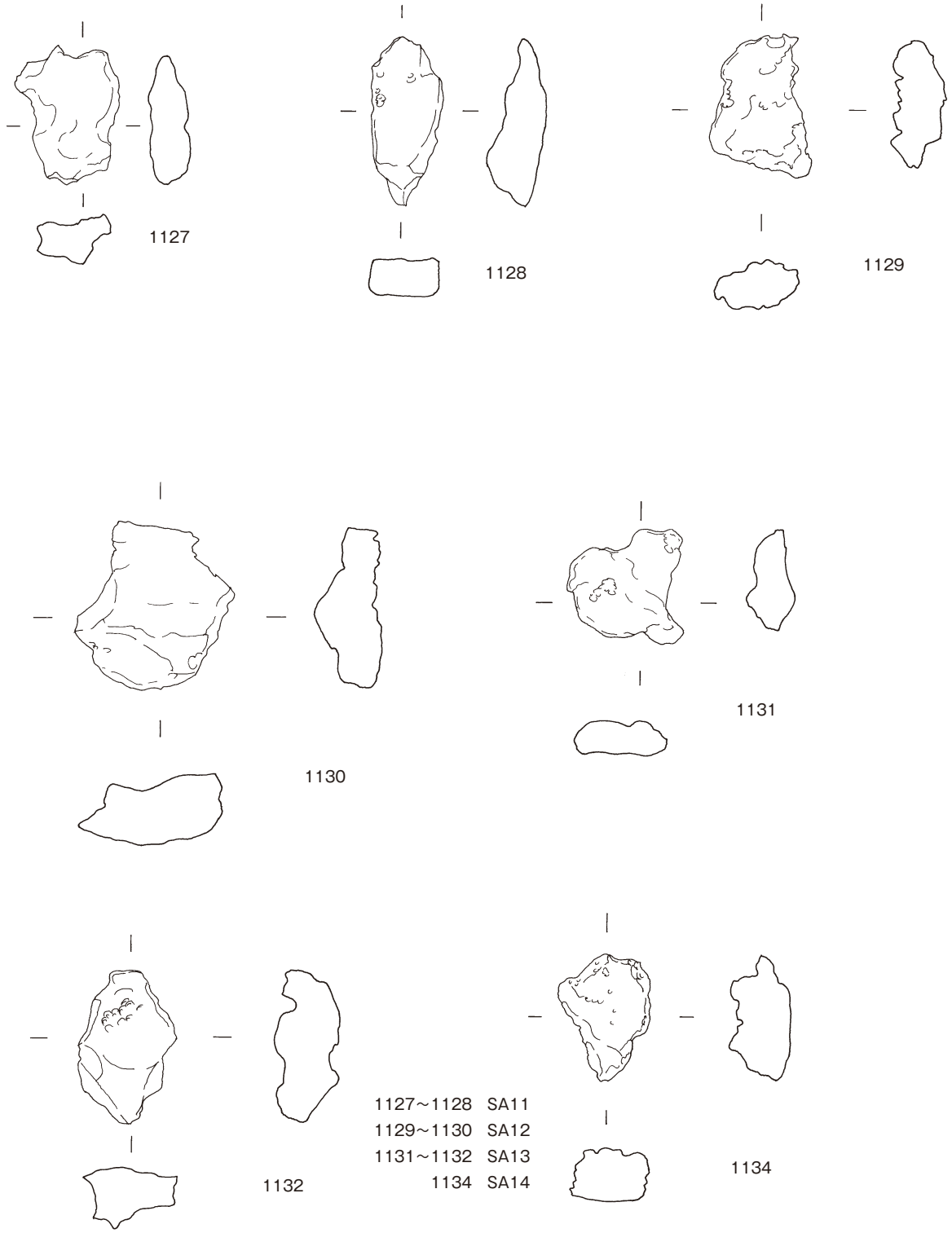




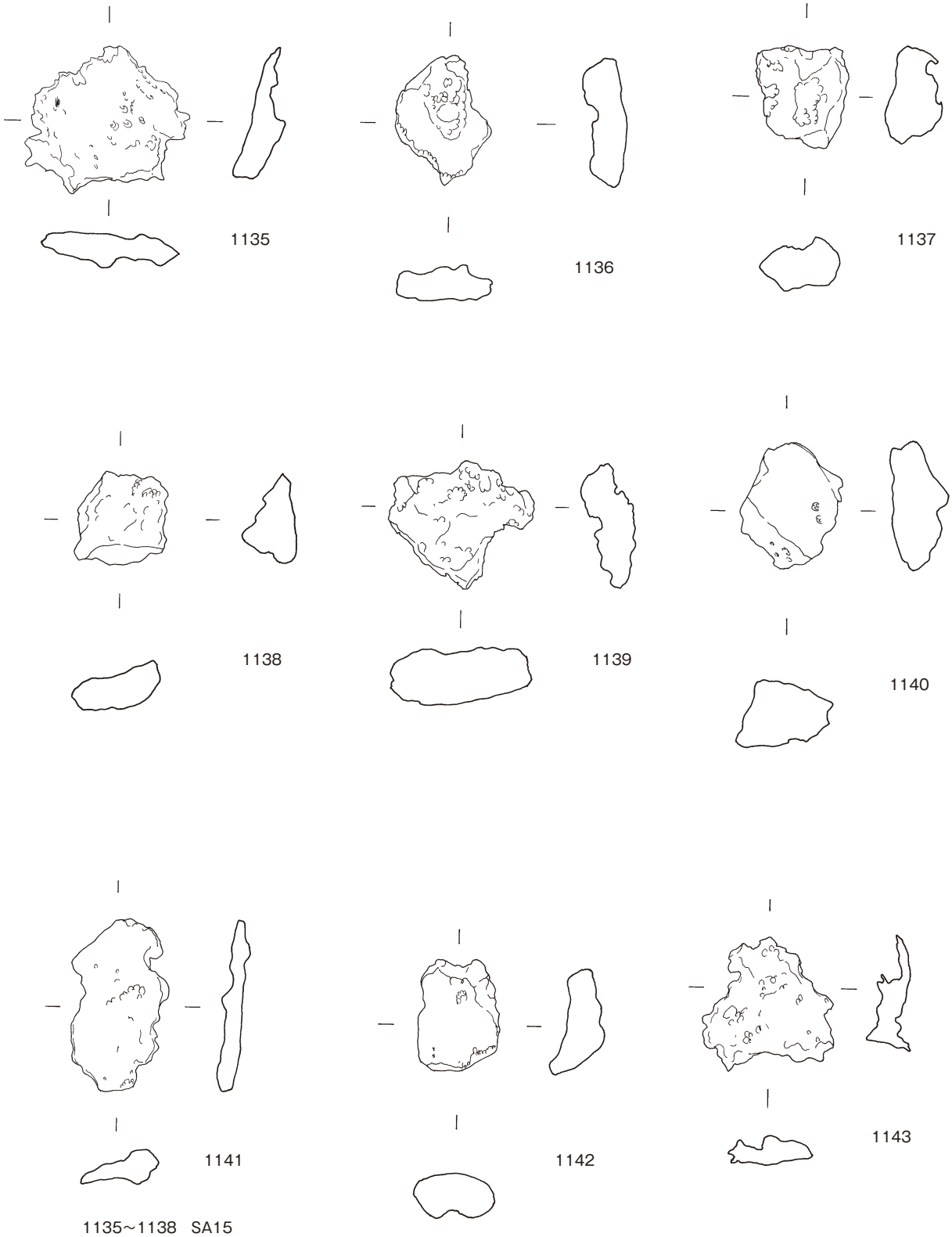
第140図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄滓③（S= 1：2）



第141図　山崎上ノ原第２遺跡Ａ区出土鉄滓④（S= 1：2）

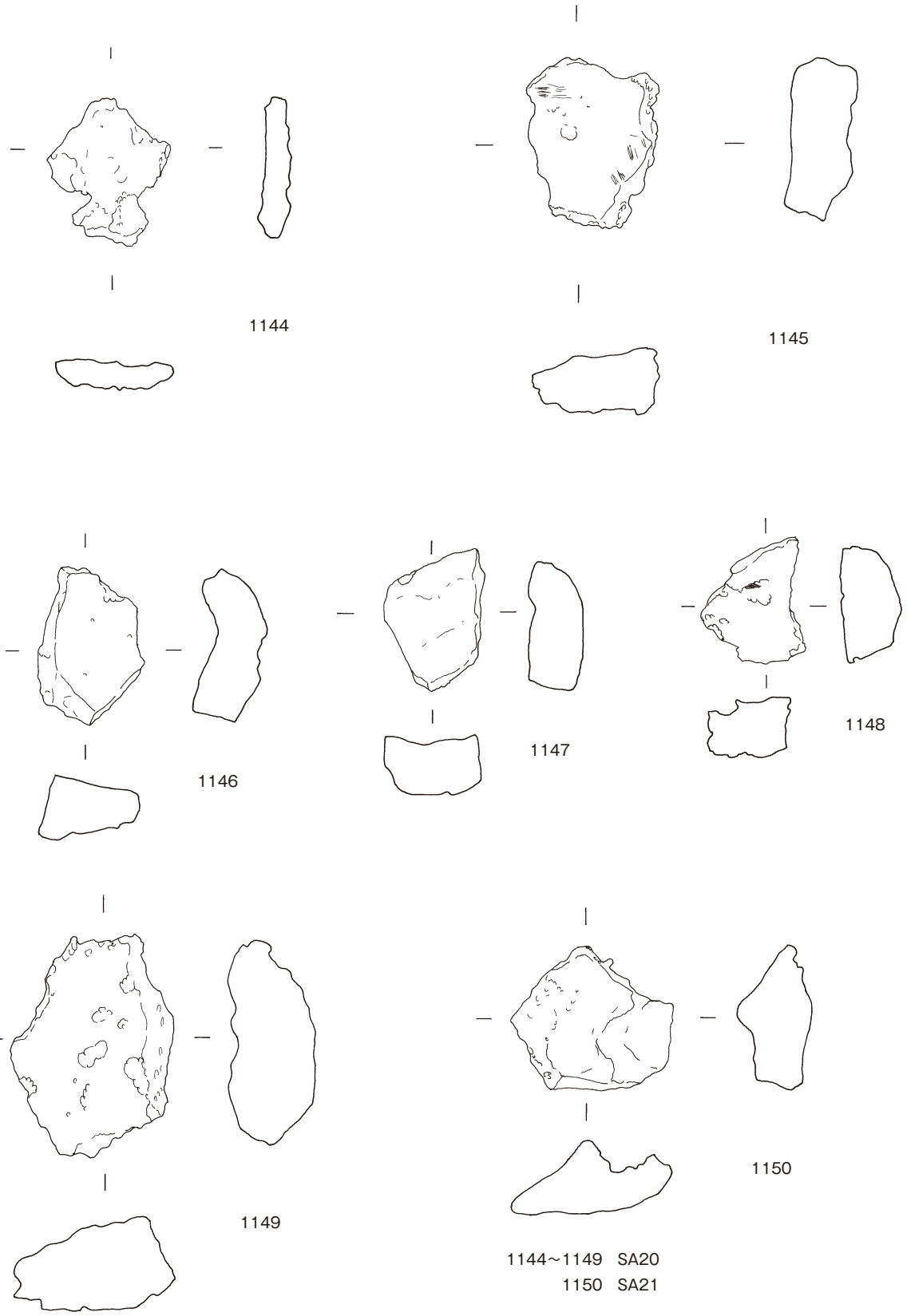


第142図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物①（S= 1：２）

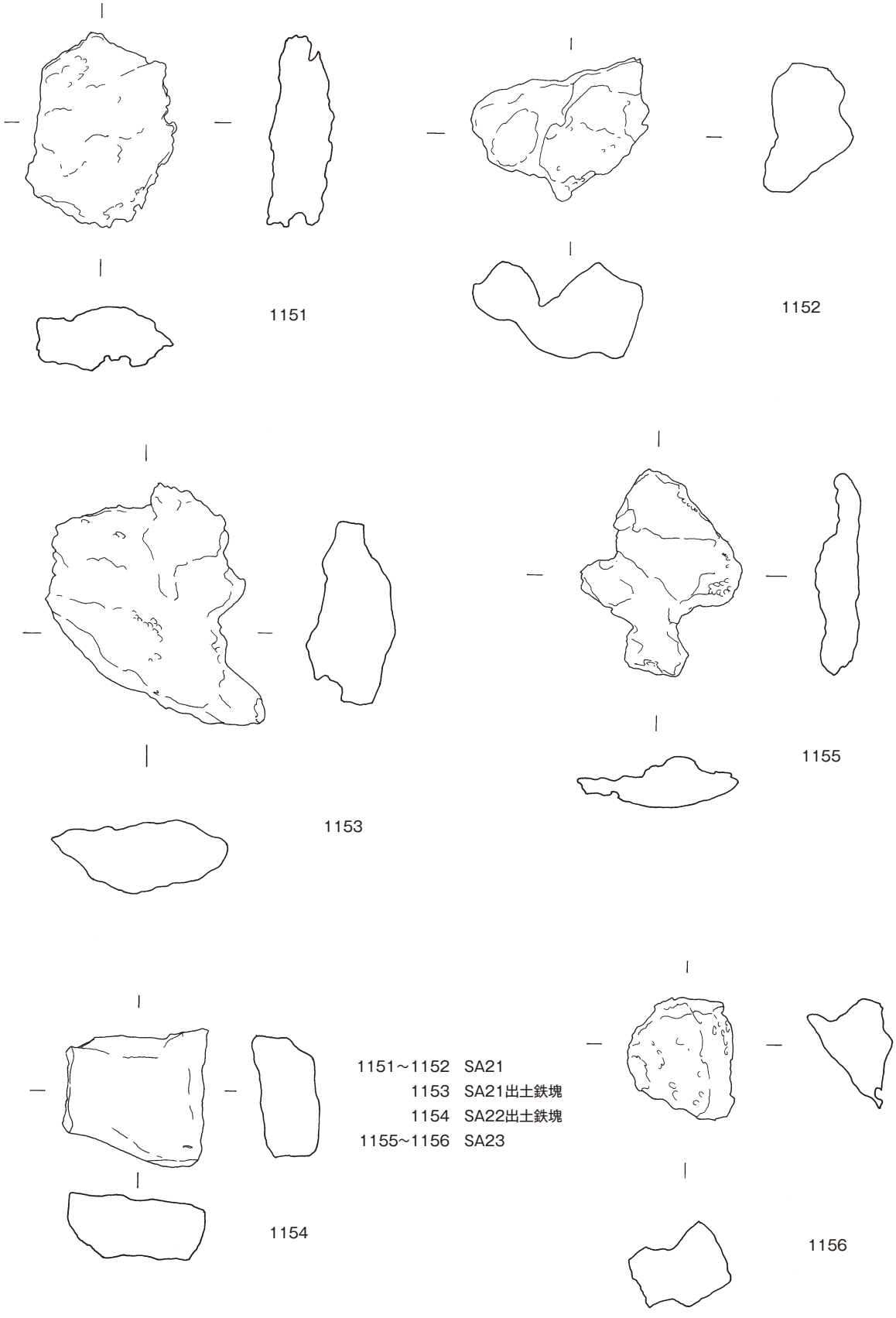


1135～1138　SA15
1139～1140　SA19
1141～1143　SA20

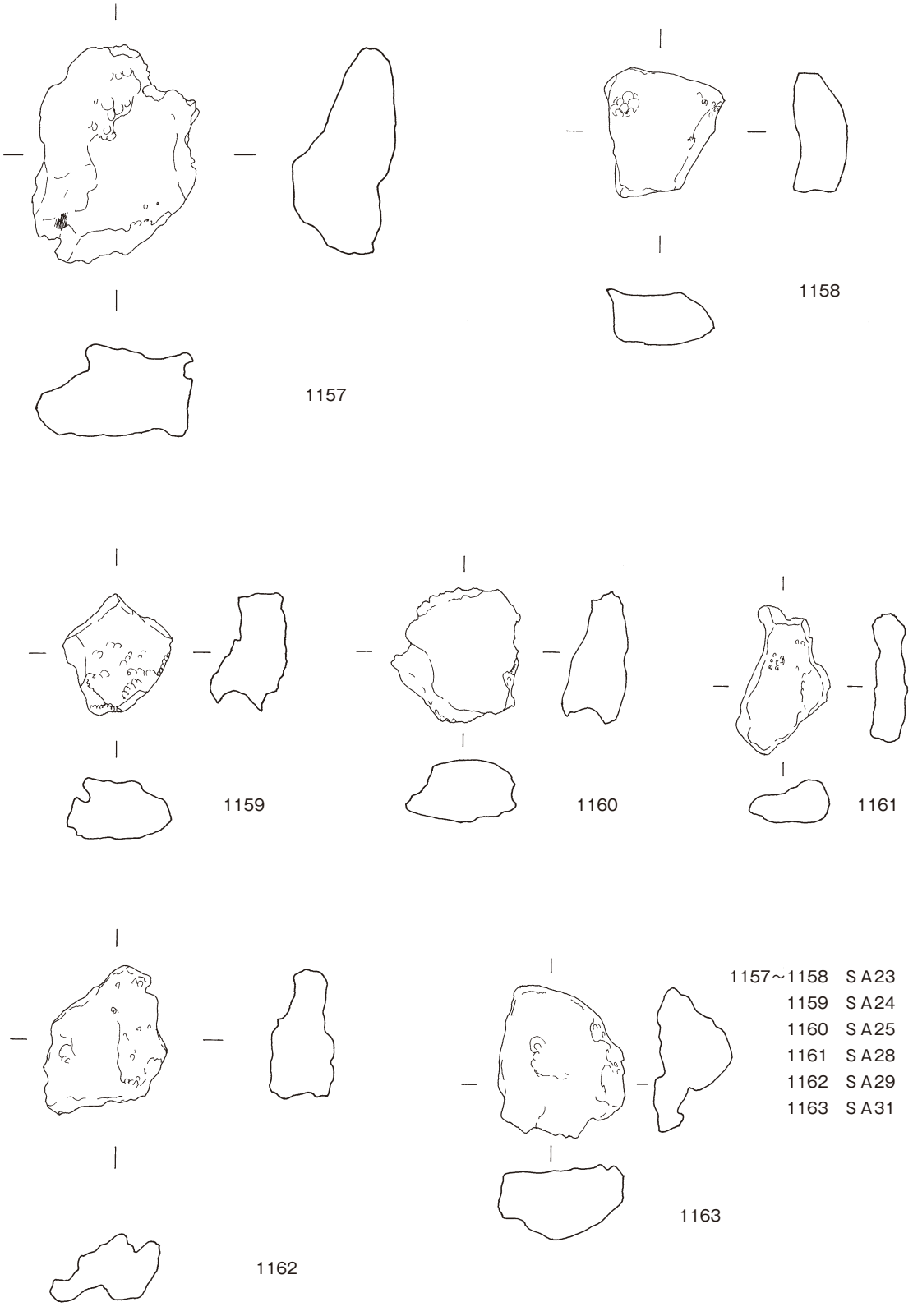
第143図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物②（S= 1：２）



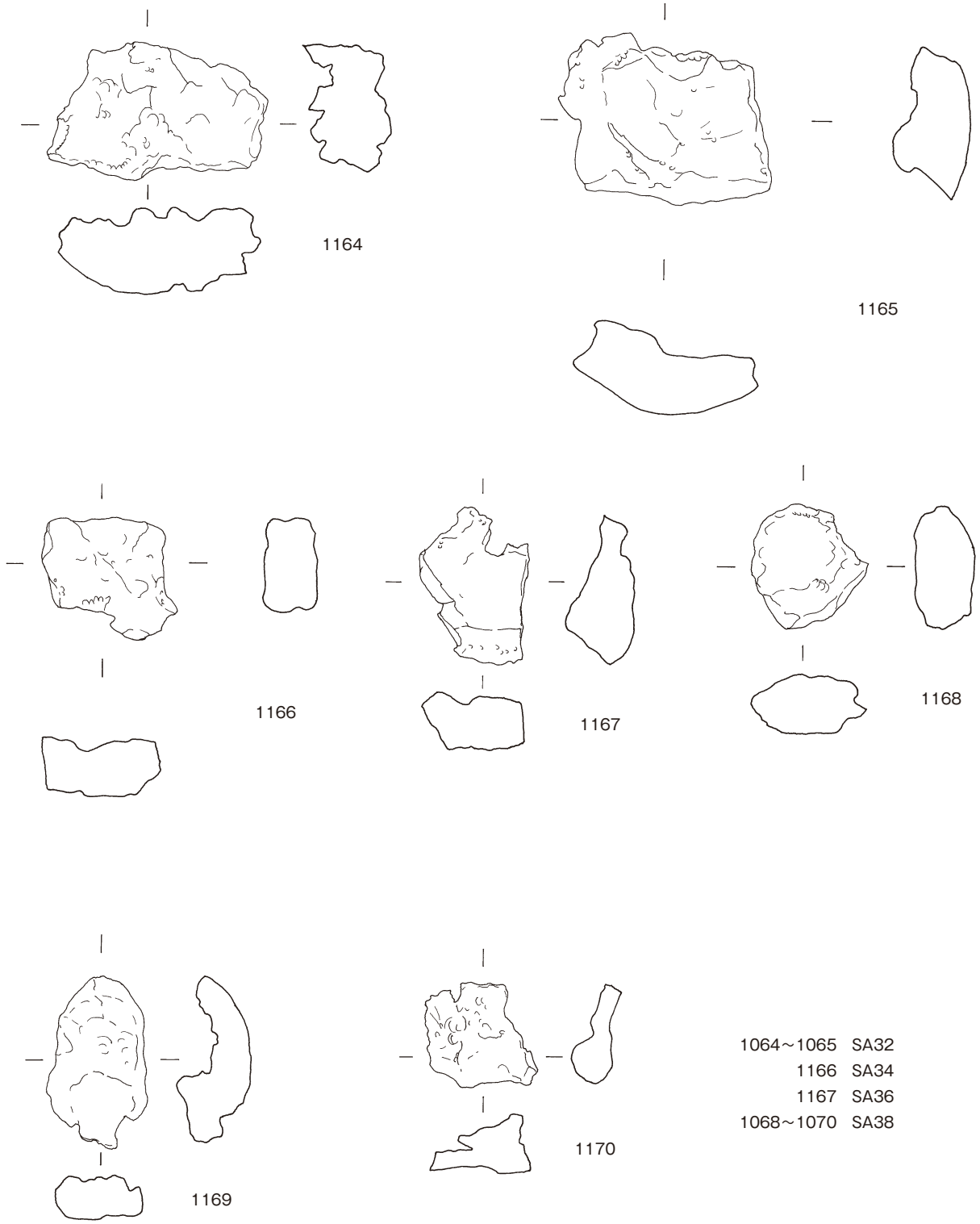
第144図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物③（S= 1：２）



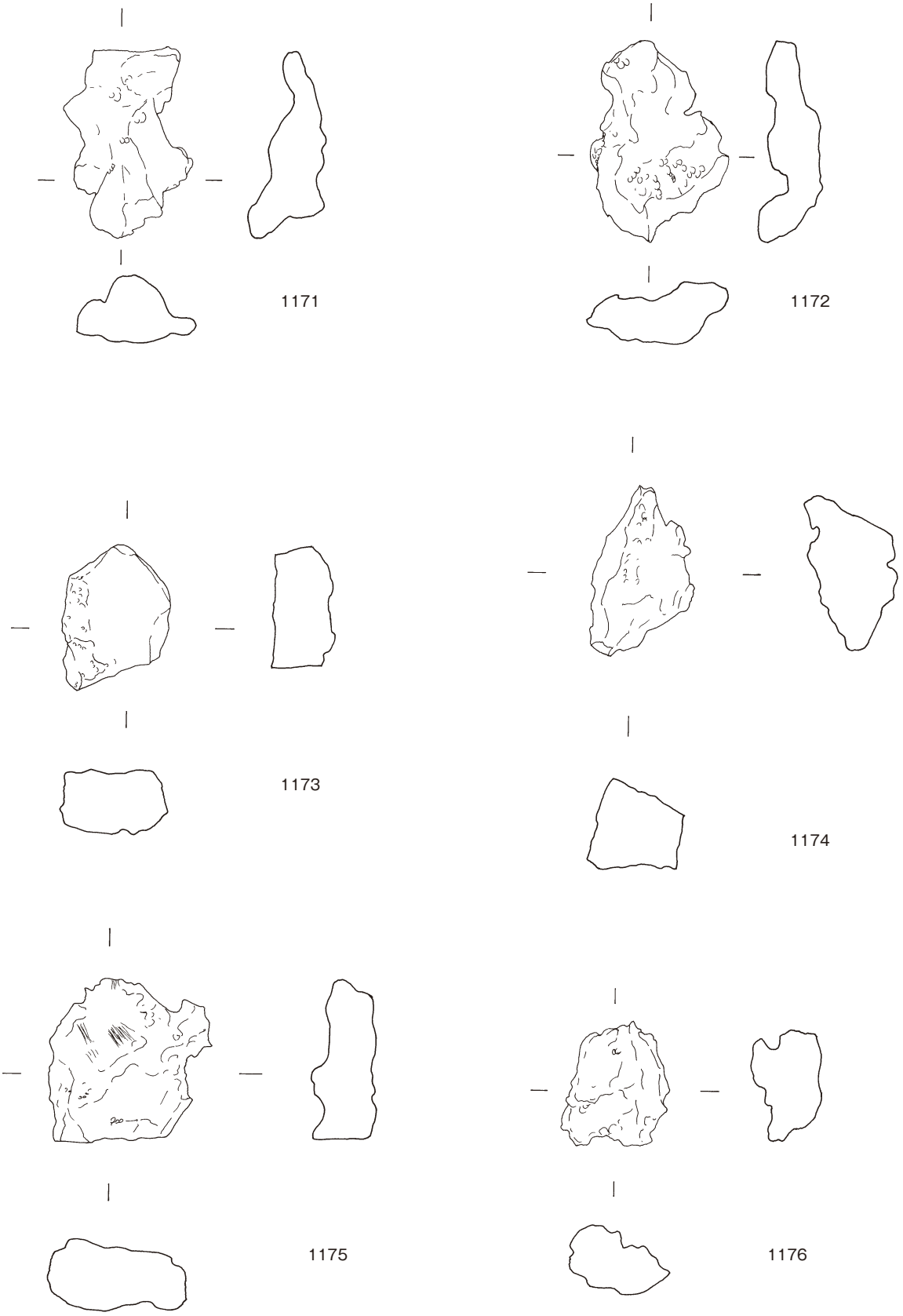
第145図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物④（S= 1：２）



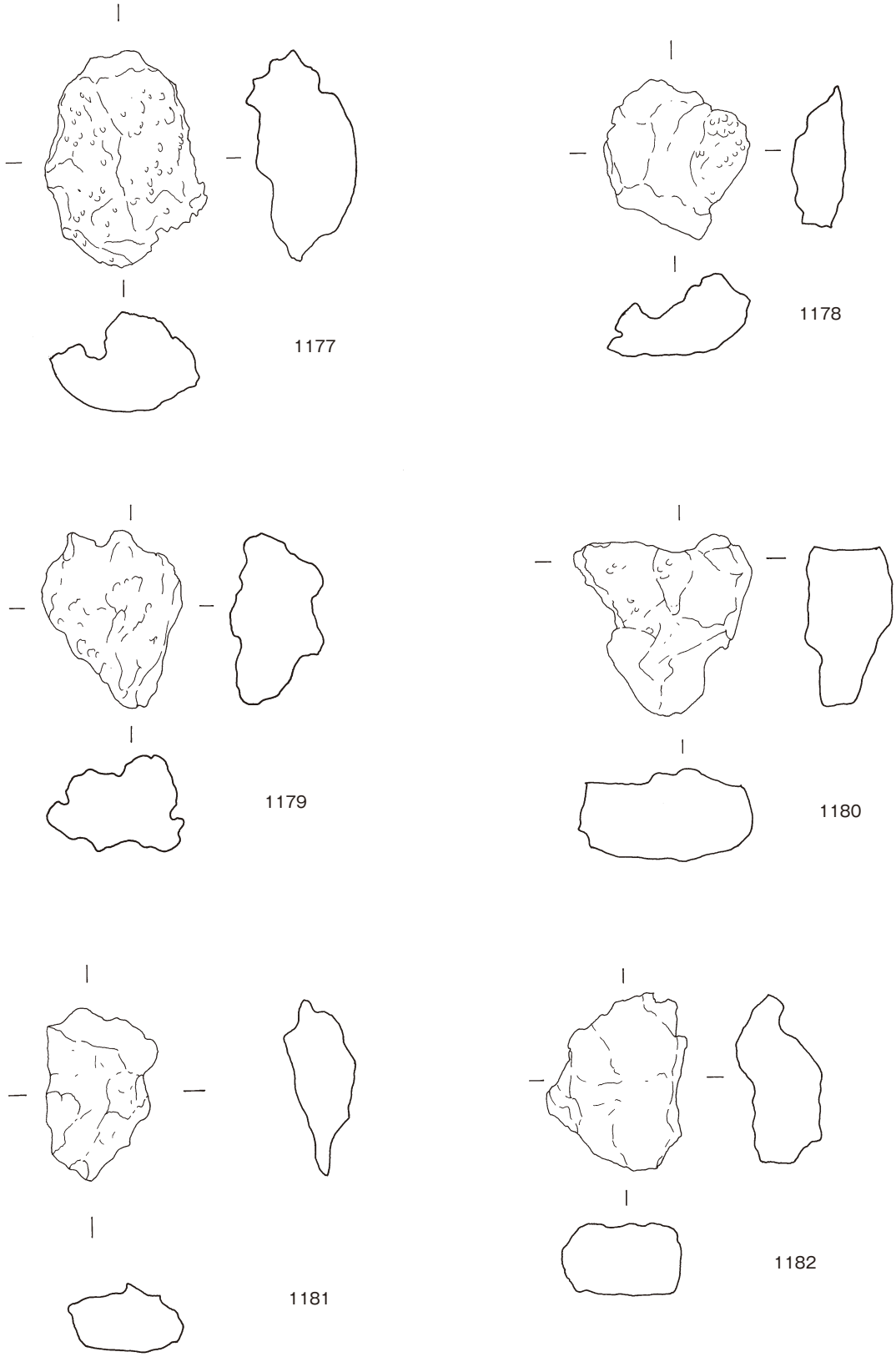
第146図　山崎上ノ原第２遺跡 B －2区出土鍛冶関連遺物⑤（S= 1：２）



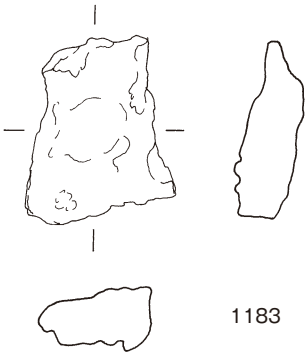
第147図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物⑥（S= 1：２）

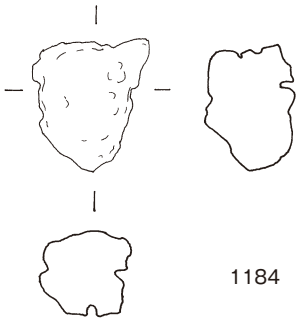


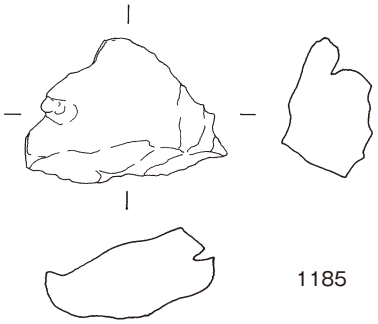
第148図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物⑦（S= 1：２）

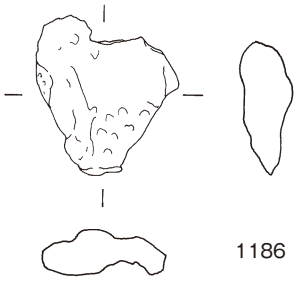


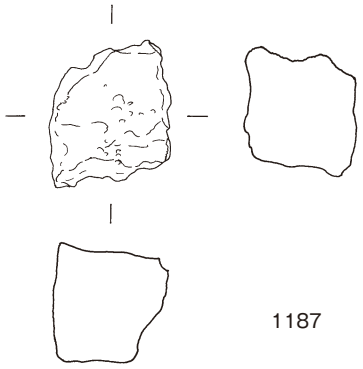
第149図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物⑧（S= 1：２）

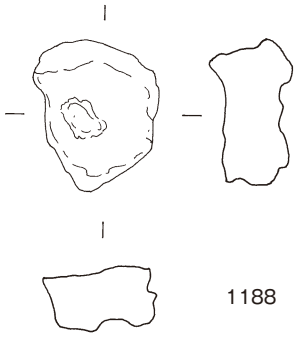

1183

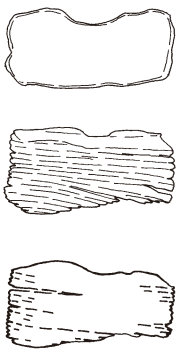

1184

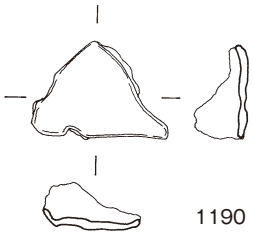

1185


1186


1187


1188


1189


1190

1189　鍛造途中の鉄片か
1190　三角鉄片

第150図　山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区出土鍛冶関連遺物⑨（S= 1：２）

第５表　出土土器観察表

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	須恵器	坏蓋	口縁部	1号竪穴	(13.0)	−	−	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	オリーブ黒(7.5Y3/1)	灰(7.5YR5/1)	堅緻	灰白粗砂5%	口縁部に刻目状圧痕
2	須恵器	坏身	口縁～底部付近	1号竪穴	(11.0)	−	−	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	灰(7.5YR5/1)	灰(7.5YR5/1)	堅緻	精良	底部に粘土片が付着
3	須恵器	坏身	口縁～体部付近	1号竪穴	(11.0)	−	−	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ・回転ヘラケズリ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	堅緻	にぶい黄粗砂10%	
4	須恵器	甕	体部	1号竪穴	−	−	−	カキメ・格子タタキ	同心円アテ具痕	灰(N5/)	灰(N6/1)	堅緻	黒粗砂3%	
5	須恵器	甕	体部	1号竪穴	−	−	−	格子タタキ	同心円アテ具痕	灰黄(2.5Y7/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)	堅緻	灰白粗砂1%	
6	須恵器	甕	体部	1号竪穴	−	−	−	格子タタキ	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y6/2)	オリーブ黄(5Y6/3)	堅緻	乳白粗砂1% 黒礫1%未満	
7	土師器	壺	体部	1号竪穴	−	−	−	ミガキ	ナデ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/6)	良好	精良	
8	土師器	甕	体部	1号竪穴	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい褐(7.5YR6/3)	良好	にぶい褐礫7%	
9	土師器	甕	体部	1号竪穴	−	−	−	工具ナデ	ナデ	明黄橙(2.5YR6/6)	黄灰(2.5Y5/1)	良好	黄灰礫1% 浅黄礫1%	
10	土師器	甕	口縁～体部付近	1号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	暗褐礫2% 黒褐粗砂5%	
11	土師器	甕	口縁～体部付近	1号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	明黄褐(10YR7/6)	良好	暗褐粗砂7% 褐灰礫3%	
12	土師器	甕	底部	1号竪穴	−	(9.6)	−	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	黒(5YR7/4)	良好	褐灰・暗赤褐・黒礫7% 灰白・無色透明粗砂10%	
13	土師器	甕	底部	1号竪穴	−	(7.8)	−	ナデ	ナデ	褐灰(10YR5/1)	橙(5YR7/6)	良好	褐灰礫1%	
14	土師器	甕	底部	1号竪穴	−	(6.8)	−	ナデ	ナデ	黄灰(2.5YR4/1)	橙(7.5YR7/6)	良好	褐灰礫2% にぶい赤褐礫1%	
15	土師器	坏	口縁部	1号竪穴	−	−	−	ナデ？	ナデ？	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	灰白粗砂1%	外面黒色処理？
16	土師器	坏	口縁部	1号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐(2.5YR5/8)	橙(2.5YR6/8)	良好	灰白・黒・無色透明細砂5%	外面黒色処理？
17	土師器	坏	口縁部	1号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙(7.5YR7/4)	橙(5YR7/8)	良好	灰白粗砂1% 黒褐粗砂1%	
18	土師器	坏	体部	1号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	褐礫1% 褐粗砂2～3%	
19	土師器	坏	底部	1号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐(5YR5/6)	赤褐(2.5YR4/6)	良好	褐粗砂1%	
20	土師器	坏	底部	1号竪穴	−	(9.0)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(5YR7/4)	良好	赤褐・褐灰・灰白粗砂7%	内面に「Ｘ」のヘラ記号、底部に葉脈痕
21	土師器	甑	底部	1号竪穴	−	(7.0)	−	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	良好	黒粗砂5% 黒～褐礫3%	底部に葉脈痕
22	土師器	甑	底部	1号竪穴	−	(7.0)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	にぶい橙礫3% 褐灰・灰白・黒褐粗砂3%	底部に指頭痕・葉脈痕
23	土師器	高坏	脚柱部	1号竪穴	−	−	−	ナデ	ユビナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	にぶい黄粗砂1%	外面に圧痕
24	土師器	高坏	脚部	1号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	明赤褐(5YR5/8)	良好	褐粗砂7% 褐礫１% 未満	
25	土師器	土製円盤	−	1号竪穴	直径3.1～3.5			ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(2.5YR4/2)	にぶい褐(7.5YR5/3)	良好	灰赤粗砂１% 灰赤礫１% 未満	坏などからの転用か
27	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部付近	2,3号竪穴	(13.8)	−	(3.3)	回転ヨコナデ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰(N4/)	灰白(5Y5/1)	堅緻	精良・灰白粗砂1%	
28	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部付近	2,3号竪穴	(14.8)	−	(3.4)	回転ヨコナデ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	堅緻	精良・灰白粗砂1%	
29	須恵器	坏身	口縁～体部付近	2,3号竪穴	−	−	−	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰(N4/)	灰(N4/)	堅緻	精良・灰白粗砂2%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
30	須恵器	坏身	底部付近	2,3号竪穴	−	(4.6)	−	回転ヨコナデ 回転ヘラケズリ	回転ヨコナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
31	須恵器	甕	胴部	2,3号竪穴	−	−	−	カキメ	ナデ	浅黄 (2.5YR7/4)	灰黄 (2.5Y7/2)	堅緻	精良	
32	須恵器	甕	体部	2,3号竪穴	−	−	−	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰 (N6/)	灰 (N6/)	堅緻	淡黄粗砂1%	
33	須恵器	甕	体部	2,3号竪穴	−	−	−	格子タタキ	同心円アテ具痕	オリーブ黒 (7.5Y3/2)	オリーブ黒 (7.5Y3/2)	堅緻	灰白粗砂3%	
34	須恵器	壺形	口縁部	2,3号竪穴	−	−	−	回転ヨコナデ 櫛描波状文	回転ヨコナデ	灰 (10Y4/1)	灰 (10Y4/1)	堅緻	灰白粗砂7% 透明粗砂1%	ハソウか
35	須恵器	壺形	口縁部	2,3号竪穴	−	−	−	回転ヨコナデ 櫛描波状文	回転ヨコナデ	灰 (5Y6/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	堅緻	灰白粗砂1%	ハソウか
36	須恵器	壺形	頸部	2,3号竪穴	−	−	−	回転ヨコナデ 櫛描波状文	回転ヨコナデ	灰 (5Y4/1)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂1% 褐灰粗砂1%	ハソウか
37	須恵器	壺形	胴部	2,3号竪穴	−	−	−	沈線・ヘラ状工具による連続刺突	ナデ	灰 (7.5Y)	灰 (5N)	堅緻	灰・灰白礫各1%未満, 灰白・黒・明赤褐粗砂各1%	ハソウか
38	須恵器	壺形	頸部	2,3号竪穴	−	−	−	回転ヨコナデ	回転ヨコナデ	灰 (N5/)	灰 (7.5YR5/1)	堅緻	灰粗砂1%	提瓶か
39	土師器	甕	口縁～胴部	2,3号竪穴	(16.3)	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	にぶい褐礫3% にぶい褐粗砂3%	
40	土師器	甕	口縁～胴部	2,3号竪穴	(14.0)	−	−	ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	にぶい赤褐礫2% 暗赤灰礫3%	
41	土師器	甕	口縁～頸部	2,3号竪穴	(16.9)	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄 (5Y6/3)	良好	灰褐礫15% 黒粗砂5%	
42	土師器	甕	胴部	2,3号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	暗赤褐礫3%	
43	土師器	甕	胴部	2,3号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	暗赤褐礫10%, 黒褐粗砂2%, 黒粗砂2%, 赤褐礫1%, 透明光沢細砂10%	
50	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	4号竪穴	(11.2)	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂1% 灰白粗砂2%	焼き歪みあり
51	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	4号竪穴	(13.8)	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰 (N3/)	灰 (N5/)	堅緻	灰白粗砂1% 灰白粗砂2%	
52	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	4号竪穴	(15.0)	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (N6/1)	灰白 (N7/1)	堅緻	浅黄粗砂1%	
53	須恵器	坏蓋	口縁部	4号竪穴	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y4/)	灰 (5Y5/)	堅緻	精良	
54	須恵器	坏蓋	口縁部	4号竪穴	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/3)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂1%	
55	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	4号竪穴	(13.6)	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	浅黄粗砂1%	焼き歪みあり
56	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	4号竪穴	(13.0)	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	暗オリーブ灰 (2.5GY3/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂2%	刻目状圧痕
57	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	4号竪穴	(13.0)	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	黒褐 (2.5Y3/1)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂5%	
58	須恵器	坏蓋	口縁部～天井部	4号竪穴	(11.9)	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	灰オリーブ (7.5Y4/2)	堅緻	灰白粗砂3%	
59	須恵器	坏身	口縁～底部付近	4号竪穴	(10.2)	−	(4.6)	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰 (N3/)	灰 (5Y5/1)	堅緻	灰粗砂1%	
60	須恵器	坏身	口縁～受部	4号竪穴	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	オリーブ灰 (2.5GY5/1)	暗オリーブ灰 (2.5GY4/1)	堅緻	灰白粗砂3%	
61	須恵器	坏身	口縁～底部付近	4号竪穴	−	−	(5.2)	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	堅緻	黄灰粗砂1%	
62	須恵器	坏身	口縁～受部	4号竪穴	−	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	灰 (5Y5/1)	堅緻	黄灰粗砂1%	
63	須恵器	坏身	口縁～底部付近	4号竪穴	−	−	−	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	浅黄橙粗砂1%	発泡している部分あり
64	須恵器	坏身	口縁～受部	4号竪穴	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
65	須恵器	坏身	口縁～受け部	4号竪穴	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
66	須恵器	坏身	口縁～受け部	4号竪穴	(11.2)	–	–	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	黄褐 (2.5Y5/3)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	灰粗砂1%	
67	須恵器	坏身	口縁～受け部	4号竪穴	(11.4)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y4/2)	堅緻	にぶい黄橙粗砂1%	
68	須恵器	坏	底部付近	4号竪穴	–	–	–	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	暗灰黄粗砂1%	
69	須恵器	坏	底部付近	4号竪穴	–	–	–	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	暗灰黄粗砂2%	
70	須恵器	坏	底部	4号竪穴	–	–	–	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	暗灰黄粗砂2%	底面にヘラ記号
71	須恵器	坏	底部付近	4号竪穴	–	–	–	回転ヘラケズリ 回転横ナデ	回転横ナデ	暗青灰 (5B3/1)	暗青灰 (10BG4/1)	堅緻	灰白粗砂2%	
72	須恵器	坏	口縁～体部	4号竪穴	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/3)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	精良	
73	須恵器	壺	口縁部	4号竪穴	(9.8)	–	–	櫛描波状文	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	暗褐灰粗砂1%	ハソウか
74	須恵器	壺	口縁部	4号竪穴	–	–	–	櫛描波状文	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	にぶい黄 (2.5YR6/3)	堅緻	灰粗砂1%	ハソウか
75	須恵器	高坏	口縁部	4号竪穴	(10.8)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	オリーブ黒 (5Y3/1)	堅緻	灰白粗砂7%	
76	須恵器	高坏	口縁部	4号竪穴	–	–	–	櫛描波状文	回転横ナデ	黒褐 (2.5Y3/1)	灰 (N4/1)	堅緻	灰白粗砂7%	
77	須恵器	高坏	裾部	4号竪穴	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	精良	
78	須恵器	高坏	脚部	4号竪穴	–	(7.6)	–	回転横ナデ	回転横ナデ	オリーブ黒 (7.5Y3/1)	暗灰 (N3/)	堅緻	灰白粗砂2%	
79	須恵器	器台	脚部	4号竪穴	–	–	–	櫛描波状文	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂4% 褐灰粗砂3%	筒型器台
80	須恵器	器台	脚部	4号竪穴	–	(16.8)	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰オリーブ黄 (5Y6/3)	黄灰 (2.5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
81	須恵器	横瓶	口縁部	4号竪穴	(13.8)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	暗オリーブ (7.5Y4/3)	黄灰 (2.5Y5/1)	堅緻	黒粗砂1%	
82	須恵器	壺	肩部	4号竪穴	–	–	–	カキメ	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (7.5YR6/1)	堅緻	灰白粗砂3% 浅黄橙粗砂32% 黒粗砂3%	
83	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	格子タタキ	同心円アテ具痕	灰オリーブ (5Y5/2)	黄灰 (2.5Y6/1)	堅緻	灰白礫1%	
84	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	タタキ・カキメ	同心円アテ具痕	灰 (5YR5/1)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂1%	
85	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰 (5YR5/1)	灰 (5YR5/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
86	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰 (7.5YR6/1)	灰 (7.5YR5/1)	堅緻	精良	
87	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	格子タタキ	同心円アテ具痕	暗灰 (N3/)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	灰黄粗砂1%	
88	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰 (5YR5/1)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	淡黄粗砂1%	
89	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕	にぶい黄 (2.5YR6/3)	灰 (7.5Y4/1)	堅緻	にぶい黄橙粗砂1%	
90	須恵器	甕	胴部	4号竪穴	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕	にぶい黄 (2.5YR6/3)	灰 (5Y4/1)	堅緻	にぶい橙粗砂1%	
91	土師器	坏蓋	口縁～天井部	4号竪穴	(13.0)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明褐 (7.5YR5/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	精良	須恵器模倣
92	土師器	坏身	口縁～体部付近	4号竪穴	(12.2)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙 (10YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	灰黄粗砂1%	須恵器模倣
93	土師器	坏	口縁～底部	4号竪穴	(13.0)	–	4.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	暗赤褐粗砂5% 黒褐粗砂3%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
94	土師器	坏	口縁～底部付近	4号竪穴	(13.6)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/8)	良好	褐灰粗砂3%	
95	土師器	坏	口縁～体部付近	4号竪穴	–	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	褐粗砂3% 灰白粗砂1% にぶい褐礫1%	
96	土師器	坏	口縁～底部	4号竪穴	(11.4)	–	4.5	ヘラミガキ	ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	赤褐(2.5YR4/6)	良好	黒褐粗砂1% 灰白粗砂1%	赤色顔料塗布
97	土師器	坏	口縁～底部	4号竪穴	(18.1)	–	5.6	ヘラミガキ	ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	黒粗砂2% 褐灰粗砂1%	赤色顔料塗布
98	土師器	坏	口縁～底部	4号竪穴	(15.0)	–	7.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR6/6)	明褐(7.5YR5/6)	良好	灰白粗砂1%未満	
99	土師器	坏	口縁～体部付近	4号竪穴	(11.5)	–	–	ヘラミガキ	ナデ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	良好	黒粗砂1%	黒色処理
100	土師器	坏	口縁～底部付近	4号竪穴	(15.0)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	浅黄橙粗砂1%	黒色処理
101	土師器	高坏	坏部	4号竪穴	(15.8)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	にぶい赤褐粗砂5～7% 黒褐粗砂2～3%	
102	土師器	高坏	坏部	4号竪穴	(17.0)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	灰褐礫1% 明赤褐粗砂3%	
103	土師器	高坏	口縁～脚部	4号竪穴	16.8	10.8	11.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐(2.5YR5/8)	橙(2.5YR6/8)	良好	赤粗砂1% 暗赤灰粗砂1%	
104	土師器	高坏	接合部	4号竪穴	–	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(5YR5/8)	明灰黄(10YR6/8)	良好	黒褐粗砂2%	
105	土師器	高坏	脚部	4号竪穴	–	(13.6)	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	明赤褐(5YR5/6)	良好	黒褐粗砂3%	
106	土師器	高坏	脚部	4号竪穴	–	(9.0)	–	ヘラミガキ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	明灰黄(2.5YR5/2)	良好	黒粗砂1%	
107	土師器	高坏	脚柱部	4号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	明褐(7.5YR5/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	灰白粗砂1%	
108	土師器	甕	口縁～体部付近	4号竪穴	(29.0)	–	–	ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	明赤褐(5YR4/6)	良好	暗赤褐礫1% 黒褐・灰白礫それぞれ3%	
109	土師器	甕	口縁～頸部	4号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	にぶい赤褐礫3% 黒・灰白礫それぞれ1%	
110	土師器	甕	口縁～体部付近	4号竪穴	(24.2)	–	–	ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	赤褐礫5%	
111	土師器	甕	口縁～体部付近	4号竪穴	(15.6)	–	–	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	黄褐(2.5Y5/3)	良好	赤褐礫5～7% にぶい黄褐礫5% 灰礫5%	
112	土師器	甕	口縁～体部付近	4号竪穴	(16.0)	–	–	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	灰褐礫1% 灰黄褐礫1%	
113	土師器	甕	口縁～頸部	4号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	にぶい黄褐礫3% 褐礫5%	
114	土師器	甕	底部	4号竪穴	–	(6.0)	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	灰黄(2.5Y6/2)	良好	灰褐礫1% 灰黄褐礫1%	
115	土師器	甕	底部付近	4号竪穴	–	(7.0)	–	ユビナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	黒(10YR2/1)	良好	黒褐礫3%	
116	土師器	甕	頸部～体部	4号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	褐灰礫3%	
117	土師器	甕	体部	4号竪穴	–	–	–	タタキ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	明黄褐(10YR6/6)	良好	灰黄褐礫2%	
118	土師器	甕	体部	4号竪穴	–	–	–	タタキ	タタキ・ナデ	浅黄橙(10YR8/3)	灰黄褐(10YR5/1)	良好	灰黄褐礫2%	
119	土師器	壺	口縁～頸部	4号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	黒礫3% 褐礫3%	
120	土師器	壺	底部	4号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(2.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	褐粗砂3% 灰白粗砂1% にぶい褐礫1%	
121	土師器	壺	底部	4号竪穴	–	(5.0)	–	ヘラミガキ	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	黒粗砂15%	
122	土師器	壺	底部	4号竪穴	–	(4.0)	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	橙(2.5YR6/6)	良好	黄褐粗砂1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
123	土師器	壺	底部	4号竪穴	−	(6.0)	−	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	暗褐粗砂3%	
124	土師器	不明	胴部～底部付近	4号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (10YR6/4)	良好	にぶい橙3%	
125	土師器	不明	胴部～底部付近	4号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR4/3)	にぶい赤褐 (10YR5/2)	良好	褐灰礫3% にぶい赤褐礫1%	
126	土師器	不明	胴部～底部付近	4号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	黒褐粗砂1%	
127	土師器	不明	底部付近	4号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	黒礫1%	
128	土師器	不明	底部	4号竪穴	−	(6.0)	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (5YR7/8)	良好	黒褐粗砂7% 褐灰礫2%	
129	土師器	不明	底部	4号竪穴	−	(2.7)	−	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐灰礫3% 透明細砂3% 黒粗砂1%	
130	土師器	不明	底部	4号竪穴	−	(6.0)	−	ユビオサエ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	黒褐粗砂7% 褐灰礫2%	
136	土師器	坏蓋	口縁～天井部	5号竪穴	(15.0)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR6/8)	良好	黒褐粗砂3%	
137	土師器	坏	口縁～底部付近	5号竪穴	(15.0)	−	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (2.5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	褐灰粗砂5% 灰白粗砂5% 明赤褐粗砂5%	
138	土師器	坏	口縁～体部付近	5号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐粗砂3%	
139	土師器	坏	口縁部	5号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ナデ？	赤 (10YR5/6)	赤 (10YR5/6)	良好	黒褐粗砂1%	黒色処理
140	土師器	坏	口縁部	5号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ナデ	黒 (7.5YR2/1)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好	黒褐礫1% 灰白礫1% 黒褐粗砂10%	黒色処理
141	土師器	坏	口縁部～底部	5号竪穴	(5.8)	(5.4)	(3.0)	手提ね	−	灰オリーブ (5Y4/2)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	にぶい褐礫3～5% 灰礫5% 灰白礫3%	
142	土師器	鉢	口縁～底部付近	5号竪穴	17.5	9.2	8.1	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫3%	
143	土師器	鉢	口縁下部～体部	5号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (2.5YR7/6)	良好	褐灰粗砂1% 灰白粗砂1%	
144	土師器	高坏	支脚部	5号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	赤褐粗砂1～2%	
145	土師器	高坏	支脚部	5号竪穴	−	10.0	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	赤褐礫1%	
146	土師器	台付鉢	脚部	5号竪穴	−	(12.5)	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	灰黄褐礫1%	
147	土師器	台付鉢	脚部	5号竪穴	−	(9.2)	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰黄褐礫1%	
148	土師器	壺	口縁～肩部	5号竪穴	(13.5)	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	灰白粗砂1% 褐粗砂1%	
149	土師器	壺	口縁部	5号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐粗砂3% 褐粗砂1%	
150	土師器	壺	底部	5号竪穴	−	(4.0)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (5YR6/4)	良好	黒褐礫3%	
151	土師器	壺	底部	5号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒 (7.5YR1.7/1)	良好	黒褐礫1%	
152	土師器	甕	口縁下部～体部	5号竪穴	(21.2)	−	−	ナデ	ナデ	明黄橙 (10YR7/6)	明黄橙 (10YR7/6)	良好	黒褐礫5%	
153	土師器	甕	口縁下部～体部	5号竪穴	(18.4)	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐灰礫3%	
154	土師器	甕	体部	5号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	明黄橙 (10YR7/6)	良好	褐灰礫5% 赤褐礫3% 無色細砂3% 黒色粗砂1%	
155	土師器	甕	底部	5号竪穴	−	(9.0)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	灰黄橙 (10YR5/2)	良好	黒褐礫7%	
156	土師器	甕	底部	5号竪穴	−	(7.2)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
157	土師器	甕	底部	5号竪穴	−	(4.7)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫2% 灰礫2%	
158	土師器	甕	底部	5号竪穴	−	(5.9)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	黄灰礫7% 灰褐礫5% 橙粗砂1%	
159	土師器	甕	底部	5号竪穴	−	(12.1)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	灰オリーブ礫2% にぶい橙礫2%	底部に枝葉痕
160	土師器	甕	底部	5号竪穴	−	(4.0)	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	黄灰 (2.5YR4/1)	良好	黄灰礫3% オリーブ黒礫1%	底部に枝葉痕
161	土師器	甑	底部	5号竪穴	−	(6.2)	−	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙 (10YR5/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	灰礫3% オリーブ黒礫3% 灰白礫1% 橙礫1%	
166	韓式系軟質土器	平底鉢	口縁～体部付近	6号竪穴	(11.0)	−	−	タタキ	ナデ	灰褐 (7.5YR6/2)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好	灰褐礫2 ～ 3% 灰白粗砂3%	
167	土師器	鉢	口縁～体部付近	6号竪穴	(14.2)	−	−	ユビナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	黒褐粗砂5% 黒褐礫1%	
168	土師器	坏	口縁～底部	6号竪穴	(13.5)	5.6	6.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	良好	精良	
169	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	(17.0)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐灰粗砂3%	
170	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	(12.0)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	黒褐粗砂1% 灰白粗砂1%	
171	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (5YR5/6)	橙 (5YR7/8)	良好	黒褐粗砂2%	
172	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	灰粗砂3%	
173	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	(11.8)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	良好	精良	
174	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	(16.2)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (5YR5/8)	明赤褐 (5YR5/8)	良好	赤褐粗砂1% 灰白粗砂1%	
175	土師器	坏	口縁～底部付近	6号竪穴	(22.9)	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/8)	良好	赤褐粗砂1% 灰白粗砂1%	
176	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	(15.6)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/6)	良好	黒粗砂2% 灰白粗砂1%	
177	土師器	坏	口縁～体部	6号竪穴	(15.6)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (5YR7/8)	良好	橙粗砂1%	
178	土師器	高坏	脚柱部	6号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	黒褐礫3% 無色礫1%未満	
179	土師器	高坏	坏～脚柱部	6号竪穴	−	−	−	ナデ	坏部:ヘラミガキ 脚柱部:ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	無色細砂10% 褐粗砂5% 黒粗砂3%	
180	土師器	高坏	脚部	6号竪穴	−	(10.0)	−	ヘラミガキ	ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	明赤褐粗砂2%	
181	土師器	高坏	脚部	6号竪穴	−	(11.4)	−	ヘラミガキ	−	橙 (7.5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	黒褐粗砂1% 灰白粗砂1%	
182	土師器	甕	口縁～体部	6号竪穴	(18.4)	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫15% 褐礫10%	
183	土師器	甕	底部	6号竪穴	−	(8.6)	−	ナデ	ナデ	明褐 (7.5YR5/6)	黄灰 (2.5YR4/1)	良好	褐礫3% 明褐灰礫1% 黒粗砂1% 明褐灰粗砂1%	
184	土師器	甕	胴～底部	6号竪穴	−	(11.6)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	灰白礫3% 灰白粗砂5%	
185	土師器	壺	口縁～頸部	6号竪穴	(20.3)	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	褐礫3%	
186	土師器	壺	口縁～肩部	6号竪穴	(11.8)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/6)	良好	黒褐粗砂3% 赤褐粗砂3% 灰白粗砂3% 無色粗砂1%	
187	土師器	壺	頸～胴部	6号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR6/8)	良好	にぶい赤褐礫3% 灰白礫1% にぶい橙粗砂3% 黒粗砂4%	
188	土師器	壺	胴～底部	6号竪穴	−	(7.0)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	灰赤礫3%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
189	土師器	−	底部	6号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	明赤褐 (2.5YR5/6)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	黒粗砂1% 灰白粗砂3% 無色粗砂5%	
190	土師器	−	底部	6号竪穴	−	(9.8)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黒褐 (2.5Y3/1)	良好	暗褐礫15% 黒褐礫15%	底面に種子圧痕
199	土師器	坏	体部	1号溝状遺構	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	にぶい褐粗砂1%	
200	土師器	坏	口縁部	1号溝状遺構	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	精良	黒色処理
201	土師器	高坏?	口縁部	1号溝状遺構	−	−	−	ナデ	ナデ	赤褐 (2.5YR4/8)	褐 (7.5YR4/6)	良好	黒褐粗砂2%	
202	土師器	高坏	脚柱部	1号溝状遺構	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	にぶい橙礫7%	
203	土師器	甕	口縁～頸部	1号溝状遺構	(13.6)	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	灰褐礫7% 黒礫5%	
204	土師器	甕	口縁部	1号溝状遺構	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐礫5% 黒褐粗砂7%	
205	土師器	甕	体部	1号溝状遺構	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	橙 (5YR6/6)	良好	にぶい赤褐礫2% 褐灰礫1%	
206	土師器	甕	底部	1号溝状遺構	−	(11.0)	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	にぶい褐礫2% 褐灰礫1%	
207	土師器	壺	口縁～頸部	1号溝状遺構	(8.3)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐 (5YR4/8)	赤褐 (5YR4/8)	良好	褐灰粗砂2%	
209	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	2号溝状遺構	(14.1)	−	−	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	堅緻	灰礫1% 灰白粗砂5%	
210	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	2号溝状遺構	(13.8)	−	−	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	暗オリーブ (5Y4/4)	堅緻	浅黄褐粗砂3%	
211	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	2号溝状遺構	(12.8)	−	−	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/3)	灰オリーブ (5Y4/2)	堅緻	灰白礫2% 灰黄粗砂5%	
212	須恵器	坏身	口縁～底部	2号溝状遺構	(11.8)	−	−	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転横ナデ	にぶい黄 (2.5YR6/3)	灰 (5Y6/1)	堅緻	淡黄礫3%	口縁部打ち欠き
213	須恵器	坏身	口縁～体部	2号溝状遺構	(11.4)	−	−	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	灰オリーブ (5Y6/2)	堅緻	淡黄礫3%	口縁部打ち欠き
214	須恵器	坏身	口縁～体部	2号溝状遺構	(12.5)	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (7.5Y4/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	灰褐粗砂1%	
215	須恵器	坏身	口縁～体部	2号溝状遺構	(11.8)	−	−	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰白 (2.5YR8/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	淡黄礫3%	
216	須恵器	坏身	口縁～体部	2号溝状遺構	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	灰黄粗砂3%	口縁部打ち欠き
217	須恵器	坏身	底部	2号溝状遺構	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	堅緻	淡黄粗砂1%	
218	須恵器	甕	口縁部	2号溝状遺構	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	堅緻	黄灰粗砂3%	
219	須恵器	甕	胴部	2号溝状遺構	−	−	−	格子タタキ	同心円アテ具痕	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	淡黄粗砂1%	
220	土師器	坏	口縁～体部	2号溝状遺構	(13.3)	−	−	風化の為調整不明	風化の為調整不明	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	良好	褐灰礫3% にぶい赤褐礫3%	
221	土師器	坏	口縁	2号溝状遺構	−	−	−	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	無色細砂3% 黒細砂2%	
222	土師器	坏	口縁	2号溝状遺構	−	−	−	横ナデ ヘラミガキ	横ナデ ヘラミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	無色細砂5% 赤褐粗砂2% 灰白礫1% 黒粗砂1%	
223	土師器	高坏	脚部	2号溝状遺構	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	明褐粗砂1% 褐灰粗砂1%	
224	土師器	高坏	坏～脚柱部	2号溝状遺構	−	−	−	ナデ	ヘラミガキ(坏部) ナデ(脚柱部)	橙 (7.5YR7/6)	黒褐 (7.5YR3/1)	良好	灰白粗砂1% 明赤褐粗砂1%	
225	土師器	壺	底部	2号溝状遺構	−	(4.0)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	浅黄橙 (7.5YR8/3)	良好	橙粗砂1%	葉脈痕が残る
226	土師器	壺	底部	2号溝状遺構	−	(3.6)	−	ナデ	ナデ	にぶい黄 (2.5YR6/3)	黒褐 (2.5YR3/1)	良好	明褐礫1% 褐灰礫1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
227	土師器	甑	胴～底部	2号溝状遺構	–	(6.2)	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	黄褐 (10YR5/8)	良好	褐礫～粗砂8% 黒粗砂1% 灰白粗砂2%	
228	土師器	甑	底部付近	2号溝状遺構	–	–	–	横方向のナデ 風化が著しい	横方向のナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐粗砂15% 褐灰礫5%	
229	土師器	甑	底部	2号溝状遺構	–	–	–	ナデ	横方向のナデ	橙 (7.5YR7/6)	褐灰 (7.5YR5/1)	良好	暗灰黄礫3%	
230	土師器	甑	底部	2号溝状遺構	–	–	–	横方向のナデ	ナデ	黄橙 (10YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	暗灰黄礫1% 黒礫1%	
231	土師器	甑	底部	2号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	灰礫1% 暗灰黄礫3%	
232	土師器	竈形土器	焚口	2号溝状遺構	–	–	–	ナデ	風化の為調整不明	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR5/3)	良好	黒礫1% 暗灰黄礫2%	
233	土師器	竈形土器	庇部	2号溝状遺構	–	–	–	ナデ	横方向のナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	黄橙 (10YR8/6)	良好	褐灰粗砂5% 褐灰礫1% 未満	
234	土師器	坏	底部付近	2号溝状遺構	–	–	–	回転ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	黒褐粗砂15%	古代土師
235	土師器	坏	底部	2号溝状遺構	–	(5.8)	–	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	灰粗砂3%	古代土師
236	土師器	土師皿	口縁～底部	2号溝状遺構	(7.8)	(5.2)	1.0	横ナデ ヘラ切後ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	暗褐粗砂5% 黒褐粗砂2%	中世土師か
237	土師器	甕	底部	7号竪穴	–	(5.8)	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	にぶい赤褐礫5% 黒褐礫3% 灰白礫1%	
238	須恵器	坏蓋	体部	7号竪穴	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	にぶい黄橙粗砂1% 明赤褐粗砂1%	
239	須恵器	坏身	底部	7号竪穴	–	–	–	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	灰白礫2% 浅黄粗砂1%	
240	須恵器	高坏	口縁部	7号竪穴	–	–	–	回転ナデ	回転ナデ	褐灰 (10YR5/1)	褐灰 (10YR5/1)	堅緻	にぶい黄橙礫1%	
241	須恵器	甕	胴部	7号竪穴	–	–	–	タタキ・カキメ	同心円アテ具痕	灰 (10Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	黒粗砂3% 灰白粗砂2% 灰粗砂1%	
242	須恵器	甕	体部	7号竪穴	–	–	–	タタキ	同心円アテ具痕	オリーブ黄 (5Y6/3)	灰 (N5/)	堅緻	灰粗砂2%	
243	土師器	坏	口縁～体部	7号竪穴	(23.0)	–	–	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	良好	褐粗砂1%	
244	土師器	坏	口縁～底部付近	7号竪穴	(10.4)	–	–	横ナデ後ミガキ ミガキ	横ナデ後ミガキ ミガキ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/6)	良好	明赤褐粗砂1%	
245	土師器	坏	ほぼ完形	7号竪穴	8.6	4.3	3.2	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明褐 (7.5YR5/6)	明赤褐 (7.5YR5/6)	良好	にぶい黄褐粗砂3%	
246	土師器	坏	ほぼ完形	7号竪穴	7.3	5.1	5.7	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	にぶい黄橙粗砂5% 灰粗砂3%	
247	土師器	高坏	坏～脚部	7号竪穴	–	(9.5)	–	ナデ	ミガキ	明褐 (5YR5/8)	明褐 (5YR5/8)	良好	褐灰礫1% 灰白粗砂1%	
248	土師器	高坏	底部	7号竪穴	–	(9.8)	–	ナデ	ナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	黒 (7.5YR2/1)	良好	黒粗砂2% 灰粗砂%	
249	土師器	甕	底部	7号竪穴	–	(1.8)	–	ナデ	ナデ	にぶい黄 (2.5Y6/4)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐灰礫3% 灰褐礫3% 黒褐礫3%	
250	土師器	甕	口縁～体部	7号竪穴	(26.2)	–	–	横ナデ 工具ナデ	工具ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (2.5YR6/8)	良好	褐灰礫4% 暗赤褐礫3% 黒褐礫4% 灰白礫4%	
251	土師器	甕	口縁～体部	7号竪穴	(19.3)	–	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	暗褐礫10% 黒粗砂2% 灰褐粗砂1%	
252	土師器	甕	口縁～底部	7号竪穴	(18.4)	(5.6)	(20.4)	横ナデ ナデ	横ナデ 工具ナデ ナデ	明褐 (7.5YR5/6)	明褐 (7.5YR5/6)	良好	褐礫1% 褐粗砂7% 黒粗砂1%	
253	土師器	甕	口縁～胴部	7号竪穴	(21.2)	–	–	横ナデ 工具ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	良好	明褐礫2% 褐灰礫1%	
254	土師器	甕	口縁～体部	7号竪穴	(19.8)	–	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (7.5YR8/8)	良好	灰褐礫5 ～ 7% 灰白礫3% 黒褐礫5 ～ 7% にぶい赤褐礫5% 灰オリーブ礫2%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
255	土師器	甕	底部	7号竪穴	−	(8.0)	−	工具ナデ 横方向のナデ 木の葉底	工具ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	良好	褐灰礫10% 灰礫1% 褐灰粗砂5% 灰粗砂1%	
256	土師器	壺	口縁～ 体部	7号竪穴	12.0	−	−	横方向のナデ 縦方向のナデ	横方向のナデ 工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	暗褐礫5%	
257	土師器	壺	口縁～ 胴部下部	7号竪穴	(16.1)	−	−	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐灰礫1% 黒礫1% 灰白礫1% 褐灰粗砂2%	
258	土師器	壺	底部	7号竪穴	−	(5.8)	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (5YR6/6)	良好	にぶい赤褐礫5% 黒褐礫3% 灰白礫1%	
259	土師器	壺	底部	7号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄 (2.5YR6/4)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐灰礫3% 灰褐礫3% 黒褐礫3%	
260	土師器	甑	口縁～ 底部	7号竪穴	(22.5)	(9.4)	(23.6)	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	赤褐礫3% 黒褐礫2%	
264	須恵器	坏蓋	口縁～ 天井部	8号竪穴	(12.9)	−	−	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	にぶい黄粗砂1%	
265	須恵器	甕	体部	8号竪穴	−	−	−	格子タタキ	同心円アテ具痕	暗灰黄 (2.5Y5/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	灰白粗砂1%	
266	須恵器	甕	体部	8号竪穴	−	−	−	格子タタキ	同心円アテ具痕	灰 (N4/)	灰 (5Y5/1)	堅緻	浅黄橙粗砂2%	
267	須恵器	壺	体部	8号竪穴	−	−	−	カキメ	回転ナデ	灰黄 (2.5Y6/1)	灰黄 (2.5Y6/1)	堅緻	灰黄粗砂2%	
268	須恵器	壺	体部	8号竪穴	−	−	−	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	灰黄粗砂1%	脚付長頸壺か
269	土師器	坏	口縁～ 底部	8号竪穴	(11.2)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (2.5YR6/8)	明赤褐 5YR5/6)	良好	橙粗砂1%	
270	土師器	坏	口縁～ 底部	8号竪穴	13.7	3.5	3.9	ミガキ ケズリ ナデ	ナデ ミガキ	明赤褐 (5YR5/8)	明赤褐 (5YR5/8)	良好	精良	
271	土師器	高坏	脚部	8号竪穴	−	−	−	ナデ ミガキ	ヘラミガキ 風化が著しい	橙 (7.5YR6/6)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	黒褐粗砂10% 黒褐礫1% 未満	
272	土師器	甕	口縁～ 胴部	8号竪穴	(20.4)	−	−	工具ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	暗褐礫8% にぶい黄橙礫1% 灰黄褐礫1%	
273	土師器	甕	口縁～ 胴部	8号竪穴	(17.6)	−	−	工具ナデ	ナデ	黄褐 (2.5Y5/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	褐礫7% 黒礫3% 灰白礫2%	
274	土師器	甕	脚部	8号竪穴	−	5.35	−	ナデ	ナデ	明赤褐 (2.5YR5/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	良好	赤褐礫7% 明赤灰粗砂3%	底部に枝葉痕
275	土師器	壺	底部	8号竪穴	−	(6.7)	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	礫25%	底部に枝葉痕
276	土師器	甑	底部	8号竪穴	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	黒礫2%	
277	土師器	甑	底部	8号竪穴	−	−	−	ナデ 横ナデ	ナデ 横ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	黒褐礫2% 灰褐礫2%	
278	土師器	甑	底部	8号竪穴	−	−	−	ナデ 横ナデ	ナデ 横ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	褐灰礫3% 灰白礫1%	
279	土師器	竈形 土器	口縁	8号竪穴	−	(23.2)	−	ナデ	横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐礫10% 灰白礫3% 黒褐礫3% 透明礫1%	
280	土師器	竈形 土器	焚口	8号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (10YR6/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好	暗褐礫3%	
283	須恵器	坏	底部	3号溝状 遺構	−	−	−	回転ヘラ削り 後ナデ	回転ナデ	灰 (5Y6/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂3% 黒粗砂	ヘラ記号
284	須恵器	高坏	脚部	3号溝状 遺構	−	−	−	回転横ナデ 透かし	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂1%	
285	須恵器	提瓶	口縁～ 頸部	3号溝状 遺構	(5.7)	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂3% 黒粗砂	
286	須恵器	甕	胴部	3号溝状 遺構	−	−	−	格子目状タタキ	同心円アテ具痕	灰 (5Y4/1)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	浅黄橙粗砂1%	
287	須恵器	甕	胴部	3号溝状 遺構	−	−	−	タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰 (N5/)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂5%	
288	土師器	坏	口縁～ 底部	3号溝状 遺構	(11.6)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (2.5YR5/8)	赤褐 (2.5YR4/8)	良好	明赤褐粗砂1%	赤色顔料塗布

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
289	土師器	坏	口縁	3号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ後ヘラミガキ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	良好	明赤褐粗砂2%	
290	土師器	坏	口縁～胴部	3号溝状遺構	–	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄(2.5Y7/4)	黄橙(10YR8/6)	良好	橙粗砂1%	
291	土師器	坏	口縁～底部	3号溝状遺構	13.5	7.8	6.5	ナデ	工具ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	黒褐粗砂7% 褐灰粗砂7% にぶい赤褐粗砂7% 灰白粗砂7% 黒褐礫1%	底部に枝葉痕
292	土師器	高坏	口縁～脚部	3号溝状遺構	(18.0)	(10.6)	–	風化の為調整不明	ミガキ 横ナデ	にぶい橙(2.5YR6/4)	にぶい橙(2.5YR6/4)	良好	精良	
293	土師器	高坏	脚柱部	3号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(5YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	良好	赤褐礫1% オリーブ灰礫1% にぶい黄褐1%	
294	土師器	高坏	脚柱部	3号溝状遺構	–	–	–	ミガキ 指押さえ	風化の為調整不明	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	灰白粗砂1% 赤褐粗砂1% 透明光沢細砂7%	
295	土師器	甕	口縁～胴部	3号溝状遺構	(19.4)	–	–	横ナデ ナデ	工具ナデ ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	良好	にぶい褐礫1% 暗褐礫1% にぶい褐粗砂1%	
296	土師器	甕	口縁	3号溝状遺構	–	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ	明黄褐(10YR7/6)	橙(5YR7/6)	良好	褐礫7% 黒褐礫10%	
297	土師器	甕	口縁	3号溝状遺構	–	–	–	横方向のナデ 縦方向のナデ	工具ナデ？	橙(7.5YR7/6)	灰黄褐(10YR6/2)	良好	精良	
298	土師器	甕	口縁	3号溝状遺構	–	–	–	横方向のナデ ナデ	横方向のナデ 後縦方向のナデ	橙(2.5YR6/6)	淡黄(2.5Y6/2)	良好	灰礫30%	
299	土師器	甕	口縁	3号溝状遺構	–	–	–	ナデ	横方向のナデ	橙(5YR7/8)	橙(7.5YR7/6)	良好	明赤褐1%	
301	土師器	甕	底部	3号溝状遺構	–	(9.8)	–	工具ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	明赤褐礫5% 褐灰礫10% 黒褐礫10% 灰白粗砂5%	底部に枝葉痕
302	土師器	甕	胴部～底部	3号溝状遺構	–	(11.2)	–	工具ナデ	縦・斜方向のナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	黒(2.5YR2/1)	良好	褐灰粗砂7% 暗褐粗砂7% 暗褐礫3% 褐礫3%	底部に枝葉痕
303	土師器	甕	底部	3号溝状遺構	–	15.0	–	ナデ	ナデ	にぶい黄(2.5Y6/4)	浅黄(2.5Y7/4)	良好	黄灰礫20%	底部に枝葉痕
304	土師器	甕	脚部	3号溝状遺構	–	6.1	–	指ナデ	ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/6)	良好	暗赤褐粗砂1%	底部に枝葉痕
305	土師器	壺	底部	3号溝状遺構	–	(12.4)	–	ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	褐灰礫3% 灰褐礫3% にぶい赤褐礫3%	底部に枝葉痕
306	土師器	壺	底部	3号溝状遺構	–	(5.6)	–	ナデ 指ナデ	ナデ	橙(7.5YR6/6)	黒(7.5YR2/1)	良好	灰白粗砂1%	
307	土師器	壺	底部	3号溝状遺構	–	(5.0)	–	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	暗赤褐礫1% 黒褐礫2% 黒褐粗砂1%	底部に枝葉痕
308	土師器	把手付鉢	体部	3号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙(10YR6/4)	灰黄褐(10YR5/2)	良好	精良	
312	須恵器	甕	胴部	9号竪穴	–	–	–	タタキ後カキ目？	同心円アテ具痕	灰黄(2.5Y6/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)	堅緻	淡黄粗砂1%	
313	須恵器	甕	胴部	9号竪穴	–	–	–	平行タタキ自然釉？	同心円アテ具痕	灰(5Y5/1)	灰(5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂10%	
314	土師器	坏	口縁～底部	9号竪穴	(12.2)	–	–	横ナデ ナデ ヘラ削り	ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(5YR7/6)	良好	褐灰礫5% 灰白礫1% 黒礫1%	
315	土師器	坏	口縁	9号竪穴	–	–	–	横ナデ ミガキ	横ナデ ミガキ	橙(7.5Y6/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	褐灰粗砂2%	
316	土師器	坩	ほぼ完形	10号竪穴	8.2	–	8.8	風化の為調整不明	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	橙(5YR6/6)	良好	褐礫2% 黒褐粗砂10%	
317	土師器	坏	口縁～体部	10号竪穴	–	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ 斜方向のナデ	にぶい橙(5YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	にぶい黄褐礫2%	
318	土師器	坏	口縁	10号竪穴	–	–	–	ミガキ ナデ	斜方向のミガキ	明赤褐(2.5YR5/6)	明赤褐(2.5YR5/6)	良好	精良	赤色顔料塗布
319	土師器	ミニチュア	口縁～底部	10号竪穴	–	–	–	指ナデ ナデ	指ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	灰白粗砂1% 明褐粗砂1%	
320	土師器	高坏	口縁～体部	10号竪穴	–	–	–	不定方向のミガキ	横方向のミガキ 斜方向のミガキ	黄橙(7.5YR7/8)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	灰白粗砂1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
321	土師器	甕	口縁～胴部	10号竪穴	–	–	–	横方向のナデ	横方向のナデ	橙(7.5Y6/6)	黄橙(7.5YR7/8)	良好	灰白礫2% 褐灰粗砂1%	
322	土師器	甕	底部	10号竪穴	–	(5.2)	–	横ナデ ナデ	ナデ	橙(7.5YR7/6)	明赤褐(2.5YR5/8)	良好	褐礫7% 黒褐礫7%	
323	土師器	竈形土器	基部	10号竪穴	–	–	–	斜方向のナデ 横方向のナデ	横方向のナデ	黄橙(10YR8/6)	黄橙(10YR8/6)	良好	黒褐粗砂3% 暗褐粗砂3% 暗褐礫1%	
326	須恵器	坏身	口縁～体部	4号溝状遺構	(12.5)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	堅緻	暗灰黄粗砂1%	
327	須恵器	坏身	口縁～底部	4号溝状遺構	(12.3)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデz ナデ 横方向のナデ	灰黄(2.5Y6/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)	堅緻	黄灰粗砂2%	
328	須恵器	坏	底部？	4号溝状遺構	–	–	–	横ナデ 回転ヘラ削り	横方向のナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	堅緻	灰黄粗砂1%	
329	須恵器	坏身	天井～口縁	4号溝状遺構	(10.9)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい褐(7.5YR5/3)	灰黄(2.5Y7/2,6/2)	堅緻	灰黄粗砂1%	
330	須恵器	甕	肩部	4号溝状遺構	–	–	–	擬格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y5/3)	灰(5Y5/1)	堅緻	精良	
331	須恵器	甕	胴部	4号溝状遺構	–	–	–	格子目状タタキ	当て具痕あり？	灰(5Y5/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	浅黄橙粗砂1%	
332	須恵器	甕	胴部	4号溝状遺構	–	–	–	格子目タタキ？	同心円アテ具痕？	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y6/1)	堅緻	にぶい黄粗砂1%	
333	須恵器	壺	底部付近	4号溝状遺構	–	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	堅緻	淡黄粗砂2% 礫1%	
334	土師器	坏	口縁～底部付近	4号溝状遺構	(11.0)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明黄褐(10YR6/6)	明褐(7.5YR5/6)	良好	黒褐粗砂5% 褐粗砂3%	
335	土師器	坏	口縁	4号溝状遺構	–	–	–	ミガキ	ミガキ	橙(2.5YR7/6)	橙(2.5YR7/8)	良好	赤褐粗砂1%	
336	土師器	坏	口縁	4号溝状遺構	(13.5)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	褐粗砂3% 黒褐粗砂3%	
337	土師器	坏	口縁	4号溝状遺構	–	–	–	横方向のナデ ミガキ	横方向のナデ	暗灰(N3/)	暗灰(N3/)	良好	灰粗砂3%	黒色処理
338	土師器	坏	口縁～底部	4号溝状遺構	(16.0)	–	6.0	横方向のナデ ヘラケズリ	横方向のナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR5/3)	良好	灰褐礫5% 黄褐礫2%	
339	土師器	坏	底部	4号溝状遺構	(6.2)	–	–	ナデ	風化が著しい	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR7/6)	良好	黒褐粗砂1% 透明光沢粗砂1%	枝葉痕が残る
340	土師器	坏	底部	4号溝状遺構	(4.6)	–	–	工具ナデ	工具ナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	暗褐粗砂1% にぶい褐粗砂1%	
341	土師器	鉢	口縁～底部付近	4号溝状遺構	(15.4)	–	–	ナデ	ナデ	赤褐(2.5YR4/6)	赤褐(2.5YR4/6)	良好	黒褐礫20% 褐灰礫2%	
342	土師器	高坏	坏～脚部	4号溝状遺構	–	–	–	ミガキ 指押さえ	ミガキ？	橙(5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	良好	灰白礫1% 黒粗砂1% 無色細砂1%	
343	土師器	高坏	脚部	4号溝状遺構	(10.5)	–	–	ミガキ 横ナデ	ミガキ 横ナデ	橙(7.5YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	良好	精良	
344	土師器	甕	口縁	4号溝状遺構	(16.6)	–	–	ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	黄橙(10YR8/6)	良好	にぶい赤褐礫1%	
345	土師器	甕	口縁～胴部	4号溝状遺構	(19.6)	–	–	ナデ	ユビナデ ハケメ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	黄灰褐礫3% 褐灰粗砂3%	
346	土師器	甕	口縁～胴部	4号溝状遺構	(18.2)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	橙(7.5YR7/6)	良好	にぶい赤褐礫5% 黒褐礫1%	
347	土師器	甕	口縁～底部	4号溝状遺構	(18.4)	–	–	風化の為 調整不明	工具ナデ？	橙(7.5YR7/6)	橙(2.5YR6/6)	良好	精良	
348	土師器	甕	口縁～胴部	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	極暗赤褐礫1%	
349	土師器	甕	口縁～胴部	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	良好	極暗赤褐礫1%	
350	土師器	甕	口縁部	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(2.5YR6/6)	橙(5YR6/6)	良好	極暗赤褐礫1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
351	土師器	甕	口縁部	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(5YR6/6)	良好	黄灰礫12% 灰黄褐粗砂2%	
352	土師器	甕	口縁～体部	4号溝状遺構	(18.4)	–	–	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	明黄褐(10YR7/6)	良好	にぶい赤褐礫1%	
353	土師器	甕	口縁～胴部	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	極暗赤褐礫1%	
354	土師器	甕	口縁～底部付近	4号溝状遺構	(32.2)	–	–	ナデ	ナデ	灰白(2.5YR8/2)	浅黄橙(10YR8/3)	良好	褐灰礫3% にぶい赤褐礫3% 暗褐礫3%	
355	土師器	甕	胴部～底部	4号溝状遺構	–	(9.8)	–	ナデ	ナデ 指ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR7/3)	良好	褐灰礫5% 灰褐礫5% 灰白礫15% 明赤褐粗砂10%	底部に枝葉痕
356	土師器	甕	底部	4号溝状遺構	–	(9.0)	–	ユビナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	褐灰(7.5YR4/1)	良好	黒礫1%	底部に枝葉痕
357	土師器	甕	底部	4号溝状遺構	–	(9.0)	–	ユビナデ ユビ押さえ	ユビナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	黒褐礫3% 褐灰粗砂2%	底部に枝葉痕
358	土師器	甕	底部	4号溝状遺構	–	(8.7)	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	良好	褐灰粗砂5% 黒褐礫1%	底部に枝葉痕
359	土師器	甕	底部付近	4号溝状遺構	–	(12.5)	–	ユビ押さえ	工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	褐灰礫2% 黒褐礫1%	
360	土師器	壺	口縁～胴部	4号溝状遺構	(16.8)	–	–	工具ナデ	工具ナデ	橙(7.5YR7/8)	灰黄褐(5YR5/2)	良好	にぶい橙礫5%	
361	土師器	甑	底部	4号溝状遺構	(9.1)	–	–	工具ナデ	ナデ？	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	褐灰礫3% 褐礫1%	
362	土師器	甑	底部	4号溝状遺構	(7.2)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	褐灰礫3% 褐礫1% 黒色光沢礫1%	
363	土師器	甑	底部	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ 横ナデ	褐灰(7.5YR4/1)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	褐礫2% 褐灰礫2%	
364	土師器	甑	底部	4号溝状遺構	(10.3)	–	–	ミガキ ナデ	ナデ 指押さえ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/8)	良好	赤褐礫1% 赤褐粗砂3% 灰褐粗砂3% 黒粗砂1%	
365	土師器	竈形土器	掛口	4号溝状遺構	(20.0)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	灰赤礫5% 褐灰礫7%	
366	土師器	竈形土器	掛口	4号溝状遺構	(20.2)	–	–	横ナデ ハケメ	ハケメ	にぶい黄橙(10YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/6)	良好	灰褐礫3% にぶい赤褐礫2% 暗灰黄礫1%	
367	土師器	竈形土器	掛口	4号溝状遺構	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	黒礫1%	
368	土師器	竈形土器	基部	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	黒褐礫3% 褐礫5%	
369	土師器	竈形土器	焚口	4号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	精良	
370	土師器	ハソウ？	胴部	4号溝状遺構	–	–	–	ハケメ	ナデ	明赤褐(5YR5/6)	明光褐(5YR5/8)	良好	黒褐礫7% 褐礫10%	
371	青磁	碗	体部	4号溝状遺構	–	–	–	鎬連弁	–	青磁釉	青磁釉	堅緻	精良	龍泉窯系
373	陶器	鉢	口縁部	4号溝状遺構	(28.8)	–	–	刷毛目による波状文	刷毛目による横線	–	–	堅緻	精良	近世唐津混入か
376	須恵器	坏蓋	口縁	11号竪穴	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	堅緻	精良	
377	須恵器	壺	底部	11号竪穴	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰(N5/)	灰(7.5Y5/1)	堅緻	にぶい黄粗砂1%	
378	土師器	坏	口縁～底部	11号竪穴	11.6	1.7	6.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明褐(7.5YR5/8)	明褐(7.5YR5/8)	良好	暗褐礫5% 灰白礫1% 黒礫3% にぶい褐礫1%	
379	土師器	坏	完形	11号竪穴	15.0	2.1	8.3	ナデ ヘラミガキ	ナデ ヘラミガキ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/8)	良好	精良	
380	土師器	坏	口縁	11号竪穴	–	–	–	風化著しい	ヘラミガキ	明褐(7.5YR5/8)	にぶい褐(7.5YR5/3)	良好	灰白礫1%	
381	土師器	坏	口縁～体部	11号竪穴	(11.8)	–	–	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	良好	精良	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
382	土師器	坏	口縁～底部	11号竪穴	6.3	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/6)	良好	精良	
383	土師器	坏	口縁	11号竪穴	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(2.5YR6/6)	橙(7.5Y6/6)	良好	にぶい赤褐礫1% 赤褐粗砂2% 黒光沢粗砂1% 未満	赤色顔料塗布
384	土師器	坏	口縁	11号竪穴	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙(10YR5/4)	橙(5YR6/6)	良好	にぶい赤褐粗砂2% 赤黒粗砂2%	
385	土師器	坏	口縁～底部	11号竪穴	(7.7)	(2.75)	3.0	ナデ	横ナデ ヘラミガキ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/6)	良好	橙粗砂2%	
386	土師器	高坏蓋	天井～口縁	11号竪穴	(14.8)	－	(4.5)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明褐(7.5YR5/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	褐灰粗砂3%	
387	土師器	高坏	完形	11号竪穴	13.5	10.0	9.3	ヘラミガキ	ヘラミガキ 指ナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	褐灰粗砂5%	
388	土師器	甕	胴部～底部	11号竪穴	－	－	－	工具ナデ	工具ナデ	オリーブ黒(5Y3/2)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	にぶい黄褐礫3% 黒褐礫3% にぶい赤褐礫2%	
392	須恵器	甕	胴部	1号土坑	－	－	－	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰(5Y5/1)	灰黄(2.5Y6/2)	堅緻	灰白粗砂5%	
393	須恵器	甕	胴部	1号土坑	－	－	－	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	浅黄橙粗砂1%	
394	須恵器	甕	胴部	1号土坑	－	－	－	格子目タタキ	同心円アテ具痕	にぶい黄褐(10YR5/3)	にぶい黄褐(10YR5/4)	堅緻	にぶい橙粗砂1%	
395	土師器	坏	口縁～底部	1号土坑	(14.4)	－	(6.15)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	精良	見込部にヘラ記号
396	土師器	坏	口縁～底部	1号土坑	(14.8)	－	(6.65)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR7/6)	良好	精良	
397	土師器	坏	口縁～底部	1号土坑	(15.1)	－	(9.0)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(5YR6/8)	橙(7.5YR6/6)	良好	明赤褐粗砂2%	底部にヘラ記号あり
398	土師器	坏	口縁	1号土坑	－	－	－	ナデ	風化の為調整不明	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/8)	良好	黒褐7%	
399	土師器	坏	口縁	1号土坑	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(5YR6/8)	橙(5YR6/8)	良好	精良	
400	土師器	坏	口縁～体部	1号土坑	－	－	－	風化の為調整不明	風化の為調整不明	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	精良	
401	土師器	坏	体部	1号土坑	－	－	－	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤(10R5/8)	明赤褐(2.5YR5/8)	良好	黒褐粗砂1%	赤色顔料 十字のヘラ記号
402	土師器	坏	胴部～底部	1号土坑	－	(5.0)	－	ミガキ？ 風化が著しい	ヘラミガキ	橙(7.5Y6/6)	明赤褐(5YR5/6)	良好	暗赤褐粗砂1% 灰白粗砂1% 黒光沢粗砂1%	
403	土師器	甕	口縁～胴部	1号土坑	(36.2)	－	－	横ナデ 斜方向の工具ナデ	横ナデ 斜方向のナデ	にぶい橙(5YR6/4)	にぶい橙(5YR7/3)	良好	褐灰礫15% 灰褐礫15%	
404	土師器	壺	胴部	1号土坑	－	－	－	ナデ	ハケメ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	明褐礫1% 褐灰礫2%	
405	土師器	壺	胴部～底部	1号土坑	－	(8.6)	－	ナデ	ナデ 指押さえ	橙(2.5YR6/8)	橙(5YR6/8)	良好	黒褐粗砂1% 灰白粗砂1%	
406	土師器	壺	底部	1号土坑	－	(5.0)	－	ナデ	指ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	褐灰礫5% 黒礫1% 透明粗砂1%	
407	土師器	壺	底部	1号土坑	－	－	－	ナデ	指ナデ	明黄褐(10YR6/6)	黄褐(2.5Y5/3)	良好	黒褐礫10% 褐礫3%	
408	土師器	高坏	脚	1号土坑	－	(12.0)	－	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR6/6)	良好	赤褐粗砂2% 黒褐礫2% 灰白粗砂5%	
409	土師器	甕	口縁	1号ピット	－	－	－	横ナデ 横方向のナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	浅黄橙(7.5YR8/4)	良好	褐灰礫3%	
410	須恵器	坏蓋	体部	1区	－	－	－	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	黄褐(2.5Y5/3)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	精良	自然釉
411	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	1区	(13.8)	－	－	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	灰白(5Y7/2)	灰(5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
412	須恵器	坏蓋	天井～口縁	1区	(13.4)	－	－	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
413	須恵器	坏蓋	体部～天井部	1区	－	－	－	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	灰黄(2.5Y6/2)	堅緻	淡黄粗砂1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
414	須恵器	坏蓋	天井～口縁	1区	(12.7)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	灰 (N4/)	灰 (N6/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
415	須恵器	坏蓋	天井～口縁	1区	(14.8)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	暗赤灰 (5YR3/3)	黄灰 (2.5YR4/4)	堅緻	黄灰礫3%	刻目状圧痕
416	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	1区	(11.0)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂2%	
417	須恵器	坏身	口縁～体部	1区	(13.6)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	灰 (N4/)	灰 (N4/)	堅緻	灰白礫3%	
418	須恵器	坏身	口縁～底部	1区	(13.2)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/2)	黄灰 (2.5Y5/1)	堅緻	灰黄粗砂1%	
419	須恵器	坏身	口縁～底部付近	1区	(13.8)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	オリーブ灰 (5GY6/1)	暗オリーブ灰 (2.5GY7/1)	堅緻	灰白粗砂2%	
420	須恵器	坏身	口縁～底部	1区	(12.0)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	暗黄褐 (2.5Y5/2)	灰オリーブ (7.5Y5/2)	堅緻	灰黄褐粗砂1%	
421	須恵器	坏身	口縁～体部	1区	(13.0)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y4/1)	灰 (N5/)	堅緻	暗灰黄粗砂1%	
422	須恵器	坏身	口縁～底部付近	1区	(11.0)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (N5/)	堅緻	灰白粗砂7%	
423	須恵器	坏身	口縁～受け部	1区	(11.0)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	暗青灰 (5B4/1)	青灰 (5B6/1)	堅緻	灰白粗砂2% 灰白礫1% 未満	
424	須恵器	坏身	口縁～底部付近	1区	(13.0)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	暗灰黄粗砂1%	口縁部打ち欠き
425	須恵器	坏身	口縁～底部付近	1区	(13.0)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	オリーブ黄 (5Y6/3)	堅緻	灰白粗砂2%	口縁部打ち欠き
426	須恵器	坏身	底部	1区	–	(7.6)	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	浅黄粗砂2% 明褐粗砂1%	
427	須恵器	高坏	裾	1区	–	(12.8)	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
428	須恵器	高坏	脚裾部	1区	–	–	–	回転横ナデ ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	褐灰 (10YR5/1)	堅緻	精良	
429	須恵器	器台	脚部	1区	–	(7.8)	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
430	須恵器	器台	脚部	1区	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	堅緻	精良	
431	須恵器	甕	口縁	1区	–	–	–	回転横ナデ 櫛描波状文	回転横ナデ	褐灰 (10YR5/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	明褐灰粗砂2%	
432	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕 後ナデ	暗灰 (N3/)	明黄褐 (2.5Y7/6)	堅緻	灰白粗砂1%	
433	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
434	須恵器	甕	肩部	1区	–	–	–	格子目タタキ後 カキ目	同心円アテ具痕 後横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	黒粗砂3%	
435	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰黄 (2.5Y6/2)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	灰粗砂1% 礫1%	
436	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	擬格子目タタキ 後カキ目	同心円アテ具痕	灰 (7.5Y4/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	精良	自然釉
438	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	平行タタキ	同心円アテ具痕	オリーブ黒 (5Y3/1)	灰 (5Y4/1)	堅緻	浅黄粗砂2%	
439	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	格子目タタキ後 カキ目	同心円アテ具痕	灰オリーブ (7.5Y4/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	堅緻	浅黄橙粗砂1% 浅黄橙礫1%	自然釉
440	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰 (7.5Y6/1)	灰オリーブ (7.5Y4/2)	堅緻	精良	
441	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	格子目タタキ	同心円アテ具痕	オリーブ黒 (5Y3/1)	暗オリーブ (5Y4/4)	堅緻	灰白粗砂10% 褐礫礫1%	
442	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	格子目タタキ	同心円アテ具痕	にぶい黄 (2.5Y6/4)	浅褐 (2.5Y5/3)	堅緻	精良	
443	須恵器	甕	胴部	1区	–	–	–	平行タタキ後 カキ目	同心円アテ具痕	黒 (5Y2/1)	灰オリーブ (5Y6/2)	堅緻	浅黄粗砂3%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
444	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰黄(2.5Y6/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	浅黄橙粗砂1%	
445	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ後カキ目	ナデ	にぶい黄(2.5Y6/3)	灰オリーブ(5Y/6/2)	堅緻	浅黄橙礫2% 黄橙礫1%	
446	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ	同心円アテ具痕	褐灰(10YR5/1)	にぶい黄(10YR6/3)	堅緻	灰白粗砂2%	
447	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ	ナデ	浅黄(2.5Y7/4)	にぶい黄(2.5Y6/3)	堅緻	灰黄粗砂5% 黒礫1% 未満	
448	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	にぶい黄(2.5Y6/3)	にぶい黄(2.5Y6/3)	堅緻	灰白粗砂1%	
449	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	タタキ後ナデ	同心円アテ具痕	灰(5Y5/1)	灰(5Y4/1)	堅緻	灰白粗砂2%	
450	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	擬格子目タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰(7.5Y6/1)	灰黄(2.5Y6/2)	堅緻	灰白粗砂1%	自然釉
451	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	格子目タタキ後ナデ	同心円アテ具痕	オリーブ黄(5Y6/3)	オリーブ黒(7.5Y3/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
452	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ	同心円アテ具痕	黄灰(2.5Y5/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	透明光沢粗砂1% 浅黄粗砂2%	
453	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	格子目タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰(5Y4/1)	灰(5Y5/1)	堅緻	精良	
454	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰(N4/)	灰(7.5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
455	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y5/2)	灰(5Y5/1)	堅緻	黄灰粗砂1%	
456	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰白(5Y7/2)	灰(5Y5/1)	堅緻	灰粗砂1%	
457	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰(5Y4/1)	灰(5Y5/1)	堅緻	浅黄粗砂3% 黒色礫1% 未満	
458	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	格子目タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y5/3)	オリーブ黄(5Y6/4)	堅緻	灰白粗砂10% 黒礫1% 未満	
459	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰(5Y5/1)	灰白(5Y7/1)	堅緻	黒粗砂3%	籾圧痕あり
460	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰黄(2.5Y6/2)	黄灰(2.5Y6/1)	堅緻	浅黄橙粗砂2%	
461	須恵器	甕	胴部	1区	−	−	−	平行タタキ	ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y4/1)	堅緻	淡黄粗砂2 ～ 3%	
462	須恵器	壺	頸部	1区	−	−	−	櫛描波状文	回転横ナデ	灰(5Y6/1)	灰オリーブ(5Y6/2)	堅緻	灰白粗砂2%	
463	須恵器	壺	口縁	1区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂1%	
464	須恵器	壺	頸部	1区	−	−	−	カキ目	回転横ナデ	灰(5Y4/1)	灰オリーブ(5Y5/2)	堅緻	灰白粗砂3%	
465	須恵器	壺	胴部	1区	−	−	−	カキ目 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰(N4/) 灰(5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1) 灰黄(2.5Y6/2)	堅緻	橙粗砂1% 灰白粗砂1%	
466	須恵器	壺	底部	1区	−	2.6	−	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	灰黄粗砂1%	
467	土師器	坏蓋	口縁～天井部付近	1区	(12.6)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(2.5YR6/6)	橙(2.5YR6/6)	良好	精良	
468	土師器	坏	口縁部	1区	(11.9)	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	灰礫10%	
469	土師器	坏	口縁部	1区	(10.2)	−	−	ナデ	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	良好	褐灰粗砂1%	
470	土師器	坏	口縁～体部	1区	(15.8)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙(5YR6/6)	橙(5YR6/6)	良好	黒褐粗砂1% 灰白粗砂1%	黒色処理？
471	土師器	坏	口縁	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙(5YR6/8)	明黄褐(10YR6/6)	良好	灰黄褐礫1%	
472	土師器	坏	口縁部	1区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄褐(10YR5/6)	明赤褐(5YR5/6)	良好	灰白粗砂2%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
473	土師器	坏	口縁～底部付近	1区	(11.8)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐 (5YR4/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	良好	橙粗砂1% 灰白粗砂1%	
474	土師器	坏	口縁～底部	1区	(13.3)	3.6	(6.5)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐粗砂3%	
475	土師器	坏	口縁～底部付近	1区	(9.4)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	にぶい赤褐粗砂1%	
476	土師器	坏	口縁部	1区	–	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	明褐 (7.5YR5/6)	良好	灰白粗砂1%	
477	土師器	坏	口縁部	1区	–	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ 風化が著しい	にぶい黄褐 (10YR5/4)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	灰白粗砂2%	
478	土師器	坏	口縁部	1区	(15.0)	–	–	横ナデ 工具ナデ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰白粗砂2%	
479	土師器	坏	口縁部	1区	(14.0)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (2.5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/8)	良好	赤粗砂3% 暗赤褐粗砂1%	
480	土師器	坏	底部	1区	–	(4.8)	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい赤褐 (5YR5/4)	良好	黒褐粗砂1% 灰白粗砂1%	
481	土師器	坏	口縁部	1区	–	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫3% 灰白礫1%	
482	土師器	高坏	底部～脚基部	1区	–	–	–	風化の為 調整不明	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐灰粗砂1% 明赤褐粗砂1%	圧痕あり
483	土師器	高坏	口縁～基部付近	1区	(8.4)	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	良好	灰白粗砂2% 黒粗砂1% 褐灰礫1%	
484	土師器	高坏	脚部	1区	–	(8.2)	–	ヘラケズリ	ヘラケズリ	明赤褐 (2.5YR5/8)	橙 (5YR6/6)	良好	黒粗砂1%	
485	土師器	高坏	脚部	1区	–	(10.9)	–	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	灰白礫1% 灰白粗砂1%	
486	土師器	甕	ほぼ完形	1区	16.4	3.4	18.4	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐礫8% 黒礫2% 灰白礫1%	枝葉痕が残る
487	土師器	甕	口縁～底部	1区	(14.6)	–	–	ハケメ	ハケメ	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	にぶい赤褐礫2% 褐灰礫2% 黒粗砂1%	
488	土師器	甕	口縁	1区	(14.8)	–	–	ナデ	ナデ 指押さえ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	褐灰礫7%	
489	土師器	甕	口縁	1区	(16.6)	–	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6/)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐灰礫3%	
490	土師器	甕	口縁～胴部	1区	(16.2)	–	–	ナデ	ハケメ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	暗灰黄 (2.5Y4/2)	良好	灰礫3%	
491	土師器	甕	口縁～底部付近	1区	(20.8)	–	–	ユビナデ	工具ナデ ユビナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	黒褐礫9% 明赤褐礫8% 灰褐礫8%	
492	土師器	甕	口縁～胴部	1区	(26.8)	–	–	工具ナデ	ナデ 風化が著しい	黒褐 (10YR3/1)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫3% 灰白礫3% 黒褐粗砂5%	
493	土師器	甕	口縁～胴部	1区	(27.7)	–	–	工具ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8)	赤褐 (5YR4/8)	良好	褐礫3% 褐灰粗砂7%	
494	土師器	甕	胴部～底部付近	1区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	にぶい赤褐礫2% 褐灰礫2% 黒粗砂1%	
495	土師器	甕	底部	1区	–	(6.5)	–	ナデ	横ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	黒褐礫3% にぶい黄褐礫7%	底部に枝葉痕
496	土師器	甕	底部	1区	–	(10.8)	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐礫10% 灰白礫1% 透明光沢礫1% 黒褐礫1%	底部に枝葉痕
497	土師器	甕	底部	1区	–	(9.8)	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	黄灰 (2.5YR4/1)	良好	灰白粗砂10%	底部に枝葉痕
498	土師器	甕	底部	1区	–	(8.8)	–	工具ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	オリーブ黒 (5Y3/1)	良好	灰白礫10% 褐礫5% 黒褐礫3%	底部に枝葉痕
499	土師器	甕	底部	1区	–	–	–	ナデ	ハケメ	にぶい橙 (7.5YR4/4)	オリーブ黒 (5Y3/2)	良好	褐礫1% 黄灰粗砂5%	底部に枝葉痕
500	土師器	甕	胴部～底部	1区	–	–	–	削り後ナデ	ナデ	橙 (2.5YR6/8)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	赤褐礫10% 黒礫1%	底部に枝葉痕

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
501	土師器	壺	底部	1区	−	(4.0)	−	ナデ	ナデ	明褐 (7.5YR5/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐粗砂1%	底部に枝葉痕
502	土師器	甕	底部	1区	−	(9.0)	−	ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐灰礫5% にぶい赤褐5% 暗緑灰礫1% 未満 橙礫1% 未満	
503	土師器	甕	底部	1区	−	(8.6)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	褐灰礫3% 灰1% 褐礫1% 黒粗砂2%	
504	土師器	甕	底部	1区	−	(6.5)	−	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	にぶい黄褐礫3% にぶい赤褐礫3%	
505	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	褐灰礫3%	
506	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/8)	黄灰 (2.5Y4/1)	良好	褐灰礫2% 灰褐礫1% にぶい褐礫2%	
507	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	良好	赤黒礫5%	
508	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	赤褐礫10% 黒礫1%	
509	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	暗青灰礫10%	
510	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	褐灰 (10YR4/1)	良好	褐灰礫3%	底部に枝葉痕
511	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐灰礫3% 灰白礫1 ～ 2% 黄灰礫3%	
512	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐灰礫3% 灰礫3% 黒礫1%	
513	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ 指頭痕	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	暗赤褐礫2 ～ 3% 灰礫2%	
514	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	灰オリーブ礫3% オリーブ黒礫3%	
515	土師器	甕	底部	1区	−	−	−	ナデ 指頭痕	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰赤礫2% 褐灰礫1%	
516	土師器	竈形土器	掛口	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	赤褐礫2% 赤褐粗砂1% 灰白礫1% 黒粗砂1%	
517	土師器	竈形土器	掛口	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	にぶい黄褐礫3% にぶい赤褐礫3%	
518	土師器	竈形土器	掛口	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒褐 (10YR3/1)	良好	黒礫1%	
519	土師器	竈形土器	焚口の周辺	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	にぶい褐礫3% 褐灰礫3%	
520	土師器	竈形土器	焚口	1区	−	−	−	工具ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	黒褐礫15% 褐礫10%	
521	土師器	竈形土器	焚口	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	暗青灰礫10%	
522	土師器	竈形土器	焚口	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	黒褐礫1%	
523	土師器	竈形土器	焚口	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	黒粗砂1%	
524	土師器	竈形土器	焚口基部	1区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	灰褐礫3% 黒褐礫2% にぶい赤褐礫1%	
525	土師器	竈形土器	庇部	1区	−	−	−	横ナデ	横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい橙 (7.5Y7/4)	良好	褐灰礫3% 褐礫1%	
526	土師器	竈形土器	庇部	1区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	灰褐礫7% 褐灰礫5% 黒礫2%	
527	土師器	甕？	口縁？	1区	(9.9)	−	−	工具ナデ	ユビナデ	にぶい黄橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	精良	
528	土師器	坏	口縁～体部	1区	(12.4)	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	にぶい赤褐礫3% 黒褐礫7%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
529	土師器	坏	底部	1区	−	(8.0)	−	回転横ナデ 回転ヘラ削り ヘラ切離し	不明	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	明赤褐粗砂1%	
530	土師器	坏	底部	1区	−	(6.4)	−	回転ナデ ヘラ切離し後 ナデ	回転ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	明赤褐礫1%	
531	土師器	坏	底部	1区	−	5.0	−	回転横ナデ ヘラ切り離し	回転横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐粗砂1%	
532	土師器	坏	底部	1区	−	(6.7)	−	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	精良	
533	土師器	坏	底部	1区	−	(8.0)	−	回転横ナデ ヘラ削り ヘラ切底	回転横ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	灰礫1% 透明光沢粗砂7%	
534	土師器	坏	底部	1区	−	−	−	ヘラ削り？ ヘラ切り？	回転横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (10YR7/4)	良好	精良	
535	土師器	坏	底部	1区	−	(6.0)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	黒褐粗砂1% 褐粗砂1% 灰褐光沢粗砂1% にぶい橙粗砂1%	
536	土師器	坏	底部	1区	(9.0)	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ ヘラ切離し	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	暗青灰礫10%	
537	土師器	坏	底部	1区	−	(6.5)	−	回転横ナデ	ミガキ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰褐 (7.5YR6/2)	良好	赤褐粗砂2% 赤褐礫2% 透明光沢粗砂7% 黒色光沢粗砂1%	
538	土師器	坏	底部	1区	−	(5.6)	−	回転ヘラ削り	ヘラミガキ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	橙粗砂1%	
539	土師器	土師皿	口縁～ 底部	1区	(6.9)	(5.0)	(1.6)	回転横ナデ ヘラ切離し	横方向のナデ	黄褐 (2.5YR5/3)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	褐灰白粗砂5%	圧痕あり
540	土師器	土師皿	口縁～ 底部	1区	(8.0)	(6.4)	1.5	回転横ナデ ヘラ切離し	風化の為 調整不明	灰黄褐 (10YR4/2)	にぶい黄褐 (10YR4/3)	良好	黒粗砂2%	
541	土師器	土師皿	口縁～ 底部	1区	(7.9)	(5.1)	1.0	回転横ナデ ヘラ切離し	回転横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	明赤褐粗砂5%	
542	土師器	土師皿	口縁～ 底部	1区	(6.8)	(4.9)	0.95	回転横ナデ ヘラ切離し	回転横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	
543	土師器	土師皿	口縁～ 底部	1区	−	(4.8)	(1.1)	回転横ナデ ヘラ切離し後 ナデ消し	回転横ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/4)	橙 (5YR6/6)	良好	暗褐粗砂7%	
544	土師器	土師皿	口縁～ 底部	1区	(7.9)	(4.4)	(1.2)	回転横ナデ ヘラ切	回転横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	明赤褐粗砂2%	
545	土師器	土師皿	口縁～ 底部	1区	(6.9)	(4.8)	(1.1)	回転横ナデ ヘラ切	回転横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	精良	
556	土師器	坏蓋	天井～ 口縁	12号竪穴	(13.2)	−	−	ヘラ切り ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	堅緻	灰オリーブ礫2%	
557	須恵器	甕	頸部～ 胴部	12号竪穴	−	−	−	カキ目 格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	灰粗砂1%	
558	土師器	坏	口縁部	12号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐粗砂1%	
559	土師器	坏	口縁～ 体部	12号竪穴	(17.8)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (2.5YR6/6)	明赤褐 (2.5YR5/6)	良好	暗褐礫3%	
560	土師器	坏	ほぼ完形	12号竪穴	(16.2)	(6.2)	(6.7)	ヘラミガキ	不明	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	赤褐礫2%	底部に枝葉痕
561	土師器	坏	口縁～ 底部	12号竪穴	(13.4)	−	(3.9)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (2.5YR5/8)	橙 (2.5YR6/8)	良好	灰白粗砂1%	ヘラ記号
562	土師器	坏	口縁～ 体部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	明赤褐 (2.5YR5/5)	明赤褐 (2.5YR5/6)	良好	黒粗砂1%	
563	土師器	坏	口縁～ 体部	12号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/8)	良好	灰白礫1%	
564	土師器	坏	口縁～ 底部	12号竪穴	(17.5)	3.5	(6.9)	ヘラミガキ	ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/6)	良好	赤褐粗砂1%	ヘラ記号
565	土師器	坏	口縁～ 底部付近	12号竪穴	(11.8)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	明褐粗砂2%	
566	土師器	坏	口縁～ 体部	12号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	灰白粗砂1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
567	土師器	坏	口縁～底部	12号竪穴	(12.5)	–	–	ナデ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	暗赤褐粗砂1% にぶい褐礫1%	
568	土師器	坏	口縁～底部	12号竪穴	(13.4)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	灰白粗砂1%	
569	土師器	坏	口縁～体部	12号竪穴	(11.6)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	灰白粗砂1%	
570	土師器	坏	口縁～底部	12号竪穴	(14.9)	–	(6.0)	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	精良	ヘラ記号
571	土師器	坏	口縁～底部	12号竪穴	(14.9)	–	(6.0)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/8)	良好	精良	
572	土師器	坏	口縁～底部	12号竪穴	(20.8)	(8.2)	(5.3)	ナデ	ハケメ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	褐礫3%	
573	土師器	坏	体～底部	12号竪穴	–	(5.8)	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/8)	良好	褐灰粗砂1%	
574	土師器	坏	体～底部	12号竪穴	–	(4.8)	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐灰礫1%	ヘラ記号
575	土師器	坏	底部	12号竪穴	–	(4.2)	–	ナデ	ナデ	黄灰 (2.5Y4/1)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	にぶい黄褐礫1% 褐礫2%	底部に枝葉痕
576	土師器	坏	底部	12号竪穴	–	(4.0)	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/8)	良好	赤褐粗砂1%	ヘラ記号
577	土師器	坏	底部	12号竪穴	–	(8.8)	–	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	黒褐 (10YR3/1)	良好	精良	底部に枝葉痕
578	土師器	高坏	坏部	12号竪穴	(17.0)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR4/7)	良好	精良	
579	土師器	高坏	坏部	12号竪穴	(15.6)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄褐 (10YR6/3)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	黄灰礫1% 灰黄褐粗砂1%	
580	土師器	高坏	脚柱部	12号竪穴	–	–	–	ヘラケズリ	ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	精良	
581	土師器	高坏	脚柱部	12号竪穴	–	–	–	ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	精良	
582	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(12.4)	–	–	ナデ	ハケメ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	赤褐粗砂1%	
583	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(12.2)	–	–	工具ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	赤褐礫7% 黒礫7% 灰白粗砂1%	
584	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(12.8)	–	–	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	暗褐礫2% 黒褐礫1% にぶい黄橙礫1%	
585	土師器	甕	口縁～底部付近	12号竪穴	(22.0)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	橙 (2.5YR6/6)	良好	暗褐礫3% にぶい黄褐礫3%	
586	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	明褐 (7.5YR5/6)	橙 (5YR7/8)	良好	黒褐礫7%	
587	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰礫10% 褐礫10%	
588	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	褐灰 (5YR4/1)	赤橙 (10R6/6)	良好	褐灰礫8% 黒褐礫7% 明赤褐礫9%	
589	土師器	甕	口縁～底部付近	12号竪穴	(17.3)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (2.5YR6/3)	橙 (2.5YR6/6)	良好	赤褐礫2%	二次焼成を受ける
590	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(14.4)	–	–	工具ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫10%	
591	土師器	甕	口縁～底部	12号竪穴	(14.6)	5.1	14.95	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐礫10% 黒褐礫3% 灰黄褐礫7% 褐灰礫1%	底部に枝葉痕
592	土師器	甕	口縁～底部	12号竪穴	(16.2)	8.7	–	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	にぶい黄橙礫7% 暗褐礫5% 黒褐礫1% 灰白礫1% 黒礫1%	
593	土師器	甕	口縁～底部付近	12号竪穴	(16.2)	–	–	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐礫3%	
594	土師器	甕	口縁～底部ほぼ完形	12号竪穴	(16.4)	(6.1)	(18.6)	横ナデ ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	褐礫10%	底部に枝葉痕

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
595	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	(17.2)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6～6/6)	良好	灰白礫10%	
596	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(17.2)	–	–	横ナデ 工具ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	灰赤礫10%	
597	土師器	甕	ほぼ完形	12号竪穴	24.6	9.3	26.8	工具ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰礫10% 明赤褐礫10%	
598	土師器	甕	口縁～底部 ほぼ完形	12号竪穴	24.0	4.2	18.7	横ナデ ナデ	横方向のナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	礫10%	
599	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(16.4)	–	–	工具ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (7.5YR5/2)	良好	にぶい赤褐礫5%	
600	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(23.0)	–	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	赤褐礫7% 黒礫7% 灰白粗砂1%	
601	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(25.8)	–	–	工具ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (5YR7/8)	良好	暗赤褐礫3% 褐灰礫1% にぶい橙礫1%	
602	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(20.6)	–	–	工具ナデ	ハケメ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	赤褐礫7% 黒礫7% 灰白粗砂1%	
603	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(23.8)	–	–	横ナデ ナデ	ナデ	褐灰 (10YR4/1)	灰黄褐 (10YR4/2)	良好	灰褐礫3%	
604	土師器	甕	口縁～胴部	12号竪穴	(32.6)	–	–	工具ナデ	工具ナデ	橙 (5YR7/8)	褐灰 (5YR5/1)	良好	黒褐礫1% 赤褐礫2% 無色礫1%	
605	土師器	甕	口縁～体部	12号竪穴	(17.8)	–	–	工具ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	褐 (10YR4/4)	良好	精良	
606	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	赤褐礫7% 黒礫7% 灰白粗砂1%	
607	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	暗褐礫2% 黒褐礫1% にぶい黄橙礫1%	
608	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	灰白粗砂3% 透明光沢細砂3% 褐粗砂1%	
609	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	暗褐礫1% 灰黄褐礫1%	
610	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐礫5%	
611	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	横ナデ	横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰礫3% 褐礫3%	
612	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	暗褐礫2% 黒褐礫1% にぶい黄橙礫1%	
613	土師器	甕	口縁部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明褐 (7.5YR5/8)	良好	暗褐礫2% 黒礫1% 灰白粗砂1%	
614	土師器	甕	胴部	12号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	暗赤褐礫3% 褐灰礫1% にぶい橙礫1%	製塩土器か
615	土師器	甕	胴部	12号竪穴	–	–	–	ハケメ	ハケメ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐礫7%	
616	土師器	甕	口縁～底部	12号竪穴	(25.1)	9.3	26.4	横ナデ 指ナデ	横ナデ ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫10% 褐礫10%	底部に枝葉痕
617	土師器	甕	胴部～底部	12号竪穴	–	(6.4)	–	工具ナデ	工具ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐灰礫3% 褐灰粗砂3%	底部に枝葉痕
618	土師器	甕	胴部～底部	12号竪穴	–	(7.4)	–	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	明黄褐 (10YR7/6～6/6)	良好	黒褐礫20% 褐礫 灰白礫1%	底部に枝葉痕
619	土師器	甕	底部付近	12号竪穴	–	–	–	ハケメ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	精良	
620	土師器	壺	口縁～胴部	12号竪穴	(16.3)	–	–	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/4)	黒褐 (10YR5/3)	良好	褐灰礫7% 黒褐礫7% 明赤褐礫7%	肩部に線刻あり
621	土師器	壺	肩部	12号竪穴	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	黄灰 (2.5Y4/1)	黄灰 (2.5Y4/1)	良好	黒褐礫5%	
622	土師器	壺	胴～底部	12号竪穴	–	(19.8)	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR5/4)	黒褐 (10YR3/1)	良好	褐灰礫8% 黒褐礫7% 明赤褐礫9%	
623	土師器	壺	体部～底部	12号竪穴	(5.7)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	褐灰礫10%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
624	土師器	壺	底部	12号竪穴	−	(5.5)	−	工具ナデ	ナデ	褐灰 (5YR4/1)	赤橙 (10R6/6)	良好	黒褐礫1% 赤褐礫3% 灰白礫1%	底部に枝葉痕
625	土師器	壺	底部	12号竪穴	−	(8.7)	−	ユビナデ	ユビナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	黒褐礫2% 赤褐礫2% 灰白礫1%	
626	土師器	壺	底部	12号竪穴	−	(7.2)	−	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐灰礫6%	底部に枝葉痕
627	土師器	壺	底部	12号竪穴	−	(8.2)	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (5YR7/8)	良好	黒褐礫15% 灰白礫3%	底部に枝葉痕
628	土師器	壺	底部	12号竪穴	−	(10.0)	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	黒褐礫1% 赤褐礫2% 無色礫1%	底部に枝葉痕
629	土師器	壺	口縁～ 体部	12号竪穴	(10.0)	−	−	工具ナデ	ナデ	橙 (5YR7/8)	褐灰 (5YR5/1)	良好	褐灰礫1% 明赤褐礫1%	
630	土師器	壺	口縁～ 体部	12号竪穴	(11.3)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (5YR6/6)	良好	精良	
631	土師器	壺	口縁～ 体部	12号竪穴	(10.0)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (5YR5/8)	良好	精良	
632	土師器	壺	胴部～ 底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ ヘラケズリ	ユビナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄褐 (10YR7/3)	良好	黒褐礫7%	
633	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	(7.7)	−	ナデ	ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (5YR5/8)	良好	褐礫15%	
634	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	(6.7)	−	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	褐灰 (10YR4/1)	良好	褐灰礫3%	
635	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	(8.2)	−	ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR6/8)	黄橙 (7.5YR7/8)	良好	赤褐礫2% 黄礫1% 灰白粗砂1%	
636	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	灰黄褐 (10YR5/2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	暗褐礫2% 黒礫1% 灰白粗砂1%	
637	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR7/3)	にぶい黄褐 (10YR7/3)	良好	精良	
638	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	明褐 (7.5YR5/8)	良好	褐礫7% 明褐礫1%	
639	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	灰褐礫5%	
640	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	暗褐礫15%	
641	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	明褐 (7.5YR5/8)	良好	黒褐礫10%	
642	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫5%	
643	土師器	甕	底部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明褐 (7.5YR5/8)	良好	褐礫10%	
644	土師器	竈形 土器	焚口	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (7.5YR7/4)	良好	灰黄褐礫3%	
645	土師器	竈形 土器	基部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰礫5% 褐礫2%	
646	土師器	竈形 土器	基部	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	良好	黒褐粗砂3% 暗褐粗砂3% 暗褐礫1%	
647	土師器	不明	不明	12号竪穴	−	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	褐灰 (10YR4/1)	良好	黒褐礫4%	
648	土師器	小玉	完形	12号竪穴	径1.0	厚0.6	重 0.7gf	−	−	−	−	−	−	−
651	須恵器	坏	口縁～ 胴部	13号竪穴	(11.9)	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	灰礫1% 灰粗砂3% 灰白粗砂	
652	須恵器	坏	口縁～ 底部	13号竪穴	−	(3.1)	−	回転横ナデ ヘラ削り	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	灰白礫3% 灰白粗砂7%	ヘラ記号
653	土師器	坏	口縁～ 底部付近	13号竪穴	(15.6)	−	−	ミガキ	ミガキ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	黒褐礫15% 褐礫 赤褐礫3%	
654	土師器	坏	底部付近	13号竪穴	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/8)	良好	赤褐粗砂7% 黒褐礫3% 褐礫	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
655	土師器	ミニチュア	口縁	13号竪穴	(4.8)	–	–			明灰黄(2.5Y5/2)	にぶい黄(2.5Y6/3)	良好	褐礫3% 黒礫1% 未満	
656	土師器	高坏	口縁～坏部	13号竪穴	(16.2)	–	–	横ナデ ミガキ	横ナデ ミガキ	橙(2.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	良好	灰白粗砂1% 透明光沢粗砂3%	
657	土師器	脚付坏	脚部	13号竪穴	–	–	–	風化してるがミガキ？	風化の為調整不明	にぶい橙(5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	良好	灰白粗砂3% 透明光沢細砂3% 褐粗砂1%	
658	土師器	甕	口縁～底部	13号竪穴	(17.1)	6.2	18.3	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	明褐(7.5YR5/8)	良好	暗褐礫3% 黒礫2% 黒粗砂2%	底部に枝葉痕
659	土師器	甕	完形	13号竪穴	16.6	5.0	18.6	ナデ	横ナデ ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	暗赤褐礫2%	底部に枝葉痕
660	土師器	甕	胴部～底部	13号竪穴	–	6.2	–	ナデ	ナデ	にぶい黄褐(10YR5/4)	明黄褐(10YR7/6)	良好	褐灰粗砂3% 褐灰礫1%	底部に枝葉痕
661	土師器	甕	胴部	13号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	赤褐礫7%	
662	土師器	壺	底部	13号竪穴	–	(7.0)	–	ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(7.5YR6/6)	良好	黒褐粗砂3%	
663	土師器	甕	口縁～胴部	13号竪穴	–	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ 工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	暗褐礫2% 褐灰礫2% 黒褐礫1% 灰白礫1%	
664	土師器	甕	口縁～胴部	13号竪穴	–	–	–	横ナデ 風化が著しい	横ナデ ナデ	明黄褐(10YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	良好	暗褐礫7% 黒礫2% 灰白礫1% 灰黄褐礫1% 透明礫1% 暗褐粗砂3%	
665	土師器	甕	口縁～底部 ほぼ完形	13号竪穴	24.0	4.2	18.7	横ナデ ナデ	横方向のナデ	橙(7.5YR7/6)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	礫10%	
666	土師器	甕	口縁～底部 ほぼ完形	13号竪穴	19.0	5.1	21.0	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	にぶい赤褐礫10% 灰黄粗砂5%	底部に枝葉痕
667	土師器	甕	口縁～底部付近	13号竪穴	21.7	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	褐礫7% 灰褐礫 灰白礫	
668	土師器	把手付鉢	口縁～底部	13号竪穴	(16.2)	(8.0)	(11.0)	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	灰黄褐(10YR6/2)	にぶい黄褐(10YR7/3)	良好	灰黄褐礫3% 褐灰礫	底部に枝葉痕
669	土師器	竈形土器	ほぼ完形	13号竪穴	29.7	38.0	28.7	工具ナデ	ナデ	橙(5YR7/8)	橙(5YR7/6)	良好	赤灰礫5% にぶい赤褐礫2%	
673	須恵器	坏	底部	14号竪穴	–	–	–	回転ヘラ削り	回転横ナデ	灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	堅緻	灰粗砂1%	
674	土師器	不明	脚部	14号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	良好	黒褐礫3% 黒褐粗砂3%	
675	土師器	甕	口縁部	14号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	良好	赤褐礫7%	
676	須恵器	坏蓋	ほぼ完形	5号溝状遺構	15.2	–	–	ヘラ削り 回転横ナデ	ナデ 回転横ナデ	灰(7.5Y6/1)	灰(5Y6/1)	堅緻	灰白礫1% オリーブ黒粗砂3% 灰白粗砂	自然釉
678	須恵器	坏	口縁～胴部	5号溝状遺構	(6.5)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄(2.5Y6/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	灰白礫2% 暗灰礫1%	
679	須恵器	坏	口縁～胴部	5号溝状遺構	(8.2)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	オリーブ黄(5Y6/3)	灰オリーブ(5Y5/2)	堅緻	浅黄橙粗砂2%	
680	土師器	坏	口縁～底部	5号溝状遺構	(14.2)	(5.0)	4.15	ミガキ 風化が著しい	ミガキ	明赤褐(2.5YR5/8)	橙(2.5YR6/8)	良好	明赤褐粗砂1%	赤色顔料塗布
681	土師器	坏	口縁	5号溝状遺構	(13.4)	–	–	ミガキ	ミガキ	橙(2.5YR6/8)	橙(2.5YR6/8)	良好	黒粗砂1%	
682	土師器	坏	口縁～底部	5号溝状遺構	11.6	4.2	5.1	ナデ	ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	赤黒礫1%	
683	土師器	坏	口縁～底部付近	5号溝状遺構	–	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ	にぶい橙(7.5YR6/4)	橙(7.5YR7/6)	良好	赤褐礫1%	
684	土師器	甕	口縁	5号溝状遺構	(19.2)	–	–	横ナデ 工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/4)	良好	褐灰礫10%	
685	土師器	甕	口縁～胴部	5号溝状遺構	(17.8)	–	–	横ナデ 工具ナデ	横ナデ 工具ナデ	橙(7.5YR7/6)	浅黄橙(7.5YR8/6)	良好	にぶい赤褐礫15%	
686	土師器	甕	胴部～底部	5号溝状遺構	–	–	(3.4)	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐(10YR6/6)	明黄褐(10YR7/6)	良好	黒褐礫1% 赤褐礫2% 無色礫1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
687	土師器	壺	口縁～底部付近	5号溝状遺構	(17.0)	–	–	横ナデ・縦方向の工具・連続刻み目貼り付け突帯	横ナデ・指頭圧痕・工具ナデ	橙(2.5YR7/8)	にぶい橙(7.5YR6/4)	良好	暗赤灰礫10%	
688	土師器	壺	口縁	5号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	橙(5YR6/8)	橙(7.5YR6/6)	良好	褐粗砂1%	黒色処理？
689	土師器	甑	口縁～底部	5号溝状遺構	(17.2)	(5.5)	21.25	ナデ	ナデ	明黄褐(10YR7/6)	明黄褐(10YR6/6)	良好	黒礫1%	
690	土師器	竈形土器	掛口～焚口	5号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	橙(5YR7/6)	良好	褐礫5%	
691	土師器	竈形土器	焚口	5号溝状遺構	–	–	–	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい黄橙(10YR6/3)	良好	暗赤褐礫10%	
692	土師器	竈形土器	掛口	5号溝状遺構	–	–	–	横ナデ ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR6/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	良好	赤褐礫5% 灰白粗砂2% 褐灰粗砂	
693	土師器	竈形土器	焚口	5号溝状遺構	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄褐(10YR5/4)	良好	褐灰礫5% 灰白粗砂3%	
695	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	2区	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰(5Y4/1)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	灰白礫1& 灰白粗砂5%	
696	須恵器	坏蓋	口縁部	2区	(13.4)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	黒(7.5Y2/1)	灰(7.5Y5/1)	堅緻	灰粗砂1%	自然釉
697	須恵器	坏蓋	口縁部	2区	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	オリーブ黄(5Y6/3)	灰オリーブ(5Y5/2)	堅緻	灰粗砂1%	
698	須恵器	坏蓋	つまみ	2区	–	–	–	回転横ナデ	ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	黄灰(2.5Y5/1)	堅緻	灰黄粗砂1%	
699	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	2区	(9.0)	–	–	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	黄褐(2.5Y5/3)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	黒礫2% 浅黄粗砂1% 未満 灰白粗砂5%	
700	須恵器	坏身	口縁～底部	2区	(12.2)	–	–	回転横ナデ ヘラ削り ヘラ切り	回転横ナデ	灰オリーブ(7.5Y6/2)	灰オリーブ(7.5Y6/2)	堅緻	灰白礫1% 灰白粗砂10% 暗灰粗砂	
701	須恵器	坏身	口縁～底部付近	2区	(10.6)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰(5Y4/1)	灰(5Y4/1)	堅緻	灰白粗砂1%	口縁部打ち欠き
702	須恵器	坏	口縁～体部	2区	(10.3)	–	–	回転横ナデ	横ナデ	暗灰黄(2.5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	にぶい黄褐粗砂2%	
703	須恵器	坏	口縁～底部	2区	(10.5)	(6.5)	2.8	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ 指押さえ	灰黄(2.5Y6/2)	黄灰(2.5Y6/1)	堅緻	灰白礫7% 黄灰粗砂1%	
704	須恵器	坏	口縁～底部	2区	(10.8)	(2.0)	4.25	回転横ナデ ヘラ削り	回転横ナデ	オリーブ黄(5Y6/4)	にぶい黄(2.5Y6/4)	堅緻	灰礫2% 灰粗砂10% 灰白	
705	須恵器	坏	口縁～底部	2区	–	–	–	回転横ナデ ヘラ削り	回転横ナデ 同心円アテ具痕	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	堅緻	灰白礫2% 灰白粗砂10% 灰粗砂	
706	須恵器	坏	口縁～底部	2区	–	(6.5)	–	回転横ナデ 回転ヘラ削り後	回転横ナデ 指押さえ	灰オリーブ(7.5Y5/2)	オリーブ黄(5Y6/3)	堅緻	灰白礫2% 暗灰礫1%	ヘラ記号
707	須恵器	坏	口縁部	2区	(11.0)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰(5Y5/1)	灰オリーブ(5Y4/2)	堅緻	精良	
708	須恵器	甕	胴部	2区	–	–	–	タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y4/2)	堅緻	灰白礫1%	
709	須恵器	甕	胴部	2区	–	–	–	タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	オリーブ黄(5Y6/3)	灰オリーブ(5Y5/2)	堅緻	明黄褐礫1%	
710	須恵器	甕	胴部	2区	–	–	–	タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	淡黄(2.5Y6/2)	暗灰黄(2.5Y5/2)	堅緻	淡黄粗砂2%	
711	須恵器	甕	胴部	2区	–	–	–	格子目タタキ カキ目	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y5/2)	オリーブ黄(5Y6/3)	堅緻	にぶい黄橙粗砂1%	
712	須恵器	甕	胴部	2区	–	–	–	格子目タタキ	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y5/2)	暗灰黄(2.5Y5/3)	堅緻	精良	
713	須恵器	甕	胴部	2区	–	–	–	タタキ後カキ目	同心円アテ具痕	灰オリーブ(5Y4/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	堅緻	浅黄礫1%	
714	須恵器	甕	胴部	2区	–	–	–	格子目タタキ	ナデ	灰白(N7/)	灰(N5/)	堅緻	灰白粗砂3%	
715	須恵器	壺	底部付近	2区	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白(5Y7/1)	灰(5Y6/1)	堅緻	黄灰粗砂1%	自然釉
716	土師器	坏	口縁～底部	2区	(9.7)	(4.9)	4.15	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明黄褐(10YR6/6)	黄橙(7.5YR7/8)	良好	黒褐粗砂1% 未満	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
717	土師器	坏	口縁～底部付近	2区	(11.9)	(6.8)	4.5	横ナデ ヘラミガキ	ヘラミガキ	赤褐 (2.5YR4/8)	明赤褐 (2.5YR5/8)	良好	黒褐礫5 明褐粗砂10% 黒褐粗砂	
718	土師器	坏	口縁	2区	–	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	にぶい橙礫1% 褐灰粗砂1%	
718	土師器	坏	口縁～体部	2区	(11.2)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明黄褐 (10YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	黒褐粗砂7% 褐粗砂	
719	土師器	坏	口縁～底部	2区	(16.6)	–	4.8	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	赤褐粗砂2%	
720	土師器	坏	口縁～底部付近	2区	(12.8)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐粗砂1%	
721	土師器	坏	口縁～底部付近	2区	(11.8)	–	–	横ナデ ヘラ削り	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐粗砂3%	
722	土師器	坏	口縁～底部付近	2区	(13.4)	(7.9)	4.8	ヘラミガキ	風化の為 調整不明	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	灰褐礫15% 黒褐礫 暗褐礫	
723	土師器	坏	口縁～底部	2区	(14.9)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (5YR5/6)	橙 (5YR6/6)	良好	精良	
724	土師器	坏	口縁～底部	2区	(13.8)	(5.6)	(4.7)	ナデ 木の葉底 ヘラ記号	ミガキ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	精良	
725	土師器	ミニチュア	口縁～底部	2区	(6.2)	(4.0)	3.25	指ナデ	指ナデ	黄灰 (2.5Y4/1)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	黒粗砂3%	
726	土師器	ミニチュア	口縁～底部	2区	–	–	2.3	指押さえ	指ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	褐粗砂1%	
727	土師器	坏	口縁～底部	2区	–	–	–	横ナデ ナデ	横ナデ ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	灰白粗砂2% 褐粗砂	
728	土師器	坏	口縁～底部	2区	(10.4)	(6.0)	8.45	横方向のナデ	横方向のナデ	橙 (7.5YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	褐灰粗砂3% 黒褐礫1% 未満	
729	土師器	坏	口縁～底部	2区	(14.5)	7.5	5.4	ヘラミガキ ヘラ削り	横ナデ 斜方向の ヘラミガキ	褐 (7.5YR4/4)	褐 (7.5YR4/4)	良好	灰白粗砂2% 灰褐粗砂	黒色処理
730	土師器	坏	口縁	2区	(14.6)	–	–	ナデ	横方向のナデ	褐灰 (10YR4/1)	褐灰 (10YR4/1)	良好	黒褐礫2%	黒色処理
731	土師器	坏	口縁	2区	–	–	–	ナデ	横方向のナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	褐灰粗砂1%	黒色処理
732	土師器	坏	口縁	2区	–	–	–	ナデ	横方向のナデ 工具ナデ	にぶい黄褐 (10YR5/3)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫1%	黒色処理
733	土師器	坏	口縁	2区	–	–	–	ナデ	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (5YR7/4)	良好	赤灰粗砂5%	
734	土師器	高坏	坏部	2区	–	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	暗赤褐粗砂2% 灰白粗砂2% 黒粗砂2%	
735	土師器	高坏	坏～脚部	2区	–	–	–	風化が著しい ミガキ？	風化が著しい ミガキ？ 指ナデ 横方向のハケ目	橙 (5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰粗砂2% 透明粗砂5%	
736	土師器	高坏	脚部	2区	–	(13.1)	–	ヘラミガキ 風化してる	ヘラミガキ 風化が著しい	明褐 (7.5YR5/6)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	暗赤褐礫1% 暗赤褐粗砂3%	
737	土師器	高坏	坏部	2区	(14.7)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐灰粗砂1% 明赤褐粗砂1%	
738	土師器	高坏	脚部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	褐灰 (10YR6/1)	良好	褐灰粗砂1%	
739	土師器	高坏	裾部	2区	–	(16.0)	–	ナデ 横ナデ	ナデ 横ナデ	浅黄 (2.5YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	にぶい褐粗砂1%	
740	土師器	高坏	口縁～底部	2区	(9.6)	6.8	6.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR5/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	褐灰礫1%	
741	土師器	高坏	脚部	2区	–	6.8	–	削り後ミガキ	ミガキ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	明赤褐粗砂1%	
742	土師器	甕	口縁～胴部	2区	(19.8)	–	–	横方向のナデ 縦方向の工具痕	横方向のナデ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐灰礫3%	
743	土師器	甕	口縁～胴部	2区	(21.9)	–	–	横ナデ 工具ナデ	横ナデ ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰粗砂3%	
744	土師器	甕	口縁～胴部	2区	(17.6)	–	–	横方向のナデ 縦方向のナデ	横方向のナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	褐灰礫3%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
745	土師器	甕	口縁～胴部	2区	(20.5)	–	–	横方向のナデ 縦方向のナデ 風化が著しい	横方向のナデ 横方向の 工具ナデ	浅黄 (2.5Y8/3)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	黒褐礫3% 黒褐粗砂3%	
746	土師器	甕	口縁～胴部	2区	(25.6)	–	–	横方向のナデ 斜方向のナデ	横方向のナデ 斜方向のナデ	明黄褐 (10YR6/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐灰粗砂3%	
747	土師器	甕	口縁～頸部	2区	(14.0)	–	–	横ナデ 横方向のナデ	横ナデ 横・斜方向 のナデ	橙 (7.5YR6/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐灰礫5% 黒褐礫 灰白粗砂1%	
748	土師器	甕	口縁～頸部	2区	(10.0)	–	–	横ナデ 指押さえ後ナデ 斜方向の 工具痕 工具ナデ	横ナデ 斜・横方向 のナデ 斜方向のナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	灰褐礫2% 黒褐礫	
749	土師器	甕	口縁～胴部	2区	(8.8)	–	–	横ナデ 工具ナデ	横ナデ 工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫5% 褐礫1%	
750	土師器	甕	口縁	2区	(6.0)	–	–	ナデ 横ナデ 工具痕？ 指押さえ	ナデ	黒褐 (10YR3/2)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	暗褐礫1% 黒褐礫1% 褐灰粗砂1%	
751	土師器	甕	胴部～底部	2区	–	11.6	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	褐灰 (10YR5/1)	良好	褐灰礫1% にぶい褐礫2%	
752	土師器	甕	底部	2区	–	13.1	–	横方向のナデ 斜方向のナデ 木の葉底	工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黒 (N2/)	良好	褐灰礫3% 黒褐礫 褐灰粗砂2% 黒褐粗砂	
753	土師器	甕	底部	2区	–	7.9	–	ミガキ 木の葉底	ミガキ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/6)	良好	黒褐礫1% 灰白礫 黒褐粗砂 灰白粗砂 明赤褐粗砂	黒色処理？
754	土師器	甕	底部	2区	–	(7.4)	–	ナデ 指押さえ ケズリ 木の葉底	ミガキ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	灰黄褐礫1% 灰白礫2% 褐礫3% 褐灰粗砂1% にぶい褐粗砂3%	
755	土師器	壺	口縁～肩部	2区	11.7	–	–	横ナデ 横方向の工具ナデ 連続刻み目 貼り付け突帯 斜方向のナデ	横ナデ 横方向のナデ 指押さえ 斜方向の指ナデ ナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR7/8)	良好	灰白粗砂1% 褐灰粗砂 灰白細砂10% 褐灰細砂	
756	土師器	壺	口縁	2区	(10.7)	–	–	横方向のミガキ 縦・斜方向の ミガキ	横方向のミガキ	赤褐 (5YR4/8)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	灰白礫1% 灰白粗砂1%	
757	土師器	壺	口縁	2区	(8.6)	–	–	ナデ 風化が著しい	ナデ ミガキ 指ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	透明光沢粗砂1%	
758	土師器	壺	底部	2区	–	(4.0)	–	ナデ 風化が著しい	調整不明	黄橙 (10YR8/6)	黄橙 (10YR8/6)	良好	褐粗砂3% 黒褐粗砂4%	
759	土師器	壺	底部	2区	–	6.6	–	ヘラミガキ	ナデ	にぶい橙 (2.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	明青灰礫5% 灰白礫2%	
760	土師器	甑	把手	2区	–	–	–	ユビナデ	–	浅黄橙 (10YR8/4)	–	良好	黄灰粗砂3% 黄灰礫1%	
761	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐礫2%	
761	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐礫2%	
762	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	明褐 (7.5YR5/8)	良好	灰黄褐礫1% にぶい黄橙礫2% 暗褐礫2%	
763	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	灰赤礫2% 褐灰礫1%	
764	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	赤褐粗砂1%	
765	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	浅黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	黒褐礫7%	
766	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	灰褐礫7%	
767	土師器	甑		2区	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR5/3)	良好	赤褐礫1%	
768	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	褐灰 (10YR4/1)	良好	黒褐礫10% 褐礫 暗褐礫	
769	土師器	甑	底部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐礫10% 暗褐礫	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
770	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	横ナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	褐灰礫3%	
771	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	黒礫1% 極暗赤褐礫1%	
772	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ 横ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	褐灰礫3% 褐礫3%	
773	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	赤褐礫5%	
774	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	礫5%	
775	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ 横ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐灰礫5% 透明光沢細砂1%	
776	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	黒礫1%	
777	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	工具ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/2)	良好	礫1% 粗砂3%	
778	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	黒粗砂1%	
779	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	黒褐 (2.5Y3/1)	良好	礫3%	
780	土師器	甕	底部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	褐灰礫1% 灰白粗砂1% 褐灰粗砂1%	黒色処理？
781	土師器	甕	底部	2区	−	(5.8)	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	褐灰粗砂1%	
782	土師器	甕	底部	2区	−	(9.95)	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	褐灰 (7.5YR4/1)	良好	精良	
783	土師器	甕	底部	2区	−	(9.1)	−	工具ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐灰礫1%	底部に枝葉痕
784	土師器	竈形土器	掛口	2区	−	(32.4)	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐灰礫3%	
785	土師器	竈形土器	掛口	2区	−	(24.9)	−	ナデ	ハケメ	にぶい黄褐 (10YR6/3)	にぶい黄褐 (10YR6/3)	良好	褐灰礫3%	
786	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	工具ナデ	ハケメ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	灰褐礫5%	
787	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐礫5%	
788	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	暗褐礫10%	
789	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄 (2.5YR6/3)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	褐礫10%	
790	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰礫5% 褐礫1%	
791	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	褐灰礫5% 褐礫2%	
792	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ナデ	ハケメ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	灰黄褐 (10YR5/2)	良好	褐灰礫5% 褐礫2%	
793	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ナデ	工具ナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	良好	褐礫5%	
794	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	灰黄褐 (10YR6/2)	灰黄褐 (10YR6/2)	良好	褐灰礫3%	
795	土師器	竈形土器	焚口 基部	2区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	褐礫7%	
796	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	工具ナデ	横ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	灰褐礫1%	
797	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	褐灰礫1%	
798	土師器	竈形土器	焚口	2区	−	−	−	ハケメ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	にぶい赤褐礫3%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
799	土師器	竈形土器	焚口	2区	–	–	–	ハケメ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	灰褐礫3%	
800	土師器	竈形土器	基部	2区	–	–	–	多方向の工具ナデ	多方向の工具ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	黄褐礫2% 褐灰礫4% 褐礫1%	
801	土師器	竈形土器	基部	2区	–	–	–	工具ナデ 横ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR3/4)	良好	褐灰礫10% 褐礫3%	
802	土師器	竈形土器	基部	2区	–	–	–	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐礫10% 暗褐礫10%	
803	土師器	竈形土器	基部	2区	–	–	–	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐灰礫4%	
804	土師器	竈形土器	庇部	2区	–	–	–	–	–	黄橙 (7.5YR7/8)	橙 (5YR7/8)	良好	暗赤灰礫2% 暗赤灰粗砂1%	
805	土師器	竈形土器	庇部	2区	–	–	–	–	–	にぶい褐 (7.5YR4/4)	–	良好	暗赤灰礫2% 暗赤灰粗砂1%	
806	土師器	竈形土器	庇部	2区	–	–	–	–	–	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	褐礫3% 褐灰粗砂1%	
807	土師器	土製円盤	–	2区	–	–	–	–	–	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい褐 (7.5YR5/4)	良好	精良	
808	土師器	坏蓋	口縁部	2区	(14.8)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (7.5YR7/5)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	黒褐粗砂3% 明褐粗砂2%	
809	土師器	坏	底部	2区	–	(9.2)	–	回転横ナデ ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	精良	
810	土師器	坏	底部	2区	–	(8.4)	–	横ナデ ヘラ削り ナデ	回転横ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	精良	
811	磁器	白磁	口縁～体部	2区	(17.4)	–	–	–	–	白磁釉薬	白磁釉薬	堅緻	精良	玉縁碗
812	土師器	坏	胴部～底部	2区	–	(5.0)	–	回転横ナデ ヘラ切	回転横ナデ	にぶい黄褐 (10YR6/3)	にぶい黄褐 (10YR6/3)	良好	にぶい褐礫1%	
813	磁器	染付	口縁～底部	2区	(11.2)	(5.0)	(5.4)	染め付け	–	–	–	堅緻	精良	肥前染付
816	須恵器	坏蓋	口縁	3区	–	–	–	横ナデ	横ナデ	黄灰 (2.5Y4/1)	黄灰 (2.5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂1%	自然釉
817	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	(13.2)	–	–	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	灰オリーブ (5Y5/2)	灰オリーブ (5Y5/3)	堅緻	にぶい黄礫1%	
818	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	(12.4)	–	–	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	暗オリーブ (5Y4/4)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	灰白礫5%	
819	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	(13.8)	–	–	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄 (2.5YR5/2)	黄褐 (2.5Y5/3)	堅緻	灰白礫5%	
820	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	浅黄粗砂5 ～ 7% 浅黄礫2%	
821	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	–	–	–	横ナデ	横ナデ	オリーブ黒 (5Y3/1)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	堅緻	灰白粗砂1%	自然釉
822	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	(8.0)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (5Y6/1)	暗灰黄 (2.5YR5/2)	堅緻	灰白礫1% 未満 灰白粗砂3%	自然釉
823	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	(11.0)	–	–	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄 (2.5YR5/2)	灰 (5Y5/1)	堅緻	灰粗砂2%	ヘラ記号
824	須恵器	坏蓋	口縁～天井部付近	3区	(16.6)	–	–	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	にぶい黄 (2.5Y6/4)	堅緻	黄灰粗砂1%	
825	須恵器	坏	底部	3区	–	–	–	回転ヘラ削り 回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	堅緻	精良	
826	須恵器	坏	口縁～底部付近	3区	(14.8)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	にぶい赤褐 (5YR4/3)	堅緻	精良	
827	須恵器	坏	口縁部	3区	(11.8)	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	精良	
828	須恵器	坏	口縁～底部付近	3区	(13.0)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰白 (5Y7/1)	灰白 (5Y7/1)	堅緻	黒粗砂2%	
829	須恵器	坏	口縁部	3区	–	–	–	回転横ナデ	回転横ナデ	灰白 (5Y7/2)	灰白 (5Y7/1)	堅緻	精良	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
830	須恵器	坏	口縁部	3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	精良	
831	須恵器	坏	口縁部	3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	灰 (5Y5/1)	堅緻	精良	発泡している部分あり
832	須恵器	甕	口縁部	3区	(16.0)	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰黄 (2.5Y5/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	にぶい黄褐礫1%	
833	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ カキ目	同心円アテ具痕	灰 (10Y5/1)	灰 (N6/)	堅緻	オリーブ黒粗砂1% 橙粗砂1%	
834	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ カキ目	同心円アテ具痕	灰 (10Y5/1)	灰 (10Y5/1)	堅緻	淡黄礫4%	
835	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰オリーブ (5Y5/3)	灰オリーブ (5Y5/2)	堅緻	橙礫1%	
836	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰 (5Y5/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	精良	
837	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ	同心円アテ具痕	灰黄 (2.5Y6/2)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	堅緻	灰白礫10% 浅黄礫2%	
838	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ後 ナデ	同心円アテ具痕	灰 (7.5Y6/1)	灰 (5Y5/1)	堅緻	灰白礫10% 浅黄礫2%	
839	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ後 カキ目	同心円アテ具痕	灰 (5Y5/1)	黄褐 (2.5Y5/3)	堅緻	黄褐粗砂1% 未満 灰白粗砂7% 黒粗砂2%	
840	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	擬格子目タタキ	同心円アテ具痕	黒褐 (10YR3/2)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	堅緻	にぶい黄橙粗砂1%	
841	須恵器	甕	胴部	3区	−	−	−	平行タタキ後 ナデ	同心円アテ具痕 後ナデ	淡橙 (5YR8/4)	淡黄 (2.5Y8/3)	堅緻	黄灰粗砂7%	二次焼成を受ける
842	須恵器	甕	底部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	灰 (N4/)	にぶい黄 (2.5Y6/3)	堅緻	精良	発泡している部分あり
843	須恵器	壺	基部	3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰 (N3/)	灰 (N4/)	堅緻	灰白粗砂1% 未満	
844	須恵器	壺	胴部～ 底部付近	3区	−	−	−	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ	オリーブ黄 (5Y6/3)	灰 (5Y6/1)	堅緻	精良	
845	須恵器	壺	底部付近	3区	−	−	−	回転横ナデ 回転ヘラ削り	回転横ナデ 横ナデ	褐灰 (10YR4/1)	黄灰 (2.5Y6/1)	堅緻	灰白粗砂1%	
846	須恵器	壺	底部	3区	−	(9.0)	−	回転横ナデ	工具ナデ	浅黄 (2.5YR7/3)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	堅緻	明褐灰粗砂2%	
847	須恵器	壺	脚部	3区	−	(14.0)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	灰黄 (2.5Y7/2)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	淡黄粗砂5 ～ 7% 淡黄礫2 ～ 3%	
848	須恵器	壺	脚部	3区	−	(12.2)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y5/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	淡黄粗砂5 ～ 7% 淡黄礫2 ～ 3%	
849	須恵器	壺	頸部	3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	暗灰 (N3/1)	灰白 (5Y7/2)	堅緻	灰白粗砂1%	ハソウか
850	須恵器	特殊 扁壺	背面穿孔 部周辺	3区	−	−	−	列点文	ナデ	灰 (5Y5/1)	黄褐 (2.5Y5/3)	堅緻	精良	
851	須恵器	器台	裾部	3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y4/1)	暗黄灰 (2.5Y4/2)	堅緻	精良	
852	須恵器	器台	体部	3区	−	−	−	回転横ナデ	ナデ	黒 (7.5YR2/1)	黄灰 (2.5Y4/1)	堅緻	精良	
853	須恵器	こね鉢	口縁～ 体部	3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	浅黄 (2.5Y7/4)	黄灰 (2.5Y4/1)	堅緻	淡黄礫2%	
854	土師器	坏	口縁部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒 (7.5YR2/1)	明褐 (7.5YR5/6)	良好	灰褐礫2%	
855	土師器	坏	口縁～ 底部付近	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	明褐灰粗砂2%	
856	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(15.4)	−	(7.3)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐粗砂1%	
857	土師器	坏	口縁～ 底部付近	3区	(11.2)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒粗砂1%	
858	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(13.2)	(6.4)	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰白粗砂1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
859	土師器	坏	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	褐灰礫3%	
860	土師器	坏	口縁部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	精良	
861	土師器	坏	口縁～ 底部付近	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR7/6)	良好	暗褐礫3% 灰白粗砂1%	
862	土師器	坏	口縁～ 底部付近	3区	(12.3)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐粗砂2% 橙粗砂1%	
863	土師器	坏	口縁～ 体部	3区	(15.2)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (7.5YR7/8)	良好	明赤褐粗砂1%	黒色処理
864	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(14.3)	−	(5.0)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/8)	橙 (7.5YR7/8)	良好	褐粗砂3% 灰白粗砂2%	
865	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(13.2)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい褐 (7.5YR6/3)	良好	橙粗砂1%	
866	土師器	坏	口縁～ 底部付近	3区	(18.3)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙 (7.5YR8/8)	橙 (7.5YR7/8)	良好	暗褐礫3% 灰白粗砂1%	黒色処理
867	土師器	坏	口縁部	3区	(16.1)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒粗砂1%	
868	土師器	坏	底部付近	3区	−	(5.4)	−	ナデ	工具ナデ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR7/8)	良好	灰褐礫2% 黒褐礫1%	
869	土師器	坏	底部付近	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい褐 (7.5YR5/3)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	にぶい褐粗砂1%	
870	土師器	坏	底部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい褐 (7.5YR5/4)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐灰粗砂3%	
871	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(18.8)	−	(3.0)	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	明赤褐粗砂1%	
872	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(13.0)	−	(5.8)	工具ナデ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	精良	
873	土師器	坏	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR5/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	赤褐粗砂5% 褐灰粗砂5%	
874	土師器	坏	口縁部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄橙 (7.5YR7/8)	橙 (7.5YR7/6)	良好	精良	
875	土師器	坏	口縁部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (2.5YR5/6)	良好	褐灰粗砂7%	
876	土師器	坏	ほぼ完形	3区	6.7	−	3.5	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	良好	にぶい黄褐粗砂1%	
877	土師器	坏蓋	つまみ	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	
878	土師器	坏蓋	つまみ	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	
879	土師器	坏	底部	3区	−	(11.2)	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	にぶい赤褐粗砂2%	
880	土師器	坏	底部	3区	−	(10.5)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	明黄褐 (2.5YR5/6)	良好	褐粗砂10%	
881	土師器	坏	底部	3区	−	(10.0)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫3%	
882	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(12.3)	(5.1)	−	回転横ナデ ヘラ切り離し	回転横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	精良	墨書あり
883	土師器	坏	口縁～ 底部	3区	(12.3)	(5.1)	−	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	精良	
884	土師器	坏	口縁～ 体部	3区	(13.2)	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	黒粗砂1%	
885	土師器	灯明皿	口縁部	3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	灰白・明赤灰粗砂1%	
886	土師器	坏		3区	−	−	−	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	精良	
887	土師器	坏	底部	3区	−	(5.0)	−	回転横ナデ ヘラ切り離し	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
888	土師器	坏	底部付近	3区	−	−	−	回転横ナデ ヘラ切り離し	回転横ナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (7.5YR7/6)	良好	黒褐礫3%	
889	土師器	坏	底部	3区	−	(6.5)	−	回転横ナデ 糸切り離し	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	にぶい黄褐粗砂2%	
890	土師器	坏	底部	3区	−	(9.0)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	赤褐粗砂5% 褐灰粗砂5%	
891	土師器	坏	底部	3区	−	(10.0)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	黄橙 (7.5YR8/8)	良好	褐粗砂2% 黒褐粗砂3%	
892	土師器	坏	底部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	褐礫4%	
893	土師器	坏	底部	3区	−	(6.9)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	黄灰粗砂4% 褐粗砂3%	底面に枝葉痕
894	土師器	坏	底部	3区	−	(8.2)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐礫2% にぶい黄褐礫3%	
895	土師器	坏	底部	3区	−	(6.4)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	黄橙 (7.5YR8/8)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	精良	
896	土師器	坏	底部	3区	−	−	−	回転横ナデ 糸切り離し	回転横ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	黄橙 (7.5YR8/8)	良好	精良	
897	土師器	坏	底部	3区	−	(6.2)	−	回転横ナデ	回転横ナデ	にぶい橙 (5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	褐灰粗砂3%	
898	土師器	高坏	口縁～ 底部	3区	(15.4)	(8.9)	9.0	ヘラミガキ	ヘラミガキ	にぶい橙 (7.5YR5/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	灰白礫1% 褐粗砂3%	
899	土師器	高坏	坏部～ 脚柱部	3区	−	−	−	−	−	明赤褐 (2.5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/8)	良好	赤褐粗砂1%	
900	土師器	高坏	坏部～ 脚柱部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR7/8)	橙 (5YR6/8)	良好	灰白礫2% 赤褐礫2%	
901	土師器	高坏	脚部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR7/6)	良好	灰白粗砂1%	
902	土師器	高坏	脚部	3区	−	(9.2)	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (5YR7/8)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	灰白粗砂1%	
903	土師器	高坏	坏部～ 脚部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR7/8)	良好	黒褐粗砂1% にぶい赤褐粗砂1%	
904	土師器	高坏	坏部～ 脚柱部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	灰白粗砂1% 灰白粗砂1%	
905	土師器	高坏	坏部～ 脚柱部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/8)	良好	灰白粗砂10%	
906	土師器	高坏	坏部	3区	(16.0)	−	−	ヘラミガキ	−	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR6/8)	良好	赤褐礫1%	
907	土師器	高坏	脚柱部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	−	にぶい橙 (7.5YR6/4)	−	良好	褐灰粗砂3%	
908	土師器	高坏	脚柱部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	明赤褐粗砂1%	
909	土師器	高坏	坏部～ 脚部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (5YR7/6)	良好	赤褐粗砂1% 明褐粗砂1%	
910	土師器	甕	ほぼ完形	3区	14.4	5.0	11.3	ナデ	ナデ ハケメ	明黄褐 (10YR7/6)	黄橙 (7.5YR7/8)	良好	褐灰礫5% 黒褐礫5% 褐礫5%	
911	土師器	甕	口縁部	3区	(17.6)	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙 (10YR8/3)	にぶい黄 (10Y R5/3)	良好	赤褐粗砂5% 褐灰粗砂5%	
912	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	(20.9)	−	−	工具ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	黒 (7.5YR2/1)	良好	褐灰礫15%	
913	土師器	甕	口縁～ 頸部	3区	(21.0)	−	−	工具ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄褐 (2.5YR5/3)	良好	褐灰礫3%	
914	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	(16.8)	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR6/6)	黄灰 (2.5YR5/1)	良好	褐灰礫3%	
915	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐灰礫2%	
916	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	褐灰礫2%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
917	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	暗褐礫2% 灰白礫1%	
918	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	褐礫3% 黒礫2% 褐白礫1%	
919	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	黄橙 (10YR7/8)	良好	褐礫10%	
920	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	暗褐 (10YR3/6)	褐 (10YR4/6)	良好	褐礫5%	
921	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	赤褐礫4% 黒礫3%	
922	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐礫5% 黒褐礫7% 灰白礫5%	
923	土師器	甕	口縁部	3区	(28.0)	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄 (10Y R5/3)	にぶい黄 (10Y R5/3)	良好	黒礫1%	
924	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	(26.8)	−	−	工具ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐礫7%	
925	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	(29.0)	−	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	黄橙 (10YR7/8)	良好	褐礫20%	
926	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	
927	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	工具ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰礫5%	
928	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR5/4)	良好	灰白礫3% 黒礫2%	
929	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	暗褐礫3%	
930	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	浅黄橙 (10YR8/4)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐礫5% 暗褐礫5% 明黄褐礫5%	
931	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	(23.5)	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐灰礫3%	
932	土師器	甕	口縁部	3区	−	−	−	横ナデ	横ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	褐灰礫20%	
933	土師器	甕	口縁～ 胴部	3区	(18.6)	−	−	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫2% 赤灰礫1% 灰白礫1%	
934	土師器	甕	胴部	3区	−	−	−	工具ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	橙 (5YR6/6)	良好	褐礫20%	
935	土師器	甕	胴部～ 底部付近	3区	−	−	−	工具ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	明黄褐 (10YR7/6)	良好	暗褐礫20%	
936	土師器	甕	底部	3区	−	−	−	工具ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	灰オリーブ (5Y5/2)	良好	褐礫1% 褐灰礫1%	
937	土師器	甕	底部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	黄橙 (7.5YR7/8)	良好	灰褐礫2%	
938	土師器	甕	底部	3区	−	(11.0)	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/3)	良好	褐灰礫3% 褐礫1% 無色礫3%	
939	土師器	甕	底部	3区	−	(9.0)	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐礫1% 褐灰礫1%	
940	土師器	甕	底部	3区	−	(9.7)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫3%	
941	土師器	壺	底部	3区	−	(4.6)	−	ユビナデ	ユビナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰褐礫2% 灰白粗砂1%	
942	土師器	壺	口縁部	3区	−	−	−	タタキ	ナデ	黄橙 (7.5YR7/8)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫1% 無色粗砂1%	
943	土師器	壺	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐礫5% 暗褐礫5% 明黄褐礫5%	
944	土師器	壺	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	黄橙 (10YR7/8)	黄橙 (10YR7/8)	良好	精良	
945	土師器	壺	口縁部	3区	(8.8)	−	−	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/8)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	精良	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
946	土師器	壺	胴部	3区	−	−	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (5YR6/6)	橙 (5YR6/6)	良好	黒粗砂1%	
947	土師器	壺	頸部～底部	3区	−	(5.1)	−	ヘラミガキ	ナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	灰白粗砂3%	
948	土師器	甑	把手	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	淡赤橙 (2.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	灰白礫3% にぶい赤褐礫3%	
949	土師器	甑	把手	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	褐灰礫3%	
950	土師器	甑	底部	3区	−	(10.6)	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰粗砂3%	
951	土師器	甑	底部	3区	−	(9.0)	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	褐灰礫2%	
952	土師器	甑	底部	3区	−	(7.6)	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	精良	
953	土師器	甑	底部	3区	−	(7.4)	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	明黄褐礫4% にぶい黄褐礫2% 暗褐礫3%	
954	土師器	甑	底部	3区	−	(5.8)	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	褐灰礫5%	
955	土師器	甑	底部	3区	−	(8.0)	−	工具ナデ	ハケメ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄 (2.5YR6/3)	良好	灰褐礫2% 黒褐礫1%	
956	土師器	甑	底部	3区	−	(7.2)	−	ユビナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐灰礫5% 褐礫1%	
957	土師器	甑	口縁～底部	3区	−	(7.7)	−	工具ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐灰礫3% 褐礫3% 灰白礫1%	
958	土師器	甑	底部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰赤礫1% 明灰赤礫2% 赤黒礫2%	
959	土師器	甑	底部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	灰黄褐礫1% にぶい黄橙礫2% 暗褐礫2%	
960	土師器	甑	底部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	灰白粗砂2% 褐灰礫1%	
961	土師器	甑	底部	3区	−	(8.8)	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR5/3)	良好	褐灰礫5%	
962	土師器	甑	底部	3区	−	(9.8)	−	工具ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐灰礫5% 灰褐礫2%	
963	土師器	甑	底部	3区	−	(9.8)	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫3% 褐礫3%	
964	土師器	甑	底部	3区	−	(14.2)	−	ナデ	ハケメ	橙 (7.5YR7/6)	灰 (N4/)	良好	灰褐礫4%	
965	土師器	甑	底部	3区	−	(15.5)	−	ナデ	工具ナデ	橙 (2.5YR6/6)	橙 (2.5YR6/6)	良好	褐灰礫3%	
966	土師器	竈形土器	掛口～焚口	3区	(26.4)	−	−	工具ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR7/4)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	暗褐礫10%	
967	土師器	竈形土器	掛口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/5)	良好	暗褐礫10%	
968	土師器	竈形土器	胴部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐灰礫3% 褐礫2%	
969	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐灰礫3% 褐礫2% にぶい褐礫2%	
970	土師器	竈形土器	掛口～焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR7/4)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	灰褐礫3% 黒褐礫2% にぶい赤褐礫1%	
971	土師器	竈形土器	掛口･焚口	3区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	黒褐礫2%	
972	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/4)	良好	褐灰礫3%	
973	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫3%	
974	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	橙 (7.5YR7/5)	良好	褐灰礫10% 灰白礫2%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
975	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/6)	良好	褐灰礫3% 黒褐礫2% 赤褐礫2%	
976	土師器	竈形土器	焚口・基部	3区	−	(45.8)	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (2.5YR7/8)	橙 (2.5YR6/6)	良好	褐灰歴5%	
977	土師器	竈形土器	焚口・基部	3区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫5%	
978	土師器	竈形土器	焚口・基部	3区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐 (10YR7/4)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	褐灰礫3%	
979	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	工具ナデ	にぶい黄褐 (10YR7/4)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	暗褐礫10%	
980	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	工具ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫5%	
981	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ユビナデ	工具ナデ	にぶい橙 (7.5YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/4)	良好	褐礫5% 暗褐礫2%	
982	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (7.5YR6/6)	明黄褐 (10YR6/6)	良好	褐礫4% 暗褐礫6%	
983	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	工具ナデ	工具ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐灰礫3%	
984	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄褐 (10YR6/4)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	良好	褐灰礫1% 暗褐礫1% 黒褐礫1%	
985	土師器	竈形土器	焚口	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (5YR6/6)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	褐灰礫1% にぶい赤褐礫1%	
986	土師器	竈形土器	基部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	褐灰礫5%	
987	土師器	竈形土器	基部	3区	−	(34.5)	−	工具ナデ	工具ナデ	橙 (5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	褐灰礫3%	
988	土師器	竈形土器	基部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄 (2.5YR6/3)	にぶい橙 (5YR6/4)	良好	褐灰礫5% 灰白粗砂3%	
989	土師器	竈形土器	基部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい橙 (7.5YR7/3)	良好	褐灰礫7%	
990	土師器	竈形土器	基部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐礫3%	
991	土師器	竈形土器	胴部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	褐礫10%	
992	土師器	竈形土器	庇部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	橙 (2.5YR7/6)	−	良好	褐灰礫5%	
993	土師器	竈形土器	庇部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	−	良好	褐灰粗砂5% 褐灰礫1% 未満	
994	土師器	竈形土器	庇部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR6/3)	良好	褐灰礫1% 灰黄褐礫1% 黒褐礫1%	
995	土師器	竈形土器	庇部	3区	−	−	−	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR6/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	灰黄褐礫2%	
996	土師器	布痕土器	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	灰褐礫1% 黒褐礫2%	
997	土師器	布痕土器	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	橙 (7.5YR6/6)	橙 (7.5YR7/6)	良好	褐粗砂3%	
998	土師器	布痕土器	口縁部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	橙 (5YR7/6)	橙 (5YR6/8)	良好	にぶい黄褐礫1% 黒褐礫2%	
999	土師器	布痕土器	胴部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	橙 (7.5YR6/8)	橙 (7.5YR6/6)	良好	灰褐礫2% 黒褐礫2%	
1000	土師器	布痕土器	胴部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	橙 (7.5YR7/6)	橙 (7.5YR6/8)	良好	黒褐粗砂3%	
1001	土師器	布痕土器	胴部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	にぶい黄橙 (10YR7/4)	良好	赤褐粗砂2%	
1002	土師器	布痕土器	胴部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	にぶい黄橙 (10YR7/4)	浅黄橙 (10YR8/4)	良好	精良	
1003	土師器	布痕土器	胴部	3区	−	−	−	ナデ	布痕	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	浅黄橙粗砂1%	

遺物番号	種別	器種	部位	出土地点	法量(cm)			手法・調整・文様ほか		色調		焼成	胎土の特徴	備考
					口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1005	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	5号竪穴	(11.3)	–	(3.9)	回転横ナデ 工具ナデ	回転横ナデ	黄灰 (2.5Y6/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	精良	
1006	須恵器	坏蓋	天井部	5号竪穴	–	–	–	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰 (7.5Y4/1)	灰 (N4/)	堅緻	灰白粗砂3% 黒礫1%	
1007	須恵器	坏身	口縁～底部付近	5号竪穴	(10.0)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	灰白礫2%	
1008	須恵器	坏	底部付近	5号竪穴	–	–	–	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰黄 (2.5Y6/2)	暗灰黄 (2.5Y5/2)	堅緻	淡黄粗砂1%	
1009	須恵器	坏	底部	5号竪穴	–	–	–	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	にぶい黄 (2.5Y6/3)	灰 (5Y5/1)	堅緻	灰白粗砂3% 淡黄粗砂2%	
1010	須恵器	坏蓋	口縁～天井部	6号竪穴	(12.7)	–	3.7	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	灰 (7.5Y6/1)	灰 (7.5Y6/1)	堅緻	灰白礫1% 灰黄粗砂2%	
1011	須恵器	器台	坏部	6号竪穴	(14.5)	–	–	回転横ナデ 櫛描波状文	回転横ナデ	灰 (7.5Y5/1)	灰 (7.5Y5/1)	堅緻	黒粗砂3% 灰白粗砂7%	
1012	須恵器	甕	口縁～肩部	6号竪穴	(14.8)	–	–	平行タタキ カキ目	横ナデ 同心円アテ具痕	灰白 (5Y7/1)	灰白 (7.5Y7/1)	堅緻	灰白礫1%	
1013	須恵器	坏身	口縁～底部付近	1区	(13.0)	–	–	回転横ナデ 回転ヘラケズリ	回転横ナデ	暗オリーブ (5Y4/3)	灰オリーブ (5Y4/2)	堅緻	黒礫1% 灰白礫3%	口縁部打ち欠き
1014	須恵器	甕	体部	1区	–	–	–	格子目タタキ	同心円アテ具痕	浅黄 (5Y7/3)	浅黄 (5Y7/3)	堅緻	精良	
1015	須恵器	甕	体部	1区	–	–	–	平行タタキ後 カキ目	同心円アテ具痕	黒 (7.5YR2/1)	黒 (7.5YR2/1)	堅緻	にぶい褐粗砂1%	
1016	須恵器	甕	体部	1区	–	–	–	平行タタキ後 カキ目	同心円アテ具痕	灰 (5Y4/1)	灰 (5Y6/1)	堅緻	黒礫5% 灰白粗砂3%	
1017	須恵器	甕	体部	1区	–	–	–	格子目タタキ	同心円アテ具痕	黄灰 (2.5Y5/1)	灰黄 (2.5Y6/2)	堅緻	にぶい黄粗砂1%	
1018	土師器	坏	口縁～底部	11号竪穴	(16.8)	–	4.4	ナデ	ナデ	にぶい黄橙 (10YR7/3)	にぶい黄橙 (10YR7/3)	良好	赤褐礫1%	
1019	土師器	甕	口縁～底部付近	11号竪穴	(24.4)	–	–	ナデ	ナデ	にぶい褐 (7.5YR6/3)	灰褐 (7.5YR5/2)	良好	灰褐礫3%	
1020	土師器	甕	胴部～底部付近	11号竪穴	–	–	–	タタキ後ナデ	ナデ	橙 (7.5YR7/6)	褐灰 (10YR6/1)	良好	精良	
1021	土師器	甑	底部	11号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	浅黄橙 (7.5YR8/6)	浅黄橙 (7.5YR8/6)	良好	暗灰黄礫3% にぶい赤褐礫2% 黒礫2%	
1022	土師器	甑	底部	11号竪穴	–	–	–	ナデ	ナデ	にぶい橙 (7.5YR6/4)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	灰礫3%	
1023	土師器	坏蓋	口縁～天井部	1区	15.7	–	4.5	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (5YR5/8)	明赤褐 (5YR5/8)	良好	黒褐粗砂1%	
1024	土師器	坏蓋	口縁部	1区	(14.6)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (5YR6/8)	橙 (5YR6/8)	良好	灰白粗砂1%	
1025	土師器	坏身	完形	1区	13.0	–	4.6	ヘラミガキ	ヘラミガキ	明赤褐 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	良好	赤褐礫1%	
1026	土師器	壺	口縁～肩部	1区	(11.2)	–	–	ヘラミガキ	ヘラミガキ	橙 (7.5YR6/6)	にぶい橙 (7.5YR6/4)	良好	褐灰粗砂2%	

第６表　山崎上ノ原第１遺跡出土鍛冶関連遺物観察表

遺物番号	種別	出土地点	法　量（cm）			重量	備考
			縦	横	厚		
44	鉄床石	2･3号竪穴建物	16.9	14.9	10.9	4kgf	尾鈴酸性岩（溶結凝灰岩）製
45	鍛錬用敲打石	2･3号竪穴建物	8.5	7.8	5.1	451gf	砂岩製
46	鉄塊系遺物	2･3号竪穴建物	6.3	3.9	2.0	63gf	底面に砂が付着
47	鍛冶炉片	2･3号竪穴建物	4.3	2.6	2.0	7gf	軽石の岩片である
48	流動滓	2･3号竪穴建物	4.2	1.6	1.3	12gf	底面に砂が付着
49	流動滓	2･3号竪穴建物	4.9	3.2	1.9	17gf	底面に砂が付着
163	流動滓	5号竪穴建物	3.0	4.9	2.4	14gf	底面に砂が付着
164	流動滓	5号竪穴建物	3.2	2.0	1.1	6gf	底面に砂が付着
165	鉄塊系遺物	5号竪穴建物	3.1	2.3	1.5	11gf	全体に赤錆が付着
193	椀型滓	6号竪穴建物	2.9	2.2	1.7	19gf	底面に砂が付着
194	流動滓	6号竪穴建物	4.6	3.5	1.3	18gf	底面に砂が付着
195	流動滓	6号竪穴建物	6.7	4.0	0.7	17gf	底面に砂が付着
196	滓	6号竪穴建物	6.1	3.8	3.2	43gf	全体に発泡･炉壁と一部融合
197	鉄塊系遺物	6号竪穴建物	2.7	1.6	1.2	6gf	全体に赤錆が付着
198	鉄塊系遺物	6号竪穴建物	2.6	2.0	1.3	11gf	全体に赤錆が付着
208	羽口片	1号溝	－	－	－	－	
262	椀型滓	7号竪穴建物	5.4	3.8	2.5	26gf	
263	滓	7号竪穴建物	7.4	5.8	4.0	30gf	全体に発泡
325	滓	9号竪穴建物	4.2	2.9	2.5	22gf	粘土塊と融合
375	鉄塊系遺物	4号溝状遺構	2.7	3.3	1.1	15gf	
391	羽口片	11号竪穴	－	－	－	－	
649	滓	12号竪穴	－	－	－		
671	椀型滓	13号竪穴	2.7	2.7	1.0	8gf	
1004	羽口片	3区	－	－	－	－	褐粗砂2% を含む胎土

第７表　山崎上ノ原第２遺跡出土鍛冶関連遺物観察表

遺物番号	種別	出土地点	法量（cm）			重量（g重）	備考
			縦	横	厚		
1027	羽口	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	10	
1028	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	27	
1029	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	24	
1030	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	15	
1031	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	36	
1032	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	23	
1033	流動滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	12	
1034	流動滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	27	
1035	流動滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	33	
1036	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	30	
1037	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	49	
1038	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡A区SA1	−	−	−	75	
1039	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	28	
1040	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	39	
1041	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	26	
1042	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	34	
1043	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	21	
1044	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	18	
1045	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	10	
1046	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	14	
1047	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	20	
1048	流動滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	17	
1049	流動滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	12	
1050	流動滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	19	
1051	流動滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	42	
1052	椀形滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	69	
1053	椀形滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	108	
1054	椀形滓	山崎上ノ原第２遺跡A区SA2	−	−	−	53	

遺物番号	種別	出土地点	法　量（cm）			重量（g重）	備考
			縦	横	厚		
1055	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	49	
1056	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	25	
1057	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	30	
1058	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	20	
1059	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	43	
1060	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	47	
1061	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	23	
1062	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	35	
1063	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA2	－	－	－	23	
1064	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	38	
1065	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	30	
1066	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	24	
1067	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	25	
1068	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	74	
1069	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	95	
1070	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	35	
1071	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区 SA3	－	－	－	66	
1072	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	46	
1073	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	32	
1074	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	52	
1075	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	54	
1076	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	66	
1077	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	62	
1078	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	69	
1079	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	98	
1080	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	32	
1081	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	35	
1082	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	36	
1083	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	58	

遺物番号	種別	出土地点	法量（cm）			重量（g重）	備考
			縦	横	厚		
1084	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	39	
1085	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	31	
1086	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	33	
1087	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	71	
1088	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	66	
1089	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	35	
1090	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	20	
1091	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	41	
1092	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	26	
1093	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	33	
1094	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	88	
1095	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	130	
1096	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	86	
1097	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	36	
1098	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	80	
1099	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	55	
1100	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	284	
1101	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	235	
1102	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	313	
1103	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	46	
1104	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	61	
1105	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	117	
1106	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	119	
1107	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	53	
1108	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	111	
1109	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	113	
1110	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	239	
1111	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	185	
1112	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	139	

遺物番号	種別	出土地点	法　量（cm）			重量（g重）	備考
			縦	横	厚		
1113	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	164	
1114	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	162	
1115	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	198	
1116	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	186	
1117	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	52	
1118	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	197	
1119	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	71	
1120	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	56	
1121	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	180	
1122	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	192	
1123	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	95	
1124	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	78	
1125	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	115	
1126	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ａ区	－	－	－	90	
1127	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA11	－	－	－	28	
1128	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA11	－	－	－	25	
1129	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA12	－	－	－	29	
1130	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA12	－	－	－	52	
1131	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA13	－	－	－	23	
1132	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA13	－	－	－	35	
1134	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA14	－	－	－	16	
1135	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA15	－	－	－	27	
1136	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA15	－	－	－	13	
1137	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA15	－	－	－	27	
1138	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA15	－	－	－	12	
1139	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA19	－	－	－	27	
1140	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA19	－	－	－	16	
1141	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	14	
1142	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	14	

遺物番号	種別	出土地点	法量（cm）			重量（g重）	備考
			縦	横	厚		
1143	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	16	
1144	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	21	
1145	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	95	
1146	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	59	
1147	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	52	
1148	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	77	
1149	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA20	－	－	－	136	
1150	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA21	－	－	－	63	
1151	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA21	－	－	－	96	
1152	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA21	－	－	－	101	
1153	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA21	－	－	－	176	
1154	鉄塊系遺物	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA22	－	－	－	101	
1155	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA23	－	－	－	60	
1156	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA23	－	－	－	41	
1157	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA23	－	－	－	152	
1158	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA23	－	－	－	51	
1159	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA24	－	－	－	40	
1160	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA25	－	－	－	55	
1161	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA28	－	－	－	20	
1162	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA29	－	－	－	29	
1163	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA31	－	－	－	69	
1164	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA32	－	－	－	131	
1165	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA32	－	－	－	75	
1166	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA34	－	－	－	21	
1167	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA36	－	－	－	60	
1168	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA38	－	－	－	33	
1169	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA38	－	－	－	47	
1170	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区 SA38	－	－	－	12	
1171	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	37	

遺物番号	種別	出土地点	法　量（cm）			重量（g重）	備考
			縦	横	厚		
1172	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	58	
1173	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	83	
1174	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	67	
1175	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	83	
1176	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	39	
1177	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	124	
1178	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	52	
1179	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	19	
1180	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	116	
1181	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	52	
1182	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	87	
1183	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	48	
1184	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	33	
1185	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	70	
1186	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	22	
1187	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	38	
1188	鉄滓	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	18	
1189	－	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	－	－	－	36	鍛造中に放棄された鉄素材か
1190	三角鉄片	山崎上ノ原第２遺跡Ｂ－2区	2.5	2.3	－	10.5	

第８表　山崎上ノ原第１遺跡出土鉄製品等観察表

遺物番号	種別	出土地点	法　量（cm）			重量（g重）	備考
			最大長	最大幅	最大厚		
372	不明	4号溝	–	–	–	–	二重らせん状
670	凹字形鉄製品	13号竪穴	2.4	6.7	0.1	8	
694	不明	5号溝	4.1	3.5	0.2	23	
814	四つ目	2区	7.3	4.6	2.1	86	
815	四つ目	2区	4.4	–	2.2	68	

第９表　山崎上ノ原第１遺跡出土石製品観察表

遺物番号	種別	石材	出土地点	法　量（cm）			重量（ｇｆ）	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
26	不明	軽石	1号竪穴建物	3.5	2.0	1.2	1	熱により変色している
131	砥石	砂岩	4号竪穴建物	－	9.4	－	(249)	熱により変色している
132	砥石	タフィサイト？	4号竪穴建物	－	－	－	(49)	県北産か
133	不明	軽石	4号竪穴建物	23.4	16.8	9.0	1.0kgf	
134	不明	軽石	4号竪穴建物	17.5	11.1	10.8	(365)	
135	不明	軽石	4号竪穴建物	5.5	5.6	3.3	13	
162	不明	軽石	5号竪穴建物	9.2	10.0	5.1	109	貫通しない穿孔が2箇所あり
191	不明	軽石	6号竪穴建物	－	－	－	(19)	一面に赤色顔料が確認できる
192	不明	軽石	6号竪穴建物	32.7	24.4	13.1	1700	
261	砥石	砂岩	7号竪穴建物	－	－	3.9	264	熱により変色、鉄錆が付着
281	敲石？	砂岩	8号竪穴建物	7.5	6.6	4.1	228	
282	不明	軽石	8号竪穴建物	28.0	21.4	15.6	2195	
309	砥石	凝灰岩	3号溝状遺構	4.7	3.1	2.4	45	天草砥石か
310	砥石	凝灰岩	3号溝状遺構	5.7	3.6	4.3	135	天草砥石か
311	不明	軽石	3号溝状遺構	9.4	8.3	8.5	107	
324	砥石	砂岩	9号竪穴建物	8.4	2.4	1.8	41	
374	硯	赤間か？	4号溝状遺構	－	－	－	－	近世硯　混入か
389	砥石	砂岩	11号竪穴	－	－	－	233	
390	砥石	砂岩	11号竪穴	－	－	－	11	
546	不明	軽石	1区	－	－	－	1510	
547	不明	軽石	1区	9.6	4.8	3.8	46	
548	不明	軽石	1区	－	－	－	30	
549	不明	軽石	1区	10.4	6.6	3.7	50	
550	砥石	凝灰岩	1区	－	－	－	65	天草砥石か
551	砥石	凝灰岩	1区	－	－	－	113	天草砥石か
552	砥石	砂岩	1区	－	－	－	72	
553	砥石	砂岩	1区	7.3	3.1	2.7	110	
554	敲石？	砂岩	1区	－	－	－	118	
555	砥石	砂岩	1区	－	－	－	136	
650	不明	軽石	12号竪穴	14.4	7.0	2.4	45	

第Ⅴ章　金属分析（ＪＦＥテクノリサーチ株式会社）

はじめに

宮崎県埋蔵文化財センター殿から、山崎上ノ原第1遺跡整理作業・報告書作成に伴う金属分析業務として、山崎砂丘遺跡から出土した遺物について、化学成分分析を含む自然科学的観点での調査を依頼された。調査の観点として、出土遺物の外観観察、化学成分分析、ミクロ組織観察等を行い、遺跡で出土した遺物について、始発原料および資料の製造工程上の位置づけを調査した。その結果について報告する。

第１節　調査項目および試験・観察方法

１　調査項目

調査資料の記号、出土遺構・注記および調査項目を表１に示す。

２　調査方法

（１）重量計測、外観観察および金属探知調査

資料重量の計量は電子天秤を使用して行い、少数点２位で四捨五入した。各種試験用資料を採取する前に、資料の外観を㎜単位まであるスケールを同時に写し込みで撮影した。資料の出土位置や資料の種別等は提供された資料に準拠した。

着磁力調査については、直径30㎜のリング状フェライト磁石を使用し、６㎜を１単位として35㎝の高さから吊した磁石が動きは始める位置を着磁度として数値で示した。遺物内の残存金属の有無は金属探知機（ＭＣ：metalchecker）を用いて調査した。金属検知にあたっては参照標準として直径と高さを等しくした金属鉄円柱（1.5㎜φx1.5㎜H、2.0㎜φx2.0㎜H、５㎜φｘ５㎜H、10㎜φx10㎜H、16㎜φx16㎜H、20㎜φx20㎜H、30㎜φx30㎜H）を使用し、これとの対比で金属鉄の大きさを判断した。

（２）顕微鏡組織観察

資料の一部を切り出し樹脂に埋め込み、細かい研磨剤などで研磨（鏡面仕上げ）する。顕微鏡で観察しながら代表的な断面組織を拡大して写真撮影し、顕微鏡組織および介在物（不純物、非金属鉱物）の存在状態等から製鉄・鍛冶工程の加工状況や材質を判断する。原則として100倍、及び400倍で撮影を行う。

（３）化学成分分析

化学成分分析は鉄鋼に関するJIS分析法に準じて行っている。

・　全鉄（T.Fe）：三塩化チタン還元－二クロム酸カリウム滴定法。
・　金属鉄（M.Fe）：臭素メタノール分解－EDTA滴定法。
・　酸化第一鉄（FeO）：二クロム酸カリウム滴定法。
・　酸化第二鉄（Fe_2O_3）：計算。
・　化合水（C.W.）：カールフィッシャー法。
・　炭素（C）、イオウ（S）：燃焼－赤外線吸収法。
・　ライム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化マンガン（MnO）、酸化ナトリウム（Na_2O）、珪

素（Si）、マンガン（Mn）、リン（P）、ニッケル（Ni）、ジルコニア（Zr）、アルミニウム（Al）、バナジウム（V）、チタン（Ti）：ICP 発光分光分析法。

・　シリカ（SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化リン（P_2O_5）、酸化カリウム（K_2O）：ガラスビード蛍光X線分析法。

但し CaO，MgO，MnO は含有量に応じて ICP 分析法またはガラスビード蛍光X線分析法を選択。

・　酸化ナトリウム（Na_2O）：原子吸光法。

鉄滓中成分は、18成分（全鉄 T.Fe、金属鉄 M.Fe、酸化第一鉄 FeO、酸化第二鉄 Fe_2O_3、シリカ SiO2、アルミナ Al_2O_3、ライム CaO、マグネシア MgO、酸化ナトリウム Na_2O、酸化カリウム K_2O、二酸化チタン TiO_2、酸化マンガン MnO、酸化リン P_2O_5、ジルコニア Zr、化合水 C.W.、炭素 C、バナジウム V、銅 Cu）を化学分析している。分析は各元素について分析し、酸化物に換算して表示している。

3. 調査結果および考察

調査資料と調査項目を８頁の表１に、資料の化学成分分析結果を８～９頁の表２～３にそれぞれ示した。全資料の外観写真は13 ～ 24頁に、切断面位置は25 ～ 29頁に、切断面写真は30 ～ 34頁に顕微鏡組織は35 ～ 60頁に、鉱物組織の英文、化学式は一括して7頁の５. 参考に示した。各資料の調査結果をまとめて最も確からしい推定結果を最後にまとめた。

資料番号 No. １　鍛造剥片、着磁度２、重量12.5g

外観観察：外観写真を13 ～ 14頁に示す。いずれも磁着がありやや厚みがあり光沢はない。分析資料は大きさの異なる2個を選択した。資料 No.1-1は黒褐色を呈し、表面は比較的平滑であり、長円状でサイズは長さ9.4×幅6.6×厚さ0.9㎜、重さ0.1g。資料 No.1-2は茶褐色を呈し、表面は比較的凹凸があり、三角形状でサイズは長さ13.1×幅10×厚さ1.0㎜、重さ0.2ｇ。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を35 ～ 38頁に示す。No.1-1は王水腐食により鉄酸化膜の層構造が僅かに確認でき、外層ヘマタイト（Hematite：Fe_2O_3）の微厚白色が辛うじて認められ、他は高温酸化で生成したと思われるマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）とウスタイト（Wustite：FeO）組織となっている。No.1-2はほぼ全層が錆化鉄で、錆化で生じたクラックや膨れで生じた空洞等が観察される。

化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は62.2%、FeO は57.6%、Fe_2O_3は24.8% である。SiO_2が11.4%、Al_2O_3が2.03%、CaO が1.04%、MgO が0.49% をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算すると FeO は61.4%、Fe_2O_3は26.4%、SiO_2は12.2% となり10頁の FeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではマグネタイトに近いウスタイト領域にある。

以上より、本資料は鍛錬鍛冶工程の中期以降に生成した鍛造剥片と思われる。

資料番号 No. ２　粒状滓、着磁度１、重量26.5g

外観観察：外観写真を14 ～ 15頁に示す。全て茶褐色で光沢がない。分析資料は大きさの異なる２個を選択した。No.2-1は茶褐色で光沢はなく、大きさは約3.8φ㎜のほぼ球形で、重さ0.1g。表面には発泡で生じた気泡も観察される。No.2-2も茶褐色で光沢がない大きさが6.3×7.2㎜のいびつな楕円形で、重さ0.6ｇ。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を39 ～ 42頁に示す。全面がマグネタイト（Magnetite：Fe_3O_4）とウスタイト（Wustite：FeO）組織であり、背面には短冊状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）も観察される。滓と反応してよく発泡した多孔質な組織で、ところどころにはメタル粒が観察される。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は52.8%、FeOは49.9%、Fe_2O_3は19.8%である。SiO_2が20.7%、Al_2O_3が3.81%、CaOが1.82%、MgOが0.96%をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算するとFeOは55.2%%、Fe_2O_3は21.9%、SiO_2は22.9%となり10頁のFeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではウスタイト領域にある。
以上より、本資料は鍛錬鍛冶工程の初期段階で生成した粒状滓と思われる。

資料番号 No. ３　流動滓、着磁度：１、メタル反応：なし
外観観察：長さ62.7㎜×幅48.6㎜×厚さ12～22.7㎜。試料の重量は34.7gである。16頁に外観写真を示す。軽く、色調が灰色がかった扁平な凹凸がある不整四角形を呈した流動滓である。破面は３で破面からは気泡が多く観察される。
顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を43 ～ 44頁に示す。全面が胎土の粘土組織であるが、僅かながら微細な短冊状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）組織が晶出し、メタル粒も散見される。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は7.50%と少なく、FeOは0.93%、Fe_2O_3は9.49%である。SiO_2が64.1%、Al_2O_3が11.1%、CaOが4.81%、MgOが3.59%をそれぞれ示している。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると炉壁付着滓の位置にあり、全体的な位置付けから本試料は砂鉄系の製錬工程で炉壁と反応して生成した流動滓の小片と思われる。
以上の結果を総合すると、本試料は砂鉄系の製錬工程で炉壁と反応して生成した流動滓の小片と思われる。

資料番号 No. ４　流動滓、着磁度：０～２、メタル反応：２
外観観察：長さ68.8㎜×幅49.8㎜×厚さ17.5㎜。試料の重量は59.8gである。17頁に外観写真を示す。ずっしりと重量感のある扁平な流動滓で、上面は灰褐色、下面側は酸化土砂で覆われて茶褐色を呈しているが滓そのものは黒色である。破面は３、破面で見ると緻密な組織である。
顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を45 ～ 46頁に示す。ほぼ全面が均一なウスタイト（Wustite：FeO）組織で、背面には短冊状のファイヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が観察される。メタル粒が僅かに存在するが気泡は殆んど観察されない。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は63.8%、FeOは72.4%、Fe_2O_3は10.5%である。SiO_2が12.0%、Al_2O_3が1.78%、CaOが1.07%、MgOが0.59%をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算するとFeOは76.3%、Fe_2O_3は11.1%、SiO_2は12.6%となり10頁のFeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではウスタイト領域にある。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると鍛錬鍛冶滓の位置にあることから本試料は鍛錬鍛冶工程で生成した流動滓と思われる。

資料番号 No. 5　流動滓、着磁度：0、メタル反応：なし
外観観察：長さ53.7㎜×幅47.5㎜×厚さ21.8㎜。試料の重量は32.2g である。18頁に外観写真を示す。泥で覆われて灰褐色を呈しているが下面側には黒色の滓の付着が見られる。溶融して発泡した気泡が多数観察される流動滓である。
顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を47 ～ 48頁に示す。No. 3とよく似た全面が胎土の粘土組織で無数の気泡が観察される。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄6.16%、FeO は1.22%、Fe_2O_3は7.29%、SiO_2は67.6%、Al_2O_3が12.2%、CaO が3.63%、MgO が2.28% をそれぞれ示している。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせるとNo. 3と同様に炉壁付着滓の位置にあることから本試料は砂鉄系の製錬工程で炉壁と反応して生成した流動滓の小片と思われる。
本試料は砂鉄系の製錬工程で炉壁と反応して生成した流動滓の小片と思われる。

資料番号 No. 6　椀型鍛冶滓、着磁度：2、メタル反応：なし
外観観察：長さ71.1㎜×幅53.3㎜×厚さ24.7㎜。資料の重量は159.8g である。外観写真を19頁に示す。全面が泥に覆われて黄褐色を呈し重量感のある不整台形形を呈した椀型滓の小片で破面は４である。上面は中央部がやや窪んだ形状で大きな気泡があり、下面側はゴツゴツと凹凸のある面で砂が付着している。
顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を49 ～ 50頁に示す。ほぼ全面が均一なウスタイト（Wustite：FeO）組織で、背面には短冊状のファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）が観察される。メタル粒が点在し、気泡も散見される。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は65.4%、FeO は70.3%、Fe_2O_3は15.3% である。SiO_2が9.68%、Al_2O_3が1.74%、CaO が1.00%、MgO が0.55% をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算すると FeO は73.8%、Fe_2O_3は16.0%、SiO_2は10.2% となり10頁の FeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではウスタイト領域にある。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると鍛錬鍛冶滓の位置にあることから本試料は鍛錬鍛冶工程で生成した椀型鍛冶滓と思われる。
以上の結果を総合すると本資料は鍛錬鍛冶工程で生成した椀型鍛冶滓と思われる。

資料番号 No. 7　流動滓、着磁度：0、メタル反応：なし
外観観察：長さ61.5㎜×幅49.4㎜×厚さ19.2㎜。資料の重量は74.5g である。外観写真を20頁に示す。泥と砂で覆われて灰褐色を呈した不整四角形の流動滓。破面は４、破面で見ると小さな気泡が多数観察され、滓そのものは黒色である。
顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を51 ～ 52頁に示す。ガラス質スラグ組織、及び短冊状のファイヤライト（Fayalite：2FeO·SiO_2）組織などが主要な組織であるが、ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）組織の周囲には僅かながら微細なマグネタイト（Fe_3O_4）組織やウルボスピネル（Ulvospinel：2FeO・

TiO_2）組織などが観察されている。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は20.7%、FeO は17.3%、Fe_2O_3は10.3% である。SiO_2が52.8%、Al_2O_3が8.38%、CaO が4.23%、MgO が3.48% をそれぞれ示している。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると炉壁付着滓の近傍にあることから本試料は砂鉄を始発原料とする精錬工程の初期に炉壁に付着した流動滓と思われる。
以上の結果を総合すると、本試料は砂鉄を始発原料とする精錬工程の初期に炉壁に付着した流動滓と思われる。

資料番号 No. ８　椀型鍛冶滓、着磁度：１～２、メタル反応：０～２
外観観察：長さ125.2㎜×幅93.3㎜×厚さ30.4㎜。資料の重量は466.1g である。外観写真を22頁に示す。扇形をした扁平で重量感のある椀型鍛冶滓の破片で、上面側はゴツゴツとした湾曲のある面で溶融、発泡した痕跡があり小石や砂が付着している。下面側は酸化土砂に覆われて茶褐色を呈している。破面は３で破面から見ると気泡が多数観察される。
顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を53 ～ 54頁に示す。ほぼ全面がウスタイト（Wustite：FeO）組織で、背面には短冊状のファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）が観察される。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は49.1%、FeO は54.0%、Fe_2O_3は10.0% である。SiO_2が24.8%、Al_2O_3が3.70%、CaO が2.45%、MgO が1.57% をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算すると FeO は60.8%、Fe_2O_3は11.3%、SiO_2は27.9% となり10頁の FeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではウスタイトに近いファイヤライト領域にある。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界領域にあることから本試料は鍛錬鍛冶の初期で生成した椀型鍛冶滓と思われる。
以上の結果を総合すると本資料は鍛錬鍛冶の初期で生成した椀型鍛冶滓と思われる。

資料番号 No. ９　鉄塊系遺物、着磁度：５、メタル反応：３
外観観察：長さ46.5㎜×幅42.9㎜×厚さ22.1㎜。資料の重量は101.3g である。外観写真を22頁に示す。緻密で重量感のある不整台形をした鉄塊系遺物で、上面側は酸化土砂に覆われて茶褐色、下面側には砂や小石が多数付着している。滓そのものは黒色である。破面は４で破面からは気泡が多く観察される。
顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を55 ～ 56頁に、参考に EDX 分析の結果を13頁に示す。ウスタイト（Wustite：FeO）組織、マグネタイト（Fe_3O_4）組織、ファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）組織等が観察される。
化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は57.1%、FeO は63.9%、Fe_2O_3は10.5% である。SiO_2が18.3%、Al_2O_3が2.85%、CaO が1.64%、MgO が0.80% をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算すると FeO は68.9%、Fe_2O_3は11.3%、SiO_2は19.7% となり10頁の FeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではファイヤライト領域に近いウスタイト領域にある。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界領域にあることから本試料は鍛錬鍛冶の初期で生成した鉄塊系遺物と思われる。

以上の結果を総合すると本資料は鍛錬鍛冶の初期で生成した鉄塊系遺物と思われる。

資料番号 No.10　鉄塊系遺物、着磁度：１、メタル反応：２

外観観察：長さ85.1㎜×幅60.5㎜×厚さ44.8㎜。資料の重量は312.6g である。外観写真を23頁に示す。ゴツゴツとした質感で小山のように盛り上がった菱形を呈した重量感のある鉄塊系遺物で破面は３である。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓そのものは黒色で、上面側には気泡が多く見られ、下面側には砂が全面に付着している。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を57 ～ 58頁に示す。ほぼ全面が小粒のウスタイト（Wustite：FeO）組織で背面にファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）組織が観察される。

化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は56.6%、FeO は58.3%、Fe_2O_3は15.9% である。SiO_2が17.3%、Al_2O_3が2.77%、CaO が1.96%、MgO が0.70% をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算すると FeO は63.7%、Fe_2O_3は17.4%、SiO_2は18.9% となり10頁の FeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではウスタイト領域にある。10 ～ 12頁の図２～５は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると精錬鍛冶滓と鍛錬鍛冶滓の境界領域にあることから本試料は鍛錬鍛冶の初期で生成した鉄塊系遺物と思われる。

以上の結果を総合すると本資料は鍛錬鍛冶で生成した鉄塊系遺物と思われる。

資料番号 No.11　鉄塊系遺物、着磁度：４、メタル反応：２

外観観察：長さ65.2㎜×幅63.6㎜×厚さ32.6㎜。資料の重量は284.1g である。外観写真を24頁に示す。溶融で生じた脳みそのようなシワがある緻密で重量感のある鉄塊系遺物で破面は２。酸化土砂に覆われて茶褐色を呈しているが滓そのものは黒色で破面から気泡は見られない。

顕微鏡組織：顕微鏡組織写真を59 ～ 60頁に示す。ほぼ全面がウスタイト（Wustite：FeO）組織で背面にファイヤライト（Fayalite：2FeO・SiO_2）組織が観察される。

化学成分：分析結果を８～９頁の表２～３に示した。全鉄は61.4%、FeO は63.2%、Fe_2O_3は17.4% である。SiO_2が13.4%、Al_2O_3が1.95%、CaO が1.51%、MgO が0.60% をそれぞれ示している。FeO-Fe_2O_3-SiO_2の３成分系に換算すると FeO は67.2%、Fe_2O_3は18.5%、SiO_2は14.3% となり10頁の FeO-Fe_2O_3-SiO_2系の平衡状態図ではウスタイト領域にある。10 ～ 12頁の図2 ～ 5は鉄滓の化学成分組成から鉄滓の生成工程を検討する図である。本試料のデータを各図に重ね合わせると鍛錬鍛冶滓の位置にあることから本試料は鍛錬鍛冶工程で生成した鉄塊系遺物と思われる。

以上の結果を総合すると本資料は鍛錬鍛冶の初期で生成した鉄塊系遺物と思われる。

４　まとめ

本調査で得られた試料は、鍛造剥片が１試料、粒状滓が１試料、流動滓が４試料、椀型鍛冶滓が２試料、鉄塊系遺物が３資料の合計11試料で、製錬工程で生成した鉄滓が２資料、精錬鍛冶工程で生成した鉄滓が１資料、鍛錬鍛冶工程で生成した鉄滓が８資料である。砂鉄原料に特有なチタン系鉱物組織が No. ７から確認されたこと、及び全般の解析結果から鉄滓の始発原料は砂鉄と見られ、本遺跡では砂鉄を原料とした製鉄から鍛錬鍛冶に至る一連の鉄製品製造が行なわれていたと考えられる。

(4) 個別試料

試料 No.	出土遺構名	資料名	調査結果	報告書
No.1	A区	鍛造剥片様遺物	鍛錬鍛冶の中期以降に生成した鍛造剥片	79 集
No.2	A区	粒状滓	鍛錬鍛冶の初期で生成した粒状滓	79 集
No.3	A区 SA3	鉄滓	製錬工程で炉壁と反応して生成した流動滓	79 集
No.4	B 2区 SA23	鉄滓	鍛錬鍛冶で生成した流動滓	130 集
No.5	A区	鉄滓	製錬工程で炉壁と反応して生成した流動滓	79 集
No.6	A区 SA3	鉄滓	鍛錬鍛冶で生成した椀型鍛冶滓	79 集
No.7	B 2区 SA32	鉄滓	砂鉄を始発原料とする精錬鍛冶の初期に生成した流動滓	130 集
No.8	A区	鉄滓	鍛錬鍛冶の初期で生成した椀型鍛冶滓	79 集
No.9	B 2区 SA22	鉄塊系遺物	鍛錬鍛冶の初期で生成した鉄塊系遺物	130 集
No.10	A区 243	鉄塊系遺物	鍛錬鍛冶の初期で生成した鉄塊系遺物	79 集
No.11	A区	鉄塊系遺物	鍛錬鍛冶工程で生成した鉄塊系遺物	79 集

※79集＝宮崎県埋蔵文化財センター『山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第79集

130集＝宮崎県埋蔵文化財センター『山崎上ノ原第２遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第130集

5　参考

(1) 鉄滓の顕微鏡組織について：鉄滓を構成する化合物結晶には、一般的に表Ａ１のような鉱物組織がある。酸化鉄（Fe_2O_3、Fe_3O_4、FeO）、二酸化ケイ素（シリカ：SiO_2）、アルミナ（Al_2O_3）および二酸化チタン（TiO_2）を組み合せた化合物（固溶体）が多く、これら鉱物結晶は含有量にも依存するが、Ｘ線回折により検出され確認できる。鉄滓中の低融点化合物がガラス相（非晶質）を形成することがあり、Ｘ線回折では検出されない。

表Ａ１　　鉄滓の顕微鏡鉱物組織とその観察状況

鉱物組織名（和）	鉱物名（英）	化学式	偏光顕微鏡観察状況
ヘマタイト	Hematite	$\alpha - Fe_2O_3$	赤褐色～赤紫色
マーゲマイト	Maghemite	$\gamma - Fe_2O_3$	赤紫色～黒紫色
マグネタイト	Magnetite	Fe_3O_4	白青色、四角または多角盤状
ウスタイト	Wustite	FeO	灰白色、繭玉状または樹枝状
ファイヤライト	Fayalite	$2FeO \cdot SiO_2$	薄い青灰色、短冊状の長い結晶
ウルボスピネル	Ulvospinel	$2FeO \cdot TiO_2$	白色、四角～角形板状結晶
イルメナイト	Ilmenite	$FeO \cdot TiO_2$	白色、針状・棒状の長い結晶
シュードブルッカイト	Pseudobrookite	$FeO \cdot 2TiO_2$	白色、針状の結晶
ハーシナイト	Hercynite	$FeO \cdot Al_2O_3$	ウスタイト中に析出、ごま粒状。
ゲーサイト	Goethite	$\alpha - FeOOH$	白～黄色、リング状が多い。
アノーサイト	Anorthite	$CaO \cdot Al_2O_3 \cdot SiO_2$	
石英（シリカ）	Silica	$\alpha - SiO_2$	白色～半透明

6．図表・写真

表１　調査試料と調査項目

試料 No.	出土遺構名	資料名	着磁度	MC 反応	外観観察	化学分析	組織観察
No.1	A区	鍛造剥片様遺物	○	○	○	○	○
No.2	A区	粒状滓	○	○	○	○	○
No.3	A区 SA3	鉄滓	○	○	○	○	○
No.4	B 2区 SA23	鉄滓	○	○	○	○	○
No.5	A区	鉄滓	○	○	○	○	○
No.6	A区 SA3	鉄滓	○	○	○	○	○
No.7	B 2区 SA32	鉄滓	○	○	○	○	○
No.8	A区	鉄滓	○	○	○	○	○
No.9	B 2区 SA22	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○
No.10	A区 243	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○
No.11	A区	鉄塊系遺物	○	○	○	○	○

表２　鉄滓の化学成分分析結果（%）

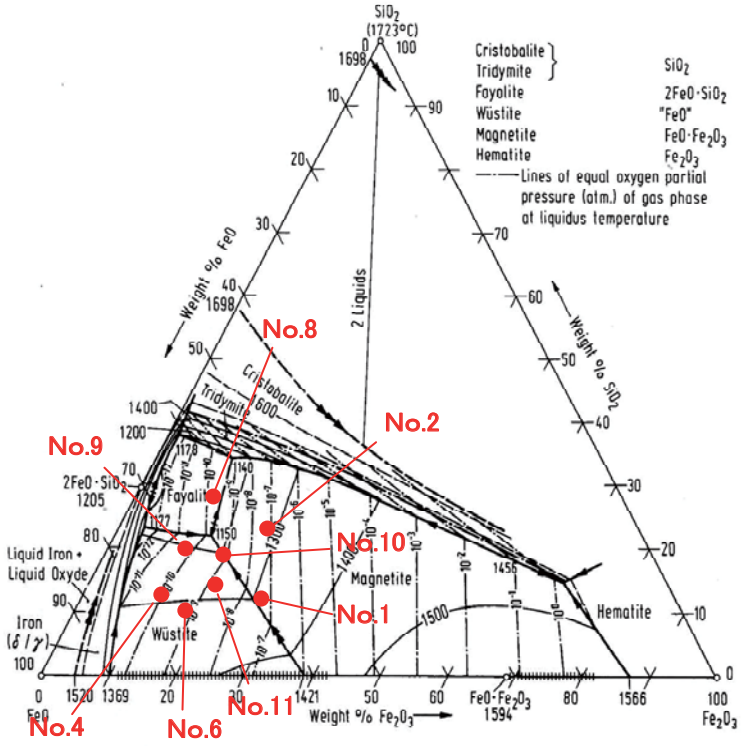
試料 No.	T.Fe	M.Fe	FeO	Fe_2O_3	SiO_2	Al_2O_3	CaO	MgO	K_2O	Na_2O	比率（%）	
											FeO	Fe_2O_3
No.1	62.2	0.11	57.6	24.8	11.4	2.03	1.04	0.49	0.33	0.21	69.9	30.1
No.2	52.8	0.13	49.9	19.8	20.7	3.81	1.82	0.96	0.58	0.53	71.5	28.5
No.3	7.50	0.14	0.93	9.49	64.1	11.1	4.81	3.59	1.91	1.86	8.90	91.1
No.4	63.8	0.15	72.4	10.5	12.0	1.78	1.07	0.59	0.36	0.19	87.3	12.7
No.5	6.16	0.11	1.22	7.29	67.6	12.2	3.63	2.28	2.24	1.85	14.3	85.7
No.6	65.4	0.08	70.3	15.3	9.68	1.74	1.00	0.55	0.36	0.20	82.2	17.8
No.7	20.7	0.05	17.3	10.3	52.8	8.38	4.23	3.48	0.99	1.30	62.7	37.3
No.8	49.1	0.11	54.0	10.0	24.8	3.70	2.45	1.57	0.63	0.45	84.3	15.7
No.9	57.1	0.08	63.9	10.5	18.3	2.85	1.64	0.80	0.47	0.34	85.9	14.1
No.10	56.6	0.17	58.3	15.9	17.3	2.77	1.96	0.70	0.65	0.32	78.6	21.4
No.11	61.4	0.10	63.2	17.4	13.4	1.95	1.51	0.60	0.38	0.23	78.4	21.6

表３　鉄滓の化学成分分析結果（つづき）（%）

試料 No.	TiO_2	MnO	P_2O_5	Zr	C.W.	C	V	Cu	TiO_2/ T.Fe	MnO/ TiO_2	造滓 成分 %
No.1	0.11	0.12	0.591	0.003	0.80	0.37	＜ 0.001	0.004	0.002	1.091	15.5
No.2	0.19	0.13	0.799	0.004	0.54	0.097	0.002	0.002	0.004	0.684	28.4
No.3	0.54	0.15	0.384	0.007	0.86	0.14	0.008	0.002	0.072	0.278	87.4
No.4	0.12	0.08	0.382	0.003	0.32	0.049	＜ 0.001	0.002	0.002	0.667	16.0
No.5	0.54	0.10	0.206	0.010	0.57	0.12	0.006	0.001	0.088	0.185	89.9
No.6	0.10	0.08	0.499	0.003	0.13	0.031	0.001	0.002	0.002	0.800	13.5
No.7	0.51	0.13	0.115	0.007	0.29	0.063	0.006	0.002	0.025	0.255	71.2
No.8	0.19	0.11	1.000	0.004	0.88	0.075	0.002	0.001	0.004	0.579	33.6
No.9	0.16	0.18	0.520	0.004	0.18	0.056	0.001	0.001	0.003	1.125	24.4
No.10	0.16	0.15	1.16	0.005	0.47	0.045	0.001	0.001	0.003	0.938	23.7
No.11	0.11	0.10	0.618	0.003	0.34	0.036	＜ 0.001	0.001	0.002	0.909	18.1

C.W. ＝化合水、造滓成分＝ SiO_2 ＋ Al_2O_3 ＋ CaO ＋ MgO ＋ Na_2O ＋ K_2O

（JFE テクノリサーチ株式会社ソリューション本部（千葉）埋蔵文化財調査研究室による報告に一部加筆修正を加えた。）



FeO-Fe_2O_3-SiO_2 系状態図（by Osborn and Muan）:Slag Atlas
［ドイツ鉄鋼協会］(1981) [Verlag Stahleisen] Düsseldorf, Fig. 106, p,76

図 1　FeO－Fe_2O_3－SiO_2 系鉄滓の平衡状態図

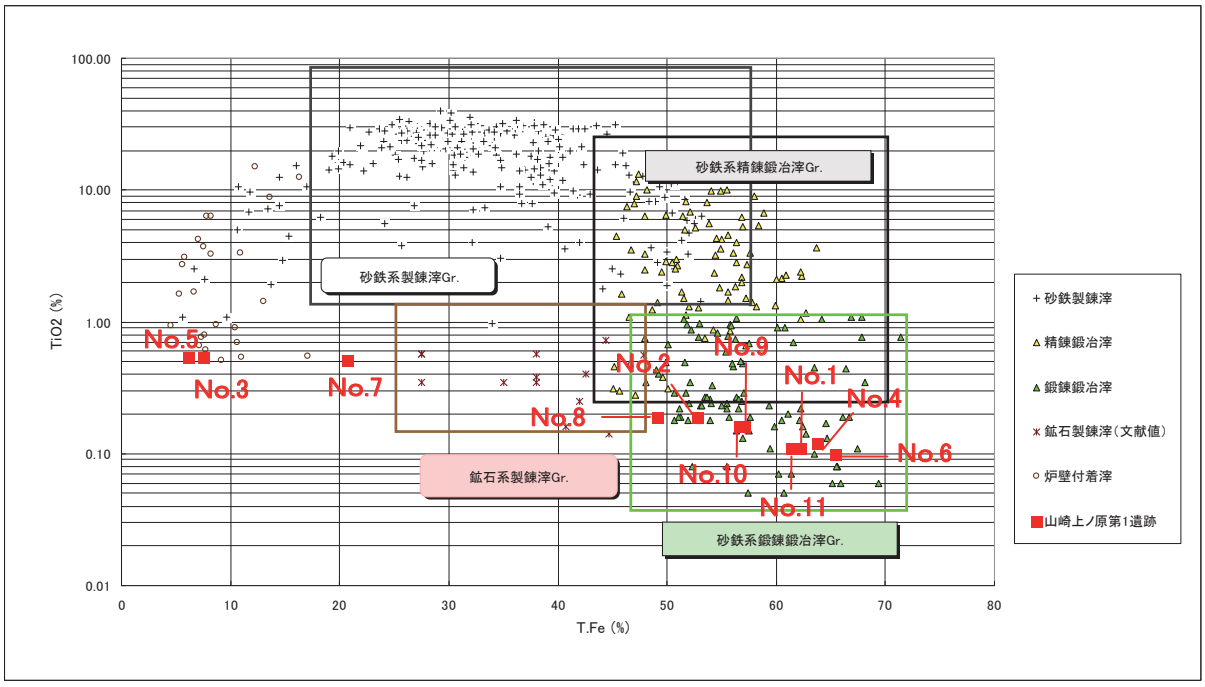


図 2　鉄滓の T.Fe と TiO_2 濃度

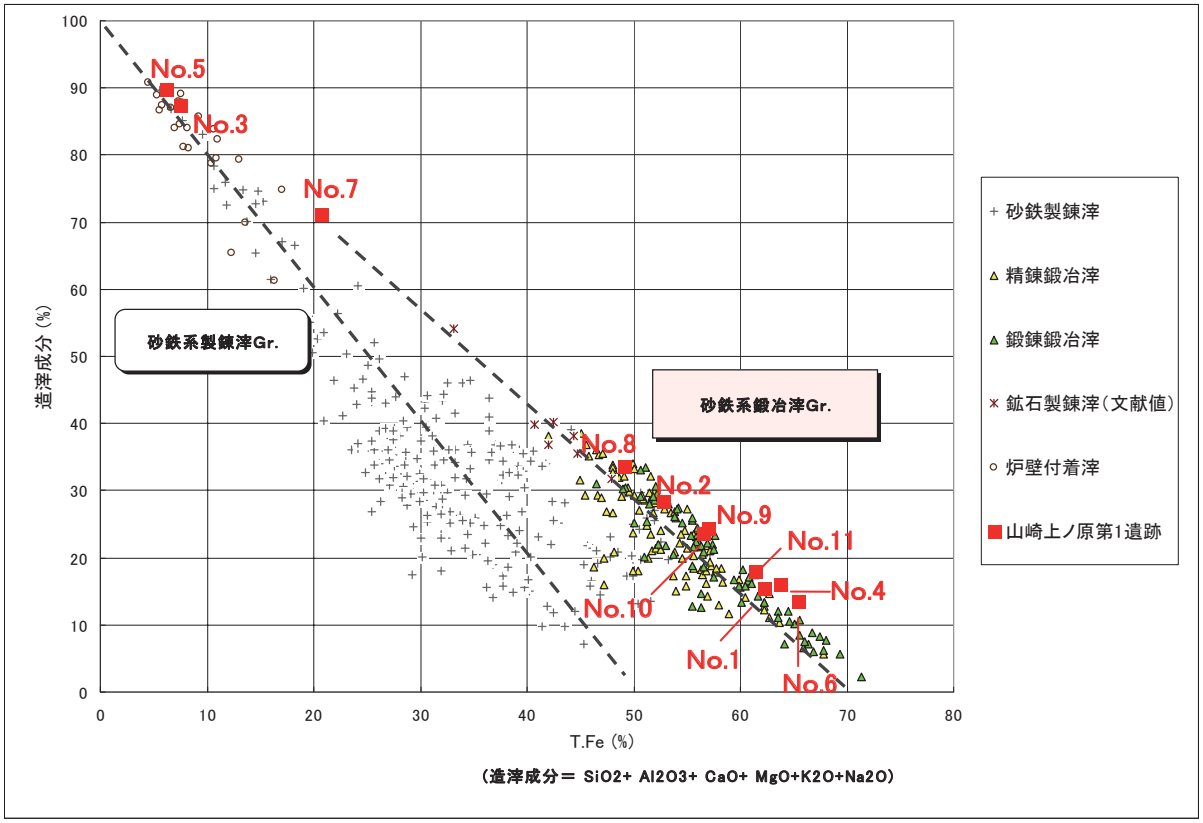


図３　製錬滓と鍛冶滓の分類

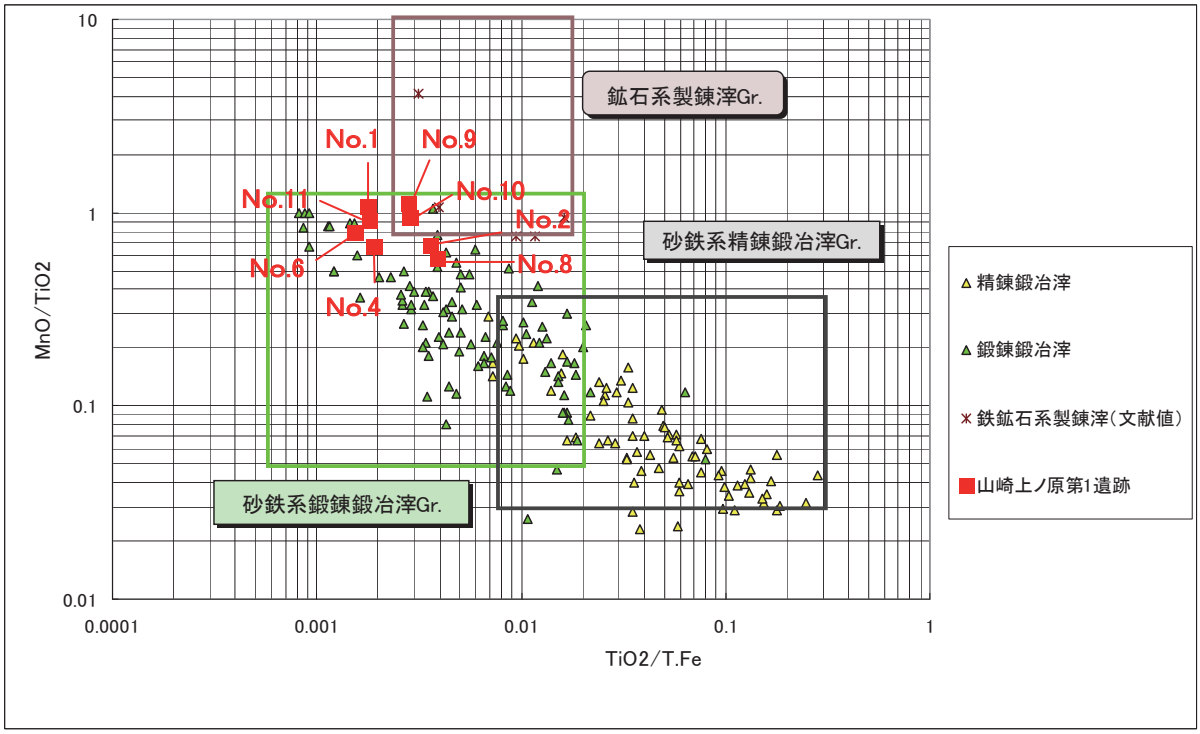


図４　砂鉄系鍛冶滓と鉱石系製錬滓の分類

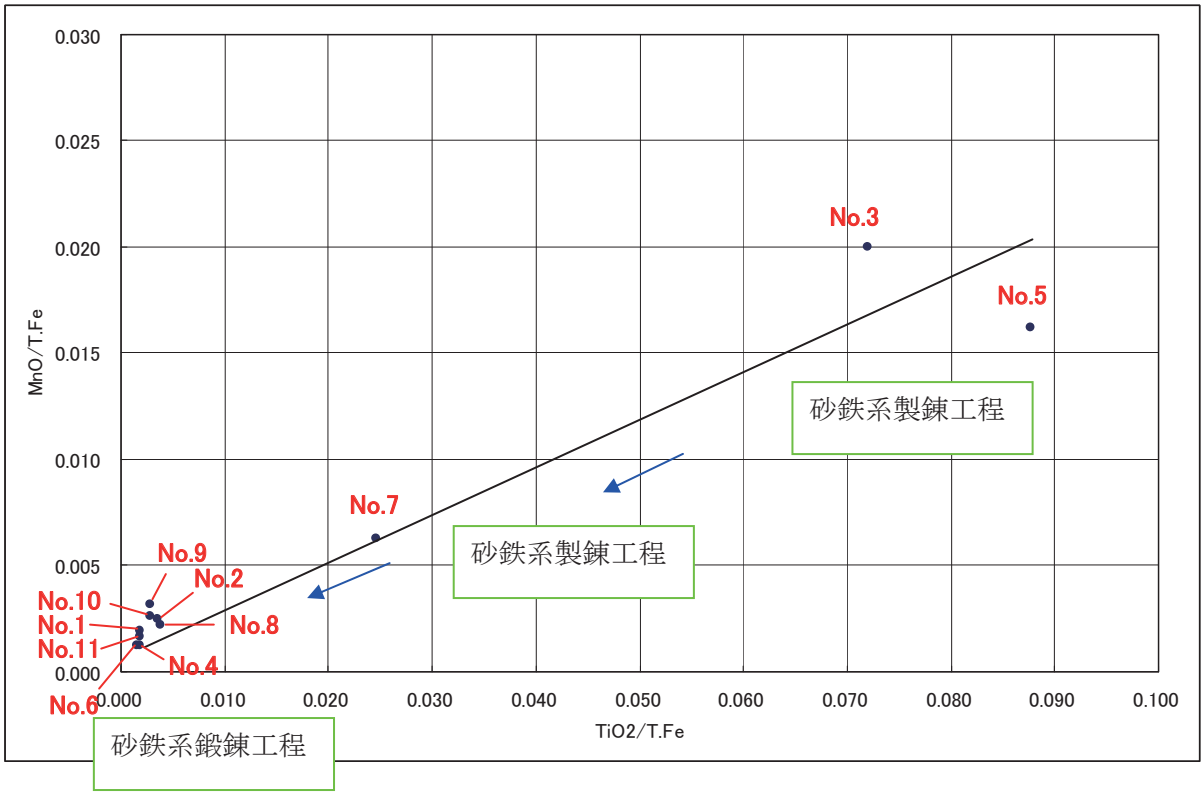


図 5　MnO/T.Fe と TiO_2/T.Fe による分類

外観写真　No.1

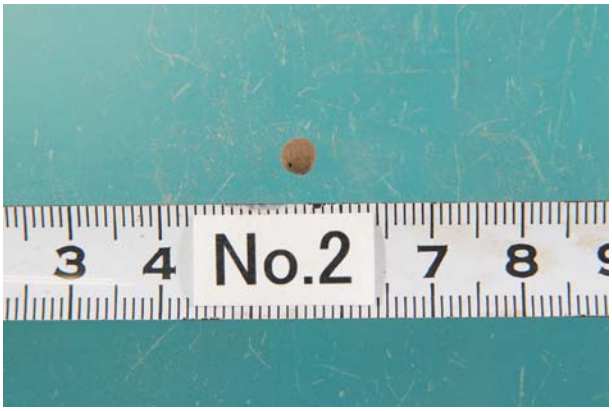
外観写真（No.2-1）

外観写真（No.1-1）

外観写真（No.2-2）

外観写真（No.1-2）

外観写真（No.3-1）



外観写真　No.2

外観写真（No.3-2）

外観写真（No.4-1）

外観写真（No.6-1）

外観写真（No.4-2）

外観写真（No.6-2）

外観写真（No.5-1）

外観写真（No.7-1）

外観写真（No.5-2）

外観写真（No.7-2）

外観写真（No.8-1）

外観写真（No.10-1）

外観写真（No.8-2）

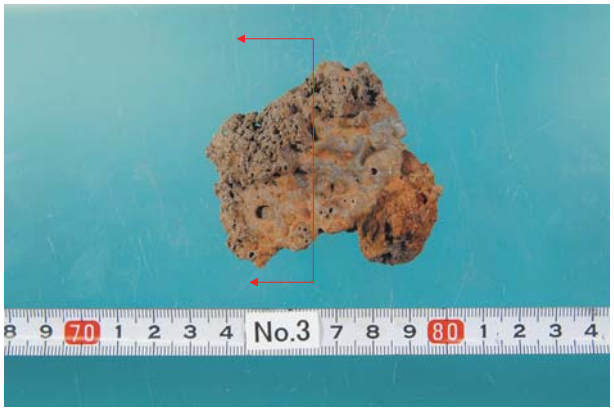
外観写真（No.10-2）

外観写真（No.9-1）

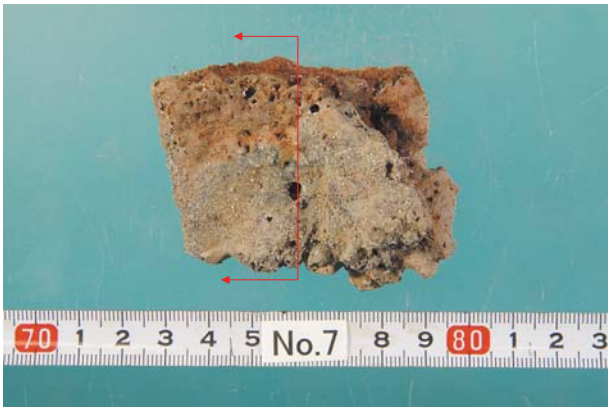
外観写真（No.11-1）

外観写真（No.9-2）

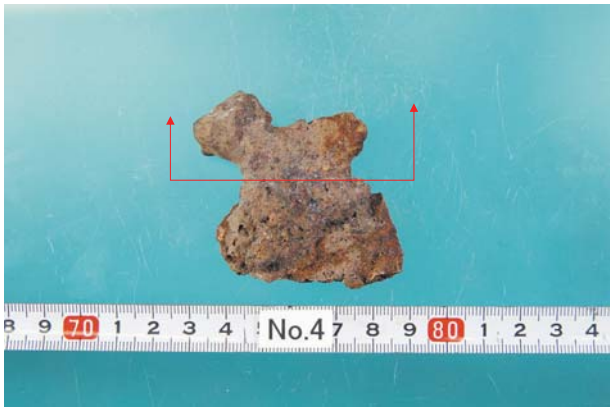
外観写真（No.11-2）



切断位置写真　No.3



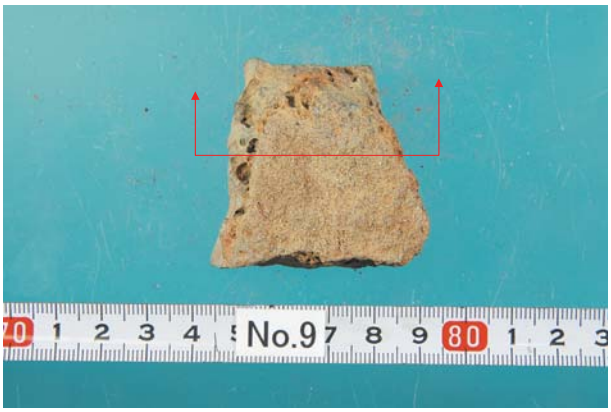
切断位置写真　No.7



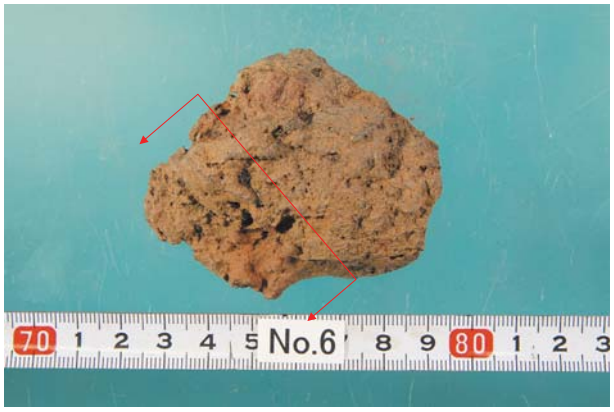
切断位置写真　No.4

切断位置写真　No.8

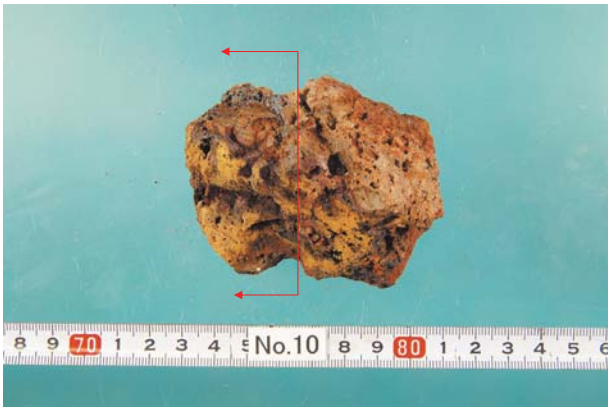
切断位置写真　No.5



切断位置写真　No.9



切断位置写真　No.6

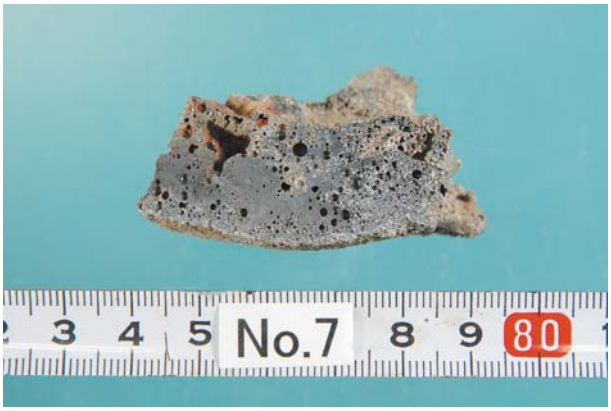


切断位置写真　No.10

切断位置写真　No.11

切断面写真　試料 No.6

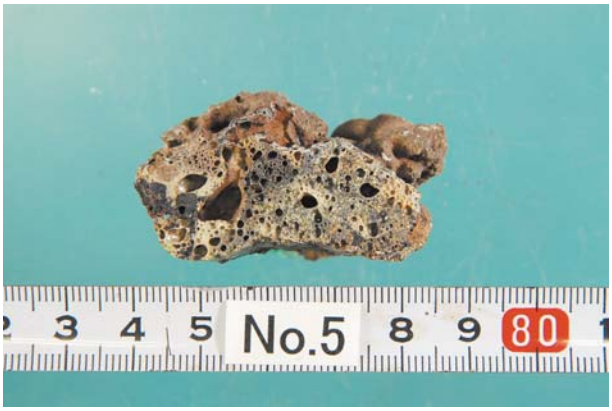
切断面写真　試料 No.3



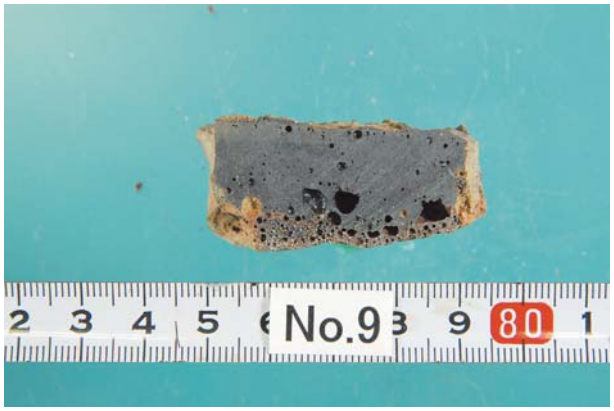
切断面写真　試料 No.7

切断面写真　試料 No.4

切断面写真　試料 No.8



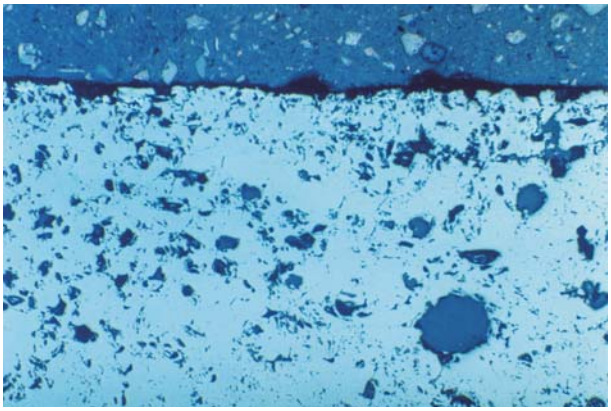
切断面写真　試料 No.5



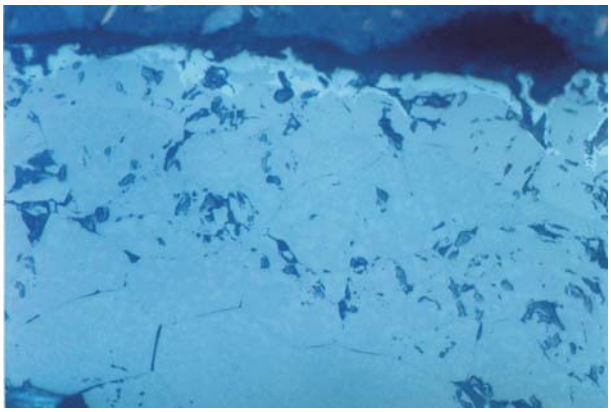
切断面写真　試料 No.9

切断面写真　試料 No.10

切断面写真　試料 No.11

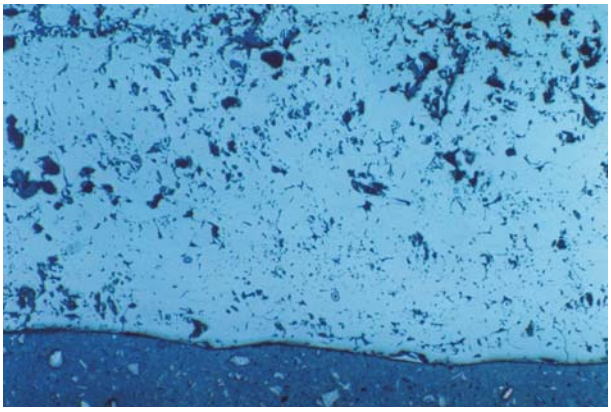


× 100

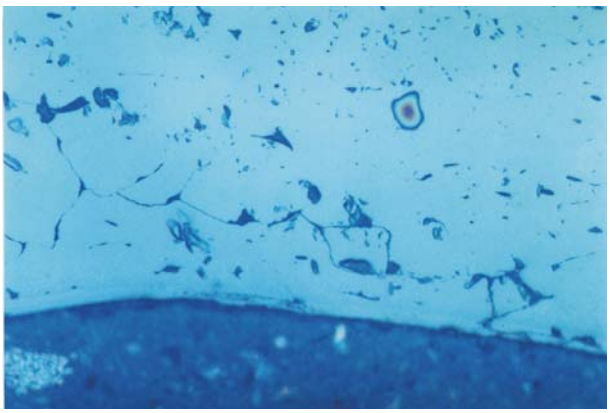


× 400

鍛造剥片顕微鏡組織 1-1-1（No.1-1）

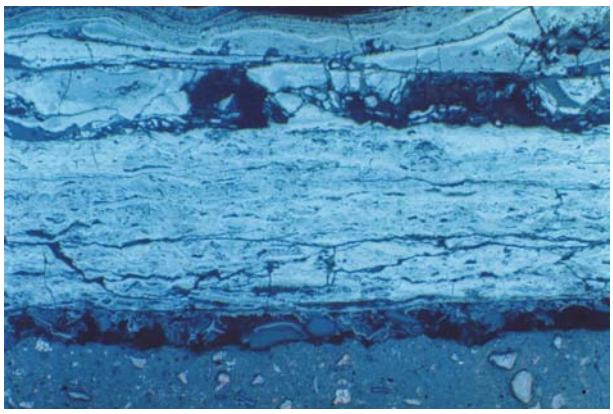


× 100

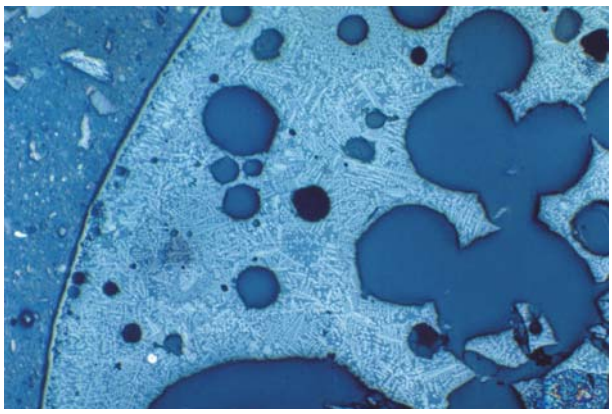


× 400

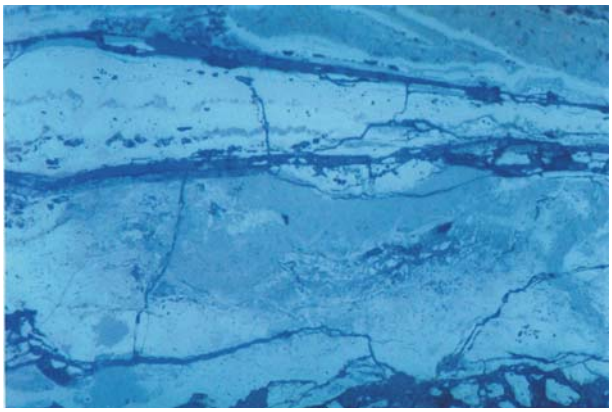
鍛造剥片顕微鏡組織 1-1-2（No.1-1）



× 100

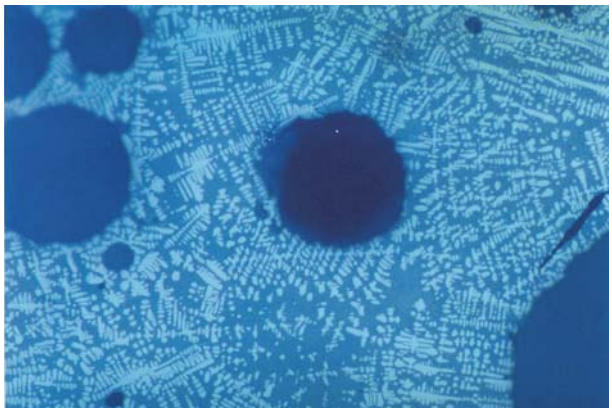


× 100



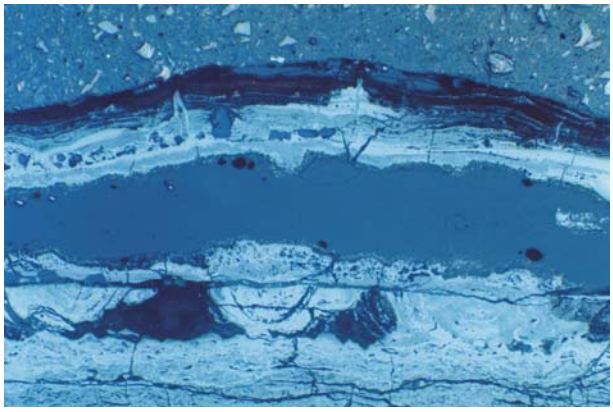
× 400

鍛造剥片顕微鏡組織 1-2-1（No.1-2）

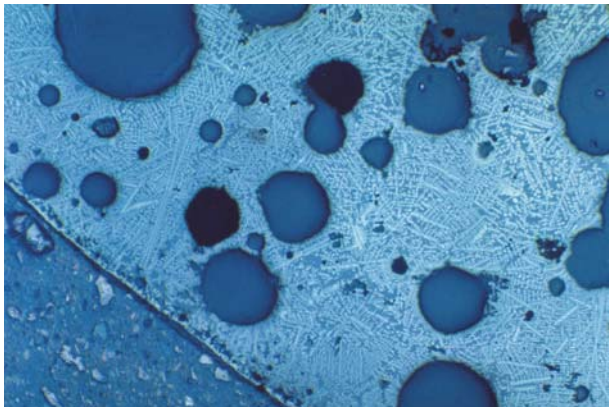


× 400

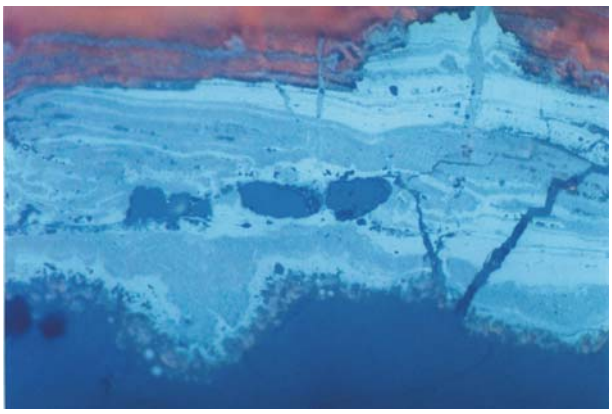
粒状滓顕微鏡組織 2-1-1（No.2-1）



× 100

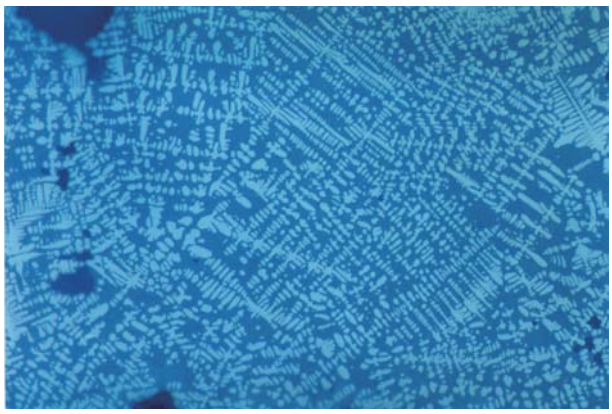


× 100



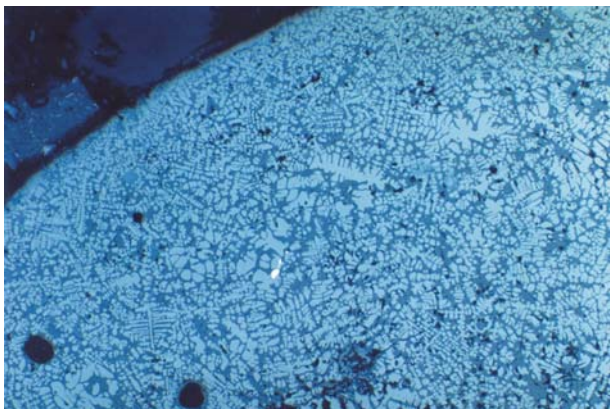
× 400

鍛造剥片顕微鏡組織 1-2-2（No.1-2）

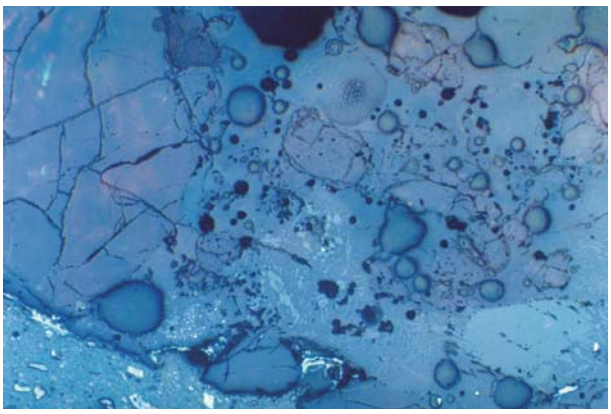


× 400

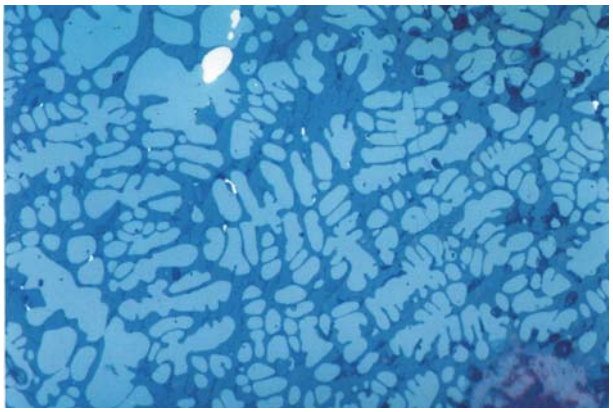
粒状滓顕微鏡組織 2-1-2（No.2-1）



× 100

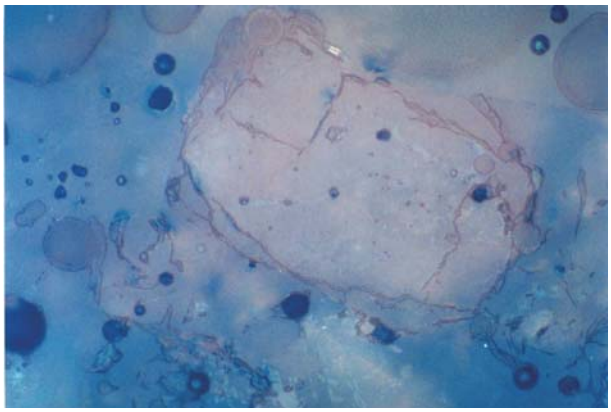


× 100



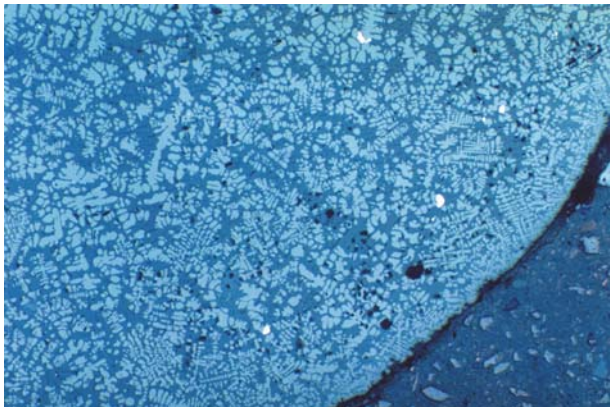
× 400

粒状滓顕微鏡組織 2-2-1（No.2-2）

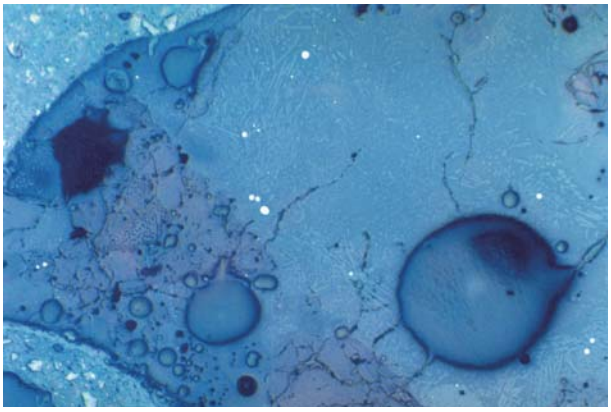


× 400

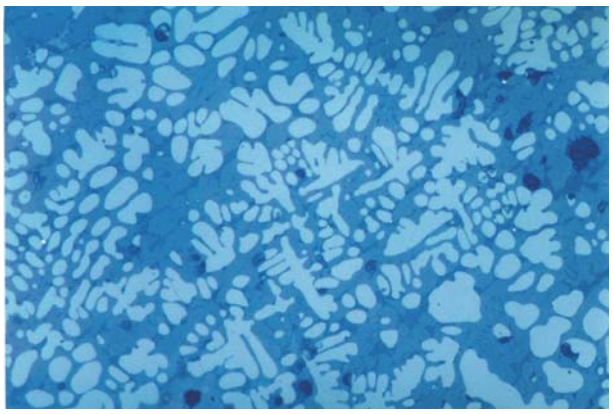
鉄滓顕微鏡組織 3-1（試料 No.3）



× 100



× 100

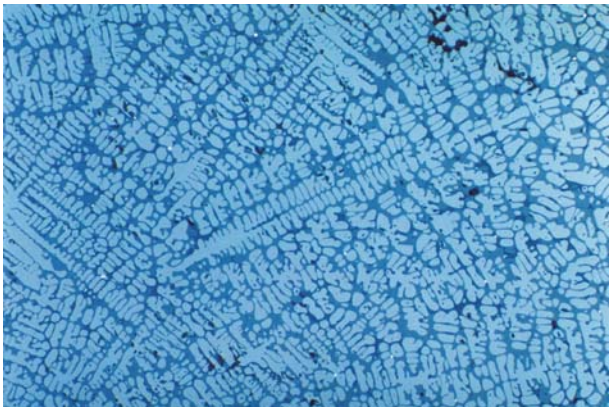


× 400

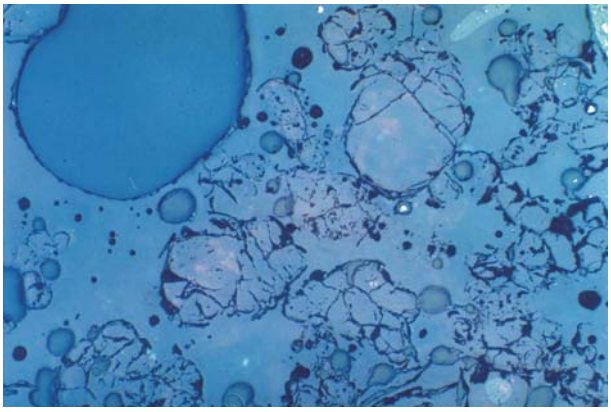
粒状滓顕微鏡組織 2-2-2（No.2-2）

× 400

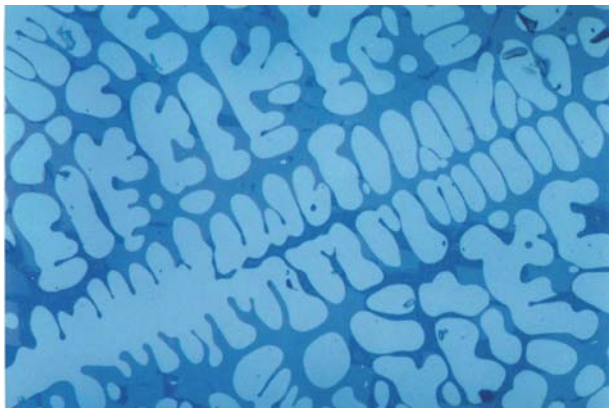
鉄滓顕微鏡組織 3-2（試料 No.3）



× 100

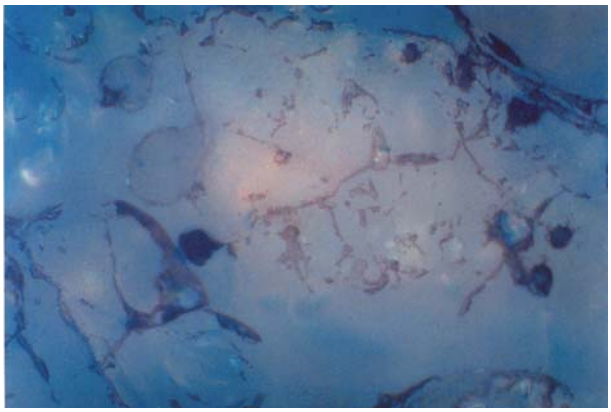


× 100



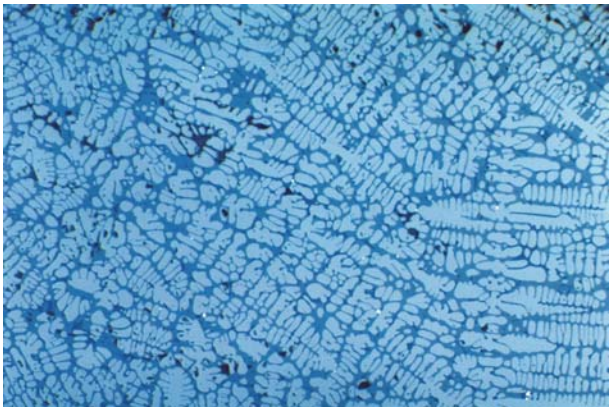
× 400

鉄滓顕微鏡組織 4-1（試料 No.4）

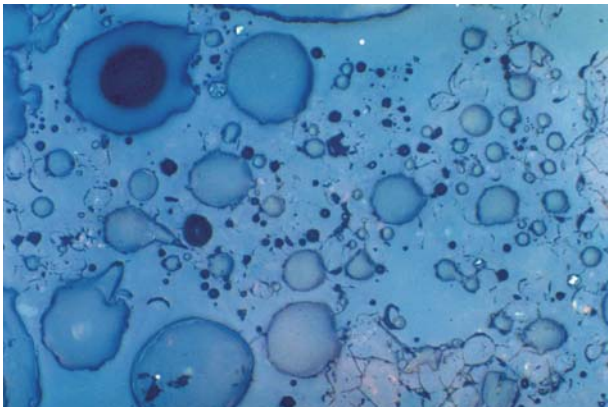


× 400

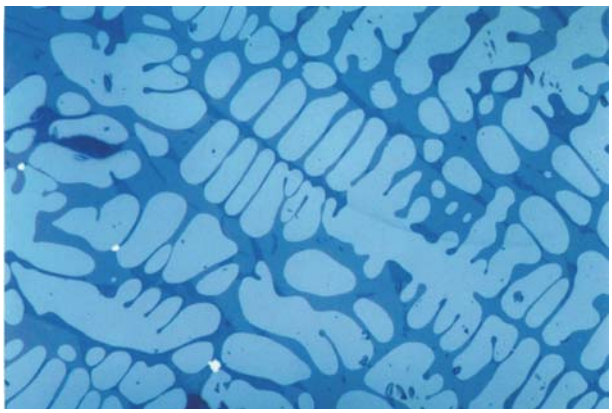
鉄滓顕微鏡組織 5-1（試料 No.5）



× 100

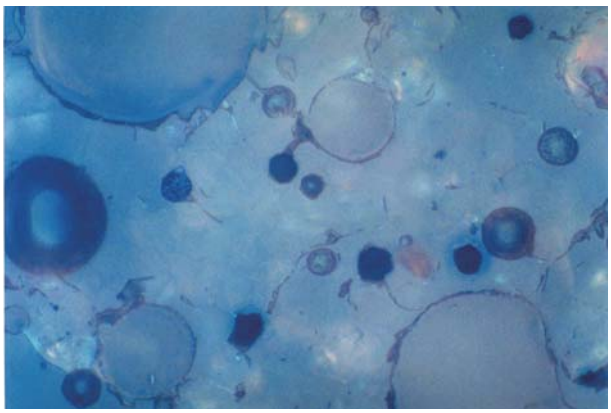


× 100



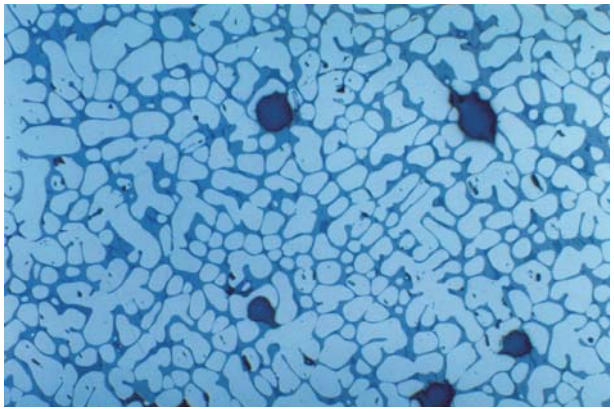
× 400

鉄滓顕微鏡組織 4-2（試料 No.4）

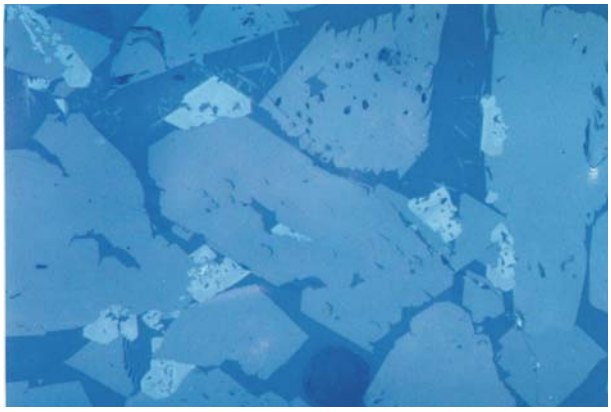


× 400

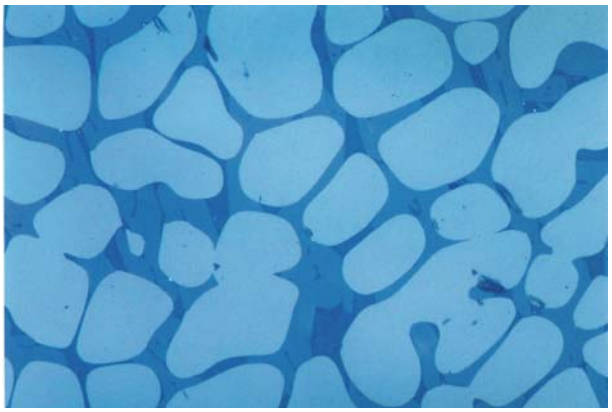
鉄滓顕微鏡組織 5-2（試料 No.5）



× 100

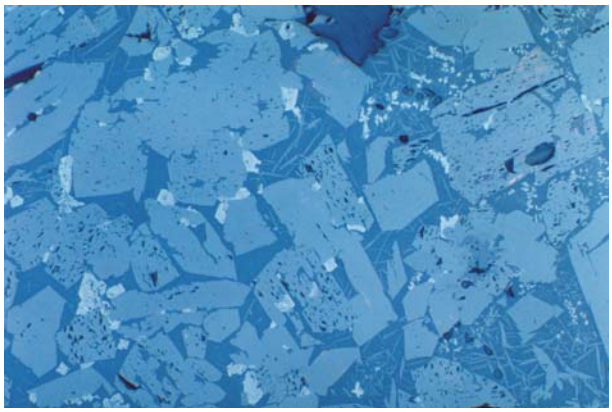


× 100



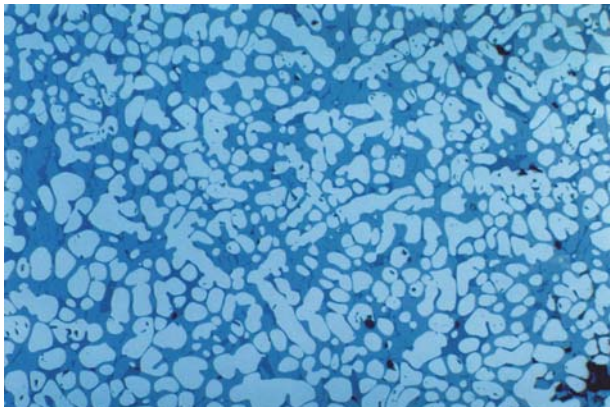
× 400

鉄滓顕微鏡組織 6-1（試料 No.6）

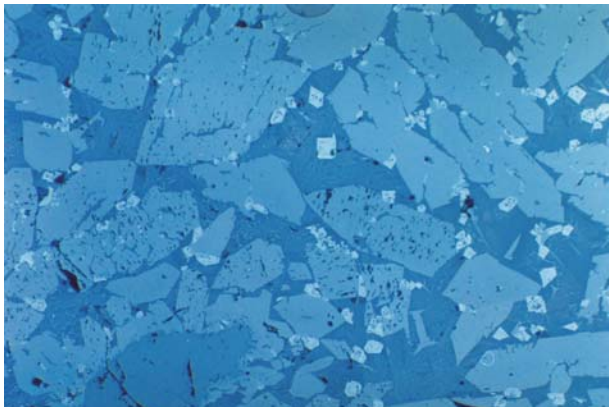


× 400

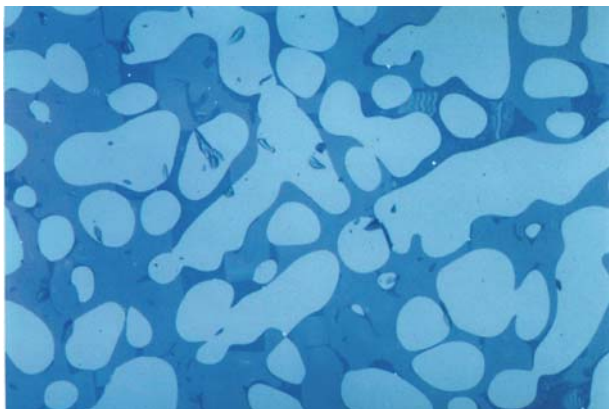
鉄滓顕微鏡組織 7-1（試料 No.7）



× 100

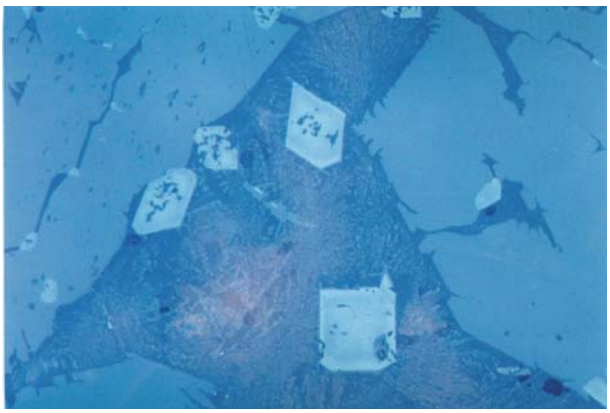


× 100



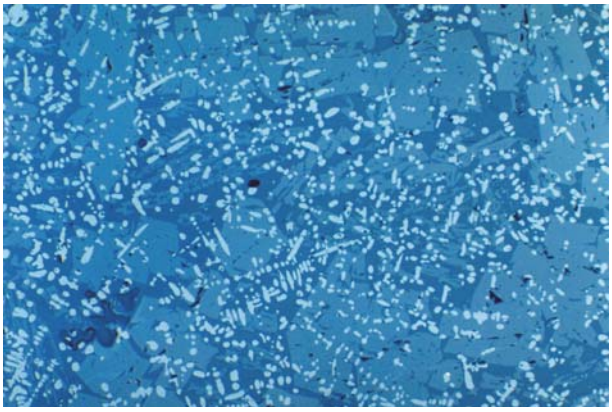
× 400

鉄滓顕微鏡組織 6-2（試料 No.6）

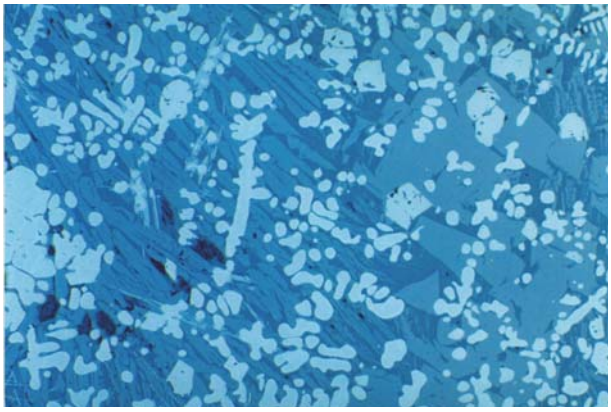


× 400

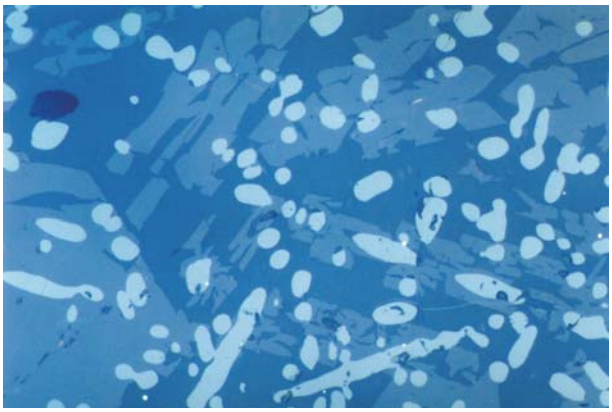
鉄滓顕微鏡組織 7-2（試料 No.7）



× 100

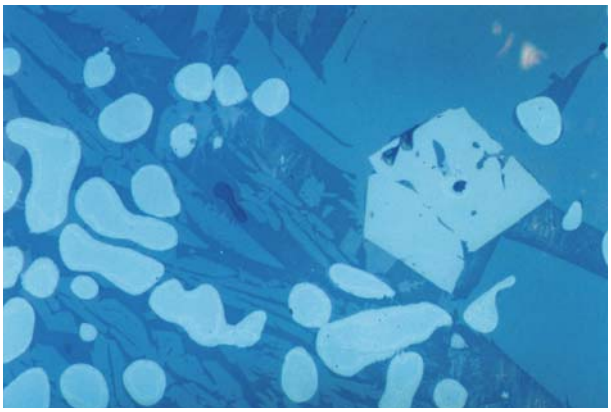


× 100



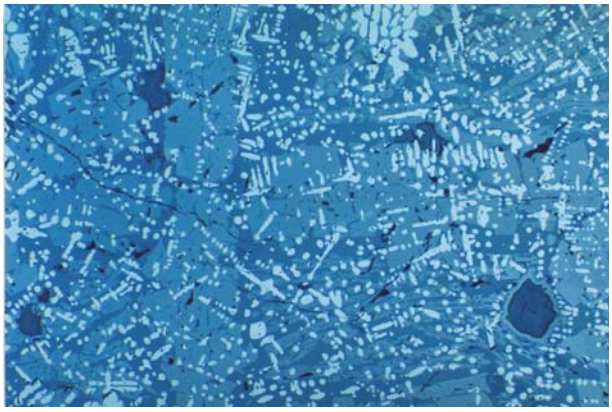
× 400

鉄滓顕微鏡組織 8-1（試料 No.8）

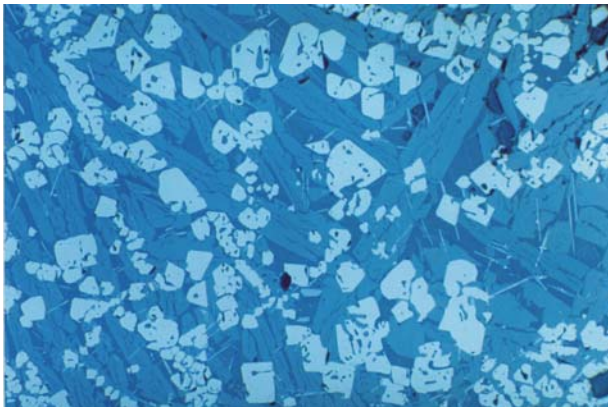


× 400

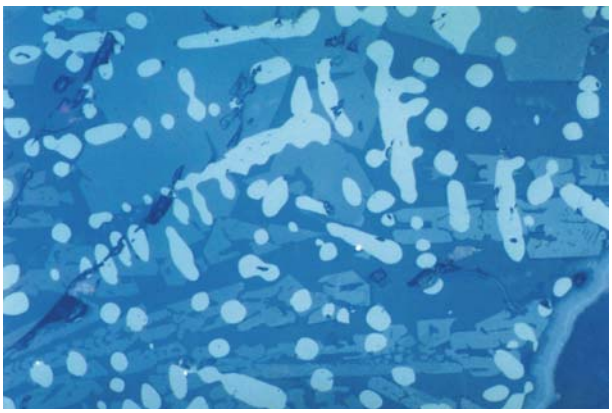
鉄滓顕微鏡組織 9-1（試料 No.9）



× 100

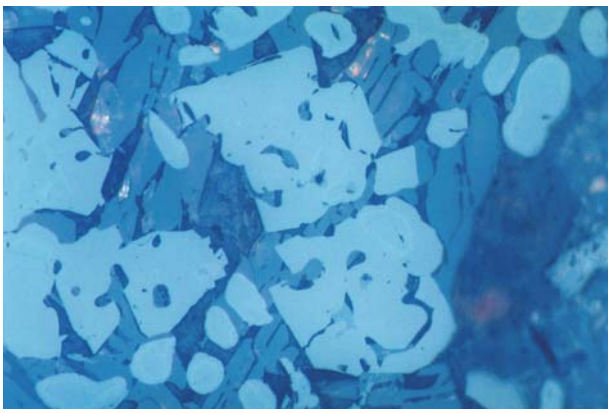


× 100



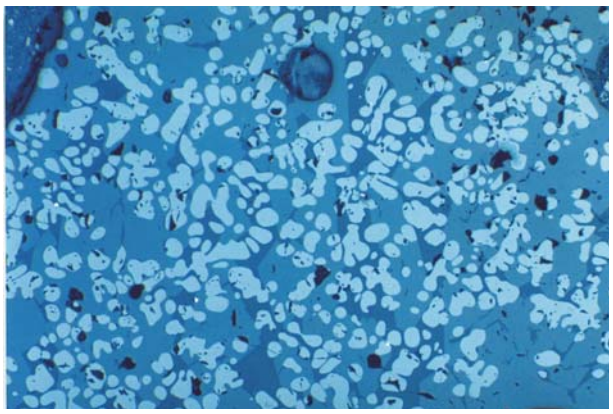
× 400

鉄滓顕微鏡組織 8-2（試料 No.8）

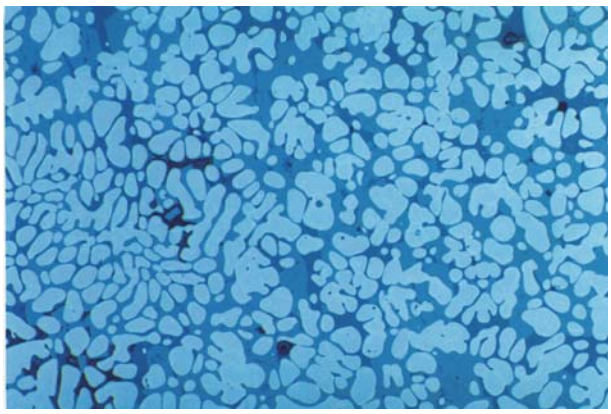


× 400

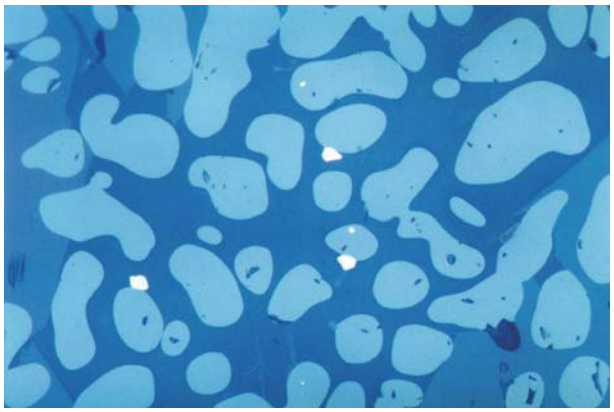
鉄滓顕微鏡組織 9-2（試料 No.9）



× 100

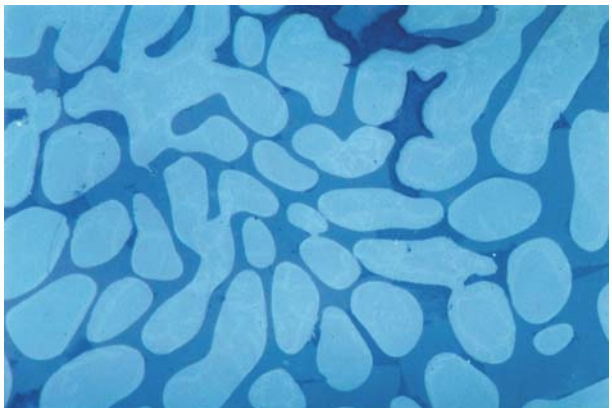


× 100



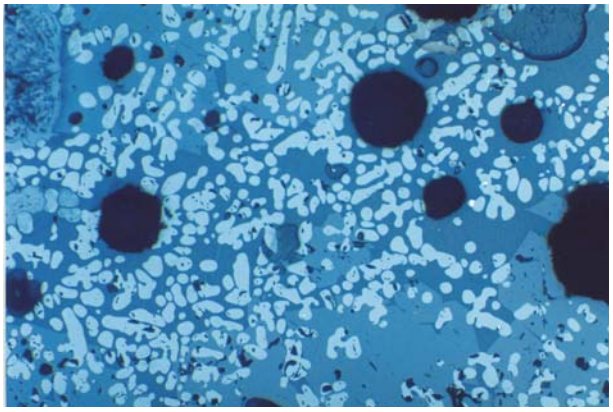
× 400

鉄滓顕微鏡組織 10-1（試料 No.10）

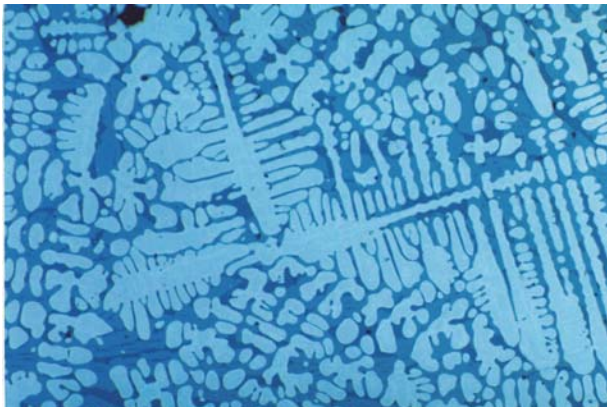


× 400

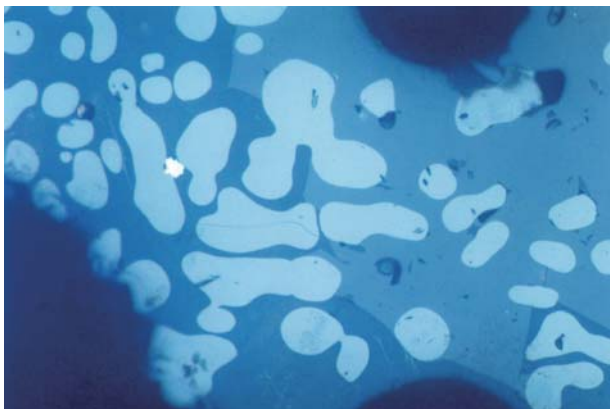
鉄滓顕微鏡組織 11-1（試料 No.11）



× 100

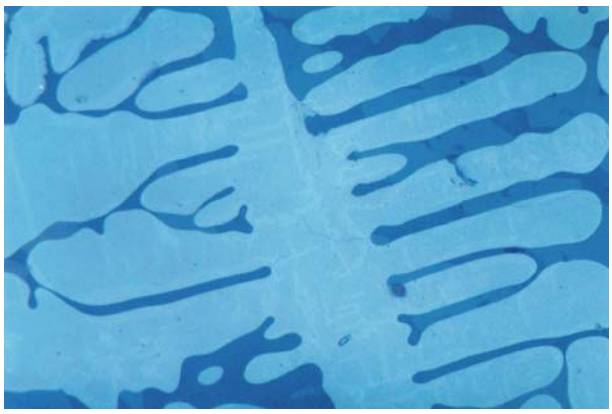


× 100



× 400

鉄滓顕微鏡組織 10-2（試料 No.10）



× 400

鉄滓顕微鏡組織 11-2（試料 No.11）

第Ⅵ章　総括

はじめに～「山崎砂丘遺跡」の提唱～

宮崎市の山崎町一帯の第２砂丘上では、これまで県道や民間開発での発掘調査が進められ（南正覚・丹2003、柳田2006、竹中2008）、そのいずれもで古墳時代後～終末期を中心とする遺構が確認されている。山崎地区に展開するこれらの遺跡は、ほぼ同一の時期に数十～数百ｍの間隔でいくつかのまとまりを中心に形成されていることがわかっている。県道宮崎島之内線改良事業関連の最後になるであろう今回の調査では、竈形土器、韓式系土器、特殊扁壺、凹字形鉄製品など希有な遺物が出土しているが、これらの出土遺物の検討に加え一連の事業の総括として、これまで調査された山崎上ノ原第２遺跡、山崎下ノ原第１遺跡を含め「山崎砂丘遺跡」(1) としてその総合的評価も記しておきたい。

【註】

（１）限られた範囲内の同一時期の遺跡として、細分した名称で呼称することが総合的検討の妨げになると考えこの名称を提唱する。

【引用・参考文献】

竹中克繁2008『山崎上ノ原第２遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書第69集
南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集
柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第130集

第１節　竈形土器について

はじめに

竈形土器 (1) が最初に学界に報告されたのは、大正７（1918）年に高橋健自が紹介したのが最初であろう。その後、稲田孝司（1978）や水野正好（1982）らによって体系だった考察がされた。現在、各地での報告例も増え研究も進展している（神谷佳明1988、近澤豊昭1992、杉井健1999b、田中昌樹2003など）が、宮崎・鹿児島などの南九州では近年まで古墳時代にさかのぼりうる竈形土器は知られていなかった。山崎砂丘遺跡では過去の調査（柳田2006）で県内で初の竈形土器の出土をみたが、今回の調査では全体の形状がある程度推定できるもので３点、焚口や庇などの一部分のみのものを含めると70点を超える。南九州において、これほどまとまった量が出土したのも、また、古墳時代にさかのぼりうるものも当遺跡以外では例がない。ここでは、これら資料を若干検討したい。

１　製作手順

山崎砂丘遺跡群出土の竈形土器は、やや製作技法が特殊のようである。土器断面の観察では、粘土紐のつなぎ目が例外なく外傾している。これは、製作時に掛口部を下に裾部を上にして粘土紐を積み上げた結果と考えられる。前回報告では、「まず通常どおり甕を形作った後、工具で成形している」（柳田2006　11頁）ととらえているが、今回、ほぼ完形のものが出土したことにより、甕形土器の変形などではなく、明らかに竈形土器を志向して作成されていることが明らかとなった。製作工程としては以下のような手順を踏むものと考えられる。

①掛口を下、裾部を上として（倒立して）粘土紐を積み上げる（筒抜け式の甑のような形状を作る）。
②ナデ調整を施した後ヘラ状の工具により焚口、煙孔を開口させる。

③自重で潰れるのを防ぐため、やや乾燥させた後上下を逆転させる。
④掛口部周囲に円盤状の庇を取り付ける。焚口部の左右に庇をつける場合もある。半乾燥状態の後に取り付けるため、総じて庇との接合が甘い。
⑤乾燥させた後、焼成。

現状で、管見にかかった限りでは、このような製作方法をとるものは他遺跡では確認できていない。集落構成員の性格を考える上で重要な手掛かりになる可能性もあり、今後、韓半島での事例も含め類似する製作技法の確認が必要となろう。

2　山崎砂丘遺跡出土竈形土器の分類

1）庇の位置・形状

山崎砂丘遺跡出土の竈形土器は、基本的には焚口上部に庇を設けない。掛口周辺に円環状、舳先状の庇を設けるのが通例である。また、焚口左右に庇を設ける例がある。

a類：焚口部に円環状の庇が着くタイプ。掛口部に大きく水平に開く庇が付くため見かけ上は大型の甕形土器の下半を切断したかのような形状をなす。焚口部の左右にも庇が付く場合がある。

b類：焚口部に船の舳先のような形状の庇が着くタイプ。焚口部方向にのみ張り出す庇である。

山崎砂丘遺跡では円環状のタイプが主に出土する

2）焚口の形状

焚口の整形方法から、２類に分類する。

a類：焚口をヘラ状工具により、開口させたあとナデなどの調整を施すだけのもの

b類：焚口周辺を粘土で補強し肥厚させているもの。

3）基部の形状

端部の整形状態から２類に分類する。

a類：端部に向かって器壁が薄くなるもの

b類：端部が肥厚し重厚な基部を形作るもの

4）分類

上記の各属性の分類から、理論的には８（２の三乗）類に分類可能である。実際に出土した遺物を観察すると、a-a-a、a-a-b、a-b-a、b-a-b の４類に分類できる。

3　まとめ

山崎砂丘遺跡出土の竈形土器について、若干の分類を行った。類例の少ない同一時期の遺物についての分類であるが、今後の研究について、基礎作業の一つとなれば幸いである。

【註】（1）名称については高橋健自（1918）に倣う。

【引用・参考文献】

報告書等

㈶大阪文化財センター　日本民家集落博物館2004「企画展示　シリーズここまでわかった考古学　竈形土器が語るもの」『カルチュアはっとり』№３　㈶大阪文化財センター　日本民家集落博物館

吹田市立博物館2005「五反島遺跡出土の竈形土器」『吹田市文化財ニュース』№26 吹田市立博物館

竹中克繁2008『山崎上ノ原第２遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書 第69集

南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第79集

柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第130集

論文等

合田幸美2005「竈形土器とくらし」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館　大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2003年度共同研究成果報告書』財団法人　大阪文化財センター

稲田孝司1978「忌の竈と王権」『考古学研究』25-1 考古学研究会

神谷佳明1988「東国出土の竈形土器についての検討」『群馬の考古学』創立十周年記念論集 ㈶群馬県埋蔵文化財調査事業団

栗林誠治2008「吉野川流域古墳時代集落における竈祭祀について」『暮らしのなかの祈り』徳島地理学会・徳島地域文化研究会・考古フォーラム蔵本・徳島地方史研究会第３回合同研究会

杉井健1998「古代における竈の変質」『古代中世の社会と国家』大阪大学文学部日本史研究室創立五〇周年記念論文集 上巻 清文堂出版

杉井健1999a「熊本県における甑形土器と竈の普及－熊本県出土甑形土器・造り付け竈・移動式竈の集成－」『文学部論叢』第65号　熊本大学文学会

杉井健1999b「炊飯様式からみた東西日本の地域性」『日本人の起源と地域性』古代史の論点６　小学館

杉井健1999bc「甑形土器の地域性」『国家形成期の考古学』－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－　大阪大学考古学研究室

杉井健2003『朝鮮半島系渡来文化の伝播・普及と首長系譜変動の比較研究』平成12年度～平成14年度科学研究補助金（基盤研究 C2）研究成果報告書

高橋健自1918「釜及び竈形土器」『考古学雑誌』第９号第３巻 日本考古学会

田中昌樹2003「北陸地域の「竈形土製品」について」『富山考古学研究』紀要第６号 財団法人富山県文化振興財団・埋蔵文化財　調査事務所

近澤豊昭1992「竈形土製品について」『長岡京古文化論叢』Ⅱ 中山修一先生喜寿記念事業会

堀真人2009「渡来人の墓－志賀古墳群と一須賀古墳群－」『紀要』第22号 財団法人　滋賀県文化財保護協会

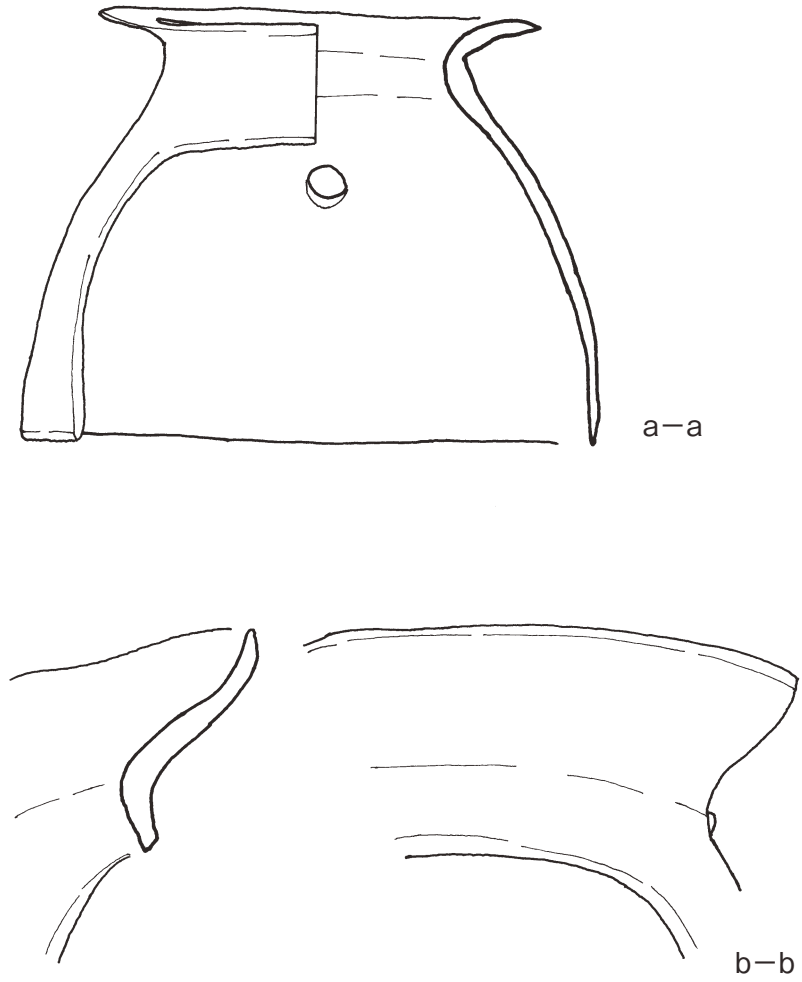
松浦俊和1984「ミニチュア炊飯具形土器論」『史想』第20号 紫郊史学会

美浦雄二2007「移動式竈について」『中原遺跡Ⅰ』佐賀県文化財調査報告書第168集 佐賀県教育委員会

水野正好1969「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」『滋賀県文化財調査報告書』第４冊

水野正好1982「竈形－日本古代竈神の周辺」『古代研究』第24巻 元興寺仏教民俗資料研究所

湯原勝美1995「集落内出土の竈形土器－東北南部から房総地方の出土例を中心として－」『研究紀要』創刊号山武考古学研究所



第151図　竈形土器の分類

第２節　特殊扁壺について

はじめに

特殊扁壺は、東海・近畿を中心に分布する異形の須恵器である。体部の前後に小孔が穿ってあるものと柄がつくものがあり、前者が東に、後者が西にその分布が偏ることが知られている（山田邦和1998, 鈴木一有1998）。

特殊扁壺は、早くは戦前の論文に紹介されており[(1)]、その後も「異形土器」（田辺昭三1989）などの名で紹介されているが、大半が装飾付須恵器や動物形須恵器などのいわゆる特殊須恵器の一部として紹介されているものである。特殊扁壺を個別に扱ったもので最初に大系立った検討を行ったのは山田邦和（山田1992・1998）であろう。山田は、特殊扁壺を集成し無柄のⅠ類と有柄のⅡ類に分類、その時期やⅠ・Ⅱ類の両者が明確に分布を異にするにすることを示した。また形状から使用法や祖型を検討し明言は避けるものの半島や大陸に原型を求めている。その後、鈴木一有は自らが発掘調査を担当した宇藤坂古墳群の発掘調査で出土した特殊扁壺に関して、その報告書の中で検討をしている。宇藤坂Ａ５号墳で出土した特殊扁壺は山田の分類でⅠ類に分類されるもので、鈴木はこれを「無柄形式」とし、山田のⅡ類を「有柄形式」として分類、「無柄形式」に関して集成と紋様構成に主眼を置き形式学的な検討を加え編年を行った（鈴木1998）。その結果、特殊扁壺がTK43型式併行期からTK209型式併行期までの極めて限定された期間しか作成されなかったことを明示し、さらに出土遺跡のほとんどが古墳の副葬品であることや群集墳中で優位な存在からの出土が多いことから、「特殊扁壷を出土する墳墓の被葬者達は葬送儀礼の用具を共有することで、なんらかの紐帯を表現していた可能性があるだろう。」と結論づけている[(2)]。その後、いくつか出土例が増えたが大きな研究の進展を促すようなものではなかった。

今回、山崎砂丘遺跡群で出土した特殊扁壺は、従来、近畿より東を中心に分布するとされていた鈴木のいう無柄形式、山田のⅠ類にあたる。また、集落遺跡内の包含層から出土しており、墳墓の副葬品ではない。これらの状況が、これまで特殊扁壺に関し認識されていた事象に再考を促すことになるだろう。

以下、山田（1998）、鈴木（1998）の検討を参考[(3)]にし、本遺跡で特殊扁壺が出土した意義を考えてみたい。

１　特殊扁壺の分布

特殊扁壺の分布は、山田や鈴木が検討したときと大きな変更はない。今回の出土がなければ、近畿を中心とし、東にⅠ類（無柄形式）、西にⅡ類（有柄形式）が偏って分布する状況に変化はなかっただろう。1998年山田と鈴木が集成（山田1998・鈴木1998）した段階で無柄式12例、有柄式９例が報告されているが、10年以上たった2012年現在、管見に係った限りであるが、Ⅰ類で６例（今回報告分も含む。）、Ⅱ類で２例が増えたに過ぎない[(4)]。６例増えたⅠ類出土例のうち５例が墳墓以外でそのうち４例が包含層からの出土である。Ⅰ類の包含層出土例は、長野県恒川遺跡、三重県山奥遺跡、岡山県百間川原尾島遺跡、そして山崎砂丘遺跡である。古墳副葬品を含めると、明らかに近畿東海を中心にして分布しているⅠ類特殊扁壺が、包含層出土例に限った場合、全く偏りをみせないことは示唆的である。

なお、窯跡出土品としては、Ⅰ類に静岡県衣原１号窯、Ⅱ類に岡山県寒田窯跡群４号の２例がある。

特殊扁壺出土地名表（網掛けは墳墓以外からの出土）

無柄形式（Ⅰ類）

No.	所在地		遺跡名	直径 (cm)	高さ (cm)	幅 (cm)	模様帯												波帯	点帯	表の位置	文献
										孔)－	表面	－	裏面	－(孔							
1	群馬県	富岡市	富岡72号墳	18.3	15.8	12.1					同心円文	－	無文						0	0	不明	月刊文化財発掘出土情報vol.6(1998)・富岡市教育委員会1998
2	長野県	飯田市	恒川遺跡	13.4	13.1	7.0				点	点	－	点	点					0	4	不明	柴垣勇夫1987
3	岐阜県	池田町	願成寺２号		11.0			点	点	点	点	－	不明						0	4+	不明	池田町1999・柴垣1987
4	静岡県	藤枝市	衣原1号窯									無文							0	0	不明	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所2010
5	静岡県	浜松市	宇藤坂A5号墳	14.6	11.7	9.1			波	波	点	－	波	点	波				4	3	腹面	(財)浜松市文化協会1998
6	静岡県	掛川市	茶屋辻A4号横穴	14.7	12.3	10.3		波	波	波	点	－	点	点	点	点	点		3	6	背面	掛川市2002
7	愛知県	田原市	向山６号墳	13.2	11.7	9.4		波	波	波	点	－	波	点	点				4	3	背面	(財)浜松市文化協会1998
8	三重県	四日市市	山奥遺跡									－										四日市市2004
9	三重県	玉城町	大仏山古墳群	15.1	13.2	11.6	点	点	点	点	点	－	点	点	点				0	9	背面	田辺昭三1981
10	三重県	松阪市	平林７号墳	15.6	12.8	11.6					カキメ	－	ケズリ						0	0	背面	三重県教育委員会1990
11	滋賀県	大津市	穴太飼込古墳群	15.0	14.4	8.5				点	点	－	点	点					0	4	背面	田辺1981
12	京都府	京丹後市	高山12号墳	14.9	13.8	8.4			点	点	点	－	カキメ						0	3	背面？	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988
13	京都府	京丹後市	今井古墳	14.6	14.5	6.6						－										(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004
14	京都府	宇治市	隼上り１号墳	14.0	12.9	8.7					竹管文	－	放射線文						0	1	不明	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1987
15	大阪府	堺市	塚原4号墳	4.8	4.5	3.7						無文							0	0	不明	大阪府教育委員会1990
16	岡山県	岡山市	百間川原尾島遺跡									－	カキメ								不明	岡山県1994
17	宮崎県	宮崎市	山崎上ノ原第１遺跡				点	点				－	不明							2+	背面？	本報告書

有柄形式（Ⅱ類）

No.	所在地		遺跡名
18	滋賀県	高島市	勝野
19	京都府	京都市	醍醐１号墳
20	兵庫県	篠山市	箱塚４号墳
21	兵庫県	三田市	道東古墳
22	兵庫県	三田市	中西山３号墳
23	兵庫県	加東市	上三草７号墳
24	香川県	多度津町	向井原古墳
25	徳島県	東みよし町	塚穴古墳
26	愛媛県	砥部町	土壇原６号墳

第152図　特殊扁壺の分布図及び地名表（鈴木1998をもとに作成）

2　時　期

鈴木の模様帯の構成によるⅠ類特殊扁壺のⅠ～Ⅲ群の分類・編年（鈴木1998）では、本遺跡出土のものは第Ⅱ群に含まれると考えられ、TK209型式段階から大きく下らないとされる。山崎砂丘遺跡群の集

落形成がピークになる時期とちょうど重なり、矛盾はないだろう。ただし、山崎砂丘遺跡群出土例は孔の外縁に二重の圏線があり、そのすぐ外側から模様帯が構成される。他の特殊扁壺は、Ⅰ～Ⅲ群にかかわらず、孔の周辺には圏線も模様帯も施されていないなど模様帯の構成に相違があり、単純に鈴木の編年に当てはめることができるかは検討の余地があろう。

3　製作場所

山崎砂丘遺跡から出土した特殊扁壺と同じⅠ類のものは、東海地域に著しく分布が偏っており、この中に生産地出土資料である静岡県藤枝市の衣原１号窯跡も含まれる。しかしながら、質感は穴太飼込例や平林７号例に比べ軟質[(5)]である。質感に限っていえば、大仏山出土例に近いようであるが、全体の作り自体は大仏山例に比べると、本遺跡出土のものがやや丁寧である[(6)]。また、先述したように集落遺跡出土例に限ると分布の偏りが全くみえなくなる。日向では古墳時代の須恵器窯の調査例がなく、地元産の須恵器と比較することが難しいが、質感がなどの全体のつくりから、日向で作られたものであると捉えておきたい。

第153図　集落遺跡出土のⅠ類特殊扁壺分布図

4　特殊扁壺の用途について

特殊扁壺の用途について鈴木は、精緻な背紋や墳墓から限定的に出土することから、「葬送儀礼において限定的に使用されたもの」と判断し顕著な使用の痕跡が認められないことから「象徴的な意味合い

が強かった」と推測している。また、製作の技法に提瓶との共通性が強いことなどから、「本来的な用途は液体容器」であるとしている（鈴木1998）。山田は、平城京出土の柄杓や半島や大陸の事例から、孔に柄を差し込んだ柄杓のような使用を示唆している（山田1998）。なお、鈴木、山田ともに有機質製品の存在も想定している。

要約すると、

①液体容器である。

②祭祀用具である。

③柄杓様の形状を成す。

④有機質製品があった可能性が高い。

ということになろう。

これらに異見は特にもたないが、④に前述した集落遺跡出土品の分布状況を加味すると、以前鈴木が述べたような「葬送儀礼において限定的に使用」された品ではない可能性も指摘できよう。

ここでは、特殊扁壺を使用した祭祀は次のようなものだったと考えたい。

①柄杓様の容器により液体を使った（もしくは、その所作を模した）祭祀である(7)。

②集落遺跡出土のものがいずれも破片であることから、副葬時以外では破砕を伴う祭祀であった可能性がある。

③古墳への副葬に関しては、近畿から東海地方に著しい偏りをみせるが、祭祀行為自体は列島各地で行われた可能性があり、使用された器物も須恵質のものだけではなく有機質のものもあった可能性が高い。

5　まとめ

今回、山崎砂丘遺跡群内から特殊扁壺の破片が出土したことから、近畿から東海に著しく偏るこの遺物を使用した祭祀自体は列島の広範囲で行われていた可能性を呈示した。その傍証として、先学各位も想定していた有機物製品が存在した可能性のほか、集落遺跡での出土に限定した場合には出土地に偏りが全くなくなることを示した。とはいえ、現在も出土数自体、非常に少ない遺物であることに変わりはなく、今後ここで示した見解に大幅な修正が必要となる可能性は高いだろう。

【註】

(1) 山田1998に神林淳雄1942「子持脚付坩及異形須恵器と上代日鮮の交通」『古美術』第一二巻第四号が紹介されており、後に神林淳雄1959『土の文化』國學院大学考古資料館に所収されたとあるが時間的制約と筆者の怠慢から原典にあたることができなかった。

(2) ただし鈴木は出土数の少なさから、模様帯の相違が時期差でなく地域差を示す可能性や葬送儀礼の中で特殊扁壺がどのような役割を担ったか「明確な解答は用意できない」ことを認めており、今後の課題としている（鈴木1998）。

(3) 呼称に関しては、より簡易な表記である山田の表現に倣う。

(4) この他、個人蔵の遺物として兵庫県姫路市青山遺跡での出土が伝えられる（野末1995）が、姫路市埋蔵文化財センターに問い合わせたところ、遺物の形式や遺跡の性格など不明な点が多いためここでは扱っていない。福井優氏をはじめ姫路市埋蔵文化財センターの職員の方々には、お忙しいところ丁寧な御回答を頂いたことに謝意を表したい。

(5) 平林７号墳例は三重県埋蔵文化財センターにて実見させていただいた。便宜を図っていただいた同センターに謝意を表したい。また、穴太飼込例については写真から判断している。

(6) 伊勢神宮の徴古館所収の遺物を実見させていただいた。同館、および同館学芸員の本多久子氏に謝意を表したい。

(7) 柄杓と液体を使った祭祀として灌仏会の祭祀（いわゆる「花祭り」）などが思い浮かぶ。『日本書紀』推古天皇十四年（606年）の条に「四月八日七月十五日設齋」とあり、四月八日の「設齋」が灌仏会の祭祀といわれている。この形態が現在の「花祭り」と同様であったかは疑問

であり、なおかつ、特殊扁壺を使った祭祀に関連づけることも難しいが、ひとつの事例としてあげておきたい。

【引用・参考文献】

報告書等

大阪府教育委員会1990『陶邑Ⅶ』大阪府文化財調査報告書第三七輯

池田町教育委員会1999『岐阜県史跡　願成寺西墳之越古墳群資料調査報告書』

掛川市教育委員会2003『東名掛川Ⅰ・C 周辺土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ

加東郡教育委員会1993『埋蔵文化財調査年報（1990年度）』

京都府文化観光局・財団法人 京都市埋蔵文化財研究所1986『醍醐１号墳発掘調査概報』

建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会1994『百間川原尾島遺跡３　旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅸ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告88

財団法人 京都府埋蔵文化財センター 1987『京都府遺跡調査報告書』第７冊

財団法人 京都府埋蔵文化財センター 1988『京都府遺跡調査概報』第29冊

財団法人 京都府埋蔵文化財センター 2004『京都府遺跡調査概報』第110冊

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所『第二東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　藤枝市－1（第２分冊）』　静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告第214集

財団法人 浜松市文化協会1998『宇藤坂古墳群』

富岡市芝宮古墳群調査会・富岡市教育委員会1998『芝宮古墳群（富岡69号・71号・72号・99号墳）』ジェイマート店舗建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

四日市市教育委員会2004『山奥遺跡Ⅱ』四日市市埋蔵文化財発掘調査報告書32

論文等

鈴木一有1998「特殊扁壺について」『宇藤坂古墳群』㈶浜松市文化協会

田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店

田辺昭三1989『須恵』日本陶磁大系４　平凡社

野末浩之1995「装飾須恵器の特徴とその分布」『古代の造形美　装飾須恵器展』愛知県陶磁資料館

山田邦和1992「須恵器特殊扁壺に関する覚え書」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅤ

山田邦和1998『須恵器生産の研究』学生社

※参考文献、出土例の紹介等、熊本県教育委員会の木村龍生氏のお手を煩わせた。この場を借り謝意を表したい。

第３節　須恵器坏蓋口縁にみられる「刻目状圧痕」について

はじめに

須恵器の坏蓋の口縁部に、鋭利な道具で刻みを入れたようなあとが確認されることがある。当報告でも４点（1，28，56，415）の坏蓋に同様の痕跡が確認されており、過去の山崎砂丘遺跡群の調査でも４点が報告されている。小笠原啓二らはこれを「刻目状圧痕」と呼び、刻み目ではなく圧痕であるとして、これが生じた過程を考察している（小笠原・山内2005)。この痕跡に関する考察で広く一般に公開されている文献ではほぼ唯一のものであろう(1)。宮崎県内の調査においても、これまでこれらの痕跡に注目されたものはないが、山崎砂丘遺跡では比較的まとまった例が確認できたので、県内の他の事例も含みながらここで紹介する。

１　宮崎県での出土例

山崎砂丘遺跡では、今回の調査分も含め８点が出土している。県内ではこれ以外に、国富町木脇遺跡（宮崎県埋蔵文化財センター 2001）や西都市外原遺跡（西都市教育委員会2003）などに報告例がある（第11表)。報告者が意識しない場合、図化されていない場合も考えられるが、山崎砂丘遺跡での出土数は県内での出土例６遺跡16点(2) の５割に相当し、かなりの集中度であることがわかる（第11表)。

出土地域は、宮崎市、国富町、西都市、新富町などで大淀川下流域から一ツ瀬川下流域に集中するようである。

２　「圧痕」か

肉眼および光学顕微鏡による観察では、何らかの器物を押しつけた「圧痕」と断ずることは難しい。むしろ、各刻目内部に工具を引きずったような痕跡があることを考慮すると、ヘラ状の工具による刻目もしくは擦痕と捉える方が妥当であろう。もちろん小笠原らが検討の対象としているのは愛媛県内出土のものであり宮崎県内出土例とは違う可能性は否定できないが、同じ器種の同じ箇所にある痕跡が違う行程で生じたものと考えるのはやや無理があろう。ここでは、ヘラ状工具により刻目を施した痕跡と考えておきたい(3) が、この痕跡の名称については混乱を避けるため小笠原らによる「刻目状圧痕」を括弧付きで使用する。

３　時期

小笠原ら行った愛媛県内の集成によれば、「刻目状圧痕」が確認できる須恵器坏蓋は TK10から TK43型式に併行する時期をピークに、ほぼ６世紀全般に確認できるようである。宮崎県内の事例については、愛媛県内とは違い、TK209型式併行期にほぼ限定できそうである(4)。一時期に固まる要因としては

①この時期に「刻目状圧痕」が残るような工程を日向の須恵器生産で行うようになった

②この時期に「刻目状圧痕」をもつ須恵器の生産地との交流が盛んになった

などの要因が考えられる。

①については、同時期のものでも大多数のものに「刻目状圧痕」が確認できないことを鑑みると、難しい結論といえるだろう。②につては、愛媛県下では、この痕跡を持つ須恵器の生産はすでにピークを

過ぎている時期であり、交流が盛んになった地域を、資料的な面から推定する作業が必要となってくるだろう。あるいは、ここで示した２点以外の要因を考えるべきかもしれない。

４　まとめ

資料の制約が多く、結論的なものを導くことはできないが、少なくとも愛媛県の例に比べ、ピークが遅れることは示せただろう。このずれについての検討を行うには、今後全国的な集成が進まなければ難しいだろう。ここでは、問題提起にとどめておきたい。この報告が「刻目状圧痕」観察に関する注意喚起にとなれば幸いである。

【註】

(1) 小笠原らは､「筆者が知りうる唯一の考察」として、大谷晃二1999「須恵器の観察と編年の作成」『島根県埋蔵文化財センター　専門研修会・資料』をあげているが、資料の性格上、多くの人間の目に触れるものではないだろう。

(2) 管見に係った限りであり、遺漏がある可能性は高い。

(3) 限られた人間と時間の中での結果で、観察不足の感は否めない。今後、多くの資料を多くの人間が観察することによって検討の対象とすることは必須の作業だろう。

(4) 現状で確認できたもののうちでは、宮崎県内最古のものがTK10型式併行期、最新のものがTK217型式併行期であるが、大多数がTK209型式併行期に偏る。

【引用・参考文献】

報告書等

津曲大祐2003『外原遺跡群』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書 第34集

倉永秀季2001『木脇遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第43集

南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第79集

柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第130集

鳥枝誠・宇田川美和・河野賢太郎2001『間越遺跡』宮崎市文化財調査報告書第48集

有馬義人・樋渡将太郎2004『祇園原遺跡・春日遺跡』新富町文化財調査報告書　第39集

樋渡将太郎2009『隅ヶ迫横穴墓群・南原ベニガラ工房跡・祇園原地下式横穴5号・比良横穴墓群』新富町文化財調査報告書　第52集

論文等

小笠原啓二・山内英樹2005「須恵器に残る痕跡について - 坏蓋口縁端部の「刻目状圧痕」の観察－」『紀要愛媛』第５号 財団法人　愛媛県埋蔵文化財センター

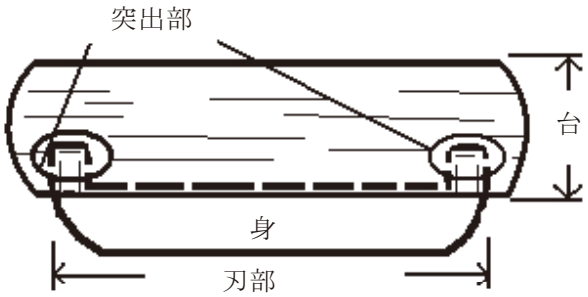
第10表　刻目状圧痕をもつ須恵器坏蓋出土宮崎県内遺跡地名表

出土遺跡	出土遺構	時期	文献	番号
木脇遺跡	包含層	TK10	宮崎県埋蔵文化財センター第43集	813・814
山崎砂丘遺跡群（山崎下ノ原第１遺跡）	SD1（土壙墓）	TK209	宮崎県埋蔵文化財センター第79集	28
山崎砂丘遺跡群（山崎上ノ原第２遺跡）	SA33（竪穴建物）	TK209	宮崎県埋蔵文化財センター第130集	225
山崎砂丘遺跡群（山崎上ノ原第２遺跡）	包含層	TK209	宮崎県埋蔵文化財センター第130集	192・194
外原遺跡	5号地下式横穴墓	TK209	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第34集	1
外原遺跡	6号地下式横穴墓	TK209	西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第35集	17
間越遺跡	SA2（竪穴建物）	TK209	宮崎市文化財調査報告書第48集	152
祇園原遺跡	新田原128号墳周溝	TK217 ？	新富町文化財調査報告書第39集	3・5
隅ヶ迫横穴墓群	隅ヶ迫1号墳	TK209 ？	新富町文化財調査報告書第52集	2
山崎砂丘遺跡群（山崎上ノ原第１遺跡）	１号竪穴建物	TK209	宮崎県埋蔵文化財センター第225集	1
山崎砂丘遺跡群（山崎上ノ原第１遺跡）	２号竪穴建物	TK209	宮崎県埋蔵文化財センター第225集	28
山崎砂丘遺跡群（山崎上ノ原第１遺跡）	４号竪穴建物	TK209	宮崎県埋蔵文化財センター第225集	56
山崎砂丘遺跡群（山崎上ノ原第１遺跡）	１区包含層	TK209 ？	宮崎県埋蔵文化財センター第225集	415

第４節　凹字形鉄器について

はじめに

凹字形鉄器は平面形が凹字形をし、凹字の底部にあたる位置に刃部を有する鉄製の利器である（第154図）。凹字の突出部にあたる位置（突出部）には木質が残る場合があり、木製の把（台）に装着され使用されたと考えられる。



第154図　凹字形鉄器の各部名称案

「凹字形鉄器」の語を最初に使用したのは、村上恭通（2001）である。村上は、三国時代の韓半島出土の事例を紹介し、日韓の民俗例を呈示しながら、麻刀、苧引き金として結論づけている。

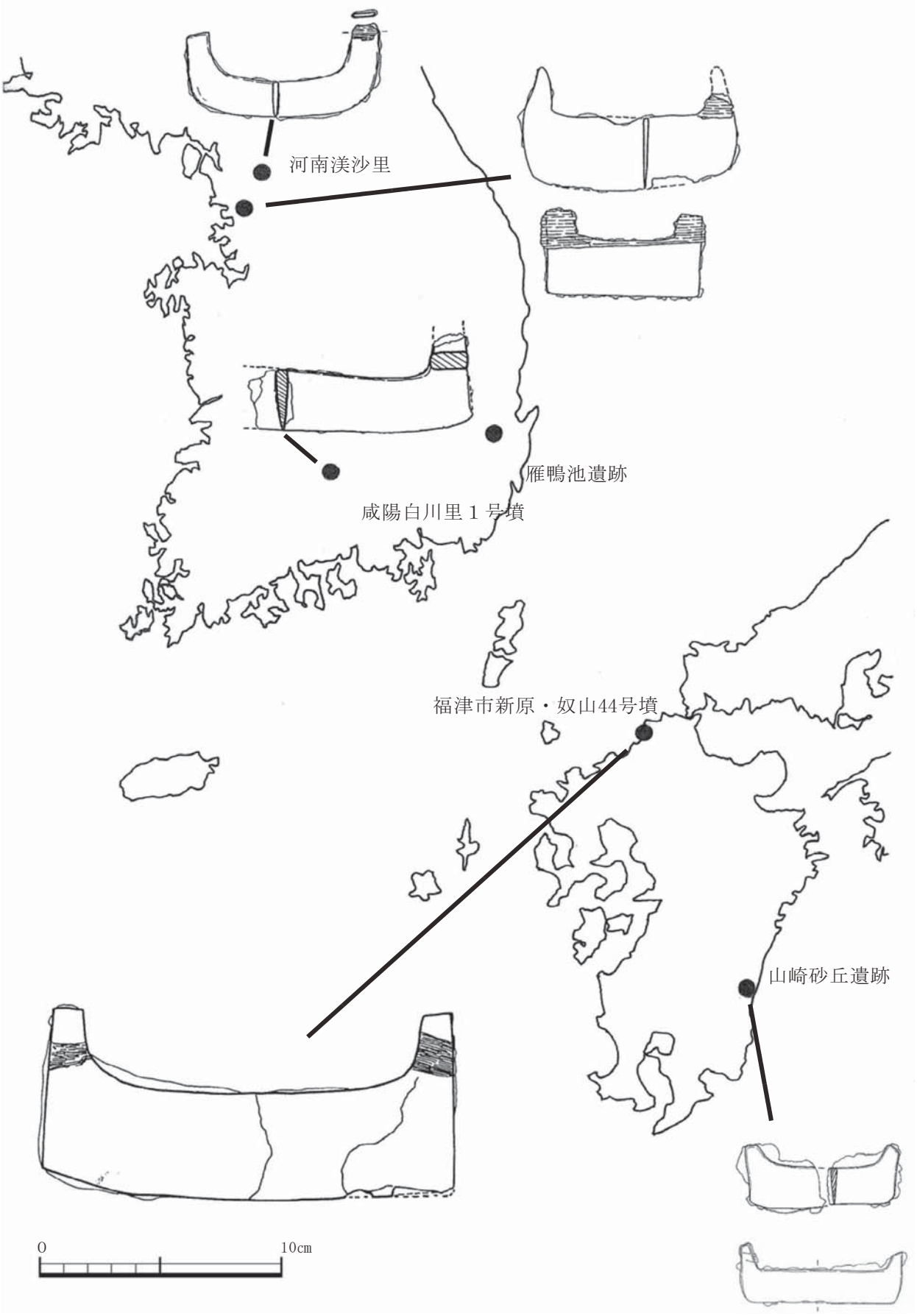
村上の論攷以前に池ノ上宏は福津市新原・奴山44号墳の調査において、副葬品として出土した凹字形鉄器（「不明刃物」と報告）を韓国の慶州（キョンジュ・경주）雁鴨池（アナプチ・안압지）遺跡や咸陽（ハミャン・함양）白川里（ペクチョンニ・백천리）１号墳出土例と類似するとして、「同形のものが日本には見あたらず、渡来系の遺物といえるのではないかと考えている。」（池ノ上2001 34頁）と報告している。2006年には宮崎県山崎上ノ原第２遺跡出土として３例が「鋤先」または「鍬先」として報告されている（柳田晴子2006）。

以上のように現状では、出土総数の少なさにも起因しまとまった論攷はほとんどないのが実情である。今回の報告にあたって過去の調査分も含め再整理を行ったが、13号竪穴建物出土のもののほか、2003年報告（南正覚ほか2003）から漏れていた資料が１点確認できた。都合、山崎砂丘遺跡では５点の出土ということになり、列島・韓半島含めて凹字形鉄器が最も集中する遺跡のひとつとなった。ここでは、古墳時代（韓半島での三国時代）の凹字形鉄器を「渡来系」遺物とらえうるかどうか、また、その使用法について若干の検討を加える。

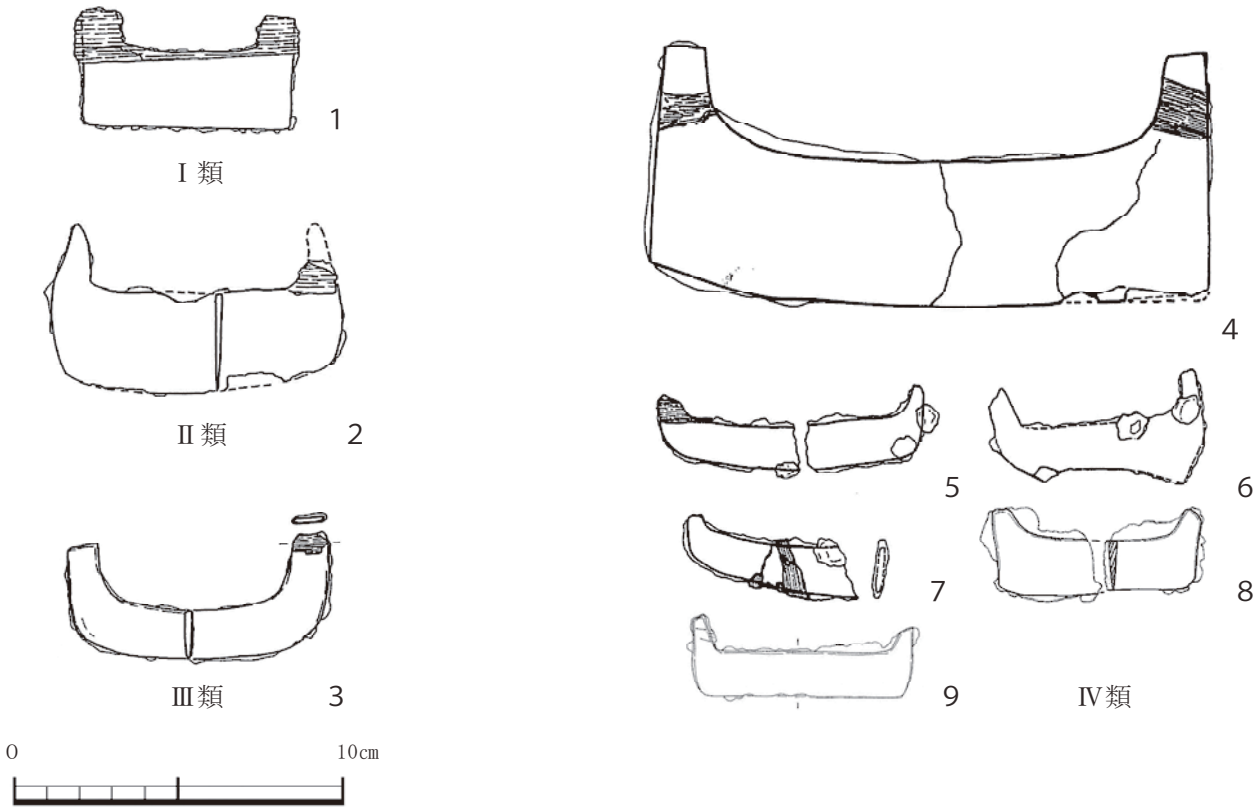
１　分布

古墳時代と同時代まで遡りうる凹字形鉄器は、管見に触れた範囲ではあるが、韓半島で４遺跡９点、列島内で２遺跡６点の出土がみられる。内訳は韓半島で雁鴨池遺跡１点、白川里１号墳１点、清州（チョンジュ・청주）新鳳洞（シンポンドン・신봉동）古墳群５点、および河南（ハナム・하남）渓沙里（ミサリ・미사리）遺跡が２点である。列島では福津市新原・奴山44号墳１点、山崎砂丘遺跡で５点である（第216図）。１遺跡内での出土数としては、山崎砂丘遺跡は新鳳洞古墳群と並んで最多の５点を数える。また、出土遺跡は列島では九州島に限られている（ようにみえる）のに対し半島では新羅、伽耶、百済三国の範囲にまたがっており分布の偏りがない（ようにみえる）。

出土遺跡、出土数以外が現状で半島と列島を合わせてもわずか６遺跡15点の出土であり、現状での分布状況が有意な状態であるか判断することは難しいが、韓半島の方がより広汎に分布しているといえそうである。



第155図　凹字形鉄器出土分布図



1．新鳳洞Ｂ地区 13 号墓　2．新鳳洞Ａ地区 36 号墳　3．渼沙里Ｂ 18 号貯蔵穴　4．新原・奴山 44 号墳　5・6．山崎砂丘遺跡（山崎上ノ原第２遺跡 13 号竪穴）　7．山崎砂丘遺跡（山崎上ノ原第２遺跡 14 号竪穴）　8．山崎砂丘遺跡（山崎上ノ原第２遺跡Ａ区）　9．山崎砂丘遺跡（山崎上ノ原第 1 遺跡 13 号竪穴）

第156図　凹字形鉄器の分類

2　形状

形状の分類は、すでに村上が行っている。村上は、新鳳洞古墳群と渼沙里古墳群の例を挙げ、「総数 10 例に満たない資料で分類案を提示するのはやや時期尚早の感もある」としながらも「身が長方形を呈し、突出部も方形を呈するタイプ」「身がやや弧状を呈し、突出部の先端が尖るタイプ」「刃わたりに比して身幅が狭いタイプ」の３タイプに分類している（村上 2001）。これをそれぞれⅠからⅢ類とした場合、現状で九州島出土のものは身の形状はⅢ類に似た形態をとっているが突出部がやや貧弱である。村上の分類では、身の形状でⅢ類を抽出しているのでこちらに当てはまることになるが、平面形からはかなり違った印象を受ける。九州島出土のものが全て突出が弱いタイプであることも興味深い[(1)]。

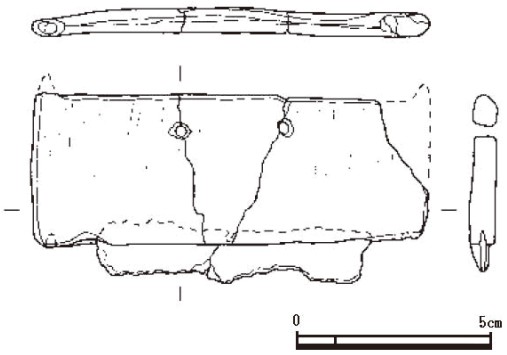
村上の報告時より出土例が増えたとはいえ、わずか 15 点で分類を行うのは当時と同じく「時期尚早」であろう[(2)]が、村上が分類した３つのタイプに加え、「Ⅲ類と同様の身幅で突出が弱いタイプ」を新たにⅣ類として分類できそうである。さらに、新原・奴山のような大型のもの、白川里のようなやや大きめなものなどがあることから、大きさによっても分類ができる可能性がある。ここでは、大型、中型、小型と仮称するが、大型、中型は各１点ずつの出土であり、大きさについての検討はここでは行わない。形状については、村上の分類を踏襲し九州島出土例を加えⅠからⅣの４類に分類することとしたい。

3　凹字形鉄器の故地

現状では、凹字形鉄器は韓半島のほうがより広汎な地域に分布する。しかしながら、日韓合わせてわずか６遺跡からの出土で、その形状が四つの類型に分類できるなど、１遺跡１類型に近い状態を示す。大きさの異なるものもあり、出土例の増加に伴い、これら全てを「凹字形鉄器」として一括りにすべきかどうかの検討も必要となってくるだろう。現状では、凹字形鉄器の分布の広がりとバリエーションの多さ、半島出土例が先行することなどから、韓半島で考案された形状を模倣し作成したものと考えておきたい。

4　凹字形鉄器の使用法

村上（2001）は韓半島の民俗例から、凹字形鉄器が「苧引金」（サンカル）である可能性を指摘している。また、桐原健（1988）は燧金と混同しやすいものとして「麻皮剝器」という名で古代の同形の遺物を紹介している。池ノ上（2001）は、雁鴨池、白川里例が「鉋形鉄器」、新鳳洞出土例が「麻刀（サンカル）」とされていることを紹介している。前述したが、山崎砂丘遺跡例については、柳田（2006）が「鋤先」「鍬先」としている。まとまった論攷としては村上（2001）のもの以外みあたらず、かつ、これに異論を呈示することは難しいが、金属の刃部と木製の台からなる鉄器としては鳥取市本高弓ノ木遺跡出土のような鉄製穂摘み具（第156図）の可能性も指摘できよう[(3)]。また、これらの用途に兼用のものであった可能性も考えた方がよかろう。



第157図　鳥取市本高弓ノ木遺跡出土の鉄製穂摘み具

まとめ

山崎砂丘遺跡では、凹字形鉄器が５点とかなり集中した出土状況をみせる。古墳時代にまで遡りうる同様の遺物は列島内ではほとんど見あたらないため、渡来系の遺物である可能性を考えたが、出土数の少なさから確証を得るには至らなかった。渡来系遺物だとした場合でも、時期、形状とも半島出土のものとの違いが見て取れ、半島で使用されていたものがそのまま導入されたわけではなさそうである。使用法については、村上（2001）の論攷によるところが大きいが、形状からは鉄製穂摘み具である可能性も考えるべきだろう。いずれにしろ出土点数が限られており、充分な裏付けがとれる状態ではないというのが現状である。今後の報告例の増加に伴う研究の進展に期待したい。

【註】

(1) 刃渡りで他のものの２倍から３倍ある新原・奴山出土例は使用法が同じとは考えにくいが、形状的には山崎砂丘遺跡出土のものによく似ている。

(2) 本稿には反映されていないが愛媛大学の村上恭通先生から、現在、韓国では凹字形鉄器の出土例がかなり増えている旨御教示を受けた。

(3) 本高弓ノ木遺跡出土の鉄製穂摘み具については、山崎砂丘遺跡出土の凹字形鉄器とは身の形状のみならず時期も違い、同じ用途に使われたものとするのには慎重にならるを得ないが、予想される木製の台に装着した形状には大きな差がないと推定できる。

【引用・参考文献】

報告書等

池ノ上宏2001『新原・奴山古墳群Ⅱ』津屋崎町文化財調査報告書 第17集

北浩明・岩垣命2011『本高弓ノ木遺跡（1区～ 3区）』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書38

鄭澄元・申敬澈・安在皓・全玉年・金斗喆・禹順姬・河仁秀1986『咸陽白川里１號墳』釜山大學校博物館遺蹟調査報告 第10輯

竹中克繁2008『山崎上ノ原第2遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書 第69集

南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第2遺跡・山崎下ノ原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第79集

柳田晴子2006『山崎上ノ原第2遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第130集

論文等

桐原健1988「奈良・平安時代の道具」『長野県史』考古資料編全一巻（四）遺構・遺物

早野浩二2005「臨海の古墳時代集落 - 松崎遺跡の歴史的素描 -」『研究紀要』第6号（財）愛知県埋蔵文化財センター

宮原俊一2007『編みと織りの考古学』第15回 足もとに眠る歴史展

村上恭通2001「朝鮮半島における凹字形鉄器 - おひきがね（苧引金）との関連で -」『久保和士君追悼考古論文集』

第５節　鍛冶関連遺物について

今回の整理に当たって、既報告から遺漏していた鍛冶関連遺物について、図面の掲載を試みたが、その数量が多大で、十分な検討を行う時間をとれなかった。

金属分析からは、山崎砂丘遺跡では砂鉄起源で一連の鍛冶作業を行っていたことがしれるが、これらの鍛冶関連遺物が、どの時期に属するものかはっきりとしない。とはいえ、遺物の大半が古墳時代終末期を中心に分布するので、この時期のものとして積極的に評価してしかるべきであろう。

今回、鍛冶関連の検討については、はなはだ不十分であり、今後、今回提示できたデータにとどまらず総合的な検討を行う必要があることはいうまでもない。今後、報告者の責任として稿を改めて検討を行うこととしたい。

第６節　古墳時代の山崎砂丘遺跡の評価

はじめに

宮崎市の山崎町一帯の第２砂丘上では、これまで県道や民間開発での発掘調査が進められ（南正覚・丹2003、柳田2006、竹中2008）、そのいずれもで古墳時代後～終末期を中心とする遺構が確認されている。山崎地区に展開するこれらの遺跡は、ほぼ同一の時期に限られた範囲内で数十～数百ｍの間隔のあるいくつかのまとまりを中心に形成されていることがわかっている（第158図）。県道宮崎島之内線改良事業関連の最後になるであろう今回の調査では、竈形土器、韓式系土器、特殊扁壺、凹字形鉄製品など希有な遺物が出土している。これらの遺物の出土をどのように解釈すべきかについての検討は前述したが、一連の事業の総括として同一事業でこれまで調査された山崎上ノ原第２遺跡、山崎下ノ原第１遺跡を含め「山崎砂丘遺跡」(1) としてその評価を記しておきたい。

なお、群内のそれぞれの遺跡ついてはひとつの遺跡内における「地区」ととらえ、以下、北から「第１集落（本報告分）」「第２集落（柳田2006）」「第１墓域（南正覚ほか2003）」「第２墓域（南正覚ほか2003）」と呼称する。

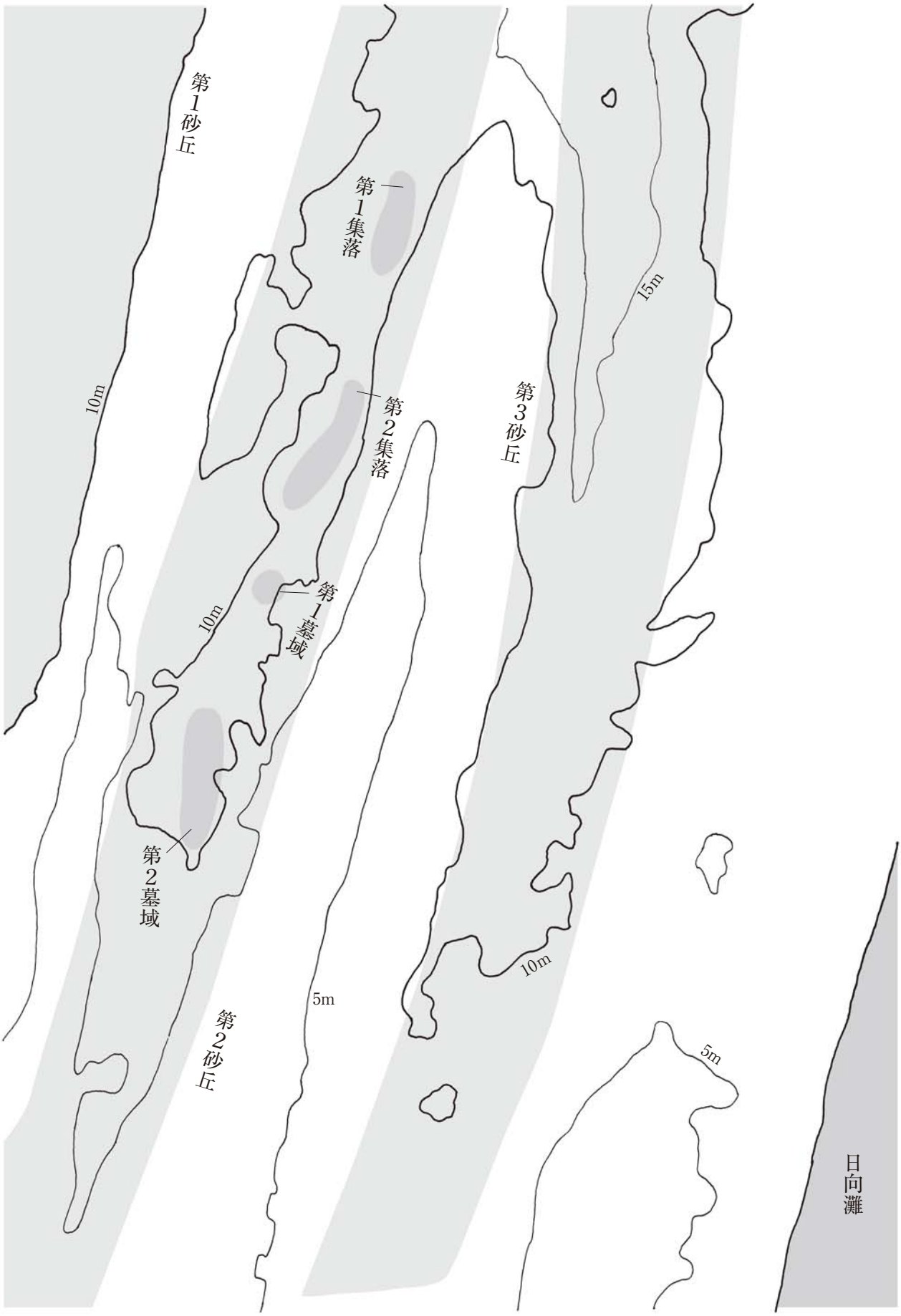
１　各遺跡の内容

（１）第１集落

第１集落では竪穴建物跡14軒、溝状遺構、土坑などが確認できている。TK23型式併行期から形成が開始されTK209型式併行期前後にピークを迎えるようである。鉄滓の小塊や小型の羽口などが出土しているので小規模な鍛冶は行っていたようである。竈形土器の出土が顕著にみられ、ある程度以上接合できるもので３個体、小片のもあわせると70点以上出土している。竈形土器は他の大多数の例と同じく、煤等の付着が顕著には確認できず、実用であったか判断しかねる。遺構の密度は比較的薄く、特殊扁壺なども出土しているのでむしろ祭祀的色合いが濃い集落であるといえるかも知れない。１点ではあるが韓式系の平底鉢と考えられる土器片が出土しており、竈形土器が集中して出土していることも含め、渡来系祭祀を執り行う集団 (3) が構成員となる集落と考えたい。

（２）第２集落

第２集落で確認された竪穴建物跡は49軒で、集落の形成は出土遺物からTK23型式併行期には始まっているようである (4)。集落形成のピークはTK209型式併行期前後で第１集落とほぼ変わらない変遷をたどっているといえる。集落域の北辺では、大型の鉄滓が確認できており、鍛造剥片や粒状滓も確認できている。滓の大きさに見合った羽口や鍛冶炉などは確認できていないが、科学分析の結果、砂鉄由来で精錬から鍛造までの一連の鍛冶作業が行われていたことが確認された。おそらく、集落の北辺が廃滓場であったのだろう。また、６軒の竪穴建物跡から馬歯が出土している。出土した馬歯は成獣の臼歯である (5) ということであり、通常、自然状態で脱落することはまずないうえ、人為的に抜歯することも非常に困難である (6) ことから生体から抜歯されたものとは考えにくい。第２集落では馬骨は出土していないが馬の屠殺を伴う何らかの行為（祭祀など）があったと考えるべきであり、馬匹生産と密接な関わりがあった集落であると考えていい。なお、第２集落においても竈形土器の出土がみられる。



第158図　山崎砂丘遺跡周辺の地形（S =1：10000）

第２集落の構成員は、鍛冶や馬匹生産などの生産的職能集団ともいうべきものであったと捉えたい。

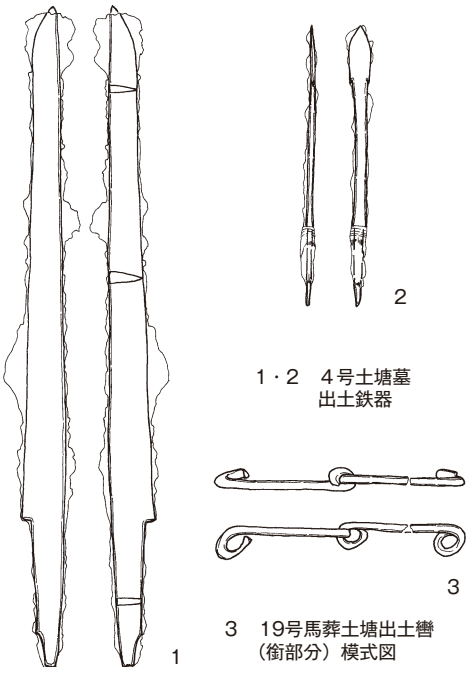
（３）第１墓域

第１墓域では竪穴建物跡９軒が確認されているが、竪穴建物内からの出土遺物が非常に少ない。TK209型式併行期の土壙墓の祭祀に伴う土器と、５世紀代と考えられる土師器の壺が伴う竪穴建物内の土器が接合するなど矛盾する調査報告もされている（南正覚ほか2003 39頁）。出土した土師器の壺は、別の壺形土器の底部を転用した蓋がしてあり、内部から刀子が出土していることなどから、嬰児用の壺棺ではないかと考えられる。ほぼ完形の甑が出土した竪穴建物が１軒存在するが、規模も小さくほぼ同時期の土壙墓のすぐそばに造られており住居跡との判断は躊躇せざるを得ない。遺構の検出が容易ではない土質であるので調査時の誤認があったのではないかと考えられる。既報告書では集落ととらえられているようだが、小規模な墓域であったと考えるべきだろう。

（４）第２墓域

第２墓域とした範囲では、調査で確認された消滅墳３基のほか、調査地外に３基の円墳が存在する[(7)]。その他、消失墳を含めた各円墳群の間に土壙墓５基、馬葬土壙６基[(8)]が確認されている。古墳群は円墳、土壙墓ともTK47型式併行期に遡る造営が確認されている[(9)]。造墓のピークは判然としないが包含層の遺物などから６世紀の後半段階と考えたい。馬葬土坑のうち１基は、付随する消失円墳がTK47型式併行期であることから同一時期[(10)]と考えられる（甲斐2009）。確認されている範囲ではTK47型式併行期の２号墳と４号土壙墓が最古[(11)]のものであるので、造墓はその前段階のTK23型式併行期には開始されていたと考えたい。

古墳群には馬葬土壙が相当数確認されていることから、馬匹生産に深く関わった集団の墓域であると考えられる。



第159図　山崎下ノ原第１遺跡出土遺物（S=1/4）

２　山崎砂丘遺跡の評価

前述したように、南北に約1.5kmの限られた範囲に２箇所の集落と２箇所の墓域が同一時期に形成されていることがわかる。継続期間も明確な差を看取することができず、これらが互いに無関係であったと考えることは無理があろう。各地区の特徴は以下のようになる。

第11表　各地区の内容

地区名	注目される遺物・遺構	継続時期
第１集落	竈形土器・韓式系土器	TK23 ～ TK209
第２集落	竈形土器・馬歯・鉄滓	TK23 ～ TK209
第１墓域	土壙墓・土器棺墓	５世紀代～ TK209
第２墓域	円墳・馬葬土壙	TK23 ～ TK209

以上のように、各地区の継続期間はほぼ重なる。よって、それぞれの地区はある同一集団の構成員によって営まれていたと考えるべきだろう。韓式系土器の出土、竈形土器、鍛冶関連遺物、馬葬土壙などからは蔀屋北遺跡などの河内湖周辺の渡来人集落が想起され(12)、山崎砂丘遺跡群もこれらと同様に半島系の技術をもった集団が計画的に配置された計画村落（早野2005）であったと考えたい。

山崎砂丘遺跡で集落の展開が始まると考えられるTK23型式併行期前後において、大淀川下流域一帯を掌握していたと考えられるのは下北方古墳群を造営した集団である。下北方古墳群の造営開始時期は正確には把握できていないが、出土埴輪や地下式横穴墓からの出土品から、遅くともTK216型式に併行する時期には造墓が開始されていたと考えられる。ただし、TK23型式併行期における首長墓は明確ではなく、前期の系譜が強い生目古墳群に前方後円墳の７号墳が築かれている（竹中ほか2012 39項）。生目７号墳からは陶質土器の出土も知られており、この時期、宮崎平野部への半島系の技術導入に生目勢力が主導的立場を担った可能性もあろう。

まとめ

山崎砂丘遺跡は、牧の経営や鉄器生産などを行った集団が配された計画集落の可能性が非常に高い。おそらくは、５世紀の後半頃に韓半島系の技術を導入して経営が開始されたと考えられる。技術に関しては、ごく少数の半島系の人間が、大多数の地元技術者を指導していたと考えたい。そのため、半島系そのものを示す出土遺物は非常に少ないが、復元される生活・生業は渡来色の強いものとなったのではないだろうか。技術とともに祭祀などを含めた生活様式も同様に導入されたのだろう。これら、渡来系の技術・生活様式を導入して牧をはじめとする生産活動を行った計画村落の経営を主導した人間が下ノ原古墳群に眠るのだろう。推古天皇が繁栄する蘇我氏に「宇摩奈羅麼　譬武伽能古摩（『日本書紀』巻二十二推古天皇記）」と謳ったのは592年のことである。この時期がまさに山崎砂丘遺跡の最盛期にあたることは偶然ではあるまい。

【註】

(1) 限られた範囲内の同一時期の遺跡であるので、細分し呼称することが総合的検討の妨げになると考えこの名称を提唱する。

(2)「馬埋葬土壙」や「馬の埋葬土壙」と記すのが一般的であろうが、やや冗長な感が否めないため、「馬葬土壙」と記し「バソウドコウ」と読むことを提案したい。

(3) 当然のことながら、これらのことのみをもって集団の構成員が渡来人そのものであったと考えるには無理があるだろう。

(4) 報告にある古墳時代の出土遺物で確認できた最も古いものが、TK23型式併行と考えられる遺物であったため、この時期を集落の形成開始期とした。

(5) 報告者の柳田晴子氏からの御教示による。

(6) 馬歯については日本中央競馬会宮崎育成牧場へ電話により問い合わせを行った。担当者の御教示によると、自然状態で永久歯が脱落するには馬体に相当なダメージがあったことが予想され、かつ、摂食に問題が出るため生命維持に重大な障害があるとのことであった。また、人為的な抜歯については、現在のサラブレッドに対して行う場合、全身麻酔を施したうえ顎を切開し抜かなくてはならないほど頑丈で、生体馬の臼歯を抜歯したとは思えないとのことであった。

(7) 調査地外の円墳のうち、２基については周溝の一部が調査されている。なお、偶然ではあるが調査区外の現存古墳（檍４～６号墳）と調査された消失円墳（第１号墳～３号墳）の号数が重ならないため、本稿ではそのまま山崎下ノ原１号～６号墳と読みかえ、以下単に○号墳と記した場合は、これを示すものとしたい。

(8) 調査ではこれ以外に18基の土坑が確認されており、分布や規模からそれらの大多数は土壙墓ではないかと考えられる。

(9) 報告書では第２号墳（消滅円墳）周溝内出土の須恵器を「TK47型式に相当する」（南正覚ほか2003 63頁34行）としているが、二宮満夫は「天井部と体部境の稜があまり突出しない点と全体的な調整のにぶさから」（二宮満夫2010 51項脚注）MT15型式に属するとしている。しか

しながら、埋葬施設から出土した副葬品についてはTK47型式併行期までにおさまるものであり、問題の須恵器坏蓋も天井部が高く丸みをおびていることや径が11.8㎝とやや小さいことから、報告者の見解で問題ないと考える。

（10）県立西都原考古博物館の甲斐貴充氏の御教示によれば、19号馬葬土壙内から出土した轡は鑣轡の可能性があるという。実物を実見し、銜部分の模式図を作成したが、遊環もしくは引手壺と考えられる部分は錆化が激しく保存処理後の状態では旧状を復元することが困難であったため図化していない。

（11）４号土壙墓の時期を報告者は出土した須恵器や土師器坏から「TK43型式の古段階」（南正覚ほか2003 76頁20行）としているが、土器の出土位置、遺構の形状から２基の土壙墓が重なっているものと考えられる。２基のうち古いものは副葬された鉄刀が隅抉尻中細茎（臼杵勲1984）で全長は推定で35㎝程度と小型であり５世紀の後半段階前後と考えて問題ないだろう。また供伴する長頸鏃の形状と合わせて考えるとTK47型式併行期とするのが妥当と考えられる。なお、報告書（南正覚ほか2003）では副葬品の実測図に誤認があったので第159図に修正したものを掲載した。

（12）蔀屋北遺跡との類似性については交野市教育委員会の真鍋成史氏に御指摘を受けた。

※鍛冶関連の遺物については、交野市教育委員会の真鍋成史氏から様々な御教示を得た。あわせて謝意を表したい。

【引用・参考文献】

報告書等

稲岡洋道2006『史跡 生目古墳群 - 保存整備事業発掘調査報告書Ⅵ -』宮崎市文化財調査報告書第61集

竹中克繁2008『山崎上ノ原第2遺跡Ⅲ』宮崎市文化財調査報告書　第69集

南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第79集

柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第130集

二宮満夫2010『籾木地下式横穴墓群』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第191集

論文等

臼杵　勲1984「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　PHALANX －古墳文化研究会－

甲斐貴充2009「宮崎県における古墳時代の馬埋葬土壙」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第5号 宮崎県立西都原考古博物館

柴田博子2008「古代南九州の牧と牛馬」『牧の考古学』高志書院

竹中克繁・西嶋剛広・渕内美智子2012「下北方11号墳南隣接地採集遺物の検討－編年的位置付けと首長墓系譜－」『宮崎考古』第23号 日髙正晴先生追悼記念号（上巻）宮崎考古学会

早野浩二2005「臨海の古墳時代集落－松崎遺跡の歴史的素描－」『研究紀要』第６号　㈶愛知県埋蔵文化財センター

早野浩二2009「古墳時代村落と石製模造品」『研究紀要』第10号　㈶愛知県埋蔵文化財センター

桃崎祐輔2005「九州における馬殉葬と初期馬具にみる渡来系要素」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会 九州前方後円墳研究会

桃崎祐輔2009「牧の考古学－古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓－」『日韓集落研究の新たな視角を求めて』第5回研究会 韓日集落研究会

第７節　いわゆる「四つ目土錘」について

はじめに

宮崎の広瀬から南は青島[1]に至る日向灘沿岸には、「四つ目土錘」（藤木 2006）とよばれる類直方体で中央に浅い溝が巡り四隅に孔が穿たれる土錘が分布する。この土錘については既に藤木聡が検討を行い、戦国時代末期～近現代に至るまで使用された可能性があること[2]、地曳網漁の網に使用されたものであろうことを結論づけている（藤木 2006）。現在は既に失われつつある漁法で、今後、四つ目土錘が地曳網用の土錘であること自体忘れ去られる可能性もある。山崎砂丘遺跡群からもこれまでの調査で相当数の四つ目土錘が出土しており、藤木も示していたようにその形態にはわずかながら差がある。そこで本稿では、それらの形態差から型式学的な前後関係を導き出してみたい。

１　属性の抽出

属性として候補に挙げられるものは、①全体の平面形状　②溝の有無･形状　などがまず挙げられる。また、③全体の大きさ　も属性としてあげられよう。

①平面形状

平面形状を属性１とする。属性１は次の３類に分けらる。

Ⅰ類　長方形

Ⅱ類　隅丸長方形

Ⅲ類　楕円形

形状から、Ⅰ→Ⅲ類もしくはその逆の変化が想定される[3]。現状では江口･池開例が 15 ～ 16 世紀でⅠ･Ⅱ類、東宮例が 18 世紀後半以降でⅡ類（藤木 2006）であるのでⅠ→Ⅲ類で変化の方向を考えたい。

②中央溝

土錘の中央部に巡る溝を属性２とする。属性２は溝の有無、形状によって以下の３類に分類する。

Ⅰ類　無溝

Ⅱ類　無痕

Ⅲ類　縄目痕

形状からⅠ→Ⅲ類またはその逆の方向性が想定される。属性①と同様に江口・池開例がⅠ類、東宮例がⅡ類であることからⅠ→Ⅲ類と考えたい。

③大きさ

土錘の大きさは､その使用方法から｢重さ｣とともに重要な属性のひとつを構成すると考えられる。｢重さ｣については遺物の遺存状態に大きく左右されることが予想されるので、ここでは検討項目から除外した。大きさについては検討対象の数が少ないせいもあるが、第 12 表に示すように明確な分布の差は見て取れなかった。ただ、全体の傾向からは、短軸４～５㎝のものと５㎝以上のもに分類できそうである。前者をⅠ類、後者をⅡ類とする。

第12表　属性③ の分布

	短軸（cm）	
長軸（cm）	4 ～ 5	5 ～ 6
0 ～ 1		
1 ～ 2		
2 ～ 3		
3 ～ 4		
4 ～ 5		
5 ～ 6	1	
6 ～ 7	3	1
7 ～ 8	3	2
8 ～ 9		2
9 ～ 10		1

凡例

属性①

Ⅰ類・・・長方形

Ⅱ類・・・隅丸長方形

Ⅲ類・・・楕円形

属性②

Ⅰ類・・・無溝

Ⅱ類・・・無痕

Ⅲ類・・・縄目痕

属性③

Ⅰ類・・・短軸４cm～５cm

Ⅱ類・・・短軸５cm以上

第13表　属性①②の相関関係

属性	①		
②	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	2	4	1
Ⅱ	5	7	1
Ⅲ	0	7	1

第14表　属性①③の相関関係

属性	①		
③	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	1	5	1
Ⅱ	4	3	

第15表　属性②③の相関関係

属性	②		
③	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ
Ⅰ	2	2	2
Ⅱ	3	4	1

2　属性間の相関

各属性間の相関関係を第 13 ～ 15 表にまとめた。

第13表から

属性①及び②の相関関係をみる。属性①Ⅰ類は属性②Ⅱ類との相関関係が強い。属性②Ⅰ類にも少なからず相関関係がみられるが、属性②Ⅲ類には現状では相関関係をみいだせない。属性①Ⅱ類は属性②の全ての類型と相関性があるが、属性②Ⅱ類・Ⅲ類により強い相関性が指摘できる。属性①Ⅲ類は属性②の全てに均等に相関するが、個体数の少なさと関係する可能性もあろう。

第14・15表から

属性①Ⅲ類に属性③Ⅱ類に分類できるものがないことがわかる。属性②と③については有意な相関関係は読み取れない。

3　分類と編年

以上の属性の抽出と形態分類から四つ目土錘の分類と編年を検討したい。

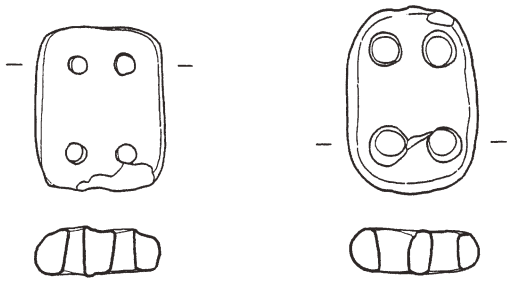
属性①と②の関係から、a. 中央に溝のないもの　b. 長方形で縄目痕のない溝があるもの　c. 隅丸長方形で溝のあるもの　d. 楕円形のもの　に分類できる。また、属性①と③の関係から、長方形→隅丸長方形→楕円形となるに従い幅が広くなる傾向があると考えられる。よって、四つ目土錘を次のように分類したい。

第Ⅰ式　平面形長方形・隅丸長方形で中央に溝がないもの。幅は５㎝未満のものが多い。
第Ⅱ式　平面形は長方形・隅丸長方形で中央に縄目のない溝が巡るもの。幅は５㎝未満のものが多い。
第Ⅲ式　平面形は隅丸長方形で中央に縄目のある溝が巡るもの。幅は５㎝を超えるものが多い。
第Ⅳ式　平面形が楕円形のもの。幅は５㎝を超えるものが多い。

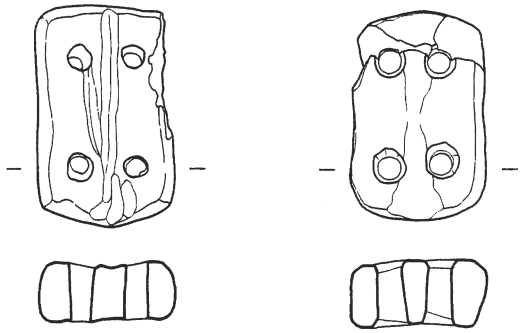
現在、確認できている県内最古の事例は、池開・江口の15世紀後半～ 16世紀のもので、これらはいずれも第Ⅰ式に含まれる。18世紀後半代の資料である東宮出土のものは第Ⅱ式である。また、20年ほど前まで地曳網漁をおこなっていたという地元住民の証言がある山崎砂丘遺跡周辺では第Ⅲ式の出土例が多くみられる。Ⅳ式については、出土数自体が非常に少ないが、山崎砂丘遺跡でも２例出土している。これらのことから、四つ目土錘の上限を15世紀後半～ 16世紀、下限を昭和時代いっぱいと考えたい。なお、第Ⅰ～Ⅳ式がそのまま時系列的変化として捉えられると考え、以後、「式」を「期」と読みかえる。

各期の大まかな年代は、第Ⅰ期、第Ⅱ期に年代が押さえられる資料があるので、15世後半から18世紀後半を便宜的に均等に割り振りそれぞれ150年程度、第Ⅲ期と第Ⅳ期に関しては20世紀末までを均等に割り振りそれぞれ100年程度と考えておきたい[(4)]。すなわち第Ⅰ期・15世後半から17世紀前半、第Ⅱ期・17世紀前半から18世紀後半、第Ⅲ期18世紀後半から19世後半、第Ⅳ期19世紀後半から20世紀後半として設定する。

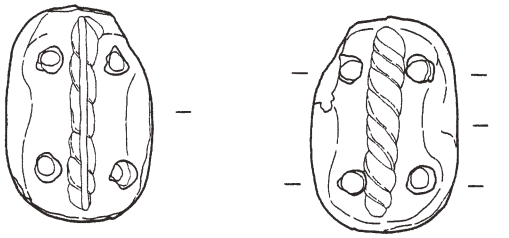
以上の検討結果を第160図・161図にまとめた。



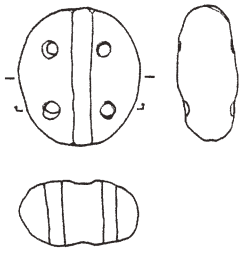
第Ⅰ式



第Ⅱ式



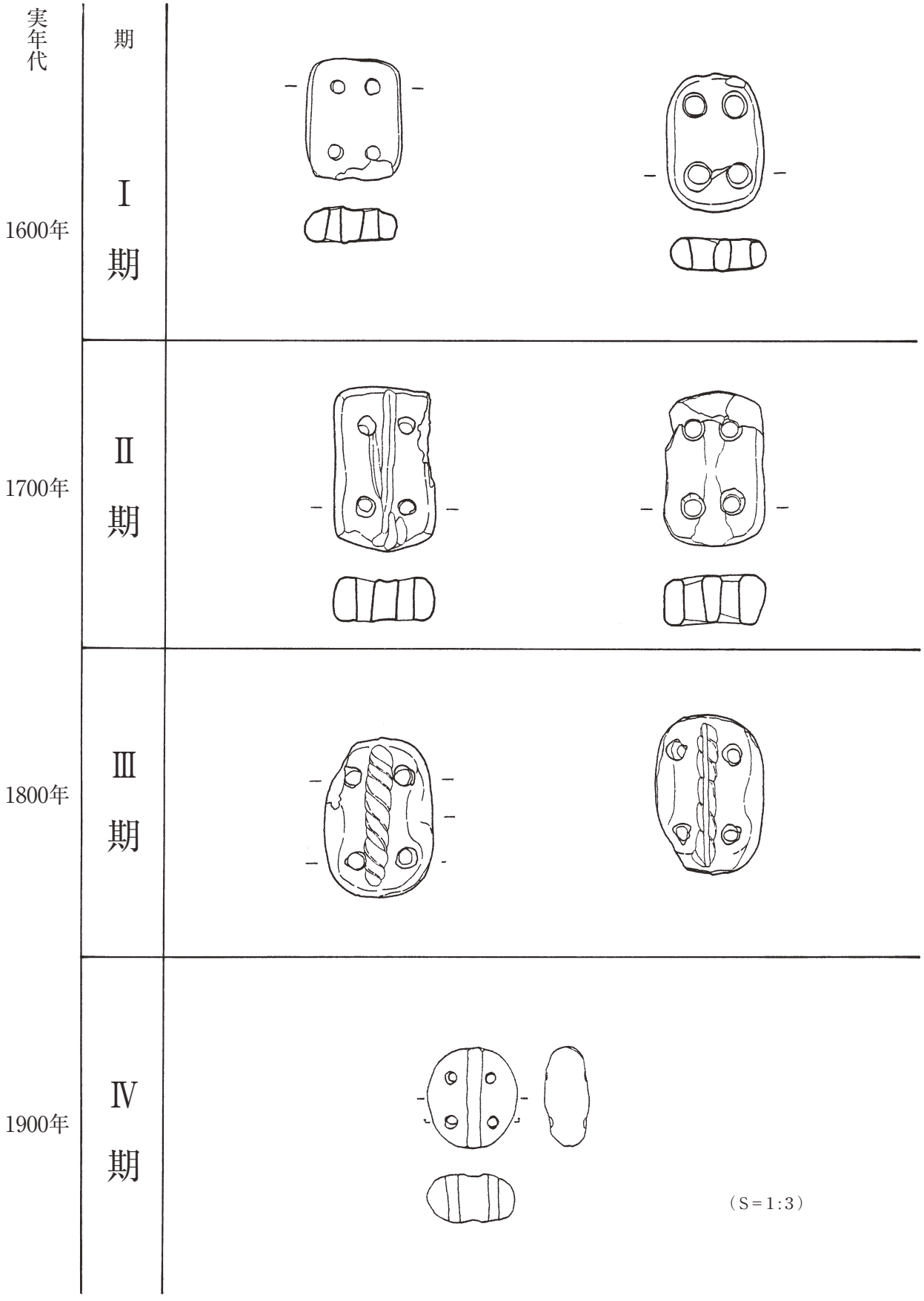
第Ⅲ式



第Ⅳ式

（S＝1:3）

第160図　四つ目土錘の分類



第161図　四つ目土錘編年図

まとめ

以上、四つ目土錘の型式分類と編年についておおざっぱにまとめた。しかしながら、報告例、年代を押さえられる資料の少なさから、かなり乱暴な検討になったことは否めない。特に第Ⅳ期については年代差ではなく、機能差を反映している可能性も大きい。また、既に藤木が指摘しているバリエイション（藤木 2006）の全てを検討に組み込むことができなかった。特に重量や胎土については機能や製作地、ひいては使用者の集団的広がりなどを考察する上で重要な項目であることは想像に難くない。今後の良好な資料の増加を待ち、再検討を行うことは必須の作業であろう。最後に、本稿をなすに当たって県立西都原考古博物館の藤木聡氏には様々な示唆を頂いた。あわせて謝意を表したい。

【註】

（1）県立西都原考古博物館の藤木聡氏に御教示いただいた。

（2）今回の発掘作業中、地元在住の作業員に尋ねたところ「20年ほど前」までは地曳網漁を行っていたようである。20年ほど前といえば、総合保養地整備法（いわゆるリゾート法）の適用第１号としてシーガイアの開発が始まった時期（1988年）とちょうど重なる。シーガイアの運営を行っていたフェニックスリゾートは周知のとおり第３セクターとして過去に類をみない３千億円を超える多額の負債を抱え民事再生法の適用を申請することとなったが、これが貴重な民俗遺産を失ってまで行った開発の結果であり、かつ少なからず行政が関わっていたことは残念である。

（3）使用頻度の差で、磨り減ったものとそうでないものとの差が繁栄されている可能性を藤木氏より指摘された。

（4）今後、時期決定が可能な資料が増加するに伴い、大幅な修正が必要となるだろうことは言うまでもない。

【引用・参考文献】

報告書等

南正覚雅士・丹俊詞・飯田博之2003『山崎上ノ原第２遺跡・山崎下ノ原第１遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第79集

柳田晴子2006『山崎上ノ原第２遺跡Ⅱ』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第130集

論文等

藤木聡2006「宮崎沿岸の四つ目土錘」『宮崎考古』第20号

第８節　「阿波岐原」について

はじめに

山崎砂丘遺跡が立地する砂丘には、式内社である江田神社が鎮座し、近辺には伊弉諾尊が禊ぎをしたと伝えられる御池（禊ぎ池）が存在する。まさに、『古事記』にある「日向之橘小門之阿波岐原」を彷彿させる風景である。もちろん、記紀にある神代の記述をそのまま事実と受け止めることはできないが、宮崎県において歴史的記述を行ううえで、これらについて肯定的であれ否定的であれ見解を述べることを避けて通ることはできない。今回のように、神話の舞台と多くの人間が考える土地で発掘調査を行えばなおさらである。ここでは、調査地の住所でもある「阿波岐原」という呼称がいったいどの程度遡りうるのか、その呼称の背景はどういったものなのかを若干検証してみたい。

１　「阿波岐原」の記述

『古事記』『日本書紀』は日本最古の歴史書として知られるが、その史実性、特に「欠史八代」と呼ばれる開化天皇以前の記録については大いに疑問が持たれているのは周知の事実であろう。一方で「阿波岐原」や「橿」、「小戸」など地名は当地が記紀に著されていることを強く一般に印象づけている。

では、「阿波岐原」の地名が文字資料として現れる最古の例はいつになるのか。

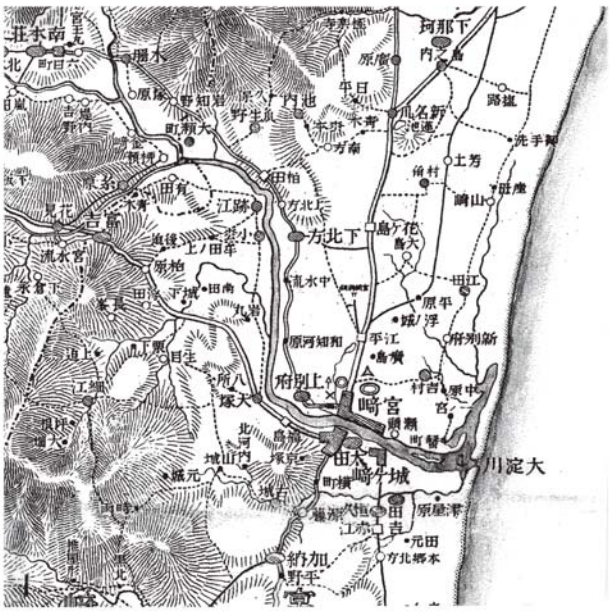
文献で「阿波岐原」が最初にみえるのは言うまでもなく『古事記』である。しかしながら、この名称をそのまま、この地の「阿波岐原」と結びつけることはできない。管見に係った限りで最も遡ることができる地図資料は文政年間に成立した『國郡全圖』にみえる「青木原」の記載であろうか。この文字を「アホキハラ」もしくは「アホキガハラ」と読み「阿波岐原」から転じたものとすれば、少なくとも 19 世紀の前半までは遡ることができる。また、先述したが、伊東義祐の「飫肥紀行」(1) に「アワキカ原」と記されている。「ハ・ホ・ワ・ヲ・オ」などの音が混乱しているという問題はあるが、現状で「阿波岐原」に類する最古の記録は、古事記を除けばこの「飫肥紀行」ということになりそうである。古事記成立より 800 年以上後の記録が、それ以前からの土地の呼称であったことの証明には何ら成り得ないのは言うまでもないが、「飫肥紀行」の別の箇所に、「全始宮崎入京神武天皇ノ御前近キ所ニテ」（宮崎県史編纂委員会編 1999　623 項）とあり、この時点で記紀伝承がこの地にかなり根付いていることを伺わせる。むしろ、記紀の記録が先にあり、それにあわせるようにその後数百年をかけて (2) 地名が付けられていったと考えた方が妥当性は高いだろう。

２　「阿波岐原」周辺の地名表記の変遷

それでは、「阿波岐原」「橿」など記紀の記載に基づいた記述はどの段階まで遡ることができるだろうか。前述したように「飫肥紀行」では「アワキカ原」とあり漢字表記されていない（宮崎県史編纂委員会編 1999　622 項）。『國郡全圖』においては「青木原」で、19 世紀末に成立した「伊能図」に至っては、発音が類似する記述すらなく、周辺は「江田村」「山崎村」となっている。明治４（1871）年の農商務省地質調査書発行の『宮崎圖幅』（20 万分の１）では「江田」はみえるが「橿」「阿波岐原」の記載はみえない。これは、明治 32（1899）年の陸軍陸地測量部発行 20 万分の１図でも踏襲されている。明治 40 年に神武大祭を記念して地元の店舗と考えられる松井修進堂から発行された『實測宮崎縣地図』には「橿」がみえるが「阿波岐原」はない。大正８年の陸軍陸地測量部発行 20 万分の１図にも「橿」がみえるが、

「阿波岐原」は確認できない。これらは明治 22 年の市制町村制施行により周辺が「檍村」となったことに由来すると考えられるが、明治 40 年の神武大祭を機に記紀にまつわる地名が記載されるに至ったのかもしれない。

「阿波岐原」の記載を確認するには昭和 11（1936）年に陸軍陸地測量部が発行した 20 万分の 1 図を待たなくてはならない。この地図では「江田」の記載がなくなっている。これは、檍村が昭和 7（1932）年に宮崎市に合併した後、周辺を「阿波岐原町」としたことに由来していると考えられる。偶然であろうが、昭和 7 年は五・一五事件、昭和 11 年は二・二六事件が勃発している。この時期が軍国主義を背景とした皇国史観が強く推し薦められている時期であることに注意を向ける必要があろう。



昭和22年　20万分の１図

明治35年　５万分の１図

大正２年　20万分の１図

昭和10年　５万分の１図

第162図　地図にみる「阿波岐原」周辺地名の変遷

まとめ

以上のように「阿波岐原」という漢字表記は、軍国主義が台頭していた時期の行政区分に行われた表記であることが確認できた。従来の呼称は、「青木原」という表記で「アホキガハラ」と呼んでいたものではないのだろうか。のちに「ホ」という発音が「ヲ」に「ハ行転呼」し、「飫肥紀行」が記されたとき「ワ」と誤聞されたと考える(3)のは穿ちすぎだろうか。本来「青木原」というある意味、日本各地にありふれた地名であったとすれば、本居宣長が「阿波岐原」について『古事記伝』の中で「日向に曾て橘の小戸の地名を聞かず」（日高重孝 1952）としているのも首肯しうるのではないだろうか。もちろん、山崎の砂丘のなかにはイザナギノミコトが黄泉の国から帰還した折り禊ぎを行ったと伝えられる「御池」(4)などの記紀にまつわる場所がほかにもあるが、これらについても無批判に記紀が何らかの歴史的事実を反映していることの表れとすることは、少なくとも、科学的検証をしなければならない立場からは逸脱した判断であろう。

【註】

(1) 永禄５（1562）年に成立。原著にあたることはできていないが、宮崎県史編纂委員会がまとめたこの記事にあたる部分（宮崎県史編纂委員編1999,622項～627項）には「ハヤアワキカ原ノ波間ヨリ」とある。出発の地点が、「那賀」であるか「日州都於郡」であるかはっきりしないが、「那賀」であれば「八声ノ鳥ノ啼ヌ間ニ」馬で出立したにしては、「アワキカ原」で朝日が昇るにはやや早すぎるように感じる。また、わざわざ、海岸沿いに迂回したうえで木花などを通過しており山崎街道を使用したことにはやや疑問の残る記述である。いずれにしろ「アワキカ原」との呼称自体は中世末から近世初頭には遡ることができるとはいえよう。

(2) 現状で、「飫肥紀行」以前に遡ることができる資料がないため、「数百年」と記した。

(3) 逆に「アハキカハラ」が先にあり、「アハキ」→（ハ行転呼）「アワキ」→（誤聞）「アヲキ」→（音韻変化）「アオキ」と変化したとも考えられなくはないが、「アホキ」→（ハ行転呼）「アヲキ」→（誤聞）「アワキ」と変化したととらえる方が無理がないと判断した。

(4)「御池」については、現在、第２、第３砂丘間の低地に存在しているが、第３砂丘の形成時期は15世紀中葉から16世紀中葉と推定されている（甲元眞之2012）。また、1498（もしくは1512）年に起こったとされる日向灘沖明応地震や、江田神社を移転させたという外所地震など、明確な記録はないが津波の被害を予想させる災害をこの時期前後に経験していることも見逃せない。したがって、記紀成立時はいうまでもなく「飫肥紀行」成立時期についても現在の「御池」が形成されていたかどうかはおおいに疑問があろう。また、その他の記紀伝承にまつわる名勝の多くが第３砂丘上に位置していることも注意すべきだろう。

【引用・参考文献】

甲元眞之2009「浜堤の形成と考古資料」『南の縄文・地域文化論考　新東晃一代表還暦記念論文集　上巻』南九州縄文通信№20 南九州縄文研究会・新東晃一代表還暦記念論文集刊行会

甲元眞之2012「砂丘遺跡と考古学」『西海考古』第8号 故福田一志追悼論文集刊行事務局

日高重孝1952「宮崎地方史」『宮崎県大観』（上巻）宮崎県大観刊行会

宮崎県史編纂委員編1999「24　在此入道之道之記之事」『日向記』宮崎県史叢書

第９節　結語

今回の調査では、これまで、「山崎上ノ原第２遺跡」、「山崎下ノ原第１遺跡」として報告されていた同一砂丘上の調査成果とわせて、この地に、古墳時代の主に馬匹生産に関わる渡来系職能を有した集団があったことがほぼ確実となった。以前から、この砂丘上の「牧」や、その経営に携わった集団の存在を指摘はされていた（桃崎 2005・2009，柴田 2008，甲斐 2009）が、今回、韓式系土器や竈形土器の出土がみられたことで、その集団の内容がより具体的に検討できるようになったことは大きな成果であろう。

しかしながら、この地にこのような集落を経営するに至った経緯など残された課題も多い。今後は宮崎平野部の政治的動向と関連づけながら、遺跡の性格を吟味していくことが必要となってこよう。

また、この地に伝わる「記紀伝承」については、歴史的理解の障害となっている可能性が高い。今回、若干の検討を試みた結果、この伝承が現在に近い体をなすのは中世後半以前たり得ないことは示せたと思うが、今後、伝承形成にいたる過程と背景を批判的、理論的に検討し、その結果を周知することは、「教育委員会」に課せられた使命と言っても過言ではなかろう。本報告が今後の宮崎平野の歴史検討において、その理解の一助となることを期待したい。

【引用・参考文献】

甲斐貴充2009「宮崎県における古墳時代の馬埋葬土壙」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第５号

柴田博子2008「古代南九州の牧と牛馬」『牧の考古学』高志書院

桃崎祐輔2005「九州における馬殉葬と初期馬具にみる渡来系要素」『九州における渡来人の受容と展開』第8回九州前方後円墳研究会

桃崎祐輔2009「牧の考古学 - 古墳時代牧と牛馬飼育集団の集落・墓 -」『日韓集落研究の新たな視角を求めて』第5回研究会

遺跡遠景（南より）

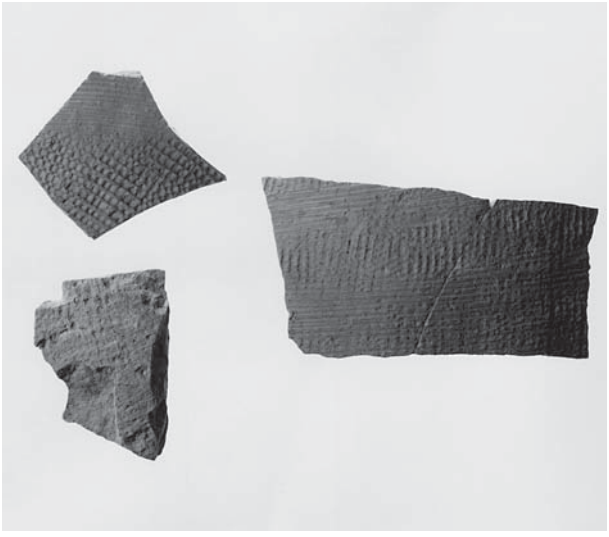
遺跡遠景（北西より）

図版2

１区Ａ地点　完掘状況（北から）
（手前から１号溝、１号竪穴、２号・３号竪穴）

１区Ａ地点　完掘状況（南から）
（手前から２号・３号竪穴、１号竪穴、１号溝）

１号竪穴出土　須恵器①



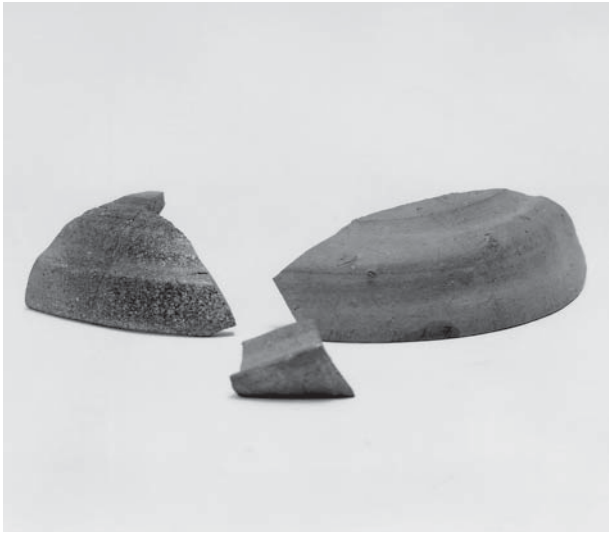
１号竪穴出土　須恵器②

１号竪穴出土　須恵器③

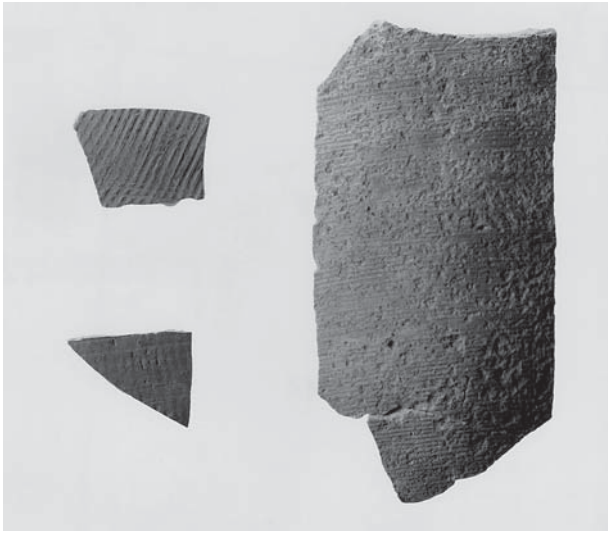
１号竪穴出土　土師器①

1号竪穴出土　土師器②

1号竪穴出土　軽石製品

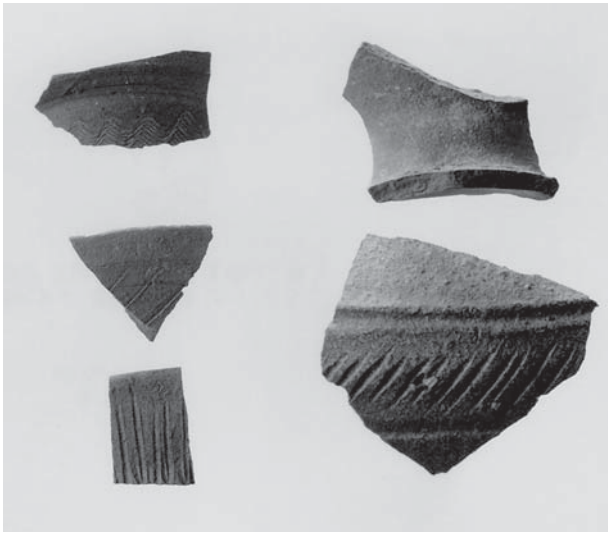


2・3号竪穴出土　須恵器①



2・3号竪穴出土　須恵器②

2・3号竪穴出土　須恵器③

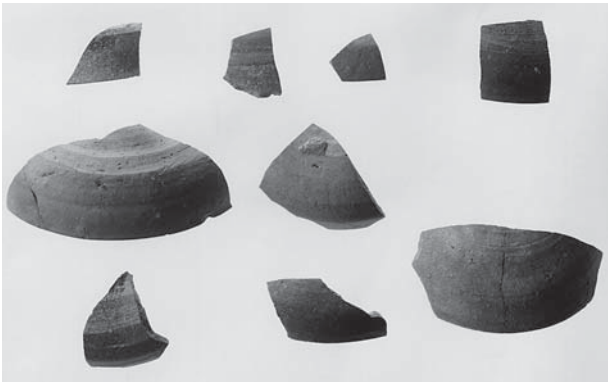


2・3号竪穴出土　須恵器④

図版4

２・３号竪穴出土　石器①

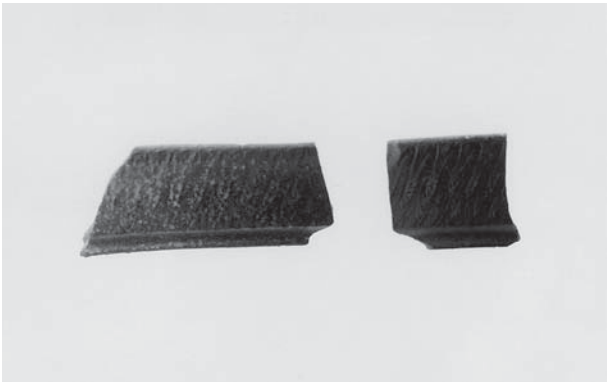
２・３号竪穴出土　石器②



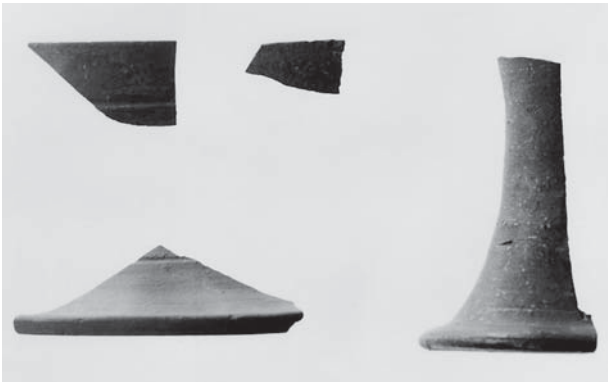
４号竪穴出土　須恵器①

４号竪穴出土　須恵器②

４号竪穴出土　須恵器③

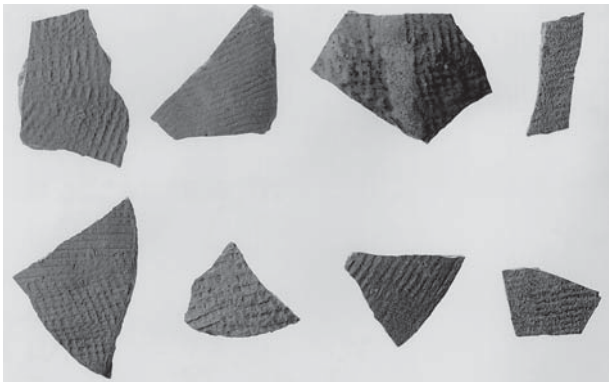


４号竪穴出土　須恵器④

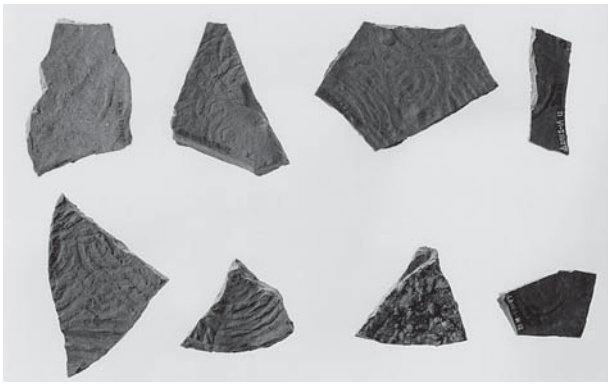


４号竪穴出土　須恵器⑤

４号竪穴出土　須恵器⑥



4号竪穴出土　須恵器⑦



4号竪穴出土　須恵器⑧

4号竪穴出土　土師器①

4号竪穴出土　土師器④

4号竪穴出土　土師器②

4号竪穴出土　石器

4号竪穴出土　土師器③

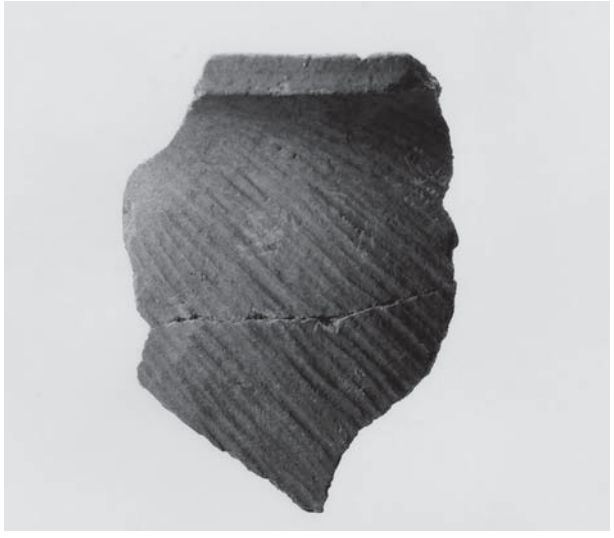
図版6

5号竪穴出土　土師器①

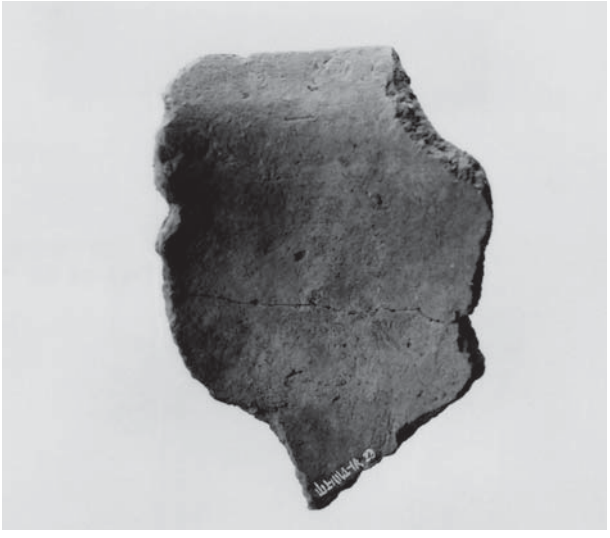
5号竪穴出土　土師器②

5号竪穴出土　土師器③

5号竪穴出土　石製品



6号竪穴出土　韓式系土器①

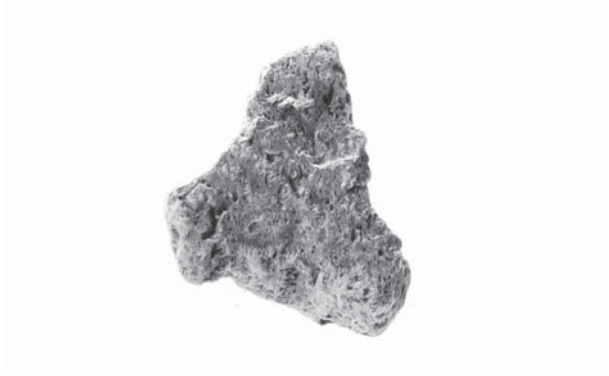


6号竪穴出土　韓式系土器②

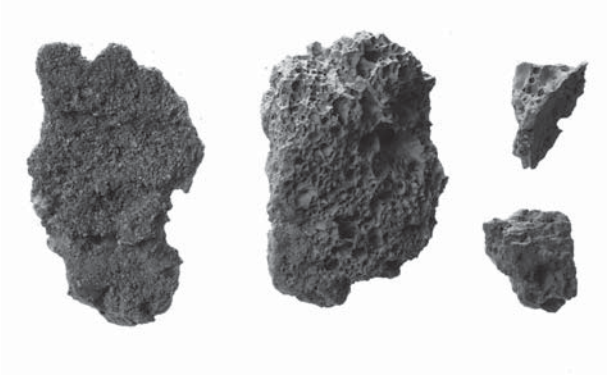
6号竪穴出土　土師器①

6号竪穴出土　土師器②

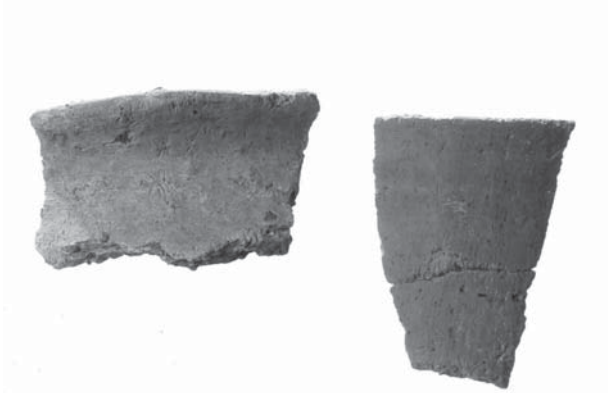
6号竪穴出土　土師器③



6号竪穴出土　石器



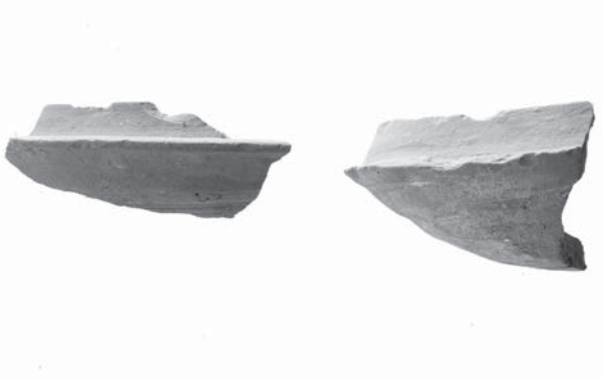
6号竪穴出土鉄滓



1号溝状遺構出土　土師器①

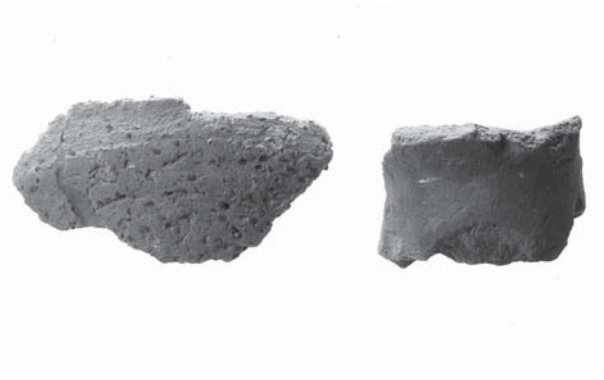
1号溝状遺構出土　土師器②

図版8



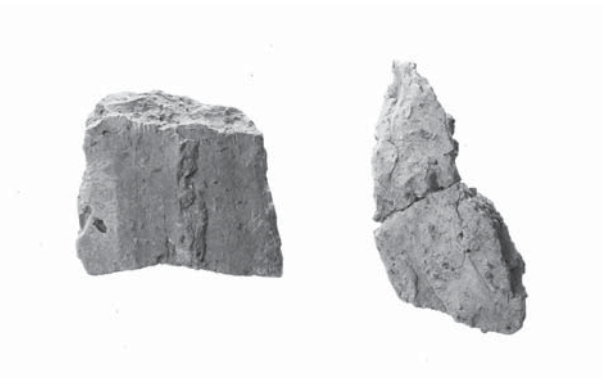
２号溝状遺構出土　須恵器①

２号溝状遺構出土　須恵器②



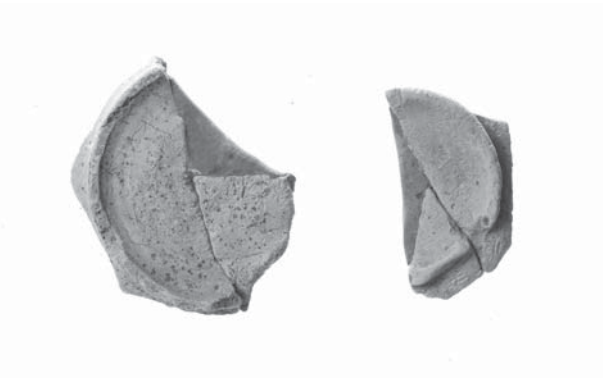
２号溝状遺構出土　土師器①

２号溝状遺構出土　土師器②



２号溝状遺構出土　土師器③

２号溝状遺構出　土石器



２号溝状遺構出土　土師器④

1区B地点　遺構検出状況

3号溝状遺構及び7号竪穴検出状況（北から）

8号竪穴　遺物出土状況

3号溝状遺構　遺物出土状況

7・8号竪穴及び3号溝状遺構　完掘状況

7号竪穴　完掘状況

8号竪穴　完掘状況

図版10

７号竪穴出土　須恵器

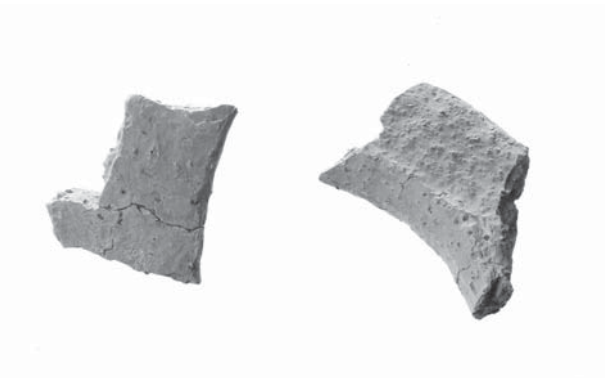
７号竪穴出土　土師器①

７号竪穴出土　土師器②

７号竪穴出土石器及び鉄滓

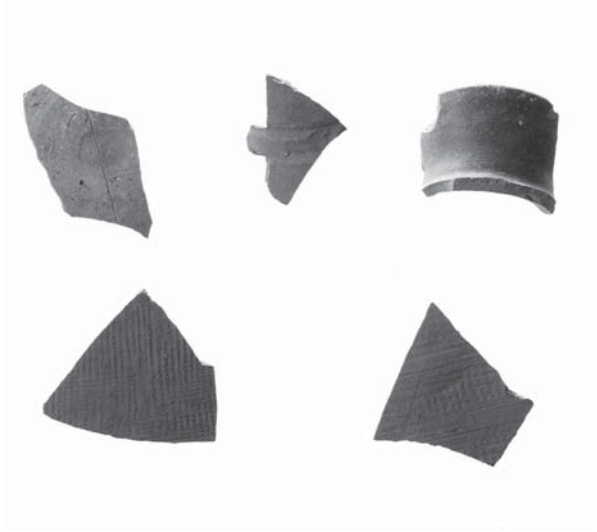
８号竪穴出土　須恵器

８号竪穴出土　土師器①



８号竪穴出土　土師器②

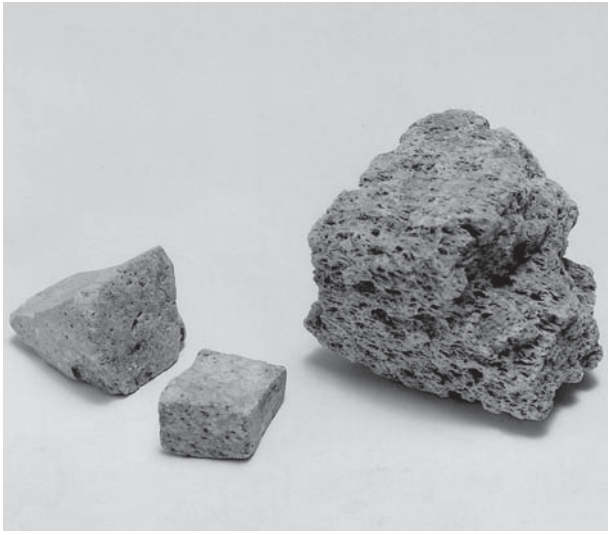
８号竪穴出土　石器



３号溝状遺構出土　須恵器

３号溝状遺構出土　土師器①

３号溝状遺構出土　土師器②

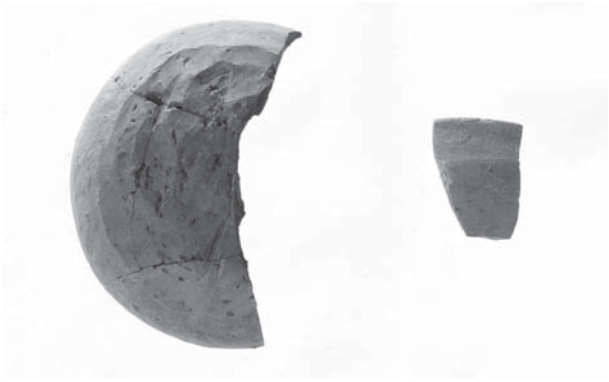


３号溝状遺構出土　石器

９号竪穴　遺物出土状況

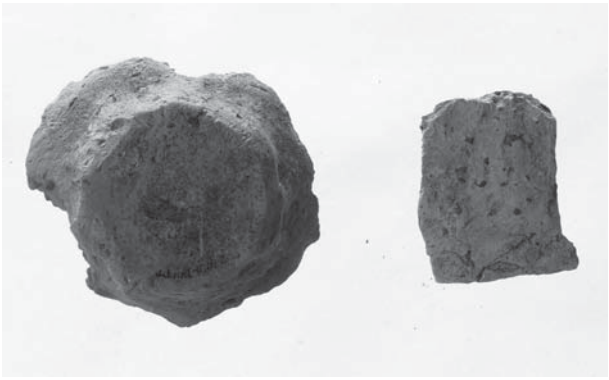
９号及び10号竪穴　完掘状況

図版12



9号竪穴出土　遺物

10号竪穴出土　土師器①

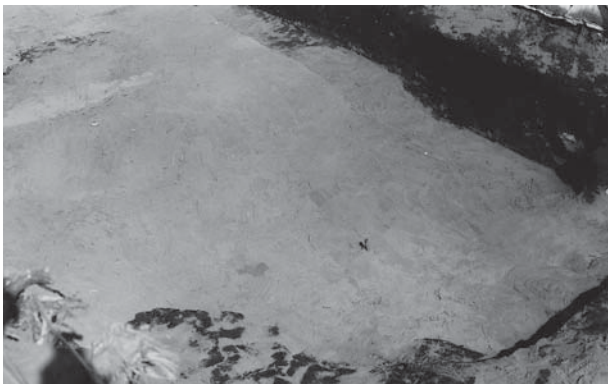


10号竪穴出土　土師器②

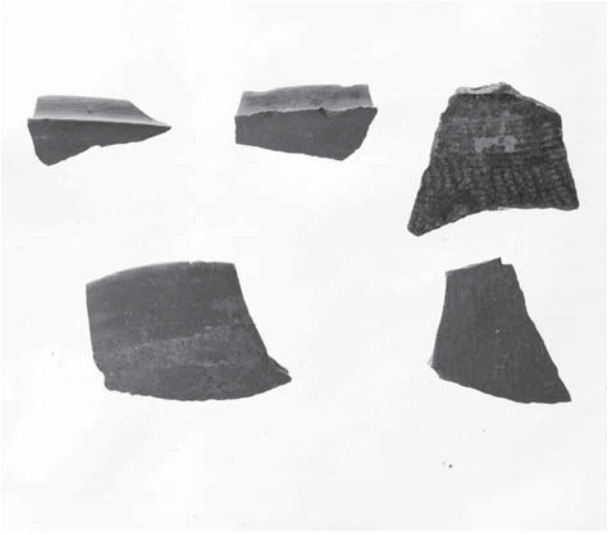
4号溝状遺構　検出状況

10号竪穴出　石器

4号溝状遺構　遺物検出状況



4号溝状遺構　完掘状況



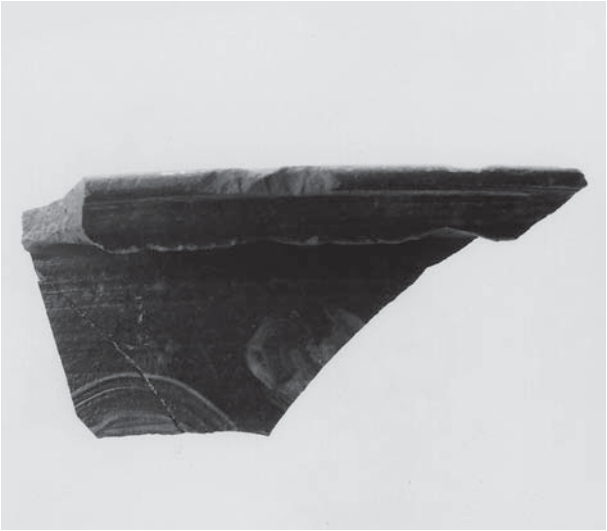
4号溝状遺構出土　須恵器

4号溝状遺構出土　土師器①

4号溝状遺構出土　土師器②

4号溝状遺構出土　鉄器

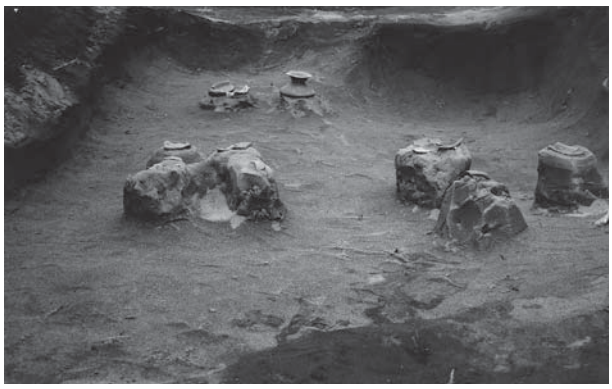
4号溝状遺構出土　青磁



4号溝状遺構出土　陶器（混入）

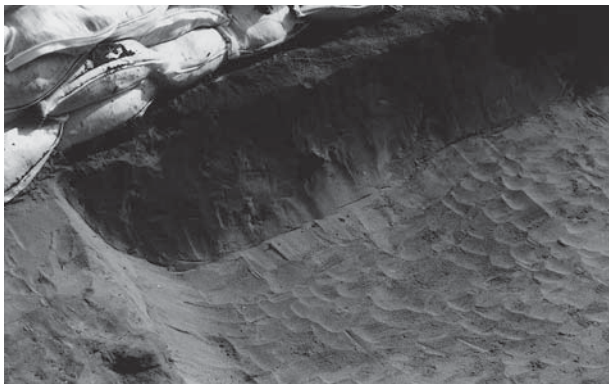
図版14

11号竪穴検出状況



11号竪穴遺物出土状況

11号竪穴遺物出土状況（386・387）



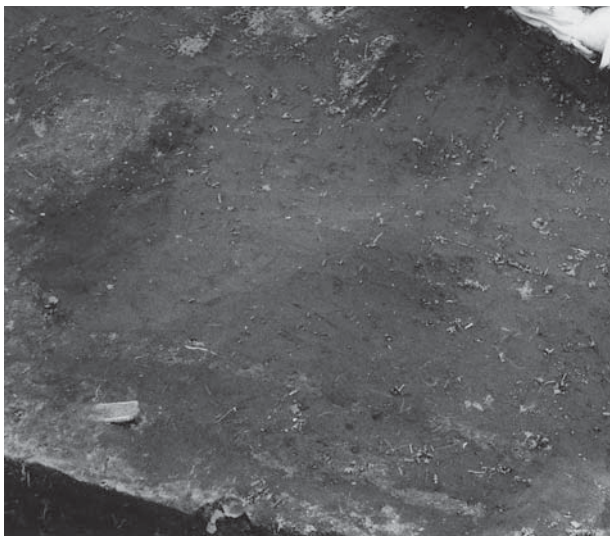
11号竪穴　土層断面

11号竪穴出土　須恵器①

11号竪穴出土　須恵器②

11号竪穴出土　土師器①

11号竪穴出土　土師器②



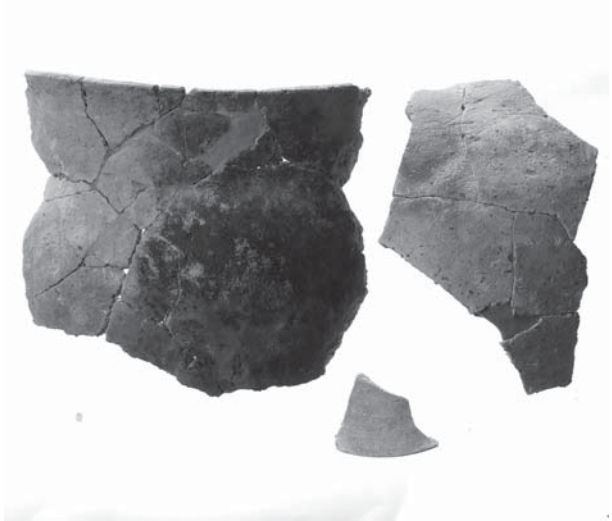
1 号土坑　検出状況

1 号土坑　遺物出土状況

1 号土坑出土　遺物①

1 号土坑出土　遺物②

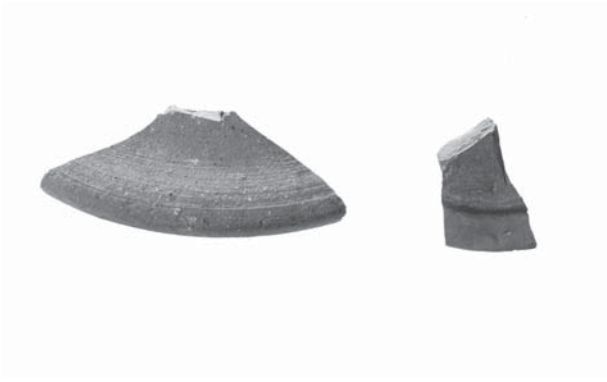
1 号土坑出土　遺物③



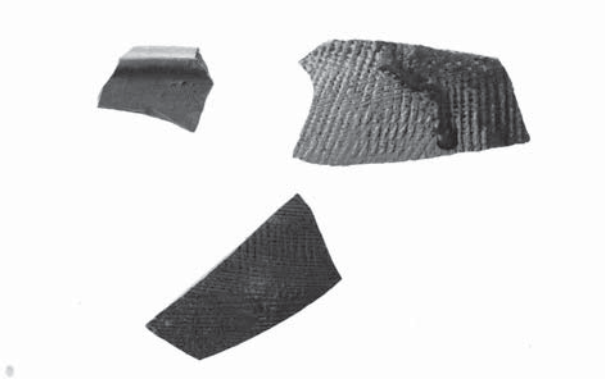
1 号土坑出土　遺物④

図版16

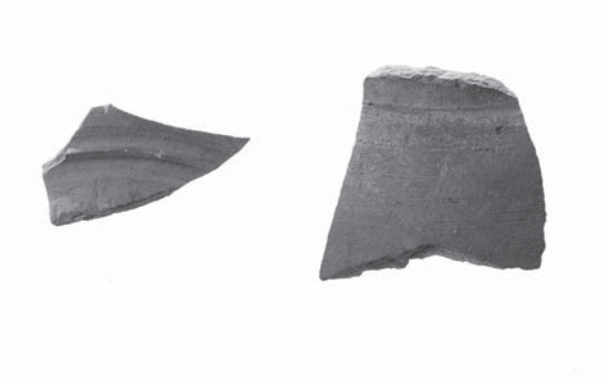
1区遺構外出土　須恵器①



1区遺構外出土　須恵器②



1区遺構外出土　須恵器③



1区遺構外出土　須恵器④

1区遺構外出土　土師器①

1区遺構外出土　土師器②

1区遺構外出土　土師器③

1区遺構外出土　土師器④

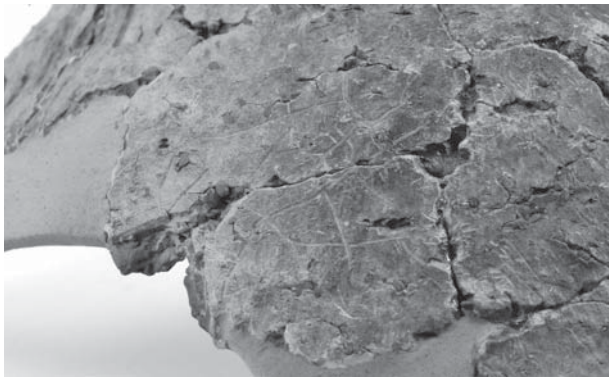
12号竪穴　検出状況

12号竪穴　遺物出土状況

12号竪穴出土　土師器①

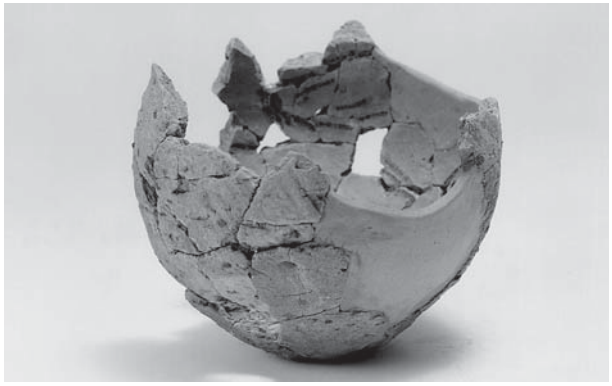
12号竪穴出土　土師器②

12号竪穴出土　土師器③



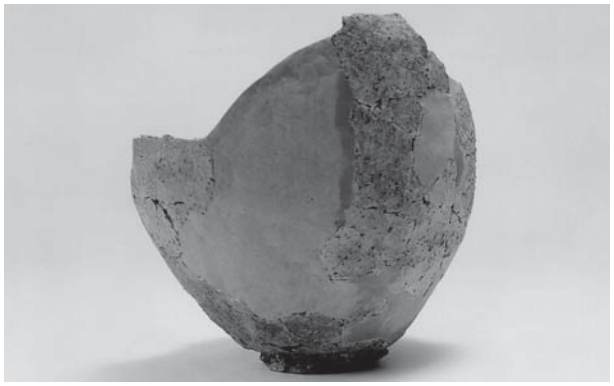
12号竪穴出土　土師器④

12号竪穴出土　土師器⑤



12号竪穴出土　土師器⑥

図版18

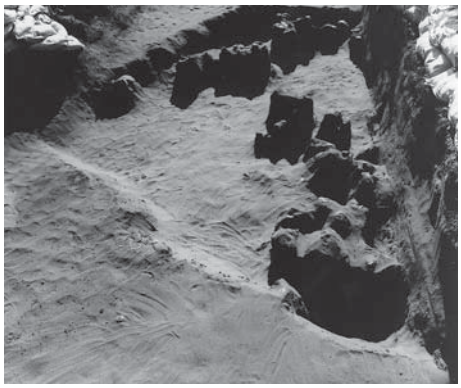


12号竪穴出土　土師器⑦

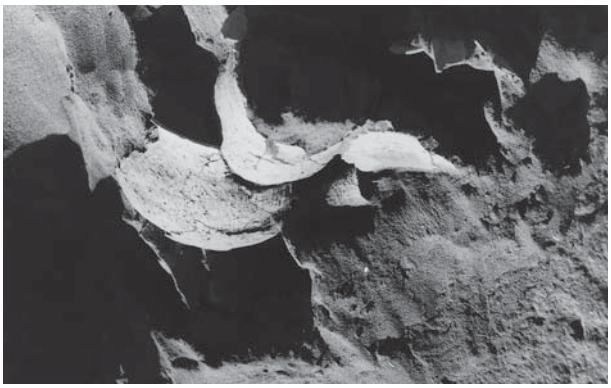
12号竪穴出土　土師器⑧

12号竪穴出土　遺物

13号竪穴　検出状況

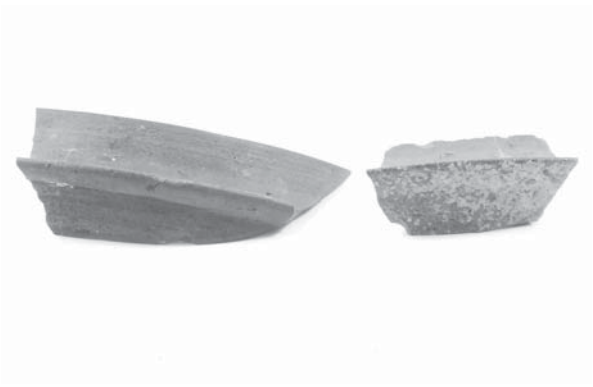


13号竪穴　遺物出土状況



13号竪穴　甕・竈形土器出土状況

13号竪穴　土層断面



13号竪穴出土　須恵器

13号竪穴出土　土師器①

13号竪穴出土　土師器②

13号竪穴出土　土師器③

13号竪穴出土　土師器④

13号竪穴出土　竈形土器（正面）

13号竪穴出土　竈形土器（背面）

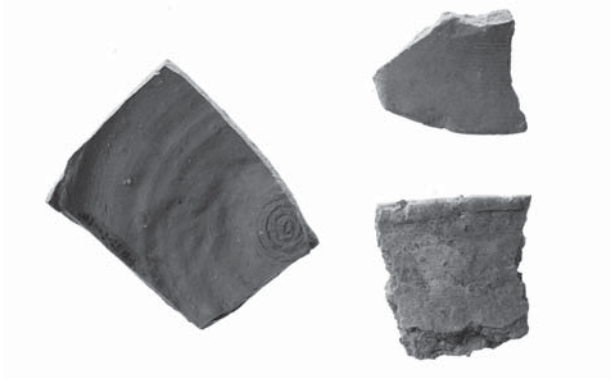
13号竪穴出土　竈形土器（側面）

13号竪穴出土　竈形土器（上面）

図版20

13号竪穴出土　凹字形鉄器

14号竪穴　遺物出土状況



14号竪穴出土　遺物

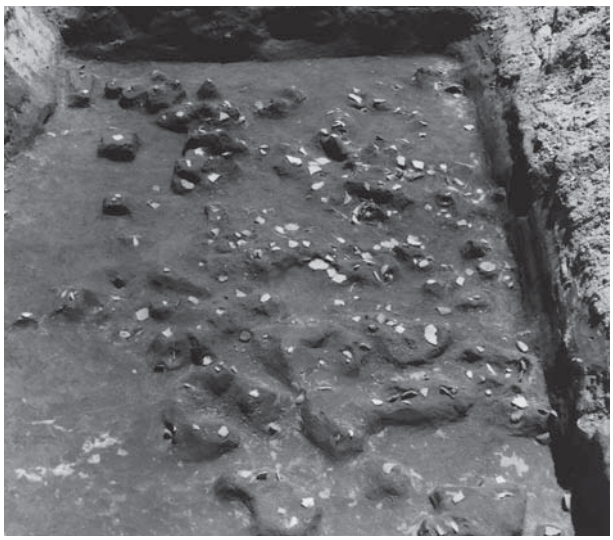
５号溝状遺構出土　須恵器

５号溝状遺構出土　土師器①

５号溝状遺構出土　土師器②

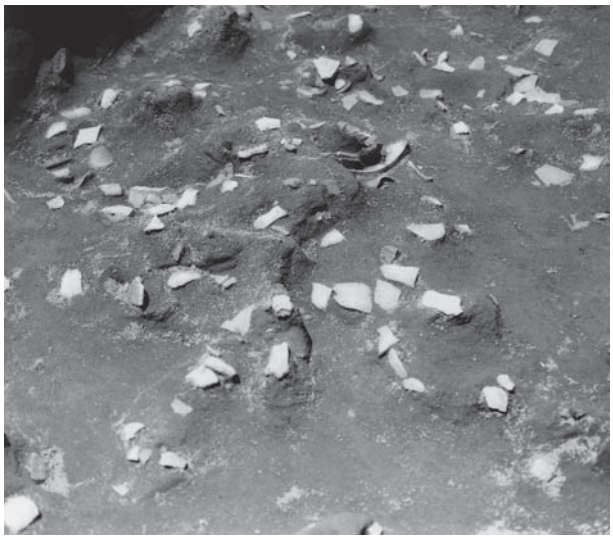
５号溝状遺構出土　土師器③

５号溝状遺構出土　鉄製品

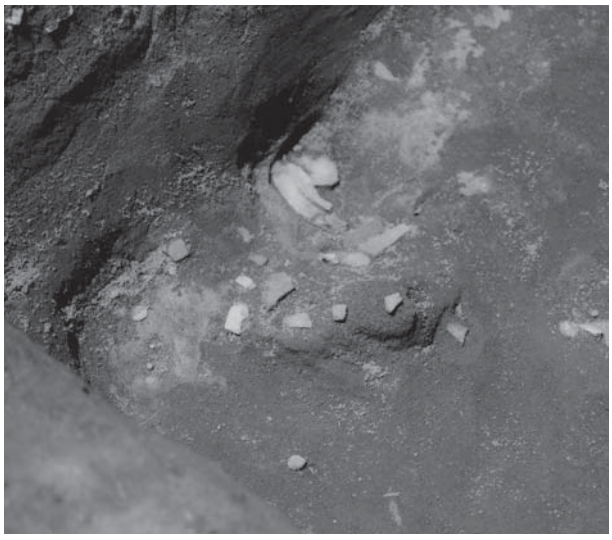


3区　遺物出土状況①

3区　遺物出土状況②

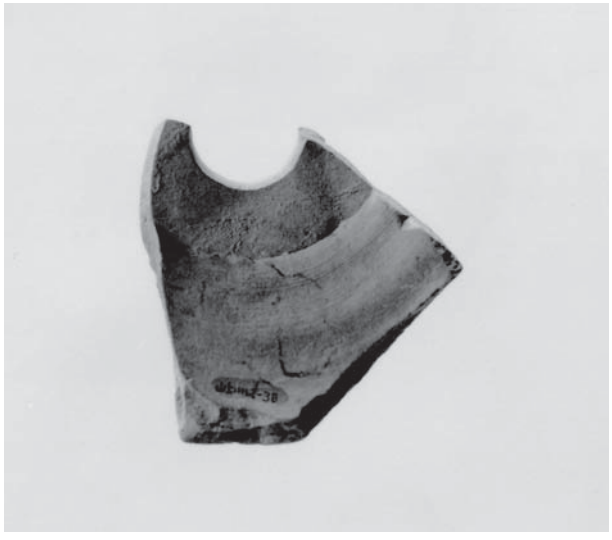


3区　遺物出土状況③



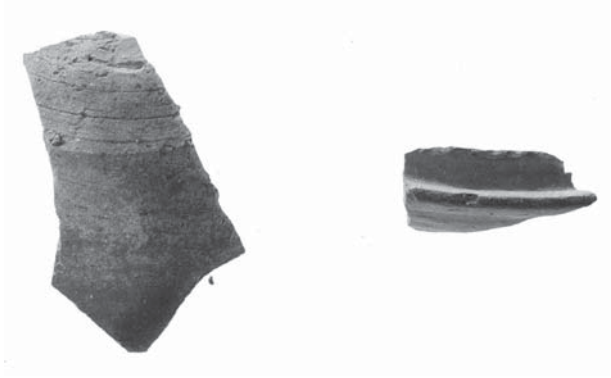
3区　遺物出土状況④

3区出土　特殊扁壺（外側）

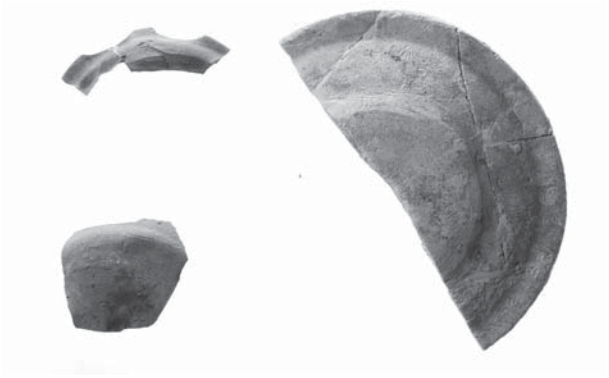


3区出土　特殊扁壺（内側）

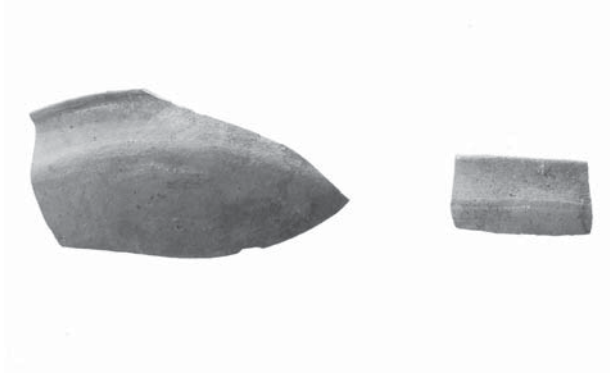
図版22



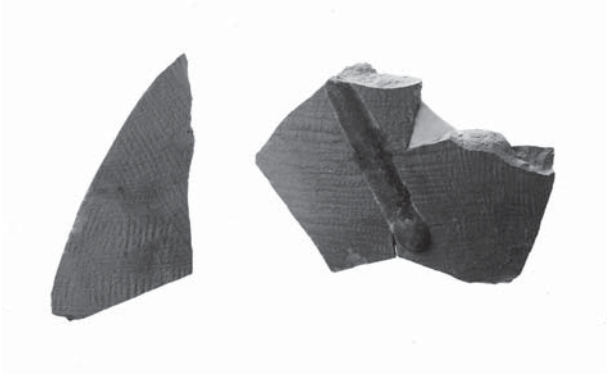
３区出土　須恵器①



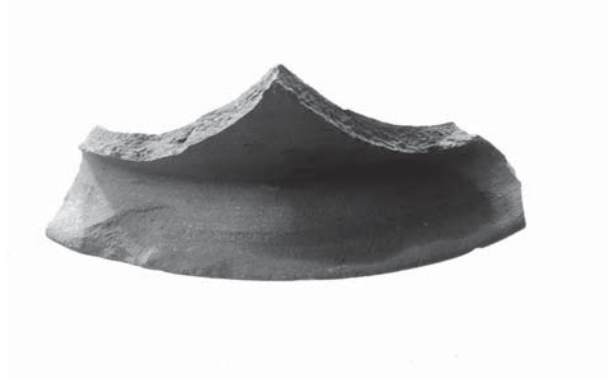
３区出土　須恵器②



３区出土　須恵器③

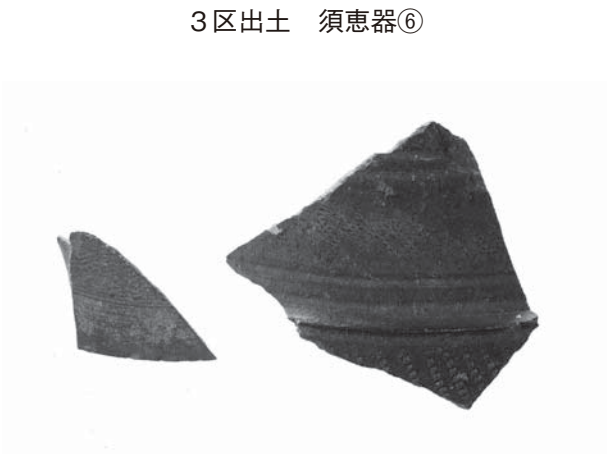


３区出土　須恵器④



３区出土　須恵器⑥

３区出土　須恵器⑤



３区出土　須恵器⑦

3区出土　土師器①

3区出土　土師器②

3区出土　土師器③

3区出土　土師器④

3区出土　土師器⑤

3区出土　土師器⑥

3区出土　土師器⑦

図版24

３区出土　炊飯具①

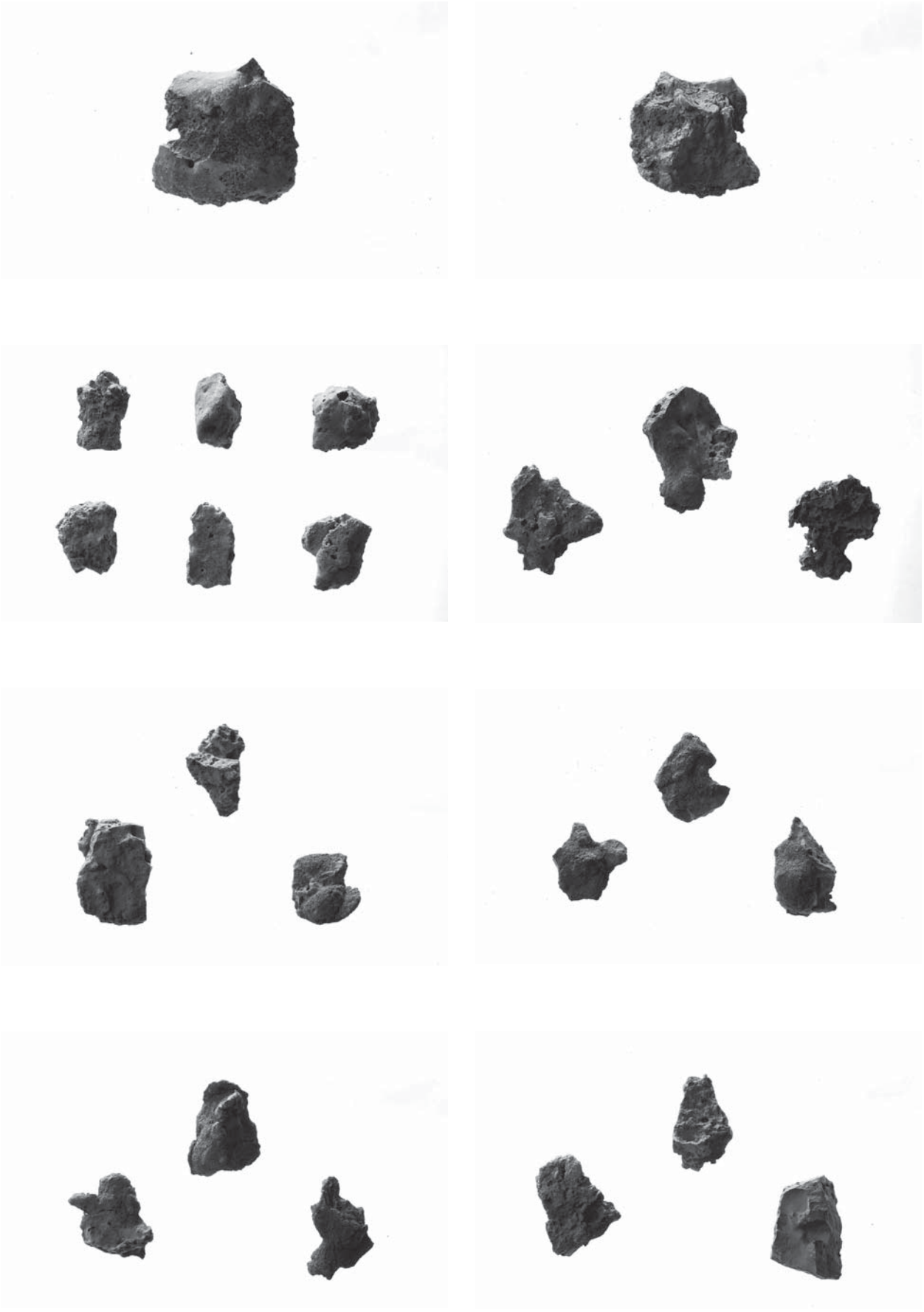
３区出土　炊飯具②

３区出土　炊飯具③

３区出土　炊飯具④

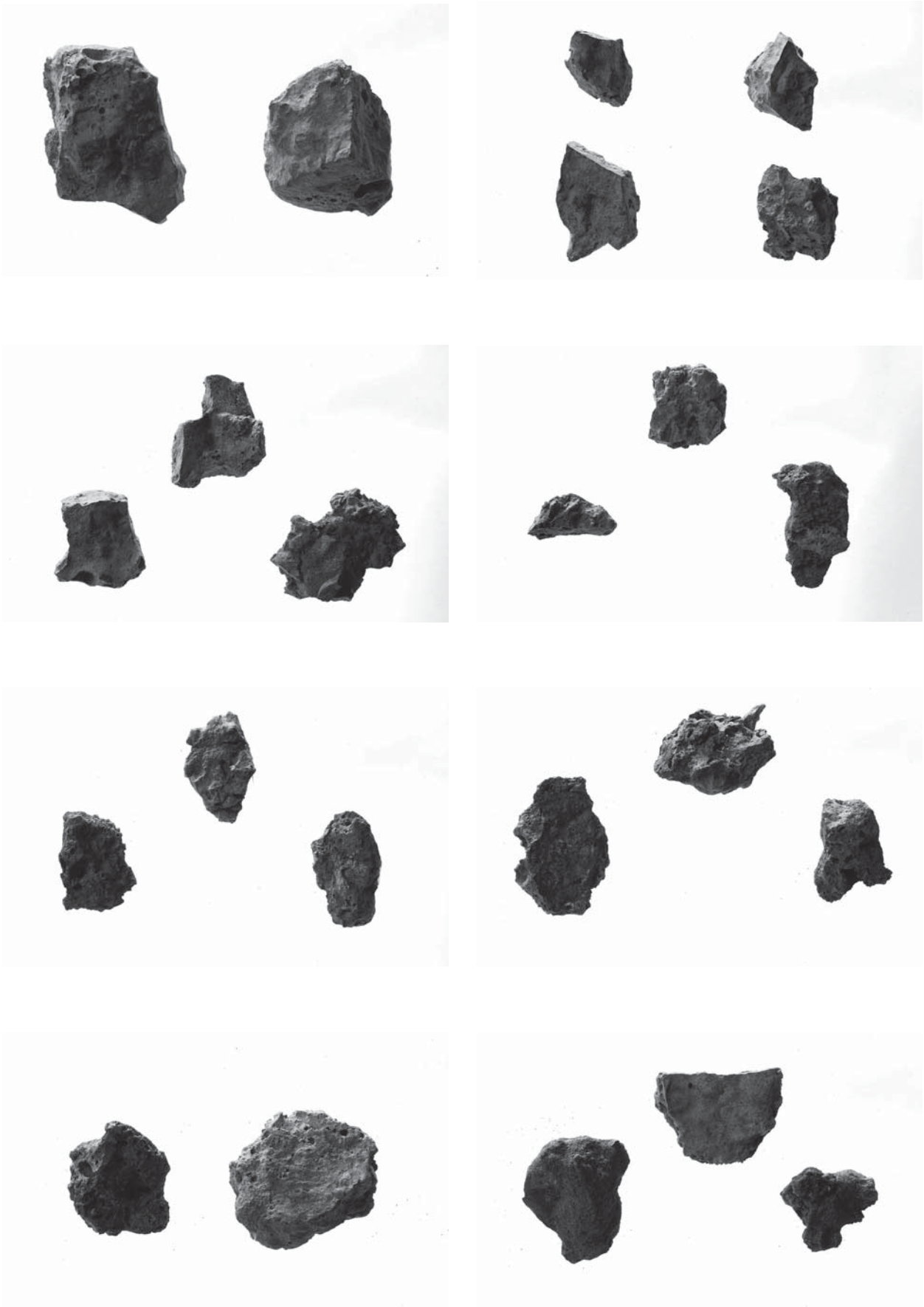
３区出土　炊飯具⑤

３区出土　炊飯具⑥

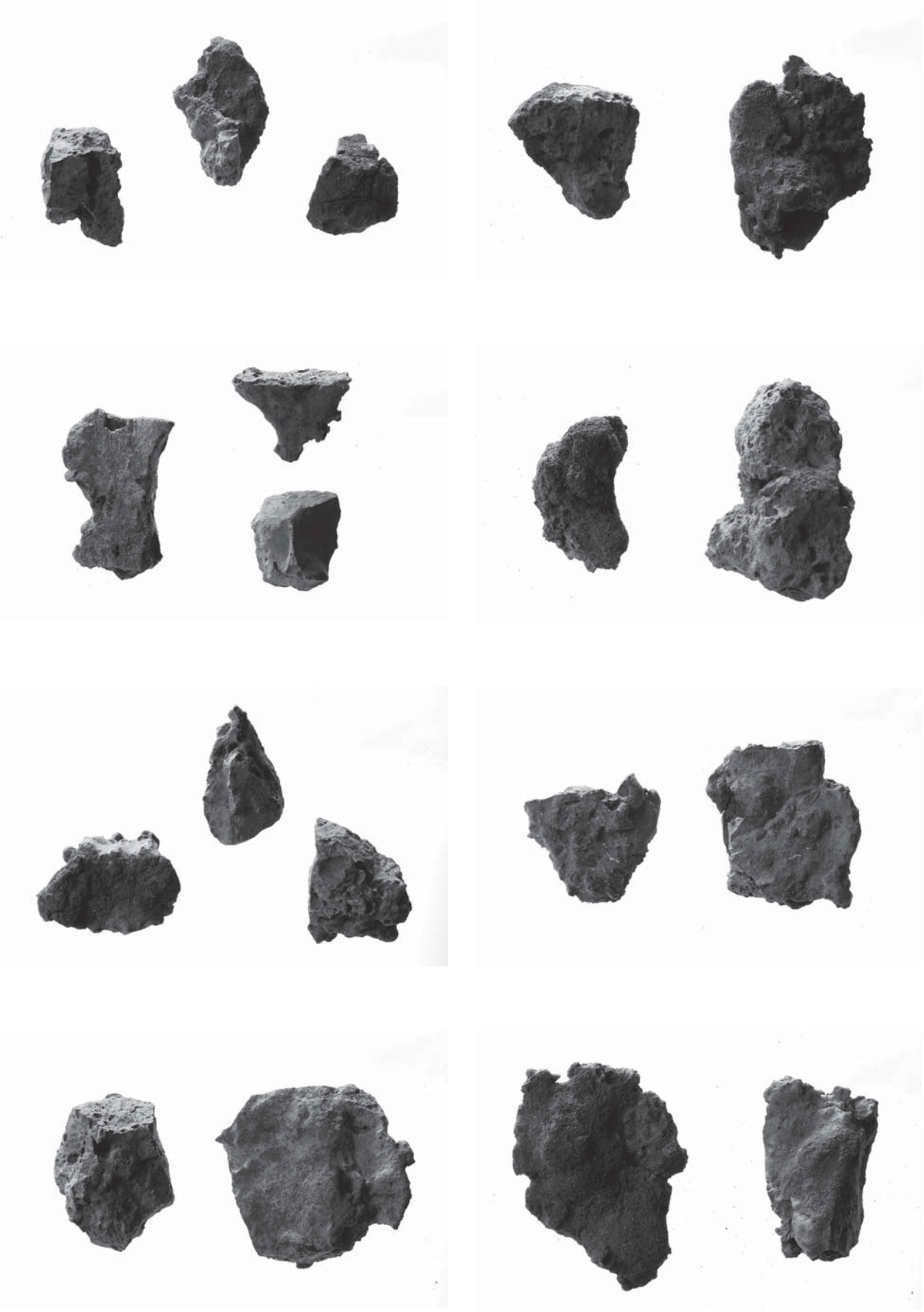


山崎上ノ原第２遺跡出土　鍛冶関連遺物①

図版26

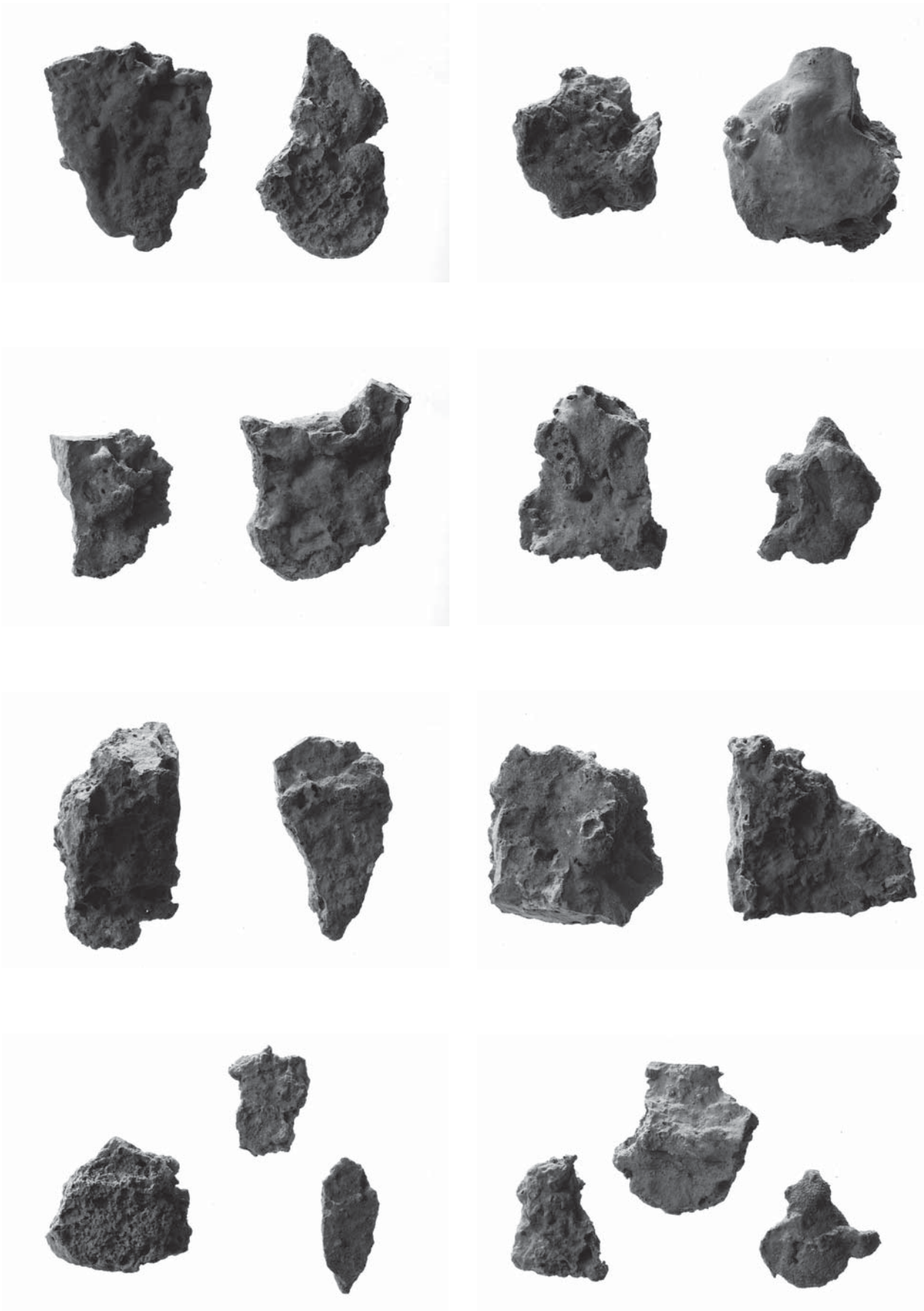


山崎上ノ原第２遺跡出土　鍛冶関連遺物②

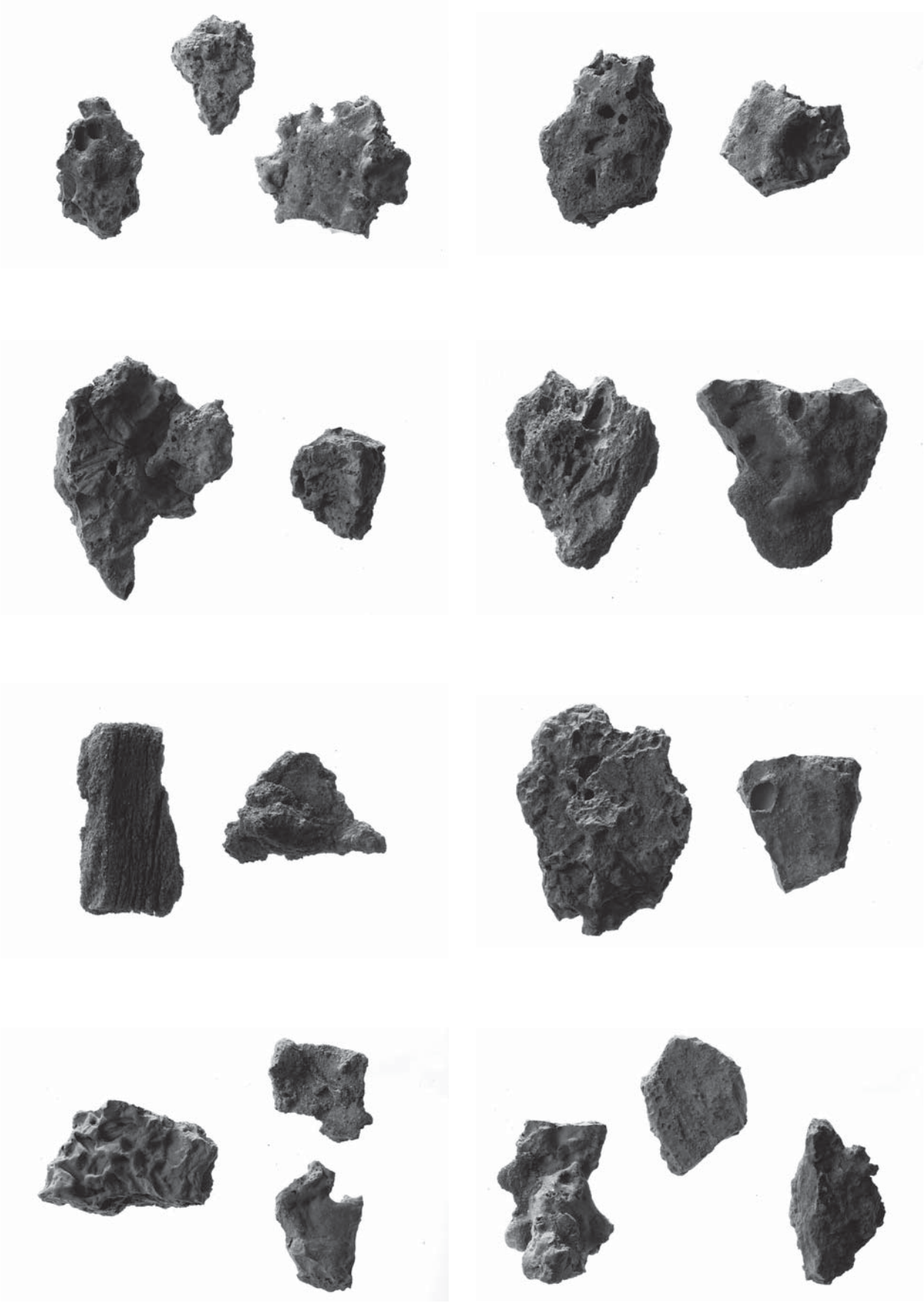


山崎上ノ原第２遺跡出土　鍛冶関連遺物③

図版28



山崎上ノ原第２遺跡出土　鍛冶関連遺物④



山崎上ノ原第２遺跡出土　鍛冶関連遺物⑤

報 告 書 抄 録

ふりがな	やまさきうえのはるだいいちいせき
書　名	山崎上ノ原第１遺跡
副書名	主要地方道宮崎島之内線（産母工区）整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第 224 集
編著者名	和田理啓
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒 880-0212　宮崎市佐土原町下那珂 4019 番地　TEL　0985-36-1171
発行年月日	2013 年３月**27**日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北　緯	東　経	調査 期間	調査 面積	調査原因
やまさきうえのはるだいいちいせき 山崎上ノ原第１遺跡	みやざきけんみやざき 宮崎県宮崎 しあわぎがはら 市阿波岐原 ちょうやぼ 町産母	45201	1026	31°57′33″	131°27′49″	１次：20091026 ～ 20100226 ２次：20100723 ～ 2010910	１次 2,000㎡ （実堀 700㎡） ２次 1300㎡ （実堀 150㎡）	主要地方道宮崎島之内線（産母工区）地域活力基盤創造交付金事業

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
山崎上ノ原第１遺跡	集落跡	古墳時代・古代・中世	溝状遺構・土坑・竪穴住居跡	土師器･須恵器･鉄器	竈形土器が顕著にみられ、韓式系土器の平底鉢や特殊扁壺が出土した。

要　約	宮崎県では、県道宮崎島之内線の改良工事に伴い平成５年から断続的に同一砂丘上の発掘調査を行っている。今までの調査で、古墳時代後半から終末にかけての集落や古墳、馬葬土壙などが調査され大きな成果が上がっている。今回の調査では、以前の調査と同時期の集落が確認され、古墳時代の後半から終末にかけてこの砂丘上における集落の範囲をほぼ把握できた。また、竈形土器が顕著にみられたほか韓式系土器が出土し、渡来系祭祀を行っていた可能性が指摘できるほか、特殊扁壺が九州で初めて出土するなど、当時の交流の広がりも伺わせる。

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書　第224集

山崎上ノ原第１遺跡

主要地方道宮崎島之内線（産母工区）

整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年３月

発　行　宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212　宮崎郡佐土原町大字下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171　　FAX 0985(72)0660

印　刷　有限会社　アックプリント

〒889-1301　宮崎県児湯郡川南町大字川南13886番5号

TEL 0983(27)6688